

CICS Transaction Server for z/OS



CICSplex SM ビジネス・アプリケーションの管理

バージョン 5 リリース 5

CICS Transaction Server for z/OS



CICSplex SM ビジネス・アプリケーションの管理

バージョン 5 リリース 5

注記

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、 391 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM CICS Transaction Server for z/OS バージョン 5 リリース 5 (製品番号 5655-Y04) および新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典： CICS Transaction Server for z/OS
CICSplex SM Managing Business Applications
Version 5 Release 5

発行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担当： トランスレーション・サービス・センター

© Copyright IBM Corporation 1997, 2018.

目次

この PDF について	vii
-----------------------	-----

第 1 章 CICSplex SM の管理 1

CICSplex SM の管理	1
CMAS コンテキスト、コンテキスト、およびスコープの設定	1
Web ユーザー・インターフェース管理ビューへのアクセス	2
アクション・ボタンの使用	2
データ・リポジトリ定義を管理するためのパッチ・ツール	3
CMAS 構成の管理	39
CMAS 構成定義および関連ビュー	39
保守ポイント CMAS の処理	41
CMAS から CMAS へのリンクの管理	43
CMAS の再始動の管理	44
CICSplex 定義の管理	47
トポロジー定義の管理	47
MAS トポロジー定義の処理	58
CMAS での NetView への総称アラートの送信の有効化	59
CICSplex SM 操作の管理	60
CICS リソースの制御	60
操作タスクの例	61
Administering BAS	68
BAS の概要	69
BAS へのアクセスの方式	70
BAS オブジェクト	72
CEDA の機能と BAS の機能の比較	73
BAS のセキュリティの考慮事項	74
Web ユーザー・インターフェースの使用法	75
リソース定義セット	84
CICSplex SM を使用した CICS リソースの管理	86
CICSplex SM に対するリモート・リソースの識別	95
CICS リソースのインストール	96
リソースのインストール場所の決定	104
自動リソース・インストール	105
動的リソース・インストール	107
CSD からのレコードの抽出	114
BAS タスク例	121
リソース割り当て定義	133
リソース記述内のリソース割り当て	134
リソース割り当て処理ビュー	135
リソース記述でのリソースの選択	135
リソース記述	136
リソース・グループ定義ビュー	137
記述内のリソース・グループ・ビュー	139
リソース・グループ内のリソース定義ビュー	139
CICS システム・リンク定義	140
CICS システム・リソース	144

Web ユーザー・インターフェースの管理	144
CICSplex SM Web ユーザー・インターフェース・トランザクション (COVC)	144
Web ユーザー・インターフェース・サーバー・リポジトリ	158
出力ログ (EYULOG)	159
カスタマイズ可能なヘルプのソース	160
Web ユーザー・インターフェースから外部サーバーへのアクセス	160
WUI ビューおよびメニューへのアクセスの提供	160
CMAS および MAS トレース・フラグの設定	165
Configuring dynamic routing	166
CICSplex SM を使用した動的ルーティング	166
追加動的ルーティング・サポートの要求	189
CICSplex SM を使用したワークロードの管理	196
ワークロード・ルーティング	197
ワークロード分離	203
トランザクション間の類縁性	204
CICSplex SM ワークロード管理によるワークロードの管理	205
ワークロード管理リソース	212
ワークロード管理定義および関連ビュー	213
ワークロード管理定義の作成	219
ワークロード・ビューのルート・フィールドについて	227
タスクの例	230
CICSplex SM によるリソース管理	277
ビジネス・アプリケーション・サービス (BAS) によるリソースの管理	278
Discovery Library Adapter for CICS	294
CICS DLA の実行	296
CICS DLA のパッケージ	298
DLA パラメーター	302
DLA の出力	306
DLA のセキュリティ	314
DLA の問題判別	315

第 2 章 BAS を使用したリソースの作成 317

BAS ATOMSERVICE リソース定義の作業	317
BAS ATOMSERVICE 定義の表示	317
BAS を使用して ATOMSERVICE リソースを定義する	318
BAS ATOMSERVICE 定義のインストール	318
BAS BUNDLE リソース定義の作業	319
BUNDLE 定義の表示	319
BAS を使用してバンドルを定義する	320
BAS バンドル定義のインストール	320
BAS Db2 接続リソース定義の作業	321
BAS Db2 接続定義の表示	321
BAS を使用した Db2 接続の定義	322

BAS Db2 接続定義のインストール	322	BAS を使用して ISC および MRO 接続を定義 する	346
BAS Db2 エントリー・リソース定義の作業	323	BAS ISC および MRO 接続定義のインストール	347
Db2 エントリー定義の表示	323	BAS ジャーナル・モデル・リソース定義の作業	347
BAS を使用した Db2 エントリーの定義	324	ジャーナル・モデル定義の表示	347
BAS Db2 エントリー定義のインストール	324	BAS を使用してジャーナル・モデルを定義する	348
BAS Db2 トランザクション・リソース定義の作業	325	BAS ジャーナル・モデル定義のインストール	349
Db2 トランザクション定義の表示	325	BAS JVMSERVER リソース定義の作業	349
BAS を使用した Db2 トランザクションの定義	326	JVMSERVER 定義の表示	349
BAS Db2 トランザクション定義のインストール	326	BAS を使用して JVMSERVER リソースを定義 する	350
BAS 文書テンプレート・リソース定義の作業	327	BAS JVMSERVER 定義のインストール	350
文書テンプレート定義の表示	327	BAS LIBRARY リソース定義の作業	351
BAS を使用して文書テンプレートを定義する	328	LIBRARY 定義の表示	351
文書テンプレート定義のインストール	328	BAS を使用して LIBRARY リソースを定義する	352
FEPI ノード・リスト・リソース定義の作業	329	BAS LIBRARY 定義のインストール	352
FEPI ノード・リスト定義の表示	329	BAS LSR プール・リソース定義の作業	353
BAS を使用して FEPI ノード・リストを定義す る	330	LSR プール定義の表示	353
BAS FEPI ノード・リスト定義のインストール	330	BAS を使用して LSR プールを定義する	354
FEPI プール・リソース定義の作業	331	BAS LSR プール定義のインストール	354
FEPI プール定義の表示	331	BAS マップ・セット・リソース定義の作業	355
BAS を使用して FEPI プールを定義する	332	マップ・セット定義の表示	355
BAS FEPI プール定義のインストール	332	BAS を使用してマップ・セットを定義する	356
FEPI プロパティ・セット・リソース定義の作業	333	BAS マップ・セット定義のインストール	356
FEPI プロパティ・セット定義の表示	333	BAS MQCONN リソース定義の作業	357
BAS を使用して FEPI プロパティ・セットを 定義する	334	BAS MQCONN 定義の表示	357
BAS FEPI プロパティ・セット定義のインス トール	334	BAS を使用して MQCONN リソースを定義す る	358
FEPI ターゲット・リスト・リソース定義の作業	335	BAS MQCONN 定義のインストール	358
FEPI ターゲット・リスト定義の表示	335	BAS MQMONITOR リソース定義の作業	359
BAS を使用して FEPI ターゲット・リストを定 義する	336	BAS MQMONITOR 定義の表示	359
BAS FEPI ターゲット・リスト定義のインスト ール	336	BAS を使用して MQMONITOR リソースを定 義する	360
BAS FILE リソース定義の作業	337	BAS MQMONITOR 定義のインストール	360
BAS ファイル定義の表示	337	BAS 区分セット・リソース定義の作業	361
BAS を使用してファイルを定義する	338	区画セット定義の表示	361
BAS ファイル定義のインストール	338	BAS を使用して区画セットを定義する	362
ファイル・キー・セグメントのリソース定義	339	BAS 区画セット定義のインストール	362
ファイル・セグメント定義の表示	339	BAS パートナー・リソース定義の作業	363
BAS を使用してファイル・キー・セグメントを 定義する	340	パートナー定義の表示	363
ファイル・キー・セグメント定義のインストール	340	BAS を使用してパートナー定義を定義する	363
BAS エンキュー・モデル定義の作業	340	BAS パートナー定義のインストール	364
グローバル・エンキュー・モデル定義の表示	340	BAS パイプライン・リソース定義の作業	365
BAS を使用してグローバル・エンキュー・モデ ルを定義する	341	パイプライン定義の表示	365
BAS グローバル・エンキュー・モデル定義のイ ンストール	342	BAS を使用してパイプライン定義を定義する	365
BAS IPCONN リソース定義の作業	343	BAS パイプライン定義のインストール	366
BAS IPIC 接続定義の表示	343	BAS PROCESSTYPE 定義の作業	366
BAS を使用して IPIC 接続を定義する	343	プロセス・タイプ定義の表示	367
BAS IPIC 接続定義のインストール	344	BAS を使用してプロセス・タイプを定義する	367
BAS ISC/MRO 接続リソース定義の作業	345	BAS プロセス・タイプ定義のインストール	368
BAS ISC および MRO 接続定義の表示	345	BAS プロファイル・リソース定義の作業	368
		プロファイル・リソース定義の表示	368
		BAS を使用してプロファイルを定義する	369
		BAS プロファイル定義のインストール	370
		BAS PROGRAM リソース定義の作業	370
		プログラム定義の表示	370

BAS を使用してプログラムを定義する	371
BAS プログラム定義のインストール	371
BAS セッション・リソース定義の作業	372
セッション定義の表示	372
BAS を使用してセッションを定義する	373
BAS TCPIPService リソース定義の作業	373
TCP/IP サービス定義の表示	373
BAS を使用して TCP/IP サービスを定義する	374
TCP/IP サービス定義のインストール	374
BAS 一時データ・キュー・リソース定義の作業	375
一時データ・キュー定義の表示	375
BAS を使用して一時データ・キューを定義する	376
BAS 一時データ・キュー定義のインストール	376
BAS 端末リソース定義の作業	377
端末定義の表示	377
BAS を使用して端末を定義する	378
BAS 端末定義のインストール	378
BAS トランザクション・リソース定義の作業	379
トランザクション定義の表示	379
BAS を使用してトランザクションを定義する	380
BAS トランザクション定義のインストール	380
BAS トランザクション・クラス定義の作業	381
トランザクション・クラス定義の表示	381
BAS を使用してトランザクション・クラスを定義する	382

BAS トランザクション・クラス定義のインストール	382
BAS 一時記憶域モデル定義の作業	383
一時記憶域モデル定義の表示	383
BAS を使用して一時記憶域モデルを定義する	383
BAS 一時記憶域モデル定義のインストール	384
BAS Typeterm リソース定義の作業	385
入力条件定義の表示	385
BAS を使用して入力条件を定義する	385
BAS 入力条件定義のインストール	386
BAS URIMAP リソース定義の作業	387
URI マッピング定義の表示	387
BAS を使用して URIMAP 定義を定義する	387
BAS URI マッピング定義のインストール	388
BAS Web サービス・リソース定義の作業	388
Web サービス定義の表示	389
BAS を使用して Web サービス定義を定義する	389
BAS Web サービス定義のインストール	390

特記事項	391
----------------	-----

索引	397
--------------	-----

この PDF について

この PDF には、ビジネス・アプリケーション・サービス (BAS) の管理と使用法に関する情報が記載されています。BAS は CICS Transaction Server for z/OS の CICSplex SM エLEMENTのコンポーネントです。本書は、CICS および CICSplex SM の管理を担当するシステム・プログラマーを対象としています。

使用される用語と記法の詳細については、IBM Knowledge Center のCICS 資料で使用されている表記規則および用語を参照してください。

この PDF の日付

この PDF は、2018 年 12 月 14 日に作成されました。

第 1 章 CICSplex SM の管理

CICSplex® SM 環境を構成すると、CICS Explorer® または Web ユーザー・インターフェースを使用してその環境を管理できます。

このタスクについて

CICS Explorer と Web ユーザー・インターフェースの両方が、お客様が定義した CICSplexes で作業するためのビューを提供します。CICS® には、データ・リポジトリ内の定義を管理するバッチ・ツールもあります。

CICSplex SM の管理

CICSplex SM 環境を構成すると、CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用してその環境を管理できます。

このタスクについて

CICS Explorer と Web ユーザー・インターフェースの両方が、お客様が定義した CICSplexes で作業するためのビューを提供します。CICS には、データ・リポジトリ内の定義を管理するバッチ・ツールもあります。

CMAS コンテキスト、コンテキスト、およびスコープの設定

メニューの選択基準領域およびビューの選択基準と最新表示域領域で、現行のメニューからナビゲートするときに使用されるコンテキスト、CMAS コンテキスト、およびスコープを設定できます。

これらの値のいずれかを変更するには、必要なフィールドを上書きし、「設定」ボタンを選択します。

コンテキストまたは CMAS コンテキストのいずれかがすべての操作に使用されます。これらの用語は以下のように使用されます。

- コンテキスト

CICSplex 名であり、ほとんどすべてのビューで使用されます。

- CMAS コンテキスト

CMAS の名前です。CMAS 状況や、CMAS に接続された CICSplexes など、CMAS レベルの構成データを表示しているときにのみ使用されます。

- スコープ

CICSplex、CICS グループ MAS、または論理スコープ名です。スコープはコンテキストのサブセットであり、CICSplex SM コマンドの効果を特定の CICS システムまたはリソースに制限します。CMAS コンテキストが使用されている場合、スコープは無視されます。スコープは、特定のリソース・タイプに対してのみ使用されます。

Web ユーザー・インターフェース管理ビューへのアクセス

Web ユーザー・インターフェースのメインメニューから CICSplex SM 管理ビューにアクセスするには、「管理ビュー」をクリックします。

管理ビューは以下のように分割されています。

- 一般ビュー。CICSplex の構成およびトポロジを管理するためのビューが含まれます。
- リアルタイム分析ビュー。システム可用性および MAS リソースをモニターするためのビューが含まれます。
- ビジネス・アプリケーション・サービス (BAS) を使用した CICS リソース定義。すべてのタイプの CICS リソースと CICSplex SM リソースを管理するためのビューが含まれます。

アクション・ボタンの使用

WUI ビューのアクション・ボタンを使用して、作成、更新、または削除などのアクションを実行できます。特定のビューで使用可能なアクションは、そのビューの作業域の最下部にボタンとして表示されます。

開いているビューからアクション・ボタンを使用するには、以下のようにします。

1. オプションで、作業域の左側にある 1 つ以上の「レコード」チェック・ボックスを選択するか、「すべて選択」ボタンを使用して、アクションを適用するレコードを選択します。
2. 必要なアクション・ボタンをクリックします。1 つまたは一連の確認パネルが表示されます。確認パネルにより、選択した各リソースに対するアクションを確認またはキャンセルしたり、場合によっては追加のオプションを含めたりすることができます。
3. 必要なボタンを選択するか、場合によっては、パラメーターを入力したり、チェック・ボックスを選択したり、ラジオ・ボタンを選択したりして確認パネルを完了します。

アクションが処理されてビューが再表示され、アクションの結果が表示されます。アクションが正常に完了した場合は、作業域上部のメッセージ領域にメッセージ

EYUVC1230I が表示されます。アクションが正常に完了しなかった場合は、1 つ以上のエラー・メッセージが表示されます。

管理ビューでのアクション

管理ビューで使えるいくつかの共通タイプのアクションがあります。

作成 新しい定義を作成し、それをデータ・リポジトリに追加します。管理定義名は、1 文字から 8 文字の長さで指定できます。名前には英字、数字、国別文字を含めることができます。ただし、先頭文字は英字でなければなりません。

追加先 ...

2 つの定義間の関連を追加します。結果として生じる確認パネルで、関連を作成するもう一方の定義を特定するようプロンプトが出されます。関連を追

加すると、データ・リポジトリ内の定義間の関係が作成されます。関連の追加は、定義とグループ、グループと仕様、および仕様と CICS システムの間で行うことができます。

マップ

データ・リポジトリ内に、関連した定義のビジュアル・マップを表示するには、「マップ」をクリックします。

除去 データ・リポジトリから 1 つの定義、または 2 つの定義間の関連を削除します。

更新 (Update)

データ・リポジトリ内の定義を更新します。結果として生じるパネルは、選択したリソースの編集可能な詳細ビューです。

これらのアクションはすべて、データ・リポジトリの内容に影響を与えるもので、変更は即時適用されます。ただし、データ・リポジトリに対するこれらの変更の多くは、現在アクティブな CICS システムには影響しません。これらの変更は、次回 CICS システムを再始動した時に CICS システムに影響を与えます。

注:

1. 「時間枠定義」 (EYUSTARTPERIODEF) ビューを使用して定義を更新すると、変更はデータ・リポジトリと現在アクティブな CICS システムの両方に影響を与えます。
2. 現在実行されている MAS に対する変更は、データ・リポジトリには含まれません。
3. これらのアクションはすべて、バッチ・リポジトリ機能を使用しても実行できます。この機能については、17 ページの『バッチ処理されるリポジトリ更新機能 (BATCHREP)』で説明されています。

データ・リポジトリ定義を管理するためのバッチ・ツール

CICSplex SM は、データ・リポジトリを管理するためのバッチ・ツールを提供します。

各 CMAS に関連付けられたデータ・リポジトリには、CICSplex SM 環境を確立するための定義が含まれています。これらの定義は、個々のレコードとして保管されます。これらの定義は、CICSplex SM の構成で説明されている WUI ビューを使用して作成および保守することができます。ただし、アプリケーションをある CMAS から別の CMAS に移動する場合や、ご使用の管理タスク内に大きな反復要素がある場合など、大量の定義を更新する場合は、バッチ・ツールのうちのいずれかを使用してジョブを実行する方が簡単です。これらを使用すると、データ・リポジトリ内の定義を作成および更新し、ある CMAS から別の CMAS へ、CMAS-CMAS リンク定義を含むデータ・リポジトリ定義をインポートおよびエクスポートすることができます。以下の 2 つのバッチ・ツールが提供されています。

EYU9XDBT CICSplex SM 定義ユーティリティ

これは、簡素化された用語、定義済みのデフォルト情報、および複雑な管理タスクを簡素化するためのフィルターを使用した、使いやすい REXX ツールです。デバッグ機能も強化されています。これは CICSplex SM と同じリリース・レベルのデータ・リポジトリに制限されています。EYU9XDBT

は、インストール中に初期 CICSplex SM 環境をセットアップするために使用されます。これは、包括的なサンプル JCL に同梱されています。

バッチ処理されるリポジトリ更新機能 (BATCHREP)

このツールを使用すると、入力ファイルを作成および編集することによってバッチ更新タスクを実行できますが、EYU9XDBT の定義済みの情報やサンプルは含まれません。このツールでは、以前のリリース・レベルの CMAS から定義をインポートすることができ、REXX 環境を必要としません。

CICSplex SM バッチ・リポジトリ更新ユーティリティー、WUI、または CICSplex SM API のいずれかを使用して、BATCHREP ジョブを実行依頼できます。

以下のツールのどちらを使用しても、CMAS を作成することはできません。

EYU9XDBT CICSplex SM 定義ユーティリティー

EYU9XDBT CICSplex SM 定義ユーティリティーは CICSplex SM API を使用して、いくつかの単純なパラメーターに必要な CICSplex 名を指定します。このユーティリティーは定義をセットアップします。BATCHREP ユーティリティーとは違って、入力ファイルを手動で編集しません。

基本 CMAS 環境が確立された後、このユーティリティーを使用して、すべての CMAS および CICSplex 定義アクティビティーを実行することができます。これらのアクティビティーには、次のものがあります。

- CICS 領域、CICS グループ、および CICSplex を CMAS に定義する
- CICS 領域、CICS グループ、および CICSplex を CMAS から削除する
- CICS 領域を CICS グループに追加する
- CICS 領域を CICS グループから削除する
- CMAS 間リンク定義の作成
- CMAS または CICSplex コンテキストに定義された CICSplex SM オブジェクトのインポート、印刷、またはエクスポート

以下のサンプルが用意されています。

EYUJXBT0

クイック・リファレンスとして使用する注釈付きの EYU9XDBT JCL 構文が含まれます。

EYUJXBT1

EYU9XDBT を呼び出し、CICSplex、CICS システム・グループ、および CICS システム定義を定義するサンプル JCL が含まれます。

EYUJXBT2

EYU9XBTP を呼び出し、同じ MVS イメージ上にあって同じ CICS TS リリース・レベルで実行されている CMAS について CMAS-CMAS リンク定義を作成するためのサンプル JCL が含まれています。

EYUJXBT3

EYU9XBTP を呼び出し、コンテキストを 1 番目の CMAS 名に設定し、2 番目の CMAS にリンクをインポートして、異なる MVS イメージ上にある CMAS について CMAS-CMAS リンク定義を作成するためのサンプル JCL が含まれています。

EYUJXBT4

EYU9XBTP を呼び出し、コンテキストを 2 番目の CMAS 名に設定し、1 番目の CMAS にリンクをインポートして、異なる MVS イメージ上にある CMAS について CMAS-CMAS リンク定義を作成するためのサンプル JCL が含まれています。

EYU9XDBT ユーティリティー・コマンド:

EYU9XDBT CICSplex SM 定義ユーティリティーのコマンド・ストリームでは、多くのコマンドを使用できます。

EYU9XDBTは、入力ストリーム内のすべてのコマンドを順次に読み込んで処理します。OPTION DUPREC コマンドおよび OPTION FEEDBACK コマンドなどは、それらが関連し、操作するコマンドの前に置くように、正しい順序で指定します。例えば、OPTION DUPREC は、操作したい IMPORT コマンドに先行します。

コメント

EYU9XDBT コマンド・ストリームには、コメントを含めることができます。カラム 1 にアスタリスクを、カラム 2 にブランクを指定するとコメントになります。

継続 ハイフン (-) は継続を示します。継続文字は、DEFINE コマンドと REMOVE コマンドでサポートされています。例えば、DEFINE REGION コマンドには複数のサブパラメーターがあり、それらは以下のように別々の行に記述することができます。

```
DEFINE REGION    region_name    -  
                APPLID         region_applid -  
                SYSID          region_sysidnt
```

コマンド

ADD TOGROUP *groupname*

領域またはグループを CICS グループに追加します。ADD コマンドのあとに、REGION または CICSGRP サブパラメーターのいずれかで、追加するオブジェクトを指定します。ADD コマンドの例については、10 ページの『EYUJXBT1 で使用するパラメーター』を参照してください。

CONTEXT {*cmas_name* | *CICSplex_name*}

後続のコマンドのコンテキストを設定します。CONTEXT コマンドの例については、10 ページの『EYUJXBT1 で使用するパラメーター』を参照してください。

DEFINE *object_type object_name mandatory_identifiers*⁺

指定されたオブジェクトを定義します。タイプは CICSplex、REGION、または CICSGRP のいずれかです。オブジェクト・タイプの CICSplex、REGION、および CICSGRP は、CPLEXDEF、CSYSDEF、および CICSGRP 定義の同義語です。

- CICSplex を定義するには、*object_type* を CICSplex と指定し、*object_name* を指定する必要があります。オブジェクト名は、定義している CICSplex の 1 文字から 8 文字の英数字名です。*object_name* の最初の文字は英字でなければなりません。CICSplex オブジェクト・タイプに関連する必須の識別子は他にはありません。これらのコマンドの形式は、次のとおりです。

DEFINE CICSplex *plexname*

このコマンドは、CICSplex SM CMAS リポジトリ内に CPLEXDEF を作成します。

- REGION を定義するには、*object_type* を REGION とし、定義している CICS 領域の 1 文字から 8 文字の英数字名を *object_name* に、さらに、必須の識別子 APPLID と SYSID を指定する必要があります。コマンドの形式は以下のとおりです。

```
DEFINE REGION region_name      -  
        APPLID region_applid    -  
        SYSID  region_sysidnt
```

このコマンドは、CICSplex SM CMAS リポジトリ内に CSYSDEF を作成します。

- CICSGRP を定義するには、*object_type* を CICSGRP と指定し、*object_name* を指定する必要があります。オブジェクト名は、定義している CICS システム・グループの 1 文字から 8 文字の英数字名です。*object_name* の最初の文字は英字でなければなりません。CICSGRP オブジェクト・タイプに関連する必須の識別子は他にはありません。これらのコマンドの形式は、次のとおりです。

```
DEFINE CICSGRP group_name
```

このコマンドは、CICSplex SM CMAS リポジトリ内に CICSGRP を作成します。

DEFINE コマンドの例については、10 ページの『EYUJXBT1 で使用するパラメーター』を参照してください。

DELETE *object_type object_name*

指定されたオブジェクトを削除します。オブジェクトのタイプは CICSplex、REGION、または CICSGRP のいずれかです。*object_name* には、ワイルドカード文字としてアスタリスクを指定できます。

EXPORT *DDname resource_type resource_id*

現行コンテキスト内の指定されたタイプおよび ID (識別子) のすべての定義を、指定された出力ファイルに書き込みます。*resource_type* には、CICSplex SM リソース・タイプのいずれか 1 つを省略せずに指定するか、あるいは、すべてのリソース・タイプの場合はアスタリスク (*) を指定します。有効なリソース・タイプは CICSplex SM データ・リポジトリに書き込まれる任意のリソースで、これにはすべての BAS オブジェクト、WLM 定義、RTA 定義、トポロジー定義、またはモニター定義も含まれます。BAS RESINGRP リソース・レコードはエクスポートできませんが、各 BAS リソース定義には、エクスポート可能な同等の XXXINGRP リソース・レコードがあります。*resource_id* には、汎用 (ワイルドカード) 文字としてアスタリスクを指定できます。リソース・タイプとリソース ID の両方をアスタリスクに設定すると、EYU9XDBT は現行コンテキスト内のすべての定義をエクスポートします。

注: 末尾ブランクは末尾ワイルドカード文字として扱われるため、EXPORT *DDname* は、*DDname* コンテキスト内のすべての定義をエクスポートします。

IMPORT DDname resource_type resource_id

名前付き DD ステートメントで定義された入力ファイルから、指定されたタイプと ID のすべての定義を現行コンテキストでリポジトリにインポートします。*resource_type* には、CICSplex SM リソース・タイプのいずれか 1 つを省略せずに指定するか、あるいは、すべてのリソース・タイプの場合はアスタリスクを指定します。有効なリソース・タイプは CICSplex SM データ・リポジトリに書き込まれる任意のリソースで、これにはすべての BAS オブジェクト、WLM 定義、RTA 定義、トポロジー定義、またはモニター定義も含まれます。BAS RESINGRP リソース・レコードはインポートできませんが、各 BAS リソース定義には、インポート可能な同等の XXXINGRP リソース・レコードがあります。*resource_id* には、ワイルドカード文字としてアスタリスクを指定できます。リソース・タイプとリソース ID の両方をアスタリスクに設定すると、EYU9XDBT は入力データ・セットで検出したすべての定義をインポートします。

インポートされたファイルについては、以下の規則に注意してください。

- 入力レコードは 80 バイトのレコードでなければならず、データは 72 バイトに切り捨てられます。
- インポート・ファイル内の二重引用符 (") は、ストリング区切り文字として使用されます。そのため、入力ファイルに二重引用符文字を含めたい場合は、テキスト・ストリングに二重引用符を 2 つ連続して使用する必要があります。例えば、ファイルを CICSplex SM オブジェクトにインポートした場合、インポート・ファイル内のストリング
「"double"quote"example"」は、「double"quote"example」となります。
- 継続行は、最大長を超えてしまう行を表すために、インポート・ファイルで使用されます。以下の例では、255 バイトのストリングで表される JVM クラスのプログラム定義を使用して、インポート・ファイルで継続行がどのように表されるかを示しています。

```
PROGDEF_JVMCLASS = "AAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA";
PROGDEF_JVMCLASS = PROGDEF._JVMCLASS || "AAAAAAAAAAAAAAAAABBBBBBBB";
PROGDEF_JVMCLASS = PROGDEF._JVMCLASS || "BBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBB";
PROGDEF_JVMCLASS = PROGDEF._JVMCLASS || "BBBBBBBBBCCCCCCCCCCCCCCCCC";
...
PROGDEF_JVMCLASS = PROGDEF._JVMCLASS || "ZZZZZZ";
```

プログラム定義ステートメント PROGDEF_JVMCLASS = "AAA..." は、最初の行がオーバーフローし、定義の次のセクションを前のセクションに追加することによって、各行が連続して続きます。ステム変数用の REXX 構文「.」が、行が継続行であることを示すために使用されます。この例では、各継続行ごとに「PROGDEF_JVMCLASS」が「PROGDEF._JVMCLASS」で置き換えられています。継続行にある REXX 連結バー「||」は、ストリングの次のセクションを既存のストリングに追加します。

OPTION [DUPREC | FEEDBACK | REPORT]

コマンド処理中に EYU9XDBT が実行するアクションを要求します。この要求は、DUPREC、FEEDBACK、または REPORT です。複数のアクションを要求するには、それぞれのアクションを別々の OPTION コマンド・ステートメントで指定します。DUPREC、FEEDBACK、および REPORT の各アクションには、以下のように選択できるオプションがあります。

DUPREC {ABORT | REJECT | SKIP | UPDATE}

DUPREC は、インポート処理中に重複レコードが見つかった場合に、EYU9XDBT に実行させるアクションを指定します。このコマンドは、それが参照する IMPORT または DEFINE ステートメントの前に指定する必要があります。指定可能なオプションは以下のとおりです。

- **ABORT:** DEFINE または IMPORT コマンドの処理中に、定義しているオブジェクトの名前と既存のリポジトリ定義の名前が重複している場合、定義またはインポートされている重複名はスキップされ、データ・リポジトリは変更されません。ABORT オプションはリカバリー不能エラーとして扱われ、EYU9XDBT はメッセージをジョブ・ログに書き込み、戻りコード 12 を出します。ジョブは即時に停止します。
- **REJECT:** DEFINE または IMPORT コマンドの処理中に、定義しているオブジェクトの名前と既存のリポジトリ定義の名前が重複している場合、定義またはインポートされている重複名はスキップされ、データ・リポジトリは変更されません。REJECT オプションはエラーとして処理され、EYU9XDBT はジョブ・ログにメッセージを書き込みます。EYU9XDBT は REJECT エラーの戻りコード 8 を出します。REJECT が、デフォルト・オプションです。
- **SKIP:** DEFINE または IMPORT コマンドの処理中に、定義しているオブジェクトの名前が既存のリポジトリ定義の名前と同じである場合、新しい定義はスキップされ、データ・リポジトリは変更されません。これは正常であるとして処理されます (戻りコード 0)。
- **UPDATE:** DEFINE または IMPORT コマンドの処理中に、定義しているオブジェクトの名前と既存のリポジトリ定義の名前が重複している場合、既存の定義が、定義またはインポートされているレコードの属性で更新されます。既存の定義が特定の属性を変更しても更新できない場合、その定義は削除され、DEFINE または IMPORT コマンドから再作成されます。このアクションは正常であるとして処理されます (戻りコード 0)。

注: **OPTION DUPREC UPDATE** シナリオで CICSplex 名を保守ポイント CMAS に関連付ける CPLXCMAS レコードをインポートすると、コマンド応答は常に「レコードがスキップされました (Record skipped)」になります。CPLEXDEF レコードが CMAS にインポートされるたびに、1 つの CPLXCMAS レコードが暗黙的に作成されます。これらのレコードは、対応する CPLEXDEF レコードが削除されたときにのみ暗黙的に削除されることがあります。

FEEDBACK {QUIET | VERBOSE}

FEEDBACK は、CICSplex SM API からエラーが返された場合に、EYU9XDBT が例外条件報告をどのように処理するかを指定します。指定可能なオプションは以下のとおりです。

- **QUIET:** EYU9XDBT は、基本的な EYU9XDBT メッセージのみをジョブ・ログに書き込みます。QUIET は、FEEDBACK のデフォルトのオプションです。
- **VERBOSE:** EYU9XDBT は、標準のメッセージ報告応答および理由コードに加えて、関連する CICSplex SM フィードバック・データを、SYSTSPRT DD ステートメントで指定された宛先に書き込みます。

REPORT {FULL | SUMMARY}

- **FULL:** これがデフォルトのオプションです。この変更が行われる前の現在のレポートの状態です。プログラムが EYUDREP オブジェクトに対して PRINT、IMPORT、EXPORT、または DELETE コマンドを処理すると、そのオブジェクトのすべての属性がレポートに出力されます。大容量のデータ・リポジトリの場合、このレポート・オプションを使用すると何千行ものデータが生成される可能性があります。
- **SUMMARY:** この指定により、出力されるリソース・テーブルの内容が、PRINT、IMPORT、EXPORT、および DELETE コマンドのキー・フィールド ID のみに制限されます。

OPTION REPORT コマンドをコマンド・ストリームで連続して使用することにより、一部のプロセスではすべての属性データをリストし、その他のプロセスでは属性データを要約するだけとすることができます。例:

```
* Set the context to my CICSplex
CONTEXT myplex01
* Specify that duplicates are to be updated
OPTION DUPREC UPDATE
* Specify that I only want record identifiers printed
OPTION REPORT SUMMARY
* Now import my CSYSDEF records
IMPORT CPSMIO1 CSYSDEF * *
* Now do a detailed print of what was just imported ...
OPTION REPORT FULL
* ... and print all CSYSDEF details.
PRINT CSYSDEF * *
```

PRINT *resource_type resource_id*

CMAS リポジトリから現行コンテキスト内の定義を出力します。

resource_type には、CICSplex SM リソース・タイプのいずれか 1 つを省略せずに指定するか、あるいは、すべてのリソース・タイプの場合はアスタリスクを指定します。*resource_id* には、ワイルドカード文字としてアスタリスクを指定できます。リソース・タイプとリソース ID の両方にアスタリスクを指定すると、EYU9XDBT は現行コンテキスト内のすべての定義を出力します。

REMOVE FROMGROUP *groupname*

名前付きグループから、指定されたオブジェクトを削除します。REMOVE コマンドのあとに、REGION または CICSGRP サブパラメーターのいずれかで、オブジェクトを指定します。

EYU9XDBT ユーティリティーで使用するデータ・セット:

CICSplex、CICS 領域、および CICS グループを定義するために、EYU9XDBT CICSplex SM 定義ユーティリティーは、SEYUPARM ライブラリーで提供されるいくつかの事前定義済み情報を使用します。

以下の DD ステートメントが、この情報を参照します。

EYUCPDEF

この DD ステートメントは、EYUCPDEF というメンバーを参照します。このメンバーは、DEFINE CICSplex コマンドをサポートするためのデフォルト値を提供します。独自のインストール要件に合わせて、その中にある CPLEXDEF を変更することができます。

EYUCSDEF

この DD ステートメントは、EYUCSDEF というメンバーを参照します。このメンバーは、DEFINE REGION コマンドをサポートするためのデフォルト値を提供します。独自のインストール要件に合わせて、その中にある CSYSDEF を変更することができます。

EYUCSGRP

この DD ステートメントは、EYUCSGRP というメンバーを参照します。このメンバーは、DEFINE CICSGRP コマンドをサポートするためのデフォルト値を提供します。独自のインストール要件に合わせて、その中にある CSYSGRP を変更することができます。

EYUJXBTP で使用するパラメーター:

EYUJXBTP は、EYU9XDBT プログラムを呼び出すためにサンプル EYUJXBT1、EYUJXBT2、EYUJXBT3 および EYUJXBT4 で使用される JCL プロシージャです。

使用されるデータ・セットの説明については、『EYU9XDBT ユーティリティーで使用するデータ・セット』を参照してください。

EYUJXBT1 で使用するパラメーター:

EYUJXBT1 JCL サンプルは、CICSplex の初期定義、CICSplex と保守ポイントとしての CMAS の関連付け、および、CICS システムとその CICSplex との関連付けとグループ化を提供します。

作成する定義を入れるリポジトリを所有する CMAS は、EYUJXBT1 ジョブを実行するときにアクティブでなければなりません。また、EYUJXBT1 ジョブは、CMAS と同じ z/OS イメージで実行する必要があります。EYUJXBT1 JCL には、リポジトリのためのデータ・セット定義 (DD) ステートメントはありません。そのリポジトリへのすべてのアクセスは、API を使用して CMAS を介して行われるからです。

EYUJXBT1 には、ユーザーがそれを編集して独自の名前を指定する、以下のパラメーターがあります。

CONTEXT

ユーティリティーが動作する CICSplex SM コンテキストを設定します。

CICSplex を定義する場合にのみ、コンテキストを CMAS として定義します。余分な領域の定義、あるいはオブジェクトのインポートやエクスポートなど、既存の CICSplex で動作するアクションの場合は、コンテキストを CICSplex に設定します。

EYUJXBT1 ジョブは、このパラメーターを 2 回使用します。1 回目の使用は、ユーティリティーが CMAS の場所を探索して通信可能とするためです (2 回目の使用については以下を参照)。CMAS コンテキストを設定するパラメーターの形式は次のとおりです。

```
CONTEXT masname
```

ここで、*masname* は CICSplex の保守ポイントとなる CMAS の名前です。

DEFINE CICSplex

CICSplex の名前を指定します。CICSplex を定義する場合、CONTEXT パラメーターで指定された CMAS が CICSplex の保守ポイントになります。

このパラメーターの形式は次のとおりです。

```
DEFINE CICSplex plexname
```

複数の CICSplex を定義できる命名規則を使用するなどして、CICSplex に 1 文字から 8 文字の名前を選択します。以下に例を示します。

- 最初の 3 文字は、Hursley を表す HUR のように場所を識別します。
- 中間の文字で、テスト用 CICSplex と実動 CICSplex を表す TEST や PROD のようにタイプを示します。
- 最後の 1 文字で、CICSplex の固有の英数字 ID を示します。

CICSplex 定義を完了するために必要な他のすべてのパラメーターが、用意されている EYUJXBTP サンプルの EYUCPDEF DD ステートメントで定義された EYUCPDEF ファイルによって提供されます。

提供されている EYUJXBT1 ジョブは、CICSplex を 1 つだけ定義するようセットアップされています。必要な定義を EYUJXBT1 に追加することにより、Web ユーザー・インターフェース・サーバー用に個別の CICSplex を作成することをお勧めします。

CONTEXT

CONTEXT の 2 回目の使用は、DEFINE CICSplex パラメーターのあと に出現し、コンテキストを CICSplex に再設定します。

コンテキストを CICSplex に設定するためのパラメーターの形式は以下のとおりです。

```
CONTEXT plexname
```

ここで、*plexname* は DEFINE CICSplex パラメーターに指定した名前です。

DEFINE CICSGRP

CICSplex のサブセットである CICS システム・グループを定義します。

このパラメーターの形式は次のとおりです。

```
DEFINE CICSGRP group_name
```

ここで、*group_name* は 1 文字から 8 文字までの英数字からなる CICS システム・グループの名前です。先頭文字は英字である必要があります。

DEFINE REGION

CICSplex に組み込む各 CICS 領域の名前とその他のキー属性を指定します。パラメーターとそのサブパラメーターの形式は次のとおりです。

```
DEFINE REGION  region_name  -  
                APPLID      region_applid -  
                SYSID       region_sysidnt
```

これらの定義では、APPLID を領域名として使用することをお勧めします。領域名を APPLID と同じにすると、以下のような利点があります。

- 領域について別の名前を考案する必要がありません。
- 領域に 2 つの ID を持たせるのではなく名前を同じにすれば、混乱を避けることができます。
- NAME EYUPARM を除外することにより、EYUPARM パラメーターを CICS 領域間で共用できます。各 CICS 領域の NAME EYUPARM は、各 CICS 領域の APPLID システム初期設定テーブル・パラメーターで指定されている z/OS Communications Server の APPLID をデフォルトにしています。

SYSID は、領域の SYSIDNT システム初期設定パラメーターに指定される名前です。

EYUJXBT1 ジョブには DEFINE REGION パラメーターが 1 回含まれていますが、お客様の要件に合うどのグループ内でも必要な数だけ定義することができます。

ADD TOGROUP

DEFINE CICSGRP コマンドで定義された CICS システム・グループに追加する CICS 領域の名前を指定します。

グループに CICS 領域を追加するためのこのパラメーターの形式は次のとおりです。

```
ADD TOGROUP  grpname -  
  REGION     regname
```

1 つのグループを別のグループに組み込むことによって、CICS システム・グループをネストすることもできます。グループを (別の) グループに追加するためのパラメーターの形式は次のとおりです。

```
ADD TOGROUP  grpname1 -  
  CICSGRP    grpname2
```

EYUJXBT1 ジョブを実行して CICSplex の初期定義を作成したあとに、別の CICSplex の作成や、領域または CICS システム・グループのさらなる追加が必要になる場合があります。その場合は、CMAS データ・リポジトリにさらなるオブジェクトを追加するよう適切に変更した EYUJXBT1 ジョブを再度実行します。更新をバックアウトしなければならない場合に備えて、前の定義を保管してから変更を行うこともできます。

EYUJXBT2 で使用するパラメーター:

EYUJXBT2 サンプルは、CMAS-CMAS 接続を作成するための定義をインポートします。このサンプルは、コンテキストを 1 番目の CMAS 名に設定し、そのリンクを 2 番目の CMAS にインポートします。次に、サンプルはコンテキストを 2 番目の CMAS 名に変更し、そのリンクを 1 番目の CMAS にインポートします。

作成する定義を入れるリポジトリを所有する CMAS は、EYUJXBT2 ジョブを実行するときにアクティブでなければなりません。また、EYUJXBT2 ジョブは、CMAS と同じ z/OS イメージで実行する必要があります。EYUJXBT2 JCL には、リポジトリのためのデータ・セット定義 (DD) ステートメントはありません。そのリポジトリへのすべてのアクセスは、API を使用して CMAS を介して行われるからです。

EYUJXBT2 は、IMPORT コマンドの使用例を提供し、ユーザーが編集して独自の名前を指定する以下のパラメーターを持っています。

CONTEXT

ユーティリティが動作する CICSplex SM コンテキストを設定します。

コンテキストを設定するためのパラメーターの形式は以下のとおりです。

CONTEXT *masname*

ここで、*masname* は変更する CMAS の名前です。

OPTION DUPREC

インポート・ストリームに、ローカル・データ・リポジトリに既に存在する定義を検出した場合に、プログラムが実行するアクションを指定します。指定可能なオプションは以下のとおりです。

- OPTION DUPREC REJECT。重複定義に続くコマンドはリジェクトされます。
- OPTION DUPREC ABORT。ジョブは終了します。
- OPTION DUPREC SKIP。既存のレコードをそのままの場所に置いておきます。
- OPTION DUPREC UPDATE。既存の定義を置き換えます。

IMPORT

定義をリポジトリにインポートします。

パラメーターの形式は以下のとおりです。

IMPORT CMAS1LNK * *

EYUJXBT2 には、CMAS1LNK のための入力データ・ストリームがあり、これには CMAS-CMAS 定義 (CMTCMDEF リソース・テーブル) が含まれています。

2 次 CMAS を追加する場合は、それをご使用の CICSplex に割り当ててから CICSplex 管理に参加させる必要があります。以下のいずれかの方法で行います。

- EYUSTARTCPLEXDEF WUI ビューから割り当てアクションを実行します。
- CPLEXDEF リソース・テーブルに対して、ASSIGN の CICSplex SM API アクションを使用します。

EYUJXBT3 で使用するパラメーター:

EYUJXBT3 および EYUJXBT4 のサンプルを使用して、異なる z/OS イメージ上の CMAS に対する CMAS-CMAS 接続を作成するための定義をインポートします。EYUJXBT3 は、コンテキストを 1 番目の CMAS 名に設定し、そのリンクを 2 番目の CMAS にインポートします。

作成する定義を入れるリポジトリを所有する CMAS は、EYUJXBT3 を実行するときにアクティブでなければなりません。EYUJXBT3 ジョブは、定義を作成する CMAS と同じ z/OS イメージで実行する必要があります。EYUJXBT3 JCL には、リポジトリのためのデータ・セット定義 (DD) ステートメントはありません。そのリポジトリへのすべてのアクセスは、API を使用して CMAS を介して行われるからです。

EYUJXBT3 は、IMPORT コマンドの使用例を提供し、ユーザーが編集して独自の名前を指定する以下のパラメーターがあります。

CONTEXT

ユーティリティが動作する CICSplex SM コンテキストを設定します。

コンテキストを設定するためのパラメーターの形式は以下のとおりです。

CONTEXT *masname*

ここで、*masname* は変更する CMAS の名前です。

OPTION DUPREC

インポート・ストリームに、ローカル・データ・リポジトリに既に存在する定義を検出した場合に、プログラムが実行するアクションを指定します。下記のオプションから 1 つを指定できます。

REJECT

重複定義に続くすべてのコマンドをリジェクトします。

ABORT

ジョブを強制終了します。

SKIP

既存のレコードをそのままの場所に置いておきます。

UPDATE

既存の定義を置き換えます。

IMPORT

定義をリポジトリにインポートします。

パラメーターの形式は以下のとおりです。

IMPORT CMAS1LNK * *

EYUJXBT3 には、CMAS1LNK のための入力データ・ストリームがあり、これには CMAS-CMAS 定義 (CMTCMDEF リソース・テーブルを使用して作成) が含まれています。

2 次 CMAS を追加する場合は、それをご使用の CICSplex に割り当ててから CICSplex 管理に参加させる必要があります。以下のいずれかの方法で行います。

- EYUSTARTCPLEXDEF WUI ビューから ASSIGN アクション・コマンドを発行します。
- CPLEXDEF リソース・テーブルに対して、ASSIGN の CICSplex SM API アクションを使用します。

EYUJXBT4 で使用するパラメーター:

EYUJXBT4 および EYUJXBT3 のサンプルを使用して、異なる z/OS イメージ上の CMAS に対する CMAS-CMAS 接続を作成するための定義をインポートします。EYUJXBT4 は、コンテキストを 2 番目の CMAS 名に設定し、そのリンクを 1 番目の CMAS にインポートします。

作成する定義を入れるリポジトリを所有する CMAS は、EYUJXBT4 を実行するときにアクティブでなければなりません。EYUJXBT4 ジョブは、定義を作成する CMAS と同じ z/OS イメージで実行する必要があります。EYUJXBT4 JCL には、リポジトリのためのデータ・セット定義 (DD) ステートメントはありません。そのリポジトリへのすべてのアクセスは、API を使用して CMAS を介して行われるからです。

EYUJXBT4 は、IMPORT コマンドの使用例を提供し、ユーザーが編集して独自の名前を指定する以下のパラメーターがあります。

CONTEXT

ユーティリティが動作する CICSplex SM コンテキストを設定します。

コンテキストを設定するためのパラメーターの形式は以下のとおりです。

CONTEXT *masname*

ここで、*masname* は変更される CMAS の名前です。

OPTION DUPREC

インポート・ストリームに、ローカル・データ・リポジトリに既に存在する定義を検出した場合に、プログラムが実行するアクションを指定します。下記のオプションから 1 つを指定できます。

REJECT

重複定義に続くすべてのコマンドをリジェクトします。

ABORT

ジョブを強制終了します。

SKIP

既存のレコードをそのままの場所に置いておきます。

UPDATE

既存の定義を置き換えます。

IMPORT

定義をリポジトリにインポートします。

パラメーターの形式は以下のとおりです。

IMPORT CMAS2LNK * *

EYUJXBT4 には、CMAS2LNK のための入力データ・ストリームがあり、これには CMAS-CMAS 定義 (CMTCMDEF リソース・テーブルを使用して作成) が含まれています。

2 次 CMAS を追加する場合は、それをご使用の CICSplex に割り当ててから CICSplex 管理に参加させる必要があります。以下のいずれかの方法で行うことができます。

- EYUSTARTCPLEXDEF WUI ビューから ASSIGN アクション・コマンドを発行します。
- CPLEXDEF リソース・テーブルに対して、ASSIGN の CICSplex SM API アクションを使用します。

EYU9XDBT ユーティリティのエラー処理:

EYU9XDBT ユーティリティ・プログラムの処理では、3 つのレベルのエラーが発生する可能性があります。

これらのエラーは以下のとおりです。

- EYU9XDBT によって検出されるコマンド・パラメーター・ストリーム内のエラー。

EYU9XDBT は各コマンドを、コマンド入力ストリーム内で発生するとおりに処理します。ユーティリティ・プログラムがコマンド内のエラー (例えば、認識できないパラメーター) を検出すると、それ以上コマンドを読み取らずに処理を停止し、メッセージ「EYUXU1448E Data stream rejected」を発行し、EYU9XDBT 戻りコード 12 を表示します。

- CICSplex SM が EYU9XDBT からの呼び出しを処理しているときに検出した CICSplex SM API のエラー。

コマンドとそのパラメーターが EYU9XDBT によって認識されると、CICSplex SM API を呼び出して、指定されたアクションを実行します。ただし、CICSplex SM がエラーを検出した場合、そのコマンドだけが (EYU9XDBT 戻りコードが 8 または 12 で) 失敗し、EYU9XDBT は次のコマンドを続行します。例えば、SYSID ABCDE を指定する DEFINE REGION コマンドは EYU9XDBT によって受け入れられますが、SYSID 値の長さが 4 文字を超えているために CICSplex SM によって拒否され、次のエラー・メッセージが生成されます。

EYUAR0021E

属性 (CSYSDEF._SYSID) のデータ長が無効です

EYUXU1441S

CSYSDEF データで TBUILD が失敗しました: FAILURE

EYUXU1448E

データ・ストリームは拒否されました

- プログラムが、割り当てた量を超えてストレージを使用しようとしたときの異常終了コード 878。

EYU9XDBT では、この異常終了は領域サイズが不十分なために発生します。解決策は、領域サイズを大きくすることです。この異常終了コードは、以下の状況で発生する可能性があります。

- 領域サイズを設定する際に、EYU9XDBT がメモリー内に多数の定義を保持することを考慮していない場合。

定義サイズに定義カウントをかけて、必要なストレージを計算することができます。ただし、領域サイズを変更できない場合は、既存のコマンドを変更してより少ないストレージを使用できる可能性があります。各コマンドは個別に実行されるため、コマンド当たりの定義の数を減らすことは、ストレージ要件を軽減する簡単で効果的な方法です。

ストレージ要件を軽減する 1 つの方法は、IMPORT、EXPORT、および PRINT コマンドで定義タイプと定義名を定義するために汎用の * (アスタリスク) 文字を使用しないようにすることです。そうしないと、多数の定義がストレージ内に保持される可能性があります。代わりに、実行可能な最少数の定義を選択する別々のコマンドを使用します。

バッチ処理されるリポジトリ更新機能 (BATCHREP)

BATCHREP バッチ処理されるリポジトリ更新機能により、データ・リポジトリの管理処理を合理化できます。

多数の定義を作成するために複数のビュー画面を繰り返し使用する代わりに、標準入力ファイルを作成して定義を一度にすべてデータ・リポジトリに追加することができます。これにより、トランザクション・グループ内のトランザクション (DTRINGRP) の関連付けのような定義を作成する労力を軽減することができます。この作成作業には何百ものトランザクションの識別が含まれる場合があります。同様に、ビジネス・アプリケーション・サービス (BAS) を使用して CICS リソース定義を作成および保守する場合、バッチ・リポジトリ更新機能は定義プロセスを高速化できます。

バッチ・リポジトリ更新 (BATCHREP) ジョブの実行依頼:

BATCHREP ジョブの実行依頼には 3 つの手順があります。

バッチ・リポジトリ更新ジョブを実行依頼するには、以下の作業が必要です。

1. 順次データ・セットまたは区分データ・セット・メンバーを作成して、そこに、バッチ・リポジトリ更新機能への入力を収容します。データ・セットは固定ブロック・フォーマット (RECFM(FB))、および論理レコード長が 80 (LRECL(80)) でなければなりません。

出力を区分データ・セットのメンバーに送信する場合、データ・セットに、コマンドを正常に実行するための十分なディレクトリー・エントリーとスペースがあることを確認する必要があります。これを怠ると、CMAS が強制終了する可能性があります。
2. 18 ページの『バッチ・リポジトリ更新 (BATCHREP) の入力ファイルの作成』で説明されているように、入力を作成します。
3. 以下のいずれかの方式を使用して、バッチ・リポジトリ更新ジョブを実行依頼します。
 - バッチ・リポジトリ更新ジョブ WUI ビュー (26 ページの『WUI を使用したバッチ・リポジトリ更新 (BATCHREP) ジョブの実行依頼』の説明を参照)。

- バッチ・リポジトリ更新ユーティリティ (27 ページの『バッチ・リポジトリ更新ユーティリティの使用』の説明を参照)。
- CICSplex SM API (BATCHREP リソース・テーブルを使用)。

立て続けに同じ定義を処理するバッチ・リポジトリ更新ジョブを実行依頼すると、1 つ以上の制御ステートメントが失敗する可能性があります。そのような状況では、リポジトリ更新ジョブを分割し、結果のジョブを順次実行依頼するのが最善の手順です。

バッチ・リポジトリ更新 (**BATCHREP**) の入力ファイルの作成:

バッチ・リポジトリ更新機能の入力ファイルは、データ・リポジトリへの更新を記述する制御ステートメントで構成されています。

入力ファイルは、以下の要件に従う必要があります。

- 制御ステートメントは大文字にする必要があります。
- 各制御ステートメントの最後は、セミコロン (;) で終了する必要があります。
- コメントは、先頭が「/*」、最後が「*/」で区切られていなければなりません。(カラム 1 に「*」が付いている行もすべてコメントとして扱われます。)

制御ステートメントとコメントは複数の行にまたがることができます。

入力ファイルを作成するときは、まず、更新が適用されるコンテキスト (CMAS または CICSplex) を識別する必要があります。これを行うには、以下の制御ステートメントを使用します。

```
CONTEXT [plexid]
```

ここで、*plexid* はローカル CMAS の名前またはローカル CMAS に関連付けられた CICSplex の名前です (ローカル CMAS は、バッチ・リポジトリ更新ジョブが実行される CMAS です)。更新のコンテキストとして CICSplex を指定する場合、ローカル CMAS はその CICSplex の保守ポイントでなければなりません。このパラメーターを省略すると、ローカル CMAS がコンテキストとみなされます。

コンテキストを設定すると、他の CONTEXT ステートメントで明示的にこれを変更するまで、バッチ・リポジトリ更新ジョブに対して有効なままになります。

入力ファイル内の残りの制御ステートメントは、作成している更新のタイプによって異なります。以下のセクションでは、各更新タイプの制御ステートメントについて詳しく説明します。

CICSplex SM 定義の作成および保守:

データ・リポジトリ内の CICSplex SM 定義を作成、更新、削除、または確認するには、1 つ以上の制御ステートメントを使用します。

制御ステートメントの形式は次のとおりです。

```
command object keyword1(value) keyword2
```

ここで、

command

バッチ・リポジトリ更新機能コマンドの名前 (大文字) です。次のいずれかを指定します。

CREATE

レコードを作成し、それをローカル CMAS に関連付けられたデータ・リポジトリに追加する場合に使用します。

UPDATE

データ・リポジトリ内の既存のレコードを更新する場合に使用します。

注: バッチ・リポジトリ更新機能を使用して LNKSxSCG レコードを更新することはできませんが、WUI を使用すれば可能です。

REMOVE

データ・リポジトリから既存のレコードを削除する場合に使用します。

レコードを削除すると、そのレコードとデータ・リポジトリ内の他のレコードとの間の関連はすべて失われます。例えば、1 つの CICS システム定義を削除すると、その CICS システムとすべての CICS システム・グループまたはコンポーネント仕様との間の関連も削除されます。

BAS 定義を削除する場合は、DEFVER() キーワードを指定する必要があります。

LIST データ・リポジトリからレコードをリストする場合に使用します。

DUMP

データ・リポジトリからレコードをリストし、その前に CREATE 制御ステートメントを挿入する場合に使用します。

DUMP コマンドで得られる出力は、定義を作成する別のバッチ・リポジトリ更新ジョブへの入力として使用できます。DUMP コマンドの出力は、次のようにフォーマット設定されます。

- データ行はカラム 72 で切られます。
- 継続文字はカラム 1 に置かれます。

デフォルトでは、出力はスプール・ファイルに書き込まれ、バッチ・リポジトリ更新機能への入力として使用する前に、スプールから抽出して編集する必要があります。抽出されたレコードには、カラム 1 に ANS 制御文字が含まれているため、CICSplex SM による処理用にデータを位置合わせするには、レコードを 1 文字左にシフトする必要があります。また、データ・セットからすべてのページ・ヘッダー情報を削除する必要があります。リストの作成例については、37 ページの図 2 を参照してください。ただし、OUTPUT コマンドを使用して、正しい形式で出力をデータ・セットに直接書き込むことができます。詳しくは、25 ページの『バッチ・リポジトリ更新機能への再入力のためのデータ・セットの作成』を参照してください。

CICSplex SM には、他のものを作成する前に特定の定義が存在する必要があります。したがって、データ・リポジトリ・レコードをダンプする際には、以下のガイドラインに従う必要があります。

- 常に、CICS システム (CSYSDEF) および CICS システム・グループ (CSYSGRP) のレコードを最初にダンプします。
- 関連レコード (LNKxxxxx、xxxINGRP、または xxxINSPC など) の前に、基本 CICSplex SM 定義レコード (xxxDEF、xxxGROUP、および xxxSPEC など) をダンプします。
- ビジネス・アプリケーション・サービスの場合:
 - RESDESC レコードおよび RASGNDEF レコードの前に、RESGROUP レコードをダンプします。
 - RESINDSC レコードおよび RASINDSC レコードの前に、RESDESC レコードと RASGNDEF レコードをダンプします。
 - xxxINGRP レコード (FILINGRP など) の前に、リソース定義レコード (FILEDEF など) をダンプします。
 - SYSLINK レコードの前に、CONNDEF、SESSDEF、IPCONDEF、および TCPDEF の各レコードをダンプします。

上記のガイドラインに従うと、DUMP コマンドの出力は、バッチ・リポジトリ更新機能が新しい定義を作成するための正しい順序になります。新しい定義を作成するために DUMP コマンド出力を使用する例については、36 ページの『データ・リポジトリ内のレコードの管理例』を参照してください。

注: DUMP コマンドおよび LIST コマンドの出力には、CICS リソース (接続やファイルなど) に関連付けられたすべてのパスワードの目に見える記録が含まれています。機密漏れの可能性を排除するために、このような出力へのアクセスを制限する必要があります。

object

30 ページの表 1 に示されているいずれかのリソース・テーブル名です。

keyword1(value)

指定されたリソース・テーブルのフィールドの名前と、そのフィールドに適したデータを大文字で指定します。さまざまなコマンドに必要な入力は以下のとおりです。

CREATE

リソースを定義するために必要なすべての情報 (例えば、同等の WUI 「作成」ビューで必要とされるものと同じタイプの情報) を提供します。

CREATE ステートメントへの入力は、DFHCSDUP EXTRACT または BATCHREP DUMP 要求の出力から派生させることができます。詳しくは、25 ページの『バッチ・リポジトリ更新機能への再入力のためのデータ・セットの作成』、38 ページの『例 6 - 新

しいレコードを作成するための入力としてレコードをダンプ』を参照してください。この方法で入力を作成しない場合は、必要なすべての属性を指定する必要があります。

注: 定義レコードによっては、特定のオペランドを指定してはならない場合があります。例えば、CPLEXDEF の場合、STATUS オペランドは指定しないでください。

UPDATE

更新する特定のレコードを特定します。ビジネス・アプリケーション・サービス (BAS) の一部として作成された CICS リソース定義の場合、これにはリソースのバージョン (DEFVER) が含まれていなければなりません。更新する属性を指定します。

REMOVE

削除する特定のレコードを特定します。ビジネス・アプリケーション・サービス (BAS) の一部として作成された CICS リソース定義の場合、これにはリソースのバージョン (DEFVER) が含まれていなければなりません。

LIST および DUMP

特定または汎用のレコード名を指定します。汎用名には、正符号 (+)、アスタリスク (*)、またはその両方を含めることができます。

keyword2

仕様と CICS システム・グループのリンク・レコード (LNKSxSCG) の作成または削除が、CICS システム・グループの現行メンバーにどのように影響するかを示します。CREATE コマンドと REMOVE コマンドのキーワードは、大文字で入力する必要があります。以下のとおりです。

CREATE

次のいずれかを指定します。

FORCE CICS システム・グループのすべての現行メンバーに、指定された仕様との間の暗黙的なリンクが確立されます。リンクが既に存在している場合、新しく作成されたリンクで置き換えられます。

NULL 既存のリンクがない場合に限り、CICS システム・グループの現行メンバーに、指定された仕様との間の暗黙的なリンクが確立されます。

NONE 暗黙的なリンクは確立されません。

CREATE コマンドを使用する場合、keyword2 のデフォルト値は NONE です。

REMOVE

次のいずれかを指定します。

KEEP すべての暗黙的なリンクを明示的なリンクに変換します。

NONE どの暗黙的なリンクも明示的なリンクに変換しません。

REMOVE コマンドを使用する場合は、keyword2 のデフォルト値はありません。値を指定する必要があります。

バッチ・リポジトリ更新ジョブを実行依頼すると、各コマンドの構文の妥当性がチェックされます。複数のコマンドが発行されている場合、構文検査では以下のような結果になる可能性があります。

- LIST、DUMP、MAPLEFT または MAPRIGHT コマンドが無効な場合、そのコマンドは実行されませんが、後続のすべてのコマンドの処理は続行されます。
- 変更コマンド (CREATE、UPDATE、または REMOVE) が無効な場合、そのコマンドは実行されません。後続の変更コマンドはすべて、妥当性がチェックされます。ただし、後続の変更コマンドは実行されません。

CICS リソース定義の作成:

CICS リソースを作成し、オプションでそれらをデータ・リポジトリ内のリソース・グループに追加するには、1 つ以上の制御ステートメントを使用します。

制御ステートメントの形式は次のとおりです。

```
CREATE object NAME(defname) [RESGROUP(resgroup)]
```

ここで、

object

30 ページの表 1 に示すいずれかのリソース・テーブル名で、CICS リソース・タイプ (例えば CONNDEF) を表します。

defname

作成しているリソース定義の名前です。

resgroup

そこにリソース定義を追加する必要があるデータ・リポジトリ内の既存のリソース・グループの名前です。

CICSplex SM 定義のマップの生成:

CICSplex SM 定義の作成と保守に加えて、データ・リポジトリ内の定義の視覚的なマップを生成することができます。

マップを生成するには、次の形式の 1 つ以上の制御ステートメントを使用します。

```
command object NAME(defname)
```

ここで、

command

バッチ・リポジトリ更新機能コマンドの名前 (大文字) です。次のいずれかを指定します。

MAPLEFT

開始点の左側に定義のマップを生成します。つまり、それらの定義が開始点を参照します。

MAPRIGHT

開始点の右側に定義のマップを生成します。つまり、それらの定義は開始点によって参照されます。

object

マップに表示される定義のタイプを識別するリソース・テーブル名です。

以下の定義のマップを生成できます。

トポロジー

- CSYSDEF
- CSYSGRP
- PERIODEF

ワークロード管理

- TRANGRP
- WLMDEF
- WLMGROUP
- WLMSPEC

リアルタイム分析

- ACTION
- APSPEC
- EVALDEF
- RTADEF
- RTAGROUP
- RTASPEC
- STATDEF

リソース・モニター

- MONDEF
- MONGROUP
- MONSPEC

ビジネス・アプリケーション・サービス

- xxxxDEF (FILEDEF などのリソース定義)
- RESGROUP
- RESDESC
- RASGNDEF

NAME

マップされるリソースのキー・フィールドのフィールド名です。すべてのリソースについて、キー・フィールド名は **NAME** ですが、以下の例外があります。

- CSYSGRP のキー・フィールドは **GROUP** です。
- RESGROUP のキー・フィールドは **RESGROUP** です。
- RESDESC のキー・フィールドは **RESDESC** です。
- RASGNDEF のキー・フィールドは **RESASSGN** です。

defname

マップの開始点になる定義の固有名または総称名です。総称名を入力すると、パターンに一致する名前を持つ定義ごとにマップが生成されます。

リポジトリ更新コマンドの処理オプションの設定:

バッチ・リポジトリ更新コマンドのデフォルトの振る舞いは、**OPTION** コマンドで変更できます。

OPTION コマンドの形式は次のとおりです。

OPTION *type keyword* [*keyword ...*]

ここで、

- *type* は、設定されているオプションを識別します。
- *keyword* は、オプション・タイプに設定する値 (複数の場合あり) を指定します。

現在サポートされているオプション・タイプは以下のとおりです。

DUPREC

CREATE コマンドが **RECORD_EXISTS** 条件をどのように処理するかを指定します。次に示すキーワードのいずれかを指定する必要があります。

REJECT (デフォルト)

既存のレコードは変更されません。BATCHREP 入力ストリームがフラッシュされ、それ以上のコマンドは処理されません。

ABORT

既存のレコードは変更されません。ジョブは即時に終了します。

SKIP 既存のレコードは変更されません。処理は次の **BATCHREP** コマンドで続行されます。

UPDATE

既存のレコードは、**CREATE** コマンドを **UPDATE** コマンドであるかのように再実行することによって更新されます。

注:

1. いくつかのリンク・タイプの CICSplex SM リソース・テーブルでは、**UPDATE** アクションがサポートされないものがあります。以下のリソース・タイプのいずれかを作成する **BATCHREP** 入力ストリームを再始動する必要がある場合は、**OPTION DUPREC SKIP** を指定する必要があります。そうしないと、コマンドの再試行は失敗します。影響を受けるリソース・テーブルは以下のとおりです。

CMDMPAPS - APSPEC から 1 次 CMAS へ

CMDMSAPS - APSPEC から 2 次 CMAS へ

CSGLCGCG - CICSGRP 内の CICSGRP

CSGLCGCS - CICSGRP 内の CICSSYS

LNKSxSCG - xxxSPEC から CICSGRP (xxx は、MON、RTA または WLM)

LNKSxSCS - xxxSPEC から CICSSYS (xxx は、MON、RTA または WLM)

RECORD_EXISTS 以外の **STATUS** が **CREATE** コマンドによって戻された場合、コマンドは再試行されず、入力ファイル内の残りのコマンドはすべてフラッシュされます。

複数の OPTION コマンドを BATCHREP 入力ストリームに入れることができます。OPTION コマンドは、同じオプション・タイプの別の OPTION コマンドが検出されるか、入力コマンド・ストリームがファイルの終わりに達するまで、すべてのコマンドに影響します。

バッチ・リポジトリ更新機能への再入力のためのデータ・セットの作成:

DUMP コマンドから生成される CREATE ステートメントを保持するために、バッチ・リポジトリ更新機能から出力データ・セットを作成することができます。

このデータ・セットは、バッチ・リポジトリ更新機能への再入力用に正しい形式となっており、さらなる編集は必要ありません。つまり、見出し行は含まれず、データは正しい列に位置合わせされます。ただし、この出力データを編集して、コンテキスト、グループ名、バージョン番号などを変更しなければならない場合があります。

DUMP コマンドを使用する場合 (18 ページの『CICSplex SM 定義の作成および保守』を参照)、OUTPUT コマンドを使用して、結果の CREATE コマンドがすべて、通常のレポートだけでなく、出力データ・セットにも書き込まれるように要求することができます。OUTPUT コマンドがどの DUMP コマンドよりも前にくるようにするために、OUTPUT コマンドは、BATCHREP 入力データ・ストリーム内の最初のコマンドとなるようにしてください。複数の OUTPUT コマンドを指定することはできません。

注: 区分データ・セットを出力データ・セットとして使用する場合は、データ・セットに出力を処理するのに十分なスペースがあることを確認する必要があります。十分なディレクトリー・スペースがなくて区分データ・セットがいっぱいになると、複数の異常終了を引き起こし、CMAS が強制終了する可能性があります。CICS リカバリー中に複数の異常終了が発生することを避けるには、出力を順次データ・セットに行うようにします。その後、必要に応じて順次データ・セット出力を区分データ・セットにコピーすることができます。

OUTPUT コマンドの形式は次のとおりです。

```
OUTPUT DATASET DSNAME(data.set.name(member)) INQUOTES(NO|YES);
```

ここで、

DATASET

このキーワードを指定する必要があります。

DSNAME

データ・セット名を指定します。データ・セット名は指定する必要があり、そのデータ・セットが存在する必要があります。出力データ・セットは、入力データ・セットと同じにすることはできません。データ・セットは、固定長の 80 バイトのレコードで構成する必要があります。レコードはブロック化でき、適切な任意のブロック・サイズを指定できます。

data.set.name

データ・セット名は、長さ 44 文字以下でなければなりません。名前の各構成要素の長さは 8 文字以下でなければならず、構成要素はピリオドで区切られていなければなりません。データ・セット名

は、完全修飾データ・セット名でなければなりません。データ・セット名の最初の構成要素は、デフォルトのログオン・ユーザー ID にはなりません。

member

メンバー名 (出力データ・セットが区分データ・セットの場合)。メンバー名の長さは 8 文字以下でなければなりません。出力データ・セットが区分化されていない場合は、メンバー名を省略しなければなりません。

INQUOTES(NO|YES)

出力データ・セットで、フィールド値を引用符で囲むかどうかを指定します。データ・リポジトリに対していない括弧を含むデータがある場合は、この制御ステートメントを使用しなければならない場合があります。このキーワードを省略すると、デフォルト値の NO が想定されます。

NO 出力データ・セットでは、パラメーターの値が引用符で囲まれません。この設定は、バッチ・リポジトリ更新機能への入力には完全に適していますが、パラメーター値に対していない括弧が含まれていると問題が発生する可能性があります。

INQUOTES(NO) を指定すると、BATCHREP の出力は任意のリソースの CICSplex SM バッチ・リポジトリ更新機能への入力として使用できます。

YES 出力データ・セットでは、パラメーターのすべての値が引用符で囲まれます。CICSplex SM バッチ・リポジトリ更新機能は、パラメーター値を、埋め込み括弧ではなく最後の引用符で終了します。

例えば、DESCRIPTION フィールドに次の値が含まれているものとします。

1) Describe Resource

デフォルトである INQUOTES(NO) を指定すると、DUMP ルーチンは出力データ・セットに以下のステートメントを生成します。

DESCRIPTION(1) Describe Resource)

CICSplex SM バッチ・リポジトリ更新機能はこれを、値 1 を含む DESCRIPTION フィールドと、そのあとに 2 つの認識できないキーワードが続いていると解釈します。

INQUOTES(YES) を指定すると、DUMP ルーチンはフィールド値の前後に引用符を置きます。出力データ・セットには以下のステートメントが含まれます。

DESCRIPTION('1) Describe Resource')

このステートメントは、CICSplex SM バッチ・リポジトリ更新機能によって正しく解釈されます。

WUI を使用したバッチ・リポジトリ更新 (**BATCHREP**) ジョブの実行依頼:

WUI を使用してバッチ・リポジトリ更新ジョブを実行依頼するには、メインメニュー (EYUSTARTMENU) から「管理ビュー」 > 「バッチ・リポジトリ更新要求」をクリックします。これにより、「バッチ・リポジトリ更新要求」ビューが

表示されます。このビューを使用して、現在実行されているバッチ・リポジトリ更新ジョブに関する情報を表示できます。

以下の手順を使用して、選択したバッチ・リポジトリ更新ジョブを実行依頼できます。

1. 「バッチ・リポジトリ更新要求」ビューを開きます。
2. 実行依頼するレコードを選択し、「実行」をクリックします。これにより、「実行」ビューが開きます。実行中のバッチ・リポジトリ更新ジョブがない場合、選択できるのはダミーの停止済みレコードのみになります。

注: 「チェック」ボタンをクリックすると「チェック」ビューが開きます。このビューを使用して、バッチ・リポジトリ更新ジョブのすべての入力ステートメントのコマンド形式を確認できます。

3. 以下のフィールドに入力して、「実行」ビューを完了します。

入力データ・セット名

バッチ・リポジトリ更新ジョブへの入力を含む順次データ・セットまたは区分データ・セット (PDS) の名前を指定します。

入力メンバー名

PDS を使用する場合、バッチ・リポジトリ更新ジョブへの入力を含むメンバーの名前を指定します。

印刷クラス

(オプション。) 1 文字のクラス宛先を指定します。値を省略すると、クラス A が想定されます。

印刷ノード

システム・スプーラーがファイルを経路指定するために使用する、指定ノードの 8 文字の ID を指定します。

宛先ユーザー ID

プリンター向けのスプール・レコードのレポートを処理する最終ライター・プログラムまたはユーザーの 8 文字の ID を指定します。この ID は、レポートに記載され、その宛先でのレポートの選択に使用されます。

4. ジョブを実行依頼するには「はい」を選択します。

特定のデータ・リポジトリに更新を適用するには、更新するデータ・リポジトリに関連付けられている CMAS に確実に WUI サーバーが接続されているようにする必要があります。

バッチ・リポジトリ更新ユーティリティの使用:

バッチ・リポジトリ更新ユーティリティは CMAS に接続し、その CMAS 内で実行されるバッチ・リポジトリ (BATCHREP) の更新を実行依頼します。

バッチ・リポジトリ更新を特定のデータ・リポジトリに対して行うには、更新したいデータ・リポジトリに関連付けられた CMAS に接続し、その CMAS 内で実行されるバッチ更新を実行依頼するよう、ユーティリティを実行します。

ユーティリティーを実行するには、必要な JCL を準備し、更新したいデータ・リポジトリに関連付けられた CMAS の名前などの、ユーティリティー自体の入力パラメーターを定義します。

バッチ・リポジトリ更新ユーティリティーを実行するための JCL の例を以下に示します。

```
//jobname JOB (acct),'name',CLASS=x,MSGCLASS=x
//BTCHUPD EXEC PGM=EYU9XDBC,REGION=2048K
//STEPLIB DD DSN=CICSTS55.CPSM.SEYUAUTH,DISP=SHR
//          DD DSN=CICSTS55.CPSM.SEYULOAD,DISP=SHR
//SYSPRINT DD SYSOUT=*
//SYSABEND DD SYSOUT=*
//SYSIN DD *
CMASNAME(EYUCMS1A)
CHECK
INPUTDSN(EXAMPLE.INPUT.DATASET)
INPUTMEMBER(MEMBER1)
OUTPUTUSER(EXUSER)
PRINTNODE(LOCAL)
/*
```

バッチ・リポジトリ更新ユーティリティーの出力の例を以下に示します。

CICSplex/SM Batched Repository Update Utility

Parameters specified:

```
CMASNAME(EYUCMS1A)
CHECK
INPUTDSN(EXAMPLE.INPUT.DATASET)
INPUTMEMBER(MEMBER1)
OUTPUTUSER(EXUSER)
PRINTNODE(LOCAL)
```

EYUXD0908I A batched repository update has been submitted to run in CMAS EYUCMS1A.

バッチ・リポジトリ更新ユーティリティーの出力は、入力パラメーターをリストする短いレポートと、バッチ更新が実行依頼された CMAS を示すメッセージです。この出力を検討して、ユーティリティーがバッチ更新を CMAS に正常に実行依頼したことを確認してください。

CMAS で実行されるバッチ更新は、標準の CICS スプール機能を使用して出力を作成します。バッチ更新が正常に実行されたことを確認するために、この 2 つ目の出力も検討する必要があります。

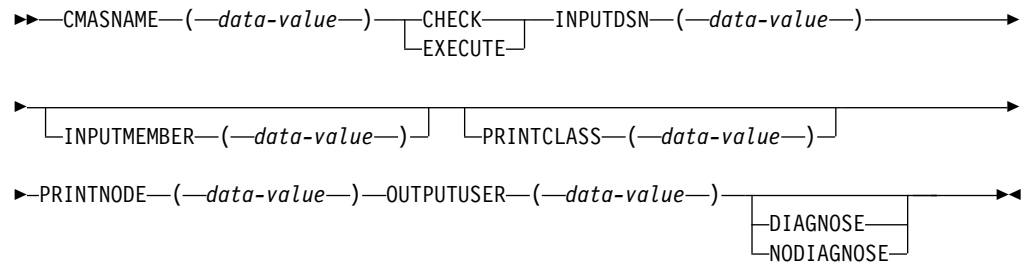
バッチ・リポジトリ更新ユーティリティーのパラメーター:

このセクションでは、バッチ・リポジトリ更新ユーティリティーを使用するために指定する必要がある入力パラメーターについて説明します。これらのパラメーターは、SYSIN データ・セットで提供する必要があります。

以下の構文規則が適用されます。

- パラメーターは大文字で指定する必要があります。
- パラメーターの指定順序は任意です。
- 設定されたパラメーターは、設定された SYSIN ストリームで 1 回のみ指定する必要があります。

- 設定されるパラメーターは、すべて 1 行で表示される必要があります。
- スペースは無視されます。
- 先頭文字のアスタリスク (*) は、その行が無視されることを意味します。



パラメーターは以下のように指定できます。

CMASNAME

ユーティリティの接続先であり、バッチ・リポジトリ更新処理によって変更されるデータ・リポジトリを所有する CMAS の名前を、1 文字から 8 文字で指定します。このパラメーターは必須です。この CMAS で、バッチ・リポジトリ更新処理が行われ、この CMAS から CICS スプーリング機能によって出力が作成されます。

CHECK または EXECUTE

実行のタイプに指定する必要があります。CHECK は、入力ファイルの構文検査を指定し、EXECUTE は、実行する必要がある入力ファイル内のコマンドを指定します。この 2 つのキーワードを同時に使用することはできません。

INPUTDSN

バッチ・リポジトリ更新処理への入力を含む順次データ・セットまたは PDS のデータ・セット名を示す、1 文字から 44 文字のストリングを指定します。CMAS は、INPUTDSN パラメーターによって指定されたデータ・セットにアクセスできる必要があります。このパラメーターは必須です。

INPUTMEMBER

入力ファイルを含む PDS を使用する際に、1 文字から 8 文字のメンバーの名前を指定します。このパラメーターはオプションです。

PRINTCLASS

1 文字の印刷クラス ID を指定します。このパラメーターはオプションです。デフォルトは A です。

PRINTNODE

ジョブ出力をルーティングするためにシステム・スプーラーによって使用される 1 文字から 8 文字の印刷ノード ID を指定します。このパラメーターは必須です。

OUTPUTUSER

スプーリング出力に関連付けられる 1 文字から 8 文字のユーザー ID を指定します。このパラメーターは必須です。

DIAGNOSE

IBM サービス担当員の指示の下でのみ使用します。

NODIAGNOSE

IBM サービス担当員の指示の下でのみ使用します。

BATCHREP でサポートされるリソース・テーブル:

ほとんどの CICSplex SM リソース・テーブルは、バッチ・リポジトリ更新機能でサポートされています。

表 1 に、バッチ・リポジトリ更新機能を使用して処理できる CICSplex SM リソース・テーブルをリストします。

表 1. リソース・テーブル名

リソース・タイプ	テーブル名	影響を受ける定義
構成	CMTCMDEF	CMAS から CMAS への定義
構成	CMTPMDEF	CMAS から リモート MAS への定義
構成	CPLEXDEF	CICSplex の定義
トポロジ	CSGLCGCG	CICS システム・グループと CICS システム・グループとの間の関連
トポロジ	CSGLCGCS	CICS システムと CICS システム・グループとの間の関連
トポロジ	CSYSDEF	CICS システム
トポロジ	CSYSGRP	CICS システム・グループ
トポロジ	PERIODEF	時間枠
トポロジ	SYSLINK	システム・リンク
ワークロード管理	DTRINGRP	トランザクションとトランザクション・グループとの間の関連
ワークロード管理	LNKSWSCG	ワークロード仕様と CICS システム・グループとの間の関連
ワークロード管理	LNKSWSCS	ワークロード仕様と CICS システムとの間の関連
ワークロード管理	TRANGRP	トランザクション・グループ (Transaction groups)
ワークロード管理	WLMDEF	ワークロード定義 (Workload definitions)
ワークロード管理	WLMGROUP	ワークロード・グループ (Workload groups)
ワークロード管理	WLMINGRP	ワークロード定義とワークロード・グループとの間の関連
ワークロード管理	WLMINSPC	ワークロード・グループとワークロード仕様との間の関連
ワークロード管理	WLMSPEC	ワークロード仕様 (Workload specifications)
リアルタイム分析	ACTION	アクション定義
リアルタイム分析	APSPEC	分析点仕様
リアルタイム分析	CMDMPAPS	1 次 CMAS と分析点仕様との間の関連

表 1. リソース・テーブル名 (続き)

リソース・タイプ	テーブル名	影響を受ける定義
リアルタイム分析	CMDMSAPS	2 次 CMAS と分析点仕様との間の関連
リアルタイム分析	EVALDEF	評価定義
リアルタイム分析	LNKSRSCG	分析仕様と CICS システム・グループとの間の関連
リアルタイム分析	LNKSRSCS	分析仕様と CICS システムとの間の関連
リアルタイム分析	RTADEF	分析定義
リアルタイム分析	RTAGROUP	分析グループ
リアルタイム分析	RTAINAPS	分析グループと分析点仕様との間の関連
リアルタイム分析	RTAINGRP	分析定義と分析グループとの間の関連
リアルタイム分析	RTAINSPC	分析グループと分析仕様との間の関連
リアルタイム分析	RTASPEC	分析仕様
リアルタイム分析	STAINGRP	状況定義と分析グループとの間の関連
リアルタイム分析	STATDEF	状況定義
モニター	LNKSMSCG	モニター仕様と CICS システム・グループとの間の関連
モニター	LNKSMSCS	モニター仕様と CICS システムとの間の関連
モニター	MONDEF	モニター定義
モニター	MONGROUP	モニター・グループ
モニター	MONINGRP	モニター定義とモニター・グループとの間の関連
モニター	MONINSPC	モニター・グループとモニター仕様との間の関連
モニター	MONSPEC	モニター仕様
ビジネス・アプリケーション・サービス	APPLDEF	アプリケーション定義
ビジネス・アプリケーション・サービス	ATMINGRP	Atom 文書定義とリソース・グループとの間の関連
ビジネス・アプリケーション・サービス	BUNINGRP	バンドル定義とリソース・グループとの間の関連
ビジネス・アプリケーション・サービス	CONINGRP	MRO または SNA を介した ISC 接続定義とリソース・グループとの間の関連
ビジネス・アプリケーション・サービス	DOCINGRP	文書テンプレート定義とリソース・グループとの間の関連
ビジネス・アプリケーション・サービス	D2CINGRP	DB2 [®] 接続定義とリソース・グループとの間の関連
ビジネス・アプリケーション・サービス	D2EINGRP	DB2 エントリ定義とリソース・グループとの間の関連
ビジネス・アプリケーション・サービス	D2TINGRP	DB2 トランザクション定義とリソース・グループとの間の関連
ビジネス・アプリケーション・サービス	EJCINGRP	CorbaServer 定義とリソース・グループとの間の関連

表 1. リソース・テーブル名 (続き)

リソース・タイプ	テーブル名	影響を受ける定義
ビジネス・アプリケーション・サービス	EJDINGRP	DJAR 定義とリソース・グループとの間の関連
ビジネス・アプリケーション・サービス	ENQINGRP	ENQ/DEQ モデル定義とリソース・グループとの間の関連
ビジネス・アプリケーション・サービス	FILINGRP	ファイル定義とリソース・グループとの間の関連
ビジネス・アプリケーション・サービス	FNOINGRP	FEPI ノード定義とリソース・グループとの間の関連
ビジネス・アプリケーション・サービス	FPOINGRP	FEPI プール定義とリソース・グループとの間の関連
ビジネス・アプリケーション・サービス	FPRINGRP	FEPI プロパティ・セット定義とリソース・グループとの間の関連
ビジネス・アプリケーション・サービス	FSGINGRP	OS/2 ファイル・セグメント定義とリソース・グループとの間の関連
ビジネス・アプリケーション・サービス	FTRINGRP	FEPI ターゲット定義とリソース・グループとの間の関連
ビジネス・アプリケーション・サービス	IPCINGRP	IPIC 接続定義とリソース・グループとの間の関連
ビジネス・アプリケーション・サービス	JRMINGRP	ジャーナル・モデル定義とリソース・グループとの間の関連
ビジネス・アプリケーション・サービス	LIBINGRP	LIBRARY 定義とリソース・グループとの間の関連
ビジネス・アプリケーション・サービス	MAPINGRP	マップ・セット定義とリソース・グループとの間の関連
ビジネス・アプリケーション・サービス	MQCINGRP	IBM® MQ 接続定義とリソース・グループとの間の関連
ビジネス・アプリケーション・サービス	PARINGRP	パートナー定義とリソース・グループとの間の関連
ビジネス・アプリケーション・サービス	PGMINGRP	プログラム定義とリソース・グループとの間の関連
ビジネス・アプリケーション・サービス	PIPINGRP	パイプライン定義とリソース・グループとの間の関連
トポロジ	PLATDEF	プラットフォーム定義
トポロジ	PLATFORM	プラットフォーム
ビジネス・アプリケーション・サービス	PRCINGRP	プロセス・タイプ定義とリソース・グループとの間の関連
ビジネス・アプリケーション・サービス (続き)	PRNINGRP	区画セット定義とリソース・グループとの間の関連
ビジネス・アプリケーション・サービス (続き)	PROINGRP	プロファイル定義とリソース・グループとの間の関連

表 1. リソース・テーブル名 (続き)

リソース・タイプ	テーブル名	影響を受ける定義
ビジネス・アプリケーション・サービス (続き)	RASGNDEF	リソース割り当て
ビジネス・アプリケーション・サービス (続き)	RASINDSC	リソース割り当てとリソース記述との間の関連
ビジネス・アプリケーション・サービス (続き)	RESDESC	リソース記述
ビジネス・アプリケーション・サービス (続き)	RESGROUP	リソース・グループ
ビジネス・アプリケーション・サービス (続き)	RESINDSC	リソース・グループとリソース記述との間の関連
ビジネス・アプリケーション・サービス (続き)	RQMINGRP	要求モデル定義とリソース・グループとの間の関連
ビジネス・アプリケーション・サービス (続き)	SESINGRP	セッション定義とリソース・グループとの間の関連
ビジネス・アプリケーション・サービス (続き)	TCLINGRP	トランザクション・クラス定義とリソース・グループとの間の関連
ビジネス・アプリケーション・サービス (続き)	TCPINGRP	TCP/IP サービス定義とリソース・グループとの間の関連
ビジネス・アプリケーション・サービス (続き)	TDQINGRP	一時データ・キュー定義とリソース・グループとの間の関連
ビジネス・アプリケーション・サービス (続き)	TRMINGRP	端末定義とリソース・グループとの間の関連
ビジネス・アプリケーション・サービス (続き)	TRNINGRP	トランザクション定義とリソース・グループとの間の関連
ビジネス・アプリケーション・サービス (続き)	TSMINGRP	一時記憶域モデル定義とリソース・グループとの間の関連
ビジネス・アプリケーション・サービス (続き)	TYPINGRP	入力条件定義とリソース・グループとの間の関連
ビジネス・アプリケーション・サービス (続き)	URIINGRP	汎用リソース ID 定義とリソース・グループの関連

表 1. リソース・テーブル名 (続き)

リソース・タイプ	テーブル名	影響を受ける定義
ビジネス・アプリケーション・サービス (続き)	WEBINGRP	Web サービス定義とリソース・グループとの間の関連

表 1. リソース・テーブル名 (続き)

リソース・タイプ	テーブル名	影響を受ける定義
ビジネス・アプリケーション・サービス (続き)	<ul style="list-style-type: none"> • ATOMDEF • BUNDDEF • CONNDEF • DB2CDEF • DB2EDEF • DB2TDEF • DOCDEF • EJCODEF • EJDJDEF • ENQMDEF • FENODDEF • FEPOODEF • FEPRODEF • FETRGDEF • FILEDEF • FSEGDEF • IPCONDEF • JRNMDEF • LSRDEF • LIBDEF • MAPDEF • MQCONDEF • PARTDEF • PIPEDEF • PROCDEF • PROFDEF • PROGDEF • PRTNDEF • RASGNDEF • RQMDEF • SESSDEF • TCPDEF • TDQDEF • TERMDEF • TRANDEF • TRNCLDEF • TSMDEF • TYPTMDEF • URIMPDEF • WEBSVDEF 	<ul style="list-style-type: none"> • Atom 文書定義 • バンドル定義 • 接続定義 • Db2® 接続定義 • Db2 エントリー定義 • Db2 トランザクション定義 • 文書テンプレート定義 • CorbaServer 定義 • DJAR 定義 • ENQ/DEQ モデル定義 • FEPI ノード定義 • FEPI プール定義 • FEPI プロパティ・セット定義 • FEPI ターゲット定義 • ファイル定義 • OS/2 ファイル・セグメント定義 • IPIC 接続定義 • ジャーナル・モデル定義 • LSR プール定義 • LIBRARY 定義 • Mapset 定義 • IBM MQ 接続定義 • パートナー定義 • パイプライン定義 • プロセス・タイプ定義 • プロファイル定義 • プログラム定義 • 区画セット定義 • リソース割り当て定義 • 要求モデル定義 • セッション定義 • TCP/IP サービス定義 • 一時データ・キュー定義 • 端末定義 • トランザクション定義 • トランザクション・クラス定義 • 一時記憶域モデル定義 • 入力条件定義 • 汎用リソース ID 定義 • Web サービス定義

注: 「グループ内の **CICS** リソース定義」(RESINGRP) ビューに表示される情報は、各リソース・タイプの xxxINGRP リソース・テーブルで個別に見つけることができます。

データ・リポジトリ内のレコードの管理例:

以下の例は、データ・リポジトリ内の定義レコードを作成、削除、リスト、およびダンプする方法と、CICS システムを CICS システム・グループに追加する方法を示しています。

例 1 - レコードの作成:

ワークロード仕様を作成するには、ワークロード管理 (**WLM**) 仕様 (EYUSTARTWLMSPEC.CREATE) WUI ビューまたはバッチ・リポジトリ更新機能を使用できます。

図 1 は、バッチ・リポジトリ更新ジョブを準備する際に情報を指定する方法を示しています。

```
/* after setting context, create workload specification */
CONTEXT EYUPLX01;
CREATE WLMSPEC NAME(EYUWMS01) DESC(Sample description)
    AFFINITY(USERID)
    AFFLIFE(SIGNON)
    MATCH(USERID)
    AORSCOPE(EYUCSG01)
    EVENTNAME(PAGERATE)
    ABENDCRIT(0)
    ABENDTHRESH(0)
    ALGTYPE(Queue);
```

図 1. バッチ・リポジトリ更新機能を使用して WLM 仕様を作成する

例 2 - レコードの削除:

これらの例は、データ・リポジトリからレコードを削除する方法を示しています。

EYUWMS01 というワークロード仕様を削除するには、次のように指定します。

```
CONTEXT EYUPLX01;
REMOVE WLMSPEC NAME(EYUWMS01);
```

EYUPROG1 という BAS PROGDEF を削除するには、次のように指定します。

```
CONTEXT EYUPLX01;
REMOVE PROGDEF NAME(EYUPROG1)
    DEFVER(1);
```

例 3 - リンク・レコードの作成:

この例は、データ・リポジトリ内にリンク・レコードを作成する方法を示しています。

ワークロード仕様と CICS システム・グループの間に WLMSPC01 というリンクを作成するには、次のように指定します。

```
CREATE LNKSWSG SPEC(WLMSPC01)
      GROUP(EYUCSG01)
      FORCE;
```

例 4 - レコードのリスト表示:

この例は、データ・リポジトリ内の選択したレコードをリストする方法を示しています。

名前が「EYU」で始まるすべてのワークロード仕様レコードをリストするには、次のように指定します。

```
CONTEXT EYUPLX01;
LIST WLMSPEC NAME(EYU*);
```

図 2 は、データ・リポジトリからリストするレコードの出力形式を示しています。DUMP 制御ステートメントによって生成される出力は非常に似ていることに注意してください。大きな違いは、CREATE という単語がリソース・テーブル名の前にあることです。OUTPUT コマンドを使用すると、DUMP コマンドは、図 2 に示すレポートと、CICSplex SM バッチ・リポジトリ更新機能への再入力に適した形式で CREATE コマンドを含むデータ・セットの両方を生成します。38 ページの『例 6 - 新しいレコードを作成するための入力としてレコードをダンプ』を参照してください。

CICSplex SM - Repository Process Report

Input DSN: CPSM.BATCH.SAMPLE

Input Member: TEST

```
CONTEXT EYUPLX01;
LIST WLMSPEC NAME(EYU*);
EYUXU0218I CVMBBC Batch LIST request complete - Status(OK)
Last Change: 9/06/93 21:18:25.85895
      WLMSPEC NAME(EYUWMS02)
              DESC(Sample definition 1)
              AFFINITY(USERID)
              AFFLIFE(SIGNON)
              MATCH(USERID)
              AORSCOPE(EYUCSG01)
              EVENTNAME(PAGERATE)
              ABENDCRIT(0)
              ABENDTHRESH(0)
              ALGTYPE(GOAL)
              ;

Last Change: 8/14/93 15:27:05.34023
      WLMSPEC NAME(EYUWMS03)
              DESC(Sample definition 2)
              AFFINITY(GLOBAL)
              AFFLIFE(PERMANENT)
              MATCH(N/A)
              AORSCOPE(EYUCSG01)
              EVENTNAME( )
              ABENDCRIT(0)
              ABENDTHRESH(0)
              ALGTYPE(N/A)
              ;
```

図 2. データ・リポジトリ定義をリストする際に生成される出力例

注: 図 2 の EYUWMS03 レコードでは、EVENTNAME は値のないキーワードの例です。MATCH と ALGTYPE は、値が「N/A」のキーワードの例です。

例 5 - レコードをバックアップとしてダンプ:

この例は、選択したレコードをデータ・リポジトリにバックアップする方法を示しています。

すべてのワークロード管理レコードをデータ・リポジトリにバックアップするには、以下のように指定します。

```
CONTEXT EYUPLX01;
DUMP WLMSPEC NAME(*);
DUMP WLMGROUP NAME(*);
DUMP WLMDEF NAME(*);
DUMP TRANGRP NAME(*);
DUMP DTRINGRP TRANGRP(*);
DUMP WLMINGRP GROUP(*);
DUMP WLMINSPC NAME(*);
```

例 6 - 新しいレコードを作成するための入力としてレコードをダンプ:

OUTPUT コマンドを実行すると、すべての CREATE レコードがデータ・セット EYUIR01.MYOUT1 に書き込まれます。

CICS リソース定義のすべてのバージョンを、新しいレコードを作成するための入力として再送信されるデータ・セットに正しい順序で直接ダンプするには、次のように指定します。

```
OUTPUT DATASET DSNAME(EYUIR01.MYOUT1) INQUOTES(NO);
CONTEXT EYUPLX01;
DUMP CSYSDEF NAME(*);
DUMP CSYSGRP GROUP(*);
DUMP RESGROUP RESGROUP(*);
DUMP RESDESC RESDESC(*);
DUMP RASGNDEF RESASSGN(*);
DUMP RASINDSC RESDESC(*)
RESASSGN(*);
DUMP RESINDSC RESDESC(*)
RESGROUP(*);
DUMP CONNDEF NAME(*);
DUMP SESSDEF NAME(*);
DUMP xxxxDEF NAME(*);
.
.
.
DUMP CONINGRP CONNGROUP(*)
CONNNAME(*);
DUMP SESINGRP SESSGROUP(*)
SESSNAME(*);
DUMP xxxxINGRP xxxxxGROUP(*)
xxxxNAME(*);
.
.
.
DUMP SYSLINK FROMCSYS(*)
TOCSYS(*);
```

ここで、

- xxxxDEF は CICS リソース定義タイプです。例としては CONNDEF、FILEDEF、および MAPDEF があります。文字列 xxxx は 3 文字または 4 文字の文字列文字列を表し、xxxxDEF、xxxxNAME、および xxxxxGROUP で同じです。

- xxxxNAME は、CICS リソース定義の名前であり、xxxINGRP リソース・テーブルで属性として指定されます。
- xxxxGROUP は、リソース定義が属するリソース・グループの名前であり、xxxINGRP リソース・テーブルで属性として指定されます。
- xxxINGRP は、リソース・グループ内の CICS リソース定義のメンバーシップを説明する CICSplex SM ビジネス・アプリケーション・サービスの定義です。例は CONINGRP、FILINGRP、および MAPINGRP です。

注: xxxxDEF リソース・テーブルおよび xxxINGRP リソース・テーブルには、レコードの特定のバージョンを処理できるバージョン属性も含まれています。以下を指定することができます。

- xxxxDEF レコードの DEFVER(n)
- xxxINGRP レコードの xxxxVER(n)

例 7 - CICS システムを CICS システム・グループに追加:

この例は、CICS システムをシステム・グループに追加する方法を示しています。

モニター仕様に関連付けられた CICS システム・グループに CICS システムを追加し、その CICS システムとモニター仕様の間のリンクを作成するには、以下のよう指定します。

```
CONTEXT EYUPLX01;
CREATE CSGLCGCS GROUP(EYUCSG01) CICSNAME(EYUMAS1A);
CREATE LNKSMSCS SPEC(MONSPC01) SYSTEM(EYUMAS1A);
```

バッチ・リポジトリ更新機能は、CICS システムと CICS システム・グループのリンク・レコード (CSGLCGCS) の作成に使用される場合、システム・グループが既に仕様に関連付けられていると、仕様と CICS システムのリンク・レコード (LNKSxSCS) を作成しません。CICS システムを仕様に関連付けるには、LNKSxSCS レコードを明示的に作成する必要があります。

CMAS 構成の管理

「CICSplex SM 操作ビュー」をクリックすると、CMAS 構成の管理に関する情報を入手することができます。

このメニューから、以下の CMAS 構成ビューを開くことができます。

- ローカル CMAS 認知の CMAS
- CMAS 管理の CICSplex
- CICSplex 管理の CMAS
- CMAS から CMAS へのリンク
- CMAS から MAS へのリンク

CMAS 構成定義および関連ビュー

CMAS 構成定義は、CICSplex の保守ポイントとして識別される CMAS に関連付けられたデータ・リポジトリに保管されます。この CMAS は、CICSplex の管理に関与する他のすべての CMAS が構成定義についても認識していることを保証します。

図 3 は、CMAS 構成と、その構成を作成および保守するために使用される WUI ビューの間の関係を示しています。

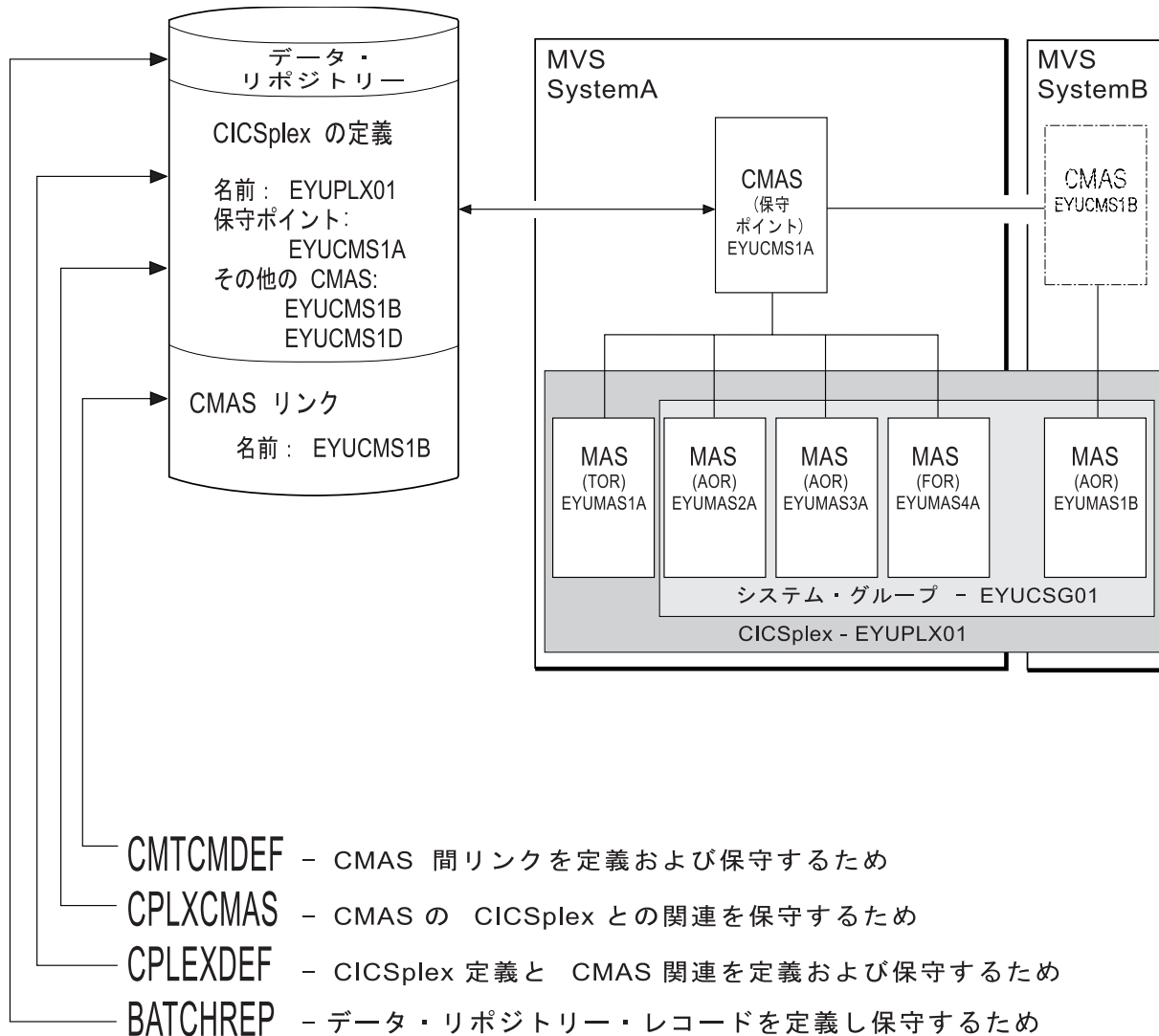


図 3. CMAS 構成の定義

関連する CMAS または CICS システムがアクティブになってから構成定義を管理するために使用できる追加のビューについては、39 ページの『CMAS 構成の管理』に記載されています。

オンライン・ヘルプは、各ビュー、および各ビューのフィールドで使用できます。CMAS 構成ビューには、メインメニューから「管理ビュー」>「**CMAS** 構成管理ビュー」をクリックすることでアクセスできます。これらのビューにアクセスする方法について詳しくは、2 ページの『Web ユーザー・インターフェース管理ビューへのアクセス』および各ビューの詳細な説明を参照してください。

要確認: 特に断りのない限り、構成定義を作成および保守するときに認識されるのは、コンテキスト設定のみです。コンテキストに CMAS を設定する方法について詳しくは、1 ページの『CMAS コンテキスト、コンテキスト、およびスコープの設定』を参照してください。

保守ポイント CMAS の処理

CMAS は、管理する各 CICSplex を構成する CICS システムの単一システム・イメージを提供します。

これを行うために、CMAS はデータ・リポジトリに保管されている CICSplex SM 定義を使用します。作成する各 CMAS ごとに 1 つのデータ・リポジトリがあります。

CICSplex が多数の CICS システムで構成されている場合、あるいは、システムが複数の MVS™ イメージに分散している場合は、複数の CMAS を CICSplex の管理に加えたい場合があります。このような場合、CMAS の 1 つが CICSplex の保守ポイントとして識別されます。保守ポイント CMAS は、CICSplex に関連する管理定義が追加、更新、または変更されたときに、他の CMAS に通知する役割を担います。これにより、CICSplex の管理に関与する各 CMAS のデータ・リポジトリには、同じ情報が確実に格納されます。

管理タスクを実行しようとしたときに保守ポイント CMAS が使用できない場合は、関連する表形式ビューの最上部にその旨のエラーメッセージが表示されます。エラー・メッセージ番号をクリックすると、メッセージの全文が表示され、そこには説明情報と処理を継続する方法に関するヘルプが含まれます。

注: 保守ポイントが使用可能になった場合、保守ポイント CMAS が使用できなかった間に加えられた変更が無視されることに注意してください。

CMAS が CICSplex の保守ポイントでない限り、CMAS と CICSplex の関連を削除できます。

注意:

CICSplex の保守ポイント CMAS は変更しないでください。 1 つの z/OS® イメージから別の z/OS イメージに保守ポイント CMAS を移動する必要がある場合は、既存の CMAS を送信して、その属性を変更せずに新しい z/OS イメージで実行します。

各 CMAS は以下の 4 つの属性によって識別されます。

- ジョブ名 (jobname)
- VTAM® アプリケーション ID (z/OS Communications Server applid)
- CICSplex SM 名 (CICSplex SM name)
- CICS SYSIDNT

CMAS の *jobname* と z/OS Communications Server *applid* は変更することができますが、CICSplex SM 名と CICS SYSIDNT は変更できません。CMAS 用に異なる CICSplex SM 名または CICS SYSIDNT を使用する必要がある場合は、必要な属性で新しい CMAS を作成する必要があります。

保守ポイント CMAS となる別の CMAS を作成する保守ポイント CMAS の CICSplex SM 名または CICS SYSIDNT (あるいはその両方)を変更する必要がある場合は、CICSplex およびそれに関連するすべての定義をデータ・リポジトリから削除し、それらを新しい CMAS に再定義する必要があります (以下の手順を参照)。

1. 「管理ビュー」>「CMAS 構成管理ビュー」>「CICSplex 定義中の CMAS」ビュー (CPLXCMAS オブジェクト) を表示します。「CMAS コンテキスト」フィールドを古い保守ポイント CMAS に設定し、「CICSplex」フィールドを CICSplex の名前に設定し、「最新表示」をクリックします。CICSplex の管理に関与するすべての CMAS のリストが表示されます。
2. CICSplex の管理に関与しているすべての CMAS を正常終了します。以下はその方法です。
 - メインメニューから、「CICSplex SM 操作ビュー」>「ローカル CMAS 認知の CMAS」をクリックします。
 - CMAS 名をクリックして、「CMAS の詳細」ビュー (CMAS オブジェクト) を表示します。
 - 「シャットダウン...(Shutdown...)」ボタンをクリックします。「シャットダウン (Shutdown)」ビューが表示されます。「はい」をクリックして、CMAS をシャットダウンすることを確認します。
 - CICSplex の管理に関与している各 CMAS について、この処理を繰り返します。

あるいは、CICSplex SM API と同等のもの、または COSD トランザクションを使用することもできます。次のステップのデータ・リポジトリの保全性を確保するために、CMAS を正常終了することが不可欠です。

3. CICSplex の管理に関与している各 CMAS のデータ・リポジトリをバックアップします。
4. 現在 CICSplex の管理に関与しているすべての CMAS を開始します。
5. コンテキストを古い保守ポイント CMAS に設定して、バッチ・リポジトリ更新機能の DUMP コマンドを使用して、CICSplex に関連するすべての CICSplex SM 定義をデータ・リポジトリから抽出します。

コマンドの順序については、18 ページの『CICSplex SM 定義の作成および保守』に記載されている DUMP コマンドの説明を参照してください。また、新しい保守ポイント CMAS を作成する際の入力として使用するための、考えられるコマンド出力の編集要件についても説明しています。さらに詳しいガイダンスが必要な場合は、25 ページの『バッチ・リポジトリ更新機能への再入力のためのデータ・セットの作成』も参照してください。

6. WUI サーバーが CICSplex 内の MAS として定義されている場合は、実行したままにします。CICSplex の他のすべての MAS が終了していることを確認します。これは、「CICSplex 認知の MAS」ビュー (MAS オブジェクト) を介して確認でき、CICSplex をビューのコンテキストとスコープとして指定します。
7. CICSplex の管理に関与しているすべての CMAS がアクティブで、直接または間接に保守ポイント CMAS に接続されていることを確認します。これは、コンテキストに古い保守ポイント CMAS を設定して、「CICSplex SM 操作ビュー」>「ローカル CMAS 認知の CMAS」ビュー (CMASLIST オブジェクト) を介して確認できます。
8. コンテキストがまだ古い保守ポイント CMAS に設定されている場合は、「管理ビュー」>「CMAS 構成管理ビュー」>「CICSplex 定義中の CMAS」ビュー (CPLXCMAS オブジェクト) を使用して、すべての非保守ポイント CMAS を CICSplex から完全に削除します。

9. WUI サーバーが CICSplex 内の MAS として定義されていない場合は、「管理ビュー」>「CMAS 構成管理ビュー」>「CICSplex の定義」ビュー (CPLEXDEF オブジェクト) を使用して、データ・リポジトリから CICSplex 定義を削除します。

WUI サーバーが CICSplex 内の MAS である場合は、WUI サーバーを終了します。次に、CICSplex SM API プログラムを使用して、CICSplex の CPLEXDEF 定義に対して REMOVE アクションを発行します。

その CICSplex に関連付けられているトポロジー、ワークロード管理、リアルタイム分析、リソース・モニター、およびビジネス・アプリケーション・サービス定義もすべて、データ・リポジトリから削除されます。

10. CICSplex SM API または COSD トランザクションを使用して、ネットワーク内のすべての CMAS を、それらが CICSplex の管理に関与しているかどうかに関係なく終了します。
11. CICSplex の新しい保守ポイントとして定義される CMAS を開始します。
12. コンテキストを CICSplex の新しい保守ポイントとなる CMAS に設定して、EYU9XDBT ユーティリティーを使用し、新しい保守ポイント CMAS に CICSplex 定義を作成します。EYU9XDBT DEFINE CICSplex コマンドの使用例は、EYUJXBT1 サンプルに含まれています。そのサンプルでは、CICS の領域とグループを定義します。ユーザーに必要なのは CICSplex を定義することだけです。
13. DUMP コマンドの出力を使用して、バッチ・リポジトリ更新機能ジョブを実行依頼し、新しい CMAS データ・リポジトリ上に CICSplex のすべての CICSplex SM 定義を再作成します。バッチ・リポジトリ更新機能からの DUMP 出力を使用して新しい定義を作成する例については、36 ページの『データ・リポジトリ内のレコードの管理例』を参照してください。
14. 保守ポイント CMAS がまだアクティブであれば、ネットワーク内の他のすべての CMAS を開始します。
15. 保守ポイント CMAS に接続する必要がある CMAS ごとに、EYU9XDBT ユーティリティーを使用して CMTCMDEF 定義を作成します。
16. 移動する CICSplex 内、または別の CICSplex 内のいずれかで、新しい保守ポイント CMAS からアクセス可能な WUI サーバーを始動します。
17. CMAS コンテキストを新しい保守ポイント CMAS に設定して、WUI の「管理ビュー」>「CMAS 構成管理ビュー」>「CICSplex の定義」ビュー (CPLEXDEF オブジェクト) を使用し、非保守ポイント CMAS を CICSplex に割り当てます。
18. 保守ポイント CMAS に接続するすべての MAS の EYUPARM を更新し、CMASYSID が指定されている場合には保守ポイントを指すようにします。
19. CICSplex に含まれている MAS を開始します。

CMAS から CMAS へのリンクの管理

ローカル CMAS と他の CMAS との間の直接 LU 6.2 および MRO 通信リンクを管理するには、「管理ビュー」>「CMAS 構成管理ビュー」>「CMAS から CMAS へのリンク定義」をクリックします。

以下のビューを使用すると、リンクを作成、更新、削除することができます。

CMAS から CMAS へのリンク定義の説明の更新

データ・リポジトリ内の「CMAS から CMAS へのリンク定義」の説明を更新するには、以下の手順に従ってください。

1. 「CMAS から CMAS へのリンク定義」ビューでリンク定義を選択し、「更新」アクション・ボタンをクリックします。

「CMAS から CMAS へのリンク定義」の作成パネルが表示され、そこには選択されたリンクの詳細が含まれています。ユーザーが変更できるのは「説明」フィールドのみです。

2. 説明を更新し、「はい」をクリックしてデータ・リポジトリ内のリンク定義を更新します。

CMAS から CMAS へのリンク定義の説明の削除

ローカル CMAS のデータ・リポジトリから CMAS リンク定義を削除するには、この手順に従ってください。

1. 「CMAS から CMAS へのリンク定義」ビューでリンク定義を選択し、「削除」をクリックします。

確認パネルが表示されます。

2. 「はい」をクリックしてデータ・リポジトリからリンク定義を削除するか、「いいえ」をクリックして戻ります。

CMAS の再始動の管理

CICSplex 環境で CMAS を再始動した場合、以前に CMAS が使用していたデータ・スペースがまだ存在するかどうかにによって、再始動がコールド・スタートまたはウォーム・スタートになることがあります。コールド・スタートまたはウォーム・スタートが発生する状況、および両者の違いについて認識しておく必要があります。

CMAS の起動時に、前回 CMAS がアクティブだった時に使用したデータ・スペースが存在しない場合は、起動は CMAS コールド・スタート です。そのようなデータ・スペースが存在する場合は、CMAS ウォーム・スタート です。

注: CMAS の再始動をコールド・スタートにするかウォーム・スタートにするかを指定することはできません。CICS **START** システム初期設定パラメーターは、CICSplex 内の CMAS の再始動には影響しません。

CICSplex SM データ・スペースは CICSplex SM コンポーネントに関連付けられています。CICSplex SM データ・スペースには、以下の 2 つのタイプがあります。

専用データ・スペース

CMAS のみが使用するデータ・スペース

共用データ・スペース

CMAS に接続する MAS とバッチ API アドレス・スペースの両方と共用されるデータ・スペース

表 2. CICSplex SM データ・スペースのタイプおよび関連するコンポーネント： この表は、データ・スペース・タイプ別に、CICSplex SM コンポーネントおよび関連するデータ・スペースをリストしています。この表で、データ・スペース接頭部の *x* は、1 からコンポーネントに割り振られたデータ・スペースの数までの数値です。データ・キャッシュ・マネージャー・コンポーネントには 1 つのデータ・スペースしかありません。データ・スペース名は、すべてその末尾に、CMAS の CICS **SYSIDNT** パラメーターが続きます。

データ・スペースのタイプ	コンポーネント名	データ・スペース接頭部
専用	<ul style="list-style-type: none"> • ビジネス・アプリケーション・サービス • 通信 • モニター・サービス • リアルタイム分析 	<ul style="list-style-type: none"> • BAS<i>x</i> • COM<i>x</i> • MON<i>x</i> • RTA<i>x</i>
共用	<ul style="list-style-type: none"> • データ・キャッシュ・マネージャー • データ・リポジトリ • 管理アプリケーション・システム • キュー・マネージャー • トポロジー・サービス • ワークロード・マネージャー 	<ul style="list-style-type: none"> • DMDS • DAT<i>x</i> • MAS<i>x</i> • QUE<i>x</i> • TOP<i>x</i> • WLM<i>x</i>

CMAS ウォーム・スタートが発生する時

CMAS が終了すると専用データ・スペースは削除されますが、共用データ・スペースは、その共用データ・スペースに何も負荷がかかっていない場合にのみ削除されます。CMAS が再起動されるまでに共用データ・スペースがまだ存在していると、CMAS ウォーム・スタートが発生します。

各 MAS またはバッチ API アドレス・スペースが CMAS に接続するとき、その MAS またはバッチ API アドレス・スペースはその共用データ・スペースにアクセスし、共用データ・スペースに負荷をかけます。

MAS の場合、負荷は MAS が終了するまで、または MAS 内の MAS エージェントが終了するまで続きます。

バッチ API アドレス・スペースの場合は、バッチ API アドレス・スペースが終了するまで、またはアドレス・スペースによって作成されたすべてのスレッドが **EXEC CPSM DISCONNECT** コマンドによって切断されるか、あるいは **EXEC CPSM TERMINATE** コマンドによって終了するまで、負荷は続きます。

CMAS が終了したときに MAS またはバッチ API アドレス・スペースの何らかの負荷が存在すると、共用データ・スペースは削除されません。CMAS が再始動されたときに負荷がまだ残っていると、その再始動はウォーム・スタートとなります。

CMAS コールド・スタートが発生する時

CMAS が終了するときに MAS およびバッチ API アドレス・スペースの負荷が何も存在しない場合、CMAS の終了時に専用データ・スペースと共用データ・スペースの両方が削除されます。以降の CMAS の始動はすべて、アクティブなデータ・スペースが何もないため、コールド・スタートとなります。

CMAS に負荷があっても、それが CMAS が再始動する前に終了していれば、その再始動はコールド・スタートとなります。

コールド・スタートとウォーム・スタートの違い

コールド・スタートの場合、CMAS は専用データ・スペースと共用データ・スペースの両方を作成します。ウォーム・スタートの場合、CMAS は専用データ・スペースを作成し、DMDS、DATx、WLMx、および MASx の各共用データ・スペースを保持しますが、QUEx 共用データ・スペースと TOPx 共用データ・スペースについてはそれらを削除して再作成します。

一般に、CMAS の再始動がコールド・スタートかウォーム・スタートかは関係ありません。

CICSplex SM システム・パラメーター **CACHEDSNUM** は、CICSplex SM CMAS コールド・スタート時にのみ変更できます。

CMAS コールド・スタートの発生方法

CMAS コールド・スタートを実行する必要がある場合は、CMAS を開始する前に CMAS のデータ・スペースが存在しなくなっていることを確認する必要があります。そのため、CMAS、接続された MAS 領域、およびすべてのバッチ API プログラムが終了したあと、LPAR の環境サービス・システム・サービス (ESSS) アドレス・スペース用に MVS 表示ジョブ・コマンドを発行します。このコマンドを使用すると、WLM データ・スペースが削除されたことを確認できます。このコマンドの形式は、次のとおりです。

```
D J,EYUXvrm
```

vrm は、CMAS の CICSplex SM リリース番号です。例えば、CICSplex SM V5R5M0 の場合、コマンドは D J,EYUX550 です。このコマンドは、その LPAR 上の指定された CICSplex SM リリースのデータ・スペースを表示します。

CMAS に存在する負荷を確認するには、CICSplex SM EYU9XENF ユーティリティを実行します。このユーティリティは、ESSS に接続されているすべての CMAS を表示します。ただし、いくつかの CMAS が既に終了している場合もあります。リストされた CMAS ごとに、このユーティリティは、CMAS の共用データ・スペースにまだ接続されている MAS および API アドレス・スペースも表示します。

CICSplex 定義の管理

ローカル CMAS に関連付けられた CICSplex に関する情報を表示するには、「管理ビュー」→「CMAS 構成管理ビュー」→「CICSplex 定義」とクリックします。この表形式ビューに、ローカル CMAS に対して定義されている CICSplex がリストされます。

CICSplex 定義からの CMAS の割り当て解除

CICSplex の管理に關与する CMAS を削除する場合、実行する処理は、削除する CMAS と保守ポイント CMAS との間の通信の状態によって異なります。

割り当て解除アクションを使用する前に、削除する CMAS に接続されている更新された CICSplex にアクティブな MAS がないことを確認してください。

- 削除する CMAS が、現在も今後も、保守ポイント CMAS からアクセス可能である場合は、以下の操作を行う必要があります。
 - 削除する CMAS に関連付けられているチェック・ボックスを選択し、「割り当て解除」をクリックする
 - 「はい」をクリックして、選択した CMAS を CICSplex から削除する

この操作により、選択した CMAS が、保守ポイント CMAS のデータ・リポジトリ内の CICSplex の管理から即時に削除されます。次に、選択された CMAS が現在アクセス可能であれば、この変更を反映するためにデータ・リポジトリが更新されます。アクセス可能でない場合は、選択された CMAS がアクセス可能になるまで、処理は保留状況に置かれます。

- CMAS が、ローカル CMAS から、現在も今後も、アクセス可能でない場合は、以下の操作を行います。
 - 削除する CMAS に関連付けられているチェック・ボックスを選択し、「割り当て解除」をクリックする
 - 「割り当て解除」ビューから、「強制 (FORCE)」チェック・ボックスを選択する
 - 「はい」をクリックして、選択した CMAS を CICSplex から削除する

この操作により、選択した CMAS が、保守ポイント CMAS のデータ・リポジトリ内の CICSplex の管理から削除されます。選択した CMAS にアクセスできないため、選択した CMAS のデータ・リポジトリはこの変更を反映するように変更されません。

注: CICSplex と保守ポイント CMAS の関連は削除できません。別の CMAS を CICSplex の保守ポイント CMAS にする必要があると判断した場合は、CICSplex 全体とその定義をすべて削除し、新しい保守ポイント CMAS で再作成する必要があります。

トポロジー定義の管理

「管理ビュー」>「トポロジー管理ビュー」をクリックしてアクセスする一連のビューを使用して、WUI でトポロジー定義を管理することができます。

覚え書: 特に断りのない限り、トポロジー定義を作成および保守している時に認識されるのはコンテキスト設定のみです。

このセクションの残りの部分では、WUI を使用したトポロジー・タスクの実行方法について説明します。

トポロジー定義

トポロジー定義は、CICSplex の管理に関与するすべての CMAS についてデータ・リポジトリに保管されます。

図 4 は、CICSplex を確立するトポロジー定義と、それらの定義を作成および保守するために使用されるビューとの関係を示しています。データ・リポジトリについて詳しくは、41 ページの『保守ポイント CMAS の処理』を参照してください。

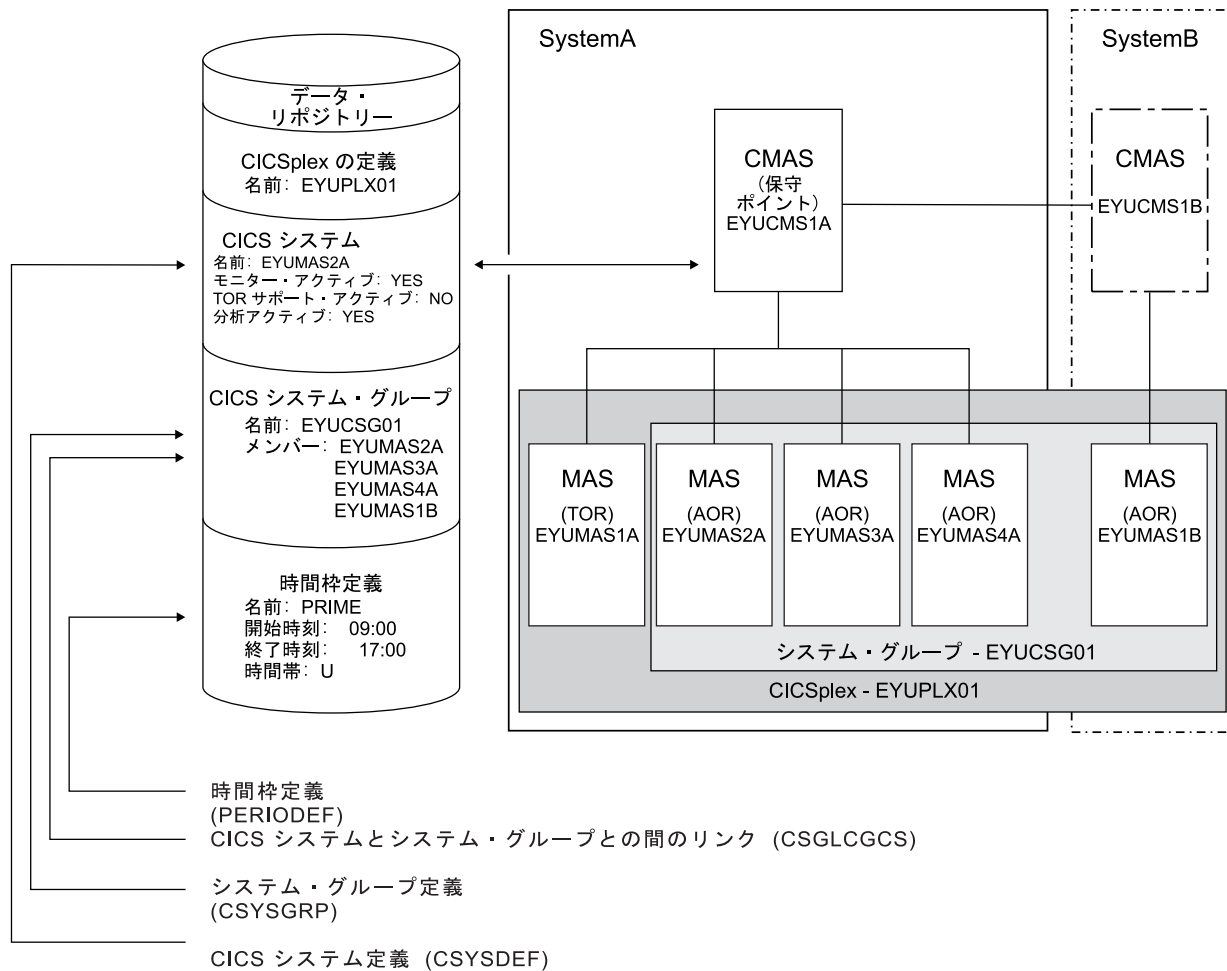


図 4. CICSplex コンポーネントとトポロジー・ビューとの関係

さらに、「**CICSplex SM 操作ビュー**」>「**CICSplex 認知の MAS**」(EYUSTARTMAS) ビューを使用して、アクティブな CICS システムを管理することができます (58 ページの『MAS トポロジー定義の処理』を参照)。

注: 定義を更新するために「**管理ビュー**」>「**RTA システム使用可能性モニター**」>「**CICS システム定義**」ビューおよび「**管理ビュー**」>「**RTA システム使用可能**」

性モニター」>「時間枠定義」ビューを使用すると、現在実行中のシステムとデータ・リポジトリ内の定義の両方に影響を及ぼします。

CICS システム・グループ定義の管理

CICS システム・グループは、CICSplex を構成する CICS システムのサブセットを識別します。各サブセットは、1 つ以上の CICS システム、CICS システム・グループ、またはその両方から成ります。これらを CICS システム・グループのメンバー といいます。

CICS システム定義の作業

CICSplex SM で管理するためには、CICS システムを、CICSplex SM に対して定義されている CICSplex に関連付ける必要があります。

時間枠定義の管理

時間枠定義は、特定の時分範囲を識別します。これらの定義は、特定のアクションがいつ開始し、いつ停止するかを示すために、リソース・モニタリングおよびリアルタイム分析で使用されます。

時間枠定義の作成:

一部の CICSplex SM 機能は、特定時刻に自動的にアクティブにしたり非アクティブにしたりすることができます。

例えば、特定のモニター定義を 10:45 にインストールし、15.00 に削除するよう、CICSplex SM に指示することができます。この開始時刻と終了時刻を、時間枠定義を介して CICSplex SM に定義できます。CICSplex 構成を CICSplex SM に対して最初に定義する際に、標準の時間枠定義を作成しておくことをお勧めします。

この例では、基本シフト、昼食期間、および夜間の標準的時間枠定義の作成方法を示します。

1. PLXPROD1 に対して既に定義されているすべての時間枠定義を表示します。
 - a. メインメニューから「管理ビュー」>「モニター管理ビュー」>「時間枠」をクリックして、「時間枠定義」表形式ビューを開きます。
 - b. コンテキストが PLXPROD1 ではない場合は、「コンテキスト」フィールドに PLXPROD1 を指定して「最新表示」をクリックします。コンテキストは、その後、変更されるまですべての後続のビューとメニューで修正されません。
2. 新規の時間枠定義を作成します。
 - a. 「作成」をクリックして「時間枠定義」作成ビューを開きます。
 - b. 以下の情報を入力します。

名前	PDFPRIME
説明	基本シフト
開始時間	08:30
終了時間	18:00
時間帯	R

時間帯調整係数

0

注: この定義は標準時間帯を対象として作成しているので、時間帯の調整を指定する必要はありません。

- c. 「はい」をクリックして確定します。「時間枠定義」表形式ビューが再表示され、PDFPRIME のエントリーが示されます。
3. 2 つ目の時間枠定義を作成します。
 - a. 「時間枠定義」ビューで PDFPRIME のエントリーを選択し、「作成」をクリックします。時間枠定義の作成パネルが表示され、PDFPRIME 時間枠定義の値が示されます。
 - b. 「名前」フィールドには PDFLUNCH、「開始時刻」フィールドには 12:00、「終了時刻」フィールドには 14:30、「説明」フィールドには「昼食時間」と入力します。2 つの時間帯フィールドは、PDFPRIME の場合と同様です。
 - c. 「はい」をクリックして確定します。「時間枠定義」ビューが再表示されます。
4. ステップ 3 を繰り返して、PDFEVENG という名前で、開始時刻 17:30、終了時刻 23:59 の時間枠定義を作成します。
5. 時間枠定義を更新します。

終了時間が 17:30 になるように PDFPRIME 定義を変更したいとします。「時間枠定義」ビューで PDFPRIME のエントリーを選択し、「更新」をクリックします。「終了時刻」の値を 17:30 で上書きし、「はい」をクリックします。この変更は即時に有効になり、「時間枠定義」ビューが再表示され、更新された定義が示されます。

時間枠定義の作成:

データ・リポジトリ内に時間枠定義を作成するには、以下の手順に従います。

手順

1. 「管理ビュー」 > 「トポロジー管理ビュー」 > 「時間枠」の順にクリックします。「時間枠定義」表形式ビューが表示され、既に定義されている時間枠の要約が示されています。
2. 新しい定義を作成するときに、既存の定義からいくつか情報を使用したい場合は、「レコード (Record)」列でチェック・ボックスを選択して、既存の定義を選択します。
3. 「作成 (Create)」ボタンをクリックします。「時間枠定義」の作成パネルが表示されます。
4. 該当するフィールドに、必要な情報を指定します。各フィールドの説明については、時間枠 - PERIODEF を参照してください。
5. 「はい (Yes)」をクリックします。

タスクの結果

新しい時間枠定義がデータ・リポジトリに追加され、「時間枠定義」パネルが再表示されます。

時間帯コード:

時間帯コードは 1 文字のグリニッジ・コードを表します。これは、24 個の国際標準時間帯に基づいています。各コードは、グリニッジ標準時 (GMT) との時間帯の関係を示します。

表 3 は、時間帯定義で利用できる時間帯コードを示しています。

期間定義の時間帯設定:

期間定義が時間帯 A のものである場合、その期間定義で制御されるすべてのイベントは、期間定義で指定された開始時刻と、エンティティ (CMAS または CICS システム) 内の時間帯、時間帯調整、および夏時間調整指標に基づいて、同じクロック時刻にアクティブになります。

同様に、期間定義で指定された終了時刻と、エンティティ (CMAS または CICS システム) 内の時間帯、時間帯調整、および夏時間調整指標に基づいて、イベントは同じクロック時刻に非アクティブになります。

期間定義が時間帯 A 以外の時間帯のものである場合、その期間定義で制御されるすべてのイベントは、イベントが発生している時間帯に関係なく、厳密に同じリアルタイムにアクティブになります。アクティブ化の時刻は、期間定義の開始時刻、時間帯、および時間帯調整に基づきます。同様に、その期間定義で制御されるイベントは、期間定義の終了時刻、時間帯、および時間帯調整に基づき、同じリアルタイムに非アクティブになります。アクティブ化と非アクティブ化の両方について、指定された時間帯は、夏時間調整が有効かどうかに関係なく、その時間帯の標準時刻を参照します。

時間帯属性とその使用について詳しくは、53 ページの『CICSplex SM の時間帯属性』を参照してください。

表 3. 時間帯コード

コード	GMT オフ セット	説明	コード	GMT オフ セット	説明
A	適用なし	現在の現地時間*	N	-12	(日付変更線の西)
B	+1	中央ヨーロッパ時間	O	-11	ベーリング標準時
C	+2	東ヨーロッパ	P	-10	ハワイ標準時
D	+3	アラビア	Q	-9	アラスカ標準時
E	+4	モーリシャス (アラブ 首長国連邦)	R	-8	太平洋標準時
F	+5	パキスタン	S	-7	アメリカ山岳標準時
G	+6	ベンガル湾	T	-6	中央標準時
H	+7	タイ	U	-5	東部標準時
I	+8	フィリピン	V	-4	大西洋標準時
J	+9	日本	W	-3	グリーンランド
K	+10	東部オーストラリア	X	-2	アゾレス諸島
L	+11	ニューカレドニア	Y	-1	西アフリカ
M	+12	ニュージーランド (日 付変更線の東)	Z	0	グリニッジ標準時 (GMT)

*注: 時間帯 A は、期間定義でのみ指定できます。

CMAS の夏時間調整の変更処理:

CICSplex SM の運用では、夏時間調整に従う場所のサイトでは、影響を受けるすべての CMAS および MAS の夏時間調整調整指標を年に 2 回変更する必要があります。これにより、CMAS がモニター・サービスおよびリアルタイム分析 (RTA) のコンポーネントに対して実行する時間ベースの操作のための時間帯計算で使用される CMAS の時間帯の値が正しいことが保証されます。

このタスクについて

夏時間調整が開始または終了するときは、影響を受ける CMAS の DAYLIGHT 属性に対応する値を指定して、時間の変化を反映させる必要があります。MAS の時間帯属性が INHERIT に設定されている場合は、MAS を変更する必要はありません。その理由は、制御 CMAS の時間帯の値の変更が自動的に MAS に適用されるからです。

しかし、MAS が制御 CMAS から時間帯の値を継承しない場合は、MAS の「夏時間調整が有効」 (DAYLGHTSV) 属性を更新する必要があります。

注: CPLEXDEF、CPLXCMAS、および EPLEXCHG リソース・テーブルの TMEZONE、TMEZONEO、および DAYLGHTSV 属性は、文書化目的のためだけのものです。これらの属性は、時間帯計算には使用されません。

手順

1. CMAS の CMAS 運用リソース・テーブルに「夏時間調整」 (DAYLIGHT) 属性を指定します。更新を行うときに CMAS がアクティブであることを確認してください。

この属性を設定するには、WUI の「**CMAS の詳細**」 (CMAS) ビューを使用するか、CMAS 運用リソース・テーブルで SET 操作を実行します。

表 4. 夏時間調整 (DAYLIGHT) の指定

CMAS の夏時間調整指標	夏時間調整の開始日	夏時間調整の終了日
夏時間調整 (DAYLIGHT)	YES	NO

この操作は、CMAS の現在の実行を更新します。更新は CMAS の CMASDEF 定義リソース・テーブルにも伝搬されるので、更新された DAYLIGHT 値はその後の CMAS の再起動時に有効になります。

2. CMAS から時間帯の値を継承しないすべての MAS に対して、MAS の CSYSDEF 定義リソース・テーブルに「夏時間調整が有効」 (DAYLGHTSV) 属性を指定します。

この属性を設定するには、WUI の「**CICS システム定義**」 (CSYSDEF) ビューを使用するか、CSYSDEF 定義リソース・テーブルで UPDATE 操作を実行します。

表 5. 夏時間調整が有効 (DAYLGHTSV) の指定

MAS の夏時間調整指標	夏時間調整の開始日	夏時間調整の終了日
夏時間調整が有効 (DAYLGHTSV)	YES	NO

この更新は、次に CICS 領域、または CICS 領域内の MAS エージェントが再始動されたときに有効になり、以降のすべての再始動で有効です。

注: CSYSDEF 定義リソース・テーブルを更新するときに MAS がアクティブな場合、更新は MAS の現在の実行には伝搬されません。

3. MAS がアクティブな場合、MAS の MAS 運用リソース・テーブルに「夏時間調整が有効」 (DAYLIGHTSV) 属性を指定することにより、CICS 領域または MAS エージェントを再始動することなく、アクティブな MAS に夏時間調整の更新を適用することができます。

アクティブな MAS を更新するには、WUI の「**CICSplex 認知の MAS**」 (MAS) ビューを使用するか、MAS 運用リソース・テーブルで SET 操作を実行します。この操作は、MAS の現在の実行を更新します。

CICSplex SM の時間帯属性:

CICSplex SM は、タイミング・サービスを支援するために、3 つの属性を使用します。

これらの属性およびそれに選択可能な値は、次のとおりです。

時間帯

B から Z まで

時間帯オフセット (Time Zone Offset)

0 分から 59 分まで

夏時間調整が有効

YES または NO

これらの属性は、以下の点で CICSplex SM を支援するために使用します。

- CICSplex 内部の相対時間値を標準化する。
- CICSplex SM のモニター間隔を制御する。
- 時間に応じて開始されるモニター定義、分析定義、および状況定義をスケジュールする。
- システム使用可能性モニター (SAM) がアクティブになる時間をスケジュールする。

これらの属性は、以下の CICSplex SM 定義に指定されます。

CMAS

CICSplex SM EYU9XDUT ユーティリティーを使用。

CICSplex

「**CICSplex の定義 (CICSplex definitions)**」 (CPLEXDEF) ビューを使用。

CICS システム

「**CICS システム定義 (CICS system definitions)**」 (CSYSDEF) ビューを使用。

時間帯

「**時間帯 (Time period)**」 (PERIODEF) ビューを使用。

属性定義:

3 つの属性がタイミング・サービスを支援します。

これらの属性は次のように定義されます。

時間帯

CICSplex SM は、国際標準の時間帯を使用しています。これは世界中をそれぞれ 60 分の時間で区切られた 24 個のゾーンから構成されるものです。これらのゾーンの基準はグリニッジ子午線で、グリニッジ子午線の時間はグリニッジ標準時 (GMT) と呼ばれます。

グリニッジ標準時を含む区域は時間帯 Z と呼ばれます。この東隣の時間帯は GMT よりも 60 分 (1 時間) 早く、時間帯 B と呼ばれます。GMT が正午のとき、時間帯 B の時刻は 13:00 です。さらにその東隣の時間帯は GMT よりも 120 分 (2 時間) 早く、時間帯 C と呼ばれます。時間帯が東へ進むたびに時間は 1 時間ずつ早まり、時間帯 M では現地時間が GMT よりも 12 時間先行します。時間帯 M は国際日付変更線のところにあります。

その東側の時間帯は時間帯 N で、(時間帯 M と同様に) GMT とは 12 時間の差があります。ただし、ここは国際日付変更線をはさんで時間帯 M の反対側になるので、GMT より 12 時間 遅くなります。同様にして、さらにその東隣の時間帯を時間帯 O といい、GMT より 11 時間遅れます。GMT が正午のとき、時間帯 O の時刻は 01:00 です。GMT よりも 1 時間遅い時間帯 Y までは、時間帯が東へ進むごとに、時刻を 1 時間ずつ差し引きます。

時間帯 A がないことに注意してください。

時間帯の調整

世界の中の一部の場所では、GMT との差が 60 分の倍数ではない時間を採用している場所があります。このような状態では、CICSplex SM は時間帯の調整を使用します。CICSplex SM にこのような場所の時間帯を定義するには、そこよりも 1 つ小さい 60 分の倍数の時間帯を使用して、60 分の倍数とその地域の時間の差を時間帯の調整として分単位で入力します。例えば、イングランドのロンドンの時刻が 13:00 (これは GMT、つまり時間帯 Z です) のとき、日本の東京 (時間帯 J) は 22:00 で、オーストラリアのアデレードでは 22:30 です。CICSplex SM にアデレードの場所を定義するには、その時間帯を時間帯 J と指定し、時間帯調整を (アデレードの時刻が、西隣の時間帯に 30 分加えた ものであることを示すために) 30 と指定します。

夏時間調整

世界の中の一部の地域では、GMT からの時間的なオフセットを年に 2 回変更します。通常、最初の変更として、3 月か 4 月に、地方標準時 (LST) が 1 時間早められ、地方夏時間 (LDST) になります。時間帯 Z から M までの場所では、LDST は GMT から 1 時間遠ざかります。時間帯 N から Y までの場所では、LDST は GMT に 1 時間近づきます。通常 10 月か 11 月に、LDST を使用する場所は LST に戻ります。するとこれらの場所の時刻は、GMT との標準時差に戻ります。

CICSplex SM を運用する場合、LDST を使用する場所のサイトでは、すべての CMAS と MAS を年に 2 回変更する必要があります。このことは、LDST が有効になっているときは夏時間調整を YES と指定し、LST が有効になっているときは NO と指定することを意味します。夏時間調整指標が NO の場合、CICSplex SM は、その時間帯のエンティティーが GMT から標準の時間数だけの時差があるとみなします。夏時間調整指標が YES の場合、CICSplex SM は、時間帯 Z から M ではそのエンティティーが GMT より (標準時よりも) さらに 1 時間遠ざかり、時間帯 N から Y では GMT に 1 時間近づくとみなします。

CMAS の LDST を変更するには、CMAS 運用リソース・テーブルの **DAYLIGHT** 属性を設定します。この変更により、CMAS の現在の実行が更新され、CMAS の CMASDEF 定義リソース・テーブルに伝搬され、以降の CMAS の再始動時に LDST の変更が有効になります。

MAS が制御 CMAS から時間帯属性を継承する場合、すなわち、MAS の CSYSDEF 定義リソース・テーブルの **TMEZONE**、**TMEZONEO**、および **DAYLIGHTSV** 属性が INHERIT を指定する場合、MAS が接続されている CMAS の LDST が更新されると、MAS の LDST が自動的に更新されます。それ以外の場合は、ユーザーが MAS の LDST を更新する必要があります。

MAS の LDST を変更するには、CSYSDEF 定義リソース・テーブルの **DAYLIGHTSV** 属性を設定します。この変更は、次に CICS 領域、または CICS 領域内の MAS エージェントが再始動されたときに有効になり、以降のすべての再始動について有効です。CSYSDEF 定義リソース・テーブルの更新時に MAS がアクティブである場合、CSYSDEF の変更はそのアクティブな MAS では有効ではありません。再始動せずにアクティブな MAS の LDST を変更したい場合は、MAS 運用リソース・テーブルで **DAYLIGHTSV** 属性を設定する必要があります。

詳しくは、52 ページの『CMAS の夏時間調整の変更処理』を参照してください。

注: LDST に合わせてシステム時刻を変更した後、すべての CMAS を変更同期させる必要があります。CICS システム初期設定パラメーター **AUTORESETTIME** がデフォルト値の IMMEDIATE をとるか、あるいは、IMMEDIATE に設定されている場合、次のタスクが CMAS に接続されると同期が自動的に行われます。それ以外の場合は、CMAS で **PERFORM RESETTIME** コマンドを発行する必要があります。**AUTORESETTIME** パラメーターの詳細については、を参照してください。

属性の使用:

以下の定義を指定するときに、タイミング・サービスを支援する 3 つの属性を使用します。

CMAS

一貫性のあるタイミング・サービスが提供されるようにするために、CICSplex SM では、CMAS 内の属性設定がその CMAS の実行場所で有効な時刻を正確に反映していることが必要になります。

CMAS のこれらの属性には、以下の 3 つの使用法があります。

- CICSplex 全体のタイム・サービスを調整するために、CICSplex SM ではすべての時間を GMT に基づいて設定します。CMAS が開始されると、CICSplex SM は、GMT 時間に設定するために標準ハードウェア・クロックを変更する方法を計算します。これは、MVS CVT データ・フィールド CVTTZ の設定に応じて、以下の 2 つの方法のいずれかで行われます。
 - CVTTZ データ・フィールドがゼロ以外の場合、CICSplex SM はハードウェア・クロック値が GMT であると見なし、値を変更しません。
 - CVTTZ データ・フィールドがゼロの場合、CICSplex SM は時間帯、時間帯調整、および夏時間調整指標を CMAS で使用し、ハードウェア・クロックを変更するために必要な値を計算します。
- CVTTZ データ・フィールドの内容は、SYS1.PARMLIB(CLOCKxx) メンバーに基づいていることに注意してください。
- シスプレックス・タイマーが使用中であることを CLOCKxx メンバーが示している場合は、シスプレックス・タイマーの内容に基づいて CVTTZ データ・フィールドが設定されます。
 - CLOCKxx メンバーが、シスプレックス・タイマーが使用されていないことを示している場合、CVTTZ データ・フィールドは、CLOCKxx メンバーの TIMEZONE オペランドの内容に基づいて設定されます。
- 分析定義または状況定義が、CMAS によって制御される分析点仕様内にインストールされ、その定義で時間指定インストールがスケジュールされている場合 (定義が期間定義に関連付けられているため)、CMAS の時間帯、時間帯調整、および夏時間調整指標によって、定義がインストールされるタイミングが決定されます (ただし、期間定義によってインストール時間が現地時間であることが示されている場合)。
 - CICS システムが CICSplex SM に対して定義されている場合、時間帯、時間帯調整、および夏時間調整指標は、明示的に設定することも、CICS システムが接続されている CMAS から継承することもできます。

CICSplex

CICSplex には多くの異なる時間帯が含まれている場合があるため、CICSplex 内の整合性を確保するために、CICSplex を表す 1 つの属性セットを選択する必要があります。選択された属性が、CICSplex の保守ポイント CMAS、またはその他の CMAS の属性と一致する必要はありません。

CICSplex の時間帯属性には次の 1 つの使用方法があります。

- CICSplex がアクティブになり、モニターがアクティブ化されると、モニター間隔が CICSplex 定義内の設定に基づいて決定されます。このモニター間隔は、CICS システムから収集されたモニター・データをリセットするために使用されます。CICSplex 内の各 CMAS には、それに接続された CICS システムのモニター・データが保管されるため、CICSplex 内のすべてのモニター・データの整合性が保たれるように、CMAS の場所に関係なく、リセットはすべての CMAS で正確に同じリアルタイムで行われます。リセットの時間を計算するために、CICSplex のタイム・ゾーン属性が使用されます。

CICS システム

CMAS の属性要件とは異なり、CICS システムの時間帯属性は、CICS システムが実際に実行される場所とは異なる場所を反映するように設定できます。例えば、システムがある 1 つの時間帯で実行されるものの、別の時間帯のオペレーターによって主に使用される場合、システムが実行される時間帯に一致させるのではなく、オペレーターの時間帯に一致するように属性を設定することができます。CICSplex SM は、CICS システムの実際の属性または論理属性のいずれかをサポートします。

CICS システムのこれらの属性には、以下の 3 つの使用法があります。

- モニター定義が CICS システム内のモニター仕様内にインストールされ、そのモニター定義で時間指定インストールがスケジュールされている場合 (モニター定義が期間定義に関連付けられているため)、CICS システムの時間帯、時間帯調整、および夏時間調整指標を使用して、定義をインストールするタイミングが決定されます (ただし、期間定義によってインストール時間が現地時間であることが示されている場合)。
- 分析定義または状況定義が、CICS システム内の分析仕様内にインストールされ、その分析定義で時間指定インストールがスケジュールされている場合 (定義が期間定義に関連付けられているため)、CICS システムの時間帯、時間帯調整、および夏時間調整指標を使用して、定義をインストールするタイミングが決定されます (ただし、期間定義によってインストール時間が現地時間であることが示されている場合)。
- CICS システムでシステム使用可能性モニター (SAM) がアクティブな場合 (CICS システム定義に 1 次 CMAS とアクティブ期間の両方が含まれている場合) は、CICS システムの時間帯、時間帯調整、および夏時間調整指標を使用して、システムをアクティブにするタイミングが決定されます (ただし、期間定義によって時間枠が現地時間であることが示されている場合)。

期間定義

期間定義は、時間指定されたイベントをスケジュールするために CICSplex SM によって使用されます。期間定義は、開始時刻、終了時刻、および時間帯の属性として定義されます。期間定義は、時間帯と時間帯調整の 2 つの時間帯属性のみを使用します。

期間定義には以下の 3 つの使用法があります。

- システム可用性モニター (SAM) 用。この使用法は、1 次 CMAS と期間定義の両方が CICS システム定義に関連付けられている場合に用いられます。

注: 「期間定義名」が「管理ビュー」 > 「システム可用性モニター管理ビュー (System availability monitoring administration views)」 > 「CICS システム定義」詳細ビュー (エンド・ユーザー・インターフェースの CICSSYS) に指定されていない場合、SAM はその CICS システムでアクティブ化されません。

- モニター定義の時間指定されたインストール用。この使用法は、モニター定義がモニター・グループに追加され、そのモニター・グループが CICS システムにインストールされる際に、期間定義がモニター定義に関連付けられている場合に用いられます。

- 分析定義および状況定義の時間指定されたインストール用。この使用法は、分析定義または状況定義が分析グループに追加され、その分析グループが CICS システムまたは分析点仕様にインストールされる際に、期間定義が当該定義に関連付けられている場合に用いられます。

期間定義では、以下に示すとおり、時間帯属性の他の使用法との違いが 2 つあります。

- 時間帯 A が期間定義で受け入れられます。時間帯 A の使用は、期間定義に関連した時間が、エンティティ (CMAS または CICS システム) の現地時間を反映することを示します。
- 期間定義が A の時間帯で定義されている場合、期間定義で指定されている時間帯調整は無視されます。

期間定義が時間帯 A のものである場合、その期間定義で制御されるすべてのイベントは、期間定義で指定された開始時刻と、エンティティ (CMAS または CICS システム) 内の時間帯、時間帯調整、および夏時間調整指標に基づいて、同じクロック 時刻にアクティブになります。同様に、期間定義で指定された終了時刻と、エンティティ (CMAS または CICS システム) 内の時間帯、時間帯調整、および夏時間調整指標に基づいて、イベントは同じクロック 時刻に非アクティブになります。

期間定義が時間帯 A 以外の時間帯のものである場合、その期間定義で制御されるすべてのイベントは、イベントが発生している時間帯に関係なく、厳密に同じリアル タイムにアクティブになります。アクティブ化の時刻は、期間定義の開始時刻、時間帯、および時間帯調整に基づきます。同様に、その期間定義で制御されるイベントは、期間定義の終了時刻、時間帯、および時間帯調整に基づき、同じリアル タイムに非アクティブになります。アクティブ化と非アクティブ化の両方について、指定された時間帯は、夏時間調整が有効かどうかに関係なく、その時間帯 (LST) の標準時刻を参照します。

MAS トポロジー定義の処理

このセクションでは、「CICSplex 認知の MAS」 (EYUSTARTMAS) ビューを使用してアクティブな CICS システムに関する情報を入手する方法について説明します。

アクティブな MAS の停止

アクティブな CICS システム内で MAS エージェント・コードを停止するには、以下の手順に従ってください。

1. 「CICSplex SM 操作ビュー」 > 「CICSplex 認知の MAS」の順にクリックします。

これにより、「CICSplex 認知の MAS」表形式ビューが開きます。このビューでは、コンテキストとして識別された CICSplex で認識されている CICS システムに関する情報が表示されます。

2. リストされている CICS システムを 1 つ以上選択します。
3. 「停止」をクリックし、確認画面で「はい」をクリックしてアクションを確認します。

注: CICS システムの「ワークロード・マネージャー状況」フィールドに「はい (YES)」が含まれている場合、MAS エージェント・コードを停止できない場合があります。CICS システムが要求側領域として機能している場合は、MAS エージェント・コードを停止することはできません。(どの CICS システムが要求側領域として機能しているかを判別するには、「アクティブ・ワークロード・ビュー」>「アクティブ・ワークロード内のターゲット領域 (Target regions in an active workload)」をクリックします。)

このタイプの CICS システムで MAS エージェント・コードを停止する場合は、最初に動的ルーティング・プログラムを EYU9XLOP 以外のものに変更する必要があります。(「CICS 領域」ビューを使用して、動的ルーティング・プログラムを変更することができます。)

アクティブな MAS の更新

アクティブな MAS を更新するには、以下の手順に従ってください。

CICS システム定義に対して行った変更はすべて、即時に有効となります。これらの変更内容は、CICS システムがアクティブである限り、あるいはユーザーが再度変更を行うまで、有効なままになります。

注: ワークロード管理、リアルタイム分析、あるいはリソース・モニタリングをパネルからオンにした場合、そのステータスは、コンポーネントが完全に初期化されるまでアクティブとは表示されません。

1. 「CICSplex SM 操作ビュー」>「CICSplex 認知の MAS」の順にクリックします。

これにより、「CICSplex 認知の MAS」(MAS) ビューが開きます。MAS ビューでは、コンテキストとして識別された CICSplex で認識されている CICS システムに関する情報が表示されます。

2. リストされているアクティブな CICS システムのいずれかの「CICS システム名」列をクリックして、「CICSplex 認知の MAS」詳細ビューを開きます。このビューでは、選択されたアクティブな CICS システムのモニター状況、RTA 状況および WLM 状況を更新することができます。また、時間帯属性とセキュリティ属性を変更することもできます。

時間帯、時間帯オフセット、および夏時間属性について詳しくは、53 ページの『CICSplex SM の時間帯属性』の CICSplex SM 時間帯属性の説明を参照してください。

3. アクティブな CICS システムに対して行った変更を適用するには、「変更の適用」をクリックします。変更内容は即時に有効となり、ユーザーがそれを再度変更するまで、あるいは、CICS システムが停止するまで有効なままになります。

CMAS での NetView への総称アラートの送信の有効化

このタスク例は、CMAS 定義の更新を必要とする、より大規模なリアルタイム分析タスクの一部です。この例では、そのタスクの CMAS に関連した部分だけを示します。

CICSplex SM で SNA 総称アラートを NetView® に送信したい場合は、関連 CMAS で NetView プログラム間インターフェース (PPI) をアクティブにする必要

があります。(これは、NetView インスタンスと同じ MVS イメージ上の CMAS です。) この例では、指定された、CMSSYS1 という CMAS で NetView PPI をアクティブにする方法を示します。

1. 最初に、コンテキストが正しいことを確認します (この例では CMSSYS1)。正しくない場合は、現行ビューでコンテキスト・フィールドを CMSSYS1 に変更し、「設定」をクリックします。コンテキストは、その後、変更されるまですべての後続のビューとメニューで修正されます。
2. CMAS 定義を表示します。
 - a. メインメニューから、「CICSplex SM 操作ビュー」 → 「ローカル CMAS 認知の CMAS」とクリックして、ローカル CMAS 認知の CMAS」表形式ビューを開きます。
 - b. コンテキストが CMSSYS1, ではない場合は、「コンテキスト」フィールドに CMSSYS1 を指定して「最新表示」をクリックします。コンテキストは、その後、変更されるまですべての後続のビューとメニューで修正されます。
 - c. CMSSYS1 のエントリーを見つけ、「アクセスのタイプ」フィールドで「ローカル」をクリックして「CMAS の詳細」ビューを開きます。
3. CMAS 定義を更新します。

「CMAS の詳細」ビューで「使用 Netview PPI」フィールドを見つけ、エントリーを「いいえ (No)」から「はい (Yes)」に変更します。ビューの最下部までスクロールし、「変更の適用」をクリックします。ビューが再表示され、更新された値が示されます。これで NetView PPI インターフェースがアクティブになりました。

CICSplex SM 操作の管理

CICSplex SM 操作ビューでは、企業での CICS リソースの日常的な操作と管理をサポートする Web ユーザー・インターフェース (WUI) ビューが記述されています。

対象とする読者は、CICS リソースを管理するための CICS 提供のトランザクション (CICS Master Terminal Transaction (CEMT) など) を実行する CICS オペレーターです。

CICSplex SM ビューには、現在で CICS システムに提供されている機能が反映されます。言い換えれば、オペレーターは日常のシステム・アクティビティーに対する基本アプローチを変更しなくても、基本的には現在と同じ方法で作業することができます。その一方、CICSplex SM ビューの最大の利点は、これらのビューを使用して、複数の CICS システムとそれぞれのリソースの運用をそれが 1 つの CICS システムであるかのように単一セッションから制御できることです。

CICS リソースの制御

CICSplex SM 操作ビューは、CICSplex 内のすべての CICS リソースの単一システム・イメージを提供します。

操作ビューを使用すると、次のようなタスクを実行できます。

- リソースの有効化と無効化
- リソースのオープンとクローズ
- リソースの獲得と解放
- リソースをサービス内またはサービス外に配置
- リソースに関連するタスクのページ
- インストール先の CICS システムからのリソース定義の廃棄
- さまざまなリソース属性の変更
- CICS システムのシャットダウン

CICS リリースでの可用性

一部のビュー、アクション・コマンド、またはフィールドは、サポートされているすべての CICS リリースで使用可能なわけではありません。サポートされるすべての CICS リリースでビューが使用できないわけではない場合、そのビュー・セットの説明の「可用性」セクションは、そのビュー・セットが一般出荷可能な CICS リリースを特定します。可用性の情報は、ビュー、アクション、およびフィールドに関するオンライン・ヘルプでも提供しています。ビューを表示するときに、そのビューを使用できない CICS リリースを実行中のシステムが CICSplex に組み込まれている場合、そのビューに、これらのシステムは表示されません。

操作タスクの例

いくつかの典型的な操作タスクについてのステップバイステップの例は、WUI 操作ビューをより効果的に使用するのに役立ちます。

どの操作タスクでも、作業している CICS システムのスコープを認識しておく必要があります。スコープが単一の CICS システムである場合、CICSplex SM から取得するデータはすべてその単一システムに関連します。スコープが CICS システムのグループである場合、そのデータはグループ内のすべてのシステムに関連します。スコープが CICSplex である場合、データは、その CICSplex 内のすべてのシステムに関連します。これらのすべての例では、初期スコープは CICSplex PLXPROD1 です。

トランザクションに関連付けられているタスクの数を検出

この例では、CICSplex PLXPROD1 の Sale サンプル・アプリケーションのトランザクションに関連付けられているタスクの数を検出する方法を示します。

前提条件: この例に従うには、CICS システムに Sale サンプル・アプリケーションをインストールする必要があります。詳細については、Sale 実例アプリケーションを参照してください。使用中の CICS システムの 1 つ以上の端末でトランザクション PAY1 を実行します。

この例は、CICSplex PLXPROD1 全体でトランザクション PAY1 に関連付けられているタスクの数を知りたい場合を想定しています。

1. 現行コンテキストが PLXPROD1 でない場合、メインメニューで「コンテキスト」フィールドに PLXPROD1 を設定します。

2. メインメニューで、「アクティブ・タスク」をクリックして「アクティブ・タスク」表形式ビュー (TASK オブジェクト) を表示します。このビューには、CICSplex PLXPROD1 のすべてのアクティブ・タスクが表示されます。
3. 「トランザクション」フィールドに「PAY1」と入力し、「最新表示」をクリックします。「アクティブ・タスク」表形式ビューが再表示され、トランザクション ID PAY1 に関連付けられているタスクだけが示されます。ディスプレイの上部と下部にあるメッセージには、アクティブなタスクの数とページ数が表示されます。
4. 「タスク ID」列の上部にある「要約」アイコンをクリックします。「アクティブ・タスク」表形式ビューが再表示され、要約されたタスクのデータが表示されます。「レコード・カウント」フィールドには、CICSplex 全体で PAY1 に関連付けられているタスクの数が表示されます。

トランザクションに関連するタスクの識別

この例では、CICSplex PLXPROD1 の Sale サンプル・アプリケーションのトランザクションのインスタンスに関連するタスクを識別する方法を示します。

前提条件: この例に従うには、CICS システムに Sale サンプル・アプリケーションをインストールする必要があります。詳細については、Sale 実例アプリケーションを参照してください。使用中の CICS システムの 1 つ以上の端末でトランザクション PAY1 を実行します。

1. 現行コンテキストが PLXPROD1 でない場合、メインメニューで「コンテキスト」フィールドに PLXPROD1 を入力し、「最新表示」をクリックします。
2. メインメニューで、「アクティブ・タスク」をクリックします。現行スコープ内のすべてのタスクの状況を示す「アクティブ・タスク」表形式ビューが表示されます。
3. CICS システム CICSPA01 のトランザクション PAY1 に関心があると想定します。これらの値を「トランザクション」フィールドと「スコープ」フィールドに入力し、「最新表示」をクリックします。
4. 「タスク ID」をクリックして「アクティブ・タスク」の詳細ビューを表示します。
5. ディスプレイを「ローカル作業単位 (UOW) ID」フィールドまでスクロールダウンし、その値をメモまたはコピーします。値の例としては、8286F48104090001 に似たものとなります。
6. メインメニューから、「CICS 操作ビュー」 > 「作業単位 (UOW) 操作ビュー」 > 「作業単位」をクリックします。「作業単位」表形式ビューが表示されます。
7. UOW ID を「ローカル作業単位 (UOW) ID」フィールドに入力するか貼り付けて、「最新表示」をクリックします。「ローカル作業単位 (UOW) ID」列の上部にある「要約」アイコンをクリックすることにより「作業単位」表形式ビューを要約することができますが、通常、このビューは多数のページをカバーするため、「ローカル作業単位 (UOW) ID」フィールドを使用するほうがより速くできます。

CICS システムでモニタリングがアクティブでないと、ネットワークの作業単位 ID が使用できないことに注意してください。

一連のユーザー ID へのタスクの関連付け

この例では、特定のユーザー ID に関連付けられたタスクを識別する方法を示します。

1. 現行コンテキストが PLXPROD1 でない場合、メインメニューで「コンテキスト」フィールドに PLXPROD1 を入力し、「最新表示」をクリックします。
2. メインメニューで、「アクティブ・タスク」をクリックします。現行スコープ内のすべてのタスクの状況を示す「アクティブ・タスク」表形式ビューが表示されます。
3. ユーザー ID ごとにタスクのリストを要約するには、「ユーザー ID」列の上部にある「要約」アイコンをクリックします。ユーザー ID ごとに要約されたタスクのデータを示す「アクティブ・タスク」表形式ビューが表示されます。「レコード・カウント」列には、各ユーザー ID に関連付けられているタスクの数が表示されます。
4. 1 つのユーザー ID に関連付けられたタスクのリストを表示するには、そのユーザーのレコード・カウントをクリックします。「アクティブ・タスク」表形式ビューが再表示され、そのユーザーに関連付けられているタスクだけが示されます。

端末の状況の確認

この例では、端末の状況を確認できる方法をいくつか示します。

現行コンテキスト内のすべての端末に関する情報を表示するには、次のようにします。

- メインメニューから、「コンテキスト」フィールドに PLZPROD1 を設定し、必要に応じて「最新表示」をクリックします。
- 「端末」をクリックして、「端末」表形式ビュー (TERMNL オブジェクト) を表示します。
- 「端末 ID」フィールドに端末 ID を入力し、「最新表示」をクリックします。「端末」表形式ビューが再表示され、ログオンしている各 CICS システムの各端末の状況が示されます。1 台の端末が 3 つの CICS システムにログオンしている場合、「端末」表形式ビューには 3 つのエントリーが表示されます。
- 端末 ID は不明だが、特定のユーザー ID に関連する端末が知りたい場合は、「ユーザー ID」列の上部にある「要約」アイコンをクリックします。「レコード・カウント」フィールドをクリックすると、特定のユーザーに関連付けられた端末を示す「端末」表形式ビューが再表示されます。

通信リンクの状況の確認

この例では、通信リンクの状況を確認する方法を示します。

1. 現行コンテキストが PLXPROD1 でない場合、メインメニューから「コンテキスト」フィールドに PLXPROD1 を入力し、「最新表示」をクリックします。
2. メインメニューで、「ISC/MRO 接続」をクリックします。このビューには、現行スコープ内のすべての接続が表示されます。
3. 「接続 ID」フィールドと「ネット名」フィールドを使用して、表示を絞り込みます。

4. 1 つの接続の詳細を表示するには、「接続 ID」フィールドをクリックして詳細ビューを表示します。

ファイルが使用可能な CICS システムの検出

この例は、特定のファイルを使用できる CICS システムを識別する方法を示します。

1. 現行コンテキストが PLXPROD1 でない場合、メインメニューから「コンテキスト」フィールドに PLXPROD1 を入力し、「最新表示」をクリックします。
2. ローカル・ファイルのリストを表示するには、メインメニューから「ローカル・ファイル」をクリックします。「ローカル・ファイル」表形式ビュー (LOCFILE オブジェクト) が表示されます。
3. 「ファイル ID」、「使用可能化状況」および「オープン状況」フィールドを使用して、表示を絞り込みます。特定のファイル名を使用する必要はありません。「PAY*」といったワイルドカード文字を持つ総称名を使用して、名前の最初の 3 文字が「PAY」であるすべてのファイルを表示することができます。

ローカル・ファイル名とリモート・ファイル名の相互関係

この例では、特定のファイルがローカル CICS システムで認識されている名前と、リモート CICS システムで認識されている名前とを関連付ける方法を示します。

1. 現行コンテキストが PLXPROD1 でない場合、メインメニューから「コンテキスト」フィールドに PLXPROD1 を入力し、「最新表示」をクリックします。
2. リモート・ファイル定義のリストを表示するには、メインメニューから「リモート・ファイル」をクリックします。「リモート・ファイル」表形式ビュー (REMFILE オブジェクト) が表示されます。

この「リモート・ファイル」ビューから、以下のようないくつかの情報を得ることができます。

- CICSplex PLXPROD1 にインストールされているリモート・ファイル定義の数、認識されているこれらのファイルの名前 (例えばPAYFILER)、リモート・ファイル定義がインストールされているシステム (CICSPA01 および CICS PAY02 など) を確認できます。
 - 「リモート・ファイル名」フィールドには、これらがローカル・ファイルである CICS システムでそれらのファイルが認識される名前が含まれます (例えば、両方のファイルは PAYFILE1 と認識されている)。
 - これらのファイルがローカル・ファイルと認識されている CICS システム間の接続の名前 (AF01 など)。(この後者の値は「リモート・システム名」として参照されますが、実際には接続 ID です。)
3. 接続名 AF01 を使用して、リモート CICS システムの名前を検出します。
 - メインメニューで、「ISC と MRO の接続」をクリックして、「接続」表形式ビューを表示します。
 - 必要に応じて、「接続 ID」フィールドに AF01 と入力し、「最新表示」をクリックすることにより、表示されたデータを絞り込むことができます。
 - 接続のリモート・システム名 (例えば CICS AF01) が「ネット名」フィールドに示されていることに注意してください。
 4. 次のステップでは、リモート CICS システムの PAYFILE1 というローカル・ファイルをすべて調べます。

- スコープを変更して、CICSplex SM から戻るすべてのデータが CICS SAF01 にのみ関連するようにします。これを行うには、メインメニューから「スコープ」フィールドに CICS SAF01 と入力し、「最新表示」をクリックします。
- メインメニューで、「ローカル・ファイル」をクリックします。
- 「ローカル・ファイル」表形式ビューで、「ファイル ID」フィールドに PAYFILE1 を入力し、「最新表示」をクリックします。
- 「ローカル・ファイル」表形式ビューが再表示され、CICS システム CICS SAF01 内の PAYFILE1 が表示されます。

指定された CICS システムで、プログラムの発生元のデータ・セットを検出

この例は、プログラムの特定のインスタンスが発生したデータ・セットを特定する方法を示しています。

この例は、プログラムの特定のインスタンスが発生したデータ・セットを特定する方法を示しています。

1. 現行コンテキストが PLXPROD1 でない場合、メインメニューから「コンテキスト」フィールドに PLXPROD1 を入力し、「最新表示」をクリックします。
2. 指定された CICS システムのプログラムに関する詳細情報を表示するには、メインメニューから「CICS 操作ビュー」>「プログラム操作ビュー」とクリックします。
3. 「プログラム」表形式ビューから、「プログラム名」フィールドにプログラム名 PRGPAYR1 を、さらに「スコープ」フィールドに CICS システム名 CICS PA01 を入力します。「最新表示」をクリックします。
4. PRGPAYR1 の「プログラム名」フィールドをクリックして、「プログラム」詳細ビューを表示します。「プログラム」詳細ビューが表示され、CICS PA01 の LIBRARY 名とロード・データ・セット名が表示されます。

CICSplex SM イベントの発生原因の検出

この例では、リアルタイム分析のイベント通知 RTDPAY01 が発行された原因を調査する方法を示します。

1. 現行のコンテキストが PLXPROD1 ではない場合は、メインメニューの「コンテキスト」フィールドを PLXPROD1 に変更して「設定」をクリックします。
2. メインメニューで、「リアルタイム分析 (RTA) 未解決のイベント」をクリックして、「RTA 未解決のイベント」表形式ビューを表示します。
3. このビューには、接続の CONNSTATUS 値がイベントを起動させたこと、およびその現行値が RELEASED であることが示されます。知りたい情報はこれで足りる場合があります。そうでない場合は、この例の残りのステップに説明されているとおりに調査を進めます。
4. 関連付けられた評価定義を確認します。これにアクセスするには、以下のようになります。
 - メインメニューで、「管理ビュー」>「RTA 分析点モニター」>「評価」をクリックして、「評価定義」表形式ビューを表示します。
 - 目的のエントリーの「名前」フィールドをクリックして、「評価定義」の詳細ビューを表示します。

このビューから、CONNECT リソース・テーブルの **CONNSTATUS** フィールドの値が **ACQUIRED** でない場合にイベント **RTDPAY01** が起動されるのが分かります。(「評価されるフィールド」フィールドが **CONNSTATUS**、「評価の論理演算子」フィールドが **NE** (「等しくない」という意味)、および「評価データ値」フィールドが **ACQUIRED**)。

5. 次に、「**ISC/MRO 接続**」ビュー (CONNECT オブジェクト) を確認します。
 - メインメニューで、「**ISC/MRO 接続**」をクリックして、「**ISC/MRO 接続**」表形式ビューを表示します。
 - 必要な場合は、「スコープ」フィールドを **CICSPT01** に変更して、「最新表示」をクリックします。
 - 「**ISC/MRO 接続**」表形式ビューに、CICS システム **CICSPT01** の接続のリストが表示されます。

単一の **CICS** システムでトランザクションを使用不可にする

この例は、CICS システム **CICSPA01** でトランザクション **PAY1** を使用不可にする方法を示しています。(CICSPA01 は、現行スコープである **CICSplex** **PLXPROD1** にあります。)これを行うには 2 つの方法があります。

例えば、以下のことを行うことができます。

1. すべてのローカル・トランザクションをリストします。メインメニューで、「ローカルまたは動的トランザクション」をクリックします。現行スコープ (**PLXPROD1**) 内のすべてのローカル・トランザクションを示す、「ローカルまたは動的トランザクション」表形式ビュー (**LOCTRAN** オブジェクト) が表示されます。
2. 表示を絞り込むには、「スコープ」フィールドに **CICSPA01**、「トランザクション ID」フィールドに **PAY1**、「使用可能状況」フィールドに **ENABLED** と入力します。「最新表示」をクリックします。
3. トランザクションの横にある「レコード」チェック・ボックスをクリックし、「使用不可... (**Disable...**)」ボタンをクリックします。
4. 「使用不可」ビューが表示されます。「はい (**Yes**)」をクリックします。「ローカルまたは動的トランザクション」表形式ビューが再表示され、トランザクション・インスタンスの状況が「**DISABLED** (無効)」と表示されます。

あるいは、以下を行うこともできます。

1. すべてのローカル・トランザクションをリストします。メインメニューで、「ローカルまたは動的トランザクション」をクリックします。現行スコープ (**PLXPROD1**) 内のすべてのローカル・トランザクションを示す、「ローカルまたは動的トランザクション」表形式ビュー (**LOCTRAN** オブジェクト) が表示されます。
2. 表示を絞り込むには、「スコープ」フィールドに **CICSPA01**、「トランザクション ID」フィールドに **PAY1**、「使用可能状況」フィールドに **ENABLED** と入力します。「最新表示」をクリックします。
3. **PAY1** の「トランザクション ID」フィールドをクリックして、「ローカルまたは動的トランザクション」詳細ビューを表示します。
4. ドロップダウン・メニューを使用して、「使用可能状況」フィールドの値を **DISABLED** に変更します。「変更の適用」ボタンをクリックします。「ローカ

ルまたは動的トランザクション」表形式ビューが再表示され、トランザクション PAY1 の状況が「DISABLED (無効)」と表示されます。

トランザクションをグローバルに使用不可にする

この例では、スコープ全体で単一のトランザクションを使用不可にする方法を示します。

1. 現行コンテキストが PLXPROD1 でない場合、メインメニューで「コンテキスト」フィールドに PLXPROD1 を入力し、「最新表示」をクリックします。
2. メインメニューで、「ローカルおよび動的トランザクション」をクリックします。「ローカルおよび動的トランザクション」表形式ビューが表示されます。
3. 「トランザクション ID」フィールドに PAY1 と入力し、「最新表示」をクリックします。「ローカルおよび動的トランザクション」表形式ビューが再表示され、トランザクション PAY1 のインスタンスが表示されます。
4. トランザクション・インスタンスのリストを要約します。「トランザクション ID」列の上部にある「要約」アイコンをクリックします。「ローカルおよび動的トランザクション」表形式ビューが再表示され、トランザクション PAY1 に関して 1 行表示されます。その行には、現行スコープ内のトランザクション PAY1 のインスタンス数を示す「レコード・カウント」フィールドがあります。
5. この要約行に示されているトランザクション PAY1 のすべてのオカレンスを使用不可にするには、「レコード」チェック・ボックスをクリックし、さらに「使用不可... (Disable...)」ボタンをクリックします。「使用不可」ビューが表示されます。
6. 「はい (残りの n 個もすべて含む)」ボタンをクリックします。「 n 」はトランザクションのインスタンス数です。「ローカルおよび動的トランザクション」表形式ビューが再表示され、「使用可能状況」フィールドが DISABLED に設定された要約行が表示されます。

注: 「はい」ボタンをクリックして個々のトランザクションを個別に使用不可にすることはできますが、正当な理由がない限りこれは非効率的です。

CICS システム内のモニター対象リソースの検出

この例は、CICS システム CICSPA01 内でモニターされているリソース・タイプを検出する方法を示しています。

1. メインメニューで、「モニター・ビュー」 > 「アクティブ・モニターの仕様」をクリックします。
2. 現行のコンテキストが PLXPROD1 ではない場合は、「コンテキスト」フィールドに PLXPROD1 を指定します。
3. 「スコープ」フィールドに CICSPA01 と入力して「最新表示」をクリックします。

「アクティブ・モニターの仕様」表形式ビューに、CICS システム CICSPA01 内のアクティブなモニター定義が表示されます。

「アクティブ・モニターの仕様」ビューの詳細な説明については、「デフォルト・モニター定義」を参照してください。

ワークロード定義の非アクティブ化

この例では、Web ユーザー・インターフェース (WUI) を使用してワークロード定義 WLDAPAY02 を非アクティブにする方法について説明します。

1. 以下のようにアクティブ・ワークロード定義を表示します。
 - メインメニューで、「アクティブ・ワークロード・ビュー」>「定義」をクリックします。これにより、「アクティブ・ワークロード定義」ビューが開きます。

現行のコンテキストが PLXPROD1 ではない場合は、「コンテキスト」フィールドに PLXPROD1 を指定して「最新表示」をクリックします。

 - 「アクティブ・ワークロード定義」ビューで、WLSPAY01 と入力し「最新表示」をクリックします。ワークロード仕様 WLSPAY01 に関連付けられたアクティブ・ワークロード定義が一覧されます。
2. 以下のようにワークロード定義 WLDAPAY02 を破棄します。
 - a. WLDAPAY02 の項目を選択して「破棄...」ボタンをクリックします。これにより、「破棄」確認ビューが開きます。
 - b. 「はい」をクリックして、アクションを確定します。

アクティブなワークロード定義を非アクティブにすると、その定義に関連付けられているトランザクション・グループが同じワークロード内の別のワークロード定義によって参照されていないければ、それらのトランザクション・グループもすべて非アクティブになることに注意してください。

ワークロードからアクティブ・トランザクションを破棄

この例では、アクティブなトランザクション PAY2 をワークロード EYUWLS02 から破棄する方法を示します。

1. 現行コンテキストが PLXPROD1 でない場合、メインメニューで「コンテキスト」フィールドに PLXPROD1 を入力します。
2. メインメニューで、「アクティブ・ワークロード・ビュー」>「動的トランザクション」をクリックします。「アクティブ・ワークロード動的トランザクション」表形式ビュー (WLMATRAN オブジェクト) が表示されます。
3. 必要に応じて、「ワークロード名」、「ワークロード所有者のシステム ID」、および「トランザクション」フィールドを使用して、表示を絞り込むことができます。
4. トランザクション PAY2 を破棄するには、エントリーの横にあるレコード・チェック・ボックスをクリックして、「強制... (Force...)」ボタンをクリックします。「強制 (Force)」確認ビューが表示されます。
5. 「はい」ボタンをクリックして、アクションを確認します。「アクティブ・ワークロード動的トランザクション」表形式ビューは、PAY2 エントリーを除いて再表示されます。

Administering BAS

ビジネス・アプリケーション・サービスを使用して CICS リソースを管理することができます。

BAS の概要

ビジネス・アプリケーション・サービスは CICSplex SM のコンポーネントで、企業でのビジネス・アプリケーション・サービスの CICS リソース定義とインストール・プロセスの管理を担当します。

ビジネス・アプリケーション・サービスでは、以下の機能が提供されています。

中心的な役割を担うリソース定義

BAS により、CICSplex 全体にわたってリソース定義と関連を実装できます。CICSplex SM データ・リポジトリ (EYUDREP) は、CICS リソース定義の中央リポジトリとして機能できます。CICSplex SMでは、以下のようにして CICSplex で必要なリソース定義数が最小限に抑えられています。

- CICS リソースに定義に対して、単一システム・イメージ・アプローチを提供する。
- 単一の定義の属性から、リソースのローカルとリモートのインスタンスを両方とも生成できます。
- 例えば、アプリケーションがテストから実動へと進行する際に、定義の複数のバージョンを管理する。
- 単一の定義セットから複数の CICS 接続を生成する。

論理的スコープ

CICS リソースが CICSplex SM に定義されている時、CICSplex 内での物理的な位置ではなく、指定されたビジネス・アプリケーションへの参加という観点から、それらのリソースをモニターおよび制御することができます。論理的に関連したリソースは、ある特定の時点にそれらがどこにあるかに関係なく、1 つのセットとして識別および参照することができます。

分散リソース・インストール

リソースは、CICSplex SM に定義されていても、CICS または CICSplex SM のいずれかによって、該当するシステムにインストールする必要があります。BAS を使用して、CICS の初期設定時にリソースを自動的にインストールすることも、領域の実行中に動的にインストールすることもできます。1 つのリソースを、ローカル側またはリモート側のいずれか適切な側で、複数の CICS 領域にインストールできます。

ビジネス・アプリケーション・サービスは、以下の CICS リソースをサポートしています。

アプリケーション・リソース

これらは企業でのビジネス・アプリケーションをサポートするリソースです。これらは、アプリケーションが以下を実行するために必要なリソースです。

- CICS BTS プロセス・タイプ
- Db2 の接続およびトランザクション
- 文書テンプレート
- FEPI ノード、プール、プロパティ・セット、およびターゲット
- ファイルおよびファイル・キー・セグメント定義
- IPIC 接続

- LIBRARY リソース
- マップ・セット
- 区分セット
- パイプライン
- Programs (プログラム)
- Sysplex エンキュー・モデル
- TCP/IP サービス
- 一時記憶域モデル
- トランザクション
- 一時データ・キュー
- URI マップ
- Web サービス

領域プロパティ・リソース

以下の領域プロパティ・リソースは、CICS 領域の実行をサポートするグローバル・リソースです。

- ジャーナル
- ジャーナル・モデル
- ローカル共用リソース (LSR) プール
- プロファイル
- トランザクション・クラス
- 端末
- Typeterms

接続性リソース

以下のリソースは、CICS 領域と他のシステムとの間の接続の作成をサポートします。

- 接続
- パートナー
- セッション
- TCP/IP サービス
- IP 相互接続 (IPIC)

BAS へのアクセスの方式

CICS には、BAS の定義および管理を行うためのいくつかのインターフェースが用意されています。

CICS Explorer

CICS Explorer をリソース定義の日常管理に使用できます。CICS Explorer は、1 つ以上の CICS システムおよび関連リソースの、シンプルで使いやすい管理方法を提供するシステム管理ツールです。リソース定義の作成および更新は、CICS Explorer リソース定義エディターを使用して行うことができます。

CICSplex SM API

CICSplex SM API を使用すると、CICS リソース定義の管理を自動化する外部プログラムを作成できます。そのようなプログラムを使用すると、CICSplex SM のシステム管理機能を企業全体の変更管理プロセスに統合できます。例えば、リソース定義の変更を、データベースまたはファイルの更新情報を使って、またはアプリケーションの標準的なライフ・サイクルを使って調整する API プログラムを作成できます。

Web ユーザー・インターフェース

リソース定義の日常の管理に Web ユーザー・インターフェース (WUI) ビューを使用することができます。これらのビューを使用すると、リソース定義を、即座に、対話式に確認することができます。リソース定義を作成、更新、および除去できます。

これらのビューは、以下のように、ベーシック BAS サブメニューと、完全に機能する BAS サブメニューにグループ化されています。

- ベーシック・ビューは、リソースの管理を、CICS オンライン・リソース定義 (RDO) で使用されるようにリソース記述に制限しています。
- 上級ユーザーを対象とする、完全に機能するメニューには、リソース記述だけでなくリソース割り当てによってもリソースを管理するオプションが含まれています。

バッチ処理されるリポジトリ更新機能

CICSplex SM のバッチ・リポジトリ更新機能は、以下のように、多くのリソース定義の作成および保守に役立ちます。

多数のリソースを定義する

バッチ・リポジトリ更新機能は、多数のリソース定義の作成および更新に適しています。あるリソース定義用の 1 つの **CREATE** コマンドを含む入力ファイルから開始し、そのコマンドを他のリソース定義のテンプレートとして使用することができます。その **CREATE** コマンドをコピーしてカスタマイズすることにより、自分にとって必要な、指定したタイプのすべてのリソース定義を素早く作成することができます。バッチ・リポジトリ更新機能の入力ファイルを実行依頼すると、CICSplex SM はすべてのリソース定義を作成し、それらをデータ・リポジトリに追加します。

リソース定義のマイグレーション

バッチ・リポジトリ更新機能は、CICS から CICSplex SM にリソース定義をマイグレーションするうえで不可欠のツールです。CICSplex SM では、既存の CSD ファイルからレコードを抽出し、バッチ・リポジトリ更新機能に入力するための同等のリソース定義を生成できる出口ルーチンが提供されています。出口ルーチンについて詳しくは、114 ページの『CSD からのレコードの抽出』を参照してください。

中央リポジトリの保守

バッチ・リポジトリ更新機能は、一元化された定義リポジトリの保守において鍵となる、ある CICS プラットフォームから別のプラットフォームへのリソース定義のマイグレーションに役立ちます。既存のリソース定義を

CICSplex SM データ・リポジトリから取り出すには、**DUMP** コマンドを使用できます。必要な変更を定義に対して行った後、ダンプ出力を、新しい CICS プラットフォーム用のリソース定義を作成する、別のバッチ・リポジトリ更新機能実行の入力として使用できます。

BAS オブジェクト

BAS オブジェクト は、CICSplex 内の CICS リソースのインスタンスです。どちらのインターフェースを使用して BAS にアクセスする場合も、対話するオブジェクトは基本的に同じです。

ビジネス・アプリケーション・サービス・オブジェクトには、以下の 2 つのタイプがあります。

リソース定義ビューおよびオブジェクト

リソース定義ビューを使用して、CICS リソースのインスタンスを定義します。各リソース定義 (xxxxDEF オブジェクト) の属性は、同等の CICS CEDA 定義の属性と同じです。例えば、CICS 接続 (CONNDEF オブジェクト) を定義するには、「接続定義」ビューを使用します。

管理オブジェクト

管理オブジェクトは、リソースを管理するために使用します。これらのオブジェクトは、以下の領域に分割されます。

基本オブジェクト

これらのオブジェクトは、BAS の基盤です。これらは、CICS システム内のリソースの割り当てとインストールを実装します。

RASGNDEF

リソース割り当ては、指定されたタイプの選択されたリソース定義を記述し、それらのリソースがどのようにしてさまざまな CICS システムに割り当てられるかを示します。

RESDESC

リソース記述は、論理的に関連したリソース定義のセットを識別します。リソース記述で識別されたリソースのセットは、CICSplex SM 要求のスコープ値として使用できます。資源は、資源のインストールをサポートする CICS システムにセットとしてインストールすることもできます。

RESGROUP

資源グループは、関連する資源定義のセットです。グループ内のリソース定義は、同じリソース・タイプの場合もあれば、異なるリソース・タイプの場合もあります。

関連オブジェクト

これらのオブジェクトは、基本管理オブジェクトとそれらのリソース定義との間の関連を制御します。

RASINDSC

リソース割り当てをリソース記述に関連付けます。

RESINDSC

リソース・グループをリソース記述に関連付けます。

RESINGRP

指定したタイプのリソース定義をリソース・グループに関連付けます。

プロセス表示オブジェクト

これらのオブジェクトは、リソースがどのように CICS システムに割り当てられるかを示します。

RASPROC

指定されたリソース割り当てが処理される際に選択されるリソース定義を識別します。

RDSCPROC

指定されたリソース記述が処理される際に選択されるリソース定義を識別します。

SYSRES

指定された CICS システムに対して定義されているリソースを識別します。

接続オブジェクト

これらのオブジェクトは、CICS 領域と他のシステムとの間の接続の性質を記述します。

CSYSDEF

CICS システムの操作特性を記述します。これらの操作特性としては、リソース・インストール・オプションや、接続を識別するために使用されるシステム ID があります。他の CICS システムへの接続を作成するには、「CICS システム定義ビュー」を使用します。

SYSLINK

CICSplex 内の CICS 領域間に存在する接続を記述します。さまざまなタイプの CICS 接続を作成およびインストールするには、「CICS システム・リンク定義」ビューを使用します。

CEDA の機能と BAS の機能の比較

表 6 は、CEDA の管理機能と BAS の管理機能との間の比較を示しています。

表 6. CEDA および BAS の管理機能

CICS CEDA	CICSplex SM BAS	WUI ビュー名
DEFINE リソース	RESDEF CREATE	resource 定義
USERDEFINE リソース	RESDEF CREATE モデルに対して	resource 定義
INSTALL リソース	RESDEF INSTALL	resource 定義
VIEW リソース	RESDEF BROWSE	resource 定義
ALTER リソース	RESDEF ALTER	resource 定義
COPY グループ	RESGROUP CREATE メンバー	リソース・グループ定義
MOVE グループ	RESGROUP CREATE 関連	リソース記述内のリソース・グループ
INSTALL グループ	RESGROUP INSTALL	リソース・グループ定義
DISPLAY グループ	RESGROUP	リソース・グループ定義

表 6. CEDA および BAS の管理機能 (続き)

CICS CEDA	CICSplex SM BAS	WUI ビュー名
CHECK グループ/リスト	暗黙 - 整合セットの処理	適用なし
DISPLAY リスト	RESDESC	リソース記述定義
同等操作なし	MAP	EYUSTARTMAPBAS(ビューの実際の名前は、マップされているものによって決まります。)
ADD グループをリストへ	RESGROUP ADD	リソース・グループ定義
APPEND リストをリストへ	RESDESC CREATE モデル	適用なし
EXPAND グループ/リスト	RESINDSC/RESINGRP	適用なし
INSTALL リスト	RESDESC INSTALL	リソース記述定義
DELETE	REMOVE	適用なし
LOCK/UNLOCK	同等の機能なし (セキュリティーを使用)	適用なし

CICSplex SM は、いくつかの小さな違いはあるものの、CICS CEDA トランザクションと同じ機能を提供します。CICSplex SM は、ある特定の ADD 機能または UPDATE 機能が実行される時、CEDA CHECK に似た機能を自動的に実行します。

BAS のセキュリティの考慮事項

CICSplex 環境に対するリソース定義の重要性のため、CICSplex SM では、BAS 機能のセキュリティーを定義することができます。

BAS に対するセキュリティーの提供は、他の CICSplex SM コンポーネントと同様の方法で処理されます。BAS の機能の範囲は狭くも広くも自由に設定でき、またそれらの機能の使用権限を与えるユーザーの数も自由に設定できます。セキュリティー目的のために、BAS の機能は以下のグループに分割されています。

BAS.DEF

このグループには、すべてのリソース定義ビューおよび関連した BAS 管理ビューが含まれます。このグループへの UPDATE 権限を持つユーザーは、CICSplex SM データ・リポジトリ内で定義を作成、更新、および除去することができます。このグループへの READ 権限を持つユーザーは、CICSplex SM データ・リポジトリ内の定義を表示できます。

BAS.resource

これらのグループは、表すリソース・タイプに従って命名されます (接続に関連した定義であれば BAS.CONNECT など)。それぞれのグループには、指定されたリソース・タイプのリソース定義ビューが含まれます。例えば、BAS.CONNECT には、「接続定義」ビュー (CONNDEF オブジェクト) と「セッション定義」ビュー (SESSDEF オブジェクト) が含まれます。

これらのセキュリティー・グループの目的は、CICS システムにリソースをインストールする、ユーザーの能力をさらに制限することです。ユーザーは、指定されたリソースをインストールするためには、適切な BAS.resource グループへの ALTER 権限を持っている必要があります。

機能によってアクセスを制御することに加え、これらの機能の使用を、ある特定の CICS システム内のある特定のリソースに制限することもできます。CICSplex SM では、シミュレートされた CICS セキュリティー検査も提供されています。この検査により、CICS のリソースおよびコマンドへのアクセスを制御することができます。

無許可ユーザーがリソースを作成および管理できないように、BAS ビューの適切な保護について特別な注意を払う必要があることを認識する必要があります。

EXEC CICS CREATE コマンドを使用して新しいリソースを作成している場合、コンテキストとして CICSplex で作成されるすべての定義は、CICSplex 内のすべての CMAS に自動的に配布されます。そのため、ユーザーに BAS オブジェクトを作成する権限を付与することは、その CICSplex 内の任意の CICS システムにリソースをインストールする権限を付与することに相当します。CICS システムが開始するとき、だれがシステムにリソースをインストールしたかについての検査はありません。

社内における CICSplex SM のセキュリティのセットアップについて詳しくは、Implementing CICSplex SM securityを参照してください。

Web ユーザー・インターフェースの使用方法

リソース定義は、ビジネス・アプリケーション・サービス環境の最も基本的な要素です。CICSplex SM は、CICS リソースを管理するために、それらのリソースに関する情報を持っている必要があります。CICSplex SM にリソースを定義することは、RDO を使用してそれらを CICS に定義することと同様です。つまり、1 つ以上の WUI ビューで、リソースを記述する属性を指定します。ただし、CICSplex 内のすべてのリソースのすべてのインスタンスを CICSplex SM に手動で定義する必要はありません。少数のリソース定義を、多数のリソースを作成するためのテンプレートとして使用できます。

すべてのリソースに共通の属性を指定することにより、全く同じではないにしても、類似する多くのリソースを記述するリソース定義を作成できます。ローカル属性と共に、リソースのリモート・インスタンスに適用される属性を指定することもできます。CICSplex SM は、ローカル・リソースおよびリモート・リソースをさまざまな CICS システムに割り当てる際に、適切な属性のサブセットを使用します。

BAS 管理ビュー

Web ユーザー・インターフェースで、BAS 機能は、ベーシックのビュー・メニューと完全に機能しているビュー・メニューに分けられています。WUI のメインメニューから BAS 機能にアクセスするには、「管理ビュー」をクリックします。

「管理ビュー」メニューの最下部に、以下の 2 つのサブメニューがあります。

ベーシック CICS リソース管理ビュー

これらのビューでは、単純化された、RDO に似た BAS のモデルが提供されています。リソース定義、リソース・グループ、およびリソース記述が含まれていますが、リソース割り当ては含まれていません。

完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (BAS) 管理ビュー

これらのビューには、ベーシック・モデルに加え、より上級者向けのリソー

ス割り当てビューへのリンクが含まれています。これらのビューは、リソース定義の管理において、より高い柔軟性を持つために使用します。リソース割り当ての詳細については、93 ページの『リソース割り当てによるリソースの制御』を参照してください。

両方のサブメニューからのリンクは、以下の 3 つのグループに分けられます。

定義 以下のリンクが含まれています。

CICS リソース定義

各リソース・タイプの定義ビューへのリンクを含むメニュー。

リソース・グループ

リソース・グループ定義を管理するための定義ビューへのリンク。関連付けられているアクションは、作成、更新、除去、インストール、およびリソース記述への追加です。

リソース割り当て (完全に機能しているメニューのみ)

リソース割り当てを作成および管理するための定義ビューへのリンク。関連付けられているアクションは、作成、更新、除去、およびリソース記述への追加です。

リソース記述

リソース記述を作成および管理するための定義ビューへのリンク。関連付けられているアクションは、作成、更新、除去、インストール、および置換です。

関連 以下のリンクが含まれています。

リソース・グループ内の CICS リソース定義

リソース・グループ内のリソースを表示する表形式ビューへのリンク。このビューには、リソース定義とその親リソース・グループとの間の関連を除去できる「除去」アクション・ボタンが含まれています。このビューには作成アクションはありません。グループへのリソースの追加は、リソース自体を定義している時に行われます。

記述内のリソース・グループ

リソース・グループとリソース記述との間の関連を管理するための定義ビューへのリンク。関連付けられているアクションは、作成、更新、および除去です。

記述内のリソース割り当て (完全に機能しているメニューのみ)

リソース割り当てとリソース記述との間の関連を管理するための定義ビューへのリンク。関連付けられているアクションは、作成、更新、および除去です。

CICS システム・リンク

CICS システム・リンク定義を管理するための定義ビューへのリンク。関連付けられているアクションは、作成、除去、およびインストールです。

リソースのデプロイ ...

アクティブ CICS リソースを表示するビューへの以下のリンクが含まれます。

リソース記述

リソース記述によって選択されたデプロイ済みリソースを表示する表形式ビューへのリンク。

リソース割り当て (完全に機能しているメニューのみ)

リソース割り当てによって選択されたデプロイ済みリソースを表示する表形式ビューへのリンク。

CICS システム

CICS システムによって選択されたデプロイ済みリソースを表示する表形式ビューへのリンク。

覚え書: 特に断りのない限り、リソース定義を作成および保守している時に認識されるのはコンテキスト設定のみです。

共通の WUI リソース定義アクション

各 WUI リソース定義ビューでは、リソース定義を作成および保守するために以下のアクションがサポートされます。

リソース・グループへの追加

リソース定義をリソース・グループに追加します。

作成 リソース定義を作成し、データ・リポジトリに追加します。

マップ

データ・リポジトリ内に、関連した定義のビジュアル表示を生成します。

インストール

1 つ以上のアクティブ・システムにリソースをインストールします。有効なシステムの詳細については、個別の BAS オブジェクトの説明を参照してください。

除去 データ・リポジトリからリソース定義を除去します。

更新 (Update)

データ・リポジトリ内のリソース定義を更新します。

「更新」をクリックする前にリソース定義表形式ビューから複数のエントリを選択することにより、1 回の操作で複数のリソースを更新することができます。

これらのアクションと、アクションの結果として表示されるビューは、それらをサポートするすべてのリソース定義ビューで同様です。

リソース定義ビューへのアクセス: リソース定義ビューにアクセスするには、以下の手順を実行します。

- WUI のメインメニューから、次の 2 つの方法で「CICS リソース定義」メニューを開くことができます。
 - 「管理ビュー (Administration views)」 > 「ベーシック CICS リソース管理ビュー (Basic CICS resource administration views)」 > 「リソース定義 (Resource definitions)」をクリックします。
 - 「管理ビュー」 > 「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (BAS)管理ビュー」 > 「リソース定義」をクリックします。

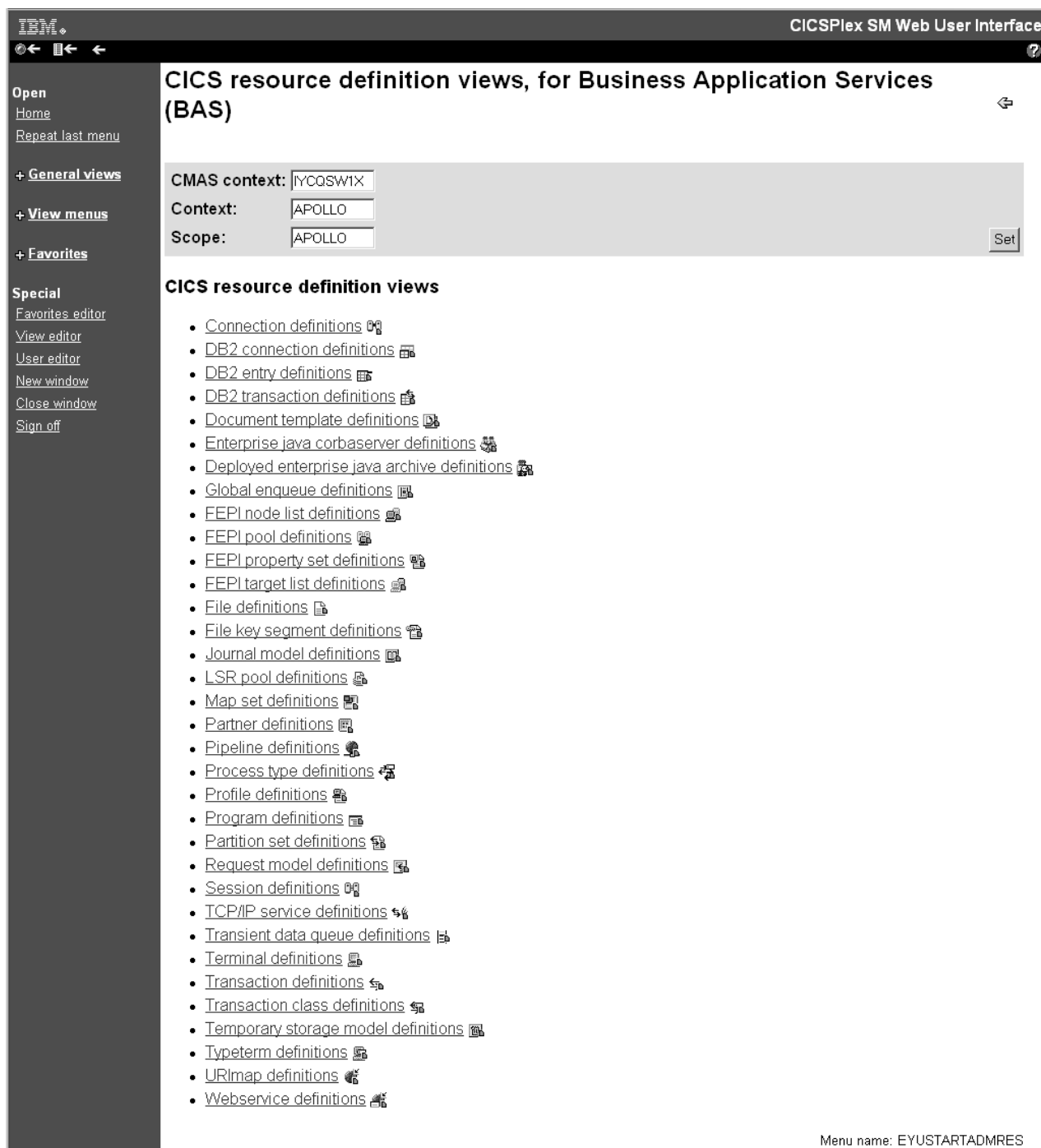


図 5. WUI リソース定義メニュー

- リストされているリソースから必要なリソースを選択して、既存のリソースの表形式ビューを表示します。例えば、CorbaServer 定義の作業を行うには、リストから「**CorbaServer** 定義」をクリックして「**CorbaServer** 定義」表形式ビューを表示します。

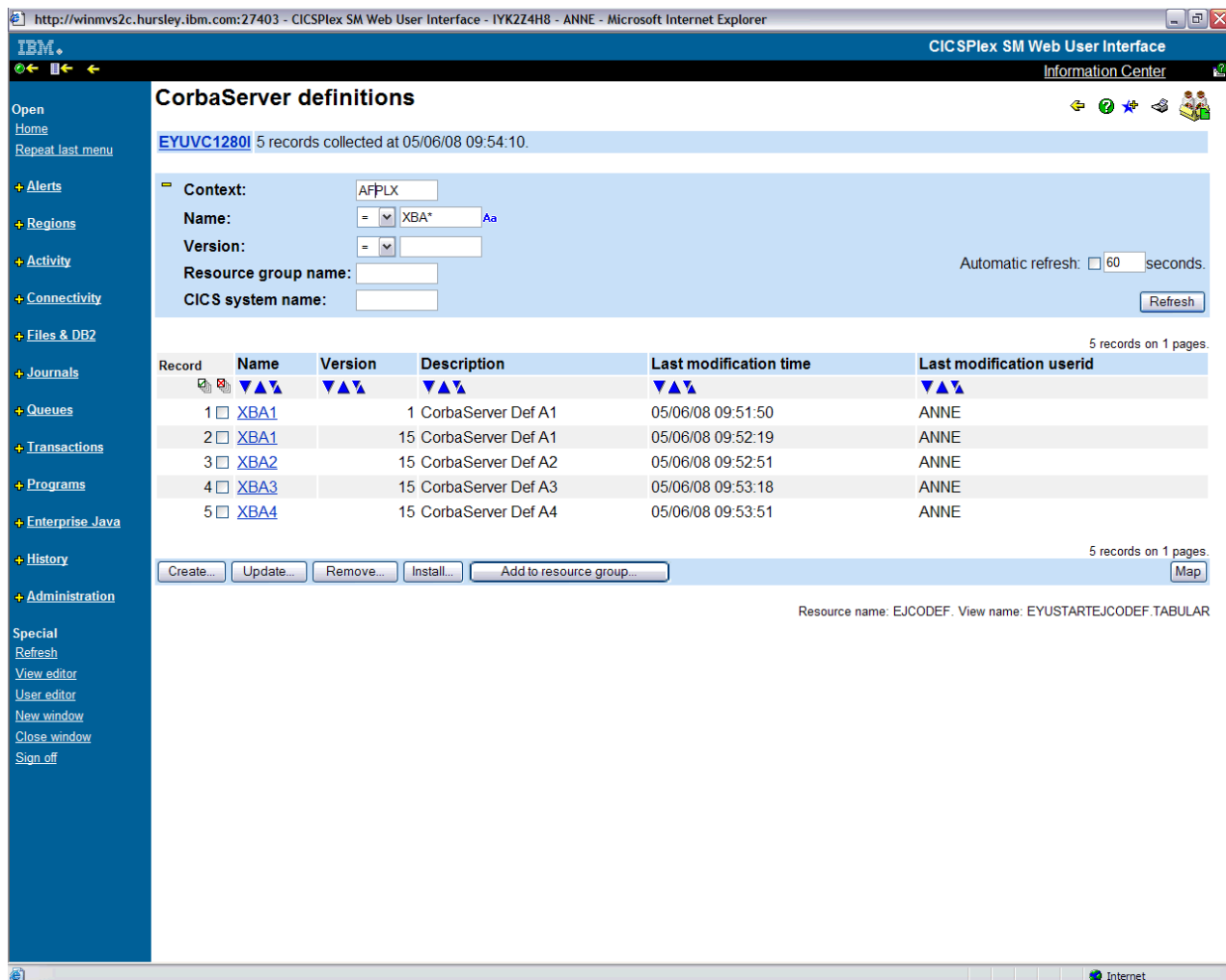


図 6. CorbaServer 定義表形式ビュー

詳細については、75 ページの『BAS 管理ビュー』を参照してください。

CICS リソース定義の作成: 新しいリソース定義を作成するには、以下の手順を実行します。

- 選択したリソースの表形式ビューから「作成...」ボタンをクリックして、リソースの作成ビューを表示します。「作成...」ボタンをクリックする前に、テンプレートとして使用する既存のリソース定義を選択することができます。
- 定義を完了したら、「はい」をクリックして定義を作成し、リソース表形式ビューを再表示します。

リソース定義ビューの更新: 1 つ以上のリソースを更新するには、以下の手順を実行します。

- 隣接するチェック・ボックスを選択して必要な 1 つ以上のレコードを選択し、「更新」アクション・ボタンをクリックしてリソース定義ビューを表示します。このビューは、更新アクションと作成アクションの両方に使用されます。
- 表示されたフィールドに必要な更新を行います。「はい」ボタンと「いいえ」ボタンを使用して、操作を確認または破棄します。

CICS リソースの除去: 1 つ以上のリソース定義を除去するには、隣接するチェック・ボックスを使用して 1 つ以上の必要なレコードを選択し、「除去」アクション・ボタンをクリックします。選択した各レコードの操作を確認または破棄するためのオプションが提供されます。

CICS リソースのマッピング: 関連した定義のマップを作成するには、「マップ」をクリックします。

CICS リソースのインストール: リソース定義ビューをインストールするには、「インストール...」ボタンをクリックします。

共通の WUI 定義フィールド

各リソース定義の作成入力ビューの情報の多くは、リソース・タイプに固有です。ただし、以下のフィールドは、すべてのリソース定義の最初の入力ビューに共通です。

名前 リソース定義の名前。

名前の長さとフォーマットは、リソース・タイプによって異なります。例えば、プログラム名の長さは最大 8 文字ですが、接続名の長さは 4 文字のみになります。

注: リソース定義の名前には、CICSplex SM 内で大/小文字の区別がありません。

バージョン

リソース定義のバージョン番号。

以下のいずれかを指定できます。

- 1 から 15 の範囲の整数。あるいは
- ブランクまたは 0。この場合、CICSplex SM は次に使用可能なバージョン番号を割り当てます。

これには、ブランクか、0 から 15 の範囲の整数を指定できます。

注: 既存の定義と同じリソース・タイプで同じ名前を持つリソース定義を作成すると、その定義の新しいバージョンがデータ・リポジトリ内に作成されます。

説明 リソース定義を説明する最大 58 文字のオプション・ストリング。

リソース・グループ名

オプションで、リソース定義を追加するリソース・グループの名前。

リソース定義を作成すると、指定されたりソース・グループに自動的に追加されます。これは、リソース定義をリソース・グループに追加する 1 つの方法です。代替方法では、リソース定義ビューで「リソース・グループへの追加」ボタンをクリックして、単一定義をグループに追加します。

ユーザー・データ域

リソース定義に関連した追加のサイト固有データを指定できる、それぞれ最大 8 文字の 3 つのオプション・ストリング。

これらのフィールドは、ユーザーが選択したどのような目的にも使用できません。CICSplex SM はそのデータを利用しません。

各リソースの作成ビューと、ユーザーが指定する必要があるリソース固有情報は、リソース定義の記述に表示されます。

注:

1. パスワード・フィールドを含むどのリソース定義の場合も、入力されるパスワードは、入力中、作成ビュー上に表示されません。

リソース・オブジェクトの **Web** ユーザー・インターフェース・ビュー

CICS リソースの管理については、グループ内の定義、記述に関連付けられたグループ、および CICS 領域に関連付けられた記述の CICSplex SM オブジェクト・モデルを使用するシンプルなアプローチを使用することができます。あるいは、リソース割り当てを使用してリソースを選択および割り当てることによって、より選択的なアプローチを使用することができます。

以下の図は、いくつかの管理オブジェクトの作成に使用できる WUI ビューの概要を提供しています。ビューの名称の後に、オブジェクト名が括弧内に記されています。 82 ページの図 7

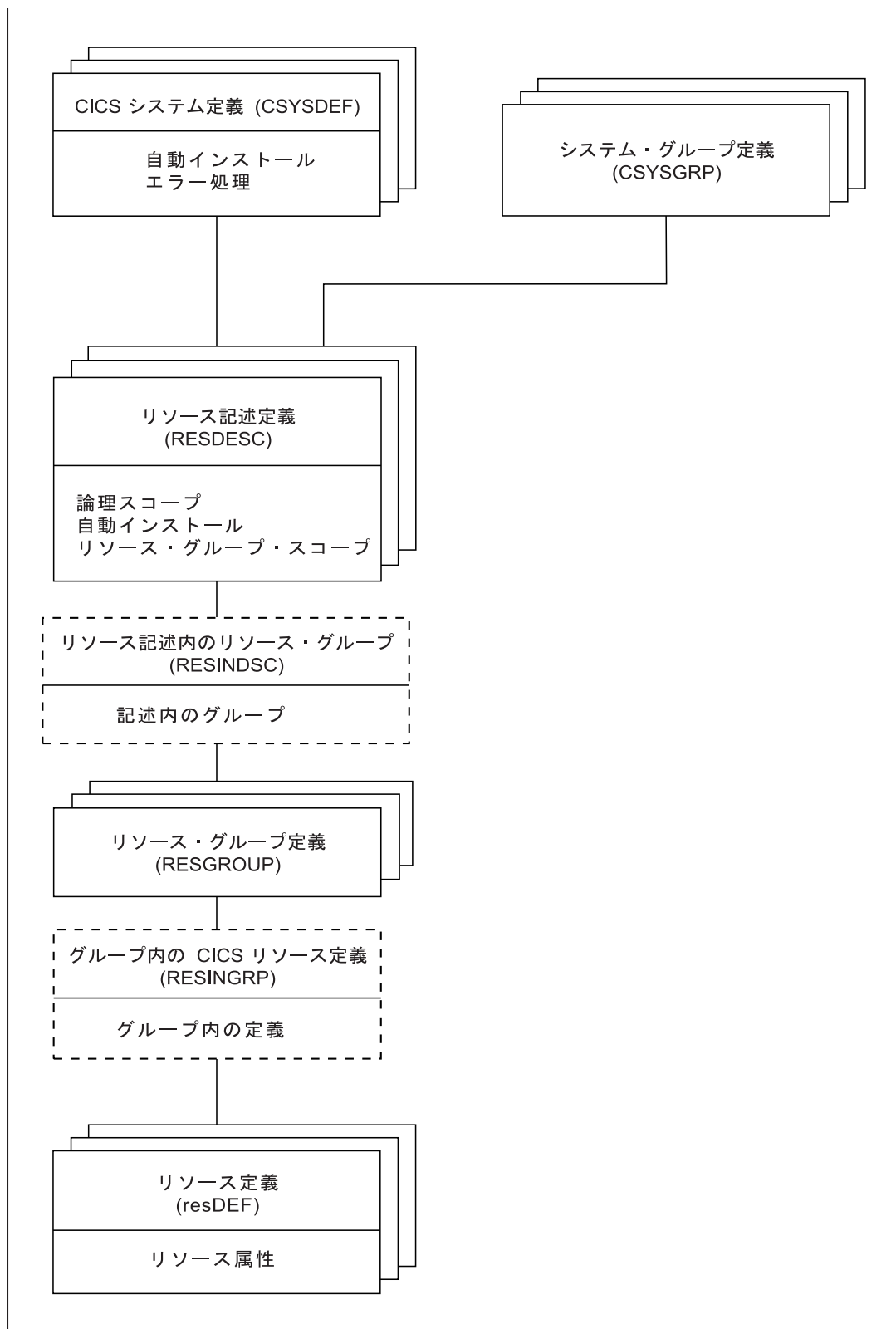


図 7. CICS リソースを管理するためのビュー - シンプルなアプローチ

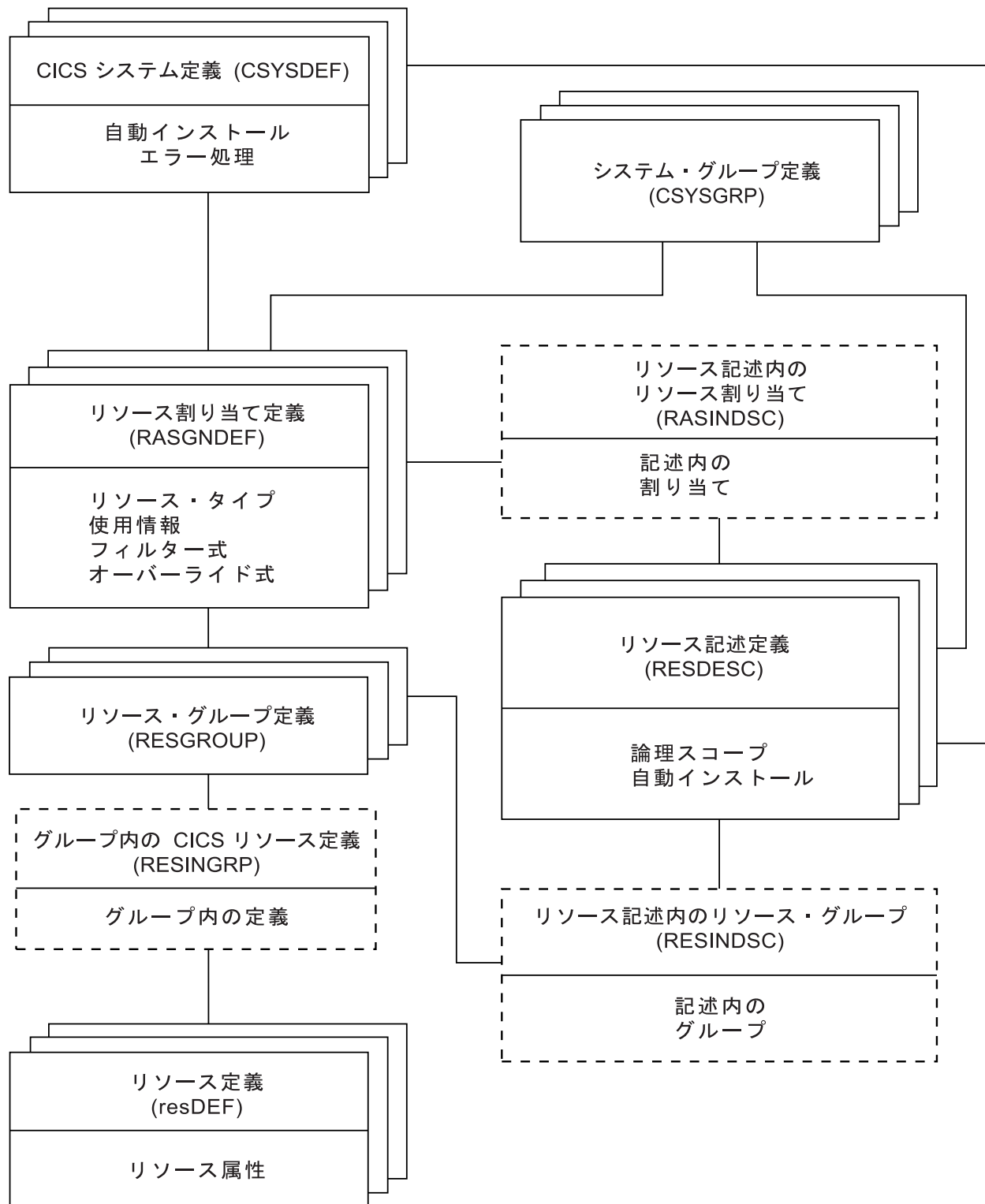


図 8. CICS リソースを管理するためのビュー - 選択的アプローチ

リソース定義セット

このタスクについて

作成したリソース定義は、リソース・グループのメンバーになることができます。次に、リソース・グループは、リソース記述 およびリソース割り当てに関連付けることができます。リソース・グループ、リソース記述、およびリソース割り当ては、企業に適切な方法でリソース定義セットを管理するための便利な手段です。

リソース・グループ

リソース・グループとは、1つの単位として管理するリソース定義のセットです。グループ内のリソースには通常、共通点があります。それらは、特定のアプリケーションまたは通信ネットワークでの使用法によって論理的に関連している場合もありますし、特定のサイトでの使用法によって地理的に関連している場合もあります。

リソース・グループには、すべてのタイプ (接続、ファイル、およびジャーナルなど) のリソース定義を含めることができます。グループを構成できるリソース定義の数または組み合わせには特に制限はありません。ただし、一度に1つのリソース・グループに含めることができるのは、指定されたリソースの1つのバージョンのみになります。リソース定義の複数のバージョンを、さまざまなリソース・グループ内で維持することはできますが、同じグループ内で維持することはできません。

GET API コマンドを使用して CICS 定義レコードの結果セットを作成する時、要求を指定のリソース・グループ内の定義に制限することができます。各 CICS 定義オブジェクト (CONNDEF など) に対する GET コマンドでは、以下のパラメーターがサポートされます。

RESGROUP(resgroup)

(オプション) 選択する CICS 定義レコードをもった既存のリソース・グループの名前を指定します。

「リソース・グループ定義」ビューで「作成」ボタンをクリックして、リソース・グループを作成します。このアクションにより、リソース・グループが CICSplex SM データ・リポジトリに追加されます。

また、バッチ処理されるリポジトリ更新機能または API で CREATE コマンドを使用してリソース・グループを作成することもできます。その場合、モデルとして使用する既存のリソース・グループを特定できます。RESGROUP オブジェクトに対する CREATE コマンドでは、以下のパラメーターが受け入れられます。

MODEL(resgroup)

(オプション) 新規グループで使用するリソース定義を持った既存のリソース・グループの名前を指定します。

MODE(option)

(MODEL 値を指定した場合は必須) 以下のように、モデル・リソース・グループから新しいグループにどの定義をコピーするかを示します。

NO モデル・グループからどの定義もコピーしません。

ASSOCIATIONS

リソース定義とモデル・グループとの関連付け (RESINGRP オブジェクト) をコピーし、既存のリソースから新規グループへの一連の新規の関連付けを作成します。

MEMBERS

モデル・グループ内のすべてのリソース定義をコピーし、新しいグループで使用する新しいセット (別のバージョン番号) を作成します。

リソース・グループは別々に管理できますが、真価が発揮されるのは、それらを 1 つ以上のリソース記述またはリソース割り当てに関連付けた時になります。

リソース・グループへのリソース定義の追加:

リソース定義とリソース・グループとの間の関連を作成するにはいくつかの方法があります。関連を作成する前に、両方の定義がデータ・リポジトリ内に存在している必要があります。

作成時に定義を追加

「リソース・グループ名」フィールドでグループを識別することにより、定義を作成した時に自動的にリソース定義をリソース・グループに関連付けることができます。これは、各リソース・タイプの作成パネル上の標準フィールドです。

バッチ処理されるリポジトリ更新機能または API を使用して CICS 定義を作成した時は、RESGROUP パラメーターを使用してそれらを既存のリソース・グループに追加できます。各 CICS 定義オブジェクト (CONNDEF など) に対する CREATE コマンドでは、以下のパラメーターがサポートされます。

RESGROUP(resgroup)

(オプション) CICS 定義を追加する既存のリソース・グループの名前を指定します。

個別または複数の定義の追加

リソース定義表形式ビューで 1 つ以上の定義を選択し、「リソースへの追加」ボタンをクリックすることにより、WUI を使用して、指定のタイプの 1 つ以上の既存のリソース定義をグループに追加することができます。

モデル・リソース・グループの使用

リソース・グループを定義し、リソース定義を取り込んだら、そのグループをモデルとして使用して、他のリソース・グループを取り込むことができます。新しいリソース・グループを作成すると、以下を指定するオプションがあります。

- 新しく作成されたグループによってモデルとして使用されるリソース定義が属するリソース・グループ。
- 以下のどちらの定義をモデル・グループからコピーするか。
 - (追加のリソース・セットを作成するための) 実際のリソース定義
 - モデル・グループと既存のリソースとの間の関連

注: リソース定義をリソース・グループに追加すると、不整合リソース・セット・エラーが発生する可能性があります。このタイプの問題および関係方法について詳しくは、91 ページの『リソース・セットの検証』を参照してください。

リソース割り当て

リソース割り当ては、1 つ以上の CICS システムにローカルまたはリモートとして割り当てられる、指定されたタイプのリソースを識別します。(リソース・グループおよびリソース記述のように) リソースのセット全体を表すのではなく、リソース割り当ての目的は、セット内のリソースを選択的に処理することです。

単一のリソース割り当てを使用して、以下のことを実行できます。

- リソース・グループから特定のリソースを選択する。
- リソースのローカル・インスタンスおよびリモート・インスタンスを割り当てる必要がある CICS システムを識別する。
- 特定の CICS システムでの特定の使用のためにリソース属性を変更する。

リソース割り当てによって選択されたリソースは、単独では管理できません。リソースはリソース・グループのメンバーでなければならず、リソース割り当ては少なくとも 1 つのリソース記述に関連付ける必要があります。

リソース記述

リソース・グループと同様に、リソース記述は、論理的に関連したリソースのセットを表します。全リソース・グループを 1 つのリソース記述に関連付けて、より効率的に管理できる、より大きいリソース・セットを作成することができます。さらに、複数のリソース割り当てを 1 つのリソース記述に関連付けて、複数の CICS システムにまたがるアプリケーションなどの、リソースの選択セットを作成することができます。

リソース記述は、CICSplex SM が 1 つの単位として管理できる最大のリソース・セットを表します。リソース記述は、複数のリソース・グループまたはリソース割り当て内のすべてのリソースから成る (CSD グループ・リストによく似ている) 場合や、さまざまな CICS システム上の指定のアプリケーションを形成するリソースのセットから成る場合があります。

リソース記述で指定されるリソース・セットには、以下の特徴があります。

- 以降の CICSplex SM 要求で使用する論理スコープ (アプリケーションなど) として指定できます。
- CICS TS を実行しているシステムに自動的にまたは動的にインストールできます。

CICSplex SM を使用した CICS リソースの管理

ビジネス・アプリケーション・サービスで、ユーザーが行わなければならない最も重要な決定は、作成したリソースのセットの管理方法です。

- リソース記述のみを使用。92 ページの『リソース記述によるリソースの制御』を参照してください。
- リソース割り当てとリソース記述を併用。93 ページの『リソース割り当てによるリソースの制御』を参照してください。

シチュエーションと、必要な精度に応じて、これらのアプローチのいずれかまたは両方を使用して CICS リソースを制御できます。リソース記述のみは、最もシンプルなりソースの管理のアプローチを表します。リソース割り当てを使用すると、ビジネス・アプリケーション・サービスのすべての機能にアクセスできます。

複数バージョンのリソース定義

ビジネス・アプリケーションが、開発からテストを経由し、実動へと進行して行くにつれて、それらをサポートするリソースも進化します。CICSplex SM に定義されているリソースはグループまたは他のオブジェクトとは無関係で存在するため、リソース定義の変化をサポートするためにバージョン管理が必要です。このバージョン・サポートにより、以下の管理が可能になります。

- 複数グループ内のリソース定義の単一バージョン
- CICSplex 全体でのリソースの複数のバージョン

例えば、それぞれが DB2TR01 と呼ばれ、それぞれが異なる (または同じ) トランザクション ID を指定し、それぞれが異なるバージョン番号を持つ、3 つの DB2TDEF 定義を持つことができます。

ビジネス・アプリケーション・サービスは、それぞれが同じ、または異なる CICS リソースを指定する、同じリソース定義のバージョンを最大 15 個管理できます。

リソース定義を作成したら、その定義のバージョン番号を指定できます。バージョン番号は、1 から 15 の範囲の整数です。「バージョン」フィールドをブランクのままにしたり、バージョン番号に 0 を指定したりすると、使用可能な最初のバージョン番号が自動的に割り当てられます。

バージョン番号は、リソース定義が CICSplex SM データ・リポジトリに保管される際にその定義に割り当てられます。

CICSplex SM は、定義のリソース・タイプでバージョン番号が固有になるようにします。

注:

1. 既存のリソース定義を更新する時、CICSplex SM は新しいバージョンを生成しません。
2. リソース定義の名前フィールドと同様に、ビュー内でリソース定義を参照または更新している間は、バージョン・フィールドを変更できません。さらに、新しいリソース定義を作成する場合、バージョン・フィールドは、作成ビューの入力パネルでのみ入力できます (これも名前フィールドと同様です)。
3. バッチ・リポジトリ更新機能またはアプリケーション・プログラミング・インターフェース (API) を使用してリソース定義を作成する際、DEFVER キーワードを使用して新しい定義のバージョン番号を指定できます。
4. CICSplex SM では、同じリソース定義の複数のバージョンを 1 つの CICS システムにインストールすることは許可されません。

リソース定義の特定の変異型の識別に役立てるためにバージョン番号を使用するというポリシーを持っている場合は、その目的でバージョン番号を使用することがで

きます。そうでない場合は、リソース定義の、ある特定のバージョンを除去し、次に新しいバージョンを定義した場合、そのバージョン番号単独では最新のバージョンを示していない可能性があります。

例えば、(1 から 15 の番号が付いた) リソース定義の 15 個のバージョンを定義し、次にバージョン 3 と 12 を除去したとします。次回そのリソース定義の新しいバージョンを作成する際にバージョン番号を指定しないと、CICSplex SM は、使用可能なバージョン番号を、低い番号から高い番号の順に再使用します。したがって、この例では、リソース定義の最新バージョンはバージョン 3 になる可能性があります。

この理由により、バージョン番号単独では、リソース定義の最新バージョンを識別するのに十分でない可能性があります。それを可能にするために、CICSplex SM はタイム・スタンプを付けます。それにより、リソース定義のバージョンの日時順レコードが提供されます。リソース定義の、指定されたバージョンが作成された時刻と最後に更新された日時は、CICSplex SM によって、適切なリソース・テーブルの **CREATETIME** 属性と **CHANGETIME** 属性に維持されます。これらの値は、定義を作成または変更したユーザーの時間帯ではなく、保守ポイント CMAS の時間帯を使用して記録されます。それに加え、これらの値は、それらが記録される時刻に固定され、その後の保守ポイント CMAS のタイム・ゾーンの変更の影響は受けません。

バージョン番号を明示的に使用して特定のバージョンを識別せず、最後に作成されたバージョンを識別したい場合は、以下のいずれかを実行できます。

- 日時フィールドを検査する
- 定義を作成する際に、定義のユーザー・データ・フィールドを明示的に使用する。これらのフィールドはリソース定義の属性で、「リソース割り当て」の「インストール」ビューなどでフィルター基準として使用できます。例えば、最初のユーザー・データ・フィールドは制御フィールドとして指定され、そのフィールドは T (テスト) または P (実動) のいずれかの値を取る可能性があるという規則を取り入れることができます。この定義をテスト・システムにインストールするには、**USERDATA1=T** をフィルター基準として使用します。

CICS リリースでのリソースの可用性

一部のリソースは、サポートされているすべての CICS リリースで使用可能ではなく、この可用性は、WUI ビューに表示されるリソースに影響します。

ビューおよびアクション・コマンドの WUI ヘルプに、リソースの可用性に関する情報があります。

リソース定義ビューを表示した時、そのリソースを使用できない CICS のリリースを実行している領域が CICSplex に含まれている場合、それらの領域はビューに含まれません。リソース定義ビュー・コマンドを発行した時、使用できない CICS のリリースを実行している領域のみで CICSplex が構成されている場合、メッセージが表示されます。メッセージは、CICS 領域が実行されている CICS のリリースで使用できないアクション・コマンドを発行した時にも表示されます。

CICS 領域間での接続の定義

CICSplex SM を使用して、CICS 領域間の接続を定義および管理することができます。RDO で要求されるように通信ネットワーク内の各 CICS 領域を各パートナーに対して指定する代わりに、CICSplex 内のすべての CICS 領域に使用される汎用接続情報を指定することができます。

始める前に

CICS 領域を CICSplex SM に定義しておく必要があります。TCP/IP を使用して領域を接続する場合は、各 CICS 領域のホスト名、ネットワーク ID、およびポート番号を定義しておく必要があります。

このタスクについて

通信する CICS 領域のペアごとに、4 つのリソース定義が必要です。RDO を使用している場合、それぞれの定義は、指定された CICS 領域ペアに固有です。CICS 領域の別のペア間の接続にそれらを再使用することはできません。ビジネス・アプリケーション・サービスでは、CICS 領域ペアごとに 1 つのシステム・リンク (SYSLINK) を作成します。システム・リンク定義には、接続のタイプ、および必要な接続定義を記述します。こうした接続定義を、同じ特性を共用する数多くのシステム・リンクを作成するために使用できます。

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースのいずれかを使用して CICS 領域間の接続を定義できます。

手順

1. 接続する CICS 領域を指定します。CICSplex SM は、CICS システム ID (SYSIDNT) 属性値を使用してシステム・リンクを指定します。
2. 再使用する接続リソース定義を定義します。各接続リソース定義は、リソース・オブジェクトで表されます。
 - ISC 接続または MRO 接続を定義するには、接続定義とセッション定義用の CONNDEF リソース・オブジェクトと SESSDEF リソース・オブジェクトを作成します。

ヒント: WUI で MRO 接続を定義する際は、セッション定義受信接頭部を < に設定し、送信接頭部を > に設定することをお勧めします。独自の受信接頭部と送信接頭部を定義する場合は、各システム・リンク定義 (SYSLINK オブジェクト) のセッション定義を作成して、重複するセッション名が作成されないようにする必要があります。
 - IPIC 接続を定義するには、IPCONN 定義用と TCPIPSERVICE 定義用の IPCONDEF リソース・オブジェクトと TCPDEF リソース・オブジェクトを作成します。同じポート番号を接続に使用したい場合は、CICS 領域内の複数の SYSLINK 接続に同じ TCPDEF を使用できます。
3. システム・リンクを定義して CICS 領域間の接続を作成します。オプションで、既に定義されている SYSLINK オブジェクトに基づいて新しいシステム・リンクを定義することができます。
 - a. 1 次領域と 2 次領域の名前を指定します。1 次領域はリソース定義オブジェクトに接続し、2 次領域は接続のターゲット領域になります。

- b. 接続タイプを指定します。例えば、ISC 接続または MRO 接続に SNA 選択したり、TCP/IP 接続に IPIC を選択したりする場合があります。
- c. 再使用する接続の 1 次定義と 2 次定義を指定します。
- d. SYSLINK オブジェクトを作成します。

タスクの結果

SYSLINK リソース・オブジェクトがデータ・リポジトリに追加されます。IPIC 接続を作成している場合、1 次領域と 2 次領域のシステム定義属性は、IPCONDEF リソース・オブジェクトまたは TCPDEF リソース・オブジェクトのホスト、ネットワーク ID、およびポート番号に指定されているすべての値を上書きできます。

次のタスク

システム・リンクをインストールします。WUI ビューを使用したシステム・リンクのインストール方法の詳細については、142 ページの『WUI を使用したシステム・リンクのインストール』を参照してください。

リソース定義の検証

CICSplex SM は、RDO と同様に多くの同一リソース定義の検査を行います。しかし、CICSplex SM はさらに進んで、CICSplex 内の CICS システムに関連付けられたリソース・セット全体の検証を試行します。

個別リソース定義の検証: 個別リソースを定義またはインストールすると、CICSplex SM は以下を検査します。

リソースの個別の属性

各リソース定義の各属性が、有効値の CICS RDO ガイドラインに従って別々に検証されます。CICSplex SM は、リソースが定義される時に個別の属性エラーを報告します。すべての属性が有効になるまで、リソース定義は作成されず、データ・リポジトリ内に保管されません。

注:

1. 属性にブランクのスペースを指定すると、CICSplex SM は、CICS がデフォルト値 (ある場合) を割り当ててを許可します。
2. 属性に N/A を指定すると、CICSplex SM は、その属性が指定されていないかのようにリソース定義を処理します。他にどのような属性が指定されたかに応じて、CICSplex SM はその属性を無視するか、CICS RDO のガイドラインに従って適切な値を選択します。

相互に依存しているリソース属性

リソース定義の属性の中には、相互に依存している属性もあれば、相互に排他的な属性もあります。そのような属性の組み合わせは、CICS RDO ガイドラインを使用して検証されます。CICSplex SM は、リソースが定義される時に属性の組み合わせエラーを報告します。すべての相互依存型属性が解決されるまで、リソース定義は作成されず、データ・リポジトリ内に保管されません。属性の相互依存性の情報については、リソース定義の構文図を確認してください。

リリース固有のリソース属性

リソースは多くの CICS システムによって使用されるため、リソースを

CICSplex SM に定義する際は、あらゆる範囲の可能な属性を指定できます。ただし、指定された CICS システムにリソースがインストールされる時、CICSplex SM は、CICS のそのリリースに適切な属性のみをチェックし、それらの属性だけを使用します。CICSplex SM は、RDO と同様に、CICS の以前のリリースに含まれていた、廃止されたリソース属性を記録しています。そして、CICS システムに定義をインストールする際、CICSplex SM は、その CICS リリースで廃止されている属性をすべて廃棄し、適切な属性のみを保持します。

注: CICSplex SM は、できるだけ多くの CICS のレベルおよびプラットフォームでリソース定義を使用できるような方法で属性値の検証を試みます。ただし、CICS のさまざまなリリースでのリソース属性の多種多様性および相互依存性のため、CICSplex SM は、すべての潜在的な属性の競合をキャッチできない可能性があります。したがって、CICSplex SM で問題が検出されなくても、CICS の特定のリリースで指定のリソース・インストール要求が失敗する可能性があります。リソース・インストールの問題について詳しくは、113 ページの『動的インストール・エラーの処理』を参照してください。

リソース・セットの検証:

各システムで整合したリソース・セットを維持することは、CICS リソース定義の管理において不可欠な部分です。

以下のいずれかの操作を実行すると、要求された変更は、影響を受ける各 CICS システムの既存のリソース・セットに照らし合わせて検査されます。

- リソース・グループ内のリソース定義の追加または更新
- 記述内のリソース・グループの追加
- リソース記述の更新
- リソース割り当ての更新
- 記述内のリソース割り当ての追加または更新
- CICS のシステムを CICS システム・グループに追加します。

CICSplex SM は、追加または更新しようとしているリソース (候補 リソースと呼ばれる) が、CICS システムに既に存在するリソースと競合する場合、リソース・セットに不整合のフラグを立てます。

例えば、以下を試行した場合、不整合リソース・セットのエラーを受け取ります。

- 同じ CICS システムに同じリソースの別のバージョンを割り当てる。
- 同じ CICS システムにローカルおよびリモートの両方でリソースを割り当てる。

注:

1. トランザクション ID が指定されている Db2 エントリー定義 (DB2EDEF オブジェクト) は、その Db2 エントリー定義 (DB2EDEF オブジェクト) がインストールされる時に、Db2 エントリー (DB2NTRY オブジェクト) と Db2 トランザクション (DB2TRN) 操作可能オブジェクトの両方を作成できます (Db2 エントリー・リソース定義を参照)。したがって、2 つ以上の Db2 エントリー定義 (DB2EDEF オブジェクト) で同じトランザクション ID が指定されたり、Db2 エントリー定義 (DB2EDEF オブジェクト) から生成されるものと同じ名前を持

つ、明示的に定義された Db2 トランザクション定義 (DB2TDEF オブジェクト) との衝突が起こり、それによって競合が発生したりするために、不整合セット・エラーを受け取る可能性があります。

2. 133 ページの『リソース割り当て定義』の説明に従って、「リソース割り当て」ビュー (RASGNDEF オブジェクト) の「指定変更ストリング」フィールドを使用して、選択した BAS オブジェクトの値を変更できます。この方法を使用して Db2 エントリー定義 (DB2EDEF オブジェクト) の Transid フィールドを変更し、その結果として Db2 トランザクション (DB2TRAN オブジェクト) の名前で衝突が生じた場合、CICSplex SM はこの事実を不整合セットの処理中に検出しません。

CICS システム割り当ての検証: CICSplex SM は、指定されたターゲット・スコープと関連スコープの値を検証して、リソースがどこに割り当てられるかを管理します。以下のことを実行するように CICSplex SM に要求した場合

- リソース記述の更新
- リソース割り当ての更新
- 記述内のリソース割り当ての追加または更新
- CICS のシステムを CICS システム・グループに追加します。

ターゲット・スコープと関連スコープの値が互いに競合しないように、要求された変更が検査されます。CICSplex SM は、以下の場合には、ターゲットおよび関連のスコープに不整合であるというフラグを立てます。

- この 2 つの間にオーバーラップがある (例えば、同じ CICS システムが両方のスコープにある、など)。
- 関連のスコープが、システム ID が定義された単一 CICS システム以外のものである。

要求しているいずれかの変更の結果として不整合スコープが生じる場合は、関連する表形式ビューの上部にその旨のメッセージが表示されます。それらのメッセージ番号をクリックすると、メッセージの全文と問題を解決するためのヘルプが表示されます。

リソース記述によるリソースの制御

リソースのセットを管理するための最もシンプルな方法は、リソース・グループをリソース記述に直接関連付けることです。このためには、以下の手順を実行します。

1. リソース・グループを作成し、それらにリソース定義を追加します。
2. リソース・グループを関連付けるリソース記述を作成 (または既存のリソース記述を指定) します。

リソース記述の「リソース・グループ・スコープ名」フィールドを使用して、グループ内のすべてのリソースを割り当てる CICS システムまたは CICS システム・グループを指定します。

3. 「リソース・グループ定義」ビューの「リソース記述への追加」ボタンを使用して、1 つ以上のリソース・グループを記述に関連付けます。これにより、記述内のリソース・グループ・リンク・レコード (RESINDSC) が作成されます。

この結果、リソース・グループ内のすべてのリソースが、ちょうど CICSplex SM に定義されていた時のように、指定された CICS システムに割り当てられます。これは、RDO が CSD グループ・リストの定義を処理する方法に似ています。

RDO と同様に、リソースを管理に対するこのシンプルなアプローチでは、リソースのエLEMENTごとに別々のリソース定義が必要です。したがって、ある CICS システムにとってはローカルであり、別の CICS システムにとってはリモートであるリソースを割り当てるには、2 つのリソース定義が必要になります。そして、リソース記述によって表されるリソースは、アプリケーションなどの論理機能によってではなく、それらが存在する CICS システムによって物理的に関連している可能性が高くなります。

リソース・グループ全体をリソース記述に直接関連付けることは、他の CICSplex SM コンポーネント (ワークロード・マネージャーなど) によって使用される基本的オブジェクト・モデルと一致しています。そして、このアプローチは、RDO と同様の方法でビジネス・アプリケーション・サービスを使用するためには十分です。ただし、これは、リソース割り当てを使用した CICS リソースの完全管理への途中の暫定ステップと見なすこともできます。

リソース割り当てによるリソースの制御

リソース割り当ては、定義、グループ、および記述という基本的 CICSplex SM オブジェクト・モデルからの脱却です。リソース割り当てにより、かなりの程度の柔軟性と制御がリソース定義に追加されます。また、CICSplex 内のリソース管理の精度も向上します。

リソース定義をリソース・グループにまとめると、リソース割り当てを使用して以下のことを実行できます。

- 特定のグループ内の指定のタイプのリソースを制御します。それぞれのリソース割り当ては、1 つのリソース・グループ内の 1 つのタイプのリソース (例えば、ファイル) に適用されます。
- リソースをローカルまたはリモートとして識別し、それらを単一のリソース定義を使用して種々の CICS システムに割り当てます。ローカル・リソースは、ターゲット・システムとして識別される CICS システムにのみ割り当てられます。リモート・リソースは、ターゲット・システムに対してリモートとして割り当てられます。また、リモート・リソースは、識別された関連システムに対するローカル・リソースとしても割り当てられます。
- フィルター式を指定して、グループから選択したリソースを処理します。フィルター式は、リソースのフィルター操作 (例えば、名前が PAY で始まるリソース) で使用される論理式から成る文字ストリングです。
- オーバーライド式を指定して、特定の使用法をするためにリソース属性を変更します。指定変更式は、指定された CICS システムにリソースが割り当てられる際に、そのリソースの 1 つ以上の属性に対して行われる変更を識別する文字ストリングです。

ビジネス・アプリケーション・サービスを十分に活用するには、リソース・グループをリソース割り当てに関連付け、割り当てをリソース記述に関連付ける必要があります。このためには、以下のことを実行します。

1. リソース・グループを作成し、それらにリソース定義を追加します。

2. 管理するリソースのタイプごとに 1 つのリソース割り当てを作成します。

各リソース割り当てで「リソース・グループ名」、「ターゲット・スコープ名」、および「関連スコープ名」の各フィールドを使用して、リソース・グループと、それらを割り当てる CICS システムを識別します。

さらに、フィルター・ストリング式を使用してグループからリソースを選択し、指定変更ストリング式を使用して特定のリソース属性を変更することもできます。

3. リソース割り当てを関連付けるリソース記述を作成します (または既存のリソース記述を識別します)。

この方法において、リソース記述は、実際のところ、さまざまなリソースのリソース割り当てを、1 つの意味のあるセット (例えば、アプリケーション) にグループ化する手段です。リソースの選択と割り当ては、最終的にはリソース割り当てによって制御されます。

4. 「リソース割り当て定義」ビューの「リソース記述への追加」ボタンを使用して、リソース割り当てをリソース記述に関連付けます。これにより、記述内のリソース割り当てリンク・レコード (RASINDSC) が作成されます。

同じリソースが一般に複数のアプリケーションによって使用されるのと同様に、同じリソース割り当てを複数のリソース記述に関連付けることができることに注意してください。

リソース割り当ての値に応じて、リソース・グループ内の一部またはすべてのリソースをローカル・リソースまたはリモート・リソースとして複数の CICS システムに割り当てることができます。

論理スコープを使用したアプリケーション・リソースの制御

ビジネス・アプリケーション・サービスにより、エンタープライズ内での目的および論理関係に従って、CICS リソースをモニターおよび制御することができます。例えば、1 つ以上の CICS システムまたは CICS システム・グループ内のリソースを表示するのではなく、現在 1 つのビジネス・アプリケーションの一部として定義されているすべてのリソースを表示することができます。これにより、位置依存型で、変更される可能性がある物理スコープではなく、CICSplex SM 要求の論理スコープを指定することが可能になります。

ビジネス・アプリケーションは、企業内のユーザーにとって意味のあるエンティティを表すどのようなリソース・セットも可能です。リソースは、CICSplex 内のどの CICS システムに存在していてもかまいません。リソースが CICSplex SM に対し定義されている場合は、それらが CICS のどのプラットフォームまたはリリースに定義されているかに関係なく、ビジネス・アプリケーション・サービスはそれらを見つけて管理することができます。

ビジネス・アプリケーションが CICSplex SM によって認識されるためには、リソース記述内の論理スコープ名を割り当てる必要があります。リソース記述を作成する際は、アプリケーションを形成するリソース定義と、アプリケーションを関連付ける CICS システムを識別する必要があります。

注: ビジネス・アプリケーションの概念は、CICSplex SM のリソース・インストール機能とは無関係です。リソース・インストールをサポートしていない CICS システムでも、CICSplex SM によって管理されるビジネス・アプリケーションに含めることができます。

リソースのセットを 1 つのアプリケーションとして識別するには、以下を実行する必要があります。

1. ビジネス・アプリケーション・サービスのリソース定義ビューを使用して、リソースを CICSplex SM に定義します。
2. 1 つ以上のリソース・グループ (RESGROUP) を作成し、それらにリソース定義を追加します。
3. リソース記述 (RESDESC) を作成し、論理スコープとして使用される名前を指定します。
4. リソース定義の処理方法を決定し、次に、以下のいずれかを実行します。
 - (RESINDSC を介して) リソース・グループをリソース記述に直接関連付ける。
 - リソース定義のセットをさらに限定したい場合、リソース記述をリソース割り当てに関連付ける (RASGNDEF)。

アプリケーションが CICSplex SM に対して論理スコープとして識別されたら、スコープ値を受け入れるどの CICSplex SM WUI ビューまたは API 要求でもその名前を指定できます。

注: 論理スコープ名は、BAS によって定義できないリソースには有効なスコープではありません (システム・ダンプ・コードなど)。しかし、論理スコープ名は、CICS 領域 (CICSRGN) および実行時の **MAS** 表示 (MAS) のビューには有効です。これらのビューには、指定された論理スコープにリソースを含む可能性のある領域が表示されます。

以下のリソースは、論理スコープには無効です。

AIMODEL
DSKJRNL
EJCOSE
EJDJAR
JOURNAL
JVMSESV
MQCONN
RQMODEL
WEBSERV

CICSplex SM に対するリモート・リソースの識別

リソース定義のみを使用するか、あるいはリソース割り当てを使用するかを選択は、リモート・リソースの処理に影響を与えます。リモート・リソースは、ローカル CICS システムに定義されていますが、別のシステム内にあります。リモート・リソースは、ローカル CICS システムではある名前を使用し、リモート・システム

では別の名前を使用することが可能です。CICSplex SM は、リソースの管理方法に応じて異なる方法でリモート・リソース定義を処理します。

リソース記述のみを使用

この場合、リソース・グループ内の各リソース定義は、CICS システムに直接関連付けられます。したがって、リモート・リソースは、ローカル CICS システム用と、リモート・システム用という 2 つの定義で構成されます。

CICSplex SM は、リソース定義でリモート・システム ID とリモート名の値を使用して、リモート・リソースを識別します。

リソース割り当てを使用

リソース割り当てを使用すると、単一のリソース定義によってローカル・システムとリモート・システムの両方にリモート・リソースを完全に示すことができます。CICSplex SM は、それぞれのシステムに適切な属性を選択して処理します。

リソース割り当てのリモート・システム ID は、ローカル・システムとリモート・システムのペア間で使用される接続の名前です。名前が指定されていない場合、CICSplex SM は、リモート・システムの CICS システム ID (SYSIDNT) を、ローカル・システムとリモート・システム間で使用される接続の名前として使用します。

リソース定義にリモート名を指定すると、リソースを関連 (リモート) システムに割り当てる際にその名前が使用されます。そうでない場合は、ターゲット・システムと関連システムの両方でローカル名 (つまり、リソース定義に指定する名前) が使用されます。

CICS リソースのインストール

ビジネス・アプリケーション・サービス (BAS) を使用して、CICS リソースのインストールができます。CICS 自体と同様に、CICSplex SM は、リソースをシステム初期設定時に自動的にインストールすることも、アクティブ・システムに動的にインストールすることもできます。

CICS 領域は、CICS のさまざまなリリースを実行している可能性があります、すべてのリソースが、CICS 領域のすべてのレベルで使用可能なわけではありません。詳細については、リソース定義オブジェクトの個別の説明を参照してください。インストール機能は、**EXEC CICS CREATE** コマンドを使用して、CSD とは無関係にリソースを作成できます。

CICSplex SM を使用して CICS リソースをインストールする時、それらのリソースで、システム内に存在する可能性がある全く同じリソースを置換できます。

注:

1. BAS を使用して CICS システムの初期設定時にリソースを自動的にインストールする場合は、そのシステムに対して、CICSplex SM のシステム・パラメーターである MASPLTWAIT(YES) を指定する必要があります。このパラメーターを指定すると、すべての CICS リソースがインストールされ、MAS が完全に初期設定されるまで、PLT 処理は中断されます。このパラメーターの指定について詳しくは、z/OS MAS の始動の準備を参照してください。

2. Db2 接続定義 (DB2CDEF オブジェクト) を介して Db2 接続の活動化を準備する際には、特別な考慮事項があります。詳しくは、CICS 始動時の Db2 および IBM MQ 接続のアクティブ化を参照してください。
3. CICSplex SM 環境が初期設定される前に、BAS を使用して IBM MQ 接続をインストールすることは不可能です。
4. ジャーナル定義 (JRNLEDEF オブジェクト) をインストールすることは不可能です。
5. ネストされた総称エンキュー名を形成するエンキュー・モデルは、使用不可の状態でインストールするか、または最も特定されているもの (例えば、ABCD) から最も特定されていないもの (例えば、AB*) の順にインストールする必要があります。使用不可のエンキュー・モデルは任意の順序でインストールできますが、それらを使用可能にする際は、最も特定されているものから最も特定されていないものの順に行う必要があります。詳細については、BAS グローバル・エンキュー・モデル定義のインストールを参照してください。
6. MAS が EXEC CREATE コマンドの LOGMESSAGE オプションをサポートしている場合は、CICSplex SM のシステム・パラメーター BASLOGMSG(NO) を使用して、CICS が BAS CICS リソース定義を CSDL 一時データ・キューにロギングしないようにすることができます。また、BASLOGMSG(YES) を設定して、このロギングの実行を許可し、問題判別に役立てることもできます。

リソース・グループのインストール

リソース・グループをインストールする場合、そのグループに含まれている 1 つの指定されたタイプのリソースの一部またはすべてをインストールすることができます。

このタスクについて

インストールするリソースを選択するには、フィルター演算式を使用できます。これらのリソースの、必要な CICS システムおよび使用法の情報を指定するか、その情報の既存のリソース割り当てを参照することができます。そして、個別リソースの場合と同様に、選択したリソースの固有属性に一時的指定変更値を指定できます。

手順

1. WUI メインメニューから「管理ビュー」>「ベーシック CICS リソース管理ビュー」>「リソース・グループ」をクリックして、「リソース・グループ定義」表形式ビューを開きます。このビューに、現行コンテキスト内の既存のリソース・グループがリストされます。
2. インストールするリソースを選択し、「インストール」ボタンをクリックして「インストール」ビューを表示します。この画面で、グループ内のリソース定義に関する情報、およびそれらのリソースのインストール方法に関する情報を指定するよう求めるプロンプトが出されます。これらの情報は、通常、リソース割り当てで提供されます。「インストール」アクション・ボタンを使用してリソース・グループを手動でインストールする場合は、インストール・オプションを明示的に指定するか、既存のリソース割り当てを参照することができます。リソース割り当てを指定した場合は、ここに指定された値により、割り当て内の同等の値が一時的に指定変更されます。

注: このパネルに指定する値は、この 1 回のインストール・プロセスの期間にのみ有効です。このパネルの結果としてリソース割り当てが作成または更新されることはありません。同じインストール・オプション・セットを複数回使用した場合は、新しいリソース割り当てを作成してください。

3. 必要に応じて、以下の情報を指定します。

リソース割り当て値

(オプション。) このインストールに使用する値が含まれている既存のリソース割り当ての固有名または総称名を入力します。汎用値を入力した場合、有効なリソース割り当てのリストが表示されます。

割り当て名を指定した場合、以下のフィールドはこのパネルでのオプションとなります。

- ターゲット・スコープ値
- 関連スコープ値
- 使用値
- モード値
- 指定変更値

これらのフィールドに値を指定した場合、一時的にそのフィールド値が、対応する割り当て値に優先します。割り当て名を指定しない場合、これらのフィールドは必須です。

リソース・タイプ


ドロップダウン・リストから、インストールするリソースのタイプを選択します。

注: 以下のタイプのリソース定義は動的にインストールできません。

- ファイル・キー・セグメント定義 (FSEGDEF オブジェクト)。
- ジャーナル定義 (JRNLEDEF オブジェクト)。
- セッション定義 (SESSDEF オブジェクト)。

参照割り当て名

「リソース・タイプ」フィールドに、(接続の) CONNDEF が含まれている場合は、関連したセッション定義 (SESSDEF オブジェクト) に適用されるリソース割り当てを指定します。CICSplex SM では、実際の CICS リンクを適切に構成するため、接続ごとに1つ以上のセッション定

義が必要です。隣接する  アイコンをクリックするとリソース選択画面が表示され、使用可能リソースのリストからリソースを選択することができます。

ターゲット・スコープ値

既存の CICS システムまたは CICS システム・グループの固有名または総称名を入力します。指定されたリソースがインストールされる

関連スコープ値

REMOTE として指定されたリソースが LOCAL としてインストールされる既存の CICS システムの固有名または総称名を入力します。

注: 動的として定義されているリモート・トランザクション定義 (TRANDEF オブジェクト) については、関連スコープ値用の CICS システム・グループを指定できます。その他のすべてのリモート・リソースについては、単一の CICS システムで構成されている場合のみ、CICS システム・グループを指定できます。

使用値

リソースの使用方法を以下のように指定します。

LOCAL

リソースはターゲット CICS システム内に含まれています。

LOCAL は、サポートされるすべてのリソース・タイプで有効です。

REMOTE

リソース定義は、別の CICS システム内にあるリソースを参照します。REMOTE を指定する場合は、リソースのローカル・インスタンスを含む CICS システムを示すため、「関連スコープ値」も指定する必要があります。REMOTE は、以下のリソース・タイプにのみ有効です。

- ファイル定義 (FILEDEF オブジェクト)
- プログラム定義 (PROGDEF オブジェクト)
- 一時データ・キュー定義 (TDQDEF オブジェクト)
- トランザクション定義 (TRANDEF オブジェクト)

注:

- a. REMOTE を指定すると、リソースは、「ターゲット・スコープ値」と「関連スコープ値」の両方のフィールドで示されているすべての CICS システムに割り当てられます。同様に、この割り当てに関連付けられているリソースがインストールされると、リモート・リソースは、ターゲット・スコープと関連スコープの両方にインストールされます。
- b. 一時記憶キューがリモート・システムに作成される可能性があります。しかし、キューの属性を制御する一時記憶モデルは常にローカル・リソースになります。したがって、一時記憶モデル定義をインストールする際、「使用値」では常に LOCAL を指定する必要があります。BAS 一時記憶域モデル定義のインストールを参照してください。TSMDEF リモート・システム属性の説明については、一時記憶域モデルの定義 - TSMDEFを参照してください。

モード値

一部のリソース・タイプでは、CICSplex SM はインストールを完了するためにリソース属性のどのサブセットを使用するかを判別するための追加情報を必要とします。指定するモード値は、インストールするリソース・タイプによって異なります。

プログラム (PROGDEF)

「使用法」フィールドに LOCAL を指定した場合は、CICS がプログラムをシステムへ自動的にインストールするように、AUTO を指定することができます。AUTOは、CICS システムでプログラムの明示的な定義が必要ないことを示します。その他の場合、N/A を指定します。

「使用法」フィールドに REMOTE が指定されている場合は、プログラムのルーティング方法を指定できます。

DYNAM

プログラムは、動的ルーティング・プログラム (DTR) によって処理されます。

STAT プログラムは「関連スコープ」で指定されたりリモート CICS システムに送信されます。

トランザクション (TRANDEF)

トランザクションが動的ルーティング・プログラムにより処理されるかどうかを指定することができます。「使用値」フィールドに REMOTE が含まれている場合は、「モード値」を指定する必要があります。

DYNAM

トランザクションは動的ルーティング・プログラムにより処理されます。

STAT 各トランザクションが、トランザクション定義 (TRANDEF) に示されているリモート CICS システムへ送信されます。このモードを指定できるのは、「使用値」フィールドに REMOTE がある場合だけです。

注: ここに指定された値は、TRANDEF の Dynamic 値を指定変更します。

一時データ・キュー (TDQDEF)

インストールする一時データ・キューのタイプを次のように指定できます。

EXTRA

区画外 TDQ。

IND 間接 TDQ。

INTRA

区画内 TDQ。

N_a を指定すると、CICSplex SM は TDQDEF 内のタイプ値を使用して一時データ・キューをインストールします。タイプ値が REMOTE である場合、CICSplex SM は間接 TDQ をインストールします。

その他のすべてのリソースでは、モード・データは必要ないため、N_a を指定します。

上書き値

リソースに対して指定変更式を指定する予定の場合は、以下のように、指定変更値を適用するスコープを指定します。

BOTH

指定変更値を両方のスコープに適用します。

なし 指定変更値を適用しません。

RELATED

指定変更値を「関連スコープ」のみに適用します。

TARGET

指定変更値を「ターゲット・スコープ」のみに適用します。

通知値

指定された CICS システムへのリソースのインストールを試行する前に実行する検査のタイプを以下のように指定します。

NO 検査は実行されません。

INACTIVE

ターゲット・スコープで、現在アクティブでない CICS システムについて検査します。

RELEASE

ターゲット・スコープで、EXEC CICS CREATE コマンドをサポートしていない CICS システムについて検査します。

FULL INACTIVE および RELEASE 検査の両方を実行します。

状態検査値

EXEC CICS CREATE コマンドを発行する前にすべてのリソースの有無と操作状態を検査するかどうかを示します。

NO すべてのリソースの有無と操作状態を検査しません。

YES すべてのリソースの有無と操作状態を検査します。

強制インストール値

「YES」または「NO」を指定して、CICSplex SM がインストール不要と判断した場合でもリソースをインストールするかどうかを示します。

通常、CICSplex SM は、現在インストールされているリソースが自己の責任のもとに CICS システムに配置されたものかどうかを調べて確認します。CICSplex SM の責任で配置されたものだった場合、CICSplex SM は、アクティブ・リソースの属性が不用意に変更されることを避けるため、リソースをインストールしません。

このフィールドに YES を指定すると、CICSplex SM はこのリソースの重複検査をバイパスし、新しいリソースを無条件でインストールします。

フィルター・ストリング

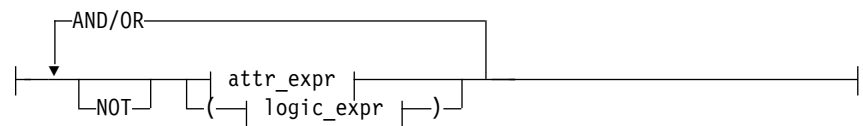
(オプション。) インストールされるリソースを選択するために使用する属性を指定します。CICSplex SM は、指定されたフィルター基準を満たす資源のみを処理します。

フィルター式は、次の形式の 1 つ以上の属性式で構成できます。

フィルター式

▶▶ | logic_expr | .————▶▶

logic_expr:



attr_expr:

| attr—oper—value |————|

ここで、

attr

指定したリソースのリソース・テーブルにある属性の名前。 フィルター式では、同じ属性を複数回指定できます。

oper

以下の比較演算子のいずれか。

<	より小さい
<=	より小か等しい
=	等しい
>=	より大か等しい
>	より大きい
≠	等しくない

value

属性のテスト対象となる値。これは、属性に対して有効な値でなければなりません。

属性が文字データを受け入れる場合には、総称値の指定が可能です。総称値には、次のものを含めることができます。

- アスタリスク (*)。任意の数の文字 (0 文字を含む) を表します。アスタリスクは指定値の中で最後に置く必要があります。これを 1 文字だけで使用することもできます。例:

TRANID=PAY*

- 正符号 (+)。単一文字を表します。+ は、指定値の中で 1 回以上使用できます。例:

TRANID=PY++

値に組み込みブランクまたは特殊文字 (ピリオド、コンマ、等号など) が含まれる場合、値ストリング全体を単一引用符で囲む必要があります。例:

TERMID='Z AB'

値に単一引用符またはアポストロフィーを組み込む場合は、文字を繰り返す必要があります。例えば、次のようにします。

DESCRIPTION='October''s Payroll'

AND/OR

論理演算子 AND および OR を使用して、属性式を複合論理式に結合します。例えば、次のようにします。

attr_expr AND attr_expr.

フィルター式は、左から右に評価されます。括弧を使用すると、フィルター式の意味を変えることができます。例えば、次のような式があるとしたします。

attr_expr AND (attr_expr OR attr_expr).

これは、次の式とは意味が異なります。

(attr_expr AND attr_expr) OR attr_expr.

NOT

1 つ以上の属性式を否定します。

単一の属性式を否定することができます。例えば、次のようにします。

NOT attr_expr

複数の属性式を否定することもできますし、次のようにしてフィルター式全体を否定することもできます。

NOT (attr_expr OR attr_expr).

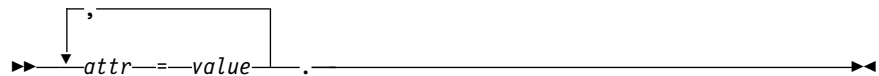
否定する複数の属性式 (またはフィルター式) の前後を括弧で囲む必要がある点に注意してください。

指定変更ストリング

(オプション。) 指定した 1 つ以上のスコープにインストールされる時に値が変更される、指定したリソースの属性を指定します。(「上書き値」フィールドの値は、指定変更値が適用されるスコープを決定します。)

指定変更式は、次の形式の 1 つ以上の属性式で構成できます。

指定変更式



ここで、

attr

リソースの変更可能な属性の名前です。

value

属性の値として設定する値です。次の制限が適用されます。

- これは、属性に対して有効な値でなければなりません。
- 値に組み込みブランクまたは特殊文字 (ピリオド、コンマ、等号など) が含まれる場合、以下のように、値ストリング全体を単一引用符で囲む必要があります。

DESCRIPTION='Payroll.OCT'.

- 値に単一引用符またはアポストロフィーを組み込む場合は、文字を繰り返す必要があります。例えば、次のようにします。

DESCRIPTION='October''s Payroll'.

4. 指定した CICS システムにリソース・グループをインストールするには「はい」をクリックします。

リソース記述のインストール

リソース記述をインストールすると、その記述に直接または間接的に関連付けられたリソース・グループからリソースがインストールされます。

始める前に

リソース記述を使用してリソースをインストールするには、CICS 領域がアクティブになっており、**EXEC CICS CREATE** コマンドをサポートする CICS のリリースを実行している必要があります。

このタスクについて

手順

1. WUI メインメニューから「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース記述」をクリックして、「リソース記述定義」表形式ビューを開きます。このビューに、現行コンテキスト内の既存のリソース記述がリストされます。

2. インストールするリソース記述を選択し、「インストール」アクション・ボタンをクリックします。このアクション・ボタンにより、「インストール」入力パネルが開きます。
3. 以下の手順を実行して、入力パネルのフィールドに入力して、リソースをインストールする前に CICSplex SM が実行する検査を選択します。
 - a. 記述に関連付けられた CICS 領域へのリソースのインストールを試行する前に実行する検査のタイプを選択します。
 - b. **EXEC CICS CREATE** コマンドを発行する前にすべてのリソースの有無と操作状態を検査するかどうかを選択します。
 - c. CICSplex SM でリソースのインストールを強制するかどうかを選択します。CICSplex SM は、CICS 領域に現行リソースがインストールされているかどうかを確認します。インストールされている場合、CICSplex SM は、アクティブ・リソースの属性が変更されるのを避けるため、リソースをインストールしません。この処理をバイパスして、新しいリソースを無条件でインストールできます。
4. 「はい」をクリックして、アクティブな CICS 領域にリソース記述をインストールします。

タスクの結果

「リソース記述定義」ビューから「インストール」アクションを使用すると、CICSplex SM は、リソース記述に関連付けられたリソースをすべて、「ターゲット・スコープ」フィールドと「関連スコープ」フィールドに指定された CICS 領域にインストールしようとします。

- 記述に直接関連付けられたリソースは、記述の「リソース・グループ・スコープ名」フィールドに指定された CICS 領域にインストールされます。
- リソース割り当てを使用して記述に関連付けられたリソースは、ターゲット・スコープ領域および関連スコープ領域にインストールされます。これらの CICS 領域は、リソース割り当て、リソース記述、またはそれらの間の関連 (リソース記述内のリソース割り当てビュー) によって識別できます。

次のタスク

また、インストールされているリソース記述に関連付けられたリソースは、新しい記述に関連付けられたリソースに置換できます。リソース記述を置換すると、CICSplex SM は以下の処理を実行します。

- 古いリソース記述に関連付けられたリソースをすべて破棄しますが、新しいリソース記述に関連付けられたリソースは破棄しません。
- 定義が変更されたかどうかに関係なく、古いリソース記述に関連付けられたリソースも新しいリソース記述に関連付けられたリソースもすべて再インストールします。
- 新しいリソース記述に関連付けられた追加のリソースをすべてインストールします。

リソースのインストール場所の決定

ビジネス・アプリケーション・サービスを使用して、1 つの要求を発行し、CICSplex 全体にわたってリソースをインストールすることができます。重要な点

は、リソースをできるだけ幅広く定義し、1 度にできるだけ多くの CICS システムにそのリソースをインストールすることです。1 つのリソース定義を使用して、リソースの複数インスタンスを複数の CICS システムにインストールすることができます。そして、その同じリソース定義を、ローカル・リソースとリモート・リソースをインストールするために使用できます。例えば、1 つのトランザクション定義を使用して、ローカル・トランザクションをアプリケーション専有領域 (AOR) にインストールし、リモート・トランザクションを端末専有領域 (TOR) にインストールすることができます。

どのリソースをどこにインストールするかを決定するために、CICSplex SM は、リソース割り当て、リソース記述、およびそれらの間の関連で、ターゲット・スコープ、関連スコープ、およびリソース・グループの値を確認します。これらの定義内の情報は、以下のように処理されます。

1. リソース割り当て (RASGNDEF オブジェクト) が優先されます。指定された他のどの値にも関係なく、リソース割り当てに明示的に定義された値が使用されます。
2. リソース割り当て定義で検出されない値については、CICSplex SM はリソース割り当てと記述との間の関連 (RASINDSC オブジェクト) をチェックし、そこで検出された値を使用します。
3. リソース割り当てでもリソース割り当てと記述との間の関連定義でも検出されない値については、CICSplex SM はリソース記述 (RESDESC オブジェクト) をチェックし、それらの値を使用します。他の値が指定されていない場合は、リソース記述の値がデフォルトとして機能します。

したがって、1 つ以上のリソース記述定義で企業の標準ターゲットと関連スコープの値を識別できます。次に、(例えば、特定のリソース・タイプの) 特定の割り当て目的のために、リソース割り当て定義、またはリソース割り当てと記述との間の関連定義に異なる値を指定して、それらの標準値をオーバーライドすることができます。

自動リソース・インストール

CICS システムでのリソースの自動インストールは、以下によって制御されます。

- CICS システム定義。これは、どのような条件でリソースをインストールし、インストール・エラーが発生した場合に何をすべきかを CICSplex SM に指示します。
- 1 つ以上のリソース記述、およびオプションでリソース割り当て。これらは、どのリソースをインストールし、それらをどのようにインストールするかを CICSplex SM に指示します。

CICS システムが初期化され、CMAS に認識されると、CICSplex SM はその CICS システムに関連付けられているすべてのリソース記述を検討し、インストールすべきリソース・セットを決定します。

リソースの自動的インストール

CICSplex の保守ポイント CMAS がアクティブでない場合でも、CICS システムにリソースを自動的にインストールすることができます。

このタスクについて

CICS システムが初期設定される時にリソース・セットを自動的にインストールするには、以下の手順を実行します。

手順

1. 「**CICS** システム定義」ビュー (CSYSDEF オブジェクト) を使用して CICS システム定義を更新し、以下を指定します。
 - a. リソースのインストールは、システムが初期化されるたびに行うか、コールド・スタートまたはウォーム (AUTO) スタートの時だけ行うか、あるいはまったく行わないか。CICSplex SM は、CICS システムの初期始動を、コールド・スタートの場合と同じ方法で処理します。CICS の緊急再始動は、ウォーム・スタートと同じ方法で処理されます。
 - b. 発生する可能性があるリソース・インストール・エラーが、CICSplex SM でどのように処理されるか。
2. 以下の手順を実行して、「リソース記述」ビュー (RESDESC オブジェクト) を使用して 1 つ以上のリソース記述を作成します。
 - a. 「自動インストール」フィールドに「はい (YES)」と指定して、自動リソース・インストールを有効にします。
 - b. インストールするリソースのグループを指定します。

「リソース記述内のリソース・グループ」ビュー (RESINDSC オブジェクト) を使用してリソース・グループがリソース記述に直接関連付けられている場合、リソースは、記述の「リソース・グループ・スコープ名」フィールドに指定された CICS システムにインストールされます。
3. オプション: 「リソース割り当て定義」ビュー (RASGNDEF オブジェクト) を使用してリソース記述をリソース割り当てに関連付けて特定のリソースを選択し、使用情報と指定変更値を指定します。

この場合、リソースは、リソース割り当て、リソース記述、またはそれらの間の関連の「ターゲット・スコープ」フィールドと「関連スコープ」フィールドに指定された CICS システムにインストールされます。

割り当てられたリソース記述に関するパフォーマンスの考慮事項:

CICSplex 内にリソース記述を持つインストール割り当ての数が多すぎると、パフォーマンスに影響する可能性があります。

BAS リソース定義がリソース記述 (RESDESC オブジェクト) を介してターゲット CICS システムに関連付けられるたびに、そのインストール割り当てのエントリーがリソース・セット・テーブルに作成されます。リソース・セット・テーブルは、BAS ストレージ・キャッシュ内の内部テーブルです。

例えば、マイグレーション・モードで 50 個のプログラム定義 (PROGDEF オブジェクト) が関連付けられた 1 つだけのリソース記述定義を持つデータ・リポジトリについて検討してみます。このリソース記述のターゲット・スコープが単一の MAS に割り当てられると、リソース・セット・テーブルは 50 個のエントリー (ターゲット MAS のプログラム定義インスタンスごとに 1 つのエントリー) で初期設定されます。リソース記述のターゲット・スコープを、20 個の MAS から成る

CICS システム・グループに変更すると、リソース・セット・テーブル内のエントリー数は 1000 個 (50 個のリソース定義を 20 個のターゲット領域で乗算) に増加します。パフォーマンスを最適化するために、このリソース・セット・テーブルは隣接するストレージに保持されます。

したがって、BAS ストレージ・キャッシュには有限サイズがあるため、CICSplex 内でリソース記述に対して実行できるインストール割り当て数には制限があります。この制限は、特定のインストールごとに異なりますが、CICSplex 全体でリソース定義の割り当てが 150,000 個を超えると、パフォーマンスに問題が生じる可能性があります。CICSplex がその制限を超えると予想される場合は、自動インストール・サービスを使用して静的定義数を削減することを検討してください。

自動インストール・エラーの処理

このタスクについて

システムが初期化する時に CICS システムのリソース記述で識別されたいずれかのリソースをインストールできない場合、CICSplex SM は以下のことを実行します。

- EYUBNnnnn メッセージを CICS ジョブ・ログと EYULOG に発行します。これらのメッセージには、リソースと、それらのリソースをインストールできなかった理由が、CICS によって返された可能性があるエラー・コードを含めて記載されています。

注: さらに、ジョブ・ログには、インストール・エラーに関する詳細情報と共に CICS メッセージが含まれています。

- 以下のように、**CICS** システム定義 ビュー (CSYSDEF オブジェクト) のリカバリー・アクションの値に従って応答します。

CONTINUE (続行)

他のリソースのインストールを続行します。

IMMEDIATE

CICS システムを即時シャットダウンします。

NORMAL

CICS システムを正常にシャットダウンします。

PROMPT

アクションを指示するプロンプトをオペレーター・コンソールに出します。CICS システムでのリソース・インストール・プロセスは、オペレーターが応答するまで中断されますが、他のすべてのMAS処理は続行されます。

TERMINATE

リソースのインストール・プロセスを終了します。これ以上リソースはインストールされません。正常にインストールされたリソースはどれも除去されません。

動的リソース・インストール

リソースの多くは、各 CICS システムが初期設定される際に、自動的にインストールすることをお勧めします。ただし、時々、それらのリソースを最新表示したり、特殊な事情に対応するために、より多くのリソースをインストールしたりする必要

がある場合があります。CICS システムの実行中は、ビジネス・アプリケーション・サービスを使用して新しいリソースや更新されたリソースを動的にインストールすることができます。

単一のリソースを単一の CICS システムに、またはさまざまなタイプのリソースのセット全体を複数の CICS システムに、定義割り当て値および指定変更値と共にインストールすることができます。CICS リソースを動的にインストールする時、システムに以前インストールされた同一のリソースをそれらのリソースで強制的に置換することができます。

注:

1. リソースの動的インストールを試行する時には、CICSplex の保守ポイント CMAS がアクティブになっている必要があります。保守ポイントが使用不可の場合、インストール要求は失敗します。
2. セッション定義 (SESSDEF オブジェクト) を直接、動的にインストールすることはできません。それらは、SYSLINK リソースを介してインストールするか、または SESSDEF に対して RASGNDEF (リソース割り当て定義) を定義し、次に、参照されるリソース割り当てとして RASGNDEF が指定されている、関連した CONNDEF をインストールすることにより、間接的にインストールできます。

個別リソースをインストールする時、リソースがインストールされる CICS システムを識別し、そのリソースの使用に関する情報をローカル・リソースまたはリモート・リソースとして指定する必要があります。オプションで、リソースの固有属性の指定変更値を指定できます。指定された指定変更値は、リソースのこの一回限りのインストールにのみ使用されます。データ・リポジトリ内のリソース定義は、未変更のままになります。

「インストール」アクション・コマンドを使用して、1 つ以上のアクティブ・システムにリソースを動的にインストールすることができます。有効な CICS システムの詳細については、個別の BAS オブジェクトの説明を参照してください。リソースをインストールするためのオプションは、このインストールに適用される指定変更式の指定を含め、リソース割り当て (RASGNDEF オブジェクト) を作成する際に指定できるオプションと同じです。

注: 「ファイル・キー・セグメント定義」ビューと「セッション定義」ビュー (FSEGDEFオブジェクトと SESSDEF オブジェクト) では、「インストール」アクション・コマンドはサポートされません。

CICSplex SM は、指定されたすべてのリソースをインストールしようとしませんが、時々、CICSplex 内の条件により、インストール・プロセスが正常に完了しないことがあります。インストール問題が発生した場合、CICSplex SM はエラーに関する詳細な情報を提供します。

リソースの動的インストール

このタスクについて

リソース定義を動的にインストールするには、以下の手順を実行します。

1. 「管理ビュー」>「ベーシック CICS リソース管理ビュー」>「CICS リソース定義」をクリックし、次に、インストールするリソースのタイプを選択してリソース定義画面を開きます。

注: このビューには、「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (BAS) 管理ビュー」メニューからもアクセスできます。

2. 1 つ以上のリソースを選択し、「インストール」ボタンをクリックします。
3. リソースをインストールする CICS システムに関する以下の情報を指定します。

ターゲット・スコープ値

既存の CICS システムまたは CICS システム・グループの固有名または総称名を入力します。指定されたリソースがインストールされる

関連スコープ値

REMOTE の「使用値」を指定する場合は、リモート・リソースを LOCAL としてインストールする既存の CICS システムの固有名または総称名を入力します。

注: 動的として定義されたリモート・トランザクション定義(TRANDEF オブジェクト) に対しては、関連スコープ値用の CICS システム・グループを指定できます。その他すべてのリモート資源に対しては、それが単一の CICS システムで構成されている場合のみ、CICS システム・グループを指定できます。

使用値

リソースの使用方法を以下のように指定します。

LOCAL

リソースはターゲット CICS システム内に含まれています。
LOCAL は、サポートされるすべてのリソース・タイプで有効です。

REMOTE

リソース定義が異なる CICS システム内にインストールされたリソースを参照します。REMOTE を指定する場合は、リソースのローカル・インスタンスを含む CICS システムを示すため、「関連スコープ値」も指定する必要があります。REMOTE は、以下のリソース・タイプにのみ有効です。

- ファイル定義 (FILEDEF オブジェクト)
- プログラム定義 (PROGDEF オブジェクト)
- 一時データ・キュー定義 (TDQDEF オブジェクト)
- トランザクション定義 (TRANDEF オブジェクト)

注:

- a. REMOTE を指定すると、リソースは、「ターゲット・スコープ値」フィールドと「関連スコープ値」フィールドの両方に示されているすべての CICS システムに割り当てられます。同様に、この割り当てに関連付けられているリソースがインストールされると、リモート・リソースは、ターゲット・スコープと関連スコープの両方にインストールされます。
- b. 一時記憶キューがリモート・システムに作成される可能性があります。キューの属性を制御する一時記憶モデルは常にローカル・リ

ソースになります。したがって、一時記憶モデル定義をインストールする際、「使用値」は常に LOCAL を指定する必要があります。BAS 一時記憶域モデル定義のインストールを参照してください。一時記憶モデル定義のリモート・システム属性の説明については、一時記憶域モデル定義を参照してください。

モード値

一部のリソース・タイプでは、CICSplex SM はインストールを完了するためにリソース属性のどのサブセットを使用するかを判別するための追加情報を必要とします。指定する必要がある「モード値」は、インストールされるリソース・タイプによって異なります。

プログラム (PROGDEF オブジェクト)

「使用値」フィールドに LOCAL を指定した場合、AUTO を指定して、CICS がプログラムを自動的にシステムにインストールするように指定できます。AUTOは、CICS システムでプログラムの明示的な定義が必要ないことを示します。その他の場合、N/A を指定します。

トランザクション (TRANDEF オブジェクト)

トランザクションが動的ルーティング・プログラムにより処理されるかどうかを指定することができます。「使用値」フィールドに REMOTE が含まれている場合は、「モード値」を以下のように指定する必要があります。

注: ここに指定された値は、トランザクション定義 (TRANDEF オブジェクト) の「動的ルーティング・オプション」値を指定変更します。

DYNAM

トランザクションは動的ルーティング・プログラムにより処理されます。

STAT 各トランザクションが、トランザクション定義 (TRANDEF オブジェクト) に示されているリモート CICS システムへ送信されます。このモードは、「使用法」フィールドに REMOTE が入っている場合のみ指定できます。

一時データ・キュー (TDQDEF 定義)

インストールする一時データ・キューのタイプを以下のように指定できます。

EXTRA

区画外 TDQ

IND 間接 TDQ

INTRA

区画内 TDQ

N/A を指定すると、CICSplex SM は一時データ・キュー定義の「一時データ・キュー・タイプ」値を使用して一時データ・キューをインストールします。このタイプ値が REMOTE の場合、CICSplex SM は間接一時データ・キューをインストールします。

その他のすべてのリソースでは、モード・データは必要ないため、N/Aを指定します。

上書き値

リソースに対して指定変更式を指定する予定の場合は、以下のように、指定変更値を適用するスコープを指定します。

NONE

指定変更値を適用しません。

BOTH

指定変更値を両方のスコープに適用します。

RELATED

指定変更値を「関連スコープ」のみに適用します。

TARGET

指定変更値を「ターゲット・スコープ」にのみ適用します。

参照リソース割り当て名

「接続定義」ビューから接続をインストールする場合は、関連したセッション定義に適用されるリソース割り当てを指定します。CICSplex SMでは、実際の CICS リンクを適切に構成するため、接続ごとに 1 つ以上のセッション定義が必要です。

注: 「参照リソース割り当て名」フィールドは、「接続定義」ビューから接続をインストールしている時にのみ表示されます。

4. プリインストール検査を指定します。

CICS システムにリソースを動的にインストールする際、リソースのインストールを試行する前に以下の検査を実行するように CICSplex SM に指定できます。

- CICS システムは実行中か?
- CICS システムは EXEC CICS CREATE コマンドをサポートしているか?

「通知値」フィールドの値は、検査が実行される場合、どの検査が実行されるかを決定します。

これらのプリインストール検査を要求すると、CICSplex SM は、リソースがインストールされる前に、指定されたすべてのリソースに対してそれらの検査を実行します。

これらの検査を指定するには、「通知値」フィールドから以下のいずれかの値を選択します。

INACTIVE

CICSplex SM は、指定されたすべての CICS システムを検査して、それらが現在 CICSplex 内でアクティブであることを確認します。CICS システムのいずれかがアクティブでない場合、CICSplex SM は非アクティブ・システムのリストを返します。

RELEASE

CICSplex SM は、ターゲット・スコープで、EXEC CICS CREATE コマンドをサポートしていない CICS システムに関して検査します。

CICS システムのいずれかが、EXEC CICS CREATE をサポートしない CICS のリリースを実行している場合、CICSplex SM は、リソースをインストールできないシステムのリストを返します。

FULL CICSplex SM は、指定されたすべての CICS システムを検査してそれ

らが CICSplex 内でアクティブであることを確認し、CICS システムが、インストールするリソースに適切なレベルであることを確認します。CICS システムのいずれかがアクティブでない場合、CICSplex SM は非アクティブ・システムのリストを返します。CICS システムのいずれかが、EXEC CICS CREATE をサポートしない CICS のリリースを実行している場合、CICSplex SM は、リソースをインストールできないシステムのリストを返します。

NO 検査は実行されません。

5. 整合状態検査を要求します。

インストールしようとしているリソースが既に CICS システム内にある場合、CICSplex SM は、その現行の操作状態が、リソースの置換を許可するかどうかを検査します。例えば、同じ名前と属性を持つプログラムが CICS システム内に存在すると、CICSplex はそのプログラムを破棄しようとします。しかし、そのプログラムが現在使用中の場合、CICSplex SM はそれを新しいプログラムに置換できません。「状態検査値」フィールドを使用して、以下のように整合状態検査を要求します。

状態検査

NO CICSplex SM は、EXEC CICS CREATE コマンドの発行前のリソースの状況が原因でインストール可能でないリソースの詳細を提供しません。

YES CICSplex SM は、EXEC CICS CREATE コマンドの発行前のリソースの状況が原因でインストール可能でないリソースの詳細を提供します。

状態検査を要求しないと、CICSplex SM は EXEC CICS CREATE 要求を CICS に渡します。リソースが、置換されるのを妨げる状態の場合、要求は失敗します。

6. 「強制インストール値」を指定します。

リソースをインストールする前に、CICSplex SM は、同じリソースが CICS システムに既に存在するかどうか、およびそのリソースのインストールが CICSplex SM 自体の責任で行われたかどうかを確認します。CICSplex SM 自体の責任で行われた場合、CICSplex SM は新しいリソースを重複と見なします。

この場合、CICSplex SM は、新しいリソースは、既に存在するリソースの重複なのでインストールする必要はないと結論付けます。しかし、例えば、定義の属性を変更した場合や、インストール要求の一部として指定変更値を指定している場合、既存のリソースを再インストールしたいことがあります。そのためには、リソースを動的にインストールする際に、「強制インストール値」オプションを使用できます。このオプションは、以下を実行する場合に使用可能です。

- 個別リソースのインストール
- リソース・グループの置換
- リソース記述のインストール
- リソース記述の置換

強制インストール値

YES 重複かどうかを検査せずに、指定されたリソースを無条件でインストールします。

NO 重複リソースをインストールしません。

デフォルトで、「強制インストール値」は No に設定されています。CICSplex SM は、リソースが重複であると考えた場合、通常はリソースのインストールを強制しません。ただし、YES を指定すると、この重複リソース検査がバイパスされます。CICSplex SM は、指定されたすべてのリソースを無条件でインストールします。

7. 指定変更式を指定します。

これは、1 つ以上の指定されたスコープにインストールされる時に値が指定変更される、指定されたリソースの属性を示します。「指定変更ストリング」フィールドの値は、指定変更値が適用されるスコープを決定します。

(オプション。) 指定変更式は、次の形式の 1 つ以上の属性式で構成できます。

指定変更式



ここで、

attr

リソースの変更可能な属性の名前です。

value

属性の値として設定する値です。次の制限が適用されます。

- これは、属性に対して有効な値でなければなりません。
- 値に組み込みブランクまたは特殊文字 (ピリオド、コンマ、等号など) が含まれる場合、以下のように、値ストリング全体を単一引用符で囲む必要があります。

DESCRIPTION='Payroll.OCT'.

- 値に単一引用符またはアポストロフィーを組み込む場合は、文字を繰り返す必要があります。例えば、次のようにします。

DESCRIPTION='October''s Payroll'.

8. プリインストールで検査されるアクションに対して「はい」をクリックし、指定した CICS システムにリソース定義をインストールします。「リソース定義表形式」ビューが再表示されます。

インストールが失敗すると、診断情報を含むメッセージがこの画面に表示されず。

動的インストール・エラーの処理

WUI ビューから「インストール」ボタンを使用して、1 つ以上のリソースを動的にインストールするよう CICSplex SM に指示すると、「インストール」ビューが表示されます。必要な情報を指定し、「はい」をクリックすると、CICSplex SM は、選択したリソースを適切な CICS システムにインストールしようとします。さまざまな CICS システムへのリソースのインストールは同時に行えることに注意してください。

インストール・プロセスが完了すると、いずれかのリソースがインストールできなかった場合、最初に 1 つ以上のメッセージがある、それらのリソースの表形式ビューが表示されます。例えば、IPIC 接続定義のインストールを試行した場合、以下のようなメッセージのセットが表示される可能性があります。

```
EYUVC1231E 'Install' (INSTALL) request failed. Request complete for 1 records. (Tableerror, Dataerror)
EYUVC1272I Action (INSTALL) failed. Nothing installed (21).
EYUVC1273I Action (INSTALL) failed for 'A0T0' (Ipcondef) version 1, in 'DEWCBBAA0'. インストール失敗
EYUVC1279I CICS information: EIBFN(303C - CREATE IPCONN) RESP(16 - INVREQ) RESP2(0, 631)
```

エラー・メッセージ番号をクリックすると、インストールが失敗した理由と問題を解決するための提案を含む、そのメッセージのフルテキストが表示されます。

CSD からのレコードの抽出

CICS システム定義 (CSD) ファイルからリソース定義をマイグレーションするために、CICSplex SM では、既存の CSD からレコードを抽出できる出口ルーチンが提供されています。この出口ルーチンは、CICS DFHCSDUP ユーティリティの EXTRACT コマンドを使用して CSD レコードを読み取ります。抽出された CSD レコードは、CICSplex SM で提供されている抽出ルーチン EYU9BCSD によって処理され、バッチ・リポジトリ更新機能への入力として使用できる、同等の CICSplex SM リソース定義レコードが生成されます。

抽出ルーチン EYU9BCSD への入力の作成

このタスクについて

CICSplex SM 抽出ルーチン EYU9BCSD の入力ファイルは、一連の制御ステートメントで構成されます。これらの制御ステートメントは、抽出する CSD レコードと、それらを関連付けるリソース・グループを記述します。

入力ファイルは、以下の要件に従っている必要があります。

- ファイルは固定論理レコード長 80 でなければならない。
- 各制御ステートメントは 1 行に収められている必要がある。
- 1 桁目に * がある行はコメントとして扱われる。

以下の制御ステートメントがサポートされています。

RESGROUP(CSDGROUP|*resgroup*)

以下のようにして、生成される 1 つ以上のリソース・グループを識別します。

CSDGROUP

RESGROUP 定義は、EYU9BCSD に提示される CSD グループごとに生成されます。

resgroup

指定された名前を使用して、単一の RESGROUP 定義が生成されます。

RESGROUP ステートメントはオプションであり、指定される場合、1 つの入力ファイルにつき 1 つのみ許可されます。

RESINGRP(CSDGROUP|*resgroup*)

以下のようにして、リソース定義が関連付けられるリソース・グループを識別します。

CSDGROUP

リソース定義は、元の CSD グループと同じ名前を持つリソース・グループに関連付けられます。

resgroup

リソース定義は、指定されたリソース・グループに関連付けられます。このリソース・グループは、作成される関連に対してデータ・リポジトリ内に既に定義されている必要があります。

RESINGRP ステートメントはオプションであり、指定される場合、1 つの入力ファイルにつき 1 つのみ許可されます。RESINGRP ステートメントを指定しないと、バッチ・リポジトリ更新機能の CREATE xxxxDEF コマンドが、RESGROUP オペランドなしで生成されます。その場合、xxxxDEF リソース定義は、どのリソース・グループにも自動的に関連付けられません。

objtype(resname)

EYU9BCSD によって処理される CSD レコードを識別します。ここで、

objtype

CSD リソース・タイプ。以下のいずれかになります。

ATOMSERVICE、 BUNDLE 、 CONNECTION、
CORBASERVER、 DB2CONN、 DB2ENTRY、 DB2TRAN、 DJAR
、 DOCTEMPLATE、 ENQMODEL、 FILE、
JOURNAL、 IPCONN、 JOURNALMODEL、
LIBRARY、 LSRPOOL 、 MAPSET、 MQCONN、
PARTITIONSET、 PARTNER、 PIPELINE、 PROCESSTYPE、
PROFILE 、 PROGRAM、 REQUESTMODEL、
SESSIONS、 TCPIPSERVICE、 TDQUEUE、 TERMINAL、
TRANCLASS 、 TRANSACTION、 TSMODEL、 TYPETERM、
URIMAP、 WEBSERVICE

複数の *objtype* ステートメントを 1 つの入力ファイルに指定できますが、各ステートメントは異なるリソース・タイプを表している必要があります。1 つの入力ファイルにつき許可されるのは、指定したリソース・タイプの 1 つの *objtype* ステートメントのみになります。

resname

指定したタイプの CSD リソースの固有名または総称名です。

例えば、PROGRAM(*) は、EYU9BCSD に提示された CSD 内のすべての PROGRAM レコードを処理します。PROGRAM(AB+C*) は、総称パターンに一致する PROGRAM レコードのみを処理します。アスタリスク (*) は、CEDA の規則ではなく、総称に関する CICSplex SM の規則に従って解釈されます。

INQUOTES(NO|YES)

出力データ・セットでフィールド値を引用符で囲むかどうかを指定します。

対になっていない括弧を含むデータが CSD にある場合、この制御ステートメントの使用が必要な可能性があります。このキーワードを省略すると、デフォルト値の NO が想定されます。

NO 出力データ・セット上で、パラメーターの値は引用符で囲まれません。この設定は、バッチ・リポジトリ更新機能への入力には完全に適切ですが、対になっていない括弧がパラメーター値に含まれている場合、問題が発生する可能性があります。

INQUOTES(NO) を指定すると、EYU9BCSD 出力は、CICSplex SM バッチ・リポジトリ更新機能のどのリリースのへの入力としても使用できることに注意してください。

YES 出力データ・セット上で、パラメーターのすべての値が引用符で囲まれます。CICSplex SM バッチ・リポジトリ更新機能は、埋め込まれた括弧ではなく、最終引用符でパラメーター値を終了します。

INQUOTES(YES) を指定する場合、EYU9BCSD 出力を使用できるのは、CICSplex SM 以降の CICSplex SM バッチ・リポジトリ更新機能のみであることに注意してください。EYU9BCSD 出力は、CICSplex SM の以前のリリースで提供されていたバッチ・リポジトリ更新機能とは互換性がなく、その機能への入力として使用できません。

例えば、DESCRIPTION フィールドに以下の値が含まれているとします。

1) Describe Resource

デフォルトの INQUOTES(NO) を指定すると、EXTRACT ルーチンは出力データ・セットに以下のステートメントを生成します。

DESCRIPTION(1) Describe Resource)

CICSplex SM バッチ・リポジトリ更新機能は、このステートメントを、値 1 を含み、その後に 2 つの認識できないキーワードが指定された DESCRIPTION フィールドと解釈します。

INQUOTES(YES) を指定すると、EYU9BCSD はフィールド値を引用符で囲みます。出力データ・セットには、以下のステートメントが含まれます。

DESCRIPTION('1) Describe Resource')

このステートメントは、CICSplex SM バッチ・リポジトリ更新機能によって正しく解釈されます。

EYU9BCSD へのジョブの実行依頼

EYU9BCSD にジョブを実行依頼するには、**DFHCSDUP EXTRACT** コマンドを使用できます。

手順

以下のように **DFHCSDUP EXTRACT** コマンドを指定します。

```
Extract List(listname) | Group(groupname)
Userprogram(EYU9BCSD) OBJECTS
```

注:

- EYU9BCSD は、USERPROGRAM キーワードから呼び出す必要があります。
EXITS パラメーターを使用して DFHCSDUP へのエントリー・リンケージで呼び出すことはできません。
- OBJECTS キーワードは必須です。

例

118 ページの図 9 は、EYU9BCSD を実行するために使用できる JCL の例です。このサンプル JCL は、CICSTS55.CPSM.SEYUSAMP ライブラリー内のメンバー EYUJCLEX で提供されています。

このサンプルは、指定された CSD グループ (*group_name*) からすべてのリソース・タイプのリソース定義を抽出します。同時に、CICSplex SM リソース・グループ (RESGROUP) がその CSD グループに対して生成され、グループとリソース定義との間で関連が生成されます。

```

/*-----
/*
/* Delete the extract output file for a rerun of this job
/*
/*-----
//BR14OUT EXEC PGM=IEFBRI4
//EYUOUT DD DISP=(MOD,DELETE,DELETE),
// DSN=cpsm.index.EYUOUT.group_name,
// SPACE=(TRK,(1,1)),
// UNIT=SYSDA

/*-----
/*
/* Extract the CSD Resource Definitions
/*
/*-----
//CSDXTRCT EXEC PGM=DFHCSDUP,REGION=0M,
// COND=(0,NE),
// PARM='CSD(READONLY)'
//STEPLIB DD DISP=SHR,DSN=cics.index.SDFHLOAD
// DD DISP=SHR,DSN=cpsm.index.SEYUAUTH
//DFHCSD DD DISP=SHR,DSN=cics.dfhcscd
//EYUOUT DD DISP=(,CATLG,DELETE),
// DSN=cpsm.index.EYUOUT.group_name,
// SPACE=(TRK,(1,5)),
// UNIT=SYSDA
//SYSPRINT DD SYSOUT=*
//SYSIN DD *
EXTRACT USERPROGRAM(EYU9BCSD) OBJECTS GROUP(group_name)
/*
//EYUIN DD *
RESGROUP(group_name)
RESINGRP(CSDGROUP)
ATOMSERVICE(*)
BUNDLE(*)
CONNECTION(*)
CORBASERVER(*)
DB2CONN(*)
DB2ENTRY(*)
DB2TRAN(*)
DJAR(*)
DOCTEMPLATE(*)
ENQMODEL(*)
FILE(*)
IPCONN(*)
JOURNAL(*)
JOURNALMODEL(*)
JVMSEVER(*)
LIBRARY(*)
LSRPOOL(*)
MAPSET(*)
MQCONN(*)
PARTITIONSET(*)
PARTNER(*)
PIPELINE(*)
PROCESSTYPE(*)
PROFILE(*)
PROGRAM(*)
REQUESTMODEL(*)
SESSIONS(*)
TCIPSERVICE(*)
TDQUEUE(*)
TERMINAL(*)
TRANCLASS(*)
TRANSACTION(*)
TSMODEL(*)
TYPETERM(*)
URIMAP(*)
WEBSERVICE(*)
118 CICS TS for z/OS: CICSplex SM ビジネス・アプリケーションの管理
/*-----
/*
/* List EYUOUT to view errors

```

CSDXTRCT

CSDXTRCT PARM= ステートメントで COMPAT キーワードを使用して、現在廃止されている CICS リソース属性 (CICSplex SM の REQUESTMODEL リソース定義の OMGINTERFACE、OMGMODULE、および OMGOPERATION の各属性など) を抽出する必要があります。

EYUOUT

cpsm.index.EYUOUT.group_name を、EYU9BCSD によって生成されるバッチ・リポジトリ更新機能のコマンドが書き込まれる順次データ・セットとして識別します。

STEPLIB

以下を識別します。

- *cics.index.SDFHLOAD* を、DFHCSDUP モジュールを含む CICS ロード・ライブラリーとして識別します。
- *cpsm.index.SEYUAUTH* を、EYU9BCSD を含む CICSplex SM ロード・ライブラリーとして識別します。

DFHCSD

cics.dfhcscd を、CSD ファイルとして機能する VSAM データ・セットとして識別します。

SYSIN GROUP *group_name* を、定義の抽出元の CSD グループとして識別します。グループ名にはワイルドカードを含めることができます。LIST*list_name* を、定義の抽出元の CSD グループ・リストとして識別します。リスト名にはワイルドカードを含めることはできません。

DFHCSDUP ユーティリティーおよびそのパラメーターについて詳しくは、System definition file utility program (DFHCSDUP)を参照してください。

CSD グループ・リスト内のすべてのグループから定義を抽出するには、以下の手順を実行します。

1. GROUP(*group_name*) を LIST(*list_name*) に変更します。
2. CSD グループ・リストを識別します。
3. *group_name* の他のすべてのオカレンスを、適切な *list_name* に変更します。

EYUIN SYSIN ステートメントに LIST(*list_name*) を指定する場合、RESGROUP 値を *group_name* から CSDGROUP に変更します。CSDGROUP を指定すると、グループ・リスト内の各 CSD グループに対してリソース・グループが生成されます。

EYU9BCSD からの出力

CICSplex SM 提供の抽出ルーチン EYU9BCSD を使用して、入力ファイル内のそれぞれの CSD レコードごとに CICSplex SM リソース定義レコードを生成することができます。EYU9BCSD からの出力は、データ・リポジトリへのレコード転送に使用されます。

CICSplex SM 抽出ルーチンの EYU9BCSD は、DFHCSDUP EXTRACT コマンドによって CSD から抽出されたデータを使用して、120 ページの図 10に示されているようなバッチ・リポジトリ更新機能コマンドを生成します。

```

/*
  RESGROUP(group_name)
  RESINGRP(CSDGROUP)
  PROCESSTYPE(*)
  TSMODEL(*)
  REQUESTMODEL(*)
*/
CONTEXT EYUPLX01;
CREATE RESGROUP      RESGROUP(group_name)
                     DESCRIPTION( )
                     ;
CREATE PROCDEF        NAME(CICSPRTY)
                     DESCRIPTION(Sample CBTS Processtype )
                     STATUS(ENABLED)
                     FILE(CBTSFILE)
                     AUDITLOG( )
                     AUDITLEVEL(OFF)
                     RESGROUP(group_name)

CREATE TSMDEF         NAME(SAMPLE)
                     DESCRIPTION(Sample TS Model )
                     PREFIX(ABCD )
                     LOCATION(AUXILIARY)
                     RECOVERY(NO)
                     SECURITY(NO)
                     POOLNAME( )
                     REMOTESYSTEM( )
                     REMOTEPREFIX( )
                     RESGROUP(group_name)
                     ;
CREATE RQMDEF         NAME(REQMOD1)
                     DESCRIPTION(Sample Request Model )
                     OMGMODULE(*)
                     OMGINTERFACE(*)
                     OMGOPERATION(*)
                     TRANSID(TRNX)
                     RESGROUP(group_name)
                     ;

```

図 10. EYU9BCSD からのサンプル編集済み出力

注: EYU9BCSD 入力に RESINGRP ステートメントを指定しなかった場合、
CREATE xxxxDEF コマンドは、RESGROUP オペランドなしで生成されます。つまり、リソース定義は、どのリソース・グループにも関連付けられません。

同じリソース・タイプと名前に対して複数の CSD レコードが検出された場合、それぞれ異なるバージョン番号で複数の CREATE コマンドが生成されます。

バッチ・リポジトリ更新機能の CREATE コマンドは、DFHCSDUP JCL で識別された EYUOUT 出力ファイルに書き込まれます。

EYUOUT ファイルの編集:

このタスクについて

CREATE コマンドは、バッチ・リポジトリ更新機能で使用するための正しい形式と正しいシーケンスで生成されます。ただし、EYU9BCSD 出力をバッチ・リポジトリ更新機能に実行依頼する前に、以下のように EYUOUT ファイルを編集する必要があります。

コンテキスト

バッチ・リポジトリ更新機能は、処理するリソース定義の CICSplex SM

コンテキストを認識している必要があります。更新が適用される CICSplex を識別するために、ファイルの先頭に CONTEXT ステートメントを挿入する必要があります。 120 ページの図 10を参照してください。

パスワード

DFHCSDUP によって抽出される CSD レコードにはパスワードは含まれません。パスワードを手動で追加しない限り、パスワードを含むリソース定義はすべて、パスワード・フィールドがブランク (X'40') の状態で生成されます。

ファイル内で個別の CREATE コマンドを編集して、適切なパスワード・フィールドに追加できます。すると、それらのパスワードは、CICSplex SM がデータ・リポジトリ内に生成するリソース定義に含まれます。ただし、バッチ・リポジトリ更新機能の出力には、入力されたパスワードの可視レコードが含まれる点に注意してください。

廃止されたフィールド

DFHCSDUP によって抽出される CSD レコードには、廃止されたと見なされるフィールドは含まれませんが、それらは互換性のために保持されます (例えば、マップ・セット、区分セット・プログラム、またはトランザクション定義内の RSL)。

ファイル内で個別の CREATE コマンドを編集して、適切なフィールドを追加できます。その後、それらの追加フィールドは、CICSplex SM がデータ・リポジトリ内に生成するリソース定義に含まれます。

バッチ処理されるリポジトリ更新機能への EYUOUT の実行依頼:
このタスクについて

EYU9BCSD 出力ファイルに必要な変更を行ったら、バッチ処理されるリポジトリ更新機能の入力として実行依頼できます。

バッチ処理されるリポジトリ更新機能について詳しくは、Administering CICSplex SMを参照してください。

BAS タスク例

このセクションでは、いくつかの代表的な BAS タスクについて説明します。

CICSplex の接続の確立

この例では、Web ユーザー・インターフェース (WUI) を使用して、指定された CICSplex、EYUPLX01 内の CICS システムに接続するために必要な接続定義とセッション定義のペアを作成します。

手順

1. 最初の ISC 接続定義を作成します。
 - a. WUI メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック CICS リソース管理ビュー」 > 「CICS リソース定義」 > 「接続定義」とクリックし、「接続定義」表形式ビューを開きます。
 - b. 現行のコンテキストが EYUPLX01 ではない場合は、「コンテキスト」フィールドに EYUPLX01 を指定して「最新表示」をクリックします。
 - c. 「作成」をクリックして、「作成」パネルで以下の情報を入力します。

フィールド名	値
接続定義名	C001
説明	ISC Connection
アクセス方式	z/OS Communications Server
Protocol	Appc
接続の様態	Notapplic
単一セッション APPC リンク上の APPC 端末	いいえ
データ・ストリーム・タイプ	User
レコード形式	U
キュー限度	いいえ
最大キュー時間	いいえ
z/OS Communications Server の自動接続セッション	はい
接続状況	はい
接続時セキュリティー・レベル	ローカル
バインド時セキュリティー	いいえ
デフォルト・ユーザー ID を使用	N_a
持続セッションのリカバリー処理	Sysdefault
交換ログ名 (XLN) アクション	保持

他のフィールドはブランクのままにしておくことができます。

- d. 「はい」をクリックして、操作を確定します。新しい ISC 接続が作成され、「接続定義」表形式ビューが再表示されます。

2. 関連したセッション定義を作成します。

- a. WUI メインメニューから「管理ビュー」 > 「CICS リソース定義ビュー」 > 「セッション定義」をクリックして、「セッション定義」表形式ビューを開きます。
- b. 「作成」ボタンをクリックして、「作成」パネルで以下の情報を入力します。

フィールド名	値
セッション定義名	S001
定義バージョン	0
定義の記述	ISC session
接続定義名	C001
相互通信リンク・プロトコル	Appc
グループ内最大セッション数	4
コンテンション勝者セッションの最大数	2
受信バッファ・サイズ	4096
セッション優先順位	0
自動接続オプション	YES
サービス中セッション	N_a

フィールド名	値
チェーン・アセンブリーが必要	はい
解放要求を尊重	いいえ
切断要求の受け入れ	いいえ
リカバリー処理オプション	Sysdefault
XRF リカバリー通知オプション	N_a

他のフィールドはブランクのままにしておくことができます。

- c. 「はい」をクリックして確定します。ISC セッション定義が作成され、「セッション定義」表形式ビューが再表示されます。
3. 関連する CICS システム間のリンクを定義します。
 - a. WUI メインメニューから「管理ビュー」 > 「ベーシック CICS リソース管理ビュー」 > 「CICS システム・リンクおよび関連リソース」 > 「すべてのシステム・リンク」をクリックします。
 - b. 「作成」ボタンをクリックし、「作成」パネルに以下のように入力します。

フィールド名	値
1 次 CICS システム名	EYUMAS1A
2 次 CICS システム名	EYUMAS1B
接続リソース・タイプ	Sna
1 次接続定義名	C001
1 次接続定義バージョン	1
2 次接続定義名	S001
2 次接続定義バージョン	1

- c. 「はい」をクリックして、リンクを作成します。EYUMAS1A と EYUMAS1B との間の ISC リンクが作成され、「すべてのシステム・リンク」ビューが再表示されます。
4. 既存の ISC リンク定義を再利用して、他の CICS システム間のシステム・リンクを定義します。
 - a. 「すべてのシステム・リンク」ビューで EYUMAS1A のエントリーを選択し、「作成」をクリックします。「システム・リンクの作成」パネルが表示され、EYUMAS1A と EYUMAS1B との間のリンクを作成した際に入力した値が示されています。
 - b. 「1 次 CICS システム名」フィールドを更新して、EYUMAS4A と EYUMAS1B との間の ISC リンクを作成します。
 - c. 「はい」をクリックして確定します。EYUMAS4A と EYUMAS1B との間の ISC リンクが作成され、「システム・リンク定義」ビューが再表示されます。

このステップを繰り返して、CICSplex 内の他の CICS システム間の ISC リンクを作成します。

アプリケーションのリソースの定義

この例では、Web ユーザー・インターフェース (WUI) を使用して、ワークロード・マネージャー (WLM) アプリケーションに必要なリソース定義を作成します。

このタスクについて

この例では、リソース割り当ての使用について説明し、より上級の CICSplex SM ユーザー向けの「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (BAS) 管理ビュー」メニューを使用します。

手順

1. リソース・グループ定義を作成します。
 - a. WUI メインメニューから「管理ビュー」 > 「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (BAS) 管理ビュー」 > 「CICS リソース定義」 > 「リソース・グループ」をクリックして、「リソース・グループ定義」表形式ビューを開きます。
 - b. 現行のコンテキストが EYUPLX01 ではない場合は、「コンテキスト」フィールドに EYUPLX01 を指定して「最新表示」をクリックします。
 - c. 「作成」アクション・ボタンをクリックし、「作成」パネルに以下のように入力します。

リソース・グループ名

EYUBAG01

説明 SSET — WLM IVP アプリケーション

モード値

NO

他のフィールドはブランクのままにしておくことができます。

- d. 「はい (Yes)」をクリックして確認します。「リソース・グループ定義」表形式ビューが再表示されます。

空のグループ EYUBAG01 が作成されました。次のステップでは、WLM アプリケーションを構成するリソース定義を作成し、それらをグループに追加します。

2. トランザクション定義を作成します。
 - a. WUI メインメニューから「管理ビュー」 > 「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (BAS) 管理ビュー」 > 「CICS リソース定義」 > 「トランザクション定義」をクリックして、「トランザクション定義」表形式ビューを開きます。
 - b. 「作成」アクション・ボタンをクリックし、「作成」パネルに以下のように入力します。

トランザクション定義名

ETVP

定義バージョン

0

説明 SSET — ワークロード IVP アプリケーション

リソース・グループ名

EYUBAG01

最初のプログラム名

EYUWLMVP

トランザクション作業域のサイズ (バイト数)

0

トランザクション・プロファイル
 DFHCICST
 使用可能状況
 有効
 タスク・データ・ロケーション
 Below
 タスク・データ・キー
 User
 ストレージ・クリア状況
 いいえ
 ランナウェイ・タイムアウト値
 SYSTEM
 シャットダウン実行状況
 Disabled (使用不可)
 トランザクション分離オプション
 はい
 動的ルーティング・オプション
 はい
 動的ルーティング状況
 はい
 リモート・システム名
 1A3A
 リモート・トランザクション名
 ETVP
 トランザクション・ルーティング・プロファイル
 DFHCICSS
 ローカル・システムへのキューイング
 N_a
 トランザクション優先順位
 1
 トランザクション・クラス番号
 1
 トランザクション・クラス名
 DFHTCL00
CICS 障害時処置
 Backout (バックアウト)
 未確定待機オプション
 はい
 未確定待機時間 (日、時、および分)
 0
 未確定障害処理
 Backout (バックアウト)
 リソース・セキュリティ検査
 いいえ
 コマンド・レベル・セキュリティ・オプション
 いいえ

他のフィールドはブランクのままにしておくことができます。

- c. 「はい (Yes)」をクリックして確認します。「トランザクション定義」表形式ビューが再表示されます。
3. プログラム定義を作成します。
- a. WUI メインメニューから「管理ビュー」 > 「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (BAS) 管理ビュー」 > 「CICS リソース定義ビュー」 > 「プログラム定義」をクリックして、「プログラム定義」表形式ビューを開きます。
- b. 「作成」アクション・ボタンをクリックし、「作成」パネルに以下のように入力します。
- プログラム定義名
EYUWLMVP
- 定義バージョン
0
- 定義の記述
SSET — ワークロード IVP 定義
- リソース・グループ名
EYUBAG01
- 言語 アセンブラー
- 新規コピーを再ロード
いいえ
- 常駐状況
いいえ
- プログラム・ストレージの解放
正常
- リンク・パック域 (LPA) のプログラムを使用
いいえ
- 使用可能状況
有効
- リソース・セキュリティ値
0
- 実行診断機能画面 (EDF) 画面を表示
はい
- データ・ロケーション
Below
- プログラム実行キー
User
- 並行性状況
準再入可能
- 動的ルーティング状況
いいえ
- API サブセット制限タイプ
全機能 API
- ホット・プーリング状況
いいえ
- 他のフィールドはブランクのままにしておくことができます。

- c. 「はい (Yes)」をクリックして確認します。「プログラム定義」表形式ビューが再表示されます。
4. 最初のファイル定義を作成します。
 - a. WUI メインメニューから「管理ビュー」 > 「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (BAS) 管理ビュー」 > 「CICS リソース定義」 > 「ファイル定義」をクリックして、「トランザクション定義」表形式ビューを開きます。
 - b. 「作成」アクション・ボタンをクリックし、「作成」パネルに以下のように入力します。

ファイル定義名
EYUFIL01

定義バージョン
0

定義の記述
給与計算の更新 — ローカル

Data set name (データ・セット名)
PAYROLL.EUTL3

レコード・レベル共用 (RLS) ファイルのアクセス・モード
いいえ

ローカル共用リソースのプール ID
1

読み取り保全性のデフォルト・レベル
コミットされていない

VSAM データ・セット名共用
Allreqs

ファイルに対する最大の同時要求数
30

初期状況
有効

ファイル・オープン時刻
Firstref

ファイル属性指定
共用

データ・バッファ数
31

索引バッファ数
30

データ・テーブル・タイプ
いいえ

データ・テーブルの最大レコード数
NOLIMIT

テーブル名
IANSFILE

更新モデル
ロック

ロード・タイプ
いいえ

レコード形式
 可変
 操作 (追加、参照、削除、読み取り、更新)
 はい (すべてに対して)
 ジャーナルに記録された読み取り操作
 なし
 入力の同期自動ジャーナル処理
 いいえ
 ジャーナルに記録された再書き込み / 削除操作
 いいえ
 ジャーナルに記録された追加操作
 いいえ
 出力の同期自動ジャーナル処理
 いいえ
 リカバリー処理タイプ
 なし
CICS VSAM ファイル・バックアップ・タイプ
 静的

他のフィールドはブランクのままにしておくことができます。

- c. 「はい」をクリックして、ファイルの作成を確認します。EYUFIL01 のファイル定義が作成され、「ファイル定義」表形式ビューが再表示されます。
5. 既存のファイル定義を再利用して、別のファイルの定義を作成します。
 - a. 「ファイル定義」表形式ビューで EYUFIL01 のエントリーを選択し、「作成」アクション・ボタンをクリックします。「ファイル定義の作成」パネルが表示され、EYUFIL01 を作成した時に入力した値が示されています。
 - b. 「ファイル定義名」を EYUFIL02 に変更します。
 - c. 以下のフィールドをブランクにします。
 - ローカル共用リソースのプール **ID**
 - ファイルに対する最大の同時要求数
 - データ・バッファ数
 - 索引バッファ数
 - d. 「はい」をクリックします。EYUFIL02 のファイル定義が作成され、「ファイル定義」表形式ビューが再表示されます。

WLM アプリケーションのすべてのリソース定義が作成されました。次のステップでは、それらのリソースを適切な CICS システムに割り当てます。

6. トランザクション定義のリソース割り当てを作成します。
 - a. WUI メインメニューで、「管理ビュー」 > 「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (BAS) 管理ビュー」 > 「リソース割り当て」とクリックし、「リソース割り当ての定義」表形式ビューを開きます。
 - b. 「作成」アクション・ボタンをクリックして、「リソース割り当て定義」作成ビューを開きます。

「作成」パネルに、以下のように入力します。

リソース割り当ての定義名
 EYUBAA01
 説明 SSET — トランザクション定義の割り当て
 リソース・グループ名
 EYUBAG01
 割り当てによって処理されるリソース・タイプ
 TRANDEF
 リソース使用タイプ
 Remote (リモート)
 リソース使用修飾子
 Dynam
 ターゲット・スコープ名
 EYUMAS1A
 関連スコープ名
 EYUMAS1B
 指定変更が適用されるスコープ
 関連

他のフィールドはブランクのままにしておくことができます。

- c. 「はい (Yes)」をクリックします。トランザクション定義のリソース割り当てが作成され、「リソース割り当て定義」表形式ビューが再表示されます。

注: この例では、割り当てに対してフィルター式および指定変更式を使用しません。

7. プログラム定義のリソース割り当てを作成します。

- a. 「リソース割り当て定義」表形式ビューで「作成」アクション・ボタンをクリックし、「作成」パネルに以下のように入力します。

リソース割り当ての定義名
 EYUBAA02
 説明 SSET — プログラム定義の割り当て
 ターゲット・スコープ名
 EYUCSG03
 リソース・グループ名
 EYUBAG01
 割り当てによって処理されるリソース・タイプ
 PROGDEF
 リソース使用タイプ
 ローカル
 リソース使用修飾子
 N_a
 指定変更が適用されるスコープ
 関連

他のフィールドはブランクのままにしておくことができます。

- b. 「はい」をクリックします。プログラム定義のリソース割り当てが作成され、「リソース割り当て定義」表形式ビューが再表示されます。

8. ファイル定義のリソース割り当てを作成します。

- a. 「リソース割り当て定義」表形式ビューで「作成」アクション・ボタンをクリックし、「作成」パネルに以下のように入力します。

リソース割り当ての定義名

EYUBAA03

説明 SSET — ファイル定義の割り当て

ターゲット・スコープ名

EYUCSG03

関連スコープ名

EYUMAS4A

リソース・グループ名

EYUBAG01

割り当てによって処理されるリソース・タイプ

FILEDEF

リソース使用タイプ

Remote (リモート)

リソース使用修飾子

N_a

指定変更が適用されるスコープ

関連

他のフィールドはブランクのままにしておくことができます。

- b. 「はい」をクリックします。ファイル定義のリソース割り当てが作成され、「リソース割り当て定義」表形式ビューが再表示されます。

これで、リソース定義のすべてのリソース割り当てが作成されました。次のステップでは、すべてのリソースと一緒にグループ化し、それらを 1 つのアプリケーションとして識別します。

9. WLM アプリケーションのリソース記述を作成します。

- a. WUI メインメニューで、「管理ビュー」 > 「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (BAS) 管理ビュー」 > 「リソース記述」とクリックし、「リソース記述定義」表形式ビューを開きます。

- b. 「作成」アクション・ボタンをクリックし、「作成」パネルに以下のように入力します。

リソース記述名

EYUBAD01

説明 SSET — WLM IVP アプリケーション

論理的スコープ登録

はい

論理的スコープ名

WLMIVP

自動インストール要求タイプ

はい

他のフィールドはブランクのままにしておくことができます。

- c. 「はい」をクリックします。WLMIVP アプリケーションのリソース記述が作成され、「リソース記述定義」表形式ビューが再表示されます。

注: この例では、リソース・グループに関連したフィールド、およびそれらが適用されるターゲット・スコープと関連スコープに関連したフィールドは使用しません。この情報は、作成したリソース割り当てで既に提供しています。

10. 各リソース・タイプのリソース割り当てを WLMIVP リソース記述に関連付けます。

- a. WUI メインメニューで、「管理ビュー」 > 「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (BAS) 管理ビュー」 > 「リソース割り当て」とクリックし、「リソース割り当ての定義」表形式ビューを開きます。

- b. EYUBAA01 のエントリー (トランザクション定義のリソース割り当て) を選択し、「リソース記述への追加」ボタンをクリックします。以下のように、「リソース記述への追加」パネルに入力します。

記述名

EYUBAD01

説明 WLMIVP に割り当てられたトランザクション

他のフィールドはブランクのままにしておくことができます。

- c. 「はい」をクリックします。EYUBAA01 と EYUBAD01 との間の関連が作成され、「リソース割り当て定義」表形式ビューが再表示されます。

リソース割り当ての EYUBAA02 と EYUBAA03 に対して、このステップを繰り返します。

11. CICS システム定義を変更して、ターゲット・システムに対してコールド・スタートが実行されるたびに自動リソース・インストールが必要なことを示します。

- a. WUI メインメニューから「管理ビュー」 > 「トポロジ管理ビュー」 > 「CICS システム定義」をクリックして、「CICS システム定義」表形式ビューを開きます。

- b. CICS システム EYUMAS1A のエントリーを選択し、「更新」ボタンをクリックします。

- c. パネルの「ビジネス・アプリケーション・サービス」セクションを見つけ、以下のようにフィールドを更新します。

BAS リソース・インストール・オプション

コールドのみ

BAS インストール失敗時のアクション

続行

- d. 「はい」をクリックします。CICS システム定義が更新され、「CICS システム定義」表形式ビューが再表示されます。

ターゲット・スコープ内の他の CICS システムに対してこのステップを繰り返します。

CICS リソースの動的インストール

このタスクについて

このセクションでは、Web ユーザー・インターフェース (WUI) を使用してアクティブな CICS システムにリソースを動的にインストールするための、CICSplex SM でサポートされているさまざまな方式の例を提供します。これらの方式は、CEDA

で提供されているインストール・オプションに似ています。

個別リソースのインストール: この例は、アクティブな CICS システムに個別のプログラムをインストールします。

1. CICSplex SM に定義されているプログラムのリストを表示します。
 - a. WUI メインメニューから「管理ビュー」>「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」>「リソース定義」>「プログラム定義」をクリックして、「プログラム定義」表形式ビューを開きます。
 - b. 現行のコンテキストが EYUPLX01 ではない場合は、「コンテキスト」フィールドに EYUPLX01 を指定して「最新表示」をクリックします。
2. EYUWLMVP プログラムをインストールします。
 - a. EYUWLMVP の項目を選択して、「インストール」ボタンをクリックします。「インストール」ビューが表示されます。
 - b. 「ターゲット・スコープ値」フィールドに EYUMAS2A と入力し、「はい」をクリックします。プログラム EYUWLMVP が EYUMAS2A にインストールされ、「プログラム定義」表形式ビューが再表示されます。

リソース・グループからのリソースのインストール: この例は、指定のリソース・グループ内に定義されているプログラムを、アクティブな CICS システムにインストールします。

1. CICSplex SM に定義されているリソース・グループのリストを表示します。
 - a. WUI メインメニューから「管理ビュー」>「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」>「リソース・グループ」をクリックして、「リソース・グループ定義」表形式ビューを開きます。
 - b. 現行のコンテキストが EYUPLX01 ではない場合は、「コンテキスト」フィールドに EYUPLX01 を指定して「最新表示」をクリックします。
2. プログラムをリソース・グループ EYUBAG01 にインストールします。
 - a. EYUBAG01 の項目を選択して、「インストール...」ボタンをクリックします。
 - b. 以下のように、「インストール」ビューに入力します。

リソース・タイプ
PROGDEF
ターゲット・スコープ値
EYUMAS2A

その他のフィールドは未変更のままにすることができます。
 - c. 「はい (Yes)」をクリックします。EYUBAG01 に定義されているすべてのプログラムが EYUMAS2A にインストールされ、「リソース・グループ定義」表形式ビューが再表示されます。

リソース記述のインストール: この例は、指定されたリソース記述に関連付けられたすべてのリソースを、1 つ以上のアクティブな CICS システムにインストールします。

1. CICSplex SM に定義されているリソース記述のリストを表示します。

- a. WUI メインメニューから「管理ビュー」>「ベーシック CICS リソース管理ビュー」>「リソース記述」をクリックして、「リソース記述定義」表形式ビューを開きます。
 - b. 現行のコンテキストが EYUPLX01 ではない場合は、「コンテキスト」フィールドに EYUPLX01 を指定して「最新表示」をクリックします。
2. リソース記述 EYUBAD01 をインストールします。
 - a. EYUBAD01 の項目を選択して、「インストール...」ボタンをクリックします。「インストール」ビューが表示されます。
 - b. 指定された値を受け入れて、「はい」をクリックします。

EYUBAD01 に関連付けられているすべてのリソースが、リソース記述に指定されたターゲット・スコープおよび関連スコープに従ってインストールされます。「リソース記述」表形式ビューが再表示されます。

リソース割り当て定義

リソース割り当ては、選択したリソース定義の特性と、これらのリソースが CICS システムに割り当てられる方法を記述します。

割り当てられるリソース定義は 1 つのリソース・タイプ (ファイルなど) でなければならない、リソース・グループと関連付けられている必要があります。リソース割り当ては、グループ内のどのリソース定義が選択され、どの CICS システムに割り当てられるかを示します。1 つのリソース定義を、複数 CICS システム内のローカル・リソースとリモート・リソースの両方として割り当てることができます。割り当てを開始する前に、リソース割り当てを少なくとも 1 つのリソースの説明 (RESDESC オブジェクト) と関連付けておく必要があります。

リソース割り当て定義へのアクセス

このタスクについて

メインメニューからアクセスするには、「管理ビュー」>「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (BAS)管理ビュー」>「リソース割り当て定義」をクリックします。

リソース割り当ての作成

このタスクについて

リソース割り当てを定義するには、以下の手順を実行します。

- 「リソース割り当て定義」ビューにアクセスします。
- 既存のリソース割り当てから定義を作成するには、チェック・ボックスをクリックし、「作成...」ボタンをクリックします。空白画面を表示するには、「作成...」ボタンをクリックします。
- 各フィールドに情報を入力し、「はい」をクリックしてリソース割り当てを作成します。処理を中止する場合は、「いいえ」をクリックします。

リソース記述へのリソース割り当ての追加

このタスクについて

リソース記述へのリソース割り当ての追加は、以下の 2 つの方法で行うことができます。

- 「リソース割り当て定義」ビューにアクセスします。以下のいずれかの方法で行います。
 - チェック・ボックスをクリックしてリソース割り当てを選択します。「リソース記述への追加...」ボタンをクリックします。「リソース記述への追加」ビューが表示されます。
 - 各フィールドに情報を入力し、「はい」をクリックして関連を作成します。それ以外の場合は、「いいえ」をクリックして処理を中止します。
- または
 - リソース割り当て名をクリックして、「リソース割り当て定義」(EYUSTARTRASGNDEF.DETAILED) ビューを表示します。
 - 「リソース記述への追加...」ボタンをクリックします。「リソース記述への追加」ビューが表示されます。
 - 各フィールドに情報を入力し、「はい」をクリックして関連を作成します。それ以外の場合は、「いいえ」をクリックして処理を中止します。

注:

1. このビューで「グループ名」、「ターゲット・スコープ」、および「関連スコープ」の各フィールドの値を指定しない場合は、関連したリソース記述定義でそれらを指定する必要があります。
2. リソース割り当てをリソース記述に追加すると、不整合リソース・セットまたは不整合スコープのエラーが発生する可能性があります。これらのタイプの問題とそれらの解決方法について詳しくは、91 ページの『リソース・セットの検証』を参照してください。

リソース記述内のリソース割り当て

「リソース記述内のリソース割り当て」ビューは、リソース定義 (RESDESC オブジェクト) 内のリソース割り当て (RASGNDEF オブジェクト) のメンバーシップを記述します。「リソース記述内のリソース割り当て」(RASINDSC) の関連は、リソース割り当てがリソース記述に追加された時に自動的に作成されます。

リソース記述内のリソース割り当てビューへのアクセス

このタスクについて

既存のリソース記述およびそれらに関連付けられたリソース割り当てに関する情報を表示するには、メインメニューから以下の順にクリックします。

- 「管理ビュー」>「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (BAS)管理ビュー」>「リソース記述内のリソース割り当て」。

リソース記述と割り当てとの間の関連の更新

リソース記述と割り当てとの間の関連を更新するには、以下の手順を実行します。

- 「リソース記述内のリソース割り当て」ビューにアクセスし、チェック・ボックスをクリックしてリソース割り当てを選択します。
- 「更新...」ボタンをクリックします。「リソース記述内のリソース割り当て」(EYUSTRASINDSC.CREATE) ビューが表示されます。
- フィールドを更新し、「はい」をクリックして関連を更新します。それ以外の場合は、「いいえ」をクリックして処理を中止します。

リソース割り当て処理ビュー

「リソース割り当て処理」ビュー (RASPROC object) には、指定されたリソース割り当てが処理される時に選択されるリソースが表示されます。

リソースは、関連したリソース・グループの内容と、割り当て自体の選択基準に基づいて選択されます。

リソース割り当て処理ビューへのアクセス

このタスクについて

リソース割り当て処理の予想結果に関する情報を表示するには、以下の手順を実行します。

- メインメニューから「管理ビュー」>「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (BAS) 管理ビュー」をクリックします。
 - 「リソースのデプロイ」サブメニューで「リソース割り当て」をクリックして、「リソース割り当てで選択されたリソース」ビューを表示します。
1. ジャーナル定義 (JRNLEDEF オブジェクト)、ファイル・キー・セグメント定義 (FSEGDEF オブジェクト)、およびセッション定義 (SESSDEFオブジェクト) が「リソース割り当て処理」ビューに表示される可能性があります。これにより、論理スコープの全体像が示されます。ただし、これらのリソースは CICS システム内にインストールされないことに注意してください。
 2. 接続定義 (CONNDEF オブジェクト) を CICS システムにインストールできるのは、(「接続名」フィールドに記載されているように、) それらが、関連付けられたセッション定義を持っている場合のみになります。セッション定義の「接続名」フィールドがブランクの場合、その接続はインストールできません。

リソース記述でのリソースの選択

「リソース記述で選択されたリソース」ビューには、指定されたリソース記述が処理される時に選択されるリソースが表示されます。

リソースは、以下から選択できます。

- 現在リソース記述に関連付けられているリソース割り当て
- リソース記述に直接関連付けられているリソース・グループ

リソース記述で選択されたリソースへのアクセス

このタスクについて

「リソース記述で選択されたリソース」ビューには、以下の 2 つの方法でアクセスできます。

-

- メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。「管理ビュー」メニューで、「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (**BAS**) 管理ビュー」のいずれかをクリックします。
- メニューで、「リソース記述」をクリックして、「リソース記述」表形式ビューを表示します。
- リソース記述名をクリックして、「リソース記述」詳細ビューを表示します。
- 「関連したリソース定義およびシステム」リンクをクリックして、「リソース記述で選択されたリソース」ビューを表示します。
- または
 - メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。「管理ビュー」メニューで、「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (**BAS**) 管理ビュー」のいずれかをクリックします。
 - メニューから「関連」の下「リソース・グループ内の **CICS** リソース定義」をクリックして、「リソース・グループ内の **CICS** リソース定義」表形式ビューを表示します。
 - リソース・グループ名をクリックして、「リソース・グループ定義」詳細ビューを表示します。
 - 「これに関連したリソース記述」リンクをクリックして、「記述内のリソース・グループ」ビューを表示します。
 - リソース記述名をクリックして、「リソース記述」詳細ビューを表示します。
 - 「関連したリソース定義およびシステム」リンクをクリックして、「リソース記述で選択されたリソース」ビューを表示します。

リソース記述

リソース記述は、リソースのインストールをサポートする **CICS** システムにインストール可能か、**CICSplex SM** 要求として指定できる、論理的に関連したリソース定義のセットを特定します。

リソース記述へのアクセス

このタスクについて

リソース記述にアクセスするには、以下の手順を実行します。

- メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。「管理ビュー」メニューで、「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (**BAS**) 管理ビュー」のいずれかをクリックします。
- メニューで、「リソース記述」をクリックして、「リソース記述」表形式ビューを表示します。

リソース記述の作成

このタスクについて

リソース記述を作成する手順は、以下のとおりです。

- 「リソース記述」ビューにアクセスします。
- 「作成...」ボタンをクリックして、ブランクの「リソース記述」詳細ビューを表示します。さもないと、新しい定義を既存の定義に基づいて作成するために、「レコード」チェック・ボックスをクリックし、「作成...」ボタンをクリックします。
- 各フィールドに入力し、「はい」ボタンをクリックしてリソース記述を作成します。あるいは、「いいえ」をクリックしてプロセスを終了します。

リソース記述の置換

このタスクについて

リソース記述を置換するには、以下の手順を実行します。

- 「リソース記述」表形式ビューにアクセスし、「レコード」チェック・ボックスをクリックしてリソース記述を選択します。
- 「置換...」ボタンをクリックして「リソース記述」置換ビューを表示します。
- 必要に応じてフィールドを修正し、「はい」をクリックしてリソース記述を置換します。さもないと、「いいえ」をクリックしてプロセスを終了します。

リソース記述を置換すると、CICSplex SM は、インストールされているリソース記述に関連付けられたすべてのリソースを、新しい記述に関連付けられたリソースに置換しようとします。つまり、CICSplex SM は以下のことを実行します。

- 古いリソース記述に関連付けられたリソースをすべて破棄しますが、新しいリソース記述に関連付けられたリソースは破棄しません。
- 古いリソース記述と新しいリソース記述の両方に関連付けられたリソースをすべて再インストールします。
- 新しいリソース記述に関連付けられた追加のリソースをすべてインストールします。

置換が行われるためには、両方のリソース記述の「ターゲット・スコープ」フィールドと「関連スコープ」フィールドに指定された CICS システムがアクティブであり、EXEC CICS CREATE コマンドをサポートする CICS のリリースを実行している必要があります。

注: 要求が正常に完了しなかった場合の情報については、113 ページの『動的インストール・エラーの処理』を参照してください。

リソース・グループ定義ビュー

リソース・グループ (RESGROUP オブジェクト) は、1 つ以上の関連するリソース定義を関連付けるために使用されます。リソース・グループ内のリソース定義は、同じリソース・タイプを対象とすることもできますし、異なるリソース・タイプを対象とすることもできます。

リソース・グループ定義へのアクセス

このタスクについて

リソース・グループ定義にアクセスするには、以下の手順を実行します。

- メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。
- 「管理ビュー」メニューから、「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (**BAS**) 管理ビュー」をクリックします。
- 「定義」の下に「リソース・グループ」をクリックして、「リソース・グループ定義」表形式ビューを表示します。

リソース・グループの作成

このタスクについて

リソース・グループを作成する手順は、以下のとおりです。

1. 『リソース・グループ定義へのアクセス』の説明に従って、「リソース・グループ定義」 (EYUSTARTRESGROUP.TABULAR) ビューにアクセスします。
2. 「作成...」ボタンをクリックして「リソース・グループ定義」 (EYUSTARTRESGROUP.CREATE) ビューを表示します。
3. 属性値を入力します。
4. リソース・グループ定義を作成するには「はい」をクリックし、リソース・グループを作成せずに「リソース・グループ定義」ビューに戻るには「いいえ」をクリックします。

リソース記述へのリソース・グループの追加

このタスクについて

リソース・グループをリソース記述に追加するには、以下のアクションを実行します。

1. 『リソース・グループ定義へのアクセス』の説明に従って、「リソース・グループ定義」 (EYUSTARTRESGROUP.TABULAR) ビューにアクセスします。
2. 「レコード」列内のボックスをクリックしてリソース・グループを選択します。
3. 「リソース記述への追加」をクリックして、「リソース記述への追加」 (EYUSTARTRESGRP.ADDTODSC) ビューを表示します。
4. リソース記述の名前を入力します。オプションで、「説明」フィールドに追加の説明情報を入力します。
5. 「はい」をクリックしてリソース・グループをリソース記述に追加するか、「いいえ」をクリックしてプロセスを停止します。

注: リソース・グループをリソース記述に追加すると、リソース・セット・エラーが発生する可能性があります。このタイプの問題および関係方法について詳しくは、91 ページの『リソース・セットの検証』を参照してください。

記述内のリソース・グループ・ビュー

「記述内のリソース・グループ」ビューは、リソース記述 (RESDISC オブジェクト) 内のリソース・グループ (RESGROUP オブジェクト) のメンバーシップを記述します。

「記述内のリソース・グループ」の関連は、リソース・グループがリソース記述に追加された時、つまり、リソース記述とリソース割り当て (RASGNDEF オブジェクト) の間に関連がない時に自動的に作成されます。

記述内のリソース・グループへのアクセス

このタスクについて

リソース記述内のリソース・グループにアクセスするには、以下の手順を実行します。

- ・ メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。
- ・ 「管理ビュー」メニューから、「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (**BAS**) 管理ビュー」をクリックします。
- ・ 「関連」の下に「記述内のリソース・グループ」をクリックして、「記述内のリソース・グループ」表形式ビューを表示します。

リソース記述とグループとの間の関連の更新

このタスクについて

リソース記述とグループとの間の関連を更新するには、以下の手順を実行します。

- ・ 「リソース記述内のリソース・グループ」ビューにアクセスします。
- ・ 「レコード」チェック・ボックスをクリックして関連を選択し、「更新...」ボタンをクリックします。「記述内のリソース・グループ」作成ビューが表示されます。

記述内のリソース・グループ属性

説明 (オプション。) リソース記述とグループの関連付けの、1 文字から 30 文字の記述。

リソース・グループ内のリソース定義ビュー

「リソース・グループ内のリソース定義」ビュー (RESINGRP オブジェクト) には、リソース・グループおよびそれに関連付けられているリソース定義に関する情報が表示されます。

「リソース・グループ内のリソース定義」の関連は、リソース定義がリソース・グループ (RESGROUP オブジェクト) に追加される時に自動的に作成されます。

リソース・グループ内のリソースへのアクセス

このタスクについて

リソース・グループ内のリソースにアクセスするには、以下の手順を実行します。

- ・ メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。

- 「管理ビュー」メニューから、「ベーシック CICS リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (BAS) 管理ビュー」ビューのいずれかをクリックします。
- メニューから「関連」の下「リソース・グループ内のリソース定義」をクリックして、「リソース・グループ内の CICS リソース定義」表形式ビューを表示します。

CICS システム・リンク定義

ビジネス・アプリケーション・サービスを使用して、CICS 領域のペアごとに 1 つのシステム・リンク (SYSLINK) を作成できます。システム・リンク定義は、領域のペア間に必要な接続タイプと接続定義を記述します。接続定義を再利用して、同じ特定を共用するシステム・リンクをいくつでも作成することができます。

SYSLINK オブジェクトを使用して、さまざまなタイプの接続を定義できます。これらの接続には、IPIC、MRO、および ISC が含まれます。以下の例は、IPIC に対する同じ定義を再利用して 3 つの異なる SYSLINK オブジェクトを作成する方法を示しています。

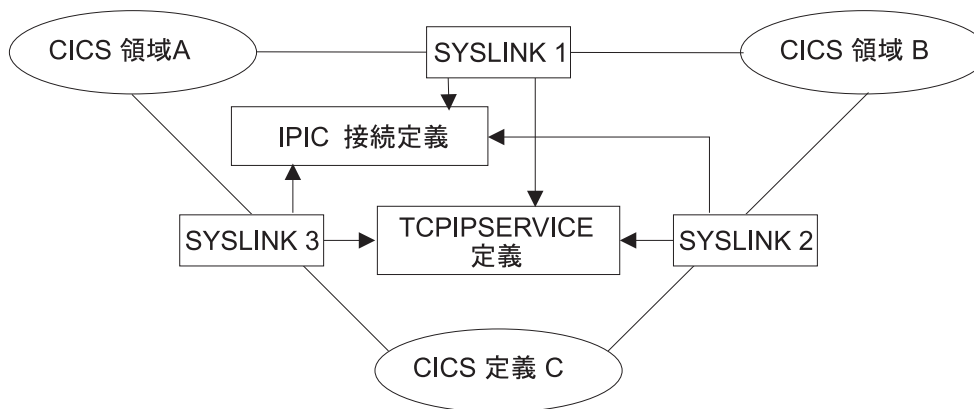


図 11. 定義を再利用して接続を作成する例

1 次領域と 2 次領域との間に定義されている接続で使用される APPLID と SYSID の値は、それらの領域がいつ開始されたか、および CICS システム定義 (CICSSYS ビュー) で使用されている APPLID と SYSIDNT の値が、CICS によって使用されている値と一致しているかどうかによって決まります。

- パートナー・システムがアクティブでないか、CICSplex SM に接続されていない場合、接続定義に使用される APPLID と SYSIDNT の値は、パートナー・システムの CICSSYS 定義から取得されます。
- パートナー・システムがアクティブで、CICSplex SM に接続されている場合、接続定義に使用される APPLID と SYSIDNT は、パートナー・システムによって現在使用されている値になります。

CICSplex SM によって管理されている CICS 領域の APPLID または SYSIDNT を変更した場合は、以下の手順を実行して CICSSYS 定義を変更する必要があります。

- 値が変更された後、管理対象の CICS 領域は、アクティブである限り、古い値を使用し続けます。この間、この領域を参照するシステム・リンクをインストールしているパートナー・システムは、古い APPLID または SYSIDNT の値を使用します。
- 領域が変更後にシャットダウンされてから、再び開始されるまで、システム・リンクをインストールしているパートナー・システムは、CICSSYS 定義からの更新済みの値を使用します。
- 領域は再開後、新しい値を使用します。この領域を参照するリンクをインストールしているパートナー・システムも新しい値を使用します。

SYSLINK リソース・オブジェクトをインストールする際に、IPIC システムのネットワーク ID、ホスト、およびポート番号も変更される可能性があります。これらの属性値は、システム・リンクがインストールされた時に正しく機能することを確実にするために、1 次領域と 2 次領域のシステム定義 (指定されている場合) によって指定変更されます。

システム定義リンクの表示の制限

システム・リンクは、両方の CICS 領域名によってデータ・リポジトリ内で識別されます。指定された CICS 領域名は、定義の作成方法に応じて、あるシステム・リンク定義の 1 次領域の場合もあれば、その他のシステム・リンク定義の 2 次領域の場合もあります。その領域を指定する定義は、その位置に関係なく、有効なシステム・リンクです。しかし、同じ領域名が 1 次フィールドまたは 2 次フィールドのいずれにも表示される可能性があるため、Web ユーザー・インターフェースの「CICS システム・リンク定義」ビューには以下のような制限があります。

- SORT 表示コマンドは、指定された CICS 領域のすべてのシステム・リンクを一緒に表示できません。このコマンドは、1 つのフィールドの内容に基づいてレコードをソートするために使用できますが、CICS 領域の名前は、2 つのフィールドのいずれにも表示される可能性があります。
- 単一の「CICS システム・リンク定義」ビューは、他のすべてのシステム・リンクを除き、指定された CICS 領域のすべてのシステム・リンクを表示できません。システムは、システム・リンク定義内で 1 次システムの可能性もあれば 2 次システムの可能性もあるため、単一の「CICS システム・リンク定義」ビューは、レコードを適切にフィルター操作できません。

CICS システム・リンク定義の表示

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用してシステム・リンクを表示できます。

このタスクについて

WUI 内の「**CICS システム・リンク定義および関連リソース (CICS system link definitions and related resources)**」メニューは、CICSplex 内の CICS 領域間の接続に関する情報を表示します。このメニューから、接続タイプに基づいてシステム・リンクをフィルターに掛け、関連したリソース定義を確認できます。

Web ユーザー・インターフェースを使用して CICSplex 内のシステム・リンク定義 (SYSLINK オブジェクト) を表示するには、以下の手順を実行します。

手順

1. メインメニューから「管理ビュー」をクリックし、次に「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (**BAS**) 管理ビュー」をクリックします。
2. 「**CICS** システム・リンク定義および関連リソース (**CICS system link definitions and related resources**)」メニュー内の適切なリンクを選択して、すべてのシステム・リンク、または特定の接続タイプのシステム・リンクを表示します。「**CICS** システム・リンク定義」ビューにシステム・リンクが表示されます。
3. リストから、関心のある SYSLINK オブジェクトを選択します。

WUI を使用したシステム・リンクのインストール

システム・リンクをインストールすると、CICSplex SM によって管理されている 2 つの CICS 領域間の接続が確立されます。そのシステム・リンクによって参照される定義は、ターゲットの CICS 領域にインストールされます。

始める前に

89 ページの『CICS 領域間での接続の定義』の説明に従って、必要な接続オブジェクトを定義しておく必要があります。

このタスクについて

CICS システム定義の「**BAS** リソース・インストールのオプション」フィールドに ALWAYS 属性を指定することにより、CICS の初期設定時にシステム・リンクを自動的にインストールすることができます。また、CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、CICS 領域がアクティブな間にシステム・リンクを動的にインストールすることもできます。以下の手順では、WUI を使用したシステム・リンクの動的インストール方法について説明します。

手順

1. メインメニューから、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「**CICS** システム・リンクおよび関連リソース」をクリックします。
2. 適切なリンクを選択して、すべての SYSLINK オブジェクトを表示するか、接続タイプでフィルターに掛けます。
3. インストールする SYSLINK の横にあるチェック・ボックスを選択し、「インストール」ボタンをクリックして「インストール」入力パネルを開きます。
4. 入力パネルのフィールドに入力して、リソースをインストールする前に CICSplex SM で実行する検査を選択します。
 - a. 記述に関連付けられた CICS 領域へのリソースのインストールを試行する前に実行する検査のタイプを選択します。
 - b. **EXEC CICS CREATE** コマンドを発行する前にすべてのリソースの有無と操作状態を検査するかどうかを選択します。
 - c. CICSplex SM でリソースのインストールを強制するかどうかを選択します。CICSplex SM は、CICS 領域に現行リソースがインストールされてい

るかどうかを確認します。インストールされている場合、CICSplex SM は、アクティブ・リソースの属性が変更されるのを避けるため、リソースをインストールしません。

5. 「はい」をクリックして、アクティブな CICS 領域にシステム・リンクをインストールします。

タスクの結果

CICSplex SM は、リソース定義を作成し、指定されたターゲット CICS 領域にそのリソース定義をインストールして接続を作成します。一部の値は、インストール・プロセスによってターゲット領域で変更されます。

- MRO 接続または IPIC 接続の場合、CONNDEF リソース・オブジェクトまたは IPCONDEF リソース・オブジェクトで、受信カウントは送信カウントに交換され、受信サイズは送信サイズに交換されます。
- APPC 接続の場合、受信サイズ・フィールドは送信サイズに交換され、「コンテンション勝者としてサポートされるセッションの最大数」は、1 次 CICS 領域の「グループ内のセッションの最大数」から「コンテンション勝者としてサポートされるセッションの最大数」を減算することにより再計算されます。

IPIC 接続の場合、TCPDEF リソース・オブジェクトが最初にインストールされ、その後に IPCONDEF がインストールされます。同じ名前とポート番号の TCPDEF リソース・オブジェクトが既にインストールされていて、オープン状態の場合、CICSplex SM はそのリソース・オブジェクトの再インストールを試行しません。以下のように、1 次領域と 2 次領域の両方の定義で一部の値が変更されます。

- TCPDEF リソース・オブジェクトがインストールされている場合、URM 値は常に NO に設定されます。
- 2 次領域のシステム定義にネットワーク ID が指定されている場合、それによって 1 次領域の IPIC 接続定義のネットワーク ID の値が指定変更されます。
- 2 次領域のシステム定義にホストまたはポート番号が指定されている場合、それによって 1 次領域の IPIC 接続定義のホストおよびポート番号が指定変更されます。
- 2 次領域の IPIC 接続定義は、TCPDEF リソース・オブジェクトからホストおよびポート番号を継承します。
- 1 次領域または 2 次領域のシステム定義にホストおよびポート番号が指定されている場合、それらの値によってその領域の TCPDEF リソース・オブジェクトの値が指定変更されます。2 次領域に TCPDEF リソース・オブジェクトがインストールされている場合、ホストおよびポート番号は 1 次領域の IPCONDEF 定義から取得されます。

次のタスク

CICS 領域のペアにインストールされているリソースを調べることにより、接続がアクティブかどうか確認することができます。

CICS システム・リンクの除去

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースのいずれかを使用して、データ・リポジトリから CICS システム・リンクを除去することができます。

手順

1. メインメニューから「管理ビュー」をクリックし、次に「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (**BAS**) 管理ビュー」をクリックします。
2. 「システム・リンク定義」 > 「すべてのシステム・リンク」をクリックして、「システム・リンク定義」ビューにアクセスします。
3. 除去する **CICS** システム・リンクの横にあるチェック・ボックスをクリックします。
4. 「除去...」をクリックして、「除去」ビューを表示します。
5. 「はい」をクリックして、**CICS** システム・リンク定義を除去します。

タスクの結果

データ・リポジトリからシステム・リンクが除去されます。ただし、システム・リンクを除去しても、接続を記述するリソース・オブジェクトはデータ・リポジトリから削除されません。

CICS システム・リソース

「**CICS** システムに割り当てられるリソース」ビューには、指定された **CICS** システムに割り当てられるリソースが表示されます。

現在 **CICS** システムに関連しているリソース記述に基づいてリソースが選択されます。

SYSRES ビューのアクセス

このタスクについて

CICS システムに割り当てられるリソースに関する情報を表示するには、以下の手順を実行します。

- メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。
- 「管理ビュー」メニューから、「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (**BAS**) 管理ビュー」をクリックします。
- 「リソースのデプロイサブメニューで、「**CICS** システム」をクリックします。
「**CICS** システムに割り当てたリソース」ビューが表示されます。

Web ユーザー・インターフェースの管理

この資料では、Web ユーザー・インターフェースの管理方法を、管理者に説明します。

CICSplex SM Web ユーザー・インターフェース・トランザクション (**COVC**)

CICSplex SM Web ユーザー・インターフェース・サーバー・コントローラー・トランザクション (**COVC**) は、Web ユーザー・インターフェース・サーバー **CICS** 領域に接続された端末で管理者が使用するために提供されています。

このトランザクションの機能は、次のとおりです。

- Web ユーザー・インターフェース環境を開始またはシャットダウンする。
- Web ユーザー・インターフェース状況情報のサマリーを表示する。
- アクティブなユーザー・セッションの詳細を表示して、セッションを個別に終了できるようにする。
- 提供された、およびカスタマイズされた、ビューおよびメニュー定義、マップ・オブジェクト、ユーザー・オブジェクト、およびユーザー・グループ・プロファイルを含む、Web ユーザー・インターフェースのリポジトリ情報をインポートおよびエクスポートします。
- トレース・フラグを動的に設定する。

COVC とだけ入力して、その後に他のコマンドをそれ以上何も入力せずに COVC トランザクションを実行すると、図 12 に示すように CICSplex SM Web ユーザー・インターフェース制御パネルが表示されます。

COVC	CICSplex SM Web User Interface Control	EYUVCTR
<ul style="list-style-type: none">1. Start Server2. Stop Server3. Status Details4. User Sessions5. Import6. Export7. Trace Flags		
CICSplex SM, an element of CICS Transaction Server for z/OS, Ver 3 Rel 2 Licensed materials - Property of IBM. 5695-M15 (C) Copyright IBM Corp. 1994, 2006. All rights reserved		
Current Status : Ready Applid : IYCQSTGW		Time : 19:01:51 Date : 05/25/2007
PF 1 Help	3 Exit	12 Return

図 12. CICSplex Web ユーザー・インターフェースの制御パネル

Web ユーザー・インターフェース・サーバーの開始および停止

PLT 処理の際に Web ユーザー・インターフェース・サーバーがまだ開始されていない場合、COVC 制御パネルから「**Start Server** (サーバーの開始)」オプションを選択してそれを開始できます。Web ユーザー・インターフェース・サーバーの開始が要求されたことを示すメッセージ EYUVS0900I が制御パネルで発行されます。

Web ユーザー・インターフェース・サーバーを停止するには、COVC 制御パネルから「**Stop Server** (サーバーの停止)」オプションを選択します。Web ユーザー・インターフェース・サーバーの停止が要求されたことを示すメッセージ EYUVS0901I が制御パネルで発行されます。

注: COVC トランザクションを使用する Web ユーザー・インターフェース・サーバーの停止は、COVC のトランザクションが完了したときに Web ユーザー・インターフェース・サーバーとして機能する CICS システムをシャットダウンします。

次のコマンドを発行して、Web ユーザー・インターフェース・サーバーを開始することもできます。

COVC START

次のコマンドを発行して、Web ユーザー・インターフェース・サーバーを停止することもできます。

COVC STOP

MVS Modify コマンドを使用して、COVC START および COVC STOP コマンドを CICS 端末またはコンソールから発行できます。

既に開始している Web ユーザー・インターフェース・サーバーを開始しようとした場合、Web ユーザー・インターフェース・サーバーが現在アクティブであることを示すメッセージ EYUVS0902W が発行されます。同様に、既に停止している Web ユーザー・インターフェース・サーバーを停止しようとした場合、Web ユーザー・インターフェース・サーバーが現在は非アクティブであることを示すメッセージ EYUVS0903W が発行されます。

WUI サーバー領域をシャットダウンする際、CEMT、CICS Explorer、または WUI CICSRRGN ビューは使用しません。これらの方式を使用する場合、CICSplex SM クリーンアップは行なわれません。この状況で、メッセージ

EYUXS0910I、EYUXS1014I、EYUXS1019W および EYUXS1016E と、以下の例のようなタイトルの SVC ダンプを受け取る場合があります。

```
EYU9XSTR Dump,jobname,applid,sysname,LMAS,COVA,00000000,TRCV,EYU9XSTR,dd/mm/yyyy,hh:mm:ss
```

SVC ダンプに加えて、EYUXS1019W メッセージで言及されているように、API リソースが孤立する場合があります。

状況詳細の表示

Web ユーザー・インターフェース・サーバーの状況詳細を表示するには、COVC 制御パネルから「**Status Details** (状況詳細)」オプションを選択します。

このオプションによって、147 ページの図 13に示されているように「**Status Details** (状況詳細)」パネルが開きます。

COVC	CICSplex SM Web User Interface Control	EYUVCTS
Status Details		
CMAS Sysid	: QSTX	
Server Sysid	: QSGW	
CICSplex SM Release	: 0320	
Secure Sockets	: No	
Port	: 05126	
Hostname	: MVSXX.COMPANY.COM	
TCP/IP Service Name	: EYUWUI	TCP/IP Family : IPV4
TCP/IP Service Status	: Open	
TCP/IP Address	: 127.10.10.12	
Current Status	: Ready	Time : 19:04:49
Applid	: IYCQSTGW	Date : 02/27/2007
PF 1 Help	3 Exit	12 Return

図 13. 「Status Details (状況詳細)」パネル

以下は、図 13 に示されているいくつかのフィールドについての説明です。

- **CMAS Sysid (CMAS システム識別名)**

Web ユーザー・インターフェース・サーバーの接続先となる CMAS のシステム ID。

- **Secure Sockets (セキュア・ソケット)**

Web ユーザー・インターフェース・サーバーが、TCPIPSSL Web ユーザー・インターフェース・サーバーの初期設定パラメーターで定義されているように、Secure Sockets Layer (SSL) を使用しているかどうかを示します。

- **Port (ポート)**

TCPIPSPORT Web ユーザー・インターフェースのサーバー初期設定パラメーターに指定された TCP/IP ポート番号です。

- **Hostname (ホスト名)**

TCPIPHOSTNAME Web ユーザー・インターフェースのサーバー初期設定パラメーターに指定された TCP/IP ホスト名です。

- **TCP/IP Service Name (TCP/IP サービス名)**

Web ユーザー・インターフェースによって使用されている TCPIPSERVICE の名前です。

- **TCP/IP Service Status (TCP/IP サービス状況)**

Web ユーザー・インターフェースによって使用されている TCPIPSERVICE の状況です。

- **TCP/IP Address (TCP/IP アドレス)**

CICS Transaction Server の CICSplex SM エレメントを使用している場合、Web ユーザー・インターフェースによって使用されている TCPIPSERVICE のコロン 16 進またはドット 10 進の IP アドレスです。

• **TCP/IP Family (TCP/IP ファミリー)**

CICS Transaction Server の CICSplex SM エlementを使用している場合、Web ユーザー・インターフェースによって使用されている TCPIPService の IP アドレスのアドレス・フォーマットです。

コントロール・パネルに戻るために PF12 を押した場合は、メッセージ EYUVS0906I が表示されて、操作が完了したことが示されます。

ユーザー・セッションの表示

ユーザー・セッションに関する情報を表示するには、COVC 制御パネルから「**User Sessions (ユーザー・セッション)**」オプションを選択します。

これによって、「**User Sessions (ユーザー・セッション)**」パネルが、図 14に示されているように開きます。

COVC

CICSplex SM Web User Interface Control

EYUVCTU

User Sessions

Page 1 of 1

Current No. of Users : 1

Inactive Timeout : 30 (mins)

Maximum No. of Users : 20

Userid	USERGrp	Inact	TimeA	Win D	ClientIp	Status
OPS1	OPSWUI1	4	3:17	7	10.10.10.25	
WUIADM	ADMWUIG	0	2:04	1	10.10.10.3	
MONCNSL	MONITOR	0	1:59	3	10.10.10.74	ENDING

Current Status : Ready

Time : 11:29:05

Applid : IYCSZGW0

Date : 10/19/2006

PF 1 Help

3 Exit

7 Up

8 Down

12 Return

図 14. 「User sessions (ユーザー・セッション)」パネル

以下は、図 14 に示されているいくつかのフィールドについての説明です。

Maximum No. of Users (ユーザーの最大数)

同時ユーザーの最大許可数で、MAXUSERS 初期設定パラメーターに指定された値です。

Inactive Timeout (非アクティブ・タイムアウト)

非アクティブなユーザー・セッションを強制終了するまでの期間で、INACTIVETIMEOUT 初期設定パラメーターに指定された値です。非アクティブのタイムアウトに達したとき、ユーザー・セッションは終了します。

Userid

Web ユーザー・インターフェースにサインオンしたユーザーのユーザー ID。

UserGrp

ユーザーが属するユーザー・グループ。

Inact ユーザー・セッションが非アクティブとなっている期間。

TimeA

ユーザーがログオンしている期間。

Win このユーザー・セッションが現在開いているウィンドウの数。この数値は、ユーザーがナビゲーション・フレームで「**New window** (新規ウィンドウ)」または「**View Editor** (ビュー・エディター)」ボタンを選択するか、またはビュー・エディターで「**New Editor** (新規エディター)」または「**New Home window** (新規ホーム・ウィンドウ)」ボタンを選択するたびに増分します。

注: この数値は、ユーザーがウィンドウを閉じるときには必ずしも減分しません。閉じられたウィンドウは、リソースが再利用されるまでアクティブのままになります。

D データ・インターフェース使用の標識。

ClientIP

クライアント Web ブラウザーまたはプロキシ TCP/IP アドレス。
TCP/IP が IPv6 アドレスの場合は、アドレスが 2 行にわたるため、1 ページあたりに表示されるユーザーの数が減少することになります。IPv4 アドレスは 1 行で表示されます。

状況 ページ状況の標識。

コントロール・パネルに戻るために PF12 を押した場合は、メッセージ EYUVS0906I が出されます。

ユーザー・セッションの終了:

「**User Sessions** (ユーザー・セッション)」 COVC パネルから、ページの **P** または強制ページの **F** をユーザー ID に対して入力し、Enter キーを押すことによって、ユーザー・セッションを終了できます。

ページ要求が成功したことを示すメッセージ EYUVS0912I が発行されます。ユーザー・セッションが終了すると、メッセージが EYULOG にも書き込まれます。

注: 強制ページ・コマンドを使用してユーザーを終了すると AEXY 異常終了が発生し、いくつかのリソースが再利用されない可能性もあります。

WUI 定義のインポートおよびエクスポート

COVC を使用して、WUI データ・リポジトリの WUI 定義をバックアップし、リストアすることができます。

COVC のインポートおよびエクスポート機能を使用して、WUI パネル構造の安全なコピーを作成し、その後、以下を行うことができます。

- それらを他の WUI サーバーに配布する。
- プログラム一時修正 (PTF) によってサービス変更を適用する。
- 他のリリースへ定義を移行する。

WUI サーバーおよび WUI サーバー・リポジトリのコンテンツのアップグレードについて詳しくは、WUI および WUI サーバー・リポジトリのコンテンツのアップグレード (EYUWREP)を参照してください。

COVC を使用した **WUI** 定義のインポート:

COVC インポート機能を使用して、外部ファイルから WUI データ・リポジトリ定義をインポートします。使用できるファイルは、MVS 順次データ・セットか、MVS 区分データ・セットのメンバーのいずれかです。

定義が順次ファイル内に含まれている場合、そのデータ・セットは CICS 区画外データ・セットに関連付けられていなければならず、ファイルがリンクされている CICS 一時データ・キュー名を介してインポートする必要があります。「**Import command** (インポート・コマンド)」パネルの「Import from a TDQ (TDQ からのインポート)」オプションを使用する必要があります。定義が MVS 区分データ・セットのメンバー内に含まれている場合、「**Import command** (インポート・コマンド)」パネルの後に表示される「**Import from a data set** (データ・セットからのインポート)」で、データ・セットとメンバー ID を直接指定できます。

ビュー定義のデータは以下で構成されます。

- ビュー・セットおよびメニュー
- WUI マップ・オブジェクト
- ユーザー・オブジェクト
- ユーザー・グループ・プロファイル

IBM 提供の WUI ビューおよびメニュー定義のセットが SEYUVIEW 区分データ・セットに含まれているため、「**Import command** (インポート・コマンド)」パネルで「Import from a data set (データ・セットからのインポート)」機能を指定する必要があります。このインポート・オプションを使用する利点は、このパネルで個々のメンバー名を指定できるため、バックアップしたビュー・セットのコンテンツの個々の要素を選択的にリストアできることです。

COVC インポート機能でエクスポートおよびインポートされるビュー・セットには、以下の特定のファイル定義要件があります。

- 順次ファイルは、以下のように定義されていなければなりません。
レコード・フォーマット: VB
論理レコード長: 32000
ブロック・サイズ: 32004
- 区分データ・セットは、以下のように定義されていなければなりません。
レコード・フォーマット: VB
論理レコード長: 32000
Block size: 32760

TD キュー COVE および COVI 用に標準の一時データ・キュー定義が提供されています。それらは、WUI サーバー JCL に組み込むために、EYUCOVE および EYUCOVI という DD 名に関連付けられています。これらの TDQUEUE 定義を、以降のインポート/エクスポートの区画外キュー用のモデルとして使用できます。

区画外 **TDQ** に関連付けられた順次ファイルから定義をインポートするには、以下を行います。

1. 制御パネルから「Import (インポート)」オプションを選択するか、または **COVC IMPORT** コマンドを使用して「**Import (インポート)**」パネルを開きます。
2. 「**Import (インポート)**」パネルで「Import from a TDQ (TDQ からのインポート)」を選択して、「**Import a TDQ (TDQ のインポート)**」パネルを開きます。以下の図は、TDQ パネルからの「Import (インポート)」を表しています。

COVC	CICSplex SM Web User Interface Control	EYUVCTW
Import from a TDQ		
Input TDQ name :	Name of extrapartition TDQ for import	
Type :	MEnu Viewset USERGrp User MAp All	
Import option :	Skip Overwrite DELETE	
Current Status : Ready		Time : 08:53:57
Applid : CICS HW61		Date : 03/27/2007
PF 1 Help	3 Exit	12 Return

図 15. 「Import from a TDQ (TDQ からのインポート)」パネル

3. 定義が現在保持されている区画外一時データ・キューの名前 (例えば COVI) を入力します。
4. 他のブランク・フィールドに、以下のように入力します。

タイプ

以下のいずれかのタイプを入力します。

MEnu

メニューだけをインポートします。

Viewset

ビュー・セットだけをインポートします。

User ユーザー・オブジェクトだけをインポートします。

USERGrp

ユーザー・グループ・プロファイルだけをインポートします。

MAp マップ・オブジェクトだけをインポートします。

All すべてのタイプの定義をインポートします。

注: 「Type (タイプ)」のいずれかをインポートするには、関連する ESM プロファイルへの UPDATE アクセスが必要です。

- MENU : ESM プロファイル EYUWUI.*.MENU.menuname
- MAP : ESM プロファイル EYUWUI.*.MAP.mapname
- VIEW set : ESM プロファイル EYUWUI.*.VIEW.viewsetname
- USER および USERGRP : ESM プロファイル EYUWUI.*.USER
- ALL : 上記すべてのプロファイル

インポート・オプション (Import option)

入力データ・セットに重複した定義が見つかった場合にサーバーが取る

べきアクションを入力します。つまり、既存の定義が保持されるか、上書きされるか、削除されるかのいずれかです。

Skip **Skip** を指定した場合、入力データ・セットに既に存在しているもの以外の定義だけがインポートされます。

Overwrite

Overwrite を指定した場合、入力データ・セットに既に存在する定義は上書きされます。

DELETE

選択したタイプの一致する定義は、リポジトリ・データ・セットから除去されます。例えば、リポジトリから選択的にレコードを除去するには、除去したいオブジェクトをエクスポートしてから、エクスポートされたそのファイルをインポート削除機能で使用する、それらのオブジェクトを除去することができます。

注: 同じ名前のビュー・セットとメニューを持つことができます。

5. **Enter** を押して、操作を開始します。

区分データ・セットから定義をインポートするには、以下を行います。

- 1. 制御パネルから「Import (インポート)」オプションを選択するか、または **COVC IMPORT** コマンドを使用して「**Import (インポート)**」パネルを開きます。
- 2. 「**Import (インポート)**」パネルで「Import from a data set (データ・セットからのインポート)」を選択して、「**Import from a data set (データ・セットからのインポート)**」パネルを開きます。以下の図は、「**Import from a data set (データ・セットからのインポート)**」パネルを表しています。

COVC

CICSplex SM Web User Interface Control

EYUVCTI

Import from a data set

Input data set name :
Name of data set for import

Input data set member :
Member name, trailing * allowed

Type :
MEnu | Viewset | USERGrp | User | MAp | A11

Import option :
Skip | Overwrite | DELETE

Current Status : Readt
Applid : CICS HW61

Time : 08:53:57
Date : 27/03/2007

PF 1 Help 3 Exit

12 Return

図 16. 「Import from a data set (データ・セットからのインポート)」パネル

- 3. インポートする、供給されたビューおよびメニュー定義を含むデータ・セット・メンバーの名前を入力します。入力ストリングの末尾にアスタリスクを使用して、データ・セット・メンバーのグループを指定することができます。例えば、

EYUEA* と入力すると、名前が文字 EYUEA で始まるすべてのメンバー (IBM 提供の SEYUVIEW データ・セットに含まれるすべての英語のメニューおよびビューのセット) がインポートされます。

注: メンバー名をブランクのままにすることはできません。そのようにすると、パネルのダイアログで、要求が拒否されます。順次ファイルからインポートする場合、そのファイルは区画外 TD キューと関連付けられていなければならない、「Import from a TD Queue (TD キューからのインポート)」副次機能を使用して、そのレコードを WUI データ・リポジトリに転送しなければなりません。

4. 他のブランク・フィールドに、以下のように入力します。

タイプ

以下のいずれかのタイプを入力します。

MEnu

メニューだけをインポートします。

Viewset

ビュー・セットだけをインポートします。

User ユーザー・オブジェクトだけをインポートします。

USERGrp

ユーザー・グループ・プロファイルだけをインポートします。

MAp マップ・オブジェクトだけをインポートします。

All すべてのタイプの定義をインポートします。

注: 「Type (タイプ)」のいずれかをインポートするには、関連する ESM プロファイルへの UPDATE アクセスが必要です。

- MENU : ESM プロファイル EYUWUI*.MENU.menuname
- MAP : ESM プロファイル EYUWUI*.MAP.mapname
- VIEW set : ESM プロファイル EYUWUI*.VIEW.viewsetname
- USER および USERGRP : ESM プロファイル EYUWUI*.USER
- ALL : 上記すべてのプロファイル

インポート・オプション (Import option)

入力データ・セットに重複した定義が見つかった場合にサーバーが取るべきアクションを入力します。つまり、既存の定義が保持されるか、上書きされるか、削除されるかのいずれかです。

Skip **Skip** を指定した場合、入力データ・セットに既に存在しているもの以外の定義だけがインポートされます。

Overwrite

Overwrite を指定した場合、入力データ・セットに既に存在する定義は上書きされます。

DELETE

選択したタイプの一致する定義は、リポジトリ・データ・セットから除去されます。例えば、リポジトリから選択的にレコードを除去するには、除去したいオブジェクトをエクスポートしてから、エクスポートされたそのファイルをインポート削除機能で使用して、それらのオブジェクトを除去することができます。

注: 同じ名前のビュー・セットとメニューを持つことができます。

5. **Enter** を押して、操作を開始します。

インポートの完了:

インポート操作の開始のしるしとしてメッセージ EYUVS1016I が出され、その正常終了を示すものとして EYUVS0916I が「Import (インポート)」パネルに出されます。

インポートが失敗した場合には、既に正常に読み取られた完全なビュー・セットおよびメニュー定義は、リポジトリにとどまりますが、失敗した定義とそれに続く一切のものはインポートされません。 インポートが失敗したことを示すものとしてメッセージ EYUVS0917E が出され、WUI サーバーの EYULOG またはオペレーター・ログにメッセージが書き込まれます。

自分が更新アクセス権限を持っているビュー・セットおよびメニューだけをインポートできます。 必要なアクセス権限を持っていないリソースはスキップされ、EYULOG メッセージ EYUVS1014W が出されます。ビュー・セットおよびメニューへのアクセス・レベルの設定のガイダンスについては、Web ユーザー・インターフェース・リソースへのアクセス制御を参照してください。

コントロール・パネルに戻るために PF12 を押した場合は、メッセージ EYUVS0906I が出されます。

WUI 定義のエクスポート:

COVC エクスポート機能を使用して、WUI データ・リポジトリ定義を外部ファイルにエクスポートします。このファイルは抽出元の WUI に対するバックアップとして使用できます。また、カスタマイズした WUI 環境を CICSplex で複製するために、他の WUI 領域に配布することもできます。

使用できるファイルは、MVS 順次データ・セットか、MVS 区分データ・セット (PDS) のメンバーのいずれかです。

エクスポート・ターゲットが MVS 順次データ・セットの場合、以下の定義属性が必要です。

レコード・フォーマット: VB
論理レコード長: 32000
ブロック・サイズ: 32004

エクスポート・ターゲットが PDS のメンバーである場合、以下の定義属性が必要です。

レコード・フォーマット: VB
論理レコード長: 32000
Block size: 32760

エクスポート操作が完了すると、そのターゲット・ファイルはエクスポートされたレコードのオフライン・バックアップとなり、CICSplex で WUI 定義を移行するために、他の WUI 領域におけるその後のインポート操作で使用できます。

注: インポート操作 (インポート元として PDS メンバーか区画外 TD キューのいずれかを選択できる) とは異なり、エクスポート操作は TD キュー名に対してのみ実行できます。

WUI パネル構成をカスタマイズし、その構成を (表示の一貫性や WUI バージョンの移行のために) CICSplex 内の他の WUI 領域に渡す場合、COVC トランザクションを使用して WUI 定義をエクスポートする必要があります。そうすることにより、他の WUI サーバーに定義を配布したり、新しいリリースにアップグレードするときに定義を転送したりすることができます。

区画外 TD キュー COVI および COVE 用にサンプル定義が提供されています。WUI 定義の別々の要素を別々のデータ・セットにエクスポートする場合、各エクスポート操作に対してターゲットとして別の TD キュー(と関連データ・セット) を提供する必要があります。同じターゲット TD キューに対して連続したエクスポート要求を実行する場合、各操作で、その前の操作の内容が上書きされます。

WUI リポジトリから定義をエクスポートするには、コントロール・パネルから「Export (エクスポート)」オプションを選択するか、または **COVC EXPORT** コマンドを使用します。これによって、COVC エクスポート (**Export**) パネルが、図 17 に示されているように開きます。

COVC

CICSplex SM Web User Interface Control

EYUVCTE

Export

Output TDQ Name :

Name of extrapartition TDQ for export

Type

:

MENU

MEnu | Viewset | USERGrp | MAP | User | All

Name

:

*

Specific or generic name of a definition to export

Lock option

:

NONE

None | LOCK

Current Status : Ready

Time : 08:58:55

Applid : CICSHW61

Date : 09/12/2004

PF

1 Help

3 Exit

12 Return

図 17. エクスポート (Export) パネル

- 「エクスポート」パネルのブランク・フィールドに、以下のように入力します。
- 「Output TDQ Name (出力 TDQ 名)」は、定義のエクスポート先となる区画外一時データ・キューの名前 (例えば COVE) です。
 - 以下のいずれかのタイプを入力します。

MEnu

メニューだけをエクスポートします。

Viewset

ビュー・セットだけをエクスポートします。

User

ユーザー・オブジェクトだけをエクスポートします。

MAP

マップ・オブジェクトだけをエクスポートします。

USERGrp

ユーザー・グループ・プロファイルだけをエクスポートします。

All すべてのタイプの定義をエクスポートします。

注: 「Type (タイプ)」のいずれかをエクスポートするには、関連する ESM プロファイルへの READ または UPDATE アクセスが必要です。

- MENU : ESM プロファイル EYUWUI.*.MENU.menuname
- MAP : ESM プロファイル EYUWUI.*.MAP.mapname
- VIEW set : ESM プロファイル EYUWUI.*.VIEW.viewsetname
- USER および USERGRP : ESM プロファイル EYUWUI.*.USER
- ALL : 上記すべてのプロファイル

- **Name** は、エクスポートするオブジェクトの具体的な名前または総称名です。エクスポートの際に総称名を使用する場合の規則は次のとおりです。
 - アスタリスク (*) は任意の数の文字を表します。これはストリング内の最後の文字または唯一の文字でなければなりません。以下に例を示します。
 - EYU* は、文字 EYU で始まる名前を持つすべての定義を意味します。
 - * はすべての定義を意味します。

エクスポートされるオブジェクトの名前の一部としてアスタリスク (*) が含まれる場合、それは総称的にのみエクスポートできます。例えば、3 つのオブジェクト *GROUP1、GROUP*2、および GROUP3 がある場合、* の Name 値を使用して *GROUP1 をエクスポートする必要があります (そして、オブジェクト GROUP*2 および GROUP3 もエクスポートされます)。

GROUP* の Name 値を使用してオブジェクト GROUP*2 をエクスポートできます (それにより GROUP3 もエクスポートされます)。

- ロック (Lock) オプションは、エクスポートされた定義にロックを掛けることを可能にします。ロックされた定義を後にリポジトリにインポートした場合、ビュー・エディターを使用してそれらを変更したり削除したりすることはできません。ロックされた定義のロックを解除することはできません。それらは「**Import (インポート)**」パネルで削除オプションを使用することによってのみ、削除することができます。

なし アンロック状態の定義はロックしません。ロックされている既存の定義は、ロックされた定義としてエクスポートされます。

LOCK

エクスポートされるすべての定義をロックします。

注: アンロック状態の定義のセットを、ロックされたセットで上書きした場合、ロックを解除する唯一の方法は、アンロック状態の定義のセットを再インポートして、ロックされたセットを上書きすることです。この理由のため、アンロック状態の定義のセットをロック済みのセットで置き換える前に、アンロック状態の定義のセットのバックアップを取っておくとよいでしょう。

すべてのフィールドが完成したら、**Enter** を押して、ビューまたはメニューの定義をエクスポートします。

メッセージ EYUVS0919I が「**Export** (エクスポート)」パネルに出された場合は、エクスポートが成功したことを示し、書き出されたオブジェクトの数が示されます。エクスポートが失敗した場合は、書き出し先の TDQ 内のデータは不完全であり、廃棄する必要があります。メッセージ EYUVS0920E が出された場合は失敗したことを示しており、Web ユーザー・インターフェース・サーバーの EYULOG にメッセージが書き込まれます。

エクスポートできるのは、自分が読み取りまたは更新のアクセス権を持っている定義だけです。必要なアクセス権を持っていないリソースはスキップされ、EYULOG メッセージ EYUVS1015W が出されます。詳しくは、Web ユーザー・インターフェース・リソースへのアクセス制御を参照してください。

コントロール・パネルに戻るために PF12 を押した場合は、メッセージ EYUVS0906I が出されます。

トレース・フラグの設定

動的にトレース・フラグを設定するには、制御パネルから「Trace Flags (トレース・フラグ)」オプションを選択します。

重要: トレースは、**IBM** サポート・センターの担当者の依頼があった場合にのみアクティブにすることをお勧めします。

「Trace Flags (トレース・フラグ)」パネルが、図 18に示されているように表示されます。

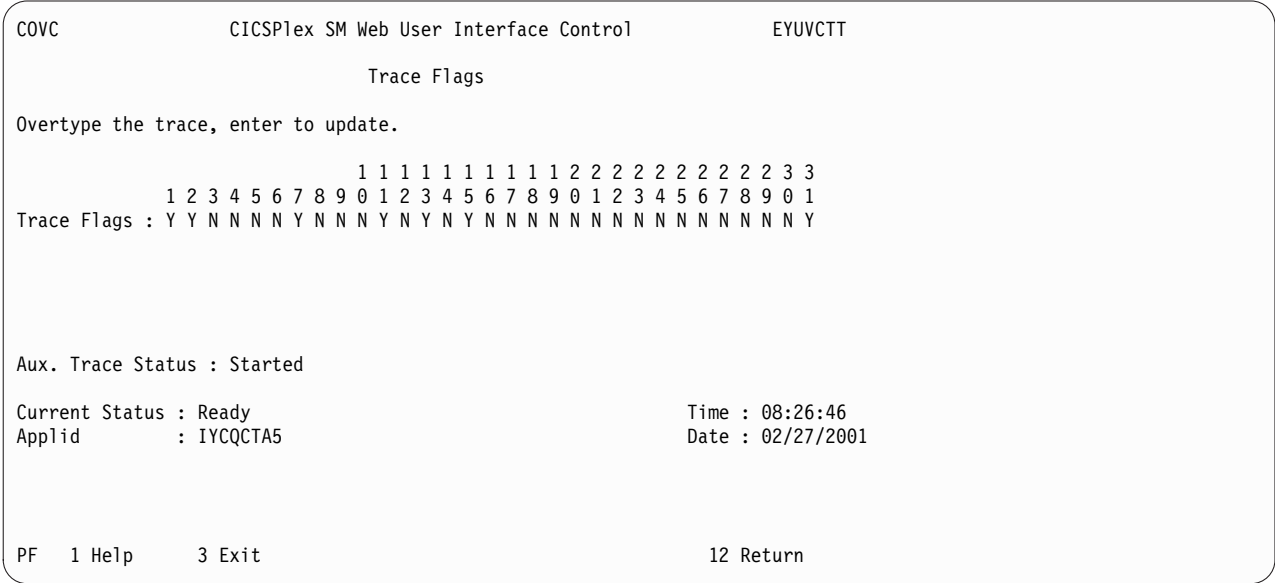


図 18. 「Trace flags (トレース・フラグ)」パネル

いずれかの適切なトレース・フラグを設定することにより、生成されるトレース情報の量を制御できます。 31 の個別のトレース・フラグが提供されています。いずれかのフラグに Y または N を上書きしてから Enter を押すことにより、設定を変更できます。

Web ユーザー・インターフェース・サーバー・リポジトリ

Web ユーザー・インターフェース (WUI) サーバー・リポジトリには、WUI サーバーによって保守されるすべてのリカバリー可能リソースが入っています。

これには、以下のものが含まれています。

- ビューおよびメニューの定義
- マップ・オブジェクトの定義
- ユーザー・プロフィール
- ユーザー・グループ・プロフィール

WUI サーバー・リポジトリは、WUI を使用する前に作成される、可変長レコードの、キー・シーケンス VSAM ファイルで構成されます。デフォルトで、WUI サーバーごとに、共用されない 1 つのリポジトリがあります。

WUI サーバー・リポジトリの DD 名を、WUI サーバー用の始動 JCL に含める必要があります。

データ・リポジトリからの定義をインポートおよびエクスポートできるので、定義をバックアップしたり、他の Web ユーザー・インターフェース・サーバーに定義を配布したり、プログラム一時修正 (PTF) の結果としてサービス変更を適用したり、他のリリースに定義をマイグレーションすることができます。エクスポートは、COVC トランザクションを使用して実行します。インポートは、COVC を使用するか、または WUI サーバーを始動するときに自動インポート初期設定パラメーターを指定することにより、実行します。

IBM 提供のビュー定義およびメニュー定義のセット

デフォルト・マップ・オブジェクトを含むビュー・セット定義およびメニュー定義のサプライ・セットは、CICSTS55.CPSM.SEYUVIEW データ・セットに入れて提供されます。

データ・セットは、いくつかのメンバーによって構成されます。各メンバーには、以下の 1 つが含まれています。

- マップ・オブジェクト定義。
- ユーザー・オブジェクト定義。
- ユーザー・グループ・プロフィール定義。
- メニュー・オブジェクト。
- 1 つの CICSPlex SM オブジェクトに関連付けられたすべてのビュー・セット定義。

現在は 3 つある提供されている言語ごとに、別個のメンバーがあります。

データ・セット・メンバーの名前は、EYU1tccc という形式になっています。

- 1 は、言語を示します。現在は、E は英語、S は中国語 (簡体字)、K は日本語です。
- t は、ビュー・セットを示します。現在用意されている WUI のビューとメニューはすべて、A という文字になります。
- ccc は、ビューに関連したリソースを示します。

メンバー名は、 **INITPARM** CICS システム初期設定パラメーターに指定された 3 文字の言語 ID と一致します。 これらは、以下のとおりです。

表 7. 提供されるビューのセットのためにサポートされている言語

言語	言語 ID
米国英語	ENU
日本語	JPN
中国語 (簡体字)	CHS

提供されるビューの命名規則:

提供されるすべてのビューの名前は、文字 EYUSTART から開始します。

提供されるビュー定義およびメニュー定義のセットの命名規則は、以下のとおりです。

ビュー

EYUSTART`objectname.viewtype`。ここで `objectname` はリソースの名前、`viewtype` は以下のいずれかです。

- TABULAR

表形式ビュー。

- DETAILED

詳細ビュー。 場合によっては、複数のものが表形式ビューに関連付けられているとき、詳細ビューの名前は DETAIL1、DETAIL2、などとなります。

- アクション名

作成などのアクションのデータ入力パネル、または確認パネル

メニュー

EYUSTART`menuname`

`menuname` はメニューの名前です。 例えば、EYUSTARTMENU は提供されるホーム・メニューおよびナビゲーション・フレームを表示します。

マップ・オブジェクト

EYUSTARTMAP`type`。ここで `type` は以下のいずれかです。

BAS
MON
RTA
WLM

出力ログ (EYULOG)

Web ユーザー・インターフェースは Web ユーザー・インターフェース・サーバー (CMAS ではない) の CICSplex SM EYULOG を使用して、オペレーター・メッセージの大部分を記録します。その他のメッセージは、オペレーター・ログに書き込まれます。

EYULOG メッセージ (EYUVS1101I または EYUVS1102I) は、ビュー・セットまたはメニューが作成、変更、または削除されるごとに発行されます。メッセージ EYUVS1016I は、インポートの開始を記録するために発行されて、ユーザー ID およびソース一時データ・キューを含んでいます。これは Web ユーザー・インターフェースの更新アクティビティを追跡するために役立つ監査証跡を提供します。

さらに、各ビュー・セットおよびメニュー定義には、ユーザー ID および時刻を含む最終変更についての詳細が記録されます。この情報は、ビュー・セットがエクスポートまたはインポートされるときに保存されます。

カスタマイズ可能なヘルプのソース

カスタマイズ可能なビューおよびメニュー・ヘルプは、ビューおよびメニュー用に追加のヘルプを提供する場合に作成できるヘルプです。

カスタマイズ可能なビューおよびメニュー・ヘルプに対しては、以下の 2 つの方法でサービスを提供できます。

- Web ユーザー・インターフェース・サーバーによって。Web ユーザー・インターフェースによってサービスを提供される場合、カスタマイズ可能なビューおよびメニュー・ヘルプは、区分データ・セットにメンバーとして保管される任意の HTML メンバーのセットから構成されます。CICS Web インターフェース・テンプレート・マネージャーを使用して、Web ブラウザーに送信するこの区分データ・セットのメンバーにサービスを提供できます。
- 任意の外部 Web サーバーによって。

区分データ・セットの DD 名が、Web ユーザー・インターフェース・サーバーの開始 JCL に指定されている必要があります。

Web ユーザー・インターフェースから外部サーバーへのアクセス

Web ユーザー・インターフェースは、他の Web ベースのツールにアクセスできます。

これは、次のように行うことができます。

- 外部 Web サーバーによってサービスされる、カスタマイズ可能なビューおよびメニュー・ヘルプへのリンク
- 外部 Web サーバーによってサービスされるページへのメニュー選択リンク

詳細については、Customizing the Web User Interfaceを参照してください。

WUI ビューおよびメニューへのアクセスの提供

Web ユーザー・インターフェースへは、標準的な Web ブラウザー・ソフトウェアを使用してアクセスします。WUI へは、Web ブラウザーを起動できれば、有効な URL を指定することによってどの場所からでもリンクできます。

Web ユーザー・インターフェースにアクセスするたびに、データの新しいインスタンスを表示した新しいウィンドウが開きます。データのインスタンスが異なる場合、それらは互いに独立しています。一度に開けるウィンドウの最大数の詳細については、新規ウィンドウのオープンを参照してください。

この URL は、予約済みの安全でない文字に標準 HTTP の「%nn」表記 (nn は ISO-8859-1 コード・ページ上の 16 進表記) を使用したエスケープを使用して、HTTP または HTTPS 要求用に正しくフォーマット設定されている必要があります。例えば、「%7E」はチルダ (「~」) 文字を表します。「http」または「https」の接頭部以外、一般に URL には大/小文字の区別がありません。例外として、クエリー変数の値には大/小文字の区別があります。

HTTP 規格の詳細については、RFC2068 - Hypertext Transfer Protocol - HTTP/1.1 を参照してください。

URL は、次のように作成されます。

`prefix:path?selection criteria`

注: HTTP クエリー変数として指定されるパスと選択基準は、疑問符 (?) で区切られます。選択基準がない場合、「?」は指定しないでください。

接頭部

接頭部は、WUI サーバーの構成に依存しています。それは http か、または SSL が使用されている場合には https です。

パス

WUI サーバー・パスには、いくつかの可能な構成があります。

パスは以下のいずれかになります。

- `//hostname:port/CICSplexSM`

これにより、「Begin Signon (サインオンの開始)」ボタンのある「Welcome (ウェルカム)」パネルが表示されます。

- `//hostname:port/CICSplexSM/code page`

これにより、「Begin Signon (サインオンの開始)」ボタンのある「Welcome (ウェルカム)」パネルが表示されます。ここに指定するコード・ページは、Web ユーザー・インターフェース・サーバーの開始 JCL で INITPARM システム初期設定パラメーターに指定されたコード・ページを指定変更します。

`code page` をブランクのままにすることにより、デフォルト・コード・ページを指定できます。以下に例を示します。

`//hostname:port/CICSplexSM//`

- `//hostname:port/CICSplexSM/code page/userid`

これにより、現在の Web ブラウザー・セッションに既にサインオンしている場合には、ホーム・メニュー (DEFAULTMENU システム初期設定パラメーターに指定されたメニュー) が直接表示されます。

現在の Web ブラウザー・セッションにサインオンしていない場合、WUI でのサインオンで説明されているプロセスを経ることになります。

- `//hostname:port/CICSplexSM/code page/userid/MENU/menuname`

これにより、現在の Web ブラウザー・セッションに既にサインオンしている場合には、 *menuname* という名前のメニューが直接表示されます。

現在の Web ブラウザー・セッションにサインオンしていない場合、URL で指定されたメニューが表示される前に、WUI でのサインオンで説明されているサインオン・プロセスを経ることになります。

- `//hostname:port/CICSplexSM/code page/userid/VIEW/viewsetname`

これにより、現在の Web ブラウザー・セッションに既にサインオンしている場合には、 *viewsetname* という名前のビュー・セット内のデフォルト・ビューが直接表示されます。

現在の Web ブラウザー・セッションにサインオンしていない場合、URL で指定されたビュー・セット内のデフォルト・ビューが表示される前に、WUI でのサインオンで説明されているプロセスを経ることになります。

- `//hostname:port/CICSplexSM/code page/userid/VIEW/viewsetname.viewname`

これにより、現在の Web ブラウザー・セッションに既にサインオンしている場合には、 *viewsetname* という名前のビュー・セット内に含まれる *viewname* という名前のビューが直接表示されます。

現在の Web ブラウザー・セッションにサインオンしていない場合、URL で指定されたビューが表示される前に、WUI でのサインオンで説明されているサインオン・プロセスを経ることになります。

- `//hostname:port/CICSplexSM/code page/userid/OBJECT/objectname`

これにより、現在の Web ブラウザー・セッションに既にサインオンしている場合には、オブジェクト *objectname* のデフォルト・ビュー・セットが直接表示されます。

現在の Web ブラウザー・セッションにサインオンしていない場合、URL で指定されたオブジェクトのデフォルト・ビューが表示される前に、WUI でのサインオンで説明されているサインオン・プロセスを経ることになります。

オブジェクトに対して任意のオブジェクト名を指定することができ、デフォルト・ビュー・セットは *EYUSTARTobjectname* となります。 *objectname* は URL の値です。すべての CICSplex SM オブジェクトに開始セットのビュー・セットがあるとは限らないことに注意してください。

以下の Web ユーザー・インターフェース・サーバーのシステム・パラメーターを使用して、CICSplex SM オブジェクトのサブセットのためにデフォルト・ビュー・セットを変更できます。

WUI サーバー・システム・パラメーター	Objectname
DEFAULTCICSplex	CICSplex
DEFAULTCICSrgn	CICSrgn
DEFAULTCONNECT	CONNECT
DEFAULTCSysgrp	CSysgrp
DEFAULTDB2SS	DB2SS

WUI サーバー・システム・パラメーター	Objectname
DEFAULTEJCOBEAN	EJCOBEAN
DEFAULTEJDJBEAN	EJDJBEAN
DEFAULTEVENT	EVENT
DEFAULTLOCFILE	LOCFILE
DEFAULTLOCTRAN	LOCTRAN
DEFAULTPROGRAM	PROGRAM
DEFAULTREMFIL	REMFIL
DEFAULTREMTAN	REMTAN
DEFAULTTASK	TASK

注:

1. *hostname* および *port* は、CICS Web Interface リスナーまたはセキュア・サーバーの IP アドレスを表し、それぞれ TCPIPHOSTNAME および TCPIPPORT の Web ユーザー・インターフェース・サーバーの初期設定パラメーター上に指定されます。
2. *code page* を指定する必要があるのは、INITPARM システム初期パラメーターに指定されたコード・ページを指定変更する場合だけです。

選択基準

URL で、選択基準は HTTP 照会变数として指定されます。

各照会变数は、変数名とそれに続く '=' および値として指定されます。変数名および値は、必要な箇所で、HTTP 標準表記を使用してエスケープさせなければなりません。複数の照会变数は、アンパサンド (&) 文字によって分離する必要があります。

Web ユーザー・インターフェースは、以下のように照会变数をサポートします。

- メニューおよびビューに使用できる照会变数
- ビューだけに使用できる照会变数

メニューおよびビューに使用できる照会变数:

特定の照会变数をメニューとビューの両方に使用できます。

該当するものは、以下のとおりです。

- CONTEXT

CICSplex の名前です。

- CMASCONTEXT

CMAS の名前です。

- SCOPE

CICSplex、CICS グループ、MAS、または論理スコープ名です。

ビューだけに使用できる照会变数:

いくつかの照会变数は、ビューにのみ使用できます。

これらの追加の照会变数は、以下のとおりです。

- **A_attrname.** attrname は属性の名前です。

これは属性フィルターです。 任意の数の属性を URL に指定できます。 文字、数値、CVDA、または EYUDA 値を指定できます。属性フィルターのデフォルト演算子は、等価 (=) です。 異なる演算子を使用する場合には、その演算子の値を O_attrname 照会变数に指定できます。 演算子とそれらの値のリストについては、表 8を参照してください。
- **FILTERC.** 1 に設定されると、この要求はビューが表示されるときにフィルター確認処理を強制します。

FILTERC が存在しないか、または 1 に設定されていない場合でも、GLOBALPREFILTER Web ユーザー・インターフェースのシステム・パラメーターまたはユーザー・グループ・オプション「**Force filter confirmation (フィルターの確認を強制)**」に応じて、フィルター確認が生じることがあります。

- **P_parmname.** parmname はパラメーターの名前です。

これは CICSplex SM API GET コマンドに使用されるパラメーター・フィルターです。

- **O_attrname.** attrname は属性の名前です。

これは A_attrname 照会变数と共に指定されて、等価 (=) デフォルト・オペレーターを変更します。 O_attrname 照会变数に指定可能な演算子の値のリストは、表 8を参照してください。

注: 一般値を使用するとき、等号 (=) および不等号 (<>) 演算子だけが有効です。

表 8. O_attrname 照会变数の演算子の値

演算子の値 (簡略記号)	演算子の値 (数字)	意味
EQ	1	等しい
NE	2	等しくない
GT	3	より大きい
LT	4	より小さい
GE	5	より大か等しい
LE	6	より小か等しい

WUI オブジェクト名の指定

ビュー・セット名を指定しないでオブジェクト名を指定する場合、指定されたオブジェクトを表す、Web ユーザー・インターフェース・サーバーの初期設定操作オプション・パラメーターで指名されたビュー・セットが開きます。

指定されたオブジェクトを表すビュー・セットが指名されていない場合、デフォルト・ビュー・セットの EYUSTARTobjectname が開きます。

有効な URL フォーマットの例

以下の例は、有効な URL フォーマットを示しています。

1.

```
http://MVSXX.COMPANY.COM:04445/CICSplexSM//JSMITH/MENU/OURHOME?  
CONTEXT=FRED&SCOPE=FRED
```

これはコンテキスト FRED およびスコープ FRED を使用して、ユーザーに OURHOME という名前のホーム・メニューを直接表示する要求です。

2.

```
http://MVSXX.COMPANY.COM:04445/CICSplexSM//JSMITH/VIEW/OURLOCTRAN?  
CONTEXT=FRED&SCOPE=FRED&A_TRANID=PAY*
```

これはコンテキスト FRED およびスコープ FRED を使用して、ユーザーにビュー・セット OURLOCTRAN 内のデフォルト・ビューを直接表示し、TRANID が文字 PAY で開始するすべてのローカル・トランザクションを示すようにする要求です。

3.

```
http://MVSXX.COMPANY.COM:04445/CICSplexSM//JSMITH/VIEW/OURWLMWAOR.TABLE1?  
P_WORKLOAD=WLDPAY01
```

これはユーザーにビュー・セット OURWLMWAOR 内の TABLE1 ビューを直接表示し、DEFAULTCONTEXT Web ユーザー・インターフェース・サーバー初期設定パラメーターで指定されたデフォルト・コンテキストを使用して、ワークロード WLDPAY01 に関するアクティブなワークロード情報を示すようにする要求です。

4.

```
http://MVSXX.COMPANY.COM:04445/CICSplexSM//JSMITH/VIEW/OURLOCTRAN?  
A_TRANID=P*&O_TRANID=NE
```

これはユーザーにビュー・セット OURLOCTRAN 内のデフォルト・ビューを直接表示し、TRANID が文字 P で開始しないすべてのローカル・トランザクションを示すようにする要求です。

5.

```
http://MVSXX.COMPANY.COM:04445/CICSplexSM//JSMITH/VIEW/OURTASK?  
A_PRIORITY=200&O_PRIORITY=GT
```

これはユーザーにビュー・セット OURTASK 内のデフォルト・ビューを直接表示し、PRIORITY が 200 よりも大きいすべてのタスクを示すようにする要求です。

6.

```
http://MVSXX.COMPANY.COM:44455/CICSplexSM//TOXTETH/VIEW/EYUSTARTPROGRAM.TABULAR  
?FILTERC=1
```

これはユーザーに EYUSTARTPROGRAM TABULAR ビューのフィルター確認画面を表示する要求です。

CMAS および MAS トレース・フラグの設定

WUI を使用して、CMAS および MAS トレース・フラグを設定できます。

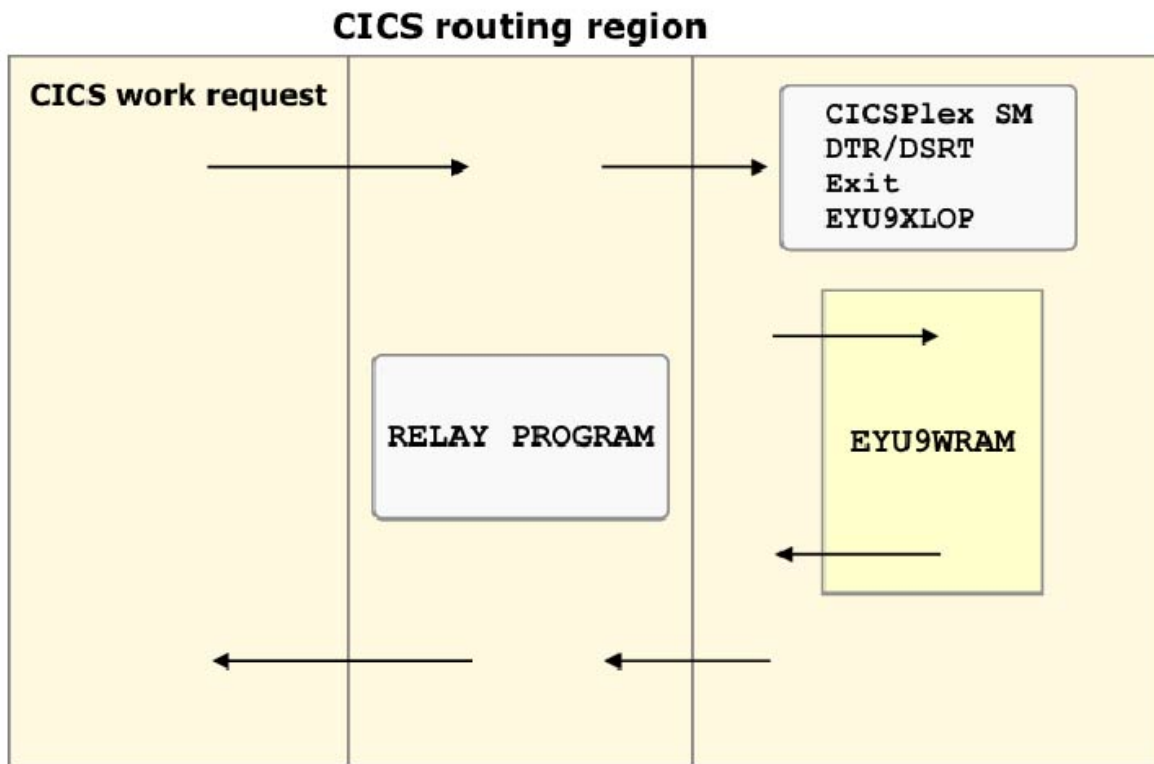
「CMAS detail (CMAS の詳細)」(EYUSTARTCMAS.TRACE) ビューを使用して CMAS トレース・フラグを設定し、「MASs known to CICSplex (CICSplex 認知の MAS)」(EYUSTARTMAS.TRACE) ビューを使用して MAS トレース・フラグを設定します。

Configuring dynamic routing

CICS にトランザクションをローカルまたはリモートとして定義できます。ローカル・トランザクションは常に要求領域で実行されます。一方、リモート・トランザクションはルーティング領域に接続されたいずれかの CICS システムに経路指定される可能性があります。リモート・トランザクションのルーティングは、動的、静的、または ATI 制御のいずれかにすることができます。

CICSplex SM を使用した動的ルーティング

リモート・トランザクションが開始されると、CICS 中継プログラムが呼び出されます。CICS 中継プログラムは、動的ルーティングプログラム EYU9XLOP にリンクします。EYU9XLOP は CICSplex SM ベースの動的ルーティングに必要な環境を作成し、CICSplex SM ランタイム環境をセットアップします。



ルーティング領域の場合、システム初期設定テーブル (SIT) パラメーターで EYU9XLOP を指定します。

DTRPGM

静的ルーティング、ATI、および動的ルーティングでは、トランザクションを開

始する要求側領域に関連付けられている DTRPGM システム初期設定パラメーターに EXU9XLOP を設定します。ルーティング領域としても機能するすべてのターゲット領域にも、SIT で DTRPGM を指定する必要があるため、ワークロード仕様への、CICS システムまたはシステム・グループの関連付けで説明されているように、ルーティング領域としてセットアップされている必要があります。

DSRTPGM

非端末関連の **EXEC CICS START** コマンド、BTS アクティビティ、またはエンタープライズ Bean の場合は、以下の場所で DSRTPGM システム初期設定パラメーターに EYU9XLOP を設定します。

- 要求を開始する要求側領域。
- (DFHDYPDS コピーブックによってマップされる) ルーティング・プログラムの連絡域またはコンテナの DYROPTER フィールドを Y に設定する予定がある場合は、ターゲット領域になる可能性のあるすべての領域。

CICSplex SM を使用して非端末関連 **EXEC CICS START** コマンドをルーティングする場合、DYROPTER フィールドは常に Y に設定されます。したがって、*DSRTPGM=EYU9XLOP* を常に指定して、ターゲット領域がワークロードの一部になるようにする必要があります。ターゲット領域をワークロードに対して定義しなかった場合は、ワークロードを待っている開始済みトランザクションが使用可能になり、トランザクションはハングします。

注: ターゲット領域をルーティング領域としてセットアップしない場合は、DTRPGM および DSTRPGM の SIT パラメーターで EYU9XLOP を指定しないでください。このパラメーターを指定すると、決して到着しないワークロードを待つ EYU9XLOP で、ルーティングされたトランザクションのエンドレス・ループが発生します。

CICS は、すべてのルーティング要求を EYU9XLOP に通知します。これらの要求は、以下のとおりです。

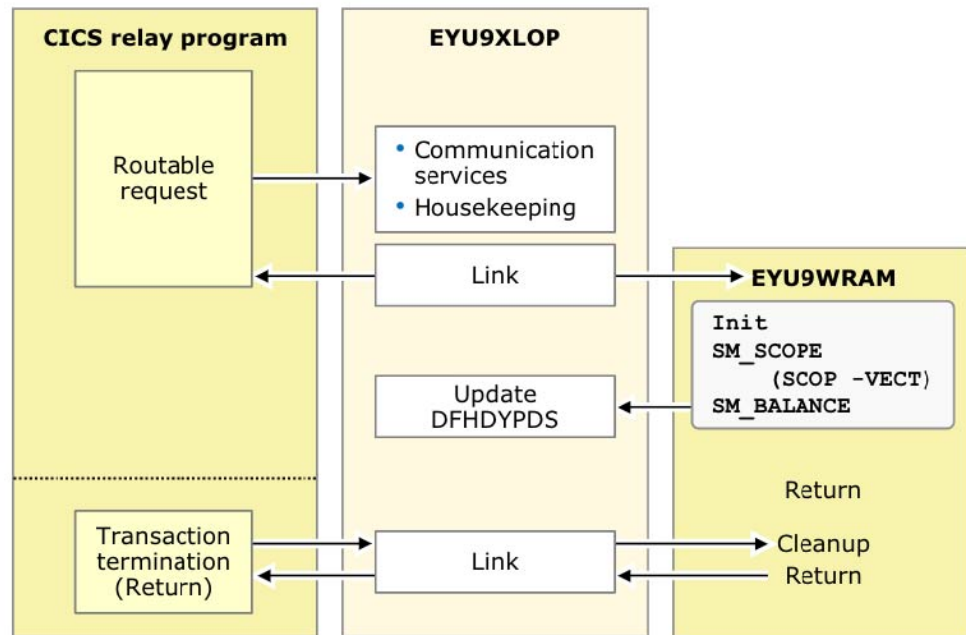
- ルート選択、ルート選択エラー、およびトランザクション終了。
- BTS (サポートされるすべてのリリースの CICS) では、トランザクション開始、トランザクション異常終了、およびルーティング試行完了。
- 非端末 **EXEC CICS START** 要求 (サポートされるすべてのリリースの CICS) では、トランザクション開始、トランザクション異常終了、およびルーティング試行完了。

CICS は、EYU9XLOP にリンクすると、CICS 連絡域 DFHDYPDS を EYU9XLOP に渡します。

その後、制御は CICSplex SM ワークロード管理機能に渡ります。CICSplex SM はワークロード管理 MAS エージェント・コードを初期設定して、そのルーティング・アクション・プロセスを稼働させます。このプロセスは、以下のいずれかの条件が真である場合は、内部で呼び出されます。

- EYU9WRAM ユーザー置換可能モジュールが CICS に対して定義されていない
- EYU9WRAM が、CICS に対して定義されているが使用可能でない

- EYU9WRAM が CICS に対して定義済みで、使用可能であり、ロード・モジュールが CICSplex SM で配布されたとおりのモジュールのアセンブリ言語バージョンである



内部ルーティング・アクション・プロセスは、CICSplex SMで配布されたとおりの EYU9WRAM のアセンブリ言語バージョンを実行したのと同じ結果を生成します。エンタープライズで追加の動的ルーティング制御が必要でない場合は、この内部プロセスの方が、より高いパフォーマンスを提供します。

EYU9WRAM モジュールまたはそれと同等の内部プロセスは、CICSplex SM ベースの連絡域 EYURWCOM を受け取ります。インストール時に、CICS システムごとに、EYU9WRAM のエントリーが CICS システム定義ファイル DFHCSD に追加されます。CICSplex SM で配布される EYU9WRAM は、CICSplex SM ワークロード管理処理を駆動します。EYU9WRAM は、これを行うために、最初にトランザクション・グループと、端末 ID、LU 名、ユーザー ID、またはプロセス・タイプに基づいて、該当するターゲット領域候補のリストを取得します。次に、EYU9WRAM は候補のリストからターゲット領域を選択します。

ほとんどの場合、提供される EYU9WRAM モジュールにはワークロード管理機能が用意されています。ただし、必要な場合には、EYU9WRAM を変更して CICSplex SM ワークロード管理の処理をカスタマイズすることもできます。詳細については、EYU9WRAM のユーザー置換モジュールの作成を参照してください。

動的ルーティングのための CICS リリース要件

ここでは、動的ルーティングに關与する領域の CICS リリース要件を示します。

表 9. 動的ルーティングに關与する領域のリリース要件

リリース要件の適用対象	ルーティング領域	ターゲット領域	要求領域
動的トランザクション・ルーティング	サポートされている任意の CICS リリース	サポートされている任意の CICS リリース	-
EXEC CICS START コマンド	サポートされている任意の CICS リリース	サポートされている任意の CICS リリース	サポートされている任意の CICS リリース
CICS ビジネス・トランザクション・サービス (BTS)	サポートされている任意の CICS リリース	サポートされている任意の CICS リリース	サポートされている任意の CICS リリース
分散プログラム・リンク (DPL)	サポートされている任意の CICS リリース	サポートされている任意の CICS リリース	-
エンタープライズ Bean	CICS Transaction Server for z/OS、バージョン 4 リリース 2 以前	CICS Transaction Server for z/OS、バージョン 4 リリース 2 以前	-
Link3270 ブリッジ	サポートされている任意の CICS リリース	サポートされている任意の CICS リリース	-

サンプルのソース・プログラムとコピーブック

インストールの直後に、モジュール EYU9WRAM が CICSplex SM にロードされます。

これはアセンブラー言語のコマンド・レベル・プログラムです。対応するコピーブックは、以下のとおりです。

EYURWCOM

連絡域を定義します。

EYURWCOD

EYURWCOM のリテラルを定義します。

EYURWSVE

ターゲット領域スコープ・リストの各エレメントを定義します。

EYURWSVD

EYURWSVE のリテラルを定義します。

カスタマイズ作業を支援するために、アセンブラー、C、COBOL、および PL/I のサンプルのソース・プログラムとコピーブックが CICSplex SM と共に配布されます。コピーブックは、言語固有のライブラリーに入っています。すべてのサンプル・プログラムは、SEYUSAMP ライブラリーに入っています。サンプル・プログラムとコピーブック、およびそれらを見つけることができる CICSplex SM ライブラリーの名前は、170 ページの表 10 にリストされています。

表 10. 表 1. サンプル・プログラムとコピーブック

言語	メンバー名	別名	ライブラリー
アセンブラー:			
プログラム	EYUAWRAM	EYU9WRAM	SEYUSAMP
コピーブック 1	EYUAWCOM	EYURWCOM	SEYUMAC
コピーブック 2	EYUAWCOD	EYURWCOD	SEYUMAC
コピーブック 3	EYUAWSVE	EYURWSVE	SEYUMAC
コピーブック 4	EYUAWSVD	EYURWSVD	SEYUMAC
COBOL:			
プログラム	EYULWRAM	EYU9WRAM	SEYUSAMP
コピーブック 1	EYULWCOM	EYURWCOM	SEYUCOB
コピーブック 2	EYULWCOD	EYURWCOD	SEYUCOB
コピーブック 3	EYULWSVE	EYURWSVE	SEYUCOB
コピーブック 4	EYULWSVD	EYURWSVD	SEYUCOB
PL/I:			
プログラム	EYUPWRAM	EYU9WRAM	SEYUSAMP
コピーブック 1	EYUPWCOM	EYURWCOM	SEYUPL1
コピーブック 2	EYUPWCOD	EYURWCOD	SEYUPL1
コピーブック 3	EYUPWSVE	EYURWSVE	SEYUPL1
コピーブック 4	EYUPWSVD	EYURWSVD	SEYUPL1
C:			
プログラム	EYUCWRAM	EYU9WRAM	SEYUSAMP
コピーブック 1	EYUCWCOM	EYURWCOM	SEYUC370
コピーブック 2	EYUCWCOD	EYURWCOD	SEYUC370
コピーブック 3	EYUCWSVE	EYURWSVE	SEYUC370
コピーブック 4	EYUCWSVD	EYURWSVD	SEYUC370

最適化動的ワークロード・ルーティングの実施

CICSplex SM は、CICS に動的ワークロード管理を提供します。CICSplex SM は、領域状況 (RS) サーバーを使用して CICS から直接ポストされる現在の状況に関する情報を使用して、ワークロード管理の決定を拡張することができます。

始める前に

完全なワークロード最適化は、シスプレックスの最適化ワークロード・ルーティングを使用して行うことができます。ただし、この機能では、すべてのワークロード領域を CICS TS for z/OSバージョン 4.1 以降にマイグレーションする必要があります。

シスプレックスの最適化ワークロード・ルーティングは、すべてのワークロード領域が CICS TS 4.1 以降で実行され、領域状況 (RS) サーバーが CICSplex 内のワークロードの各領域と同じ z/OS イメージ内で始動されると、自動的に実行されます。

ワークロード内の CICS TS for z/OSバージョン 4.1 以降の領域と、CICS TS 4.1 より前のレベルの領域を混用できます。ただし、ワークロードは非最適化状態で実行されます。

シスプレックスの最適化ワークロード・ルーティングについて詳しくは、シスプレックスの最適化ワークロード・ルーティング概要を参照してください。

このタスクについて

シスプレックス内のワークロード・ルーティングを最適化するには、カップリング・ファシリティ・データ・テーブルの一環として、領域状況 (RS) サーバーを構成し、モニターする必要があります。説明は、領域状況サーバーのセットアップと稼働および Security for coupling facility data tablesを参照してください。

手順

CICSplex 定義で、領域状況 (RS) サーバーのカップリング・ファシリティ (CF) チューニング・パラメーターを設定できます。これにより、シスプレックスの最適化ワークロード・ルーティングが提供されます。EYUSTARTCPLEXDEF ビュー・セットを使用して、CICSplex を定義する操作や変更する操作を実行できます。カップリング・ファシリティ (CF) チューニング・パラメーターは、CPLEXDEF 詳細ビューにあります。

注: CICSplex 内のすべての領域が使用するデフォルトの領域状況 (RS) プール名を変更することもできます。デフォルト名の DFHRSTAT を使用しないときは、CICSplex 内で他の領域を開始する前に、名前を変更する必要があります。CICSplex SM は、CICSplex がアクティブである間のプール名の変更を禁止しません。CICSplex がアクティブである間に変更した場合は、CICSplex 内のすべての CMAS 領域と MAS 領域をできるだけ早く再始動する必要があります。そうしないと、CICSplex SM WLM ビュー内のデータに矛盾が生じて、CICSplex 内のすべての領域を再始動するまで WLM 最適化が非活動化される場合があります。

ワークロード・ルーティングのための構成

以下の構成を設定することができます。

- ・ シスプレックスの最適化ワークロード・ルーティングのためにリフレッシュを要求する前に、領域状況データがルーティング領域によってキャッシュに入れられる長さ。領域状況サーバー、読み取り間隔パラメーター (READRS)を参照してください。
- ・ シスプレックスの最適化ワークロード・ルーティングのために、カップリング・ファシリティをタスク・スループット・データで更新する頻度。領域状況サーバー、更新頻度パラメーター (UPDATERS)を参照してください。
- ・ 低スループット期間中にカップリング・ファシリティ (CF) に対してワークロード分散更新をトリガーするタスク・ロード範囲。領域状況サーバー、最下位層パラメーター (BOTRSUPD)を参照してください。
- ・ 高スループットの期間中に領域が MAXTASK (MXT) 設定に近づいたときに、ワークロードを制御するタスク・ロード最上位層。領域状況サーバー、最上位層パラメーター (TOPRSUPD)を参照してください。

最適化の状況の表示

- ・ ワークロードの場合、CICSplex SM Web ユーザー・インターフェース (WUI) の「アクティブ・ワークロード」リスト・ビューを表示します。
- ・ CICS 領域の場合、「アクティブ・ワークロード」メニューにある「ルーティング領域」または「ターゲット領域」ビューを表示します。

詳しくは、175 ページの『最適化の状況』を参照してください。

領域状況サーバー、読み取り間隔パラメーター (**READRS**):

CPLEXDEF、CSYSDEF、および MAS ビューで領域状況サーバー読み取り間隔パラメーターを使用して、ルーティング領域がどれほどの期間に渡り領域状況データをキャッシュに入れてから、シスプレックスの最適化ワークロード・ルーティングのためのリフレッシュを要求するかを制御します。

READRS={200|number}

最適化モードで実行されているワークロードの場合、**READRS** 値は、CICS 領域状況 (RS) サーバーからのターゲット領域状況のリフレッシュと次のリフレッシュの間の最小間隔をミリ秒で指定します。こうしたリフレッシュ要求は、動的ルーティング要求に関してターゲット領域を評価しているルーティング領域によって発行されます。

注: **READRS** 値を変更する場合は、変更がワークロードおよびカップリング・ファシリティーのスループットに与える影響を考慮した上で行ってください。

この値の範囲は 0 から 2000 です。

- 値 0 は、ターゲット領域の状況を調べるたびに、ターゲット領域の状況更新をルーティング領域が要求することを意味します。
- 値 1 から 2000 の場合、ターゲット領域の状況をリフレッシュできるようになる前に経過する必要がある最小時間間隔を示します。

間隔値が小さければ、状況更新のために RS サーバーがポーリングされる回数がそれだけ多くなります。QUEUE モードのワークロードの場合、この値が小さいと、ワークロード・ターゲットの有効範囲内にある複数の CICS 領域にタスク・ロードが平滑化されて広がることになります。この場合、他の正常性やリンクに関する要因はすべて等しいと想定されます。ただし、RS サーバーの使用率はそれ相応に増えるので、z/OS カップリング・ファシリティーの使用率が高くなる可能性があります。

READRS パラメーターのデフォルト値は、200 ミリ秒です。

EYUSTARTCPLEXDEF ビュー・セットで指定する値により、CICSplex レベルの読み取り間隔が設定されます。ただし、この間隔を CICS 定義レベルでオーバーライドすると、個別の CICS ターゲット領域ごとに値を適切に調整できます。

CICSplex 定義 (CPLEXDEF) レベルで UPDATERS パラメーターと **READRS** パラメーターの両方を指定して、CICSplex 内のすべての領域のデフォルト値を設定します。こうした値は、CICS システム定義 (CSYSDEF) レベルまたは MAS エージェント・ランタイム (MAS) レベルでオーバーライドできます。

CICS 定義レベルの場合、**UPDATERS** と **READRS** の値は INHERIT なので、CICS システム定義からこれらの値は継承されます。こうした値を数値に明示的に変更すると、CICS システムはこれ以降再始動するたびに、指定された値を採用します。実行中の CICS 領域に変更をインプリメントするには、MAS 基本テーブルまたはビュー・セットを使用してこれらの値を適用する必要があります。ターゲット領域を再始動すると、CSYSDEF の指定を再び採用します。

領域状況サーバー、更新頻度パラメーター (**UPDATERS**):

CPLEXDEF、CSYSDEF、および MAS ビューで領域状況サーバー更新頻度パラメーターを使用して、シスプレックスの最適化ワークロード・ルーティングのためにタスク・スループット・データでカップリング・ファシリティをどれほどの頻度で更新するかを制御します。

UPDATERS={15 | number}

最適化モードで実行されているワークロードの場合、**UPDATERS** 値は、ターゲット CICS 領域内のタスク・ロードの値を変更するために CICS 領域状況 (RS) サーバーが呼び出される頻度を示します。この値は、現在の CICSplex 定義におけるすべてのターゲット CICS 領域のデフォルト頻度値になります。

注: **UPDATERS** 値を変更する場合は、変更がワークロードおよびカップリング・ファシリティのスループットに与える影響を考慮した上で行ってください。

この値の範囲は 0 から 25 です。

- 値 0 は、タスク・ロード・カウントの変更が RS サーバーには全く通知されないことを意味します。この CICSplex 内のターゲット領域の最適化ワークロード機能が使用不可であるためです。

注: 値 0 は、ワークロード・ルーティング機能の最適化を抑止するわけではありません。値 0 によって抑止されるのは、ターゲット領域における RS ドメインのブロードキャスト・プロセスのみです。

- 1 から 25 までの値は、ターゲットの MAXTASKS 設定に対する算術パーセンテージとして適用されます。その結果のタスク・カウント値は、RS サーバーに対して更新呼び出しを駆動する数値しきい値として使用されます。

値 0 を指定すると、ターゲット領域の最適化ルーティング機能は事実上使用不可になります。最適化ルーティングを実行する場合、ルーターとターゲットの両方が最適化モードでなければなりません。

例えば、MAXTASKS 設定が 120 で、UPDATERS を 20 に設定する場合、ターゲット領域のタスク・カウントが以下のタスク数の間で変化すると、WLM ロード・カウントを更新するために RS サーバーが呼び出されます。

- 23、24 タスク (120 の 20%)
- 47、48 タスク (120 の 40%)
- 71、72 タスク (120 の 60%)
- 95、96 タスク (120 の 80%)
- 119、120 タスク (120 の 100%)

こうした境界をまたいでターゲット領域のタスク・ロードが増加または減少すると、RS サーバーが更新されます。

UPDATERS パラメーターを小さな値に設定すると、タスク・ロード範囲内で、RS サーバーに対する更新頻度が増加します。QUEUE モードのワークロードの場合、この値が小さいと、ワークロードの有効範囲内にある複数のターゲット CICS 領域にタスク・ロードが平滑化されて広がることになります。この場合、他の正常性やリ

ンクに関する要因はすべて等しいと想定されます。ただし、RS サーバーの使用率はそれ相応に増えるので、z/OS カップリング・ファシリティの使用率が高くなる可能性があります。

UPDATERS パラメーターのデフォルト値は 15 です。

EYUSTARTCPLEXDEF ビュー・セットで指定する値により、CICSplex レベルの更新間隔が設定されます。ただし、この間隔を CICS 定義レベルでオーバーライドすると、個別の CICS ターゲット領域ごとに値を適切に調整できます。

CICSplex 定義 (CPLEXDEF) レベルで **UPDATERS** パラメーターと **READRS** パラメーターの両方を指定して、CICSplex 内のすべてのターゲット領域のデフォルト値を設定します。こうした値は、CICS システム定義 (CSYSDEF) レベルまたは MAS エージェント・ランタイム (MAS) レベルでオーバーライドできます。

CICS 定義レベルの場合、**UPDATERS** と **READRS** の値は INHERIT なので、CICS システム定義からこれらの値は継承されます。こうした値を数値に明示的に変更すると、CICS システムはこれ以降再始動するたびに、指定された値を採用します。実行中の CICS 領域に変更をインプリメントするには、MAS 基本テーブルまたはビュー・セットを使用してこれらの値を適用する必要があります。ターゲット領域を再始動すると、CSYSDEF の指定を使用します。

領域状況サーバー、最下位層パラメーター (**BOTRSUPD**):

CPLEXDEF、CSYSDEF、および MAS のビューで領域状況サーバー最下位層チューニング・パラメーターを使用して、低スループット期間中のカップリング・ファシリティ (CF) に対するワークロード分散更新を制御します。

BOTRSUPD={1|number}

シスプレックスの最適化されたワークロードの場合、**BOTRSUPD** 値はタスク・ロード比率から実際のタスク・カウントに変換されます。そのカウントは、最下位層タスク・ロードをゼロからこの値までの範囲で定義するために使用されます。

注: **BOTRSUPD** 値を変更する場合は、変更がワークロードおよびカップリング・ファシリティのスループットに与える影響を考慮した上で行ってください。

値の範囲は 1 から 25 までとなります。領域のタスク・ロードがこの範囲内に入る場合は、タスク・ロードの変更ごとに、タスク・ロードがカップリング・ファシリティ (CF) にブロードキャストされます。ロードがこの値に達すると、RS サーバー更新頻度のタスク規則が活動化されます。

BOTRSUPD パラメーターのデフォルト値は、1% です。

この値を変更する場合は、変更がワークロードおよびカップリング・ファシリティのスループットに与える影響を考慮した上で行ってください。**BOTRSUPD** パラメーターは、低スループットの期間中にワークロードをより円滑に分散できるようにします。CICSplex が多数のターゲット領域から構成されている場合、この値を大きくしすぎると、更新要求で CF が過負荷になるリスクを冒すことになり、その結果、WLM および一般的な z/OS サブシステムのパフォーマンスが低下することがあります。

BOTRSUPD 値を変更する必要がある場合は、必ず、カップリング・ファシリティ機能と WLM スループット機能のパフォーマンスを少なくとも変更後数日間はモニターしてください。

領域状況サーバー、最上位層パラメーター (**TOPRSUPD**):

CPLEXDEF、CSYSDEF、および MAS のビューで、領域状況サーバー最上位層チューニング・パラメーターを使用します。このパラメーターは、ターゲット領域のワークロード管理 (WLM) 最大タスク・ヘルス・インディケーターがオフに切り替えられている場合、高スループットの期間中に、その領域が **MAXTASK** (MXT) 設定に近づいたときに、カップリング・ファシリティ (CF) に対する更新を制限するためにワークロードを制御します。

TOPRSUPD={5|number}

シスプレックスの最適化されたワークロードの場合、**TOPRSUPD** 値はタスク・ロード比率から実際のタスク・カウントに変換されます。そのカウントは、領域の **MAXTASKS** 値から減算されて、最上位層のタスク・ロード範囲を決定します。

注: **TOPRSUPD** 値を変更する場合は、変更がワークロードおよびカップリング・ファシリティのスループットに与える影響を考慮した上で行ってください。

値の範囲は 1 から 25 までです。この値は、演算比率として領域の **MAXTASKS** 設定に適用されます。その後、タスク・カウント値は領域の **MAXTASKS** 設定から減算され、タスク・ロード最上位層が確立されます。領域内のタスク・ロードがその **MAXTASKS** 限度まで上がった場合、領域の **MAXTASKS** 状態がオフに切り替えられてカップリング・ファシリティにブロードキャストされる前に、タスク・ロードがこの値を下回る必要があります。

TOPRSUPD パラメーターのデフォルト値は 5% です。

TOPRSUPD 値を変更する場合は、変更がワークロードおよびカップリング・ファシリティのスループットに与える影響を考慮した上で行ってください。この値を大きくしすぎると、ワークロードの上位ロード範囲でワークロードのバッチ処理の影響が見られます。この値を小さくしすぎると、最上位層のバッチ処理の影響は減少しますが、カップリング・ファシリティに対する更新が大幅に増える可能性があります。

TOPRSUPD 値を変更する必要がある場合は、必ず、カップリング・ファシリティおよび WLM スループット機能のパフォーマンスを少なくとも変更後数日間はモニターしてください。

最適化の状況:

CICSplex SM Web ユーザー・インターフェース (WUI) のアクティブ・ワークロード・リスト・ビューを使用して、ワークロードの状況を表示できます。

ワークロードの最適化状況

CICSplex SM Web ユーザー・インターフェース (WUI) のアクティブ・ワークロード・リスト・ビューを使用して、CICSplex 内でアクティブな各ワークロードの状況を表示できます。

最適化状況属性は、現在のワークロードのシスプレックス最適化状況を報告します。この値は、すべてのワークロード・ルーター最適化状況と、すべてのワークロード・ターゲット最適化状況を組み合わせたものです。

以下の値があります。

- **ACTIVE:** ワークロードのすべてのターゲットとルーターは最適化されたワークロード状態で実行されています。
- **PARTIAL:** 少なくとも 1 つのターゲットと 1 つルーターが最適化されたワークロード・モードで実行されています。最適化された状態で実行されていない領域を判別するには、アクティブなルーティング領域とアクティブなターゲット領域のハイパーリンクを使用します。
- **INACTIVE:** ワークロードは、以下の 1 つ以上の理由で最適化された状態で実行されていません。
 - 最適化された状態で実行されているルーティング領域がワークロードにない。
 - 最適化された状態で実行されているターゲット領域がワークロードにない。
 - 最適化された状態で実行されている領域がワークロードにない。
 - このワークロードについて、CICSplex 定義またはすべてのターゲット CICS システム定義で RS サーバーの更新頻度として 0 の値が指定され、ワークロードが非最適化として指定された。

CICS 領域の最適化状況

「アクティブ・ワークロード」メニューにある「ルーティング領域」ビューまたは「ターゲット領域」ビューを使用して、領域の最適化の状況を表示できます。

最適化状況属性は、最適化されたワークロード・ルーティング機能の現在のターゲット領域の状況を報告します。

以下の値があります。

- **ACTIVE:** このターゲット領域は、最適化されたワークロード状態で実行されています。
- **INACTIVE:** この領域は、最適化されたワークロード状態で実行できます。しかし、以下の 1 つ以上の理由で現在は最適化されていません。
 - 領域に RS サーバーへの接続がない。
 - 領域は RS サーバーに接続されている。しかし、サーバーが z/OS カップリング・ファシリティに接続できない。
 - 領域に対する最適化の使用可能化の設定が無効 に設定されている。最適化ルーティング機能を活動化するには、前もって領域の使用可能化設定を有効 に設定しておく必要があります。

注: 「CICS システム定義」ビューで最適化の使用可能化設定をリセットし、次回の領域の開始に備えて値を変更することができます。使用可能化設定は、MAS ビューを使用してアクティブ領域で変更することもできますが、領域が再始動されると、CICS システム定義内の設定に戻されます。

- この領域の RS サーバーの更新頻度値が 0 である。これは、この領域の最適化機能が、ルーティング・ターゲットとして機能している場合は使用可能でないことを意味します。

注: *UPDATERS* 値を 0 に設定できるのは、動的ルーターとして使用されている領域の場合だけです。この値を 0 に設定すると、領域は、領域状況 (RS) サーバーへの不要な領域状況ブロードキャストをしなくなります。

- *N_A*: ターゲット領域は、領域状況の記録をサポートしている CICS リリース上にありません。最適化されていない WLM ルーティング決定しか行えません。

非最適化ワークロード・ルーティング:

CICS TS for z/OSバージョン 4.1 より前のリリースでは、非最適化ワークロード管理の場合、およびカップリング・ファシリティーが使用できない場合には、ワークロード・ルーティングは CICSplex SM ワークロード・マネージャーによって管理されます。このワークロード・マネージャーは CMAS が所有するデータ・スペースを使用して、領域間のロードと状況データを共用します。

各 CMAS は、その直接の管理対象であるすべてのユーザー CICS 領域 (MAS) と共用している、単一の WLM データ・スペースを管理します。CMAS は初期化時に、管理対象である CICS 領域に関連付けられているすべてのワークロードに必要な構造を使用して、データ・スペースの検証とフォーマット設定を行います。ユーザー CICS 領域が動的トラフィックのルーティングを開始すると、それらの CICS 領域の状態が、このデータ・スペースに記録されます。ユーザー CICS 領域内の CICSplex SM エージェントは、15 秒ごとに、その時点でのタスク・カウントを判別して、その領域の所有 CMAS に報告します。CMAS は、WLM データ・スペースのターゲット領域記述子内のロード・カウントを更新し、その値を、そのユーザー CICS 領域に関連付けられているワークロードに参加している他の CMAS にブロードキャストします。

すべてのユーザー CICS 領域が同じ CMAS によって管理されている環境では、すべてのルーティング領域とターゲット領域は WLM データ・スペース内の同じ物理構造を参照します。動的ルーティングの決定は、ルーティング・ターゲット領域候補の最新のロード・データに基づいています。ルーティングの決定は、要因の組み合わせに基づいています。詳しくは、CICSplex SM WLM での作業のルーティング先の選択方法を参照してください。

ワークロードは複数の z/OS イメージ間に分散されるため、異種の LPAR 上のユーザー CICS 領域を管理するために、追加の CMAS が構成されます。各 WLM データ・スペースは、各 CMAS が責任を負う CICS 領域だけでなく、ワークロード内のあらゆる CICS 領域を記述するために、完全な構造セットを保守する必要があります。各 CMAS が所有する WLM データ・スペースは、ワークロードに参加している他の CMAS が所有する WLM データ・スペースと定期的に同期を取る必要があります。この同期化は、MAS からその CMAS へ 15 秒ごとに発生し、その後、ワークロード内の他のすべての CMAS に波及します。

CICSplex SM の動作は、DTRPGM 要求と DSRTPGM 要求で以下のように異なります。

- DTRPGM 要求の場合、ルーティング領域は CICS から呼び出しを行い、各ターゲット領域が選択されたターゲットでの要求の実行と同期しているかどうかを判

断します。その後、動的要求の完了時に CICS からのコールバックが行われます。この呼び出しにより、ルーターは CICS にターゲット領域システム ID を通知する前にタスク・ロード・カウンタを増加することができ、要求の完了時にカウンタを減少させることもできます。

- DSRTPGM 要求の場合、ルーティング領域は CICS から呼び出しを行い、各ターゲットが選択されたターゲットと同期していないかどうかを判断します。一般に、これらの動的要求は、非同期の CICS の始動です。ルーターには、ルーティングされたトランザクションがいつ開始され、終了したかの通知がありません。通知がないために、CICSplex SM は DSRTPGM ターゲット領域がそれに関連付けられているワークロードも持つ必要があることを要求し、ターゲットは論理ルーティング領域に変換されます。この呼び出しを使用して、CICSplex SM ルーティング・プロセスは、DSRTPGM ターゲットで呼び出されていることを判別でき、したがって、トランザクションの開始時と終了時にタスク・ロード・カウンタを調整することができます。

CICSplex SM ルーティング領域は CICSplex 内の動的トランザクション・スループットをカウントするため、ターゲット領域上でローカルに開始されたトランザクションは、ハートビートが発生するまでルーティング領域によって説明できないままになるという追加の問題が発生します。ルーター・トランザクション・カウンタは、2 回のハートビートが (最初はカウンタを増加させるために、2 回目はカウンタを再び減少させるために) 発生するまで、正しく同期化されません。しかし、この不一致はルーターとターゲットが異なる CMAS によって管理されている場合ほど重大であるとは見なされません。

複数の CMAS の場合、ルーター領域はターゲット領域の状況データを、ローカル WLM データ・スペース内に記述されているとおりに評価します。そのターゲット領域が、ルーターの所有するものと異なる CMAS によって管理されている場合、そのターゲット領域を記述している状況データは、最大 15 秒古いことがあります。DTRPGM 要求の場合、この遅延による重大な影響はありません。しかし、DSRTPGM 要求では、特にワークロード・スループットが増加する場合、大きな影響が生じる可能性があります。この作用は、ワークロードのバッチ処理と呼ばれます。

詳細については、『ワークロードのバッチ処理』を参照してください。

ワークロードのバッチ処理:

ワークロードのバッチ処理は、動的分散 (DSRTPGM) ルーティング要求が処理されている複数 CMAS 環境の、使用頻度が高いワークロードで発生します。

ターゲット領域とそのルーティング領域を、異なる CMAS によって管理することができます。これは、ルーターがターゲットと異なる LPAR で実行されているときは、常に当てはまります。このシナリオでは、ルーターはターゲット自体が採用している実の記述子構造と異なる記述子構造を使用して、ターゲットの状況を評価します。

ルーターによって検討されるターゲット記述子は、CICSplex SM ハートビートにより、15 秒のインターバルで実の記述子と同期化されます。ルーターから見たターゲット領域のタスク・カウンタは、それと同時にリフレッシュされます。15 秒のハートビート・インターバル中に、ルーターはワークロード内の他の潜在的ターゲット

領域と比較して、ターゲットが比較的にビジー状態である（または比較的に静止状態である）と見なします。したがって、その 15 秒の期間中、ルーターはターゲットがどれだけビジーに見えるかに応じて、作業をそのターゲットに向けたり、そのターゲットから方向転換したりする作業を続行します。ターゲット内の現行タスク・カウントの変更を次のハートビートまで見られないためです。このルーティングは、前の状況に基づいており、ターゲットを非常にビジーにしたり未使用にしたりする可能性があります。ルーターは、この状況に反応するために、ターゲットに向けての、またはターゲットから方向転換するルーティングをより活発に行うので、バッチ処理サイクルが続行します。この状態はワークロード・スループット内のアクティビティーが減少するまで続き、減少するとバッチ処理サイクルは再びスループット・アクティビティーが増加するまで沈静化します。

CICSPlex 全体のタスク・ロードをモニターしていると、一部の領域がその MAXTASKS 限度で稼働していて、動的にルーティングされたトラフィックを継続的に与えられている一方、他の領域が未使用のままになっているのが見られます。15 秒後に取られたスナップショットでは、使用状況の逆転が示されている場合もあります。ビジー領域がアイドル状態になっていたり、アイドル領域が現在では MAXTASKS 限度に達していたりします。

領域状況サーバーを始動してワークロードを最適化すると、ワークロードのバッチ処理による影響が除去されます。

動的ルーティングの変更

モジュール EYU9WRAM を変更することにより、CICSPlex SM ワークロード管理処理をカスタマイズできます。

EYU9WRAM は、CICSPlex SM 動的ルーティング・アプリケーション・プログラミング・インターフェース (API) を使用します。この API は、ワークロード管理アクションを要求するために必要なメカニズムを提供する、特殊目的のコール・レベル・インターフェースです。すべての呼び出しが、標準 CALL ステートメントを使用して構成されます。CALL ステートメントは、EYU9WRAM モジュールと CICSPlex SM ワークロード・マネージャー・コンポーネントの間のリンケージを生成します。CALL ステートメントの形式は次のとおりです。

```
CALL WAPIENPT(DA_TOKEN,function)
```

ここで、

DA_TOKEN

EYURWCOM 連絡域を経由して介して提供される動的ルーティング API トークンを指定します。このトークンは EYU9WAPI によって使用されるので、変更してはいけません。

function

実行する機能です。以下のように指定します。

SM_SCOPE

適格ターゲット領域のリストを返します。

SM_BALANCE

適格ターゲット領域のリストからターゲット領域を選択します。

SM_ROUTE

特定のターゲット領域にトランザクションをルーティングします。

SM_CREAFF

親和性を作成します。

SM_DELAFF

アクティブな親和性を削除します。

SM_SCOPE と SM_BALANCE を続けて使用すると、ターゲット領域のリストを取得してから、トランザクションのルーティング先のターゲット領域を選択できます。

常に特定ターゲット領域にトランザクションが送信されることが分かっている場合は、SM_ROUTE を使用するだけで済みます。

配布されている EYU9WRAM は、SM_SCOPE 呼び出しと SM_BALANCE 呼び出しを発行します。SM_ROUTE 呼び出しは含まれません。実行されない SM_CREAFF 呼び出しと SM_DELAFF 呼び出しが含まれます。必要に応じて、これらの呼び出しを発行するようにプログラムを変更することができます。

すべての例でアセンブラ言語形式の動的ルーティング API verb が使用されていますが、これらの verb は C、COBOL、および PL/I で作成されたプログラムでも使用できます。CICSplex SM と共に配布されるサンプル・プログラムには、これらの言語のそれぞれについて CALL ステートメントの例が含まれています。

注: 動的ルーティングを変更する場合は、以下の点に注意してください。

- アプリケーション・コンテキストの値が設定されていないと、それらの値はゼロ (バージョンの場合) または NULL/低値(プラットフォーム、アプリケーション、オペレーション) のいずれかになります。
- スtring・フィールドの埋め込みには、スペースではなく NULL が使用されます。

重要: 配布されている EYU9WRAM は、ワークロード管理定義を通じて設定されたワークロードのルーティングと分離を、API verb を使用して処理します。そのため、EYU9WRAM を変更すると、CICSplex SM ワークロード管理機能に悪影響を与える可能性があります。例えば、SM_SCOPE、SM_BALANCE、SM_ROUTE のいずれも使用しない場合、発生した各トランザクションは、そのトランザクションが CICS に対して定義されたときに識別されたデフォルト・ターゲット領域にルーティングされます。その結果、すべての CICSplex SM ワークロード管理定義がバイパスされます。

非動的トランザクションに関する考慮事項:

トランザクションが静的にルーティングされるか、ATI によって開始される場合は、API を介した呼び出しを組み込む必要はありません。そのような場合、ターゲット領域を変更することはできません。ルーティング機能はルート通知です。ルート通知機能は、そのようなトランザクションがルーティングされることを EYU9WRAM プログラムに通知することを意図したものです。

これらの機能のいずれかを組み込んだ場合、以下のことが起きます。

- SM_SCOPE 呼び出しは、SCOP_VECT に単一のエントリーを返します。そのエントリーは、定義時に静的定義トランザクションに関連付けられたターゲット領域であるか、EXEC CICS START で指定された宛先に関連付けられているターゲット領域です。ATI トランザクション用のコマンド
- SM_BALANCE 呼び出しは、CICS に対する定義時に、そのトランザクションに関連付けられたターゲット領域を選択します。CICSplex SM ワークロード・マネージャは、トランザクションの親和性を一切作成しません。
- SM_ROUTE 呼び出しは、例外応答を返します。

EYU9WRAM が呼び出される場合:

- 通知。既存の親和性関係は、どれも無視され、何も作成されません。
- ルート選択エラー。既存の親和性関係は、どれも無視され、何も作成されません。さらに、配布された EYU9WRAM プログラムは、端末メッセージを書き込んで終了します。
- ルーティング試行完了 (CICS BTS トランザクションの場合のみ)。既存の親和性は、どれも無視されます。動的ルーティング API 関数呼び出しは、どれも誤った応答で終わります。『非端末関連の START および CICS BTS に関する考慮事項』を参照してください。
- トランザクション開始 (CICS BTS トランザクションの場合のみ)。既存の親和性は、どれも無視されます。動的ルーティング API 関数呼び出しは、どれも誤った応答で終わります。『非端末関連の START および CICS BTS に関する考慮事項』を参照してください。
- トランザクション終了。既存の親和性は、どれも無視されます。動的ルーティング API 関数呼び出しは、どれもエラー応答で終わります。
- トランザクション異常終了。既存の親和性は、どれも無視されます。動的ルーティング API 関数呼び出しは、どれもエラー応答で終わります。

非端末関連の **START** および **CICS BTS** に関する考慮事項:

CICS BTS アクティビティまたは非端末関連 EXEC CICS START コマンドのいずれかに関連付けられているトランザクションをルーティングすると、静的ルーティングと動的ルーティングのどちらの場合も、DSRTPGM SIT パラメーターで識別されたルーティング・プログラムが呼び出されます。

静的ルーティングされるトランザクションの場合、EYU9WRAM プログラムはターゲット領域を変更できません。180 ページの『非動的トランザクションに関する考慮事項』を参照してください。動的ルーティングされるトランザクションの場合、EYU9WRAM プログラムはターゲット領域を変更することができます。182 ページの『一連のターゲット領域からのターゲット領域の選択』を参照してください。ただし、どちらの場合も、EYU9WRAM プログラムは以下に対してのみ、呼び出されます。

- 要求側領域内:
 - 通知
 - ルート選択
 - ルート選択エラー
 - ルーティング試行完了
- ターゲット領域内:

- トランザクション開始
- トランザクション終了
- トランザクション異常終了

ルート開始の機能について詳しくは、DPL 要求の動的ルーティングを参照してください。

一連のターゲット領域からのターゲット領域の選択:

配布されている EYU9WRAM は、SM_SCOPE および SM_BALANCE を使用して、トランザクション用に定義されているターゲット領域のリストからターゲット領域を選択します。ユーザーが設定したオプションは、ターゲット領域の選択方法に影響します。

- SM_SCOPE は、現行のトランザクション・オカレンス用のターゲット領域リストを返します。これらのターゲット領域は、ワークロード仕様によって要求側の領域に明示的または暗黙的に関連付けられているターゲット領域です。
- SM_BALANCE は、SM_SCOPE が返すターゲット領域候補リストから、ターゲット領域を選択します。

SM_SCOPE または SM_BALANCE の呼び出しの後、操作の結果が EYURWCOM 連絡域の応答フィールドおよび理由フィールドに示されます。

ルート選択時のアクション

トランザクションまたはプログラムのルーティングがスケジュールされると、動的ルート選択が発生します。

- SM_SCOPE が発行されると、EYURWCOM 連絡域のスコープ・ベクトルのポインターは、ターゲット領域スコープ・リストの記述域 SCOP_VECT のアドレスで更新されます。また、エレメント・カウント・フィールドが更新され、スコープ・ベクトル内のエレメントのカウントが格納されます。スコープ・ベクトル内の各エレメントは、ターゲット領域候補を識別し、その現在の状況を示します。

SM_BALANCE の処理時には、スコープ・ベクトル・エレメント EYURWSVE に無視のマークが付いている場合を除き、番号付きリストの最初にあるターゲット領域がルーティング用に選択されます。

- 現行のトランザクション・オカレンスに関連付けられている親和性がない場合、SM_SCOPE 呼び出しは SCOP_VECT エレメントをソートして、最適のターゲット領域候補がリストの最初に配置されるようにします。

SM_BALANCE の処理時には、最適のターゲット領域の APPLID と SYSID が、WCOM_SEL_AOR と WCOM_SEL_SYSID のそれぞれのフィールドに配置されます。一般に、それはスコープ・ベクトルに表されている最初のターゲット領域になります。ただし、EYU9WRAM プログラムによって一部の SCOP_VECT エレメントの WSVE-IGNORE フィールドに、その領域を無視する必要があることを示すマークが付けられている場合は、無視するようにマーク付けされていないスコープ・ベクトル内の最初のターゲット領域が選択されます。

注:

1. トランザクション ID およびそのトランザクションに関連付けられている端末とユーザーの ID が、親和性が定義されているトランザクション・グループに一致する場合、SM_BALANCE の処理時に親和性がアクティブになります。
 2. DPL を使用して、SM_SCOPE 呼び出しの前にトランザクション ID を更新できます。
- 現行のトランザクション・オカレンスに親和性が関連付けられている場合、通常の SM_SCOPE 呼び出しでは、親和性が存在するターゲット領域のみが SCOP_VECT 内に示されます。その場合、SM_BALANCE 呼び出しはそのターゲット領域を選択します。そのターゲット領域をルーティングに使用できない場合、SM_BALANCE 機能は警告標識を設定します。別のターゲット領域の選択を試みることはしません。
 - トランザクションが DTRTRAN として定義されている場合、EYURWCOM 連絡域には、そのトランザクションが DTRTRAN であり、ワークロード・マネージャーによって拒否されないことを示す標識が含まれます。処理は、一般に、通常の非 DTRTRAN の場合と同じです。SM_SCOPE を発行すると、SCOP_VECT が返されます。SM_BALANCE を発行すると、ターゲット領域が選択されます。

EYU9WRAM モジュールは、SM_SCOPE 呼び出しを発行する前に、トランザクションを拒否することを選択する場合があります。その場合、ワークロード・マネージャーは CICS に戻り、DFHDYPDS 連絡域内の拒否標識を Y に設定します。サンプルの EYU9WRAM プログラムでは、トランザクション ID がすべてブランクである場合にのみ、DTRTRAN トランザクションが拒否されます。

通知時のアクション

通知は、静的トランザクションまたは ATI トランザクションのルーティングがスケジュールされているときに発生します。

- 静的にルーティング可能なトランザクション、ATI トランザクション、および BTS 静的ルーティング要求の場合、SM_SCOPE を発行すると、スコープ・ベクトルにターゲット領域が 1 つだけ入ります。それは、そのトランザクションに関連付けられているターゲット領域です。

ルーティング試行完了時のアクション

ありません。ただし、このステージでリソースを整理し、解放してもかまいません。

ルート選択エラー時のアクション

ルート選択エラー呼び出しは、要求側領域とターゲット領域との間の CICS リンクが使用できない場合や、定義されていない場合に発生します。

- アクティブな親和性がない場合: SM_SCOPE を再発行します。返される SCOP_VECT によって示されるターゲット領域候補には、エラーの原因となったターゲット領域は含まれません。その場合、SM_BALANCE を使用して新規のターゲット領域を選択できます。
- 前のルート選択の結果として親和性がアクティブになっている場合:
 - その親和性に関連付けられている存続時間が PERMANENT、SYSTEM、ACTIVITY、または PROCESS である場合、エラ

ーの原因となっているターゲット領域は SM_SCOPE が返すスコープ・リストに組み込まれます。SM_BALANCE は、親和性の規則により、そのターゲット領域を選択する必要があります。また、EYU9WRAM に警告を返します。その場合、EYU9WRAM はエラーが発生したことをユーザーに通知する必要があります。

- 親和性に関連付けられている存続時間が SIGNON、LOGON、DELIMIT、または PCONV である場合、アクティブな親和性状況は、EYU9WRAM に制御が戻される前に除去されます。SM_SCOPE を再発行すると、エラーの原因となっているターゲット領域はスコープ・リストに組み込まれません。ワークロード仕様が、そのトランザクション・グループに対して Create Affinity YES で定義されている場合、EYU9WRAM には、親和性が定義されていることと、SM_BALANCE を発行するとそれが活動化されることが通知されます。
- 前のトランザクション・インスタンスによって親和性が活動化されている場合、SM_SCOPE を再発行すると、返されるスコープ・リストには前に選択されたターゲット領域が含まれています。SM_BALANCE は、親和性の規則により、そのターゲット領域を選択する必要がありますので、EYU9WRAM に警告が返されます。その場合、EYU9WRAM はエラーが発生したことをユーザーに通知する必要があります。

トランザクション終了時のアクション

トランザクション終了は、トランザクションが正常に終了したときに発生します。

- EYU9WRAM は、獲得している可能性があるすべてのリソースを解放する必要があります。
- SM_SCOPE、または SM_BALANCE、または SM_ROUTE を発行すると、例外応答が返されます。

トランザクション異常終了時のアクション

トランザクション異常終了は、トランザクションが異常な状態で終了したときに発生します。

- EYU9WRAM は、獲得している可能性があるすべてのリソースを解放する必要があります。
- SM_SCOPE、または SM_BALANCE、または SM_ROUTE を発行すると、例外応答が返されます。

トランザクション開始時のアクション

トランザクション開始は、CICS BTS 関連トランザクションまたはエンタープライズ Bean 関連トランザクションが、ターゲット領域ヘルペティングされたときに発生します。実行する特定のアクションはありません。この呼び出しは、通知の目的でのみ発行されます。

特定のターゲット領域の選択:

SM_ROUTE は、特定のターゲット領域をルーティング用に選択することを要求します。SM_ROUTE は、明示的なルーティングを必要とするアプリケーションやデ

ータがあるときに使用します。例えば、特定のユーザー ID に関連付けられているトランザクションを、特定のターゲット領域にルーティングすることができます。

SM_ROUTE 呼び出しの後、操作の結果が EYURWCOM 連絡域の応答フィールドおよび理由フィールドに格納されます。

サンプルの SM_ROUTE 呼び出しを次に示します。

```
CALL WAPIENPT(DA_TOKEN,SM_ROUTE)
```

DA_TOKEN は、EYURWCOM 連絡域を経由して介して提供される動的ルーティング API トークンを指定します。このトークンは EYU9WAPI によって使用されるので、変更してはいけません。

ルート選択時のアクション

ルート選択時のアクションは、以下のとおりです。

- 要求側領域とターゲット領域との間に 1 つだけ接続が存在する場合は、そのターゲット領域の SYSID または APPLID のいずれかを指定できます (CICSplex SM は、該当する適切な ID を判別します)。APPLID は、EYURWCOM 連絡域の WCOM_SEL_AOR フィールドに入れてください。SYSID は、WCOM_SEL_SYSID フィールドに入れてください。

要求側領域とターゲット領域との間に複数の接続が存在する場合は、前に説明したように SYSID と APPLID の両方を指定して、正しいターゲット領域が確実に選択されるようにしてください。SYSID と APPLID の両方を指定した場合、それらの妥当性の検査は行われないことに注意してください。

ターゲット領域が CICSplex SM に対して定義されている必要はありません。親和性状況は検査されません。このため、この呼び出しの結果として親和性が確立されることはなく、有効だった親和性も無視されます。

- ルート通知処理中に SM_ROUTE を発行すると、例外応答が返されます。

ルーティング試行完了時のアクション

ありません。ただし、このステージでリソースを整理し、解放してもかまいません。

ルート選択エラー時のアクション

EYU9WRAM プログラムがメッセージを発行して終了する場合があります。その場合は、別のターゲット領域を指定して SM_ROUTE を再発行するか、SM_SCOPE と SM_BALANCE を発行することができます。

トランザクション終了時のアクション

- EYU9WRAM は、獲得している可能性があるすべてのリソースを終了する必要があります。
- いずれかの API 関数を呼び出すと、例外応答が返されます。

トランザクション異常終了時のアクション

- いずれかの API 関数を呼び出すと、例外応答が返されます。

トランザクション開始時のアクション

トランザクション開始時には、以下のとおりです。

- EYU9WRAM は、獲得している可能性があるすべてのリソースを終了する必要があります。
- いずれかの API 関数を呼び出すと、例外応答が返されます。

親和性の作成:

トランザクション用に確立されたトランザクション・グループ内にまだ親和性が存在しない場合は、SM_CREAFF を使用して親和性を作成できます。

トランザクション・グループは、親和性タイプと存続時間を使用して定義する必要があります。作成された親和性は、トランザクション・グループで定義されているのと同じ親和性タイプと存続時間を持ちます。

SM_CREAFF を使用する前に、187 ページの『親和性に関する考慮事項』を検討してください。

SM_CREAFF を呼び出す前に、まず SM_SCOPE を呼び出して、スコープ・リストを取得する必要があります。SM_CREAFF は、スコープ・リスト内にはないターゲット領域に対しては親和性を作成しません。また、EYUWRCOM 連絡域の WCOM_SEL_AOR フィールドと WCOM_SEL_SYSID フィールドに、親和性を作成するターゲット領域の APPLID と SYSID をそれぞれ設定してください。

EYU9WRAM は実行されないコードのフラグメントを含んでおり、これを、SM_CREAFF 機能を実装するためのテンプレートとして使用できます。

以下のときに SM_CREAFF 機能を呼び出すことはできません。

- ルート終了
- ルート異常終了
- ルート通知
- ルート開始
- ルート完了

親和性の削除:

SM_DELAFF を使用して、アクティブな親和性を削除することができます。

SM_DELAFF を使用する前に、187 ページの『親和性に関する考慮事項』を検討してください。

SM_DELAFF を呼び出す前に、まず SM_SCOPE を呼び出して、スコープ・リストを取得する必要があります。EYURWCOM 連絡域の WCOM_AFF_STAT フィールドには、親和性がアクティブであるかコミット済みであることを示す値が入っています。アクティブな親和性は、SM_DELAFF を使用して削除できます。コミット済みの親和性には SYSTEM または PERMANENT の存続時間があり、SM_DELAFF を使用しても削除できません。

EYU9WRAM は実行されないコードのフラグメントを含んでおり、これを、SM_DELAFF API 関数を実装するためのテンプレートとして使用できます。

以下のときに SM_DELAFF 機能呼び出すことはできません。

- ルート通知
- ルート開始
- ルート完了

親和性に関する考慮事項:

親和性を定義するときは、その存続時間を指定する必要があります。通常、親和性は指定された存続時間が満了するまで存続します。

以下に示す、いずれかのタイプの存続時間を定義できます。

アクティビティー

CICS BTS アクティビティーが終了した時点で満了します。

限界指定型

トランザクションの PCONV モードが END になった時点で満了します。

ログオン型

端末ユーザーがログオフした時点で満了します。

Pconv トランザクションが NEXTTRANSID を指定しない EXEC CICS RETURN を使用したか、トランザクションの PCONV モードが END になった時点で満了します。

CICS は、APPC (LUTYPE6.2) 装置の疑似会話をサポートしません。

永続型

そのターゲット領域を含んでいるワークロードが終了した時点で満了します。

処理 CICS BTS プロセスが終了した時点で満了します。

サインオン

端末ユーザーがサインオフした時点で満了します。

システム

ターゲット領域が終了した時点で満了します。

UOW

そのトランザクションに関連付けられている作業単位が終了した時点で満了します。作業単位は、CICS SYNCPOINT または ROLLBACK 要求が実行されたとき、または親タスクが終了したときのいずれかに終了します。

親和性ターゲット領域が 1 つだけ含まれているスコープ・リストを SM_SCOPE が生成するが、そのターゲット領域がルーティングに使用可能でないという環境も存在します。これは、以下の場合に発生します。

- ターゲット領域がダウンしている。
- ターゲット領域への CICS リンクがダウンしている。
- ターゲット領域は現時点ではアクティブだが、かつてシャットダウンされ、親和性が作成された後に再始動された。

上記の場合、EYU9WRAM のデフォルト処理では、親和性ターゲット領域が使用可能でないことを示す端末メッセージが発行され、トランザクションは終了します。親和性の存続時間が PCONV (疑似会話) の場合、CICSplex SM は自動的にその親和性を削除します。その親和性は満了しているからです (NEXTTRANSID が存在しない)。しかし、デフォルトの EYU9WRAM 処理では、それ以外のどの親和性も、ターゲット領域に対する実際の親和性の特性が不明であるため、削除されません。例えば、LOGON 親和性が、ターゲット領域に情報を渡すための TCTUA の使用に関与している場合があります。その親和性が、ターゲット領域が使用可能でないときに削除されると、そのトランザクション・グループについての次のトランザクションによって、新規のターゲット領域が選択されます。そのトランザクションは、新しいターゲット領域へルーティングされたとき、TCTUA の内容を使用すると障害を起こす可能性があります。

デフォルトの処理を実装するサンプルの EYU9WRAM プログラムには、SM_SCOPE を呼び出した後に親和性の状況を検査するサブルーチンが含まれています。ターゲット領域に対してアクティブである親和性がコミットされておらず、親和性ターゲット領域状況が OK でない場合、サブルーチンは EYU9WRAM プログラムが終了できるよう、端末ユーザーにメッセージを送信してから終了します。このサブルーチンには、実行されないコード・フラグメントが含まれており、これを使用すると、SM_DELAFF 呼び出しを使用して親和性を削除することができます。実行されないコード・フラグメントの前に、アクティブな親和性の親和性存続時間についての一連のテストがあります。1 つ以上の分岐を変更して、そのコード・フラグメントにジャンプすることができます。そのコード・フラグメント自体は、親和性を削除し、メッセージを発行した後に戻りを行います。これによって EYU9WRAM プログラムは終了することができ、その結果、トランザクションは終了します。この処理を変更して、親和性が削除され、メッセージが発行されず、サブルーチンが終了するようにし、その結果としてメインライン・プロセスに SM_SCOPE 呼び出しを再実行させることができます。その場合、SM_BALANCE 用に新規のターゲット領域セットが受信されます。

同じサブルーチンに、使用可能にすると親和性を作成することができる、実行されないコード・フラグメントも含まれています。この例では、サブルーチンは、親和性が定義されているがアクティブでないことを判別しました。次に、サブルーチンは WCOM_AFF_AUTO 標識を検査して、CICSplex SM で SM_BALANCE 中に自動的に親和性を作成する必要があるかどうかを判別します。サブルーチンは、その答えが何であろうと、正常に終了します。ユーザーは、親和性が作成されるようにするために、SM_CREAFF フラグメントを使用可能にすることができます。SM_CREAFF 呼び出しは、WCOM_AFF_AUTO が SM_BALANCE 中の親和性の自動作成を指示しているかどうかに関係なく、使用することができます。したがって、SM_CREAFF 呼び出しを使用して、以下のことができます。

- 親和性を、CICSplex SM が作成しないときに作成する。
- 通常なら CICSplex SM が選択しないターゲット領域に対して、親和性を作成する。

SM_CREAFF コード・フラグメントは、SM_SCOPE が返すスコープ・リストの最初にあるターゲット領域に対して親和性を作成します。

EYURWCOM 連絡域の以下のフィールドは、CICSplex SM の親和性処理に関する情報を提供します。

- WCOM_AFF_STAT
- WCOM_AFFAOR_STAT
- WCOM_AFF_TYPE
- WCOM_AFF_LIFE
- WCOM_AFF_AUTO
- WCOM_WORK_NAME
- WCOM_TGRP_NAME

CICSPlex SM データ域

EYU9WRAM プログラムは 2 つのデータ域を使用します。連絡域 EYURWCOM とスコープ・ベクトル・エレメント EYURWSVE です。

EYURWCOM のリテラルは EYURWCOD で定義されており、EYURWSVE のリテラルは EYURWSVD で定義されています。

これらのデータ域をマップするため使用できるコピーブックの名前は、サンプル・プログラムとコピーブックで示されています。

スコープ・ベクトル・エレメント EYURWSVE には、SM_SCOPE が返したターゲット領域候補のリストに関連付けられている個々のターゲット領域に関する情報が入っています。

EYU9WRAM のユーザー置換モジュールの作成

CICSTS55.CPSM.SEYUPROC で提供されているサンプル・プロシージャーを使用して、EYU9WRAM の置換モジュールを作成できます。

プロシージャー・メンバーは以下のとおりです。

アセンブラー	EYUEITAL
C	EYUEITDL
PL/I	EYUEITPL
COBOL	EYUEITVL

1. これらのプロシージャーを、カタログされたシステム・プロシージャー・ライブラリーにコピーします。 サンプルのユーザー置換モジュールにあるサンプルを使用できます。
2. JCL サンプルを使用してプロシージャーを実行し、EYU9WRAM の置換モジュールを作成します。サンプル JCL に示されている小文字の値を、ご使用のサイトの適切な値に置き換えます。また、EYU9WRAM 内に CICSPlex SM API を使用することはできません。

追加動的ルーティング・サポートの要求

このセクションには、プロダクト・センシティブ・プログラミング・インターフェースの情報が記載されています。

アプリケーション・プログラムから、CICSPlex SM ワークロード管理機能に直接アクセスできます。

注: CICS Transaction Server for OS/390® バージョン 1 リリース 3 以降を実行している場合は、すべての動的ルーティング要件に CICSplex SM 提供プログラムの EYU9XLOP を使用することをお勧めします。このセクションの情報が必要になるのは、この機能を CICS Transaction Server for OS/390 バージョン 1 リリース 3 へのマイグレーション中も引き続き使用する場合だけです。

使用するルーティング領域が CICS Transaction Server for OS/390 バージョン 1 リリース 3 以降である場合、または CICS BTS またはエンタープライズ Bean を使用している場合は、このセクションの情報は必要ありません。166 ページの『CICSplex SM を使用した動的ルーティング』で説明されている分散ルーティング機能を使用してください。

そのようなプログラムを作成するには、以下について理解しておく必要があります。

- CICS 中継プログラムと定義済みの動的ルーティング・プログラムとの間のインターフェース。
- ワークロード管理で説明されている、CICSplex SM のワークロード管理処理。
- 166 ページの『CICSplex SM を使用した動的ルーティング』で説明されている、CICSplex SM ワークロード管理のルーティング・アクション・モジュール EYU9WRAM。

CICSplex SM ワークロード管理を呼び出す基本的な方法は、モジュール EYU9XLOP を CICS に対して動的ルーティング・プログラムとして定義することです。これにより、CICS 中継プログラムによって EYU9XLOP が呼び出されるようになり、CICSplex SM ワークロード管理は、別の CICS システムへ送信できる各作業要求のルーティングを決定できるようになります。

必要であれば、CICS 中継プログラムを介さずに、アプリケーションから、CICSplex SM ワークロード管理を直接呼び出すことができます。CICS Transaction Server for OS/390 バージョン 1 リリース 3 より前の CICS リリースでは、CICSplex SM ワークロード管理を使用して、要求側領域からの分散プログラム・リンク (DPL) に最適のターゲット領域を判別できます。ユーザーが作成するアプリケーション・プログラムは、以下のガイドラインに従っている必要があります。

- プログラムは、定義済みでルーティング領域として実行されている CICS システム内で実行される必要があります。ターゲット領域から CICSplex SM ワークロード管理にアクセスすることはできません。
- プログラムは、同じタスクから、そのプログラムの INIT 呼び出しと TERM 呼び出しを発行する必要があります。CICSplex SM は、プログラムが CICS 中継プログラムによって実行される処理にならうことを予期しており、CICS 中継プログラムは、常にルート開始とルート終了で呼び出しを行います。

注: EXEC CICS START コマンドを発行するプログラムを介したワークロード管理へのアクセスは、非同期トランザクション開始を使用する場合には推奨されません。さらに、端末またはユーザーのいずれかに関連していない EXEC CICS START コマンドを、親和性関係があるトランザクションに使用しないでください。このインターフェースではそれらの関係を正しく解決できないからです。

動的プログラム・ロードを使用するプログラムから、ワークロード管理にアクセスすることは、サポートされていません。CICSplex SM ワークロード管理は、CICS

アプリケーション・プログラミング・インターフェースを使用して、そのワークロード管理を実行している現在の環境に関する情報を収集します。その情報の一部を DPL の制約事項のために入手できず、予測不能な結果が発生する場合があります。

、CICSplex SM ワークロード管理は、ルーティングの決定を行うために特定の情報を必要とし、通常、その情報は CICS 中継プログラムによって提供されます。CICS 中継プログラムは、中継されるトランザクションのインスタンスに関して、CICS が入手できるデータから情報を導出します。CICSplex SM ワークロード管理を直接呼び出すときは、その情報を、端末向けデータやルーティングされる作業を識別するためのトランザクション名に相当するデータも含め、ユーザーが提供する必要があります。

CICSplex SM ワークロード管理の開始方法

CICSplex SM ワークロード管理機能を開始するには、EXEC CICS LINK コマンドを使用し、プログラムとして EYU9XLOP を指定し、連絡域として EYURWTRA を識別します。

コマンドの形式は次のとおりです。

```
EXEC CICS LINK
      PROGRAM(EYU9XLOP)
      COMMAREA(EYURWTRA)
      LENGTH(=AL2(WTRA_LENGTH))
```

CICS 中継プログラムから DFHDYPDS 連絡域の動的ルーティング・プログラムに通常渡されるデータの多くは、ユーザーのプログラムで生成して、CICSplex SM ワークロード管理に渡す必要があります。それ以外の、通常では CICSplex SM ワークロード管理によってトランザクション向け環境および端末向け環境から生成されるデータも、ユーザーのプログラムが提供する必要があります。アセンブラーのコピーブック EYURWTRA は、CICSplex SM ワークロード管理に渡される連絡域のマップを提供します。

対応するコピーブックと、それらを見つけることができる CICSplex SM ライブラリーは、以下のとおりです。

言語	メンバー名	ライブラリー
アセンブラー	EYUAWTRA	SEYUMAC
COBOL	EYULWTRA	SEYUCOB
PL/I	EYUPWTRA	SEYUPL1
C	EYUCWTRA	SEYUC370

CICSplex SM ワークロード管理を呼び出す前に、EYURWTRA 連絡域を初期設定する必要があります。

WTRA_API_RESP および WTRA_API_REAS で返される可能性がある、応答コードと理由コードの値のリストについては、アセンブラーのコピーブック・メンバー EYURWCOD を参照してください。

処理に関する考慮事項

CICSplex SM ワークロード管理の処理の後、WTRA_RESPONSE フィールドにゼロ (0) または 8 のいずれかの戻りコードが入ります。

戻りコードが 0 の場合、WTRA_SYSID に選択されたターゲット領域の SYSID が入っており、WTRA_APPLID にその APPLID が入っています。この情報を使用して、ターゲット領域への作業単位のルーティングを続行できます。

戻りコードが 8 の場合は、WTRA_API_RESP フィールドと WTRA_API_REAS フィールドで詳細を調べる必要があります。これらのフィールドには、CICSplex SM ワークロード管理のルーティング・アクション・モジュール (EYU9WRAM) に返された最後の応答コードと理由コードが入っています。ほとんどの場合、応答コードと理由コードは CICSplex SM ワークロード管理が戻りコード 8 を生成した理由を記述しています。この情報に基づいて、続行する方法を決定できます。

ただし、場合によっては、WTRA_RESPONSE フィールドに戻りコード 8が入っている可能性があるのに、WTRA_API_RESP フィールドと WTRA_API_REAS フィールドが CICSplex SM ワークロード管理によって設定されていないことがあります。そのような場合は、ルーティング・アクション・プロセスを呼び出す前にエラーが検出されています。それらのタイプのエラーでは、CICS トレース・データ・セットに CICSplex SM ユーザー・トレース・レコードが書き込まれます。その場合は、そのプログラムの処理を終了してください。

戻りコードが 8 の場合は、WTRA_OPTER フィールドを調べる必要もあります。その値が WTRA_CALLYES の場合は、以下のようにします。

1. ルート終了のために、WTRA_FUNC フィールドを WTRA_FUNCTRM に設定します。
2. CICSplex SM ワークロード管理を再度呼び出します。
3. 提示された作業単位に関する処理を終了します。

WTRA_OPTER フィールドに WTRA_CALLNO の値が入っている場合は、提示された作業単位について、それ以上の処理を終了します。

その作業単位がターゲット領域内で完了した後、作業単位がどのように完了したかに応じて、WTRA_FUNC フィールドを設定します。作業単位が正常に完了した場合は、以下のようにします。

1. ルート終了のために、WTRA_FUNC フィールドを WTRA_FUNCTRM に設定します。
2. オプションとして、WTRA_NEXTTRAN フィールドに、そのプロセスで次に使用されるトランザクションの ID を設定します。次のトランザクションがない場合は、フィールドをすべてブランクに設定します。
3. CICSplex SM ワークロード管理を再度呼び出して、トランザクションの終了処理を要求します。

作業単位が異常終了するか、異常と考えられるエラーを生成した場合は、以下のようになります。

1. WTRA_FUNC フィールドを WTRA_FUNCABD に設定して、ルーティングされたトランザクションが異常終了したことを CICSplex SM ワークロード管理に通知します。
2. CICSplex SM ワークロード管理を再度呼び出して、トランザクションの異常終了処理を要求します。

ルート・エラーに関する考慮事項:

ターゲット領域の SYSID および APPLID を受け取った後、そのターゲット領域への作業単位のルーティングを試みることができます。

ただし、システムが使用不能の場合は、ルーティング試行がエラー状態で終わることもあります。その場合は、以下のようにしてください。

1. WTRA_FUNC フィールドを WTRA_FUNCERR に設定して、ルーティング・エラーを示します。
2. WTRA_ERR フィールドでエラーの理由を指定します。
3. CICSplex SM ワークロード管理を再度呼び出します。

CICSplex SM ワークロード管理は、可能な場合、スコープ・リストから別のターゲットを提供します。他に使用可能なシステムがない場合は、WTRA_RESPONSE フィールドが 8 に設定され、WTRA_API_RESP フィールドと WTRA_API_REAS フィールドに失敗の理由が記述されます。有効なターゲット領域を受け取るまで、ルーティング・エラーのために CICSplex SM ワークロード管理を複数回呼び出さなければならない場合もあります。

トランザクション親和性に関する考慮事項:

WTRA_TRANID、WTRA_USERID、および WTRA_LUNAME の各フィールドによって、親和性を含んでいるトランザクション・グループが CICSplex SM ワークロード管理によって選択された場合、トランザクション親和性の規則が順守されます。

その場合は、ルート終了機能呼び出す前に必ず、WTRA_NEXTTRAN フィールドを次のトランザクションの ID によって初期設定してください。

作業単位または作業単位のサブセットに親和性関係が定義されている場合は、その親和性の定義方法に注意してください。プログラムで SIGNOFF や LOGOFF の処理を提供できないため、SIGNON または LOGON の親和性存続時間によって、まだ有効であるのに親和性関係が構築され、要求側領域またはターゲット領域のいずれかが終了するまで除去されなくなる場合があります。

WTRA_NEXTTRAN フィールドは、疑似会話親和性に最も役立ちます。この親和性存続時間の場合、CICSplex SM ワークロード管理は通常、EXEC CICS ASSIGN NEXTTRANSID コマンドを発行して、機能のための次のトランザクション ID があれば、それを取得します。このコマンドは、CICSplex SM ワークロード管理がユーザーのプログラムによって呼び出された場合は使用できないので、次のトランザクションの ID を提供するのにはユーザーの責任です。

CICSplex SM ワークロード管理の親和性処理については、親和性の関係の考慮を参照してください。親和性関係と存続時間の値の指定について詳しくは、トランザクション・グループの作成を参照してください。

異常終了の補正に関する考慮事項:

ターゲット領域が CICS TS を実行している場合、プログラムによって開始されたトランザクションは、異常終了の補正処理に参加できます。ただし、アクティブな CICSplex SM ワークロードがそれを指定している必要があります。

作業要求が非端末関連 EXEC CICS START コマンドまたは BTS アクティビティのいずれかである場合、ルーティング領域が異常終了の発生を検出するためには、ルーティング領域とターゲット領域が同じ MVS イメージ内になければならないことに注意してください。

プログラムは フィールドに WTRA_FUNCABD を指定することにより、CICSplex SM ワークロード管理に特定の作業単位が異常終了したことを通知する必要があります。その後、CICSplex SM ワークロード管理は、可能な場合、同じターゲット領域を後続のルート選択機能でトランザクション (または、親和性が定義されている場合はトランザクションのセット) 用に選択しない傾向を持つようになります。

CICSplex SM ワークロード管理の異常終了補正処理については、Abend probabilities and workload managementを参照してください。異常終了の補正の要求について詳しくは、ワークロード仕様の作成を参照してください。

CMAS の可用性に関する考慮事項:

ユーザーのプログラムで、EYU9XLOP プログラムに対する EXEC CICS LINK を発行した場合、ユーザーのプログラムを実行している要求側領域がまだターゲット CMAS に完全に接続していないと、ESSS 接続が進行中であることを示すメッセージ EYUXL0020I が表示されます。

ユーザーのプログラムは CMAS が使用可能になるまで無限に待機し、要求側領域はワークロードに結合されます。CMAS と MAS への接続が正常に完了していても、CMAS が MAS に対するワークロード定義のインストールを完了していない場合は、要求側領域がワークロードを待っていることを示すメッセージが表示されます。この状態を修正するには、ワークロードのセットアップとインストールが必要になる場合があります。

注: 要求側領域が CMAS への接続を正常に完了すれば、CMAS は非アクティブになることができ、ワークロード管理はアクティブのまま残ります。

サンプルの呼び出しシーケンス

このコード例では、CICSplex SM ワークロード管理機能にアクセスするプログラムのサンプルの呼び出しシーケンスを示します。これはサンプル・プログラムとして使用されることを意図しているものではありません。したがって、すべての詳細について完全であるとは限りません。

```
*-----*
          DFHEISTG ,               Define Workarea
WRK_WTRA   DS    CL(WTRA_LENGTH)
           DS    0D
WRK_UOWCOMM DS    0C
WRK_UOW_RESP DS    F
WRK_UOWCOMM_L EQU *-WRK_UOWCOMM
           COPY EYURWTRA           Include DSECT to map WTRA
SRVPGM     DFHEIENT EIBREG=R11,DATAREG=R13,CODEREG=R12

*-----*
* Initialize the WTRA COMMAREA.
*-----*
          LA      R8,WRK_WTRA      --> WTRA
          USING   EYURWTRA,R8      *** USING WTRA ***
          MVC     WTRA_SLENGTH,=AL2(WTRA_LENGTH)
```

```

MVI  WTRA_ARROW,C'>'          Set length of block.
MVC  WTRA_NAME,=C'EYURWTRA'    Set arrow.
MVI  WTRA_BLANK,C' '          Set the name.
MVC  WTRA_PGMNAME,=CL8'SRVPGM ' Set blank delimit.
                                   Set program name.
MVC  WTRA_TERMID,=CL4'TRM1'    Set TermID.
MVC  WTRA_USERID,=CL8'USR1'    Set USERID.
MVC  WTRA_LUNAME(8),=CL8'.NET1' Set LUNAME.
MVC  WTRA_TRANID,=CL8'TRN1'    Set TRANID.
MVC  WTRA_SYSID,=C'SYS1'       Set SYSID.
MVC  WTRA_APPLID,=C'APPLID1'  Set Applid.

*
* Set Application Context
*
MVC  WTRA_PLATFORM,=CL64'PLATFORM_1.0.0'
MVC  WTRA_APPLICATION,=CL64'APPLICATION_1.0.2'
MVC  WTRA_MAJORVER,=F'1'
MVC  WTRA_MINORVER,=F'1'
MVC  WTRA_MICROVER,=F'1'
MVC  WTRA_OPERATION,=CL64'PLEASE_ROUTE'
MVI  WTRA_FUNC,WTRA_FUNCSEL    Set the Route Select Function.
MVI  WTRA_DYRTYPE,WTRA_DYRTYPE_DYN

*-----*
* Invoke the WLM MAS Agent for Route Select.
*-----*
ROUTE_SELECT  DS  0H
              BAS  R5,LINK_WLM          Go do it.
              CLC  WTRA_RESPONSE,=F'0'  Call go OK?
              BNE  CHECK_OPTER          ..no.
              BAS  R5,START_UOW         Go Start the UOW.
              LTR  R15,R15              Work Completed?
              BZ   ROUTE_TERM           ..yes.
              BP   ROUTE_ABND           UOW gave non zero return code.
              C    R15,=F'-4'          SYSID error?
              BNE  ROUTE_ABND           ..no.

*-----*
* Invoke the WLM MAS Agent for Route Error.
*-----*
ROUTE_ERROR   DS  0H
              MVI  WTRA_FUNC,WTRA_FUNCERR Set the Termination Function.
              MVI  WTRA_ERR,WTRA_ERRROUT Say out of service.
              B    ROUTE_SELECT         Go Get another system.

*-----*
* Invoke the WLM MAS Agent for Route Abend.
*-----*
ROUTE_ABND    DS  0H
              MVI  WTRA_FUNC,WTRA_FUNCABD Set the Abend function.
              BAS  R5,LINK_WLM          Go terminate.
              CLC  WTRA_RESPONSE,=F'0'  OK?
              BE   EXIT_ABD             ..yes.
CHECK_OPTER    DS  0H
              CLI  WTRA_OPTER,WTRA_CALLYES Call WLM for Term?
              BNE  WLM_CALLERR          ..no.

*-----*
* Invoke the WLM MAS Agent for Route Termination
*-----*
ROUTE_TERM    DS  0H
              MVI  WTRA_FUNC,WTRA_FUNCTRM Set the Termination Function.
              MVC  WTRA_NEXTTRAN,=CL8'TRN2'
                                   Set the next TRANID.
              BAS  R5,LINK_WLM          Go terminate.
              CLC  WTRA_RESPONSE,=F'0'  OK?
              BE   EXIT_TERMOK          ..yes.

```

```

*-----*
* The WLM MAS AGENT returned an 8 in WTRA_RESPONSE *
*-----*
WLM_CALLERR      DS  0H

*-----*
* Process completed successfully *
*-----*
EXIT_TERMOK      DS  0H

*-----*
* Route Abend Call returned a 0 *
*-----*
EXIT_ABD         DS  0H
EXIT             DS  0H
                EXEC CICS RETURN

*-----*
* LINK_WLM       : Link to the WLM MAS AGENT *
*-----*
LINK_WLM         DS  0H
                EXEC CICS LINK PROGRAM(EYU9XLOP) *
                COMMAREA(EYURWTRA) LENGTH(=AL2(WTRA_LENGTH)) *
                BR    R5                      Exit routine. *

*-----*
* START_UOW      : Start the Unit Work. *
*-----*
START_UOW        DS  0H
                EXEC CICS LINK PROGRAM(UOWPGM) *
                COMMAREA(WRK_UOWCOMM) LENGTH(=AL2(WRK_UOWCOMM_L)) *
                SYSID(WTRA_SYSID) *
                RESP(WRK_EIBRESP) *
                CLC   WRK_EIBRESP,DFHRESP(NORMAL) *
                Did call go ok? *
                BE    START_UOWL ..yes. *
                L     R15,=F'-4' Assume SYSIDERR *
                CLC   WRK_EIBRESP,DFHRESP(SYSIDERR) *
                Is there one? *
                BE    START_UOWX ..yes. *
                L     R15,=F'-8' Load Failure code. *
                B     START_UOWX Go exit. *
START_UOWL        DS  0H
                L     R15,WORK_UOW_RESP Load Response Code. *
START_UOWX        DS  0H
                BR    R5                      Exit routine. *

```

CICSplex SM を使用したワークロードの管理

CICSplex SM ワークロード管理 (WLM) 機能によって、パフォーマンスとワークロード・スループットを最適化するために処理要求を実行する場所を制御することができるようになります。WLM は、動的ルーティング によってこれを実現します。WLM は、CICSplex SM 動的ルーティング・プログラム EYU9XLOP を使用して、処理要求を、事前定義された一群のターゲット領域の中から最適なターゲット領域に経路指定します。

CICSplex SM ワークロード管理の概念と体系の概要については、を参照してください。

ワークロード・ルーティング

ワークロード・ルーティングとは、ターゲット領域の可用性、正常性、およびアクティビティー・レベルに従って、それらのターゲット領域グループ内でトランザクションまたはプログラムの方向付けをすることです。ワークロード分離に加えて、またはその代わりに、ワークロード・ルーティングを使用できます。

CICSplex SM は、各トランザクションの開始時に、パフォーマンスが最大になると考えられるターゲット領域を選択することにより、定義済みのターゲット領域グループ内でワークロードをルーティングすることができます。

ワークロード・ルーティングは統計に基づいて実施されます。CICSplex SM は、以下の 4 つのアルゴリズムの 1 つを使用して、作業を処理するターゲット領域を決定します。

- ゴール
- キュー
- リンクに依存しないゴール
- リンクに依存しないキュー

ルーティングされるトランザクションについてトランザクション親和性が顕著である場合、使用されるアルゴリズムとは無関係に、親和性ターゲット領域が選択されます。

ゴール・アルゴリズムとリンクに依存しないゴール・アルゴリズムでは、予期される応答時間を達成するターゲット領域の能力に基づいて、適切なターゲット領域が選択されます。キュー・アルゴリズムとリンクに依存しないキュー・アルゴリズムでは、ターゲット領域のセット全体にロードが分散されるように、適切なターゲット領域が選択されます。

ゴール・アルゴリズムまたはリンクに依存しないゴール・アルゴリズムが特定のターゲット領域を識別しない場合、残りのターゲット領域のセットにキュー・アルゴリズムまたはリンクに依存しないキュー・アルゴリズムがそれぞれ適用されます。

使用可能なすべてのターゲット領域の作業処理能力が同等な場合、ターゲット領域はそのターゲット領域グループからランダムに選択されます。そのため、ロードの軽いシステムでは、同等の能力を持つターゲット領域への作業割り振り順序は事前に決まっています。

キュー・アルゴリズムとゴール・アルゴリズムでは、ターゲット領域とそのルーティング領域間の接続のタイプが考慮されます。リンクは以下の順番の優先順位になるように、各タイプの接続に重み付け係数が割り振られます。

- ローカル
- MRO/IRC および MRO/XM (ローカル LPAR)
- MRO/XCF (リモート LPAR)
- IPIC (ローカル LPAR)
- IPIC (リモート LPAR)
- LU6.2
- 間接

CICSplex SM は、タスク・ロードに対する乗数としてのリンクの重み付け係数およびその他の係数を使用して、全体のルーティングの重みを決定します。計算が終了すると、重みの最も軽い領域がターゲット領域として選択されます。

例えば、他のすべての係数が等しいとすると、MRO/XCF を使用してその要求領域に接続されているターゲット領域が IPIC を使用して接続されているターゲット領域より優先されます。同じ LPAR 内のルーティング領域とターゲット領域間の IPIC 接続の重み付けは、異なる LPAR 内にあるターゲット領域への IPIC 接続の重み付けより低くなるため、他の係数が同じであれば、ローカル IPIC 接続はリモート IPIC 接続より優先されます。

ワークロード・ルーティングの制御レベル

ワークロード・ルーティングを使用するには、ワークロード仕様 (WLMSPEC) レベルでそのワークロードのデフォルトのルーティング・アルゴリズムを指定する必要があります。オプションにより、トランザクション・グループ (TRANGRP) レベルでルーティング・アルゴリズムを指定することができます。トランザクション・グループ内で指定されたアルゴリズムは、ワークロード仕様と関係付けられたデフォルトのアルゴリズムを指定変更します。

デフォルトのルーティング・アルゴリズムは、ワークロード内でルーティングされる各動的トランザクションに適用されます。ただし、ルーティング・アルゴリズムが指定されているトランザクション・グループと関連付けられているトランザクションは除きます。下記のルーティング・アルゴリズムから 1 つを指定できます。

- QUEUE
- LNQUEUE
- GOAL
- LINGOAL

ワークロード仕様レベルで指定されたルーティング・アルゴリズムを変更するには、ワークロードが新しいアルゴリズム仕様で最新表示されるように、ワークロードに参加するすべての領域を終了する必要があります。

トランザクション・グループ・レベルでは、ルーティング・アルゴリズムを動的に指定できます。指定された動的ルーティング・アルゴリズムは、トランザクション・グループと関連付けられたルーティングされるすべての動的トランザクションに適用されます。したがって、同じワークロード内の特定のトランザクション・コードに代わりのルーティング・アルゴリズムを適用できます。

トランザクション・グループ・レベルで代わりのルーティング・アルゴリズムを指定する場合、ご使用のルーティング領域を停止させることなく特定のターゲット領域のワークロード・ルーティング特性を動的に変更できます。インストールされているトランザクション・グループを変更する場合は、関連付けられている WLM 定義 (WLMDEF) を破棄してから再インストールする必要があります。それにより、WLM 定義によって指定されるトランザクション・グループも更新されます。関連付けられた WLMDEF を破棄したり再インストールしたりせずに、ルーティング・アルゴリズムを直ちに変更するには、「アクティブなワークロード・トランザクション・グループ (WLMATGRP)」ビューおよび **SET** コマンドを使用して、ALGTYPE 属性を変更することができます。

下記のルーティング・アルゴリズムから 1 つを指定できます。

- INHERIT
- QUEUE
- LNQUEUE
- GOAL
- LINGOAL

INHERIT は、トランザクション・グループがそのワークロードに対してワークロード仕様と関連付けられたルーティング・アルゴリズムを使用することを意味します。

リンクに依存しないワークロード・ルーティング

状況によっては、リンク重み付けはルーティング動作に重大な影響を及ぼす可能性があります。単一サイトのパラレル・シスプレックス環境でシステム境界を越えた CICS トランザクション・ルーティングを妨げる可能性があります。リンクの重み付けなしにワークロード・ルーティングを使用するには、リンクに依存しないゴール・アルゴリズムとリンクに依存しないキュー・アルゴリズムを使用できます。これらのアルゴリズムは、ルーティングとターゲット領域間の接続のタイプが考慮されない点を除き、それぞれゴール・アルゴリズムおよびキュー・アルゴリズムと同等です。

リンクに依存しないアルゴリズムは、動的トランザクション (例えば、MVS サブシステムからのサービスを必要とする可能性のある動的トランザクション) をルーティングするのに役立ちます。キュー・アルゴリズムとゴール・アルゴリズムでは、ルーターは、システム上で最も速いリンク (恐らく、同じ LPAR 上にある) を持つ動的トラフィックに焦点を合わせています。この動作は、ローカル MVS イメージにあるサブシステムに過負荷を加え、ワークロードに参加するリモート MVS イメージを十分に活用しない可能性があります。これらのトランザクションを、リンクに依存しないアルゴリズムを使用するトランザクション・グループに割り当てる場合、ルーティングされる動的トラフィックはローカル LPAR とリモート LPAR の間でさらに均等にルーティングされ、それらのサブシステムへの負荷は分散されます。

ただし、リンクに依存しないアルゴリズムでは、他の係数が等しい場合、すべてのターゲット領域が等しいプリファレンスを持つことを忘れないでください。最も遅い通信リンクに接続された最もリモートにあるターゲット領域は、ローカルに接続された MRO 領域や、ルーティング領域がルーティング・ターゲット・スコープの一部である場合にはルーティング領域自体と同じプリファレンスを持つ可能性があります。したがって、ワークロード仕様 (WLMSPEC) レベルでリンクに依存しないアルゴリズムを指定するかどうかは慎重に考慮してください。それが動的にルーティングされるすべてのトランザクションに影響を及ぼす可能性があるからです。その結果、ワークロード・マネージャーは、動的ルーティング・トラフィックに最善のターゲット領域を選択しない可能性があります。全体のワークロード・スループットが悪化する可能性があります。

特定のトランザクション集合に、リンクに依存しないアルゴリズムを必要とする場合は、それらのトランザクションを識別するワークロード管理トランザクション・グループ (TRANGRP) にそのアルゴリズムを割り当ててください。

キュー・ アルゴリズム

CICSplex SM がキュー・ アルゴリズムを使用するとき、ルーティングされるトランザクションにアクティブな親和性がない場合、ロードはターゲット領域の集合全体に分散されます。選択基準には、現行のタスク・ロード、正常性の状態、およびルーターとターゲット領域間の接続のタイプが含まれます。

ルーティングされるトランザクションにアクティブな親和性がない場合、キュー・ アルゴリズムを使用すると、CICSplex SM は以下の一連の基準に合致するターゲット領域を選択します。

- 領域は、ターゲット領域で許可されるタスクの最大数と比較して、処理を待機する作業キューが最短になる。この作業キュー（ロード・カウントとも呼ばれる）は、キューに入れられたすべてのアクティブ・ユーザー・タスクの数です。デフォルトでは、MAXTASKS および TRANCLASS 両方の属性に関してキューに入れられたタスクがロード・カウントに含まれます。CSYSDEF リソース・テーブルで「タスク・ロード・キュー・モード」属性を使用すると、TRANCLASS 属性に関してキューに入れられたタスクをサイトでロード・カウントから除外することができます。CSYSDEF リソース・テーブルの「タスク・ロード・キュー・モード」属性の詳細については、CICS システム定義 - CSYSDEF を参照してください。
- 領域は、ストレージ不足、SYSDUMP、および TRANDUMP などの条件の影響が一番小さい。
- 領域は、トランザクションが停止する可能性が一番低い。
- 領域は、領域間通信のパスが一番短い。
- 領域は、1 から 100 までの範囲の z/OS WLM ヘルス値を持っている。

キュー・ アルゴリズムでは、作業スループットが最大化され、CICSplex 全体の応答時間が標準化されます。このアルゴリズムは非常に堅固なものです。プロセッサ能力の違い、ターゲット領域の最大タスク値の違い、ターゲット領域の非対称な構成、および予測不能なワークロードに対応できます。

リンクに依存しないキュー・ アルゴリズム

リンクに依存しないキュー (LNQUEUE) アルゴリズムは、ルーティングとターゲット領域間の接続のタイプが考慮されない点を除き、キュー・ アルゴリズムと同等です。

ルーティングされるトランザクションにアクティブな親和性がない場合、リンクに依存しないキュー・ アルゴリズムを使用すると、CICSplex SM は以下の一連の基準に合致するターゲット領域を選択します。

- 領域は、ターゲット領域で許可されるタスクの最大数と比較して、処理を待機する作業キューが最短になる。この作業キュー（ロード・カウントとも呼ばれる）は、キューに入れられたすべてのアクティブ・ユーザー・タスクの数です。デフォルトでは、MAXTASKS および TRANCLASS 両方の属性に関してキューに入れられたタスクがロード・カウントに含まれます。CSYSDEF リソース・テーブルで「タスク・ロード・キュー・モード」属性を使用すると、TRANCLASS 属性に関してキューに入れられたタスクをサイトでロード・カウントから除外する

ことができます。CSYSDEF リソース・テーブルの「タスク・ロード・キュー・モード」属性の詳細については、CICS システム定義 - CSYSDEF を参照してください。

- 領域は、ストレージ不足、SYSDUMP、および TRANDUMP などの条件の影響が一番小さい。
- 領域は、トランザクションが停止する可能性が一番低い。
- 領域は、1 から 100 までの範囲の z/OS WLM ヘルス値を持っている。

リンクに依存しないキュー・アルゴリズムでは、CICSplex 全体で効率的な作業スループットと応答時間が得られます。キュー・アルゴリズムと同様に、このアルゴリズムでは、プロセッサ能力の違い、ターゲット領域の最大タスク値の違いに対応できます。ただし、このアルゴリズムでは、ルーターとターゲット間の通信リンク速度を考慮に入れません。キュー・アルゴリズムと比較して、このアルゴリズムはターゲット・スコープ全体でワークロードをより均等に分散 できるかもしれませんが、ワークロードはそれほど迅速に完了しません。

ゴール・アルゴリズム

ゴール・アルゴリズムは、動的ルーティングの決定が、主に応答時間ターゲットを達成する領域の機能に関連している時に使用される場合があります。

ゴール・モード・ルーティングは、以下のシナリオでルーターとターゲットが同じ CMAS によって管理されている場合にのみ使用します。

- 動的トランザクションのために DTRPGM を使用して動的ルーティングを実行する場合。
- APPC 接続または MRO 接続による EXEC CICS START TERMID のために DTRPGM を使用して動的ルーティングを実行する場合。
- ビジネス・トランザクション・サービス・ルーティングのために DSRTPGM を使用して分散ルーティングを実行する場合。

その他の動的ルーティング・シナリオでは、QUEUE アルゴリズムまたは LNQUEUE アルゴリズムを使用します。

ルーティングされるトランザクションにアクティブな親和性がない場合、ゴール・アルゴリズムを使用すると、CICSplex SM は以下の一連の基準に合致するターゲット領域を選択します。

- ストレージ不足、SYSDUMP、および TRANDUMP などの条件の影響が最も小さい。
- トランザクションを停止させる原因になる可能性が最も小さい。
- z/OS のワークロード・マネージャー・コンポーネントを使用してこのトランザクションに対して (およびこのクラスのその他のトランザクションに対して) 設定された、トランザクション応答時間の目標 (平均または百分位数のいずれか) を満たす可能性が最も高い。
- 領域間通信のパスが一番短い。
- MAXTASK と比較して、処理を待機するトランザクション・キューが最短となる AOR である。
- 1 から 100 までの範囲の z/OS WLM ヘルス値を持っている。

リンクに依存しないゴール・アルゴリズム

リンクに依存しないゴール (LNGOAL) アルゴリズムは、ルーティングとターゲット領域間の接続のタイプが考慮されない点を除き、ゴール・アルゴリズムと同等です。

ルーティングされるトランザクションにアクティブな親和性がない場合、リンクに依存しないゴール・アルゴリズムを使用すると、CICSplex SM は以下の一連の基準に合致するターゲット領域を選択します。

- ・ 領域は、ストレージ不足、SYSDUMP、および TRANDUMP などの条件の影響が一番小さい。
- ・ 領域は、トランザクションが停止する可能性が一番低い。
- ・ 領域は、z/OS のワークロード・マネージャー・コンポーネントを使用してこのトランザクションに対して (およびこのクラスのその他のトランザクションに対して) 設定された、トランザクション応答時間の目標 (平均または百分位数のいずれか) を満たす可能性が最も高い。
- ・ 領域は、MAXTASK と比較して、処理を待機するトランザクション・キューが最短となる AOR である。
- ・ 領域は、1 から 100 までの範囲の z/OS WLM ヘルス値を持っている。

CICSplex SM ワークロードのルーティングに対する z/OS WLM ヘルス・サービスの効果

CICS 領域で、z/OS ワークロード・マネージャー (z/OS WLM) のヘルス・サービスがアクティブな場合、CICSplex SM WLM は、ルーティングの決定において、その領域の z/OS WLM の正常性の状態を考慮します。

前提条件:

CICSplex SM WLM がターゲット領域の z/OS WLM の正常性の状態を考慮するためには、以下の条件が適用されます。

- ・ ルーティング領域とターゲット領域の両方が、少なくとも CICS TS V5.4 (CICS および CICSplex SM ライブラリー) でなければなりません。そうでない場合、z/OS WLM の正常性の状態は無視され、ターゲット領域は作業を受け取る準備ができていると見なされます。
- ・ z/OS WLM ヘルス・サービスが CICS 領域で有効になっている必要があります。これは、デフォルトで使用可能になっています。サービスが無効の場合にも、領域は作業を受け取る準備ができていると見なされます。このサービスをアクティブにするには、**WLMHEALTH** システム初期設定パラメーターを設定する必要があります。

CICS 領域の z/OS WLM の正常性の状態が CICSplex SM のルーティングの決定にどのように影響するか

領域の z/OS WLM の正常性の状態は、z/OS WLM ヘルス値によって 0 - 100 の範囲で反映されます。作業の経路指定先を決定する際に、CICSplex SM WLM は、ターゲット領域のヘルス値に基づいて、そのターゲット領域のルーティング・アルゴリズムでペナルティーの重みを割り当てる場合があります。

- ターゲット領域の z/OS WLM のヘルス値がゼロの場合、そのターゲット領域は作業を受け取るのに適格ではありません。CICSplex SM WLM は、その領域に作業を経路指定しません。この領域に関連付けられているワークロード親和性はそのまま残されて受け入れられます。ただし、ヘルス値がゼロであると、これらの親和性に基づくワークロード・ルーティングは失敗し、メッセージ EYUWR0003W または SYSIDERR 条件が生成されます。メッセージ EYUWR0003W は、EYU9WRAM プログラムが有効であり、親和性 AOR が使用不可であったことを示します。このようなルーティングの障害を解決するには、ヘルス値がゼロ以外になるように領域のウォームアップを開始してから、ワークロードを再実行します。CICS システム・ウォームアップの開始を参照してください。
- 1 から 99 の間のヘルス値を持つターゲット領域では、ルーティング・アルゴリズムでペナルティーの重みが割り当てられます。ヘルス値が高いほど、ペナルティーの重みは低くなります。このことは、ルーティングの決定では、より高いヘルス値を持つターゲット領域がより有利であることを意味します。同じスコープ内でより正常性の高い他の領域を使用できない場合には、高い値のペナルティーの重みが割り当てられている領域がアクティブのままであり、引き続き作業を受け取る可能性があることに注意してください。
- ターゲット領域のヘルス値が 100 の場合、ペナルティーの重みは割り当てられません。

CICS のウォームアップ・プロセスまたはクールダウン・プロセス中、CICS は、領域の z/OS WLM ヘルス値を調整します。その結果、CICSplex SM WLM のルーティングの決定に影響し、そのプロセス中の領域へのワークロードが制限されます。一般に、領域がウォームアップ中のときは、そのヘルス値は定期的に増加し、その領域は徐々により大きいワークロードを受け取るようになります。一方、領域がクールダウン中のときは、そのヘルス値は定期的に減少し、最終的にその領域がターゲットとして不適格になるまで、徐々により小さい作業を受け取るようになります。CICS のウォームアップまたはクールダウン中に行われることについて詳しくは、z/OS ワークロード・マネージャー正常性サービスの使用による CICS のウォームアップおよび冷却を参照してください。

領域をワークロード・ルーティングのターゲットとして不適格にする

CICSplex SM のルーティングの決定で、ワークロード・ルーティングのターゲットとして領域を意図的に不適格にすることができます。これを行うには、「MVS ワークロード管理」(MVSWLM) ビューでその領域の z/OS WLM ヘルスのオープン状況を CLOSE に設定します。これにより、最終的に領域の z/OS WLM ヘルス値が 0 になり、その領域が不適格になったことが示されるまで、その領域はターゲットとして徐々に不適切な状態になっていきます。また、z/OS WLM ヘルスのオープン状況を IMMCLOSE に設定することによって、領域の z/OS WLM ヘルス値を即時にゼロに変更できます。

ワークロード分離

ワークロード分離は、要求領域またはルーティング領域からの作業をターゲット領域セットに分散してルーティングしますが、ユーザー、端末、トランザクション自体、およびそれらの BTS プロセス・タイプの要件によって、どのターゲット領域セットが使用されるかに影響がある場合があります。

ターゲット領域の特定のグループへの特定のトランザクションまたはプログラムのルーティングは、ユーザー ID、端末 ID、およびトランザクション・グループのいずれかの組み合わせに基づいて行われます。BTS プロセスでは、ルーティングはトランザクション・グループとプロセス・タイプの組み合わせに基づいて行われます。エンタープライズ Bean に関連したトランザクションでは、ルーティングはトランザクション・グループに基づいて行われます。Link3270 ブリッジ要求では、端末 LU 名ごとの分離はいくつかの制限に従います。詳細については、Link3270 ブリッジ・ワークロードの分離を参照してください。

例えば、以下を指定できます。

- ユーザー ID の先頭文字が「PAY」であるユーザーによって開始されるすべてのトランザクションは、CICS システム・グループ AORPAY1 内のターゲット領域にルーティングされる必要があります。
- LU 名 の先頭文字が「NYORK」である端末から開始されるすべてのトランザクションは、CICS システム・グループ AORNYORK 内のターゲット領域にルーティングされる必要があります。
- トランザクション・グループ ACCOUNTS に属するすべてのトランザクションは、CICS システム・グループ AORACCNT 内のターゲット領域にルーティングされる必要があります。
- BTS プロセス・タイプ TRAVEL に関連付けられたすべてのプロセスは 1 つの BTS セットに含まれるターゲット領域にルーティングされ、BTS プロセス・タイプ PAYROLL に関連付けられたすべてのプロセスは別の BTS セットにルーティングされます。
- トランザクション・グループ STOCK に属するすべてのエンタープライズ Bean 関連のトランザクションは、ユーザー ID がワークロード定義内のユーザー ID に一致する場合は、CICS システム・グループ STOCKTG 内の任意のターゲット領域にルーティングされます。

ワークロード分離基準を満たすターゲット領域のグループから選択される領域は、197 ページの『ワークロード・ルーティング』で説明されているルーティング基準と同じ基準に基づいて決定されます。ルーティング決定時に適用されるアルゴリズムは、個別のワークロード分離レベルで指定することもでき、基本ワークロード・ルーティングによって使用されるデフォルトのアルゴリズムのままにしておくこともできます。

トランザクション間の類縁性

トランザクション間の親和性とは、指定した期間内に複数のトランザクションを同じターゲット領域で処理する必要がある場合の、トランザクション間の関係です。例えば、3 つの別個のトランザクションで構成される疑似会話があり、各トランザクションは一時記憶域キュー（分散モデルで共用される場合がある）を介してデータを順番に次のトランザクションに渡すかもしれません。そのとき、3 つすべてのトランザクションを同じターゲット領域で処理する必要があることを指定し、さらにこの親和性が疑似会話の期間中存続することを指定するかもしれません。

この親和性を CICSplex SM に定義しなかった場合、各トランザクションは別のターゲット領域にルーティングされて、結果として直前のトランザクションで残され

た一時記憶域データにアクセスできなくなる可能性があります。ターゲット領域自体は、指定したターゲット・スコープから CICSplex SM によって選択されます。

ワークロード管理および IBM CICS Interdependency Analyzer for z/OS は、BTS プロセスとアクティビティーの間の親和性を認識します。BTS 自体は親和性をもたらすわけではなく、親和性をもたらすプログラミング手法を抑制しますが、親和性をもたらす可能性のある既存コードの処理を行います。そのようなワークロード管理の親和性を定義して、目的にかなったルーティングを決定できるようにする必要があります。それぞれの親和性の存続期間を指定することが特に重要です。これに失敗すると、ワークロード管理のルーティング・オプションが不必要に制限される場合があります。

ワークロード管理および IBM CICS Interdependency Analyzer for z/OS は、端末に関係していないルーティング可能な EXEC CICS START コマンド間の親和性、またはユーザー ID と端末のいずれにも関連付けられていない DPL 間の親和性を認識しません。アプリケーションからすべての親和性を除去するか、アプリケーションがすべての親和性を必ず受け入れるかの、いずれかの手順を実行する必要があります。

EXEC CICS RETURN コマンドで **COMMAREA** を介してトランザクション間でデータが渡される場合にはそのような親和性は存在しない点に注意してください。**COMMAREA** は要求領域に戻されるため、次のトランザクションを順番に処理するために選択されたターゲットに渡すことができます。

トランザクション間の親和性が受け入れられる方法

関連するトランザクションのグループからの最初のトランザクションが開始される時、CICSplex SM は、指定したターゲット・スコープから該当する領域を選択します。

ターゲット・スコープに複数の適切な領域がある場合、CICSplex SM は現行のワークロード・ルーティング・アルゴリズムを使用して 1 つを選択します。同じグループ内の、親和性基準を満たす後続のトランザクションは、最初のトランザクションと同じ領域に送信されます。後続のトランザクションが親和性基準を満たさない場合 (例えば、同じ疑似会話が別のユーザー ID から開始された場合など)、適切な領域に関する選択プロセスが再度開始します。

CICSplex SM ワークロード管理によるワークロードの管理

CICSplex SM ワークロード管理では、エンタープライズ・システムのプロセッサ能力を最適化します。このためにワークロード管理では、トランザクションおよびプログラムをその時点で最も適切な CICS 領域に動的に経路指定します。その際、存在しているトランザクションの親和性が考慮されます。

ワークロード管理の要件を確認したら、Configuring workload managementの説明のように CICSplex SM に対してそれらを定義してください。

WLM の計画

このセクションでは、企業において CICSplex SM ワークロード管理をどの程度使用できるかを決定する上で役立つ説明を記載します。

ワークロード・ルーティングかワークロード分離かの選択:

ワークロード・ルーティングを使用すると、使用可能な CICS システムを最大限活用でき、スループットを向上し、パフォーマンスを改善することができるため、可能な限りワークロード・ルーティングを使用してください。ワークロード分離 (プロセス・タイプ別、ユーザー別、端末別、トランザクション別) は、CICSplex SM ワークロード・ルーティング機能を最大限に活用する際の妨げとなるため、どうしても必要である場合のみ実施してください。

複数の CICSplex を定義し、例えば異なるユーザー・グループによる CICS システムの使用を反映するように分割した場合、CICSplex 内でワークロード分離ではなく、単純なワークロード・ルーティングを使用できる可能性があります。例えば、2 つの CICSplex を定義することにより、グループ A によって使用される CICS システムとグループ B によって使用される CICS システムを分離した場合、各 CICSplex 内でワークロード・ルーティングを実施できます。このようなアプローチを取らなかった場合、ワークロード分離を実施することによってそのようなグループを認識することが必要であると考えられるかもしれません。

ワークロードの識別:

WLM の計画を立てるには、企業内で処理されるワークロードを識別することから開始します。ワークロードは、基礎の TOR-AOR-FOR 構成で確実に明らかになります。識別されたワークロードが、CICS システムの現行の CICSplex SM 構成でサポートされることを確認します。

特に以下の点に注意してください。

- 単一のワークロードにおけるルーティング領域およびターゲット領域は、同じ CICSplex に存在する必要があります。つまり、提供された動的ルーティング・プログラムは、CICSplex の境界を越えてトランザクションをルーティングすることはできません。(提供された動的ルーティング・プログラムをカスタマイズすることにより、CICSplex の外側にトランザクションをルーティングすることは可能です。提供された動的ルーティング・プログラムのカスタマイズについては、動的ルーティングの変更に説明されています。)
- ルーティング領域には以下を選択する必要があります。
 - CICS TS 領域。
 - ローカル MAS。つまりルーティング領域は、CMAS が存在しない MVS イメージ上では実行できません。
 - 1 つのワークロードのみ。つまりルーティング領域は、1 つの時点において 1 つのアクティブ・ワークロード仕様としか関連付けができません。
- ターゲット領域には以下を選択できます。
 - ローカル MAS。
 - 複数のワークロード内。
 - CICSplex SM によって管理される任意の CICS システム。

トランザクション間の親和性の識別:

トランザクション間の親和性 (関連したトランザクションを同じターゲット領域で処理する必要がある) があると、最適なワークロード分散が妨げられます。一般的

にこの親和性が使用される理由は、1 つのトランザクションが別のトランザクションにデータを渡す方法のため、または 2 つ以上のトランザクションの処理を調整する要件のためのいずれかの理由です。親和性の識別は常に容易にできるわけではありませんが、いくつかの方式を使用できます。

例えば、アプリケーション設計文書またはソース・コードを検討できます。CICS トレースを実行できます。あるいは IBM CICS Interdependency Analyzer for z/OS を使用できます。

ワークロードに含まれる親和性を識別したら、それらを除去するためのあらゆる努力をする必要があります。それらを完全には除去できない場合は、親和性の期間を測定し、それを最小化するようにしてください。トランザクション間の親和性が次の期間存続するように CICSplex SM に対して定義できます。

- ユーザーのセッションがアクティブである間
- 端末セッションの期間
- ターゲット領域がアクティブ状態になっている間
- ワークロードがアクティブである間
- 疑似会話の期間
- BTS アクティビティーがアクティブである間
- BTS プロセスがアクティブである間

CICSplex SM がアクティブな親和性を受け入れるようにしてください。親和性がアクティブであってもターゲット領域が使用不可になると、トランザクションはルーティングされません。BTS トランザクションの場合、BTS は領域が開始されるまで待機します。

WLM の実施

CICSplex SM ワークロード管理機能を使用するために何を行う必要があるかは、ワークロード・ルーティングのみを実施するか、それともワークロード分離も実施した上で同じ CICSplex に 1 つ以上のトランザクション親和性を定義する可能性があるかによって異なります。

以下のプロセスに従って作業すると、最良の結果が得られます。

1. 動的ルーティングの候補を識別する。
2. CICSplex の中で、動的ルーティングが可能なワークロードごとにワークロード・ルーティングを実施する。
3. 必要なワークロード分離要件を追加する。
4. トランザクション間の親和性を定義する。

動的ルーティングの候補の識別:

作業要求のすべてが動的ルーティングの候補になるわけではありません。

作業要求が適格となるために適用する必要がある条件は、動的ルーティングにリストされています。

詳細については、以下を参照してください。

- EXEC CICS LINK コマンドおよび EXEC CICS START コマンド。

- EXEC CICS RUN ASYNCHRONOUS コマンド。
- CICS および CICSplex SM リソースについての情報は、CICS リソースおよび Administering BASを参照してください。
- Java™ に関する詳細は、JVM サーバーへのアプリケーションのデプロイを参照してください。
- Link3270 ブリッジに関する詳細は、CICS 外部インターフェースの概要を参照してください。

ワークロード・ルーティングの実施:

ターゲット領域グループのワークロード・ルーティングを実施するには、ルーティング領域またはルーティング・システム・グループをワークロード仕様に関連付ける必要があります。オプションにより、ワークロード内の指定されたトランザクション・グループに代わりのルーティングを適用できます。

このタスクについて

ワークロード・ルーティングを使用するには、ワークロード仕様 (WLMSPEC オブジェクト) でルーティング特性を指定します。これらの特性は、ワークロード内のすべてのトランザクションに適用されます。

ただし、1 つ以上のトランザクションに適用される特殊ルーティング評価を指定する、関連付けられた WLM 定義とトランザクション・グループ定義 (WLMDEF オブジェクトと TRANGRP オブジェクト) のペアを提供することによりこれらのルーティングの特性をオーバーライドできます。ワークロード・ルーティングでは、トランザクション・グループ定義に異なるルーティング・アルゴリズムを指定します。トランザクション・グループ・レベルで代わりのルーティング・アルゴリズムを指定する場合、ルーティング領域を停止させることなくワークロード・ルーティング特性を動的に変更できます。

手順

1. 単一のワークロードに複数のルーティング領域がある場合、CICS システム・グループ (CSYSGRP) オブジェクトを使用して、それらのルーティング領域の CICS システム・グループを作成します。
2. ルーティング領域がトランザクションのルーティング先として指定できるターゲット領域の CICS システム・グループを (この場合も CSYSGRP を使用して) 作成します。このグループには、CICSplex 内のすべての CICS システムを含めることもできます。
3. ワークロード管理仕様 (WLMSPEC) オブジェクトを使用して、CICSplex のワークロードごとにワークロード仕様を 1 つずつ作成します。ワークロード仕様では、次のようになっています。
 - a. ターゲット・システム・グループの名前をターゲット・スコープ値として指定します。
 - b. ワークロード・ルーティングにどのルーティング・アルゴリズムを使用するか特定します。以下のいずれかのアルゴリズムを使用できます。
 - QUEUE
 - LNQUEUE

- GOAL
- LINGOAL

4. ルーティング領域、またはルーティング・システム・グループを、ワークロード仕様に関連付けます。単一の CICSplex に複数のワークロードを配置できますが、1 つのルーティング領域または 1 つのルーティング領域グループは、一度に 1 つのアクティブ・ワークロード仕様にしか属することができません。
5. オプション: トランザクション・グループ定義に異なるルーティング・アルゴリズムを指定することで、ワークロード内の特定のトランザクションのルーティング・アルゴリズムをオーバーライドします。トランザクション・グループの作成を参照してください。

インストールされているトランザクション・グループを変更する場合は、関連付けられている WLM 定義 (WLMDEF) を破棄してから再インストールする必要があります。それにより、WLM 定義によって指定されるトランザクション・グループも更新されます。関連付けられた WLMDEF を破棄したり再インストールしたりせずに、ルーティング・アルゴリズムを直ちに変更するには、「アクティブなワークロード・トランザクション・グループ (WLMATGRP)」ビューおよび **SET** コマンドを使用して、ALGTYPE 属性を変更することができます。

ワークロード分離要件の追加:

同じワークロード内で、ユーザー ID、端末 ID、およびトランザクション・グループの組み合わせ、またはプロセス・タイプとトランザクション・グループの組み合わせのいずれかによってワークロード分離を実施する場合、以下を行います。

1. ターゲット領域セットごとに、「システム・グループ定義 (**System group definitions**)」ビュー (CSYSGRP オブジェクト) を使用して CICS システム・グループを作成します。例えば次の状況を考えます。
 - 端末 NETA* からユーザー ABC* によって開始されたトランザクションをターゲット領域 2 から 7 にルーティングする必要があります。

かつ

- 任意の端末からユーザー HIJ* によって開始されたトランザクションをターゲット領域 5 から 9 にルーティングする必要があります。

この場合、2 つのターゲット・システム・グループを定義する必要があります。1 つのグループにはターゲット領域 2 から 7 が入り、1 つのグループにはターゲット領域 5 から 9 が入ります。

2. トランザクションによるワークロード分離を実施する場合には、「トランザクション・グループ (**Transaction groups**)」ビュー (TRANGRP オブジェクト) を使用してトランザクション・グループを定義します。例えば、トランザクション EFG1、EFG2、および EFG3 を特定のターゲット領域グループにルーティングする必要がある場合、それらのトランザクションが含まれるトランザクション・グループを定義する必要があります。
3. ユーザー、端末、およびトランザクション・グループの組み合わせごとに、「ワークロード定義 (**Workload definitions**)」ビュー (WLMDEF オブジェクト) を使用して 1 つのワークロード定義を作成します。例えば、項目 1 (前述) では次のようにします。

- 任意のトランザクション、ユーザー ABC*、および端末 NETA* の組み合わせにおいて、1 つのワークロード定義が必要になります。
- 任意のトランザクション、ユーザー HIJ*、および任意の端末の組み合わせにおいて、1 つのワークロード定義が必要になります。

項目 2 (209 ページ)で説明されている、トランザクションによるワークロード分離をサポートするために、3 番目のワークロード定義が必要になります。各ワークロード定義に、適格となるトランザクションがルーティングされる適切なターゲット領域のシステム・グループの名前を含めます。

4. ワークロードの最初の要求領域が開始されるときにワークロード定義が自動的にインストールされる場合、「ワークロード・グループ (**Workload groups**)」ビュー (WLMGROUP オブジェクト) を使用して以下を行う必要があります。
 - a. ワークロード・グループを作成する。
 - b. ワークロード定義をワークロード・グループに追加する。
 - c. ワークロード・グループをワークロード仕様に関連付ける。

通常、ワークロード分離が正規の一貫した要件であるため、ワークロード定義の自動インストールが必要であると考えられます。ただし、すぐに効果を得るため、ワークロード・グループまたは個々のワークロード定義を手動でインストールすることもできます。

トランザクション間の親和性の定義:

同じ ターゲット領域によって処理されるワークロードに、複数のトランザクションに対する 1 つの要件がある場合、以下を行います。

1. 親和性を共用するワークロード内の一連のトランザクションごとに、「トランザクション・グループ (**Transaction groups**)」ビュー (TRANGRP オブジェクト) を使用してトランザクション・グループを作成します。例えば、トランザクション MNO1、MNO2、および MNO3 を同じターゲット領域で処理する必要がある場合 (それらが順番に実行され、次のトランザクションのためのデータが残るためなどの理由で)、親和性タイプとその期間を指定することにより、トランザクション・グループにこれら 3 つのトランザクションが含まれることを定義します。
2. ワークロード分離を実施する場合、トランザクション・グループごと、およびユーザーまたは端末のパターンごとに、「ワークロード定義 (**Workload definitions**)」ビュー (WLMDEF オブジェクト) を使用して、ワークロード定義を作成します。例えば、項目 1 (前述) で説明されているトランザクション間の親和性が端末 NYORK* からの任意のユーザーに適用される場合、ワークロード定義にはその情報を含める必要があります。加えて、ワークロード定義は、CICSplex SM がそれを選択できるターゲット領域セットを指定します。これは、CICSplex 内の各ターゲット領域、またはターゲット領域のいくつかのサブセットにできます。

トランザクション間の親和性は、ワークロード分離と一緒に実施しなくても CICSplex SM に定義できる点に注意してください。この場合、ワークロード定義は必要なく、CICSplex SM はグループ内の最初のトランザクションを、ワークロード仕様で指定されるセット内の適切なターゲット領域にルーティングしま

す。トランザクション・グループ内の後続のトランザクションは、親和性がアクティブである間と同じターゲット領域にルーティングされます。

3. ワークロードの最初のルーティング領域が開始されるときにワークロード定義が自動的にインストールされる場合、「ワークロード・グループ (**Workload groups**)」ビュー (WLMGROUP オブジェクト) を使用して以下を行う必要があります。
 - a. ワークロード・グループを作成する。
 - b. ワークロード定義をワークロード・グループに追加する。
 - c. ワークロード・グループをワークロード仕様に関連付ける。

すぐに効果を得るため、ワークロード・グループまたは個々のワークロード定義を手動でインストールすることもできます。

注: グループ単位でルーティング領域とターゲット領域を定義することは重要です。これにより、これらのグループの構成に変更を加えると、CICSplex SM のワークロード管理に自動的に反映されます。

推奨されている方法:

「マップ (**Map**)」ボタンをクリックすると、データ・リポジトリに含まれる WLM 定義の視覚マップを表示できます。企業システムで WLM 機能を実施することを決定した場合、初めに適切なオブジェクトを定義する必要があります。

以下を実行する必要があります。

- 「**WLM 定義 (WLM definitions)**」ビューを使用し、ワークロード定義 (WLMDEF オブジェクト) を作成します。
- 「**WLM グループ (WLM groups)**」ビューを使用し、ワークロード・グループ (WLMGROUP オブジェクト) を作成します。
- 「**WLM 仕様 (WLM specifications)**」ビューを使用し、ワークロード仕様 (WLMSPEC オブジェクト) を作成します。

その後、これらのオブジェクト間の関連を作成するには以下のようにします。

- 「**WLM 定義 (WLM definitions)**」ビューを使用し、ワークロード定義をワークロード・グループ (WLMINGRP オブジェクト) に追加します。
- 「**ワークロード・グループ (Workload groups)**」ビューを使用し、ワークロード・グループをワークロード仕様 (WLMINSPEC オブジェクト) に追加します。
- 「**ワークロード仕様 (Workload specifications)**」ビューを使用し、ワークロード仕様を CICS システム (LNKSWSCS オブジェクト) または CICS システム・グループ (LNKSWSCG オブジェクト) に関連付けます。LNKSXSCG パラメーターについて詳しくは、LNKSXSCG Records (LNKSMSCG, LNKSRSRG, LNKSWSRG) を参照してください。

既に定義したオブジェクトおよび関連のリストを表示する場合、以下のいずれかのビューを使用します。

- 「**グループ内のワークロード定義 (Workload definitions in groups)**」ビュー (WLMINGRP オブジェクト)
- 「**ワークロード仕様内のワークロード・グループ (Workload groups in workload specifications)**」ビュー (WLMINSPEC オブジェクト)

- ・ 「WLM 仕様と CICS システムとの間のリンク (WLM specifications to CICS system links)」ビュー (LNKSWSCS オブジェクト)
- ・ 「WLM 仕様と CICS システム・グループとの間のリンク (WLM specifications to CICS system group links)」ビュー (LNKSWSCG オブジェクト)

ワークロード管理リソース

ワークロード環境をセットアップおよび管理するには、ワークロード管理 WUI ビュー・セットおよびリソース・オブジェクトを使用します。

WLM 構成要素の図については、CICSplex SM WLM のコンポーネントを参照してください。

表 11. ワークロードを管理するための WUI ビュー・セットおよびリソース・オブジェクト

WUI ビュー・セット	オブジェクト名	説明
トランザクション・グループ内のトランザクション	DTRINGRP	このオブジェクトには、1 つ以上のトランザクション・グループに関連したトランザクションに関する情報が表示されます。
WLM 仕様とシステム・グループとの間のリンク	LNKSWSCG	ワークロード仕様に関連付けられた CICS システム・グループ
WLM 仕様と CICS システムとの間のリンク (WLM specifications to CICS system links)	LNKSWSCS	ワークロード仕様に関連付けられた CICS システム
トランザクション・グループ (Transaction groups)	TRANGRP	トランザクション・グループは、論理的に類似したトランザクションを関連付けたものです。類似性は、親和性の要件、共通共用処理の要件、またはその他のユーザー定義の特性に基づいて判断される場合があります。トランザクション・グループはワークロード定義の一部として組み込まれ、次にワークロード定義はターゲット領域として使用される CICS システム・グループを定義します。具体的にトランザクション・グループに関連付けられていないトランザクションは、デフォルトのトランザクション・グループに割り当てられます。
アクティブ・ワークロードのトランザクション・グループの親和性	WLMATAFF	このオブジェクトは、コンテキストとして識別される CICSplex 内のワークロードに関連したトランザクション・グループのアクティブな親和性に関する情報を示します。トランザクション・グループに関連した最初のトランザクションが動的にターゲット領域にルーティングされる際に、親和性がアクティブになります。
アクティブ・ワークロードのトランザクション・グループ	WLMATGRP	このオブジェクトは、コンテキストとして識別される CICSplex 内のワークロードに関連したトランザクション・グループに関する情報を示します。
アクティブ・ワークロードの動的トランザクション	WLMATRAN	このオブジェクトは、コンテキストとして識別される CICSplex 内のワークロードに関連したすべてのアクティブ・トランザクションに関する情報を示します。

表 11. ワークロードを管理するための WUI ビュー・セットおよびリソース・オブジェクト (続き)

WUI ビュー・セット	オブジェクト名	説明
アクティブ・ワークロード 内のターゲット領域	WLMAWAOR	このオブジェクトは、コンテキストとして識別される CICSplex 内のワークロードに関連したすべてのターゲット領域に関する情報を示します。
アクティブ・ワークロード 定義	WLMAWDEF	このオブジェクトは、コンテキストとして識別される CICSplex 内のワークロードに関連したアクティブ・ワークロード定義に関する情報を示します。
アクティブ・ワークロード	WLMAWORK	このオブジェクトは、コンテキストとして識別される CICSplex 内のアクティブ・ワークロードに関する情報を示します。ワークロードは、以下の条件に該当する限り、CICSplex 内でアクティブです。 <ul style="list-style-type: none"> ルーティング領域またはターゲット領域として作動していて、ワークロードに関与している CICS システムは、その CICSplex に接続されます。 すべてのトランザクションは、PERMANENT のアフィニティー存続時間を確立します。
アクティブ・ワークロード 内のルーティング領域 (Routing regions in an active workload)	WLMAWTOR	このオブジェクトは、コンテキストとして識別される CICSplex 内のワークロードに関連したルーティング領域に関する情報を示します。
ワークロード定義 (Workload definitions)	WLMDEF	このオブジェクトは、どのトランザクションがどの CICS システム・グループにルーティングされるかを指定します。トランザクションは、トランザクション・グループごとに指定し、そのグループ内では LU 名とユーザー ID によって、またはプロセス・タイプによって指定します。
ワークロード・グループ (Workload groups)	WLMGROUP	このオブジェクトは、1 つ以上のワークロード定義に関連付けるために使用されます。
グループ内のワークロード 定義 (Workload definitions in groups)	WLMINGRP	このオブジェクトは、ワークロード・グループの名前と、それらに関連付けられたワークロード定義を表示します。
ワークロード仕様内のワー クロード・グループ (Workload groups in workload specifications)	WLMINSPC	このオブジェクトは、ワークロード仕様の名前と、それらに関連付けられたワークロード・グループを表示します。
ワークロード仕様 (Workload specifications)	WLMSPEC	ワークロード仕様は、1 つのワークロードと、ターゲット領域として作動する 1 つ以上の CICS システム・グループを指定します。さらにデフォルトのトランザクション・グループの属性も定義します。

ワークロード管理定義および関連ビュー

Web ユーザー・インターフェース (WUI) ワークロード・マネージャーの管理ビューを使用して、さまざまなワークロード管理属性を定義します。

215 ページの図 19 は、CICSplex SM オブジェクト・モデルの観点からワークロード管理ビューの概要を示しています。これらのビューに加え、アクティブ・ワー

クロードに関する情報を表示したり、アクティブ・ワークロードを管理したりするためのビューを使用できます。また、「MAP」ボタンを使用することによって、ワークロード管理定義のビジュアル・マップを表示することもできます。

216 ページの図 20 は、CICSplex 内のワークロードのコンポーネントと、ワークロードを確立するために使用されるビューとの関係を示しています。

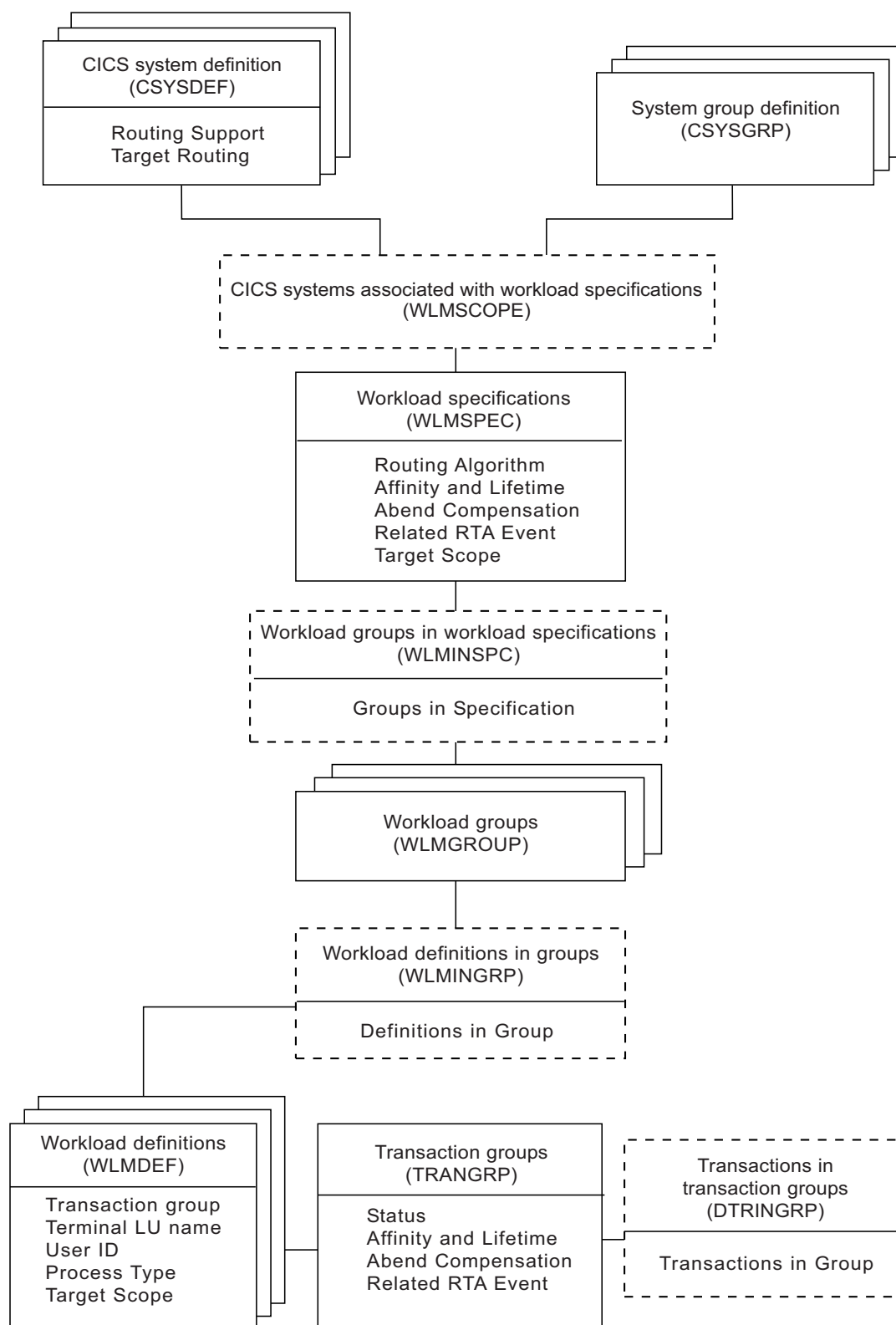


図 19. ワークロード管理オブジェクトと関連付けを作成するためのビュー

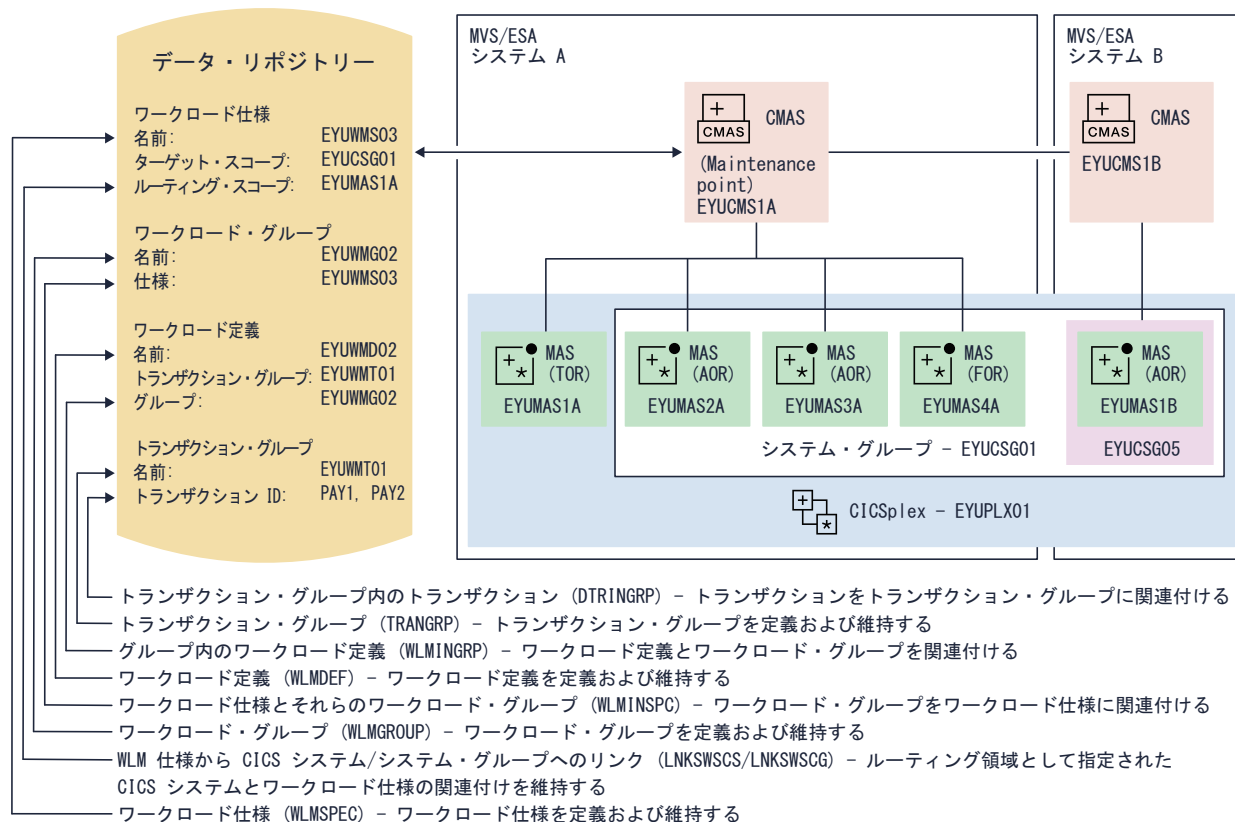


図 20. ワークロードとワークロード管理ビューとの関係

表 12 は、ワークロード管理定義の作成に使用できるビューを示しています。また、表示できる情報やこれらのビューを使用して実行できるアクションも示しています。Web ユーザー・インターフェースでこれらのビューにアクセスするには、メインメニューから「管理ビュー」 > 「ワークロード・マネージャー管理ビュー」をクリックします。これらのビューの詳細については、CPSM 管理ビューを参照してください。

表 12. ワークロード管理定義を作成および保守するためのビュー

WUI ビュー	オブジェクト名	サポートされるタスク
トランザクション・グループ内のトランザクション	DTRINGRP	<ul style="list-style-type: none"> • 現行コンテキスト内のすべてのトランザクション・グループを表示します。 • トランザクション・グループからトランザクションを除去します。 • 指定されたトランザクション・グループを開始点として使用してワークロード定義のマップを表示します。
ワークロード仕様に关联付けられた CICS システム・グループ	LNKSWSCG	<ul style="list-style-type: none"> • ワークロード仕様と CICS システム・グループとの間の関連を表示、作成、または削除します。

表 12. ワークロード管理定義を作成および保守するためのビュー (続き)

WUI ビュー	オブジェクト名	サポートされるタスク
ワークロード仕様に関連付けられた CICS システム	LNKSWSCS	<ul style="list-style-type: none"> ワークロード仕様と CICS システムとの間のリンクを表示、作成、更新、または削除します。 指定された定義を開始点として使用してワークロード定義のマップを表示します。
トランザクション・グループ (Transaction groups)	TRANGRP	<ul style="list-style-type: none"> トランザクション・グループを表示、作成、更新、または削除します。 トランザクションをトランザクション・グループに追加します。 インストール 指定されたトランザクション・グループを開始点として使用してワークロード定義のマップを表示します。
ワークロード定義 (Workload definitions)	WLMDEF	<ul style="list-style-type: none"> ワークロード定義を作成、変更、または除去します。 ワークロード定義とワークロード・グループとの間の関連を追加します。 ワークロード定義をワークロードにインストールします。
ワークロード・グループ (Workload groups)	WLMGROUP	<ul style="list-style-type: none"> ワークロード・グループを表示、作成、更新、または除去します。 ワークロード・グループとワークロード仕様との間の関連を追加します。 ワークロード・グループに関連付けられたワークロード定義をワークロードにインストールします。 指定されたワークロード・グループを開始点として使用してワークロード定義のマップを表示します。
グループ内のワークロード定義 (Workload definitions in groups)	WLMINGRP	<ul style="list-style-type: none"> ワークロード定義とワークロード・グループとの間の関連を追加または削除します。

表 12. ワークロード管理定義を作成および保守するためのビュー (続き)

WUI ビュー	オブジェクト名	サポートされるタスク
ワークロード仕様 (Workload specifications)	WLMSPEC	<ul style="list-style-type: none"> ワークロード仕様を表示、作成、更新、または除去します。 ワークロード仕様と CICS システムの間の関連を追加します。 ワークロード仕様と CICS システム・グループの間の関連を追加します。 指定されたワークロード仕様を開始点として使用してワークロード定義のマップを表示します。
ワークロード仕様内のワークロード・グループ (Workload groups in workload specifications)	WLMINSPC	<ul style="list-style-type: none"> ワークロード・グループとワークロード仕様との間の関連付けを削除します。 指定された定義を開始点として使用してワークロード定義のマップを表示します。

表 13 は、アクティブ・ワークロードの管理に使用できるビューを示しています。また、表示できる情報やこれらのビューを使用して実行できるアクションも示しています。Web ユーザー・インターフェースでこれらのビューにアクセスするには、メインメニューから「アクティブ・ワークロード・ビュー」をクリックします。

表 13. アクティブ・ワークロードを管理するためのビュー

WUI ビュー	オブジェクト名	サポートされるタスク
アクティブ・ワークロード	WLMAWORK	<ul style="list-style-type: none"> 現行コンテキスト内のアクティブ・ワークロードを表示します。
アクティブ・ワークロード内のルーティング領域 (Routing regions in an active workload)	WLMAWTOR	<ul style="list-style-type: none"> ワークロードに関連付けられたアクティブ・ルーティング領域を表示します。
アクティブ・ワークロード内のターゲット領域	WLMAWAOR	<ul style="list-style-type: none"> ワークロードに関連付けられたターゲット領域を表示します。 アクティブ・ワークロードに関連付けられたターゲット領域をアクティブにします。 アクティブ・ワークロードに関連付けられたターゲット領域を静止します。
アクティブ・ワークロード定義	WLMAWDEF	<ul style="list-style-type: none"> ワークロードに関連付けられたアクティブ・ワークロード定義を表示します。 アクティブなワークロード定義を破棄します。

表 13. アクティブ・ワークロードを管理するためのビュー (続き)

WUI ビュー	オブジェクト名	サポートされるタスク
アクティブ・ワークロードのトランザクション・グループ	WLMATGRP	<ul style="list-style-type: none"> ワークロードに関連付けられたアクティブ・トランザクション・グループを表示します。 トランザクション・グループの状況をアクティブに変更します。 アクティブ・トランザクション・グループの状況を休止に変更します。
アクティブ・ワークロードの動的トランザクション	WLMATRAN	<ul style="list-style-type: none"> ワークロードに関連付けられたアクティブ・トランザクションを表示します。 トランザクション・グループからトランザクションを破棄します。
アクティブ・ワークロードのトランザクション・グループの親和性	WLMATAFF	<ul style="list-style-type: none"> ワークロードに関連付けられたトランザクション・グループのアクティブな親和性を表示します。 親和性エンティティを破棄します。

ワークロード管理定義の作成

このセクションでは、WUI または CICS Explorer を使用してワークロード管理定義を作成および管理する手順について説明します。特に断りのない限り、ワークロード管理定義を作成および保守している時に認識されるのはコンテキストのみです。

ワークロード仕様の作成

WLM 仕様は、1 つのワークロードと、ターゲット領域として作動する 1 つ以上の CICS システムを指定します。この仕様は、デフォルト・トランザクション・グループの属性も定義します。「ワークロード仕様」ビューを使用してワークロード仕様を作成できます。

このタスクについて

CICSplex SM WUI または CICS Explorer を使用して、ワークロード仕様を作成し、データ・リポジトリに追加します。

CICS Explorer ユーザーの場合:

CICS Explorer 製品資料内の『ワークロード仕様の作成』の手順に従ってください。

CICSplex SM WUI ユーザーの場合:

手順

1. WUI メインメニューから「管理ビュー」 > 「ワークロード・マネージャー管理ビュー」 > 「仕様」をクリックして、「**WLM** 仕様」の表形式ビューを開きます。

このビューに、既存のワークロード仕様のリストが表示されます。このビューにはアクション・ボタンがあり、それらを使用して、ワークロード仕様を作成、更新、および削除し、CICS システムおよび CICS システム・グループをワークロード仕様に関連付けることができます。

2. オプション: 新しい定義を作成する時に、既存の定義の情報をいくつか使用するには、「レコード」列内の隣接するチェック・ボックスを選択して既存の定義を選択します。
3. 「作成 (**Create**)」をクリックします。
4. 各フィールドに入力し、「はい」をクリックして新しい仕様を作成します。それ以外の場合は、「いいえ」をクリックして処理を中止します。

「ワークロード仕様」ビューが再表示され、新規定義の項目が現れます。

ワークロード仕様への、**CICS** システムまたはシステム・グループの関連付け:

各ワークロード仕様には、デフォルトのターゲット・スコープがあり、1 つ以上の CICS システムまたは CICS システム・グループが関連付けられます。

これらの関連付けられた CICS システムまたはシステム・グループは、ルーティング・スコープと呼ばれます。デフォルト・ターゲット・スコープは、仕様を作成する際に識別されます。関連付けられた CICS システムおよびシステム・グループは、ルーティング領域を仕様に追加する際に識別されます。

CICS システム・グループを既存のワークロード仕様に関連付けるには、以下の手順に従ってください。

1. 「管理ビュー」 > 「ワークロード・マネージャー管理ビュー」 > 「仕様」をクリックして、「**WLM** 仕様」ビューを開きます。

このビューに既存のワークロード仕様のリストが表示されます。

2. ワークロード仕様を選択し、「**CICS** グループの関連付け...
3. 「**CICS** システム・グループ」フィールドに、1 つ以上のルーティング領域を表す既存の CICS システム・グループの固有名または総称名を入力します。

注: ルーティング領域として機能している CICS システムまたは CICS システム・グループは、一度に 1 つのワークロード仕様にしか関連付けることができません。ただし、仕様は、任意の数の CICS システムおよび CICS システム・グループに関連付けることができます。

4. 以下のいずれかのオプションを選択して、CICS システム・グループを形成する CICS システムが、CICS システム・グループに関連付けられているワークロード仕様をどのように使用するかを示します。

FORCE

CICS システム・グループに現在関連付けられているすべての CICS システムが、このワークロード仕様を使用します。(それぞれの CICS システムのワークロード仕様属性は INHERIT に変更されます。

INHERIT は、この仕様が CICS システム・グループから獲得されたものであることを示しています)。新しい CICS システムを CICS システム・グループに追加した場合、そのシステムは、自動的に FORCE オプ

ションを継承しません。CICS システムを CICS システム・グループに追加する際に NULL または FORCE を指定する必要があります。

NULL

ワークロード仕様に関連付けられていない、CICS システム・グループ内の CICS システムは、このワークロード仕様を使用します。(これらの CICS システムのワークロード仕様属性は INHERIT に変更されます。これは、この仕様が CICS システム・グループから獲得されたものであることを示しています。)

なし CICS システム・グループのみがワークロード仕様に関連付けられます。CICS システム・グループ内の CICS システムは影響を受けません。つまり、CICS システムにモニター仕様が関連付けられている場合、何も設定されません。明示的に設定されたものであれば、別の CICS システム・グループから継承されたものであれば、ワークロード仕様がシステムに関連付けられている場合、その関連付けは変更されません。

注:

- a. CICS システム・グループに他の CICS システム・グループが含まれる場合、従属 CICS システム・グループにあるものを含むすべての CICS システムが、このフィールドで指定した値の影響を受けます。
 - b. ワークロード仕様の作成時にデフォルト・ターゲット・スコープとして指定された CICS システムは、ルーティング・スコープとして識別される CICS システムからアクセス可能でなければなりません。したがって、それぞれのルーティング領域と、ここで識別されるターゲット・スコープ内のすべての CICS システムとの間に、適切な CICS 接続が存在することを確認する必要があります。
5. データ・リポジトリ内のワークロード仕様を更新するには、「はい」をクリックします。それ以外の場合は、「いいえ」をクリックして処理を中止します。

CICS システムまたはシステム・グループをワークロード仕様に関連付けると、関連付けられた CICS システムの始動時にはいつでも、その仕様が自動的にインストールされます。ワークロード・グループを介してその仕様に関連付けられているワークロード定義も自動的にインストールされます。

ただし、すでにアクティブになっている CICS システムにワークロード仕様を関連付ける場合、新しい仕様はすぐに使用可能になりません。ワークロード管理をオンにするには、以下の手順を実行します。

1. 「管理ビュー」 > 「トポロジー管理ビュー」 > 「システム定義」をクリックして、アクティブな CICS システムのリストを表示します。
2. 目的の CICS システムを選択し、「更新...」ボタンをクリックします。
3. 「ワークロード・マネージャー状況」フィールドに「YES」を指定し、「はい」ボタンをクリックしてワークロード管理をオンにします。それ以外の場合は、「いいえ」をクリックして処理を中止します。

WLM 仕様と CICS システムとの間のリンクの更新:

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ワークロード・マネージャー管理ビュー」をクリックします。

2. 「ワークロード・マネージャー管理ビュー」メニューで、「仕様とシステムとの間のリンク」をクリックします。「WLM 仕様と CICS システムとの間のリンク」ビュー (LNKSWSCS オブジェクト) が表示されます。
3. 更新する WLM 仕様に対応するボックスにチェック・マークを付けます。複数のボックスにチェック・マークを付けることができます。
4. 「仕様の関連付けの変更」ボタンをクリックして「仕様の関連付けの変更 (EYUSTARTLNKSWSCS.CHGSPEC)」ビューを表示します。
5. 「新規 **WLM** 仕様名」フィールドに新しい名前を入力し、適切な継承オプションを選択します。
 - モニター仕様と CICS システム・グループの間のリンクを更新する場合は、「はい」をクリックします。
 - 処理を中止する場合は、「いいえ」をクリックします。

WLM 仕様と CICS システム・グループとの間のリンクの更新: 手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ワークロード・マネージャー管理ビュー」をクリックします。
2. 「ワークロード・マネージャー管理ビュー」メニューで、「仕様とシステム・グループとの間のリンク」をクリックします。「WLM 仕様と CICS システムとの間のリンク」ビュー (LNKSWSCG オブジェクト) が表示されます。
LNKSxSCG パラメーターについて詳しくは、LNKSxSCG Records (LNKSMSCG, LNKSRSRG, LNKSWSCG) を参照してください。
3. 更新する WLM 仕様に対応するボックスにチェック・マークを付けます。複数のボックスにチェック・マークを付けることができます。
4. 「仕様の関連付けの変更」ボタンをクリックして「仕様の関連付けの変更 (EYUSTARTLNKSWSCG.CHGSPEC)」ビューを表示します。
5. 「新規 **WLM** 仕様名」フィールドに新しい名前を入力し、適切な継承オプションを選択します。
 - モニター仕様と CICS システム・グループの間のリンクを更新する場合は、「はい」をクリックします。
 - 処理を中止する場合は、「いいえ」をクリックします。

トランザクション・グループの作成

トランザクション・グループは、論理的に類似したトランザクションを関連付けたものです。この類似性は、ワークロード管理 (WLM) または親和性の要件、共通の共用処理要件、またはユーザーが決定する他の何らかの特性に基づくものとすることができます。「トランザクション・グループ定義」ビューを使用して、トランザクション・グループを作成できます。

このタスクについて

ワークロード管理の場合、トランザクション・グループで WLM 情報 (ルーティング・アルゴリズム・タイプを含む) を指定すると、関連するワークロード仕様 (WLMSPEC) で提供されるデフォルト値がオーバーライドされます。トランザクシ

ョン・グループに代替 WLM 属性を指定すると、ルーティング領域を停止することなく、関連するトランザクションのワークロード・ルーティング特性を動的に変更できます。

CICSplex SM WUI または CICS Explorer を使用して、トランザクション・グループを作成できます。

CICS Explorer ユーザーの場合:

手順については、CICS Explorer の製品資料を参照してください。

CICSplex SM WUI ユーザーの場合:

手順

1. WUI メインメニューから「管理ビュー」 > 「ワークロード・マネージャー管理ビュー」 > 「トランザクション・グループ定義」の順にクリックして、「トランザクション・グループ定義」ビューを開きます。

このビューに既存のトランザクション・グループ定義のリストが表示されます。トランザクション・グループ定義の作成、更新、および削除と、トランザクション・グループへのトランザクションの追加を行うことができます。

2. オプション: 新しい定義を作成する時に既存の定義の情報を使用するには、必要な既存の定義の横にある「レコード」列内のチェック・ボックスを選択します。
3. 「作成 (**Create**)」をクリックします。
4. トランザクション・グループ定義を作成するための適切な情報を指定します。

このビュー内のフィールドの説明については、トランザクション・グループ定義 - TRANGRP を参照してください。

5. 「はい」をクリックして新しい定義を作成し、データ・リポジトリに追加します。

新しい定義のエントリーを含む「トランザクション・グループ定義」ビューが再表示されます。

次のタスク

インストールされているトランザクション・グループの WLM 情報を変更する場合は、関連付けられている WLM 定義 (WLMDEF) を破棄してから再インストールする必要があります。それにより、WLM 定義によって指定されるトランザクション・グループも更新されます。ただし、ルーティング・アルゴリズム・タイプ (ALGTYPE 属性) を変更する場合は、「アクティブ・ワークロード・トランザクション・グループ (WLMATGRP)」ビューと **SET** コマンドを使用することによって、関連付けられている WLMDEF を破棄して再インストールすることなく、すぐに変更することができます。

ワークロード定義の作成

ワークロード定義を使用して、作業要求を特定のターゲット領域セットに経路指定することができます。この経路指定は、該当の作業要求に関連付けられている端末名とユーザー名、またはプロセス・タイプに基づいて行われます。このセクションでは、ワークロード定義を作成し、データ・リポジトリを追加する方法について説明します。

端末名およびユーザー名は、固有名の場合もあれば、総称名の場合もあります。例えば、NET で始まる論理装置名を持つ端末から任意のユーザーによって開始されたトランザクションすべてが EYUCSG01 という名前で識別されるターゲット・スコープに経路指定されるワークロード定義を作成できます。

トランザクションを経路指定すべきかどうかを判断するために CICSplex SM が使用するトランザクション突き合わせ基準は、以下のとおりです。

- ・ トランザクション ID は、ワークロード定義に関連付けられたトランザクション・グループの一部か？
- ・ プロセス・タイプで分離を指定する定義があるか？ 一致はあるか？ ある場合、この定義を使用する。ない場合、端末の論理装置名およびユーザー ID で分離を指定する定義はあるか？
- ・ トランザクションに関連付けられた端末名とユーザー名をどの順序で評価するか？ つまり、どちらの名前を 1 次フィルターとして使用するか？
- ・ トランザクションに関連付けられたユーザー名と端末名は、ワークロード定義によって指定された名前パターンに一致するか？

端末とユーザーの名前パターンを確立するためのルールは、以下のとおりです。

- ・ 複数のワークロード定義がある場合、1 次フィルターとして識別される名前を含むフィールドは、同じ固有または総称のパターンを含むことができます。2 次フィルターとして使用されるフィールドの内容は常に固有でなければなりません。例えば、以下の定義は、USERID が 1 次フィルターで LUNAME が 2 次フィルターの場合は有効です。しかし、LUNAME が 1 次フィルター場合、ユーザー ID が固有でないため、以下の定義は無効です。

Entry Name	:	EYUWMD01	EYUWMD02	EYUWMD03
Trangroup Name	:	EYUTNG01	EYUTNG01	EYUTNG01
Terminal Luname	:	LUR*	LUL*	LUT*
User ID	:	PIE*	PIE*	PIE*

- ・ 総称名が指定されている場合は、一致する先行文字の数が最も多いパターンが優先されます。例えば、以下のパターンで考えてみます。

A37AR*
A37+R*

パターン A37AR* は、入力が A37AR123 の時に選択されます。パターン A37+R* は、入力が A37TRAP の時に選択されます。

- ・ 端末 LU 名パターンは、ネットワーク名と論理装置名の連結値で突き合わされます。以下は、有効な端末 LU 名パターンです。

NETWORK1.LU12345678	- A specific luname
NETWORK1.LU1*	- Generic lunames in the network
NETWORK1.*	- All lunames in the network
NET*	- All lunames in a generic network
.LU12345678	- A specific luname within all networks
.* or *	- All lunames within all networks

ワークロード定義を作成し、データ・リポジトリに追加するには、以下の手順を実行します。

1. 「管理ビュー」 > 「ワークロード・マネージャー管理ビュー」 > 「ワークロード定義」をクリックして、「ワークロード管理定義」ビューを開きます。

このビューに既存のワークロード管理定義のリストが表示されます。このビューにはアクション・ボタンがあり、それらを使用してワークロード定義の作成、更新、削除、インストール、およびワークロード・グループへの追加を行うことができます。

2. 新しい定義を作成する時に既存の定義の情報をいくつか使用する場合は、「レコード」列内の隣接するチェック・ボックスを選択して既存の定義を選択します。
3. 「作成」アクション・ボタンをクリックします。
4. 必要に応じて、以下の情報を指定します。

ワークロード管理定義名

ワークロード定義の名前を 1 から 8 文字までで指定します。名前には英字、数字、国別文字を含めることができます。ただし、先頭文字は英字でなければなりません。

説明 (オプション) 定義の説明を 1 から 30 文字までで指定します。

トランザクション・グループ名

(オプション) トランザクション・グループの固有名または総称名を入力します。総称値を入力すると、有効なトランザクション・グループのリストが表示されます。

トランザクション・グループを特定しない場合は、仕様のデフォルト・トランザクション・グループが想定されます。

端末 LU 名

次のフォーマットを使用して、固有の論理装置名またはパターンを入力します。

`[network_qualifier_name][.luname]`

ここで、`network_qualifier_name` と `luname` は、両方とも 1 文字から 8 文字の長さです。`network_qualifier_name` と `luname` はオプションですが、いずれかを指定する必要があります。`luname` を指定する場合は、ピリオド記号を接頭部として付加する必要があります。

パターンには、文字 + (正符号) または * (アスタリスク)、あるいはその両方を含めることができます。ここで、正符号は、任意の非空白文字を表し、パターン内の任意の場所に指定できます。アスタリスクは、空白を含め、ゼロ個以上の文字の範囲を表します。アスタリスクは、パターンの終わりにのみ使用する必要があります。

ユーザー ID

固有のユーザー ID またはパターンを入力します。パターンには文字 + (正符号) または * (アスタリスク)、あるいはその両方を含めることができます。

注: 端末 LU 名とユーザー ID の値は、CICSplex SM が、トランザクションをこの定義と突き合わせようとしている時に使用できます。

BTS プロセス・タイプ

固有のプロセス・タイプまたはパターンを入力します。パターンには、+ (正符号) または * (アスタリスク)、あるいはその両方を含めることができます。

注: このフィールドに * 以外のものを指定する場合、LU 名とユーザー ID の各フィールドは * に設定する必要があります。同様に、LU 名およびユーザー ID の各フィールドに * 以外のものがある場合、このフィールドは * に設定する必要があります。プロセス・タイプ、LU 名、およびユーザー ID でワークロードを分離することはできません。

ターゲット・システム・セットのスコープ名

動的ルーティング要求のターゲット領域として使用する CICS システムまたは CICS システム・グループの固有名または総称名を入力します。総称値を入力すると、有効な CICS システムと CICS システム・グループのリストが表示されます。

注: 指定された CICS システムまたは CICS システム・グループは、この定義が関連付けられているワークロード仕様によってルーティング・スコープと識別される CICS システムからアクセス可能である必要があります。したがって、それぞれのルーティング領域と、ここでターゲット領域として識別されるすべての CICS システムとの間に、適切な CICS 接続が存在していることを確認する必要があります。

5. 「はい」をクリックして新しい定義を作成します。

「ワークロード管理定義」ビューが再表示され、新しい定義のエントリーが組み込まれます。

ワークロード・グループの作成

ワークロード・グループは、1 つ以上の関連したワークロード定義を関連付けるために使用します。

このビューの使用例は、249 ページの『特定のターゲット領域への特定のトランザクションのルーティング』に記載されています。このセクションでは、ワークロード・グループ定義を作成し、データ・リポジトリに追加する方法について説明します。

- 「管理ビュー」 > 「ワークロード・マネージャー管理ビュー」 > 「グループ」をクリックして、「WLM グループ」ビューを開きます。

このビューに既存のワークロード管理グループ定義のリストが表示されます。このビューにはアクション・ボタンがあり、それらを使用してワークロード・グループの作成、更新、削除、インストール、およびワークロード仕様へのグループの追加を行うことができます。

- 新しい定義を作成する時に既存の定義の情報をいくつかを使用する場合は、「レコード」列内の隣接するチェック・ボックスを選択して既存の定義を選択します。
- 「作成」アクション・ボタンをクリックします。
-

必要に応じて、以下の情報を指定します。

ワークロード管理グループ名

ワークロード・グループの名前を 1 から 8 文字までで指定します。名前には英字、数字、国別文字を含めることができます。ただし、先頭文字は英字でなければなりません。

説明 (オプション。) ワークロード・グループの説明を 1 から 30 文字までで指定します。

- 「はい」をクリックして新しい定義を作成します。

「ワークロード・マネジメント管理グループ」ビューが再表示され、新しい定義のエントリーが取り込まれています。

ワークロード・ビューのルート・フィールドについて

「アクティブ・ワークロードのターゲット配布係数」ビューと「アクティブ・ターゲット領域の配布傾向の集計」ビューを、アクティブ・ワークロード・ビューに表示されるルート・フィールド統計と共に使用して、ワークロード管理で起きていることを理解します。

「アクティブ・ターゲット領域の配布傾向の集計」ビューのルート・フィールド統計情報を使用して、既存のワークロードが正しく実行されており、トランザクションを消失していないことを確認できます。「アクティブ・ターゲット領域の配布傾向の集計」ビューには、ルーティング・プロセス中の WLM 内のイベントに関する新しいパースペクティブも提供されます。

「アクティブ・ワークロード・ビュー」を使用することにより、セットアップの潜在的な問題を強調することができます。例えば、ルーティングが呼び出され、他の使用可能なターゲットの検出を再試行し続けている場合などです。

WLM 内で起きていることのカウントを確認できます。例えば、Route complete の数対 Route select の数などです。この例としては Route notify フィールドがあります。このフィールドは、**DYNAMIC(YES)** として定義されているプログラムにリンクしており、SYSID が指定されている場合に表示されます。

「アクティブ・ターゲット領域の配布傾向の集計」ビューを「アクティブ・ワークロードのターゲット配布係数」ビューと共に使用すると、WLM のルーティングの決定と CICSplex SM の動作を理解するのに役立ちます。例えば、なぜ一部の領域が他の領域より多くの作業を受信しているのか知りたい場合、Route Selections の分析により、どの領域が他の領域より多くの作業を受信しているかが示されます。

228 ページの図 21 は、分散ルーティングに関連するルート・フィールド・プロセスを示しています。

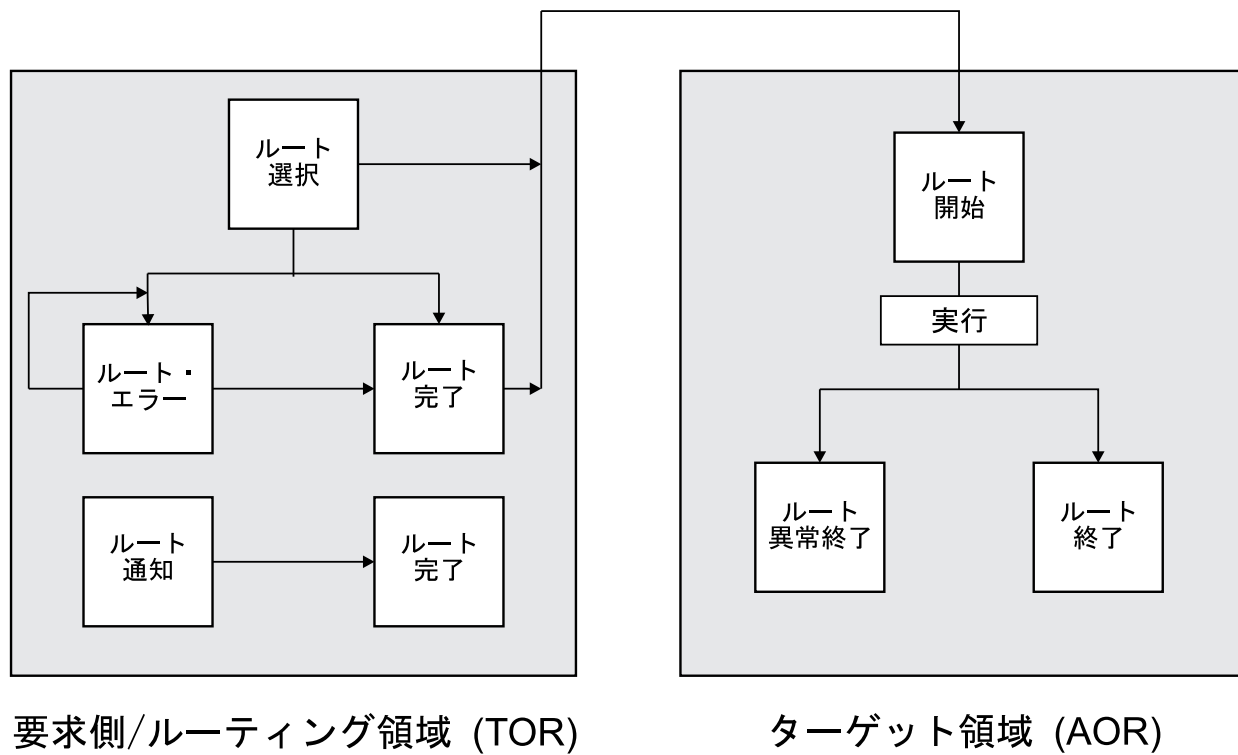
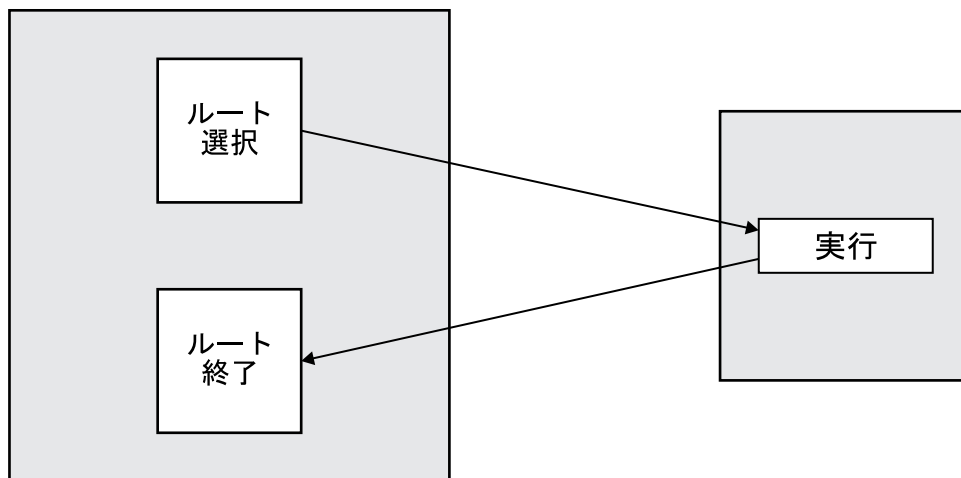


図 21. 分散ルーティングの概念ビュー

229 ページの図 22 は、動的ルーティングに関連するルート・フィールド・プロセスを示しています。



要求側/ルーティング領域 (TOR) ターゲット領域 (AOR)

図 22. 動的ルーティングの概念ビュー

これらの定義は、以下のようにルート・フィールドを記述しています。

Route select

Route select は、CICSPlex SM ワークロード管理によってこの領域がターゲットとして選択された時に更新されます。

ルート開始

Route initiate は、分散ワークロード・モデルを使用してルーティングされたタスクがターゲット・システムで開始された時に更新されます。

Route error

Route error は、CICSPlex SM によって選択された領域が到達不能な時に更新されます。例えば、接続サービスが休止していたり、セッションが使用可能でなかったりする場合です。この場合、CICSPlex SM は別の領域の選択を試行します。この再選択は Route select としてカウントされず、後続の領域の Route select カウントは更新されません。route error の数が多い場合は、ワークロードを実行するセッションの数が不足していることを示しています。セッションが不足していると、CICSPlex SM が再度 (可能性として複数回) ルーティングを試行しなければならないため、応答時間と CPU 時間の増加の原因になる可能性があります。

ルート完了

Route complete は、分散ワークロード・モデルを使用してルーティングされるタスクがターゲット・システムで開始された時に更新されます。Route complete は、このタスクの責任が完了したことをルーティング・システムに示します。

ルート通知

Route notify は、LINK コマンドまたは START コマンドの SYSID オプ

ションによって選択されたターゲット領域にタスクがルーティングされた時に更新されます。Route notify は、CICSplex SM にルーティングを通知します。CICSplex SM は領域を選択しません。Route notify は、静的経路指定の変形です。静的経路指定では、プログラムまたはトランザクションは動的と定義されますが、それを呼び出す API は SYSID を指定します。

ルート異常終了

Route abend は、タスクがターゲット領域に経路指定され、その後、トランザクションがシステムに定義されていない、またはプログラムが使用不可であるなどの理由により異常終了した時に更新されます。

Route terminate

Route terminate は、ターゲット領域でタスクが完了した時に更新されます。分散プログラム・リンク (DPL) 要求または動的トランザクション・ルーティング (DTR) 要求の終了時であるか、分散ワークロード・モデルを使用して経路指定されたタスクの終了時であるかは関係ありません。

タスクの例

ワークロード管理のすべての例は、同じ構成に基づいています。

CICSplex、PLXPROD1 は、1 つの TOR (CICSPT01) と 3 つの AOR (CICSPA01、CICSPA02、および CICSPA03) から成ります。これらの CICS 領域が果たす役割は、個々のタスクの性質に応じて異なります。

以下のセクションには、多くの標準的ワークロード管理のタスク例が含まれており、Web ユーザー・インターフェース (WUI) を使用してこれらのタスクをどのように実行できるかが示されています。

どのタスクについても、作業している、CICS システムの範囲を認識する必要があります。範囲が単一の CICS システムの場合、CICSplex SM から取得したすべてのデータはその単一システムに関連しています。範囲が CICS システムのグループの場合、データは、そのグループ内のすべてのシステムに関連しています。範囲が CICSplex の場合、データは、その CICSplex 内のすべてのシステムに関連しています。以下のセクション内のすべての例で、初期範囲は CICSplex PLXPROD1 になります。

ワークロードの管理

この例では、Web ユーザー・インターフェース (WUI) を使用した CICSplex SM でのワークロードの管理方法、つまり、すべての作業を 1 つのルーティング領域から適切なターゲット領域に経路指定する方法について説明します。

このタスクで「適切な」ターゲット領域とは、ターゲット領域で許可されるタスクの最大数と比較して、作業要求のキューが最も短い領域になります。この作業キュー (ロード・カウント と呼ばれる) は、アクティブで、キューに入っているすべてのユーザー・タスクのキューです。デフォルトでは、MAXTASKS および TRANCLASS 両方に関してキューに入れられたタスクがロード・カウントに含まれます。CSYSDEF リソース・テーブルで「タスク・ロード・キュー・モード」属性を使用すると、TRANCLASS に関してキューに入れられたタスクをサイトでロード・カウントから除外することができます。CSYSDEF リソース・テーブルの「タスク・ロード・キュー・モード」属性の詳細については、を参照してください。

TOR (CICSPT01) は、要求側領域およびルーティング領域であり、3 つの AOR (CICSPA01、CICSPA02、および CICSPA03) はすべてターゲット領域です。どの CICS 領域も現在実行されていません。

一部の作業要求を自由に経路指定できない場合 (例えば、特定のユーザーからの作業要求を常に同じターゲット領域に送信したい場合など)、心配ありません。その要件の追加方法については、後のタスク例で説明します (249 ページの『特定のターゲット領域への特定のトランザクションのルーティング』)。

1. 作業要求 (「ワークロード」) を動的に経路指定できるすべてのターゲット領域を含む CICS システム・グループを作成します。

- メインメニューから「管理ビュー」>「トポロジー管理ビュー」>「システム・グループ」をクリックして、「システム・グループ定義」表形式ビューを開きます。

現行のコンテキストが PLXPROD1 ではない場合は、「コンテキスト」フィールドに PLXPROD1 を指定して「最新表示」をクリックします。

- 「作成」をクリックして、「システム・グループ定義」作成ビューを開きます。
- 以下のように入力します。

システム・グループ名	CSGTGTS1
説明	All target regions in CICSplex PLXPROD1

- 「はい」をクリックして、システム・グループを作成します。

「システム・グループ定義」表形式ビューが再表示され、CICS システム・グループ CSGTGTS1 のエントリが示されます。

この時点では、グループ CSGTGTS1 は存在しますが、中身は空です。

2. CICSplex SM に、このグループにどのターゲット領域が属するかを指定します。CICS システム・グループ CSGTGTS1 にターゲット領域を追加するには、以下の手順を実行します。

- メインメニューから「管理ビュー」>「トポロジー管理ビュー」>「システム定義」をクリックして、「CICS システム定義」表形式ビューを開きます。
- CICS システム CICSPA01、CICSPA02 および CICSPA03 のエントリを選択し、「CICS システム・グループへの追加」をクリックします。
- 「メンバーが加わるグループ」フィールドに CSGTGTS1 と入力し、「はい (残りの 3 個もすべて含む)」をクリックします。これにより、選択した 3 つのシステムが新しいグループに追加されます。

3. 以下のようにして、ワークロード仕様を作成します。

- メインメニューから「管理ビュー」>「ワークロード・マネージャー管理ビュー」>「仕様」をクリックして、「WLM 仕様」表形式ビューを開きます。
- 「作成」をクリックして、以下の情報を入力します。

WLM 仕様名	WLSPAY01
説明	Manage payroll workload in PLXPROD1
主検索基準	USERID
デフォルト・ターゲット・スコープ	CSGTGTS1
アルゴリズムのタイプ	QUEUE

残りのフィールドは空のままにするか、デフォルトを受け入れます。

注:

- この例では、主検索基準値 **USERID** が示されていますが、実際には、主検索基準値は単純なワークロード検索には影響しないため、**USERID** を指定するか **LUNAME** を指定するかは問題ではありません。これは、ある種のワークロード分離にのみ使用されます。それについては、後の例で説明します。**CICSplex SM** は、このワークロード仕様がワークロード分離に使用されないことをこの段階では認識していないため、値を指定する必要があります。
- デフォルト・ターゲット・スコープ値は、作業要求を経路指定できる単一ターゲット領域、またはターゲット領域グループの名前です。
- アルゴリズム・タイプ値 **QUEUE** は、作業要求のキューが最も短いターゲット領域を選択するよう **CICSplex SM** に指示します。
- 「説明」はオプションですが、指定することをお勧めします。(指定しておく、と、仕様名のリストが示されて、見分けがつかない時に役立ちます。)

「はい (**Yes**)」をクリックします。「**WLM 仕様**」表形式ビューが再表示され、今回は新しい **WLM 仕様 WLSPAY01** のエントリーが示されています。

4. グループ **CSGTGTS1** 内のターゲット領域に作業要求をルーティングする領域について、**CICSplex SM** に指定します。ワークロード仕様がルーティング領域に関連付けるには、以下の手順を実行します。
 - 「**WLM 仕様**」ビューで **WLSPAY01** 仕様のエントリーを選択し、「**CICS システムの関連付け**」をクリックします。
 - 「**CICS システム**」フィールドに、ルーティング領域の名前 (この例では **CICSPT01**) を入力し、「はい」をクリックします。

ルーティング領域とワークロード仕様との関連付けが機能しているかどうか確認するには、以下の手順を実行します。

- 「**WLM 仕様**」表形式ビューで名前「**WLSPAY01**」をクリックして、この仕様の詳細を表示します。
- 「このワークロード仕様に関連する **CICS システム**」リンクをクリックして、「**CICS システムから WLM 仕様へのリンク**」表形式ビュー (**LNKSWSCS** オブジェクト) を表示します。

注: このビューには、「管理ビュー」>「ワークロード・マネージャー管理ビュー」>「仕様とシステムとの間のリンク」をクリックして、メインメニューからアクセスすることもできます。

5. 以下の手順を実行して、ルーティング領域でワークロード管理をアクティブにします。
 - メインメニューから「管理ビュー」>「トポロジー管理ビュー」>「システム定義」をクリックして、「**CICS システム定義**」表形式ビューを開きます。
 - **CICSPT01** のエントリーを選択し、「更新」をクリックして、**CICSPT01** の詳細ビューを開きます。
 - 「**AOR 動的ルーティング・モード**」フィールドを「はい」に変更します。「はい」をクリックして、「**CICS システム定義**」表形式ビューに戻ります。

この変更は、ターゲット領域 CICSPT01 を次回開始した時に有効になります。

6. 以下の手順を実行して、ターゲット領域でワークロード管理をアクティブにします。
 - 「CICS システム定義」表形式ビューから CICSPT01 のエントリーを選択し、「更新」をクリックして CICSPT01 の詳細ビューを開きます。
 - 「ワークロード・マネージャー状況」フィールドを「YES」に変更します。「はい」をクリックして、「CICS システム定義」表形式ビューに戻ります。

この変更は、ターゲット領域 CICSPT01 を次回開始した時に有効になります。

ターゲット領域の CICSPT02 および CICSPT03 について、このステップを繰り返します。

ルーティング領域とターゲット領域が開始されると、「アクティブ・ワークロード・ビュー」>「アクティブ・ワークロード」をクリックして、ワークロードがアクティブであることをメインメニューから確認できます。これにより、「アクティブ・ワークロード」表形式ビューが開き、ワークロード仕様 WLSPT01 がアクティブであることが示されます。

どのターゲット領域にルーティングされているか確認するには、「アクティブ・ワークロード・ビュー」>「アクティブなワークロードでのターゲット領域」をクリックします。表示されたビューに、ワークロード WLSPT01 によるルーティング先であるすべてのアクティブ・ターゲット領域が示されます。リストされているすべてのターゲット領域は、CICS システム・グループ CSPTGTS1 に属しています。

最適化されたワークロードの確立方法

CICS 領域状況サーバーを使用してシスプレックス内で CICS 領域状況データを即時に共用し、最適化されたワークロード管理をサポートすることができます。領域状況サーバーは、領域状況およびユーザー・アプリケーションの要求ではなく、領域状況の要求のみにサービス提供します。

このタスクについて

CICS 領域状況データは、その領域をホスティングしている CICSplex に基づく名前が付いたデータ・テーブルを使用して、シスプレックスへブロードキャストされます。CICSplex 内の各領域は、CICSplex データ・テーブル内の単一のレコードによって記述されます。データ・テーブルはカップリング・ファシリティー構造内に保持され、アクセス権限はカップリング・ファシリティー・データ・テーブル (CFDT) サーバー によって制御されます。MVS イメージ内のプールごとに 1 つずつ、CFDT サーバーをセットアップする必要があります。

関連する領域状況テーブルのグループを、別のプールの中に置くことができます。例えば、1 つのプールを実動用とし、別のプールをテスト用にしたりすることができます。プールは、カップリング・ファシリティー・リソース管理 (CRFM) ポリシー内にリスト構造として定義されます。プール名は、接頭部 DFHCF が付いたサーバー名を形成するために使用され、サーバーの始動 JCL内に指定されます。

注:

- シスプレックス内に同じ名前の 2 つの CICSplex が別々に存在する場合は、領域状況サーバーに異なるプール名を使用する必要があります。
- 関連する権限が提供されていることを確認してください。Security for coupling facility data tablesを参照してください。

領域状況サーバーをセットアップして管理するには、以下の手順を使用します。

手順

1. 領域状況サーバー・プールのリスト構造があることを確認します。

最適なパフォーマンスを実現するためには、領域状況サーバー・プール専用のリスト構造を新規に定義してください。詳細については、『領域状況サーバーのリスト構造の定義』を参照してください。

オプションとして、既存の CFDT プールを使用して CICSplex データ・テーブルを保管することもできます。ただし、最適化ワークロードのスループットが、指定されたプール名に対するユーザー・アプリケーション・アクティビティによって妨げられたり、プールに対するアプリケーション・スループットがシスプレックスの最適化ワークロードによって影響を受けたりする可能性があります。

注: 使用している CICSplex と同じ名前の CFDT が既にある場合は、RS サーバーに使用するプール名と異なるプール名を使用する必要があります。

2. MVS バッチ領域で実行する領域状況サーバー・ジョブを定義して、開始します。詳細については、Defining and starting a region status server regionを参照してください。

次のタスク

領域状況サーバーの始動が正常に完了した後、コマンドを発行して領域状況サーバーを管理し、必要な場合は領域状況サーバーを削除することができます。詳しくは、Controlling region status serversおよびDeleting region status server poolsを参照してください。

領域状況サーバーのリスト構造の定義:

領域状況サーバー・プールは、カップリング・ファシリティー・データ・テーブルのリスト構造の中で定義されます。このリスト構造は、カップリング・ファシリティー・リソース・マネージャー (CFRM) ポリシーの中で定義します。

このタスクについて

CICS 状況を保管するために、カップリング・ファシリティー内にストレージを割り振る必要があります。

CICS は CICS 領域の状況を、その領域が属する CICSplex に基づく名前が付いたカップリング・ファシリティー・データ・テーブルに記録します。そのテーブルは、その CICSplex の CICSplex 定義の中で名前が指定されている CFDT プールに属している必要があります。デフォルト名は DFHRSTAT です。各 z/OS イメージの中に、その CICSplex に属する CICS 領域にサービスを提供する領域状況プ

ールごとに、領域状況サーバーが存在する必要があります。CICSplex データ・テーブルには、その CICSplex 内の領域ごとに 1 つずつ、領域状況レコードが格納されます。

現行のカップリング・ファシリティー・リソース管理 (CFRM) ポリシーの中に構造を定義するには、IXCMIAPU ユーティリティーを使用します。このユーティリティーの例については、SYS1.SAMPLIB ライブラリー内の IXCCFRMP メンバーを参照してください。領域状況サーバー・プールのポリシー・ステートメントの例は、236 ページの図 24 に示されています。

リスト構造へのサーバー・アクセスを許可する必要があります。詳しくは、*Authorizing server access to a list structure*を参照してください。

手順

1. リスト構造の名前を指定します。この名前は、選択したプール名の前に接頭部 DFHCFLS_ を付加して形成され、DFHCFLS_*poolname* となります。CICSplex SM によって実装されるデフォルトのプール名は DFHRSTAT です。

EYUSTARTCPLEXDEF ビュー・セットを使用して、CICSplex を定義する操作や変更する操作を実行できます。CPLEXDEF 詳細ビューを使用して、領域状況 (RS) サーバーのカップリング・ファシリティー (CF) チューニング・パラメーターを変更できます。これらのパラメーターはシスプレックスの最適化ワークロード・ルーティングを実現します。

注: CICSplex 内のすべての領域が使用するデフォルトの領域状況 (RS) プール名を変更することもできます。デフォルト名の DFHRSTAT を使用しないときは、CICSplex 内で他の領域を開始する前に、名前を変更する必要があります。CICSplex SM は、CICSplex がアクティブである間のプール名の変更を禁止しません。CICSplex がアクティブである間に変更した場合は、CICSplex 内のすべての CMAS 領域と MAS 領域をできるだけ早く再始動する必要があります。そうしないと、CICSplex SM WLM ビュー内のデータに矛盾が生じて、CICSplex 内のすべての領域を再始動するまで WLM 最適化が非活動化される場合があります。

2. リスト構造のサイズを指定します。236 ページの図 23 に示したレコード・サイズと計算はユーザー自身の情報として役立ちますが、IBM CFSizer ツールを使用して、**INITSIZE** パラメーターと **SIZE** パラメーターを計算する必要があります。CFSizer ツールは、最小値を考慮しますが、236 ページの図 23 での計算はそうではありません。CFSizer ツールを使用して有効なサイジング・パラメーターを取得しなかった場合、CICS ランタイム障害が発生して、DFHCF0403、DFHCF0409、および DFHCF0481 のメッセージが発行されることがあります。

CFSizer ツールを使用するときは、「**CICS Data Tables list structure (CICS データ・テーブルのリスト構造)**」を選択して、以下の値を指定します。

Maximum number of tables (テーブルの最大数)

CICSplex SM で定義した、シスプレックス最適化ワークロードを使用する CICSplex の数を指定します。通常、これは非常に小さい数です。

Average rounded record size (丸めた平均レコード・サイズ)

40

Total records (合計レコード数)

すべての CICSplex に接続する CICS 領域の合計数を指定します。

Target usage percent (ターゲット使用量の割合)

デフォルトを使用してください。

Maximum expansion percent (最大拡張の割合)

デフォルトを使用してください。

ALLOWAUTOALT(YES) を指定することもできます。これを指定すると、エン
トリーに対するエレメントの割合を自動的に変更でき、構造内のスペースの使用
効率を高めることができます。

1 つの領域状況レコードの長さは約 40 バイトです。

PLEX1 に 100 個の領域が含まれており、PLEX2 に 300 個、PLEX3 に 1 000 個の領域が含まれている場合、必
要な構造は以下のとおりです。

- プール名 = DFHRSTAT、テーブル名 = PLEX1、100 領域 x 40 バイト = 合計 4 000 バイト
- プール名 = DFHRSTAT、テーブル名 = PLEX2、300 領域 x 40 バイト = 合計 12 000 バイト
- プール名 = DFHRSTAT、テーブル名 = PLEX3、1000 領域 x 40 バイト = 合計 40 000 バイト

図 23. 例: 必要な構造の計算

3. ポリシーを保管できる、カップリング・ファシリティーの設定リストを指定しま
す。
4. CFRM 新規ポリシーを新しい構造定義で更新した場合は、次の MVS コマンド
を使用して、そのポリシーを活動化します。

```
SETXCF START,POLICY,POLNAME=polycname,TYPE=CFRM
```

ここで、*polycname* は、開始する CFRM ポリシーで、例えば、
DFHCFLS_DFHRSTAT などです。 リスト構造の CFRM ポリシー・ステート
メントを定義しても、リスト構造が作成されるわけではないことに注意してくだ
さい。構造が作成されるのは、その構造への接続が初めて試みられたときで、そ
れは、対応するプールを参照する最初のカップリング・ファシリティー・デー
タ・テーブル (CFDT) サーバーが始動したときに発生します。

例

```
STRUCTURE NAME(DFHCFLS_DFHRSTAT)  
  SIZE(7168)  
  INITSIZE(6144)  
  PREFLIST(FACIL01,FACIL02)
```

図 24. 領域状況サーバーのリスト構造を定義する例

領域状況サーバーの領域の定義と開始:

領域状況サーバーを始動する際、そのサーバーの MVS イメージのプールをアクテ
ィブにします。

始める前に

領域状況サーバー領域を開始する前に、プールに使用する領域状況サーバー構造を定義する必要があります。領域状況サーバー・リスト構造の定義については、234ページの『領域状況サーバーのリスト構造の定義』を参照してください。

このタスクについて

開始済みタスク、開始済みジョブ、またはバッチ・ジョブとして、サーバーを始動できます。このタスクでは、領域状況サーバー・ジョブを開始して、MVS バッチ領域で実行する方法について説明しています。ジョブまたはタスクは、CICS 許可ライブラリー CICSTS55.CICS.SDFHAUTH にある領域状況サーバー・プログラム DFHCFMN を開始する必要があります。

手順

1. DFHCFMN プログラムを、JCL で定義されている SYSIN データ・セット内か、EXEC ステートメントの **PARM** パラメーター内のいずれかに指定します。
2. DFHCFMN プログラムの必須およびオプションの始動パラメーターを指定します。SYSIN データ・セットと **PARM** パラメーターの両方で始動パラメーターを指定した場合は、**PARM** 値が SYSIN 値をオーバーライドします。**MVS START** コマンドは **PARM** 値をオーバーライドできるからです。

- a. 印刷ファイルに SYSPRINT DD ステートメントを指定する必要があります。
- b. サーバー・パラメーターに SYSIN DD ステートメントを指定する必要があります。

ヒント: すべてのプール関連パラメーターをすべての MVS イメージにわたって確実に整合させるには、同じプールにアクセスするすべてのサーバーに対して同じ SYSIN パラメーター・データ・セットを使用するか、その同一コピーを使用し、サーバー間で異なるパラメーターがあれば、それらを **PARM** フィールドに指定する必要があります。

- c. 領域状況プール名を指定する必要があります。
- d. ライセンスのアクティベーション・データ・セット (SDFHLIC ライブラリー) を STEPLIB DD ステートメントに連結する必要があります。
- e. **REGION** パラメーターを指定できます。このパラメーターは、カップリング・ファシリティー・データ・テーブル・サーバー領域が、同時に実行できる最大数のデータ・テーブル要求を処理するために十分なストレージを備えているようにします。
- f. **TIME=NOLIMIT** を指定できます。ほとんどの通常処理中、サーバー・タスクは待機状態のままです。サーバー処理はクライアント CICS 領域の TCB の下で実行されるからです。このパラメーターを省略した場合は、SYS1.PARMLIB の SMFPRMxx メンバーで指定された JWT 値によっては、サーバー・ジョブが異常終了 S522 (待機の限度を超えた) で失敗することがあります。
- g. 必要に応じてパラメーターを追加指定します。例えば、プール内でサポートされるキューの最大数や、サーバーが割り振るバッファの数を制御したりすることができます。また、必要なセキュリティー・アクセス権限の追加

が必要な場合もあります。Authorizing a CICS region to a coupling facility data tableを参照してください。

タスクの結果

領域状況サーバーが稼働し、領域状況データを受け取って、接続している CICS 領域にブロードキャストする準備が整います。各 CICS 領域は、CICSplex 定義で指定されているプール名を介して接続します。

領域状況サーバーの JCL の例

```
//PRODRSS1 JOB ...
//RSSERVER EXEC PGM=DFHCFMN,REGION=40M,TIME=NOLIMIT CICS CFDT Server for RS
//STEPLIB DD DSN=CICSTS55.CICS.SDFHAUTH,DISP=SHR Authorized library
// DD DSN=CICSTS55.CICS.SDFHLIC,DISP=SHR License activation data set
//SYSPRINT DD SYSOUT=* Messages and statistics
//SYSIN DD *
POOLNAME=DFHRSTAT Pool name
MAXTABLES=100 Allow up to 100 tables
/*
```

図 25. 領域状況サーバー・アドレス・スペースを開始するためのサンプル JCL

セキュリティー・パラメーターの例については、Authorizing a CICS region to a coupling facility data tableを参照してください。

領域状況サーバーの制御:

コマンドを発行して、領域状況サーバーを制御することができます。その際、MVS **MODIFY (F)** コマンドを使用して、サーバー領域のジョブ名または開始タスク名を指定し、その後に、サーバー・コマンドを指定します。

このタスクについて

MVS **MODIFY** コマンドの一般的な形式は、短縮形のF を使用して、以下のようになります。

F job_name,command parameters... comments

MODIFY コマンドを使用して、ジョブまたは開始タスクに情報を渡します。このタスクでは、以下のコマンドを使用して領域状況サーバーを制御します。

手順

- サーバー初期設定パラメーターを変更するには、次のような MVS **SET** コマンドを使用します。

SET keyword=operand[,keyword=operand,...]

SET コマンドは、MVS **SET** コマンドの場合、**T** と短縮できます。詳しくは、239 ページの『**SET** コマンド・オプション』を参照してください。

- 1 つ以上のパラメーターの値、または統計の要約情報をコンソールに表示するには、次のような **DISPLAY** コマンドを使用します。

DISPLAY keyword[=operand][,keyword[=operand,...]

DISPLAY に有効なキーワードは、すべての初期設定パラメーターのほか、241 ページの『**DISPLAY** コマンドと **PRINT** コマンドのオプション』で説明されている追加セットです。

DISPLAY コマンドは、MVS **DISPLAY** コマンドの場合、**D** と短縮できます。

- **DISPLAY** コマンドが生成する出力を印刷するには、次のような MVS **PRINT** コマンドを使用します。

```
PRINT keyword[=operand][,keyword[=operand,...]]
```

PRINT コマンドは **DISPLAY** と同じ出力を生成し、同じキーワードをサポートしていますが、印刷ファイルだけが対象です。

- テーブルを削除するには、**DELETE TABLE=name** コマンドを使用します。このコマンドを正常に実行するには、そのテーブルが使用中であってはなりません。このコマンドは、**DEL** と短縮できます。
- サーバーを正常に停止するには、**STOP** コマンドを使用します。サーバーは、アクティブな接続があれば、まずそれらが終了するまで待ち、待っている間、新規の接続を阻止します。このコマンドは、**P** と省略できます。**MVS STOP** コマンドを使用することもでき、これは **MVS MODIFY** コマンドを介してサーバーの **STOP** コマンドを発行するのと同じことです。**STOP** コマンドの構文は次のとおりです。

```
STOP|P [jobname.]identifier[,A=asid]
```

- サーバーを即時に終了するには、**CANCEL** コマンドを使用します。**RESTART** オプションを使用して、サーバーを自動的に再始動するかどうかを指定することもできます。**CANCEL RESTART** については、244 ページの『**CANCEL** コマンド・オプション』を参照してください。
- サーバーは、例えば構造サイズを変更するオペレーター **SETXCF** コマンドのような、Cross System Extended Services (XES) イベントにも応答します。サーバーは、カップリング・ファシリティにアクセスできなくなった場合、自動的にサーバー **CANCEL** コマンドを発行して、即時にそのサーバー自体を終了します。

SET コマンド・オプション:

SET コマンドを使用して、サーバー初期設定パラメーターのグループを変更できます。

それらのシステム初期設定パラメーター・グループは、以下のとおりです。

- 統計パラメーター
- デバッグ・トレース・パラメーター
- ロック待機パラメーター
- 警告パラメーター
- 自動 **ALTER** パラメーター

以下の **SET** キーワードは、前回の終了時に未解決の作業単位があった非アクティブ CICS 領域の、サーバーのリカバリー状況を変更するために使用します。

RESTARTED=applid

指定された **APPLID** の一時的なリカバリー可能接続を確立します。これは、領域の前回の終了時にコミットまたはバックアウトの処理中だった作業単位があれば、それらを解決し、残っている未確定の作業単位があるかどうかを示します。

このキーワードは、**RESTART** または **REST** と省略することができます。

COMMITTED={applid|applid.uowid}

指定された APPLID の一時的なリカバリー可能接続を確立し、すべての未確定作業単位をコミットするか、uowid も指定されている場合は、その特定の作業単位をコミットします。

このコマンドは、CICS 領域を再始動して作業を正常に解決することができないときにだけ 使用してください。結果として、カップリング・ファシリティ・データ・テーブル・リソースと、同じ作業単位によって更新された他の CICS リソースとの間に不整合が生じる可能性があるからです。

このキーワードは、**COMMIT** または **COMM** と省略することができます。

BACKEDOUT={applid|applid.uowid}

指定された APPLID の一時的なリカバリー可能接続を確立し、すべての未確定作業単位をバックアウトするか、uowid も指定されている場合は、その特定の作業単位をバックアウトします。

このコマンドは、CICS 領域を再始動して作業を正常に解決することができないときにだけ 使用してください。結果として、カップリング・ファシリティ・データ・テーブル・リソースと、同じ作業単位によって更新された他の CICS リソースとの間に不整合が生じる可能性があるからです。

このキーワードは、**BACKOUT** または **BACK** と省略することができます。

以下の **SET** パラメーターを使用して、特定のテーブルに関連するオプションを変更します。

TABLE=name

同じコマンド内の以下のテーブル関連パラメーターを適用するテーブルを指定します。このパラメーターは、すべてのテーブル関連パラメーターの前に必ず指定する必要があります。

MAXRECS=number

先行する **TABLE** パラメーターによって指定されたテーブルに格納できる、レコードの最大数を変更します。

最大数をテーブル内の現行レコード数より小さい値に設定した場合は、現行数が新規の最大限度に収まるまでレコードを削除しないと、新規レコードを格納できません。リカバリー可能テーブルの場合、これはレコードを更新できないことも意味します。リカバリー可能な更新プロセスでは、再書き込み操作時に新規レコードが追加され、トランザクションの完了時に元のレコードが削除されるためです。

このキーワードは、**MAXNUMRECS** として指定することもできます。

AVAILABLE={YES|NO}

先行する **TABLE** パラメーターによって指名されたテーブルを、新規の OPEN 要求に使用可能かどうかを指定します。テーブルが使用不可にされた場合、それ以後にそのテーブルの OPEN 要求を発行する CICS 領域は、それが使用不可であることを示す応答を受け取りますが、現在そのテーブルをオープンしている領域は影響を受けません。テーブルに使用不可のマークが付いている場合でも、サーバーは再始動処理時に、リカバリー可能な作業を解決できるよう、CICS 領域に代わってそのテーブルを暗黙にオープンすることができます。

このキーワードは、**AVAIL** と省略することができます。

SET コマンドの例: 次の例では、統計オプションを変更します。

```
SET STATSOPT=BOTH,EOD=21:00,STATSINT=06:00
```

次の例では、指定したテーブルに許容される最大レコード数を変更します。

```
SET TABLE=PAYECFT1,MAXRECS=200000
```

DISPLAY コマンドと **PRINT** コマンドのオプション:

DISPLAY (および **PRINT**) コマンドを使用して、初期設定パラメーターの値と一部の追加情報を表示することができます。

追加情報を提供するパラメーターのいくつかは、総称名をサポートしています。総称名は、以下のワイルドカード文字を使用して指定します。

- * (アスタリスク記号)。これをパラメーター値の任意の場所で使用して、0 から 8 文字の任意の値を表します。例えば、**CICSH*** は、文字 **H** で識別される **CICSplex** 内のすべての **CICS APPLID** を表します。
- % (パーセント記号)。これをパラメーター値の任意の場所で使用して、任意の値の 1 文字だけを表します。例えば、すべての **CICSplex** 内の **TOR APPLID** を表すには、**CICS%T*** とします。

DISPLAY コマンドと **PRINT** コマンドでサポートされるパラメーターは、以下のとおりです。

APPLIDS

プールへのリカバリー可能な接続が現在存在する、各 **CICS** 領域の **APPLID** と **MVS**システム名を表示します。このコマンドは、**MODIFY** コマンドの発行先であるサーバーの情報だけでなく、同じプールに接続している他のすべてのサーバーの情報も返します。

このキーワードは、**APPLID**、**APPLS**、または **APPL** と省略することができます。

APPLID={applid|generic}

そのサーバーのプールへのリカバリー可能な接続が現在存在し、その **APPLID** が *applid* または *generic* に一致する各領域の **APPLID** と **MVS**システム名を表示します。このコマンドは、**MODIFY** コマンドの発行先であるサーバーの情報だけでなく、同じプールに接続している他のすべてのサーバーの情報も返します。

applid これは特定の **APPLID** に対して使用し、シスプレックス内の 1 つの領域だけに一致する必要があります。

generic

複数の領域に関する情報を取得する場合は、適切な総称値を使用します。

applid と *generic* のどちらも指定しなかった場合、サーバーは、これを **DISPLAY APPLIDS** コマンドと等価のものとして処理します。

このキーワードは、**APPLIDS**、**APPLS**、または **APPL** として指定することもできます。

ARMREGISTERED

ARM 登録が正常に完了したかどうかを示します (YES または NO)。

CONNECTIONS

コマンドの発行先であるサーバーに現在接続している領域のジョブ名とアプリケーション ID を表示します。

このキーワードは、**CONN** と省略することができます。

TABLES

プール内に現在割り振られているすべてのテーブルの名前を表示します。

TABLE={name|generic_name}

特定のテーブル、または総称名に名前が一致する一連のテーブルの属性と状況に関する情報を表示します。

テーブル名を指定しなかった場合、これは **DISPLAY TABLES** と同じものとして処理されます。

TABLEUSERS

プール内に現在定義されている各テーブルを現在使用している領域の、CICS APPLID を表示します。

このキーワードは、**TABLEU** と省略することができます。

TABLEUSERS={name|generic_name}

指定したテーブル、または名前が総称名に一致する各テーブル・セットを現在使用している領域の、CICS APPLID を表示します。

テーブル名を指定しなかった場合、これは **DISPLAY TABLEUSERS** と同じものとして処理されます。

このキーワードは、**TABLEU** と省略することができます。

UOWIDS

未解決のリカバリー可能作業単位が現在存在するすべての領域のアプリケーション ID を、現在未確定であるかコミットまたはバックアウトの処理中である作業単位の数と一緒に表示します。表示される情報に、まだ解決プロセスが開始されていない作業単位、つまり、まだ処理中である作業単位は含まれません。

このキーワードは、**UOWS** と省略することができます。

UOWIDS={applid|generic_applid}v{applid.*|generic_applid.*}

指定した領域に未解決のリカバリー可能作業単位が現在存在する場合、それらの領域について、それらの作業単位に関する情報を表示します。表示される情報に、まだ解決プロセスが開始されていない作業単位、つまり、まだ処理中である作業単位は含まれません。返される情報は、使用したオペランドの形式によって異なります。

applid|generic_applid

この形式のオペランドは、現在未確定であるかコミットまたはバックアウトの処理中である作業単位の数を表示します。

applid を指定した場合、サーバーは特定の APPLID の UOW 情報を表示します。その APPLID は、シスプレックス内の 1 つの領域だけに対応する必要があります。

generic_applid を指定した場合、サーバーは指定された総称 APPLID に一致するすべての APPLID の UOW 情報を表示します。

applid.|generic_applid.**

この形式のオペランドは、以下の情報を表示します。

- 個々の作業単位の状態とローカル UOWID。さらに、それに続いて、
- 現在未確定であるかコミットまたはバックアウトの処理中である作業単位数の要約。

*applid.** を指定した場合、サーバーは、特定の APPLID の UOW 情報を表示します。その APPLID は、シスプレックス内の 1 つの領域だけに対応する必要があります。

*generic_applid.** を指定した場合、サーバーは、指定された総称 APPLID に一致するすべての APPLID の UOW 情報を表示します。

このキーワードは、**UOWS** と省略することができます。

UOWID=applid.uowid

アプリケーション ID とローカル作業単位 ID (UOWID) によって識別される、1 つの未解決作業単位の状態を表示します。ローカル UOWID は、16 個の 16 進数字として入力します。

このキーワードは、**UOW** と省略することができます。

統計の要約の **DISPLAY** オプションおよび **PRINT** オプション:

以下のパラメーターを使用して、統計を表示または印刷します。

CFSTATS

カップリング・ファシリティ・インターフェースのアクセスおよびサーバーからの応答に関する統計を表示します。

このキーワードは、**CFST** または **STATSCF** として指定することもできます。

POOLSTATS

プール・リスト構造全体としての使用統計を表示します。これはカップリング・ファシリティ・アクセス要求が返した情報に基づいているため、コマンドが発行された先のサーバーを介して行われた最新の要求と同じだけの現行性しかありません。

このキーワードは、**POOLST** と省略することができます。

TABLESTATS

コマンドの発行先であるサーバーによって処理された、各テーブルに対する要求の統計のほか、作業単位制御など、テーブル固有のものでない要求も含む、処理されたすべての要求の要約を表示します。

現行の統計インターバルの開始以来、要求の数がゼロでないテーブルだけが表示されることに注意してください。

このキーワードは、**TABLEST** として指定することもできます。

TABLESTATS={name|generic_name}

指定されたテーブル (単数または複数) の要求統計を表示します。

name サーバーによってアクセスされたプール内の特定のテーブル名。このテーブルの統計だけを返します。

generic_name

複数のテーブルに関する統計を取得するために使用できる総称名。この総称名に一致するすべてのテーブル名についての統計を返します。

このキーワードは、**TABLEST** と省略することができます。

STORAGESTATS

サーバー・アドレス・スペースの主記憶域割り振り統計を表示します。

このキーワードは、**STORAGEST** または **STGST** と省略することができます。

情報の結合リストでの **DISPLAY** および **PRINT** オプション:

これらのキーワードは、情報の結合リストを表します。

PARAMETERS

主要なパラメーター値を表示します。それらは、**POOLNAME**、**SECURITY**、**SECURITYPREFIX**、統計オプション、およびリスト構造オプションです。

このキーワードは、**PARM** または **PARMS** と省略することができます。

ALLPARAMETERS

すべてのパラメーター値を表示します。

このキーワードは、**ALLPARMS** と省略することができます。

STATISTICS

使用可能なすべての統計を表示します。

このキーワードは、**STAT** または **STATS** と省略することができます。

INITIALIZED

初期設定の完了時に通常表示されるパラメーターと統計を表示します。これは、**PARM**、**POOLSTATS**、**STGSTATS** と等価です。

このキーワードは、**INIT** と省略することができます。

ARM

ARM に関連する、以下のすべてのパラメーター値を表示します。

- **ARMELEMENTNAME**
- **ARMELEMENTTYPE**
- **ARMREGISTERED**

このキーワードは、**ARMSTATUS** としてコーディングできます。

CANCEL コマンド・オプション:

CANCEL コマンドを使用して、自動リスタートを要求することができます。

以下のパラメーターを指定します。

RESTART={NO|YES}

自動リスタートを要求するかどうかを指定せずに、サーバーを即時に終了します。デフォルト値は **RESTART=NO** です。

サーバーは、カップリング・ファシリティ接続で接続損失や構造障害からなるリカバリー不能な問題を検出すると、CANCEL RESTART=YES コマンドを使用してサーバー自体を取り消します。これにより、既存の接続は終了し、サーバーはシャットダウンされます。その後、サーバー・ジョブの新規インスタンスが開始されます。

サーバー・コマンド CANCEL RESTART=YES または MVS コマンド CANCEL jobname,ARMRESTART のいずれかを使用して、サーバーを明示的に再始動することもできます。

RESTART=YES の場合は RESTART、RESTART=NO の場合は NORESTART を単独で入力することもできます。

領域状況サーバー・プールの削除:

カップリング・ファシリティ・リスト構造を削除することにより、領域状況サーバー・プールを削除することができます。サービス・アップグレードで、またはシスプレックスのクリーンな再始動が必要なときにこれを行う可能性があります。

始める前に

構造を削除できるのは、プールに接続しているサーバーがない場合だけです。それ以外の場合、MVS はコマンドをリジェクトします。

このタスクについて

例:

```
SETXCF FORCE,STRUCTURE,STRNAME=DFHCFLS_poolname
```

次に示す XCF コマンドを発行することにより、プールの削除が正常に完了したかどうかを確認できます。

```
D XCF STRUCTURE,STRNAME=DFHCFLS_poolname
```

CICS 領域およびワークロードの実行中に領域状況サーバー構造を削除すると、CICSplex SM WLM 最適化機能が使用不可になります。

次のタスク

削除済みのプールに対してサーバーを始動しようとする (またはプールを再ロードしようとする)、そのプールが新規の構造として割り振られます。新規に割り振られる構造は、現在アクティブな CFRM ポリシーによって指定されたサイズとロケーションの属性、およびサーバー初期設定パラメーターによって決定されたその他の値 (特に **MAXTABLES**) を使用します。

既存のターゲット領域スコープへの領域の追加

この例では、Web ユーザー・インターフェース (WUI) を使用して、既存のワークロードを中断せずに、既存のターゲット・スコープ内の領域数を増加する方法について説明します。

ワークロード仕様 WLSPAY01 を介して CICSplex PLXPROD1 でワークロード・ルーティングを実装しており、作業要求がターゲット領域 CICSAPA01、CICSAPA02、および CICSAPA03 に経路指定されていると想定します。

これらのターゲット領域はすべて CICS システム・グループ CSGTGTS1 に属しています。そして今、4 番目の領域 CICSPA04 をグループ CSGTGTS1 に追加しようとしています。領域 CICSPA04 は CICSplex PLXPROD1 に定義されていて、ルーティング領域 CICSPT01 を実行し、このルーティング領域にリンクされています。

1. 以下の手順を実行して、ターゲット領域 CICSPA04 を CICS システム・グループ CSGTGTS1 に追加します。

- a. Web ユーザー・インターフェースのメインメニューから「管理ビュー」>「トポロジー管理ビュー」>「システム定義」をクリックして、「CICS システム定義」表形式ビューを開きます。

現行のコンテキストが PLXPROD1 ではない場合は、「コンテキスト」フィールドに PLXPROD1 を指定して「最新表示」をクリックします。

- b. CICSPA04 のエントリーを選択して「CICS システム・グループへの追加」ボタンをクリックします。「CICS システム・グループへの追加」ビューが表示されます。
 - c. 「メンバーが加わるグループ」フィールドに名前 CSGTGTS1 を入力し、「はい」をクリックします。
2. 以下の手順を実行して、ターゲット領域 CICSPA04 の CICSplex SM 定義を更新します。
 - a. 「CICS システム定義」表形式ビューから CICSPA04 のエントリーを選択し、「更新」をクリックします。
 - b. メニューから、「ワークロード・マネージャー状況」フィールドを「はい」に変更します。「はい」をクリックして更新を確定します。

この変更は、ターゲット領域 CICSPA04 を次回開始した時に有効になります。

ターゲット領域 CICSPA04 が開始されたら、「アクティブ・ワークロード・ビュー」>「アクティブなワークロードでのターゲット領域」をクリックして、ワークロードがアクティブであることを確認できます。これにより、「アクティブなワークロードでのターゲット領域」ビューが開きます。このビューには、このワークロード内の作業要求を経路指定できるすべてのターゲット領域 (CICSPA04 を含む) が表示されます。

ターゲット領域スコープからの領域の除去

CICS システム・グループ CSGTGTS1 は、CICSplex PLXPROD1 内に 4 つのターゲット領域 (CICSPA01、CICSPA02、CICSPA03、および CICSPA04) を含んでいます。作業要求はこれらのターゲット領域にルーティングされ、ルーティングはワークロード仕様 WLSPAY01 によって制御されます。

この例では、Web ユーザー・インターフェース (WUI) を使用して、アクティブ・ワークロードを中断せずに、グループ CSGTGTS1 から領域 CICSPA04 を除去する方法について説明します。

1. CICS システム・グループ CSGTGTS1 からターゲット領域 CICSPA04 を除去するには、以下の手順を実行します。
 - Web ユーザー・インターフェースのメインメニューから「管理ビュー」>「トポロジー管理ビュー」>「システム・グループ」をクリックして、「システム・グループ定義」表形式ビューを開きます。

現行のコンテキストが PLXPROD1 ではない場合は、「コンテキスト」フィールドに PLXPROD1 を指定して「最新表示」をクリックします。

- 「システム・グループ名」フィールド内の CSGTGTS1 をクリックして詳細ビューを開き、「この **CICS** システム・グループ内の **CICS** システム」リンクをクリックします。これにより、「**CICS** システムと **CICS** システム・グループとの間のリンク」表形式ビューが開きます。
 - CICSIPA04 の項目の横にある「レコード」チェック・ボックスをクリックしてから、「除去...」ボタンをクリックします。これにより、「除去」確認ビューが開きます。
 - 「はい」をクリックして更新を確定します。
2. CICSIPA04 が除去されていることを確認するには、メインメニューから「アクティブ・ワークロード・ビュー」>「アクティブなワークロードでのターゲット領域」をクリックします。これにより、ワークロードの経路指定が可能なすべてのターゲット領域が表示された「アクティブなワークロードでのターゲット領域」ビューが開きます。CICSIPA04 はこのリストに表示されないはずです。

アクティブ・ワークロードへのルーティング領域の追加

Web ユーザー・インターフェース (WUI) を使用して、アクティブ・ワークロードを中断せずに、2 つ目のルーティング領域をそのワークロードに追加します。

ワークロード仕様 WLSPAY01 を介して CICSplex PLXPROD1 内のワークロードをまだルーティングしており、作業要求が CICSPT01 によって CICS システム・グループ CSGTGTS1 内のターゲット領域に経路指定されていると想定します。そして今度は、2 番目のルーティング領域 CICSPT02 をワークロードに追加しようとしています。領域 CICSPT02 は、(「**CICS** システム定義」ビューを使用して) CICSplex PLXPROD1 に定義されており、ターゲット領域 CICSIPA01、CICSIPA02、および CICSIPA03 を実行しており、これらの領域にリンクされています。

1. 以下の手順を実行して、CICS システム CICSPT02 の CICSplex SM 定義を更新します。
- Web ユーザー・インターフェースのメインメニューから「管理ビュー」>「トポロジー管理ビュー」>「システム定義」をクリックして、「**CICS** システム定義」表形式ビューを開きます。

現行のコンテキストが PLXPROD1 ではない場合は、「コンテキスト」フィールドに PLXPROD1 を指定して「最新表示」をクリックします。

- CICSPT02 のレコードを選択して「更新...」ボタンをクリックします。
 - 「**AOR** 動的ルーティング・モード」フィールドを「はい」に変更します。
 - 「はい」をクリックして、更新を確認します。この変更は、ルーティング領域 CICSPT02 を次回開始した時に有効になります。
2. 以下の手順を実行して、CICSPT02 をワークロード仕様 WLSPAY01 に関連付けます。
- メインメニューで、「管理ビュー」>「ワークロード・マネージャー管理ビュー」>「仕様」をクリックします。
 - 「**WLM** 仕様」ビューで、WLSPAY01 のエントリーの横にある「レコード」チェック・ボックスをクリックし、「**CICS** システムの関連付け...」をクリックします。

- 「CICS システム」フィールドに CICSPT02 と入力し、「はい」をクリックして更新を確認します。

CICSPT02 が再始動されたら、以下の手順を実行して、WLSPAY01 に追加されたことを確認できます。

- 「WLM 仕様」表形式ビューを開き、WLSPAY01 のエントリーをクリックします。これにより詳細ビューが開きます。
- 「このワークロード仕様に関連する CICS システム」リンクをクリックします。CICSPT01 と CICSPT02 の両方が、「WLM 仕様と CICS システムとの間のリンク」表形式ビューにリストされているはずです。

CICSPT02 がアクティブ・ワークロードの一部であることを確認するには、メインメニューから「アクティブ・ワークロード・ビュー」>「アクティブ・ワークロード内のルーティング領域」をクリックします。これにより、CICSPT01 と CICSPT02 の両方のエントリーを示す表形式ビューが開きます。

Quiescing a target region in an active workload

この例では、Web ユーザー・インターフェース (WUI) を使用して、アクティブ・ワークロード WLSPAY01 に属するターゲット領域 CICSPA03 を静止する方法について説明します。

このタスクは、例えば領域に保守を適用できるようにするために実行する必要がある場合があります。このタスクを実行すると、領域 CICSPT01 および CICSPT02 は、作業要求を 3 つのターゲット領域 (CICSPA01、CICSPA02、および CICSPA03) にルーティングします。

領域で作業が既に実行されているかどうかに関係なく、その領域に作業がルーティングされないようにする場合は、その領域の z/OS WLM ヘルスのオープン状況を CLOSE または IMMEDIATE に設定できます。詳しくは、202 ページの『CICSplex SM ワークロードのルーティングに対する z/OS WLM ヘルス・サービスの効果』を参照してください。

1. ワークロード WLSPAY01 に関連付けられたターゲット領域をリストします。
 - Web ユーザー・インターフェースのメインメニューから、「アクティブ・ワークロード・ビュー」>「アクティブなワークロードでのターゲット領域」をクリックして、「アクティブなワークロードでのターゲット領域」ビューを開きます。

現行のコンテキストが PLXPROD1 ではない場合は、「コンテキスト」フィールドに PLXPROD1 を指定して「最新表示」をクリックします。

- 「ワークロード名」フィールドに WLSPAY01 と入力し、「最新表示」をクリックします。これにより、「アクティブなワークロードでのターゲット領域」ビューが再表示されます。CICSPA01、CICSPA02、および CICSPA03 という 3 つの CICS 領域がリストされます。それらの状況はアクティブです。
2. 以下の手順を実行して、ターゲット領域 CICSPA03 を静止します。
 - 「アクティブなワークロードでのターゲット領域」ビューで、ターゲット領域 CICSPA03 のエントリーを選択し、「静止...」ボタンをクリックします。これにより、「静止」確認ビューが開きます。

- 「はい」をクリックしてアクションを確認します。「アクティブなワークロードでのターゲット領域」ビューが再表示され、CICSPA03 の「ターゲット領域状況」値が QUIESCED に変更されているのが示されます。新しい要求はこのターゲット領域に経路指定されませんが、すでにそこで実行中の作業は完了まで実行することが許可されます。

特定のターゲット領域への特定のトランザクションのルーティング

Web ユーザー・インターフェース (WUI) を使用して、いくつかのワークロード分離要件を CICSplex SM に定義します。

この例では、Web ユーザー・インターフェース (WUI) を使用して、トランザクション PAY1 を CICS システム・グループ CSGTGTS1 に属するターゲット領域 CICSPA02 に常に経路指定する方法について説明します。作業は引き続き CICSplex PLXPROD1 で行われ、グループ CSGTGTS1 のターゲット領域内の単一 CICSPT01 からのワークロード・ルーティングが有効になります。

1. 経路指定されるトランザクションが EXEC CICS START を使用して開始される場合は、ROUTABLE として定義する必要があります。
2. 以下のようにして、トランザクション・グループを作成します。
 - メインメニューで、「管理ビュー」>「ワークロード・マネージャー管理ビュー」>「トランザクション・グループ定義」をクリックします。これにより、「トランザクション・グループ定義」ビューが開きます。

現行のコンテキストが PLXPROD1 ではない場合は、「コンテキスト」フィールドに PLXPROD1 を指定して「最新表示」をクリックします。

- 「作成...」ボタンをクリックして、以下の情報を入力します。

名前	TRGPAY01
説明	PAY1 を CICSPA02 に送信
親和性の関係および存続時間チェック状況	ACTIVE
主検索基準	USERID

残りのフィールドは、ブランクのままにしても、デフォルトを受け入れても構いません。

「はい (Yes)」をクリックします。「トランザクション・グループ定義」ビューが再表示され、トランザクション・グループ TRGPAY01 の名前が現在表示されています。

3. 以下の手順を実行して、トランザクション PAY1 をトランザクション・グループ TRGPAY01 に追加します。
 - 「トランザクション・グループ定義」ビューで TRGPAY01 のエントリーを選択し、「トランザクションの追加...」ボタンをクリックします。
 - 「トランザクション名」フィールドに PAY1 という名前を入力し、「はい」をクリックして確定します。「トランザクション・グループ定義」ビューが再表示されます。
4. 以下のようにして、ワークロード定義を作成します。
 - メインメニューから「管理ビュー」>「ワークロード・マネージャー管理ビュー」>「定義」をクリックします。これにより、「WLM 定義」ビューが開き、PLXPROD1 に作成済みのワークロード定義がリストされます。

- 「作成...」 ボタンをクリックして、以下の情報を入力します。

ワークロード管理定義	WLDAPAY01
説明	TRGPAY01 を CICSSPA02 に分離
トランザクション・グループ名	TRGPAY01
ターゲット・システム・セットのスコープ名	CICSSPA02

- 「はい」 をクリックして確定します。

5. ワークロード・グループを作成する。(トランザクションをルーティングするルーティング領域の開始時にワークロード定義が自動的にインストールされるようになる場合は、ワークロード・グループが不可欠です。)

- メインメニューで、「管理ビュー」>「ワークロード・マネージャー管理ビュー」>「グループ」をクリックします。これにより、「**WLM** グループ」ビューが開き、PLXPROD1 に作成済みのワークロード・グループがリストされます。
- 「作成...」 ボタンをクリックして、以下の情報を入力します。

ワークロード管理グループ	WLGPAY01
説明	WLDAPAY01 のワークロード・グループ

- 「はい」 をクリックして確定します。「**WLM** グループ」ビューが再表示されます。

6. 以下の手順を実行して、ワークロード・グループ WLGPAY01 を既存のワークロード仕様 WLSPAY01 に追加します。

- 「**WLM** グループ」ビューで、WLGPAY01 の項目を選択して「**WLM** 仕様への追加...
- 「仕様名」フィールドに既存のワークロード仕様の名前 WLSPAY01 を入力し、「はい」をクリックします。「**WLM** グループ」ビューが再表示されます。

7. 以下のようにして、ワークロード定義をワークロード・グループに追加します。

- メインメニューから「管理ビュー」>「ワークロード・マネージャー管理ビュー」>「定義」をクリックして、「**WLM** 定義」ビューを開きます。
- WLDAPAY01 の項目を選択して「**WLM** グループに追加...
- 「リソース・グループ名」フィールドに WLGPAY01 と入力して、「はい」をクリックします。「**WLM** 定義」ビューが再表示されます。

8. ワークロード・グループをアクティブ・ワークロードにインストールします。

ワークロード WLSPAY01 は既にアクティブなため、新しいワークロード・グループ WLGPAY01 を明示的にインストールする必要があります。WLGPAY01 をインストールしなかった場合は、ルーティング領域 CICSPT01 と、CICS システム・グループ CSGTGTS1 内のターゲット領域が次回開始されるまで有効になりません。

- メインメニューから「管理ビュー」>「ワークロード・マネージャー管理ビュー」>「グループ」をクリックして、「**WLM** グループ」表形式ビューを開きます。
- WLGPAY01 の項目を選択して、「インストール...

- 「ワークロード名」フィールドに WLSPAY01 と入力し、「ワークロード所有者」フィールドに、ワークロード仕様 WLSPAY01 が作成されたシステムの SYSID を入力します。

「はい」をクリックして確定します。

CICSplex PLXPROD1 で既にアクティブなワークロード仕様を再使用しており、ワークロード・グループはインストール済みのため、この例で定義したワークロード分離は即時に有効になります。

「WLM 定義」ビューを開いて、新しいワークロード定義 WLDAPY01 がアクティブなことを確認できます。このビューには、ワークロード WLSPAY01 内の WLDAPY01 のエントリーが含まれているはずです。任意のユーザーによって任意の端末からトランザクション PAY1 が次回開始された時、CICSplex SM はそれをターゲット領域 CICSPA02 に経路指定します。

指定されたユーザーから特定のターゲット領域への特定のトランザクションのルーティング

この例では、Web ユーザー・インターフェース (WUI) を使用して、指定されたユーザーから特定のターゲット領域に特定のトランザクションをルーティングする方法について説明します。

このタスク例では、前の例 (249 ページの『特定のターゲット領域への特定のトランザクションのルーティング』) を改良して Web ユーザー・インターフェースの使用方法について再び説明します。今回は、ユーザー ID 値が、トランザクションのルーティング先の判別の追加要因になります。トランザクション PAY6、PAY7、PAY8、および PAY9 は、ユーザー ID USRPAY03 から開始された時、CICSplex PLXPROD1 内のターゲット領域 CICSPA03 にルーティングされる必要があります。

1. トランザクション・グループを作成します。

- Web ユーザー・インターフェースのメインメニューから「管理ビュー」>「ワークロード・マネージャー管理ビュー」>「トランザクション・グループ定義」をクリックします。これにより、「トランザクション・グループ定義」表形式ビューが開きます。

現行のコンテキストが PLXPROD1 ではない場合は、「コンテキスト」フィールドに PLXPROD1 を指定して「最新表示」をクリックします。

- 「作成...」ボタンをクリックして、以下の情報を入力します。

名前	TRGPAY02
説明	USRPAY03 のトランザクションを CICSPA03 に送信
親和性の関係および存続時間チェック状況	ACTIVE
主検索基準	USERID

残りのフィールドはブランクのままにするか、デフォルトを受け入れることができます。

- 「はい」をクリックして確定します。「トランザクション・グループ定義」表形式ビューが再表示されます。
2. 以下の手順を実行して、グループ TRGPAY02 に属するトランザクションを識別します。
- 「トランザクション・グループ定義」表形式ビューで TRGPAY02 のエントリーを選択し、「トランザクションの追加...」ボタンをクリックします。
 - 「トランザクション名」フィールドに最初のトランザクションの名前 PAY6 を入力し、「はい」をクリックして確定します。

さらに 3 つのトランザクション PAY7、PAY8、および PAY9 に対してこのステップを繰り返します。

3. 以下のようにして、ワークロード定義を作成します。
- メインメニューで、「管理ビュー」>「ワークロード・マネージャー管理ビュー」>「定義」をクリックします。これにより、「WLM 定義」表形式ビューが開き、PLXPROD1 に作成済みのワークロード定義がリストされます。
 - 「作成...」ボタンをクリックして、以下の情報を入力します。

ワークロード管理定義	WLDAPAY02
説明	TRGPAY02 を CICSSPA03 に分離
トランザクション・グループ名	TRGPAY02
ユーザー ID	USRPAY03
ターゲット・システム・セットのスコープ名	CICSSPA03

- 「はい」をクリックして確定します。
4. 以下のようにして、既存ワークロード定義をワークロード・グループに追加します。
- メインメニューから「管理ビュー」>「ワークロード・マネージャー管理ビュー」>「定義」をクリックして、「WLM 定義」ビューを開きます。
 - WLDAPAY0 のエントリーを選択し、「WLM グループへの追加」ボタンをクリックします。
 - 「リソース・グループ名」フィールドに WLGPAY01 (前の例で作成したワークロード・グループの名前) を入力します。ワークロード・グループ WLGPAY01 は、アクティブ・ワークロード仕様 WLSPAY01 に既に関連付けられています。
 - 「はい」をクリックして確定します。
5. 以下の手順を実行して、新しいワークロード定義をアクティブ・ワークロードにインストールします。

グループ WLGPAY01 は既にアクティブ・ワークロード WLSPAY01 に関連付けられているため、そのグループに対して行った変更は、ルーティング領域 CICSPT01 と CICS システム・グループ CSGTGTS1 内のターゲット領域が次回開始されるまで有効になりません。新しいワークロード定義を即時に有効にするには、以下の手順を実行して、WLSPAY01 に明示的にインストールする必要があります。

- 「WLM 定義」ビューを再度開き、WLDAPAY02 のエントリーを選択し、「インストール...」ボタンをクリックします。
- 「ワークロード名」フィールドに WLSPAY01 と入力し、「ワークロード所有者」フィールドに、ワークロード仕様 WLSPAY01 が作成されたシステムの SYSID を入力します。

ワークロード定義 WLDAPY02 をアクティブ・ワークロード WLSPAY01 に明示的にインストールしたため、この例で定義したワークロード分離要件は即時に有効になります。

疑似会話型トランザクションの受け入れ

この例では、Web ユーザー・インターフェース (WUI) を使用して、親和性が存在する複数のトランザクションが確実に同じターゲット領域にルーティングされるようにする方法について説明します。

以前と同様に、作業は CICSplex PLXPROD1 内で行い、CICSPT01 から CICS システム・グループ CSGTGTS1 内のターゲット領域にトランザクションをルーティングします。

- 1. 以下のとおり、トランザクション・グループを作成します。
 - メインメニューで、「管理ビュー」>「ワークロード・マネージャー管理ビュー」>「トランザクション・グループ定義」をクリックします。これにより、「トランザクション・グループ定義」表形式ビューが開きます。

現行のコンテキストが PLXPROD1 ではない場合は、「コンテキスト」フィールドに PLXPROD1 を指定して「最新表示」をクリックします。

- 「作成...」ボタンをクリックして、以下の情報を入力します。

名前	TRGPAY03
説明	疑似会話型トランザクション
親和性の関係および存続時間チェック状況	ACTIVE
主検索基準	USERID
親和性の関係	USERID
親和性存続時間	PCONV

「親和性の関係」フィールドと「親和性存続時間」フィールドに入力する必要がある点に注意してください。これらの値は、このグループ内のトランザクションが疑似会話型トランザクション (PCONV) を構成しており、それらのトランザクションが同じユーザー ID (USERID) から開始されている間はこの親和性が継続することを CICSplex SM に示します。それらのいずれかが別のユーザー ID から開始された場合、CICSplex SM は別のターゲット領域を選択することができます。もちろん、その 2 つ目のターゲット領域で同じタイプの親和性が動作します。ブランクのままになっているフィールドをすべて無視するか、デフォルトを受け入れることができます。

- 「はい」をクリックして確定します。「トランザクション・グループ定義」表形式ビューが再表示されます。
- 2. 以下の手順を実行して、グループ TRGPAY03 に属するトランザクションを識別します。
 - 「トランザクション・グループ定義」表形式ビューで TRGPAY03 のエントリーを選択し、「トランザクションの追加...」ボタンをクリックします。
 - 「トランザクション名」フィールドに最初のトランザクション PAY2 の名前を入力し、「はい」をクリックして確定します。

さらに 3 つのトランザクション PAY3、PAY4、および PAY5 に対してこのステップを繰り返します。

PAY2 が疑似会話を開始し、PAY5 がそれを終了するのを確認できます。

3. 以下のようにして、ワークロード定義を作成します。
 - メインメニューから「管理ビュー」>「ワークロード・マネージャー管理ビュー」>「定義」をクリックします。これにより、「**WLM** 定義」ビューが開き、PLXPROD1 に作成済みのワークロード定義がリストされます。
 - 「作成...」ボタンをクリックして、以下の情報を入力します。

ワークロード管理定義	WLDAPAY03
説明	TRGPAY03 を同じターゲット領域へ
トランザクション・グループ名	TRGPAY03
ターゲット・システム・セットのスコープ名	CSGTGTS1

- 「はい」をクリックして確定します。
4. 以下のとおり、ワークロード定義をワークロード・グループに追加します。
 - メインメニューから「管理ビュー」>「ワークロード・マネージャー管理ビュー」>「定義」をクリックして、「**WLM** 定義」表形式ビューを開きます。
 - WLDAPAY03 の項目を選択して「**WLM** グループに追加...」ボタンをクリックします。
 - 「リソース・グループ名」フィールドに WLGPAY01 と入力します。
 - 「はい」をクリックして確定します。
 5. グループ WLGPAY01 は既にアクティブ・ワークロード WLSPAY01 に関連付けられているため、そのグループに対して行った変更は、ルーティング領域 CICSPT01 と CICS システム・グループ CSGTGTS1 内のターゲット領域が次回開始されるまで有効になりません。新しいワークロード定義を即時に有効にするには、WLSPAY01 に明示的にインストールする必要があります。新しいワークロード定義をアクティブ・ワークロードにインストールするには、以下の手順を実行します。
 - 「**WLM** 定義」ビューを再度開き、WLDAPAY03 のエントリーを選択し、「インストール...」ボタンをクリックします。
 - 「ワークロード名」フィールドに WLSPAY01 と入力し、「ワークロード所有者」フィールドに、ワークロード仕様 WLSPAY01 が作成されたシステムの SYSID を入力します。

ワークロード定義 WLDAPAY03 をアクティブ・ワークロード WLSPAY01 に明示的にインストールしたため、CICSplex SM は、この疑似会話型トランザクションを即時受け入れることができます。この単一ワークロード仕様 WLSPAY01 をワークロード・ルーティングとワークロード分離の両方に使用できることに注意してください。その理由は、親和性の関係と「親和性存続時間」のデフォルト値を WLSPAY01 に指定しなかった ためです。これらの値を指定していた場合は、ワークロード・ルーティング用とワークロード分離用に別々のワークロード仕様を作成しなければなりませんでした。

ワークロード定義の非アクティブ化

この例では、Web ユーザー・インターフェース (WUI) を使用してワークロード定義を非アクティブにする方法について説明します。

この例では、Web ユーザー・インターフェース (WUI) を使用して、例 251 ページの『指定されたユーザーから特定のターゲット領域への特定のトランザクションのルーティング』で作成されたワークロード定義 WLDAPAY02 を非アクティブ化する方法について説明します。

1. 以下の手順を実行して、アクティブ・ワークロード定義を表示します。
 - メインメニューで、「アクティブ・ワークロード・ビュー」>「定義」をクリックします。これにより、「アクティブ・ワークロード定義」ビューが開きます。

現行のコンテキストが PLXPROD1 ではない場合は、「コンテキスト」フィールドに PLXPROD1 を指定して「最新表示」をクリックします。

- 「アクティブ・ワークロード定義」ビューで WLDAPAY01 と入力し、「最新表示」をクリックします。ワークロード仕様 WLDAPAY01 に関連付けられたアクティブ・ワークロード定義がリストされます。
2. 以下の手順を実行して、ワークロード定義 WLDAPAY02 を破棄します。
 - a. WLDAPAY02 の項目を選択して「破棄...」ボタンをクリックします。これにより、「破棄」確認ビューが開きます。
 - b. 「はい」をクリックして、アクションを確定します。

アクティブ・ワークロード定義を非アクティブにすると、その定義に関連付けられているすべてのトランザクション・グループは、同じワークロード内の別のワークロード定義によって参照されていない場合、同様に非アクティブになることに注意してください。

アクティブ・ワークロード定義の更新

この例では、Web ユーザー・インターフェース (WUI) を使用して、アクティブ・ワークロード定義を更新し、それをアクティブ・ワークロードに再インストールする方法について説明します。

例 251 ページの『指定されたユーザーから特定のターゲット領域への特定のトランザクションのルーティング』で、トランザクション・グループ TRGPAY02 を作成し、ワークロード定義 WLDAPAY02 に指定しました。この例では、TRGPAY02 を削除し、それを、既に作成されている新しいトランザクション・グループ TRGPAY04 に置き換える方法について説明します。

1. 以下の手順を実行して、アクティブ・ワークロード定義を表示します。
 - メインメニューで、「アクティブ・ワークロード・ビュー」>「定義」をクリックします。これにより、「アクティブ・ワークロード定義」表形式ビューが開きます。

現行のコンテキストが PLXPROD1 ではない場合は、「コンテキスト」フィールドに PLXPROD1 を指定して「最新表示」をクリックします。

- 「アクティブ・ワークロード定義」ビューで WLDAPAY01 と入力し、「最新表示」をクリックします。ワークロード仕様 WLDAPAY01 に関連付けられたアクティブ・ワークロード定義がリストされます。

WLDAPAY02 の「ワークロード所有者のシステム ID」フィールド内の値をメモします (この例では CM1B)。

2. ワークロード定義 WLDAPAY02 を更新します。

- メインメニューから「管理ビュー」>「ワークロード・マネージャー管理ビュー」>「定義」をクリックして、「WLM 定義」表形式ビューを開きます。
 - WLDAPY02 のエントリーを選択して「更新...」ボタンをクリックします。「WLM 定義」作成ビューが表示されます。
 - 「WLM 定義」作成ビューで、「トランザクション・グループ名」を TRGPAY04 に変更し、「説明」テキストを「Separate TRGPAY04 to CICSSPA03」に変更します。
 - 「はい (Yes)」をクリックします。「WLM 定義」表形式ビューが再表示されます。
3. 以下の手順を実行して、更新されたワークロード定義を WLSPAY01 にインストールします。
- 「WLM 定義」表形式ビューで WLDAPY02 のエントリーを選択し、「インストール...」をクリックします。「インストール」ビューが表示されます。「ワークロード名」フィールドに WLSPAY01 と入力します。「ワークロード所有者」フィールドに、ステップ 1 (255 ページ) でメモした、ワークロード所有者の 4 文字の ID を入力します。「はい (Yes)」をクリックします。更新されたワークロード定義がワークロード WLSPAY01 にインストールされます。
4. 以下の手順を実行して、更新されたワークロード定義がインストールされていることを確認します。
- メインメニューで、「アクティブ・ワークロード・ビュー」>「定義」をクリックします。これにより、「アクティブ・ワークロード定義」表形式ビューが開き、更新された定義が表示されます。TRGPAY02 が TRGPAY04 に置換されていることを確認します。
5. 以下の手順を実行して、トランザクション・グループ TRGPAY02 が非アクティブであり、トランザクション・グループ TRGPAY04 がアクティブになっていることを確認します。
- メインメニューから「アクティブ・ワークロード・ビュー」>「トランザクション・グループ」をクリックして、2 つのトランザクション・グループの状況を表示します。

注:

ワークロード定義内の「ユーザー ID」、「端末 LU 名」、「BTS プロセス・タイプ」、または「ターゲット・システム・セットのスコープ名」の各フィールドを更新すると、ワークロード定義は動的に再インストールされません。ワークロード定義をアクティブ・ワークロードに再インストールするには、以下を実行する必要があります。

- 「アクティブ・ワークロード定義」表形式ビューから「破棄...」ボタンをクリックして、アクティブ・ワークロード定義を破棄します。
- ワークロード管理の「定義」ビューから「インストール...」ボタンをクリックして、ワークロード定義をワークロードにインストールします。

代替方法として、変更済み属性を使用してワークロード定義を再インストールするには、バッチ API プログラムを使用して、影響のあるアプリケーションへのアクセスを無効にし、「アクティブ・ワークロード定義」ビューを破棄し、「WLM 定義」ビューをインストールし、影響のあるアプリケーションを再び有効にします。

ワークロードからのアクティブ・トランザクションの破棄

この例では、Web ユーザー・インターフェース (WUI) を使用して、ワークロードからアクティブ・トランザクションを破棄する方法について説明します。

1. アクティブ・トランザクションを表示します。

- メインメニューで、「アクティブ・ワークロード・ビュー」>「動的トランザクション」をクリックします。

現行のコンテキストが PLXPROD1 ではない場合は、「コンテキスト」フィールドに PLXPROD1 を指定して「最新表示」をクリックします。

- 「アクティブ・ワークロードの動的トランザクション」表形式ビューに、ワークロード仕様 EYUWLS02 に関連付けられたアクティブ・トランザクションが表示されます。

2. 以下の手順を実行して、トランザクション PAY2 を破棄します。

- 「アクティブ・ワークロードの動的トランザクション」ビューからトランザクション PAY2 を選択し、「強制...」ボタンをクリックします。「強制」確認ビューが表示されます。
- 「はい」をクリックして、アクションを確定します。

ワークロード仕様の更新

この例では、Web ユーザー・インターフェースを使用したワークロード仕様の更新方法について説明します。

このタスクについて

この例では、更新されるワークロード仕様は、230 ページの『ワークロードの管理』の例で作成した WLSPAY01 です。

このタスクの影響について注意深く考えてください。特に、更新されたワークロード仕様は、すぐに有効にはなりません。更新をすぐに有効にするためには、ワークロード仕様に関連付けられているルーティング領域と、ルーティング領域によるトランザクションのルーティング先であるターゲット領域の両方を停止してから再始動する必要があります。

プロシージャ

1. ワークロード仕様 WLSPAY01 を更新します。

- a. Web ユーザー・インターフェースのメインメニューから「管理ビュー」>「ワークロード・マネージャー管理ビュー」>「仕様」をクリックして、「WLM 仕様」(WLMSPEC) 表形式ビューを開きます。

現行のコンテキストが PLXPROD1 ではない場合は、「コンテキスト」フィールドに PLXPROD1 を指定して「最新表示」をクリックします。

- b. WLSPAY01 のエントリーを選択して「更新」ボタンをクリックします。
- c. 「アルゴリズム・タイプ」フィールドを、QUEUE から GOAL に変更します。
- d. 「はい (Yes)」をクリックします。ビューが再表示され、更新された WLSPAY01 のエントリーが示されます。

2. 以下の手順を実行して、「アクティブ・ワークロード」ビューを表示します。

- a. メインメニューから、「アクティブ・ワークロード・ビュー」>「アクティブ・ワークロード」をクリックします。

- b. 「アクティブ・ワークロード」表形式ビューで、ワークロード名 WLSPAY01 を入力し、「最新表示」をクリックします。

「アクティブ・ワークロード」表形式ビューが再表示されます。WLM 仕様 WLSPAY01 のアルゴリズム・タイプがまだ QUEUE であることが確認できます。これは、行われた変更を領域 CICSPT01 が認識していないことが原因です。

次のタスク

更新されたワークロード仕様を即時に有効にしたい場合は、「CICS 領域」ビューを使用して、ルーティング領域とルーティング先のターゲット領域を停止し、再開始してください。これらの領域は、すべて一緒にシャットダウンする必要があり、指定されたワークロードに参加している CICS エレメントを持つ各 CMAS がメッセージ EYUWM0410I を発行して、ワークロード仕様が正常に終了したことを示すまでは再始動してはなりません。ワークロードのメンバーである CICS 領域がメッセージ EYUWM0410I を受け取る前に再始動すると、既存のワークロード仕様が引き続き使用され、ワークロード仕様の更新は有効になりません。ルーティング領域が再始動された後、「アクティブ・ワークロード」テーブル表示形式ビューを表示すると、「アルゴリズム・タイプ」フィールドが GOAL に更新されていることが確認できます。

ワークロード・ルーティングのターゲット領域を選択するためのリアルタイム分析の使用

ワークロード・ルーティング中のターゲット領域の選択に役立つデータを生成するには、CICSplex SM のリアルタイム分析機能を使用します。

処理をルーティングできるターゲット領域ごとに、一時ストレージ・キューの項目数がモニターされます。項目数が 50 を超えると、リアルタイム分析イベント通知 (重大度 HS) および外部メッセージが発行されます。イベント通知が発行されると、CICSplex SM のワークロード・ルーティング機能がその通知を受け、最適なターゲット領域を選択する際に、標準キュー・アルゴリズム基準と併せてその情報を使用します。

CICS システム・グループ CSGTGTS3 がすでに作成されていて、このグループに、4 つのターゲット領域 (CICSPA01、CICSPA02、CICSPA03、および CICSPA04) が含まれています。これらのターゲット領域は現在実行されています。これらのターゲット領域の間で現在処理をルーティングしているのは、ルーティング領域 CICSPT03 です。

1. 以下のようにして、リアルタイム分析評価定義を作成します。
 - メインメニューで、「管理ビュー」 > 「RTA MAS リソース・モニター」 > 「評価」をクリックします。これにより、「評価定義」表形式ビューが開き、PLXPROD1 に作成済みの評価定義がリストされます。

現行のコンテキストが PLXPROD1 ではない場合は、「コンテキスト」フィールドに PLXPROD1 を指定して「最新表示」をクリックします。

- 「作成...」ボタンをクリックして、以下の情報を入力します。

名前
説明

RTEPAY15
TSQ NUMITEMS > 50

サンプリング間隔	300
リソース・テーブル名	MTSQGBL
評価リソースのインスタンス ID	*
結果セット内の結果の評価方式	ANY
分離タスク・インディケーター	NO
評価されたフィールド名	PUTQAUX
評価タイプ	VALUE
評価の論理演算子	GT
評価データ値	50
結果が基準と合う時に割り当てる重大度	HS
エクストラ情報を提供できるビュー名	MTSQGBL

- ・ 「はい」をクリックして新しい評価定義を作成します。
2. 以下のようにして、リアルタイム分析アクション定義を作成します。
- ・ メインメニューで、「管理ビュー」 > 「**RTA MAS** リソース・モニター」 > 「アクション」をクリックします。これにより、「アクション定義」ビューが開きます。
 - ・ 「作成...」ボタンをクリックして、以下の情報を入力します。

アクション	RTAPAY15
説明	NUMITEMS IN TSQ > 50
イベント・オプションの生成	YES
有益な情報を提供できるビュー名	TSQ
アクションの優先順位	255
イベント発生時に送信するメッセージ	AUX TSQUEUE PUTQ ITEMS > 50
外部メッセージ・オプションの生成	YES
イベント発生時に送信した外部メッセージ	AUX TSQUEUE PUTQ ITEMS > 50
イベント切断時に送信した外部メッセージ	AUX TSQUEUE PUTQ ITEMS < 50
SNA 総称アラート・オプションの生成	NO
MVS 自動リスタート	NO

- ・ 「はい」をクリックして新しい RTA アクション定義を作成します。「アクション定義」表形式ビューが再表示されます。
3. 以下のようにして、分析定義を作成します。
- ・ メインメニューで、「管理ビュー」 > 「**RTA MAS** リソース・モニター」 > 「定義」をクリックします。これにより、「**RTA** 定義」ビューが開きます。
 - ・ 「作成...」ボタンをクリックして、以下の情報を入力します。

名前	RTDPAY15
説明	TSQ NUMITEMS FOR WLM /RTA
実行評価変更ストリング	NO
分析間隔	300
アクション定義名	RTAPAY15
VLS 発生までの真の評価回数	0001
VLS 解決までの偽の評価回数	0001
LS 発生までの真の評価回数	001
LS 解決までの偽の評価回数	001
LW 発生までの真の評価回数	001
LW 解決までの偽の評価回数	001

- RTGPAY09 のエントリーの隣にある「レコード」チェック・ボックスをクリックして、「**RTA** 仕様への追加...」ボタンをクリックします。「**RTA** 仕様への追加」ビューが表示されます。
 - 「**RTA** 仕様名」フィールドに RTSPAY09 と入力し、「はい」をクリックします。「**RTA** グループ」表形式ビューが再表示されます。
8. 以下のようにして、分析仕様のスコープを設定します。
- メインメニューで、「管理ビュー」 > 「**RTA MAS** リソース・モニター」 > 「仕様」をクリックします。これにより、「**RTA** 仕様」表形式ビューが開きます。
 - RTGPAY09 のエントリーの隣にある「レコード」チェック・ボックスをクリックして、「**CICS** グループとの関連付け...」ボタンをクリックします。「**CICS** グループとの関連付け」ビューが表示されます。
 - 「**CICS** システム・グループ」フィールドに CSGTGTS3 と入力し、「強制」オプションを選択します。「はい」をクリックします。「**RTA** 仕様」表形式ビューが再表示されます。
9. 以下のようにして、CSGTGTS3 のターゲット領域でリアルタイム分析をアクティブにします。
- メインメニューで、「管理ビュー」 > 「**RTA** システム使用可能性モニター」 > 「**CICS** システム定義」をクリックします。これにより、「**CICS** システム定義」表形式ビューが開きます。
 - **CICS** システム CICS001 のエントリーの隣にある「レコード」チェック・ボックスをクリックして、「更新...」ボタンをクリックし、以下の情報を入力します。

CICS システム定義名	CICS001
説明	システム A 上のターゲット領域 1
リアルタイム分析状況	YES
システム使用可能性モニター・イベントの重大度	NO
ストレージ不足 (SOS) イベントの重大度	NO
システム・ダンプ・イベントの重大度	NO
トランザクション・ダンプ・イベントの重大度	NO
CICS 最大タスク数到達イベントの重大度	NO
CICS 停止イベントの重大度	NO

- 「はい」をクリックして、変更を確認します。**CICS** システム定義が更新されて、変更 (これは永続的な変更です) が即時に適用されます。**CICS** システム CICS001 を再始動する必要はありません。ターゲット領域 CICS002、CICS003、および CICS004 について、上記のステップを繰り返します。
10. ワークロード仕様 WLSPAY02 は、CSGTGTS3 内のターゲット領域の間でのワークロード・ルーティングにすでに使用されています。仕様を更新して、リアルタイム分析データを標準のターゲット領域選択基準に追加する必要があります。以下のようにして、ワークロード仕様を更新します。

- メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ワークロード・マネージャー管理ビュー」 > 「仕様」をクリックします。これにより、「WLM 仕様」表示形式ビューが開きます。
- WLSPAY02 のエントリーの隣にある「レコード」チェック・ボックスをクリックして、「更新...」ボタンをクリックし、以下の情報を入力します。

名前	WLSPAY02
説明	ターゲット領域選択に RTA を使用するワークロード
主検索基準	USERID
デフォルト・ターゲット・スコープ	CSGTGTS3
RTA イベント名	RTDPAY15
異常終了する確率の許容レベル	0
許容できる異常終了ロードしきい値	0
アルゴリズムのタイプ	QUEUE

- 「はい」をクリックして、仕様を更新します。

「RTA イベント」フィールドの値は、ステップ 3 (259 ページ) で作成した分析定義の名前であることに注意してください。

ルーティング領域 CICSPT03 と CICS システム・グループ CSGTGTS3 内のターゲット領域が次に開始されると、ルーティング領域は、標準のキュー・アルゴリズム基準と、ターゲット領域を選択するための分析定義 RTDPAY15 の両方を使用して、トランザクションをターゲット領域の間でルーティングします。

EXEC CICS START TERMID を使用した動的ルーティング

Web ユーザー・インターフェース (WUI) を使用して、端末 ID とトランザクション ID を指定する **EXEC CICS START** で開始されるトランザクションの動的ルーティング機能をセットアップし、GOAL アルゴリズムを使用してターゲット領域を選択します。

注: **EXEC CICS START TERMID** の動的ルーティングを試行する前にシステム要件を確認する必要があります。CICSplex SM ワークロード要件を参照してください。

この例では、CICSPA01 で実行されているプログラムが、端末 TRM1 に関連付けられた **EXEC CICS START** を使用して開始され、トランザクション PAY1 を実行します。このトランザクションには 2 秒の応答時間が必要です。端末 TRM1 は、領域 CICSPT01 に関連付けられています。トランザクション PAY1 は、CICSPT01 に接続されている任意の領域 (つまり、CICSPA01、CICSPA02、または CICSPA03) で実行できます。

この例では、前出の例の一部として既に作成されている環境が使用されます。作業は、CICS システム・グループ CSGTGTS1 内の、TOR CICSPT01 と、AOR の CICSPA01、CICSPA02、および CICSPA03 から成る CICSplex PLXPROD1 で行います。トランザクション・グループ TRGPAY03 には、トランザクション PAY1、PAY2、PAY3、および PAY4 が関連付けられています。ワークロード定義 WLDAPY03 は、グループ TRGPAY03 内のトランザクションを CICS システム・グループ CSGTGTS1 内のターゲット領域に経路指定する必要があることを CICSplex SM に指示するよう定義されています。

GOAL アルゴリズムを使用するため、必要な応答時間を持つサービス・クラスを MVS Workload Manager に定義し、そのサービス・クラスをトランザクション PAY1 に割り振る必要があります。例えば、次のように指定できます。

- 平均応答時間 2 秒のサービス・クラス Fast。
- Classification Subsystem CICS をトランザクション ID の PAY1 およびサービス・クラス Fast に関連付ける分類規則。

サービス・クラスについて詳しくは、ワークロード内の作業の管理内の GOAL アルゴリズムに関する情報を参照してください。

CICSplex SM で以下を実行します。

1. ワークロード仕様を作成します。

- メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ワークロード・マネージャー管理ビュー」 > 「仕様」をクリックします。これにより、「WLM 仕様」表形式ビューが開きます。

現行のコンテキストが PLXPROD1 ではない場合は、「コンテキスト」フィールドに PLXPROD1 を指定して「最新表示」をクリックします。

- 「作成」ボタンをクリックして、以下の情報を入力します。

名前	WLSODYN01
説明	動的ルーティング START
主検索基準	USERID
デフォルト・ターゲット・スコープ	CSGTGTS1
異常終了する確率の許容レベル	0
許容できる異常終了ロードしきい値	0
アルゴリズムのタイプ	GOAL

- 「はい」をクリックして、仕様を作成します。

以下を指定する必要があります。

- 仕様の名前 (この例では WLSODYN01)。
- 主検索基準値。この例では USERID が示されていますが、実際には、主検索基準値は、単純なワークロード・ルーティングには効果がないため、USERID を指定するか LUNAME を指定するかは問題ではありません。これは、ある種のワークロード分離にのみ使用されますが、CICSplex SM は、このワークロード仕様はワークロード分離に使用されないことをこの段階では認識していないため、値を指定する必要があります。
- デフォルト・ターゲット・スコープ値。これは、トランザクションを経路指定できる単一のターゲット領域、またはターゲット領域のグループです。
- アルゴリズム・タイプ値。ターゲット領域の選択基準は、トランザクションの応答時間が 2 秒であるという要件に基づいているため、この例では GOAL を使用します。

「はい」をクリックすると「WLM 仕様」表形式ビューが再表示され、新しいワークロード仕様 WLSODYN01 のエントリーが示されます。

2. 次のステップは、CICSplex SM に、ワークロード要求を CSGTGTS1 内のターゲット領域にルーティングする領域について示すことです。ワークロード仕様をルーティング領域に関連付けるには、以下の手順を実行します。

- 「**WLM** 仕様」表形式ビューで、WLSHDYN01 仕様の項目の横にある「レコード」チェック・ボックスをクリックし、「**CICS** システムの関連付け」ボタンをクリックします。
 - 「**CICS** システム」フィールドに WLSHDYN01 と入力し、「はい」をクリックします。「**WLM** 仕様」表形式ビューが再表示され、ルーティング領域とワークロード仕様との間の関連付けが作成されていることを確認できます。
3. 以下の手順を実行して、ルーティング領域でワークロード・ルーティングをアクティブにします。
- メインメニューから「管理ビュー」 > 「トポロジー管理ビュー」 > 「システム定義」をクリックします。これにより、「**CICS** システム定義」表形式ビューが開きます。
 - CICSPT01 の項目の横にある「レコード」チェック・ボックスをクリックしてから、「更新」ボタンをクリックします。
 - 「ワークロード・マネージャー状況」フィールドで、ドロップダウン・メニューから「はい」を選択します。この変更は、CICSPT01 を次回開始した時に有効になります。
4. ターゲット領域でワークロード・ルーティングをアクティブにします。
- メインメニューから「管理ビュー」 > 「トポロジー管理ビュー」 > 「システム定義」をクリックします。これにより、「**CICS** システム定義」表形式ビューが開きます。
 - CICSPTA01 の項目の横にある「レコード」チェック・ボックスをクリックしてから、「更新」ボタンをクリックします。
 - 「**AOR** 動的ルーティング・モード」フィールドで、ドロップダウン・メニューから「はい」を選択します。この変更は、ターゲット領域 CICSPTA01 を次回開始した時に有効になります。

ターゲット領域の CICSPTA02 および CICSPTA03 について、このステップを繰り返します。

5. 以下の手順に従ってプログラム定義をインストールします。
- メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「プログラム定義」をクリックします。これにより、「プログラム定義」表形式ビューが開きます。
 - CICSPTA01 の項目の横にある「レコード」チェック・ボックスをクリックしてから、「更新」ボタンをクリックします。
 - ドロップダウン・ボックスから、「動的ルーティング状況」フィールドを「いいえ」に設定します。
 - 「はい」をクリックして確定します。「プログラム定義」表形式ビューが再表示されます。
 - CICSPTA01 の項目の横にある「レコード」チェック・ボックスをクリックしてから、「インストール」ボタンをクリックします。
 - 「ターゲット・スコープ値」フィールドに CICSPTA01 と入力し、「はい」をクリックして確定します。

この手順を CICSPTA02 および CICSPTA03 についても繰り返します。

6. 以下の手順に従ってトランザクション定義をインストールします。
- メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「トランザクション定義」をクリックします。これにより、「トランザクション定義」表形式ビューが開きます。

- 「トランザクション定義」ビューで PAY1 を選択し、「インストール」ボタンをクリックします。「ターゲット・スコープ値」フィールドに CICSPA01 と入力します。
- 「はい」をクリックして確定します。

トランザクション定義を更新してこれらのフィールドの値を指定したり、トランザクション定義をインストールする時に上書き値を指定したりすることができます。

このタスク例では、要求側領域 CICSPA01 で実行されているプログラムは、トランザクション ID の PAY1 と端末 ID の TRM1 を指定する **EXEC CICS START** コマンドを発行します。START コマンドは、指定された端末を所有する TOR である CICSPT01 に機能シッパされます。CICSPT01 は、リージョン領域として機能し、ターゲット領域を選択する動的ルーティング出口を呼び出します。CICS システム・グループ CSGTGS1 内のすべての AOR は潜在的ターゲット領域です。実際のターゲット領域は、応答時間 2 秒の GOAL 基準に基づいて選択されます。CICSplex SM は、トランザクション PAY1 のサービス・クラス、およびそのサービス・クラスが割り振られるターゲット領域の ID を CICSplex SM 保守テーブルから入手します。

インバウンド・クライアント DPL 要求の動的ルーティング

この例では、Web ユーザー・インターフェース (WUI) を使用して CICS クライアントからの DPL 要求の動的ルーティング機能をセットアップする方法と、GOAL アルゴリズムを使用してターゲット領域を選択する方法について説明します。

始める前に

インバウンド・クライアント DPL 要求の動的ルーティングを試行する前にシステム要件を確認する必要があります。CICSplex SM ワークロード要件を参照してください。

このタスクについて

この例では、クライアント・プログラム PAYPROG1 を呼び出すためにトランザクション PAY1 を実行する要求が受信されます。PAYPROG1 は、サーバー・プログラム PAYPROG2 に **EXEC CICS LINK** コマンドを実行します。トランザクション PAY1 には 2 秒の応答時間が必要です。

この例では、262 ページの『EXEC CICS START TERMID を使用した動的ルーティング』で使用された環境が使用されます。

GOAL アルゴリズムを使用するため、必要な応答時間を持つサービス・クラスを MVS Workload Manager に定義し、そのサービス・クラスをトランザクションに割り振る必要があります。例えば、次のように指定できます。

- 平均応答時間 2 秒のサービス・クラス Fast。
- Classification Subsystem CICS をトランザクション ID の PAY1 およびサービス・クラス Fast に関連付ける分類規則。

サービス・クラスについて詳しくは、ワークロード内の作業の管理内の GOAL アルゴリズムに関する情報を参照してください。

CICSplex SM で以下の手順を実行します。

手順

1. プログラム PAYPROG1 の動的ルーティング状況値を設定します。
 - a. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック CICS リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「プログラム定義」 > をクリックします。これにより、「プログラム定義」表形式ビューが開きます。
 - b. 現行のコンテキストが PLXPROD1 ではない場合は、「コンテキスト」フィールドに PLXPROD1 を指定して「最新表示」をクリックします。
 - c. PAYPROG1 の項目の横にある「レコード」チェック・ボックスをクリックしてから、「更新」ボタンをクリックします。ドロップダウン・ボックスから、「動的ルーティング状況」フィールドを「いいえ」に設定します。
 - d. 「はい」をクリックして確定します。
2. プログラム定義をインストールします。
 - a. 「プログラム定義」表形式ビューで、PAYPROG1 の項目の横にある「レコード」チェック・ボックスをクリックしてから、「インストール」ボタンをクリックします。
 - b. 「ターゲット・スコープ値」フィールドに CICS001 と入力します。
 - c. 「はい」をクリックして確定します。

このステップを繰り返して、ターゲット・スコープの CICS002 および CICS003 に PAYPROG1 をインストールします。

プログラム定義の定義およびインストールについて詳しくは、BAS によるリソースの作成: PROGRAM リソース定義を参照してください。

3. トランザクション定義をインストールします。
 - a. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック CICS リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「トランザクション定義」をクリックします。これにより、「トランザクション定義」表形式ビューが開きます。
 - b. 現行のコンテキストが PLXPROD1 ではない場合は、「コンテキスト」フィールドに PLXPROD1 を指定して「最新表示」をクリックします。
 - c. 「トランザクション定義」ビューで、PAY1 の項目の横にある「レコード」チェック・ボックスをクリックしてから、「インストール」ボタンをクリックします。
 - d. 「ターゲット・スコープ値」フィールドに CICS001 と入力します。
 - e. 「はい」をクリックして確定します。

このステップを繰り返して、ターゲット・スコープの CICS002 および CICS003 に PAY1 をインストールします。

トランザクション定義は、ミラー・プログラム DFHMIRS を指している必要があります。トランザクション定義の定義およびインストールについて詳しくは、BAS によるリソースの作成: トランザクション・リソース定義を参照してください。

ピアツーピア DPL 要求の動的ルーティング

この例では、Web ユーザー・インターフェース (WUI) を使用してピアツーピア DPL 要求の動的ルーティングをセットアップする方法と、GOAL アルゴリズムを使用してターゲット領域を選択する方法について説明します。

注: システム要件を確認してから、ピアツーピア DPL 要求の動的ルーティングを試行する必要があります。CICSplex SM ワークロード要件を参照してください。

この例で、トランザクション PAY1 はプログラム PAYPROG1 を実行し、それにより **EXEC CICS LINK** コマンドがプログラム PAYPROG2 に発行されます。トランザクション PAY1 には応答時間 4 秒が必要です。

この例では、262 ページの『EXEC CICS START TERMID を使用した動的ルーティング』で使用された環境が使用されます。ただし、これはピアツーピア動的リンク要求であるため、関連があるのは AOR だけであり、それぞれの AOR が要求領域、ルーティング領域、またはターゲット領域として機能できます。

GOAL アルゴリズムを使用するため、必要な応答時間を持つサービス・クラスを MVS Workload Manager に定義し、そのサービス・クラスをトランザクションに割り振る必要があります。例えば、次のように指定できます。

- 平均応答時間 4 秒のサービス・クラス Medium。
- Classification Subsystem CICS をトランザクション ID の PAY1 およびサービス・クラス Medium に関連付ける分類規則。

サービス・クラスについて詳しくは、ワークロード内の作業の管理内の GOAL アルゴリズムに関する情報を参照してください。

CICSplex SM で以下を実行します。

1. 最初のステップは、プログラム PAYPROG1 の動的ルーティング状況値を設定することです。このためには、以下の手順に従ってください。
 - メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック CICSリソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「プログラム定義」をクリックします。これにより、「プログラム定義」表形式ビューが開きます。

現行のコンテキストが PLXPROD1 ではない場合は、「コンテキスト」フィールドに PLXPROD1 を指定して「最新表示」をクリックします。

- PAYPROG1 の項目の横にある「レコード」チェック・ボックスをクリックしてから、「更新...」ボタンをクリックします。
 - ドロップダウン・ボックスから、「動的ルーティング状況」フィールドを「いいえ」に設定します。
 - 「はい」をクリックして確定します。
2. 以下の手順に従ってプログラム定義をインストールします。
 - 「プログラム定義」表形式ビューで、PAYPROG1 のエントリーの横にある「レコード」チェック・ボックスをクリックし、「インストール...」ボタンをクリックします。
 - 「ターゲット・スコープ値」フィールドに CICSPO01 と入力します。
 - 「はい」をクリックして確定します。

このステップを繰り返して、ターゲット・スコープの CICSPO02 および CICSPO03 に PAYPROG1 をインストールします。

プログラム定義の定義およびインストールの詳細については、BAS によるリソースの作成: PROGRAM リソース定義を参照してください。

プログラム定義 PAYPROG2 をこれらの領域にインストールする必要はありませんが、インストールする場合は、PAYPROG2 を動的として定義する必要があります。

3. トランザクション定義をインストールする手順は、以下のとおりです。
 - メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック CICS リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「トランザクション定義」をクリックします。これにより、「トランザクション定義」表形式ビューが開きます。

現行のコンテキストが PLXPROD1 ではない場合は、「コンテキスト」フィールドに PLXPROD1 を指定して「最新表示」をクリックします。

- 「トランザクション定義」表形式ビューで、PAY2 のエントリーの横にある「レコード」チェック・ボックスをクリックし、「インストール...」ボタンをクリックします。
- 「ターゲット・スコープ値」フィールドに CICSPA01 と入力します。
- 「はい」をクリックして確定します。

トランザクション定義は、ミラー・プログラム DFHMIRS を指している必要があります。

このステップを繰り返して、ターゲット・スコープの CICSPA02 および CICSPA03 に PAY2 をインストールします。

CICS BTS アクティビティのルーティング

Web ユーザー・インターフェース (WUI) を使用して、CICS BTS に関連したワークロードをルーティングします。

この例では、以前の例に使用されていた構成を使用します。作業は、CICS システム・グループ CSGTGTS1 内の AOR CICSPA01、CICSPA02、および CICSPA03 から成る CICSplex PLXPROD1 内で行います。これらの 3 つのシステムは、ルーティング領域とターゲット領域として機能する場合があります。この他に、BTS プロセス・タイプ用の RLS ファイルが、CICS システム・グループ CSGTGTS1 内のすべての CICS システムにアクセスできること、および CICS システム・グループ CSGTGTS1 内のすべてのシステムが相互接続されているものと想定されます。

注: CICS BTS アクティビティを試行する前にシステム要件を確認する必要があります。270 ページの『CICS BTS アクティビティの分離』および動的ルーティング用の CICS リリース要件を参照してください。

1. CSGTGTS1 内のシステムのワークロード・ルーティングをアクティブにします。
 - メインメニューから「管理ビュー」 > 「トポロジー管理ビュー」 > 「システム定義」をクリックします。これにより、「システム定義」表形式ビューが開きます。

現行のコンテキストが PLXPROD1 ではない場合は、「コンテキスト」フィールドに PLXPROD1 を指定して「最新表示」をクリックします。

- CICSPA01 の項目の横にある「レコード」チェック・ボックスをクリックしてから、「更新...」ボタンをクリックします。

- 「ワークロード・マネージャー状況」フィールドと「**AOR** 動的ルーティング・モード」フィールド両方のドロップダウン・ボックスから「はい」を選択します。これらの変更は、ターゲット領域 **CICSPA01** を次回開始した時に有効になります。

ターゲット領域の **CICSPA02** および **CICSPA03** について、このステップを繰り返します。

2. 以下のようにして、ワークロード仕様を作成します。

- メインメニューで、「管理ビュー」>「ワークロード・マネージャー管理ビュー」>「仕様」をクリックします。これにより、「**WLM** 仕様」表形式ビューが開きます。
- 「作成...」ボタンをクリックして、以下の情報を入力します。

名前	WLSCBTS
説明	CICS BTS アクティビティのルーティング
主検索基準	USERID
デフォルト・ターゲット・スコープ	CSGTGTS1
異常終了する確率の許容レベル	0
許容できる異常終了ロードしきい値	0
アルゴリズムのタイプ	LNQUEUE

- 「はい」をクリックして確定します。「**WLM** 仕様」表形式ビューが再表示されます。

以下を指定する必要があります。

- 仕様の名前 (この例では **WLSCBTS**)。
- 主検索基準値。この例では **USERID** が示されていますが、実際には、主検索基準値は単純なワークロード・ルーティングには影響しないため、**USERID** を指定するか **LUNAME** を指定するかは問題ではありません。これは、ある種のワークロード分離にのみ使用されますが、**CICSplex SM** は、この段階ではこのワークロード仕様がワークロード分離に使用されないことを判断できないため、値を指定する必要があります。
- デフォルト・ターゲット・スコープ値。これは、トランザクションを経路指定できる単一のターゲット領域、またはターゲット領域のグループです。この例では、**CSGTGTS1** を使用します。
- アルゴリズム・タイプ値。この例では、**LNQUEUE** を使用します。
LNQUEUE (リンクに依存しないキュー) アルゴリズムは、ルーティング領域とターゲット領域間のリンクのタイプを無視しますが、それ以外は、**QUEUE** アルゴリズムと同じルーティング基準を使用します。

3. ワークロード仕様をルーティング領域スコープ **CSGTGTS1** に関連付けます。

- **WLSCBTS** の項目の横にある「レコード」チェック・ボックスをクリックしてから、「**CICS** システムの関連付け...」ボタンをクリックします。
- 「**CICS** システム」フィールドに **CSGTGTS1** と入力します。
- 「はい」をクリックして確定します。「**WLM** 仕様」表形式ビューが再表示されます。

4. システム初期設定パラメーター **DSRTPGM** が **EYU9XLOP** に設定されることを指定します。

これは、**CICS** システム・グループ内の各領域のシステム初期設定パラメーターで行うか、「**CICS** システム定義」ビューを使用して行うことができます。

5. 以下の手順を実行して、ワークロード管理をアクティブにします。
 - メインメニューから、「CICSplex SM 操作ビュー」>「CICSplex 認知の MAS」をクリックします。これにより、「CICSplex 認知の MAS」表形式ビューが開きます。
 - CICS システム名 CICSPA01 をクリックして、CICSPA01 の「CICSplex 認知の MAS」詳細ビューを開きます。
 - 「ワークロード・マネージャー状況」フィールドで、ドロップダウン・リストから「はい」を選択して、この CICS システムのワークロードの管理を開始します。
 - 「変更の適用」をクリックします。

このステップを繰り返して、CICSPA02 および CICSPA03 のワークロード管理をアクティブにします。

6. BTS アクティビティが非同期で実行されるようにプログラミングします。

システム・グループ CSGTGS1 内のルーティング領域とターゲット領域を次回開始すると、BTS アクティビティは、ターゲット領域内にルーティングされます。

CICS BTS アクティビティの分離

この例では、Web ユーザー・インターフェース (WUI) を使用して、CICS BTS に関連したワークロードを分離する方法について説明します。

この例では、BTS アクティビティ BTSACT1 は親和性 LIFETIME を持っており、トランザクション ID BTS1 およびプロセス・タイプ SALES の下で実行されます。この例では、268 ページの『CICS BTS アクティビティのルーティング』の例で使用されている構成を使用します。同様に、システム初期設定パラメーター DSRTPGM は EYU9XLOP に設定されている必要があります。

注: CICS BTS アクティビティを試行する前にシステム要件を確認する必要があります。動的ルーティング用の CICS リリース要件を参照してください。

1. 以下のようにして、トランザクション・グループを作成します。
 - メインメニューで、「管理ビュー」>「ワークロード・マネージャー管理ビュー」>「トランザクション・グループ定義」をクリックします。これにより、「トランザクション・グループ定義」表形式ビューが開きます。

現行のコンテキストが PLXPROD1 ではない場合は、「コンテキスト」フィールドに PLXPROD1 を指定して「最新表示」をクリックします。

- 「作成...」をクリックして、以下の情報を入力します。

名前	TRGCBTS1
説明	CICS BTS トランザクション・グループ
親和性の関係および存続時間チェック状況	ACTIVE
主検索基準	USERID
親和性の関係	BAPPL
親和性存続時間	ACTIVITY
異常終了する確率の許容レベル	0
許容できる異常終了ロードしきい値	0
アルゴリズムのタイプ	QUEUE

ブランクのままになっているフィールドはすべて無視することができます。

- 「はい」をクリックして「トランザクション・グループ定義」表形式ビューを再表示します。ビューには、トランザクション・グループ TRGCBTS1 の名前が表示されています。

「親和性の関係」フィールドと「親和性存続時間」フィールドに入力する必要がある点に注意してください。これらの値は、このグループ内のトランザクションが BTS 親和性を構成しており、それらのトランザクションが同じ BTS アプリケーションから開始されている間はこの親和性が継続することを CICSplex SM に示します。それらのいずれかが別のアプリケーションから開始された場合、CICSplex SM は別のターゲット領域を選択することができます。もちろん、その 2 つ目のターゲット領域で同じタイプの親和性が動作します。

2. 以下の手順を実行して、グループ TRGCBTS1 内のトランザクションを識別します。
 - 「トランザクション・グループ定義」ビューから TRGCBTS1 のエントリーを選択し、「トランザクションの追加...」をクリックして「トランザクションの追加」表形式ビューを開きます。
 - 「トランザクション名」フィールドに BTS1 と入力し、「はい」をクリックして、トランザクションをトランザクション・グループに追加します。「トランザクション・グループ定義」ビューが再表示されます。
3. 以下のとおり、ワークロード定義を作成します。
 - メインメニューから「管理ビュー」>「ワークロード・マネージャー管理ビュー」>「定義」をクリックします。これにより、「WLM 定義」表形式ビューが開きます。
 - 「作成...」ボタンをクリックして、以下の情報を入力します。

ワークロード管理定義	WLDCBTS3
説明	CICS BTS アクティビティの分離
トランザクション・グループ名	TRGCBTS1
BTS プロセス・タイプ	SALES
ターゲット・システム・セットのスコープ名	CSGTGTS1

- 「はい」をクリックします。「WLM 定義」表形式ビューが再表示されます。

これらの値は、グループ TRGCBTS1 内にある、プロセス・タイプ SALES のトランザクションが、グループ CSGTGTS1 内のターゲット領域を使用する必要があることを CICSplex SM に示します。CICSplex SM は、トランザクションの開始時点で最も適切なターゲット領域を選択できます。

4. 以下のようにして、ワークロード定義をワークロード・グループに追加します。
 - 「WLM 定義」表形式ビューで、WLDCBTS1 のエントリーの横にある「レコード」チェック・ボックスをクリックし、「WLM グループへの追加...」ボタンをクリックします。「WLM グループに追加」ビューが表示されます。
 - 「リソース・グループ名」フィールドに WLGCBTS1 と入力して、「はい」をクリックします。「WLM 定義」表形式ビューが再表示されます。
5. 以下のようにして、ワークロード・グループをワークロード仕様に追加します。

- メインメニューから「管理ビュー」>「ワークロード・マネージャー管理ビュー」>「グループ」をクリックします。これにより、「WLM グループ」表形式ビューが開きます。
- 「WLM グループ」ビューで、WLDCBTS1 の項目の横にある「レコード」チェック・ボックスをクリックしてから、「WLM 仕様への追加...」ボタンをクリックします。「WLM 仕様への追加」ビューが表示されます。
- 「仕様名」フィールドに WLGCBS1 と入力して、「はい」をクリックします。「WLM グループ」表形式ビューが再表示されます。

Link3270 ブリッジ・ワークロードの管理

以下の例では、Link3270 ブリッジ・ワークロードを管理するための Web ユーザー・インターフェース (WUI) の使用方法について説明します。

Link3270 ブリッジ要求の場合、要求側領域内のクライアント・アプリケーションは、EXEC CICS LINK、EXCI、または ECI を使用して Link3270 ブリッジを呼び出し、ルーター領域で実行されているブリッジ・ルーター・プログラム DFHL3270 に通信域を渡します。Link3270 ブリッジ・ワークロードのルーティングに使用されるトランザクション ID は、通信域で DFHL3270 に渡される名前であり、必ずしも、端末またはワークステーションで入力されるトランザクション名と同じではありません。ターゲット領域には、ターゲット・トランザクションが実行されるブリッジ環境が含まれています。

CICSplex SM が使用中であり、CICSplex SM ルーティング出口 EYU9XL0P が DTRPGM システム初期設定パラメーターとして指定されている場合、DFHL3270 は CICS 分散プログラム・リンクを使用して EYU9XL0P に制御を渡します。ミラー・プログラム DFHMIRS は、DFHDYPDS 通信域で以下の情報を EYU9XL0P に渡します。

- Link3270 ブリッジ要求タイプを示す DYRTYPE 値 8
- DYRBRTK フィールド内の 8 文字のブリッジ・トークン
- DYRTRAN フィールド内の、ターゲット領域で実行されるトランザクションのトランザクション ID。

Link3270 ブリッジについて詳しくは、3270 ブリッジの紹介を参照してください。

CICS 分散プログラム・リンクについて詳しくは、CICS 分散プログラム・リンクを参照してください。

Link3270 ブリッジ・ワークロードのルーティング:

この例で、CICSPT01 はルーター領域であり、ターゲット領域は CICSPTA01、CICSPTA02、および CICSPTA03 です。

1. 現行のコンテキストが PLXPROD1 ではない場合は、「コンテキスト」フィールドに PLXPROD1 を指定して「最新表示」をクリックします。
2. すべての領域で DTRPGM システム初期設定パラメーターを EYU9XL0P に設定します。
3. 定義を更新します。
 - a. Web ユーザー・インターフェースのメインメニューから「管理ビュー」>「トポロジー管理ビュー」>「システム定義」をクリックして、「CICS システム定義」表形式ビューを開きます。

- b. CICSPT01 のエントリーを選択し、「更新」をクリックして CICSPT01 の詳細ビューを開きます。
- c. 「ワークロード・マネージャー状況」フィールドにスクロールダウンし、メニューから「はい」を選択します。
- d. 「AOR 動的ルーティング・モード」フィールドにスクロールダウンし、メニューから「はい」を選択します。
- e. ビューの最下部で「はい」をクリックして、「CICS システム定義」表形式ビューに戻ります。CICS システム定義ビューの説明については、Administering CICSplex SMを参照してください。

この変更は、ターゲット領域 CICSPA01 を次回開始した時に有効になります。

CICSPA01、CICSPA02、および CICSPA03 の各領域に対してこの手順を繰り返します。

4. CICS システム・グループを作成します。
 - a. メインメニューから「管理ビュー」>「トポロジー管理ビュー」>「システム・グループ」をクリックして、「システム・グループ定義」表形式ビューを開きます。
 - b. ビューの最下部までスクロールし、「作成」をクリックして、CSGTGTS1 というシステム・グループを作成します。

この例の CSGTGTS1 には、ターゲットとして機能する領域が含まれます。(「システム・グループ定義」ビューの説明については、Administering CICSplex SMを参照してください。)

5. ターゲット領域を CSGTGTS1 に追加します。
6. ワークロード仕様を作成します。
 - a. メインメニューから「管理ビュー」>「ワークロード・マネージャー管理ビュー」>「仕様」をクリックして、「WLM 仕様」表形式ビュー (WLMSPEC オブジェクト) を開きます。
 - b. ビューの最下部までスクロールし、「作成」をクリックし、以下の情報を指定します。

WLM 仕様名

BRSPEC01

説明 Link3270 ブリッジ・ワークロード

主検索基準

USERID

自動親和性作成オプション

該当せず

デフォルト・ターゲット・スコープ

BRITGTS1

アルゴリズムのタイプ

QUEUE

残りのフィールドは空のままにするか、デフォルトを受け入れます。

以下を指定する必要があります。

- ワークロード仕様の名前。 この例では、BRSPEC01 という名前です。

- 主検索基準値。この例では USERID が示されていますが、実際には、主検索基準値は、単純なワークロード・ルーティングには影響しないため、USERID を指定するか LUNAME を指定するかは問題ではありません。これは、ある種のワークロード分離にのみ使用されますが、CICSplex SM は、このワークロード仕様がワークロード分離に使用されないことをこの段階では認識していないため、値を指定する必要があります。
- デフォルト・ターゲット・スコープ。これは、作業が経路指定される領域または領域のグループの名前 (この例では BRITGTS1) です。
- アルゴリズム・タイプ。この例では QUEUE が使用されていますが、Link3270 ブリッジ要求には、QUEUE、LNQUEUE、GOAL、または LINGOAL のいずれかを指定できます。

7. ワークロード仕様をルーティング領域スコープに関連付けます。

- 「WLM 仕様」表形式ビューで、BRSPEC01 のレコードを選択し、「CICS システムの関連付け...」ボタンをクリックします。
- 「CICS システム」フィールドにルーティング領域スコープを入力し、「はい」をクリックします。

領域を次に再開すると、ワークロードはターゲット領域全体でルーティングされます。ワークロード仕様 BRSPEC01 がアクティブであることを確認するには、「アクティブ・ワークロード」ビュー (WLMAWORK オブジェクト) を使用できます。どのターゲット領域ワークロードがルーティングされているか確認するには、「アクティブ・ワークロードのターゲット領域」ビュー (WLMAWAOR オブジェクト) を使用できます。

Link3270 ブリッジ・ワークロードの分離:

ユーザー ID、トランザクション・グループ、または LU 名を使用して Link3270 ブリッジ・ワークロードを分離することができます。

このタスクについて

LU 名による分離は、ブリッジが自動的に生成する NETNAME を上書きする場合のみ可能です。Link3270 ブリッジ・ワークロードを分離する際の LUNAME の使用に関する制約に注意してください。詳しくは、Link3270 ブリッジ・ワークロードの分離 を参照してください。Link3270 ブリッジ・ワークロードの場合、LU 名は、ブリッジ機能自体の NETNAME ではなく、Link3270 ブリッジを開始したクライアント・トランザクションを実行している端末の 8 文字の NETNAME です。

ブリッジ機能 NETNAME で分離するには、EYU9WRAM モジュールを変更する必要があります。詳しくは、Link3270 ブリッジ・ワークロードの分離を参照してください。CICS は、同じブリッジ機能の下で実行されているすべてのトランザクションを同じターゲット領域に経路指定します。強制的に別の領域に経路指定することはできません。

以下の例では、ユーザー ID およびトランザクション・グループでブリッジ・ワークロードを分離する方法について説明します。この例では、219 ページの『ワークロード管理定義の作成』で説明されている構成と同じ構成が使用されます。

219 ページの『ワークロード管理定義の作成』で作成した定義に以下の定義を追加します。

手順

1. トランザクション・グループを作成します。

- a. Web ユーザー・インターフェースのメインメニューから「管理ビュー」 > 「ワークロード・マネージャー管理ビュー」 > 「トランザクション・グループ定義」をクリックします。「トランザクション・グループ定義」ビューが開き、PLXPROD1 に既に定義されているすべてのトランザクションがリストされます。

現行のコンテキストが PLXPROD1 ではない場合は、「コンテキスト」フィールドに PLXPROD1 を指定して「最新表示」をクリックします。

- b. ビューの最下部までスクロールし、「作成」をクリックし、以下の情報を指定します。

トランザクション・グループ名

TRGBRI01

説明 Link3270 ブリッジ・トランザクション・グループ

親和性の関係および存続時間チェック状況

ACTIVE

主検索基準

ユーザー ID

自動親和性作成オプション

該当せず

残りのフィールドはブランクのままにするか、デフォルトを受け入れることができます。

- c. 「はい」をクリックします。「トランザクション・グループ定義」ビューが再表示され、今回はトランザクション・グループ TRGBRI01 の名前が表示されています。

CICSplex SM は Link3270 ブリッジ・トランザクション間の親和性を処理しないため、「親和性の関係」フィールドと「親和性存続時間」フィールドはブランクのままにし、「自動親和性作成オプション」フィールドは「N/A」のままにします。

注: LUNAME で分離したい場合は、「トランザクション・グループ定義」作成ビューの主検索基準フィールドに LUNAME と入力する必要があります。

2. グループ TRGBRI01 内のトランザクションを識別します。

- a. 「トランザクション・グループ定義」ビューで TRGPAY03 のエントリーを選択し、「トランザクションの追加」をクリックします。
- b. 「トランザクション名」フィールドに名前 BRI1 を入力し、「はい」をクリックして確定します。「トランザクション・グループ定義」ビューが再表示されます。

3. 別の領域に経路指定したいその他のトランザクションに対して、前の 2 つのステップを繰り返してください。

4. ワークロード定義を作成します。

- a. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ワークロード・マネージャー管理ビュー」 > 「定義」をクリックします。「ワークロード管理定義」ビューが開きます。

- b. ビューの最下部までスクロールし、「作成」をクリックし、以下の情報を指定します。

ワークロード管理定義名

WLDBRI01

説明 Link3270 ブリッジ・アクティビティの分離

トランザクション・グループ名

TRGBRI01

端末 LU 名

*

ユーザー ID

BRIUSER1

BTS プロセス・タイプ

*

ターゲット・システム・セットのスコープ名

CICSPA01

これらの値は、BRIUSER1 によって入力されたグループ TRGBRI01 内のトランザクションが CICSPA01 に経路指定されることを示しています。

- c. 「はい」をクリックして確定します。

注: LUNAME で分離したい場合は、「ワークロード管理定義」作成ビューの「端末 LU 名」フィールドに LUNAME を入力する必要があります。

5. 別の領域に経路指定するトランザクション用に作成したその他のトランザクション・グループに対して、前のステップを繰り返します。
6. ワークロード・グループを作成する。 トランザクションをルーティングするルーティング領域が開始された時にワークロード定義を自動的にインストールする場合は、ワークロード・グループが不可欠です。
- a. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ワークロード・マネージャー管理ビュー」 > 「グループ」をクリックします。「ワークロード管理グループ」ビューが開き、PLXPROD1 に既に作成されているすべてのワークロードがリストされます。
- b. 「作成」をクリックして、以下の情報を入力します。
- ワークロード管理グループ名
- WLGBRI01
- 説明 WLDBRI01 のワークロード・グループ
- c. 「はい」をクリックして確定します。「ワークロード管理グループ」ビューが再表示されます。
7. ワークロード定義 WLDBRI01 とその他の作成済みのすべてのワークロード定義を WLGBRI01 に追加します。
- a. メインメニューから「管理ビュー」 > 「ワークロード・マネージャー管理ビュー」 > 「定義」をクリックします。「ワークロード管理定義」ビューが開きます。
- b. WLDBRI01 のエントリーを選択し、「WLM グループに追加」をクリックし、以下の情報を指定します。
- ワークロード管理定義名
- WLDPAY01
- 説明 Link3270 ブリッジ・ワークロード定義

リソース・グループ名

WLGBRI01

- c. 「はい」をクリックして確定します。
- d. 以前に作成したすべての追加ワークロード定義に対して、ステップを繰り返します。
8. ワークロード・グループ WLGBRI01 をワークロード仕様 BRSPEC01 に追加します。
 - a. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ワークロード・マネージャー管理ビュー」 > 「グループ」をクリックします。「ワークロード管理 (WLM) グループ」ビューが開きます。
 - b. WLGBRI01 のエントリーを選択し、「**WLM** 仕様に追加」をクリックし、「仕様名」フィールドに BRSPEC01 と入力します。
 - c. 「はい」をクリックして確定します。
9. 定義をアクティブ・ワークロードにインストールします。
 - a. メインメニューから「管理ビュー」 > 「ワークロード・マネージャー管理ビュー」 > 「定義」をクリックします。「ワークロード管理定義」ビューが開きます。
 - b. WLDBRI01 のエントリーを選択し、「インストール」をクリックしてアクティブ・ワークロードにインストールします。「はい」をクリックして確定します。作成したワークロード分離定義は即時に有効になります。
 - c. 「はい」をクリックして確定します。

次のタスク

「アクティブ・ワークロードにインストールされているワークロード定義 (Workload definition installed in active workload)」ビューを使用して、ワークロード定義がアクティブであることを確認できます。

CICSplex SM によるリソース管理

CICS リソースおよび CICSplex SM リソースはすべて、CICS Explorer、CICS 管理クライアント・インターフェース (CMCI)、WUI ビュー、または CICSplex SM API の各インターフェースのうち、任意のものを使用して管理できます。

リソース定義は以下の方法で管理します。

- CMCI を使用します。この場合、ご使用のアプリケーションからの HTTP 要求を受け入れます。
- CICS Explorer を使用します。この場合、CMCI を利用します。
- CICSplex SM Web ユーザー・インターフェース (WUI) を使用します。
- アプリケーションに直接 CICSplex SM API コマンドを追加します。

リソースの管理およびインストール

CICSplex SM データ・リポジトリに保管されている CICS リソースを管理およびインストールするには、ビジネス・アプリケーション・サービス (BAS) を使用します。

CICS システム定義 (CSD) リポジトリに保管されている CICS リソースを管理およびインストールするには、CSD を使用します。

CSD リソースの CSDGROUP を定義し、BAS リソースの DEFVER を定義する必要があります。

ビジネス・アプリケーション・サービス (BAS) によるリソースの管理

ビジネス・アプリケーション・サービスは CICSplex SM のコンポーネントで、社内のビジネス・アプリケーション用の CICS リソース定義とインストール・プロセスを管理するために使用します。

ビジネス・アプリケーション・サービス (BAS) とは

ビジネス・アプリケーション・サービス (BAS) はオンライン・リソース定義 (RDO) に取って代わり、CICSplex の物理的な場所ではなく、所属するビジネス・アプリケーションに関してその CICS リソースを管理するために使用できます。

社内における有意義なエンティティを表すリソースの集合が、ビジネス・アプリケーションとなり得ます。このアプリケーション内では、特定のタイプのリソースを一緒にグループ化し、そのグループの実行時の特性を定義できます。実行時には、インストールされるリソースの選択対象をフィルター式を使用して絞り込み、オーバーライド式を使用してリソース属性を変更することができます。

RDO の制約:

RDO は、リソースを CICS システムに定義するための従来型の CICS 方式です。

RDO を使用するとリソース定義は単一のグループおよび複数のグループに結合され、グループはグループ・リストに従って順番に処理されます。処理中に後で重複した定義が見つかった場合、先に出現した定義がオーバーライドされます。また、RDO で必要になる定義の特徴そのものと、それらの定義が複数の CICS システムで使用可能になる程度には、限界がある場合があります。CICSplex SM 環境では、RDO には次のようないくつかの欠点があります。

- リソースは、指定された CICS システムに対して割り当てられたグループに対して割り当てられます。
- リソース定義は、CSD が共用されているのでないかぎり、CICS システム全体で重複している必要があります。
- 各通信リンクの両端を明示的に定義する必要があります。

BAS の概念:

BAS を使用すると、リソースの物理的な場所とは別に、ビジネスにおけるリソースの使用法という観点からリソースの表示と管理を行えます。

このセクションでは、BAS 機能の基本的な概念について取り上げます。

論理的スコープ:

CICS リソースを CICSplex SM に対して定義すると、CICSplex 内におけるリソースの物理的な場所ではなく、指定のビジネス・アプリケーションにおいてどのように関与しているかという点においてそうしたリソースをモニターおよび制御できます。

論理的に関連付けられたリソースどうしを、いつでもそれらのリソースが常駐するかどうかに関係なく、セットとして識別し、セットとして参照することができます。

定義セットは、再利用可能であり、任意の数の他のリソースの論理的な関連付けへの関連付けが可能です。そのような論理的な関連付けは、システム構成ではなく業務要件を反映します。

スコープをアプリケーションに設定した場合、操作またはモニター・ビューにはすべて、選択基準を満たすリソースのみが表示されます。それによって、それらのリソースの管理方法を仔細に制御できるようになります。

複数バージョンのリソース定義:

BAS では、同じリソースの複数のバージョンを持つことが可能です。

同一のリソースに同じ名前で新しい定義を作成するたびに、BAS は新しいバージョン番号を割り振ります。リソースを更新した場合には、新しいバージョン番号は作成されないことに注意してください。バージョン番号で、リソース定義の特定のバージョンを指定できます。

バージョン・サポートを使用すると、ビジネス・アプリケーションを開発する際にリソース定義を作成できます。その後、例えば複数のグループ内に単一バージョンのリソースを所有したり、CICSplex 全体で複数バージョンのリソースを所有したりできます。1 つの CICS システムで一度にインストールできるリソースのバージョンは 1 つだけであることに注意してください。

中心的な役割を担うリソース定義:

RDO 定義は、CICS システム定義 (CSD) ファイルに保持されます。BAS リソースは、CICSplex 内のすべての CICS システムからアクセス可能な、主要な役割を果たすデータ・リポジトリに保持されます。

CICSplex SM データ・リポジトリ (EYUDREP) は、CICS リソース定義すべての中心的なリポジトリとして動作します。このデータ・リポジトリでは、以下のようして CICSplex で必要なリソース定義数が最小限に抑えられています。

- サポート対象のすべてのプラットフォームにおける CICS リソースの定義方法として、単一システム・イメージを用いた方法が備えられています。
- 単一の定義から、リソースのローカルとリモートのインスタンスを両方とも生成できます。
- 複数のバージョンの定義を管理します。例えば、アプリケーションのテスト・フェーズが増えていくに従って、アプリケーションの異なるバージョンのリソースを存在させることが可能です。

- 接続とセッション定義の単一の集合から、複数の CICS 通信リンクを生成できます。

CICS システム・リンク:

ビジネス・アプリケーション・サービスを使用すると、BAS リソース・オブジェクトのセットを作成して接続定義を定義し、それらをシステム・リンク (SYSLINK) オブジェクトを使用して多くの CICS 領域で再利用できます。CICS 領域間の接続を定義するためにこれまで確立されていた方式は、RDO を使用して、接続を記述する定義を手動で作成およびインストールするという方法です。各リソース定義は CICS 領域に対して固有で、他の領域では再使用できません。

システム・リンク定義には、接続のタイプ、およびペアの CICS 領域間で接続を作成するのに必要な接続定義を記述します。こうした接続定義を、同じ特性を共有する数多くのシステム・リンクを作成するためのモデルとして使用できます。

SYSLINK オブジェクトを使用すると、以下のように異なるタイプの接続を定義できます。

- MRO 接続または ISC 接続では、CONNECTION リソースと SESSION リソースを記述するための CONNDEF リソース・オブジェクトと SESSDEF リソース・オブジェクトが必要です。
- IPIC 接続では、IPCONN リソースと TCPIPService リソースを記述するための IPCONDEF リソース・オブジェクトと TCPDEF リソース・オブジェクトが必要です。

こうしたモデル定義を使用する SYSLINK をインストールすると、リソース定義は CICS 領域に自動的にインストールされて、接続が作成されます。

分散リソース・インストール:

リソースは、CICSplex SM に定義されていても、CICS または CICSplex SM のいずれかによって、該当するシステムにインストールする必要があります。

BAS を使用すると、リソースのインストールを CICS 初期化時に自動的に行うできますし、システムの実行中に動的に行うこともできます。単一のリソースを、ローカル側またはリモート側のいずれか適切な側の複数の CICS システムにインストールできます。

BAS の 2 つの形式:

BAS は、マイグレーション形式または全機能形式の 2 つの方法で使用できます。状況または必要とする精度に応じて、これらの形式のいずれか一方または両方を使用できます。

- マイグレーション形式では、リソース・グループはリソース記述に関連付けられています。この形式の場合、リソース記述はグループ・リストに似ています。282 ページの図 26 および 289 ページの『マイグレーション形式 BAS の使用』を参照してください。

- 全機能形式では、リソース割り当てを使用するのは、リソース・グループおよびリソース記述の内容の修飾や、CICS システムに対するリソースの割り当ての制御を行うときです。282 ページの図 27および 289 ページの『全機能形式 BAS の使用』を参照してください。

最も簡単な形式は、リソース記述を使用したマイグレーション形成です。リソース定義とリソース・グループを作成し、それを 1 つ以上のリソース記述に関連付けます。リソース記述は、リソースの論理的スコープを定義します。リソースは特定の CICS システムに割り当てられるので、1 つのシステムに対してはローカルで別のシステムに対してはリモートであるリソースに関しては個別の定義が必要となります。BAS に対するこの方法は、リソース記述がグループ・リストに類似しているという点で RDO を使用する際と似ています。実際には、CICSplex SM データ・リポジトリ上にご使用のバージョンの CSD を作成します。このようにすることは CICSplex SM リソース環境を設定する上で適してはいますが、BAS によって提供される機能すべてを十分に活用することはできません。

場所ではなく、ビジネス・アプリケーションの観点から考えると、リソースを管理するために BAS によって提供される機能を活用するには、リソース割り当てを使用する必要があります。リソース割り当てはグループから特定のタイプのリソースを選択し、それらを適切な CICS システムに割り当てます。リソース割り当ては、リソース記述に関連付けられています。その後、リソース記述はグループ・リストのように機能しなくなりますが、アプリケーションなどのユーザー定義の論理的なリソースの集合となります。

リソース割り当てを使用すると、個々のリソースを管理して、システムごとにその属性を変更したり、特殊な環境に適合させたりできます。以下のことを行うことができます。

- 特定のグループ内の指定のタイプのリソースを制御します。
- リソースをローカルまたはリモートとして識別し、それらを単一のリソース定義を使用して種々の CICS システムに割り当てます。
- フィルター式を指定して、グループから選択したリソースを処理します。
- オーバーライド式を指定して、特定の使用法をするためにリソース属性を変更します。

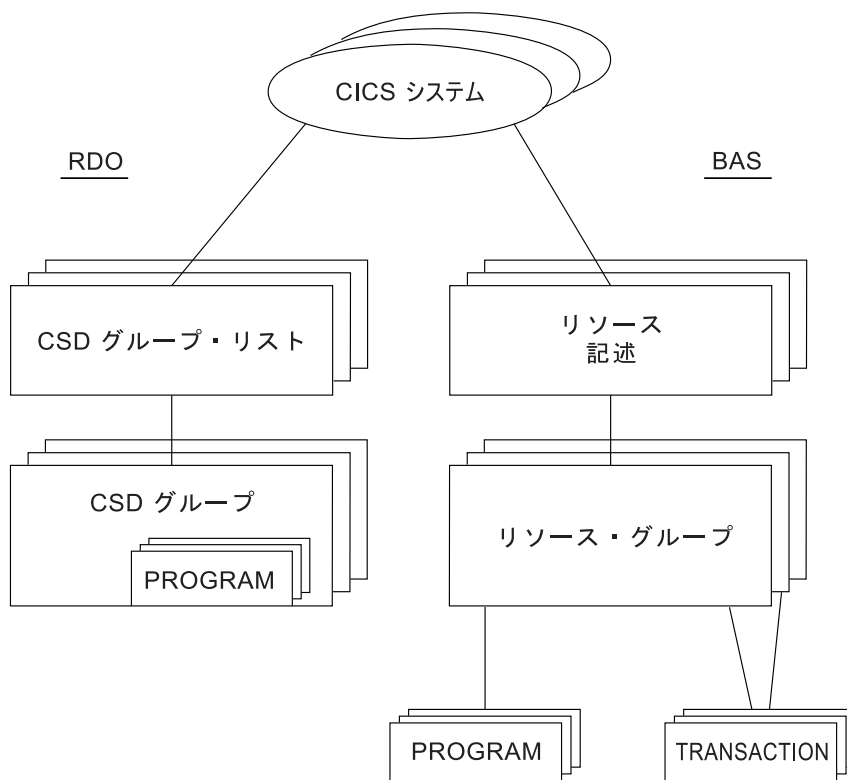


図 26. BAS からのマイグレーション

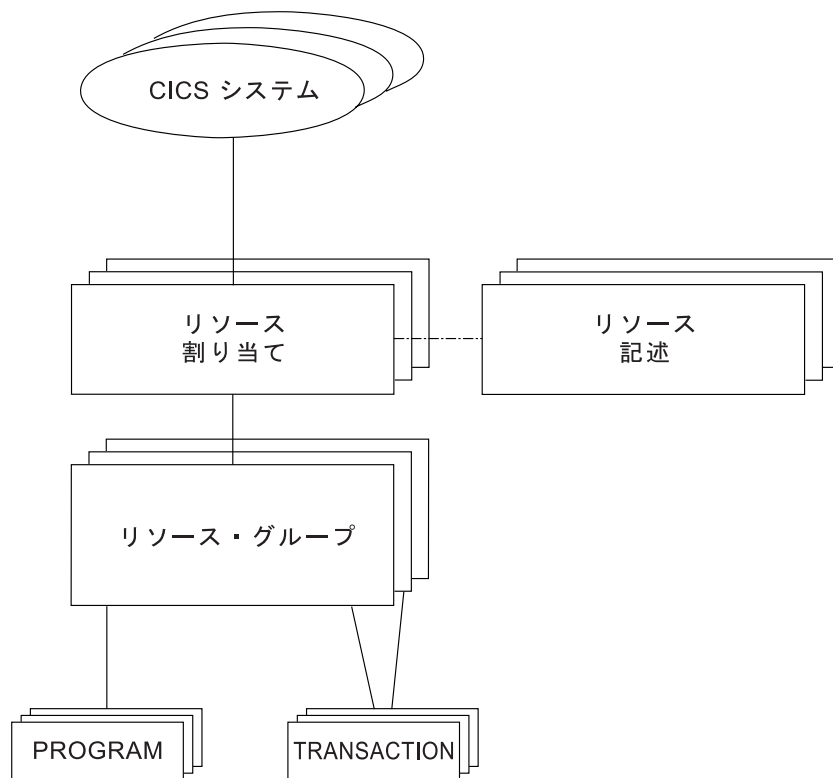


図 27. 全機能 BAS

BAS を使用する利点:

BAS を使用してリソースの管理をすると、RDO を使用する場合に比べていくつかの利点があります。

以下の利点があります。

- 使い慣れた、RDO のような定義プロセスで、インターフェース (WUI、バッチ、または API) を選択できる。
- 論理スコープ。これを使用すると、リソースを場所ではなく、ビジネス・アプリケーションの観点で扱えます。
- サポートされるすべての CICS プラットフォームにおいて、CICSplex 内のすべてのリソースの定義リポジトリが共通化される。
- 必要な定義の数の削減。必要に応じて定義を再利用し、個々の属性をオーバーライドできます。
- 一貫性のあるリソース定義と、定義プロセスの多くに対する制御。
- アプリケーションが実行される場所を定義するグループにリソースを追加することによって、リソースを追加領域に追加できる。
- アプリケーションが CICSplex SM に認識されているため、コマンドを、任意の領域グループにではなく、そのアプリケーションと一致するスコープに送信できる。

BAS の管理

BAS 環境は、以下の WUI ビュー・セットおよびリソース管理オブジェクトを使用してセットアップされます。

表 14. WUI ビュー・セットおよびリソース管理オブジェクト

WUI ビュー・セット	オブジェクト名	説明
リソース割り当て定義	RASGNDEF	リソース割り当ては、選択したリソース定義タイプの特性と、これらのリソースが CICS システムに割り当てられる方法を記述します。割り当てられるリソースはすべて 1 つのタイプ (ファイルなど) でなければならず、1 つのリソース・グループに属する必要があります。リソースは、1 つ以上の CICS システムのローカルおよびリモートの両方として割り当てることができます。リソース割り当てを使用する前に、リソース記述と関連付ける必要があります。「リソース記述定義 (Resource description definitions)」(RESDESC) ビューを参照してください。このオブジェクトは、割り当てられるリソースを選択する上で使用される属性、およびリソースが割り当てられるときに変更される属性値を指定するためにも使用されます。
リソース記述内のリソース割り当て	RASINDSC	このビューには、リソース記述、およびそれに関連付けられたリソース割り当てに関する情報が表示されます。この情報の中で、該当するリソース・グループと、CICS システム・グループに割り当てられた CICS システムが、リソースごとに示されます。
リソース割り当てで選択されたリソース	RASPROC	このビューには、指定されたリソース割り当ての処理時に処理されるリソースが表示されます。表示されるリソースは、関連付けられたリソース・グループに含まれるものの中から、提供された選択基準を使用して選択されます。
リソース記述で選択されたリソース (Resource selected by resource description)	RDSCPROC	このビューには、指定されたリソース記述の処理時に選択されるリソースが表示されます。リソースは、リソース記述に直接関連したリソース・グループから (マイグレーション形式 BAS の場合と同様)、およびリソース割り当てから、現在有効な選択基準を使用して選択できます。
リソース記述定義	RESDESC	リソース記述は、リソース・グループのセットを指定します。それによってリソース定義が指定されます。このオブジェクトは、このリソース記述の論理スコープを使用するかどうか、および関連付けられたリソース・グループの CICS システムを指定するために使用します。
リソース・グループ定義	RESGROUP	このオブジェクトは、1 つ以上の関連リソース定義を関連付けるために使用されます。リソース定義は、すべて同じタイプである場合もありますし、タイプが異なる場合もあります。
記述内のリソース・グループ (Resource groups in descriptions)	RESINDSC	このビューには、既存のリソース記述、およびそれに関連付けられたリソース・グループに関する情報が表示されます。
リソース・グループ内のリソース定義 (Resource definitions in resource groups)	RESINGRP	このビューには、既存のリソース・グループ、およびそれに関連付けられたリソース定義に関する情報が表示されます。
CICS システム・リンク定義	SYSLINK	このビューには、CICSplex 内の CICS システム間に存在するリンクに関する情報が表示されます。この情報の中で、CICS システムの名前と、リンクを定義するために使用される接続定義とセッション定義の名前が表示されます。
CICS システム・リソース (CICS system resources)	SYSRES	このビューには、指定された CICS システムに割り当てられるリソースが表示されます。リソースは、現在 CICS システムに関連しているリソース記述に基づいて選択されます。

表 14. WUI ビュー・セットおよびリソース管理オブジェクト (続き)

WUI ビュー・セット	オブジェクト名	説明
リソース定義	resDEF ここで res は、定義されているリソースを示します。	<p>リソース定義タイプごとに、その定義の属性を定義するリソース定義オブジェクトがあります。使用可能なリソース・タイプ (括弧内に表示) および CICSplex SM 用にそれらを定義するために使用される WUI ビューは以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> 「Atomservice 定義 (Atomservice definitions)」ビュー (ATOMDEF オブジェクト) 「バンドル定義 (BUNDLE definitions)」ビュー (BUNDEF オブジェクト) 「CICS-配置 JAR ファイル定義 (CICS-deployed jar file definitions)」ビュー (EJDDEF オブジェクト) 「DB2 接続定義 (DB2 connection definitions)」ビュー (DB2CDEF オブジェクト) 「DB2 エントリー定義 (DB2 entry definitions)」ビュー (DB2EDEF オブジェクト) 「DB2 トランザクション定義 (DB2 transaction definitions)」ビュー (DB2TDEF オブジェクト) 「配置済みエンタープライズ Java アーカイブ定義 (Deployed enterprise java archive definitions)」ビュー (EJCODEF オブジェクト) 「文書テンプレート定義 (Document template definitions)」ビュー (DOCDEF オブジェクト) 「FEPI ノード・リスト定義 (FEPI node list definitions)」ビュー (FENODDEF オブジェクト) 「FEPI プール定義 (FEPI pool definitions)」ビュー (FEPODEF オブジェクト) 「FEPI プロパティ定義 (FEPI property definitions)」ビュー (FEPRODEF オブジェクト) 「FEPI ターゲット・リスト定義 (FEPI target list definitions)」ビュー (FETRGDEF オブジェクト) 「ファイル定義 (File definitions)」ビュー (FILEDEF オブジェクト) 「ファイル・セグメント (File segment)」ビュー (FSEGDEF オブジェクト) 「グローバル・エンキュー (Global enqueues)」ビュー (ENQMDEF オブジェクト) 「IPIC 接続定義 (IPIC connection definitions)」ビュー (IPCONDEF オブジェクト) 「ISC/MRO 接続定義 (ISC/MRO connection definitions)」ビュー (CONNDEF オブジェクト) 「ジャーナル定義 (Journal definitions)」ビュー (JRNDEF オブジェクト) 「ジャーナル・モデル定義 (Journal model definitions)」ビュー (JRNMDEF オブジェクト) 「LIBRARY 定義 (LIBRARY definitions)」ビュー (LIBDEF オブジェクト) 「LSR プール定義 (LSR pool definitions)」ビュー (LSRDEF オブジェクト) 「マップ・セット定義 (Map set definitions)」ビュー (MAPDEF オブジェクト) 「パートナー定義 (Partner definitions)」ビュー (PARTDEF オブジェクト) 「パイプライン定義 (Pipeline definitions)」ビュー (PIPELINE オブジェクト) 「プロセス・タイプ定義 (Process type definitions)」ビュー (PROCDEF オブジェクト) 「プロファイル定義 (Profile definitions)」ビュー (PROFDEF オブジェクト) 「プログラム定義 (Program definitions)」ビュー (PROGDEF オブジェクト) 「区画セット定義 (Partition set definitions)」ビュー (PRTNDEF オブジェクト) 「要求モデル定義 (Request model definitions)」ビュー (RQMDEF オブジェクト) 「セッション定義 (Session definitions)」ビュー (SESSDEF オブジェクト) 「TCP/IP サービス定義 (TCP/IP service definitions)」ビュー (TCPDEF オブジェクト) 「一時データ・キュー定義 (Transient data queue definitions)」ビュー (TDQDEF オブジェクト) 「端末定義 (Terminal definitions)」ビュー (TERMDEF オブジェクト) 「トランザクション定義 (Transaction definitions)」ビュー (TRANDEF オブジェクト) 「トランザクション・クラス定義 (Transaction class definitions)」ビュー (TRNCLDEF オブジェクト) 「一時記憶域モデル定義 (Temporary storage model definitions)」ビュー (TSMDEF オブジェクト) 「入力条件定義 (Typeterm definitions)」ビュー (TYPTMDEF オブジェクト) IBM MQ 接続定義ビュー (MQCONDEF オブジェクト)

これらのオブジェクト間の関係を示すオブジェクト・モデルは、 285 ページの図 28および 286 ページの図 29に示されています。ビュー名称の後の括弧内にリソース名が示されています。

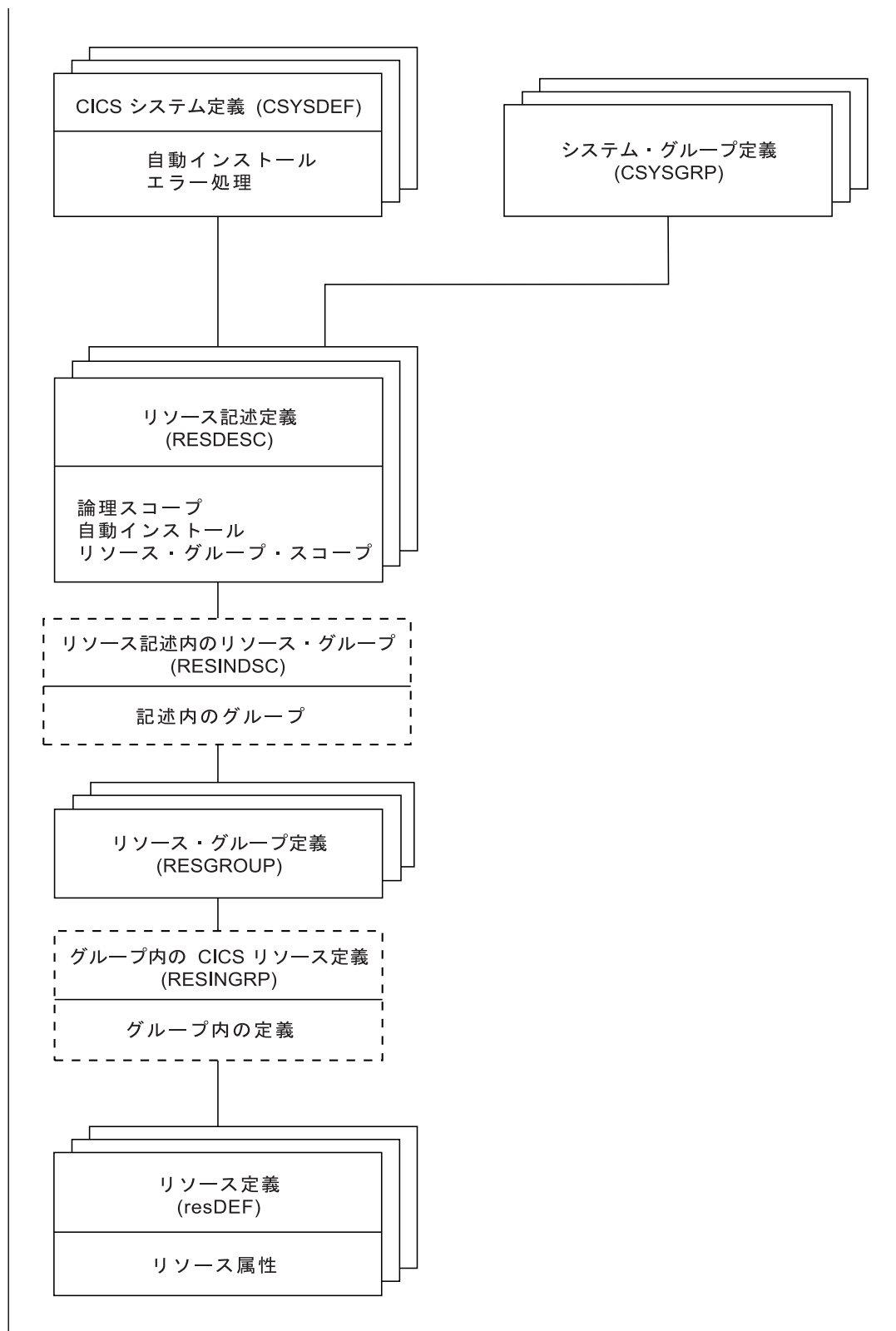


図 28. マイグレーション形式 BAS オブジェクト・モデル

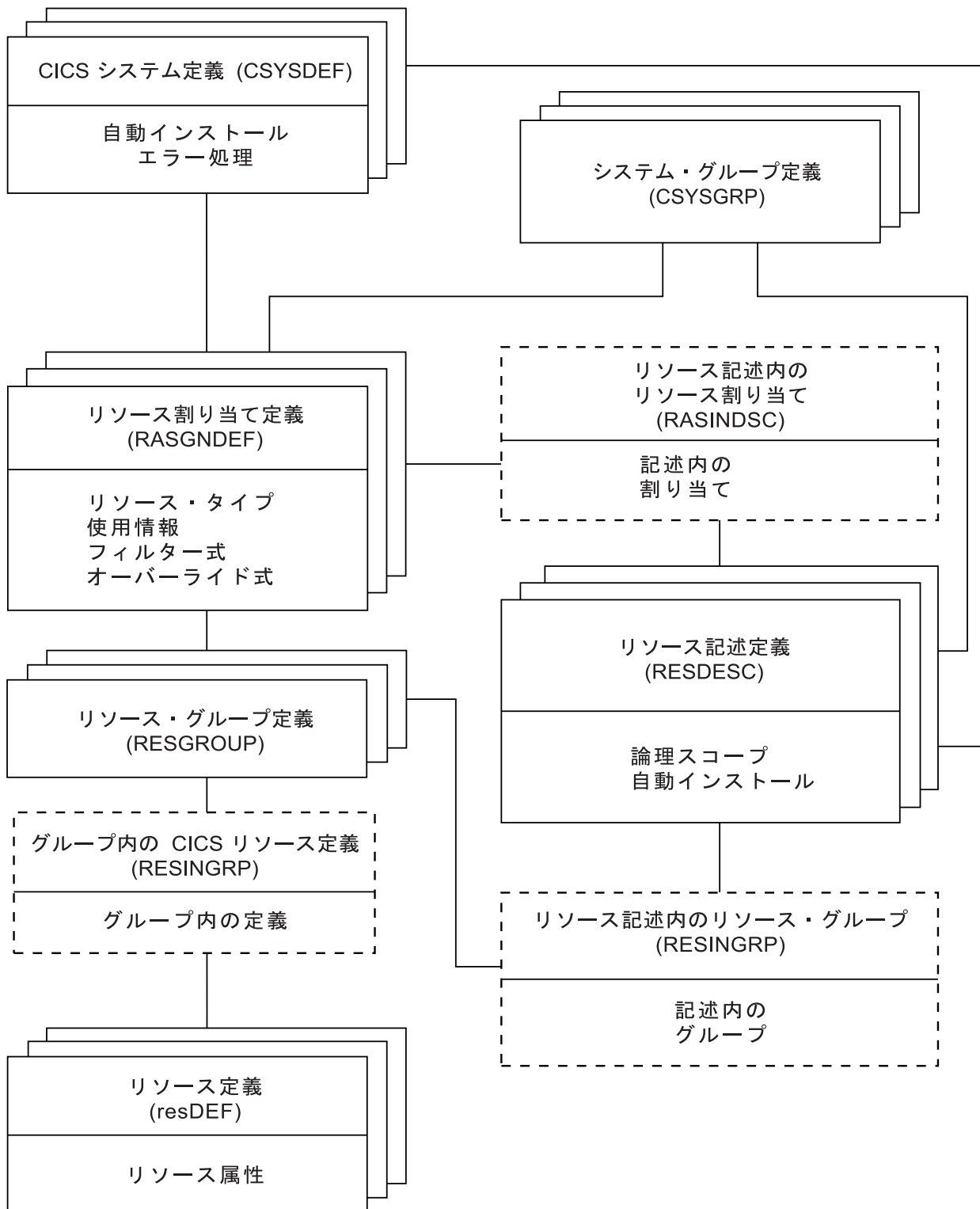


図 29. 全機能 BAS オブジェクト・モデル

リソース定義のマイグレーション

BAS でリソース定義とリソース・グループを再作成する必要はありません。既存の CSD 構造をマイグレーションできます。

このタスクについて

リソース定義とリソース・グループを CSD からデータ・リポジトリに移動するには、以下の手順を使用します。このプロセスでは、リソースとグループ間の関係が維持されます。どの時点においても、CSD のすべてまたは一部をマイグレーションしたり、複数の CSD をマイグレーションしたりすることができます。

手順

1. DFHCSDUP ユーティリティ・ルーチンの EXTRACT コマンドを使用して、CSD レコードを読み取ります。
2. CICSplex SM 抽出ルーチン EYU9BCSD を使用して、バッチ・リポジトリ更新機能コマンドを作成します。
3. これらのコマンドを『Administering』の『The batched repository-update facility』に入力して、リソース定義とリソース・グループ、およびそれらをリンクするオブジェクトを作成します。

リソースの定義

BAS を使用して CICSplex 全体のリソース定義を定義し、保守することができます。データ・リポジトリ内にリソース定義オブジェクトを作成することにより、大量のリソース定義を作成するためのテンプレートとして、これらのオブジェクトを使用できます。

CICSplex SM のリソースの定義は、CICS RDO に似ています。リソースを定義するには、リソース定義オブジェクトを作成します。定義内でリソースの属性について記述すると、すべてのリソースが出現するごとに定義する必要がなくなります。大量のリソースを作成するためのテンプレートとして、少量のリソース定義を活用できます。リソース定義は、CICSplex のデータ・リポジトリに保管されます。

CICSplex SM リソース定義オブジェクトと CICS リソース定義の相違点は、以下のとおりです。

- 同じリソース定義は、すべてのサポート対象のプラットフォームにおいて CICSplex 内のすべての CICS 領域で使用できます。
- CICSplex SM に対して、各リソースのすべての属性 (ローカル値とリモート値の両方を含む) を定義できます。CICSplex SM は、リソース定義が CICS 領域に割り当てる際に使用する適正な属性のサブセットを判別します。
- ご使用のリソースのインスタンスすべてを初めから定義する必要はありません。テンプレートとなるリソース定義を作成し、それを類似した属性値、あるいはまったく同じ属性値を持つ数多くのリソースに使用できます。CICSplex SM に対してオーバーライド と呼ばれる一時的または永続的な変更を指定し、異なる一群の値を持つリソースを作成できます。
- 同一の名前が付けられたリソース定義の複数のバージョンを作成できます。各バージョンは事実上異なるリソース定義で、異なる CICS システムで使用したり、

異なるシステム要件に対して使用したりできます。例えば、システムの開発とテスト用に、種々のリソース要件がある場合があります。『リソースの妥当性検査』を参照してください。

以下の 3 つの方法でリソース定義オブジェクトを作成できます。

- CICS Explorer の管理ビューを使用するか、Web ユーザー・インターフェースの BAS 管理ビューと定義ビューを使用する。
- バッチ・リポジトリ更新機能を使用する (『Administering』の『The batched repository-update facility』を参照してください)。
- CICSplex SM API を使用する (Developing CICSplex SM applicationsを参照してください)。

リソースの妥当性検査:

BAS は、RDO と同様に多くの同一リソース定義の検査を行います。

それぞれのリソースが定義およびインストールされるたびに、BAS は以下の検査を行います。

- リソースの個別の属性
- 相互に依存しているリソース属性
- リリース固有のリソース属性

また BAS は、それぞれのリソースのセットの整合性を検査します。リソース・セットに変更を加えるたびに、BAS は追加または更新されているリソースに CICS システムに既にあるリソースと競合していないかどうかを検査します。例えば、同じリソースの異なるバージョンを同じ CICS システムに割り当てようとしたり、ローカルおよびリモートの両方で 1 つのリソースを割り当てようとしたりすると、セット不整合エラーが出ます。

また BAS には MAP 機能が備えられていて、この機能を使用すると、リソース関連が希望通りかどうかを検査できます。この機能を使用して、階層のどの点からでも、リソース関連の構造を表示できます。

リソース・グループの定義:

リソース・グループは、1 つの単位として管理する関連したリソース定義セットです。リソース・グループは、「リソース・グループ (**Resource group**)」ビュー (RESGROUP オブジェクト) を使用して定義されます。1 つのグループに含まれるリソース定義は、タイプが同じであっても異なっても構いませんが、通常は何らかの共通点があります。それらは、特定のアプリケーションまたは通信ネットワークでの使用法によって論理的に関連している場合もありますし、特定のサイトでの使用法によって地理的に関連している場合もあります。

グループを構成できるリソース定義の数または組み合わせには特に制限はありません。ただし、どのリソースにおいても、一度に 1 つのリソース・グループに含めることができるのは 1 つのバージョンのみです。リソース定義の各バージョンは、異なるリソース・グループで保守する必要があります。

マイグレーション形式 **BAS** の使用

マイグレーション形式 **BAS** を使用すると、リソース・グループはリソース記述 に直接関連付けられます。

リソース記述は、論理スコープを使用しているかどうか、およびそのリソース記述に関連付けるリソース・グループの **CICS** システムを指定します。 285 ページの図 28を参照してください。

リソースとリソース・グループをマイグレーションまたは定義した場合、アプリケーションを定義するためにリソース記述を作成する必要があります。リソース記述は、**RESDESC** オブジェクトを使用して定義します。リソース記述は、エンティティとして管理される 1 つ以上のリソース・グループに直接関連付けられます。マイグレーション形式 **BAS** モデルでは、この関係は論理スコープを表すと見なすことができますが、すべてのリソースが特定の **CICS** システムまたは **CICS** システム・グループと結び付けられるという点において、リソース記述は実際には **RDO** グループ・リストに類似しています。

全機能形式 **BAS** の使用

全機能形式 **BAS** を使用すると、リソース・グループはリソース記述に直接関連付けられることはありません。

追加オブジェクトであるリソース割り当て (**RASGNDEF**) は、リソース・グループから選択したリソース・タイプの特性と使用法を定義します。リソース割り当てはリソース記述に関連付けられ、リソース記述はビジネス・アプリケーションを表すのに使用できます。 286 ページの図 29を参照してください。

これらのオブジェクトは、ビジネス・アプリケーションに関してリソースを定義するのに使用されます。

リソース割り当ての使用:

リソース管理の能力と柔軟性は、リソース割り当て (**RASGNDEF**) オブジェクトによって提供されます。

注: マイグレーション形式の **BAS** を使用している場合、リソース割り当てを使用しないでください。

各リソース割り当ては、1 つのリソース・グループ内の 1 つのリソース・タイプに関連しています。これを論理スコープで使用する場合またはこれが自動的にインストールされる場合には、リソース記述に関連付ける必要があります。各リソース・グループは、複数のリソース割り当てに含めることができます。

フィルター式を使用することによって、リソース割り当てによって指定されたタイプの中でリソースの選択をさらに詳細化できます。さらに、オーバーライド式を使用するとリソース属性を変更できます。属性値は、論理演算子 **AND**、**OR**、および **NOT** を使用して数の制限なく式の中で結合できます。リソース記述がスコープとして指定された場合、**CICSplex SM** は指定された選択基準を満たすリソースのみを処理します。これにより、リソースの管理の多くを制御できます。

各リソース割り当てがインストールされて論理スコープで使用される場合、それをリソース記述に追加する必要があります。リソース割り当てを作成してそれらをリ

ソース記述に追加すると、リソース・セットを、多数の CICS システムをまたぐことが可能な論理スコープで管理できます。この場合、リソース記述は実質上、リソースのユーザー定義論理セット (アプリケーションなど) になります。特定の CICS システムに複数の異なるリソース記述を関連付け、リソース記述ごとに異なるリソース・セットを示すことができます。

例えば、リソース割り当てを使用すると、以下のことが可能になります。

- リソース・グループから特定のリソースを選択する。
- リソースのローカル・インスタンスおよびリモート・インスタンスを割り当てる必要がある CICS システムを識別する。
- 特定のリソース属性の値を一時的にオーバーライドする。

リソース割り当てによって選択されたリソースは、単独では管理できません。リソースはリソース・グループのメンバーでなければならず、リソース割り当ては少なくとも 1 つのリソース記述に関連付ける必要があります。

リソース記述の使用:

全機能 BAS では、リソース記述は、アプリケーション、つまり複数の CICS システムをまたぐことができる論理的に関連付けられたリソース・セットを表します。そのためリソース記述は、アプリケーションの論理スコープを指定します。

アプリケーションの一部として使用される各リソース・グループをリソース記述に追加する必要があります。リソース・グループ全体をリソース記述に関連付けると、より大きなリソース・セット (CSD グループ・リストのようなもの) を作成できます。このようにすると、リソースをさらに効率的に管理できます。リソース記述で指定されるリソース・セットには、以下の特徴があります。

- 以降の CICSplex SM 要求で使用する論理スコープ (アプリケーションなど) として指定できます。
- CICS システムが自身を CICSplex SM に MAS として指定するときに自動的にインストールすることもできますし、CICS システムの稼働中に動的にインストールすることもできます。

これらのリソース関連の作成および管理で使用する BAS オブジェクトは、285 ページの図 28に示されています。これらの機能については 283 ページの表 14で要約されています。

アプリケーションとリソースのインストール

CSD からリソースをインストールするための代替りのオプションとして、BAS を使用して、データ・リポジトリからリソースをインストールできます。

BAS を使用すると、リソース記述または 1 つのリソース・グループをインストールすることにより、アプリケーションに関連付けられたすべてのリソースをインストールできます。BAS は、アプリケーション・リソース記述またはリソース・グループに関連付けられたリソース割り当てを適用し、それらの基準に基づいてインストールする実際のリソースを選択します。別の方法としては、個別のリソースを 1 つ以上の CICS システムにローカルまたはリモートのいずれか適切な方法でインストールできます。

BAS はリソースをシステム初期設定時に自動的にインストールすることもできますし、アクティブな CICS システムに動的にインストールすることもできます。リソースをインストールする前に、CICSplex SM はそのリソースが CICS システムに既に存在するかどうかを判別する検査を実行します。通常の状態では、リソースが存在すると、新しいリソースは重複であると見なされ、インストールされません。ただし、リソースを動的にインストールする場合、BAS では重複リソースの検査を迂回して、リソースの無条件インストールを施行するというオプションが提供されます。

自動インストール

CICS システムが初期化され、CMAS に認識されると、BAS はそのシステムに関連付けられているリソースを検討し、インストールするリソースの集合を決定します。

動的インストール

アクティブな CICS システムにリソースを動的にインストールできます。

そのためには、該当するリソース定義ビュー、または以下のいずれかのビューから「インストール (install)」ボタンをクリックします。

- 「リソース・グループ定義」ビュー。
- 「リソース記述定義」ビュー。
- 「システム・リンク定義」ビュー。

セキュリティに関する考慮事項

CICSplex SM 環境に対するリソース定義の重要性を考えると、特定のタイプのリソースまたは特定の機能に対するユーザー・アクセスの許可を実装する際には十分に注意を払う必要があります。

ユーザーにすべてのリソース定義ビューとその関連する管理ビューへのアクセスを許可することもできますし、特定のリソース・タイプの定義ビューにしかアクセスできないように制限することもできます。また例えば、あるユーザーには

「ISC/MRO 接続定義」ビュー (CONNDEF オブジェクト) と「セッション定義」ビュー (SESSDEF オブジェクト) への読み取り専用アクセスと、その他すべてのリソース・タイプには更新アクセス (リソースの作成と管理が許可される) を与えるなど、ユーザーが持つアクセス権のタイプを定義できます。BAS ビューが適切に保護されていて、許可されていないユーザーがリソースの作成と管理を行えないようにする必要があります。

また CICS TS を実行していて、EXEC CICS CREATE コマンドを使用して新しいリソースを作成する場合にも注意が必要です。コンテキストとして CICSplex で作成されるすべての定義は、CICSplex 内のすべての CMAS に自動的に配布されます。そのため、BAS オブジェクトを作成する権限をユーザーに与えるということは、CICSplex 内の任意の CICS システムにリソースをインストールする権限を付与することと同じ意味を持つことになりかねません。CICS システムが開始するとき、だれがシステムにリソースをインストールしたかについての検査はありません。

社内における CICSplex SM のセキュリティのセットアップについて詳しくは、BAS セキュリティの考慮事項を参照してください。

BAS の計画

BAS を使用すると、リソースを定義する CICSplex SM オブジェクトを作成し、アプリケーションの実行を厳密に制御するような仕方でそれらのオブジェクトをグループ化することができます。

すべての CSD リソースを CICSplex SM に同時に転送したり、最初に使用する方法を決定したりする必要がありません。1 つ以上の CSD からリソース定義レコードを抽出したり、1 つの CSD からレコードのサブセットのみを抽出したりできます。全機能 BAS を使用するよう直接移行することもできますし、BAS からマイグレーションを使用して、徐々に全機能 BAS に移行することもできます。同じ CICSplex で、RDO を使用することもできますし、BAS からマイグレーションすることも可能で、さらには全機能 BAS を使用することもできます。

このセクションでは、社内で BAS の実装計画を開始する際に考慮するであろう以下のような幾つかの質問を取り上げます。

- 抽出機能を使用する予定の場合:
 - CSD の抽出順序は?
 - 対象とするのは CSD の全レコードそれともサブセットですか?
 - 同時に複数の CSD を抽出しますか?
- マイグレーション形式の方法を使用しますか?
- 全機能 BAS を実装しますか?その場合、ビジネス・アプリケーションにおけるリソースの使用法と作成する必要がある割り当てについて考慮する必要があります。
- 自動的にインストールするリソースと、動的にインストールするリソースはどれですか?
- PLT 処理の前に必要な定義はどれですか?PLT フェーズ 2 処理の前に必要な定義が CSD になければなりません。
- リソースのインストール場所はどこですか?
- CSD で定義されていないリソースを手動で定義する必要がありますか?
- 実装する必要があるセキュリティー手段は何ですか?(291 ページの『セキュリティーに関する考慮事項』を参照してください)。

CICS Interdependency Analyzer は、アプリケーション・リソース・フローについて計画し理解するのに役立ちます。以下について表示されます。

- トランザクション・リソースの依存関係; つまり、正常に実行されるために、個別の CICS トランザクションで使用され、トランザクションが依存しているリソースの集合です。
- トランザクションの親和性; つまり、相互に親和性を持っているトランザクションのグループ。この場合、グループ全体が同じ領域にインストールされるか、特定の領域内になければなりません。

CICS Interdependency Analyzer について詳しくは、CICS Interdependency Analyzer for z/OS の概要を参照してください。

BAS の実装

このセクションは、CICSplex に BAS を実装するために行える経路指定について取り上げています。

BAS のマイグレーションの作成:

BAS を使用できるように移行するためのプロセスの最初のステージは、CICS から CICSplex SM にリソースをマイグレーションすることです。

- リソース定義、リソース・グループ、およびそれらの間の関係を、CSD から CICSplex SM データ・リポジトリに移動します。 287 ページの『リソース定義のマイグレーション』で取り上げられているこのプロセスにより、中間のリソース階層が提供されます。これは、各リソース定義がリソース・グループ内にあるという点において CEDA に非常によく似ています。
- CSD 上に保留されていないリソースの定義とグループを作成します。
- 各リソース・グループをリソース記述に関連付けて、アプリケーションを作成します。

これで、CICSplex SM システムを完全に申し分なく実行できるようになりましたが、リソース割り当てがないので、BAS によって提供される特別な機能を活用することはできません。

CEDA 定義を抽出すると、『リソース割り当てを使用するまでのマイグレーション』で説明されているように、リソース定義を完全な BAS 機能にマイグレーションすることができます。

リソース割り当てを使用するまでのマイグレーション:

同時にすべてのリソースをリソース割り当てにマイグレーションする必要はありません。

「リソース割り当て定義」ビュー (RASGNDEF オブジェクト) を使用して、対象となる特定のリソースを識別し、それらからリソース定義との関連付けを削除した後、リソース割り当てを作成します。リソース割り当てがうまく行えたなら、次に別の一群のリソース定義を定義できます。

リソース定義のプロセスに移行し十分に機能するようになってきたなら、リソース・グループをリソース記述との直接的な関連付けから削除し、代わりに 1 つ以上のリソース割り当てに指定します。

注: 同じリソース記述を使用して、リソース・グループ全体と、リソース割り当て内で識別される選択済みリソースの両方を管理できます。リソース割り当て機能を活用し始めるには、基礎となるリソース定義のいくつかを更新する必要がある場合があります。例えば、以前に CICS システムにデフォルトのまま関連付けられていたリソース定義の場合、別の CICS システムにローカルまたはリモートのリソースとして割り当てするにはその前に属性を追加しなければならないこともあります。

推奨されている方法:

社内で BAS 機能を実装することにする場合、まず該当するオブジェクトを定義する必要があります。

このセクションでは、これまでのセクションを要約しています。以下を実行する必要があります。

- 287 ページの『リソース定義のマイグレーション』で説明されているように、CSD からリソース定義とリソース・グループを抽出します。以下の方法を使用することもできます。
 - 適切なリソース定義ビューを使用して、リソース定義を作成します。
 - 「リソース・グループ定義」ビューを使用して、リソース・グループ (RESGROUP オブジェクト) を作成します。
- 「リソース割り当て定義」ビューを使用して、リソース割り当て (RASGNDEF オブジェクト) を作成します。
- 「リソース記述定義」ビューを使用して、リソース記述 (RESDESC オブジェクト) を作成し、先ほど作成した定義と割り当てに関連付けます。

その後、これらのオブジェクト間の関連を作成するには以下のようにします。

- 適切なリソース定義ビューを使用して、リソース定義をリソース・グループ (RESINGRP オブジェクト) に追加します。
- 「リソース・グループ定義」(RESGROUP) ビューを使用して、リソース・グループをリソース記述 (RESINDESC オブジェクト) に追加します。
- 「リソース割り当て定義」ビュー (RASGNDEF オブジェクト) を使用して、リソース割り当てをリソース記述 (RASINDSC オブジェクト) に関連付けます。
- 「リソース割り当て定義」ビュー (RASGNDEF オブジェクト) を使用して、リソース割り当てを CICS システムまたは CICS システム・グループに関連付けます。

「マップ (Map)」アクション・ボタンを使用すると、データ・リポジトリ内の BAS 定義のビジュアル・マップを表示できます。定義済みのオブジェクトと関連のリストを表示するには、「リソース・グループ内のリソース定義」ビュー (RESINGRP オブジェクト) を使用します。

次に行うこと

BAS 要件を識別したなら、リソースとその関連をセットアップする必要があります。

これについては、で説明されています。Creating resources with BAS.

Discovery Library Adapter for CICS

Discovery Library Adapter (DLA) for CICS は、CICS および CICSplex SM のリソースに関するランタイム中の情報を収集するユーティリティです。これによって生成される XML ファイルは、ディスカバリー・ライブラリー・リーダーが、これらのリソースとその全社的な相互依存関係を追跡するために使用することができます。

CICS DLA は CICSplex SM サービスを使用して、Discovery Library IdML XML スキーマと Common Data Model に適合する XML ファイルを生成します。ディスカバリー・ライブラリー・ブックと呼ばれるこの XML ファイルは、Tivoli® Change and Configuration Management Database (CCMDB) および Tivoli Business Service Management (TBSM) など、数種類の製品によるロードが可能です。

CICS DLA は、指定された CMAS に関連付けられているすべての CICSplex に対して機能します。指定されている CMAS は最新のリリース・レベルで実行されている必要がありますが、DLA によってディスカバリーされる CICS 領域は、CICSplex SM のリリース間サポート規則で許可される範囲でなら、古いリリース・レベルでも構いません。

CICS DLA を使用するには、z/OS システムにおいて EYUJXDD0 をバッチ・ジョブとして実行します。DLA を実行すると、PDS データ・セット内に IdML ディスカバリー・ライブラリー・ブックが作成されます。DLA はまた、制御ファイルとデバッグ情報もこのデータ・セット内に書き込みます。

DLA を実行すると、次の 3 タイプのディスカバリー・ライブラリー・ブックが生成される可能性があります。

- ディスカバリーされた CICSplex に関する要約情報が含まれる 1 つの CTSPLEX ディスカバリー・ライブラリー・ブック
- CICSplex 内の CICS システム・トポロジーおよび CICSplex SM 論理的スコープとそれに関連するリソースの情報が含まれる 1 つ以上の CICSplex ディスカバリー・ライブラリー・ブック
- 1 つの CICS 領域に関連付けられている CICS リソースに関する情報が含まれる 1 つ以上の CICSREGION ディスカバリー・ライブラリー・ブック

また DLA は FTP PUT ステートメントおよび RENAME ステートメントも生成します。これらは、ローカル・システム上に配置されているか、またはネットワーク接続を介してアクセス可能な、ディスカバリー・ライブラリー・ファイル・ストア (DLFS) にディスカバリー・ライブラリー・ブックを転送するのを容易にします。FTP 転送が DLA 実行の一部として実行されるか、独立した操作として後ほど実行するかを制御します。

FTP または他の転送メカニズムを使用して、この DLFS から、ディスカバリー・ライブラリー・ブックを CCMDB または TBSM にロードすることができます。

DLA の出力は、入力パラメーターを使用して制御します。これらのパラメーターは、ディスカバリーの範囲と詳細度を制御し、どのディスカバリー・ライブラリー・ブックを作成するかを指定します。これらのパラメーターはまた、操作環境に関する全般的なオプション (ディスカバリーを実行する CMAS の名前など) も設定します。これらのパラメーターは、始動 JCL で、または JCL 内のパラメーター DD ステートメントで参照される入力ファイルで提供することができます。

DLA は、作成モードまたはリフレッシュ・モードのどちらかで実行できます。

- 作成モードはデフォルトです。このモードでは、DLA は CICSplex のスナップショットを生成します。DLA が生成するディスカバリー・ライブラリー・ブックには、影響を受けるすべてのリソースに関する情報は含まれない可能性があります。これは、一部のリソースが現在アクティブでないためです。
- リフレッシュ・モードの場合、ディスカバリー・ライブラリー・ブックには、環境について分かっているすべての事柄が含まれます。以前に類似のディスカバリー・ライブラリー・ブックからロードされたのに、このディスカバリー・ライブラリー・ブックに含まれていないものがある場合、リーダーはそれらを廃止されたものとして扱います。CCMDB および TBSM は、廃止されたこれらのリソースを削除することによって、リフレッシュ・モードをサポートします。リ

フレッシュ・モードは、重要な構成上の変更点があった場合に有用ですが、関係する処理の量が大きいので使用する際には注意が必要です。

CICS DLA の実行

CICS DLA を使用するには、始動 JCL ファイルに必要な DLA パラメーターを指定して、DLA ユーティリティーをバッチ・プログラムとして実行します。その後、結果のデータ・セットの中のディスクバリー・ライブラリー・ブックをディスクバリー・ライブラリー・ファイル・ストアに転送し、それをディスクバリー・ライブラリー・リーダーで利用します。

始める前に

- CICS および CICSplex SM が正しくインストールされて構成されていることを確認します。CICS DLA が CICSplex SM API を使用するため、CICSplex SM をインストールする必要があります。
- DLA の IdML 出力用に使用される区分データ・セットに対する必要な更新アクセス権限を持っていることを確認します。

このタスクについて

このタスクでは、FTP を使用して、DLFS に DLA 出力を転送することを想定しています。FTP 以外の転送メカニズムを使用する場合は、DLFS へのディスクバリー・ライブラリー・ブックの保管に正しい命名規則を使用するようにしなければなりません。正しい DLFS ファイル名について詳しくは、307 ページの『IdML ファイルの命名規則』を参照してください。

DLA を実行するには、以下のようにします。

手順

1. SEYUSAMP ライブラリーにあるサンプル JCL ファイル EYUJXDD0 を編集用を開きます。EYUJXDD0 には、始動 JCL および DLA の操作を制御するためのサンプル入力パラメーターが含まれています。
2. CPSMHLQ=@thlq@.CPSM、CICSHLQ=@thlq@.CICS のパラメーター値をユーザー独自の値で上書きすることにより、CICS、CICSplex SM、および CICS DLA 区分データ・セットの高位修飾子を入力します。
3. CMAS、使用する z/OS IP ホスト名、および組織名を、それぞれ必須のパラメーターである **SET CMAS**、**SET HOSTNAME**、および **SET ORGNAME** を使用して指定します。
4. **SET FTP** パラメーターがデフォルトである YES に設定されていることを確認します。このパラメーターが YES に設定されていると、操作が正常に実行される場合、DLA は DLA 操作の一部として、ディスカバーされたデータを DLFS に自動的に転送します。FTP PUT ステートメントおよび RENAME ステートメントは、SET FTP パラメーターに関わらず、DLA 実行の一部として必ず生成されます。
5. 残りの **SET** パラメーターを指定します。デフォルト値を受け入れる場合は、変更を加える必要はありません。いずれかのパラメーターを変更する場合は、独自の値でデフォルトを上書きします。例えば、DLA をリフレッシュ・モードで実行する場合は、SET REFRESH YES と指定します。

6. **BOOK TYPE** パラメーターを指定します。 これら 3 つのパラメーターは、ディスカバリー・ライブラリー・ブックの 3 つのタイプの内のどれを生成するか、およびそれらのディスカバリー・ライブラリー・ブックにどのような情報を含めるかを制御します。

BOOK TYPE の各パラメーターの複数のインスタンスを含め、オプションの属性 *cplexname* または *cics_name* を使用することにより、情報収集処理に特定の CICSplex または CICS 領域を含めたり除外したりすることができます。 これらの各パラメーターのデフォルトは YES であり、それは指定のタイプのディスカバリー・ライブラリー・ブックすべてがディスカバリーに含まれることを表します。 特定のディスカバリー・ライブラリー・ブックを選択する場合は、このパラメーターを NO に設定して、そのタイプのすべてのディスカバリー・ライブラリー・ブックのディスカバリーを抑制したうえで、選択するディスカバリー・ライブラリー・ブックを指定するためパラメーターを 1 つ以上追加します。 例えば、plex1 という名前の CICSplex ディスカバリー・ライブラリー・ブックのみを選択する場合、次のように指定します。

```
BOOK TYPE CICSplex NO
BOOK TYPE CICSplex.plex1 YES
```

BOOK TYPE CICSplex.plex1 NO と指定した場合、DLA は、CMAS に関連付けられた、CICSplex plex1 以外の各 CICSplex に対してディスカバリー・ライブラリー・ブックを 1 つ生成します。

CICSplex または CICS 領域の名前の一部を指定することもできます。 例えば、a という文字で始まる CICS 領域のみを選択する場合、次のように指定します。

```
BOOK TYPE CICSREGION NO
BOOK TYPE CICSREGION.a YES
```

属性 *cplexname* または *cics_name* を省略すると、そのパラメーターは、CMAS に関連付けられたすべての CICSplex または CICS 領域に適用されます。

同一の **BOOK TYPE** パラメーターの複数のインスタンスを使用すると、予測困難な結果が生じることがあります。 DLA は、入力ファイルに指定されている順序でこれらのパラメーターを処理します。 そのため、あるパラメーターが前のパラメーターと矛盾するという事態が生じ得ます。

7. EYUJXDD0 モジュールを保管してサブミットすることにより、DLA の処理を開始します。 DLA によって、ディスカバーされたデータが含まれるディスカバリー・ライブラリー・ブックが、区分データ・セットに書き込まれます。 データ・セットのデフォルト名は、*hlq.cmas.CICSTS.DLA_{nnn}.IDML* です。ここで、*hlq* は自分で設定する高位修飾子、*cmas* は **SET CMAS** パラメーターで指定された CMAS の名前、さらに *nnn* は CICS バージョン番号です (660 など)。 データ・セットが既に存在する場合は、新しくディスカバーされたデータでその内容が上書きされます。

また DLA は FTP PUT ステートメントと RENAME ステートメントも作成し、データの転送を容易にします。

DLA によって生成される出力ファイルについて詳しくは、306 ページの『DLA の出力』を参照してください。

DLA 操作が正常に実行されると、戻りコード・ゼロが生成され、引き続きデータ・セット・メンバー @FTPRUN の FTP ステートメントを使用して、ディスクカバーされたデータを DLFS に転送します。

DLA がゼロ以外の戻りコードを生成する場合、または **SET FTP NO** を指定した場合、DLA は操作の FTP 部分を実行しません。FTP ステップを別に行うには、EYUJXDD1 モジュールを任意の時点で実行できます。この場合、DLA は @FTPALLP または @FTPCHGP データ・セット・メンバーの FTP ステートメントを使用して、データを転送します。

タスクの結果

DLA の出力の転送を終えると、ディスクバリー・ライブラリー・リーダーによる検証と利用に必要なディスクバリー・ライブラリー・ブックが DLFS 内に含まれるようになります。

CICS DLA のパッケージ

CICS DLA は、SEYUAUTH、SEYULOAD、SEYUSAMP、および SEYUPROC CICSplex SM ライブラリー内の一連のモジュールとして出荷されます。

表 15. DLA モジュール

モジュール	ライブラリー	説明
EYU9XDDA	SEYULOAD	メインプログラム、およびメインプログラムが呼び出す他の EYU9XDDc プログラムが含まれます。
EYUJXDD0	SEYUSAMP	DL を実行し、IdML メンバーを DLFS に転送するためにプロシージャ EYUJXDDP を呼び出すバッチ JCL。
EYUJXDD1	SEYUSAMP	IdML メンバーをスタンドアロン・ジョブとして DLFS に転送するためのバッチ JCL。
EYUJXDDP	SEYUPROC	DLA を実行するためのプロシージャ JCL。
EYUMCT1C	SEYUAUTH	中国語 (簡体字) メッセージのロード・モジュール。
EYUMCT2C		
EYUMCT1E	SEYUAUTH	英語メッセージのロード・モジュール。
EYUMCT2E		
EYUMCT1K	SEYUAUTH	日本語の漢字メッセージのロード・モジュール。
EYUMCT2K		

CICS DLA のサンプル・モジュール EYUJXDD0

EYUJXDD0 には、EYUJXDDP を始動して DLA を実行するための JCL が含まれています。

```
//EYUJXDD0 JOB CLASS=A,MSGCLASS=A,NOTIFY=&SYSUID
//          JCLLIB ORDER=(@th1q@.SEYUPROC)
//*
//*****
//*
//*  MODULE NAME = EYUJXDD0
//*
//*  DESCRIPTIVE NAME = %PRODUCT CPSM Batch Utility Program
//*                      Sample JCL for invoking EYU9XDDA
/*
```

```

/**
/** @BANNER_START                                02
/** Licensed Materials - Property of IBM
/**
/** "Restricted Materials of IBM"
/**
/** 5655-M15
/**
/** (C) Copyright IBM Corp. 1990, 2006
/**
/** @BANNER_END
/**
/** STATUS = %EUR
/**
/** CHANGE ACTIVITY :
/**
/**      $MOD(EYUJXDD0),COMP(DAT),PROD(%PRODUCT):
/**
/**      PN= REASON REL YYMDD HDXIII : REMARKS
/**      $L0= 906      %EU 080723 HDJXSRW: Walkthrough updates
/**      $P1= D22432 %EU 081009 HDJXSRW: Sample JCL changes
/**      $P2= D22801 %EU 081128 HDGFCAH: Correct DLA JCL
/**      $P3= D26284 %EU 090429 HDGPGRK: JCL Error in EYUJXDD0
/**      $P4= D26354 %EU 090505 HD4HAPF: JCL errors
/**
/** *****
/**
/** Member EYUJXDD0 required variables are:
/** -----
/** @thlq@      - High level target library index
/** @hlq@       - A user defined qualifier for the DLA
/** -----
/** The following in-stream procedure is executed by step EYUJXDD0.
/** The parameters should be defined before execution, including
/** the parameter outlined in the SYSIN statement. Also SET any
/** optional input parameters required in the SYSIN statement.
/** *****
/**
/** EYUJXDD0 EXEC EYUJXDDP,REGION=4096K,
/**      CPSMHLQ=@thlq@.CPSM,
/**      CICS HLQ=@thlq@.CICS
/**
/** EYU9XDDA.SYSIN DD *
SET CMAS CMASNAME
SET HOSTNAME HOST_NAME
SET ORGNAME ORGANIZATION_NAME
/*
/**
/** EYU9XDDA Syntax Quick Reference:
/**
/** *comments: a * in column one indicates a comment line
/** *wildcards: resource_type and resource_id may be set to a * to
/**             indicate a generic value.
/**
/**
/** *SET MESSAGE_LANGUAGE CHS|ENU|JPN
/** Sets the required language for message outputs. The default is
/** English (ENU).
/**
/** *SET CMAS CMASNAME
/** Sets the CMAS name for which the CICS TS DLA run is to be
/** performed.
/**
/** *SET FEEDBACK QUIET|VERBOSE
/** Controls the amount of information displayed by EYU9XDDA
/** when a CICSplex SM API error occurs:
/** QUIET (the default) only basic error messages are
/** written.
/** VERBOSE CICSplex SM Feedback data (if available) will be
/** displayed.
/**
/** *SET HOSTNAME hostname
/** Sets the name of host session. No default exists.
/**
/** *SET ORGNAME ORGANIZATION_NAME
/** Sets the name of the organization. The default is SET ORGNAME
/** <defaultOrg>. This is a special value that tells CCMDDB that the
/** CICS resources are related to the CCMDDB defined default
/** organization.
/**
/** *SET LIMIT (1-99999999)

```

```

/**  An integer specifying a limit to the number of resources to be
/**  discovered. The default is 10000.
/**
/**SET REFRESH YES|NO
/**  Sets the type of DLA run to be performed. SET REFRESH YES will
/**  cause readers of the books (CCMDB and TBSM) to delete existing
/**  data from the corresponding books provided by the CICS TS DLA.
/**  The default is NO.
/**
/**SET FTP YES|NO
/**  Sets the type of FTP run to be performed.
/**  The default is YES.
/**  SET FTP NO will transfer no books to the DLFS
/**
/**  SET FTP YES will transfer books to the DLFS, based upon the
/**  setting of the SET REFRESH parameter as follows:.
/**  When SET REFRESH YES, then the @FTPALLP member is used to
/**  transfer all IDML books generated by EYU9XDDA.
/**
/**  When SET REFRESH NO, then the @FTPCHGP member is used to
/**  transfer all IDML books which have been changed by EYU9XDDA.
/**
/**SET IGNORE_CHECKSUMS YES|NO
/**  The DLA calculates a CHECKSUM for each book it creates and only
/**  replaces a previously discovered book if the CHECKSUM is
/**  different. The default is NO, meaning that the CHECKSUM will be
/**  calculated.
/**
/**SET CONSOLE_MESSAGES YES|NO
/**  Allows an MVS SLIP trap to be set and triggers a dump for a
/**  specified message to aid covered problem determination.
/**  Can only be used with English messages.
/**
/**BOOK TYPE CICSplex.nnnnnnnn YES|NO
/**  Checks whether the CICS TS DLA should produce an output book for
/**  the data about all the discovered CICSplexes. The default is YES.
/**  You can suppress outputting of books by supplying a full or
/**  partial CICSplex name
/**
/**BOOK TYPE CICSregion.nnnnnnnn YES|NO
/**  Checks whether the CICS TS DLA should produce an output book with
/**  a summary of all the discovered CICSregions. The default is YES.
/**  You can suppress outputting of books by supplying a full or parti
/**  partial CICSregion name
/**
/**BOOK TYPE CTSPLEX.nnnnnnnn YES|NO
/**  Checks whether the CICS TS DLA should produce an output book with
/**  a summary of all the discovered CICSplexes. The default is YES.
/**
/**
/**  If the DLA completed successfully then the FTP program is
/**  invoked to transfer the IDML to the DLFS.
/**
/**EYU9XDDA FTP Syntax Quick Reference:
/**
/**<difs-hostname>
/**  Define the name of the DLFS server to FTP the IDML books to.
/**
/**<username>
/**  The name of the user to login in to the DLFS server.
/**
/**<password>
/**  Password required for <username>.
/**
/**</u/userdirectory>
/**  Define the target directory to store the IDML book in.
/**
/**      IF (RC = 0) THEN          ; Only FTP if the DLA was successful
/**FTPSTEP EXEC PGM=FTP,REGION=2048K
/**SYSPRINT DD SYSOUT=*
/**SYSABEND DD SYSOUT=*
/**INPUT DD *
<difs-hostname>
<username>
<password>
pwd
cd </u/userdirectory>
lcd //DD:EYU9XDDA.IDMLFILE
/**

```

```
// DD DISP=SHR,DSN=@hlq@.CMAS.CICSTS.DLANNN.IDML(@FTPRUN)
// ENDIF
/*
/*
```

CICS DLA のサンプル・モジュール EYUJXDD1

EYUJXDD1 モジュールには、IdML メンバーをスタンドアロン・ジョブとして DLFS に転送するための JCL が含まれています。

```
//EYUJXDD1 JOB CLASS=A,MSGCLASS=A,NOTIFY=&SYSUID
/*
/******
/*
/* MODULE NAME = EYUJXDD1
/*
/* DESCRIPTIVE NAME = %PRODUCT CPSM Batch Utility Program
/* Sample JCL for CICS DLA FTP
/*
/* @BANNER_START 02
/* Licensed Materials - Property of IBM
/*
/* "Restricted Materials of IBM"
/*
/* 5655-M15
/*
/* (C) Copyright IBM Corp. 1990, 2006
/*
/* @BANNER_END
/*
/* STATUS = %EUR
/*
/* CHANGE ACTIVITY :
/*
/* $MOD(EYUJXDD1),COMP(DAT),PROD(%PRODUCT):
/*
/* PN= REASON REL YYMMDD HDXIII : REMARKS
/* $LQ= 906 %EU 090126 HDGFAH: Initial development
/*
/******
/*
/**EYU9XDDA FTP Syntax Quick Reference:
/*
/***<difs-hostname>
/* Define the name of the DLFS server to FTP the IDML books to.
/*
/***<username>
/* The name of the user to login in to the DLFS server.
/*
/***<password>
/* Password required for <username>.
/*
/***</u/userdirectory>
/* Define the target directory to store the IDML book in.
/*
/*
/*FTPSTEP EXEC PGM=FTP,REGION=2048K
//SYSPRINT DD SYSOUT=*
//SYSABEND DD SYSOUT=*
//IDMLFILE DD DISP=SHR,DSN=HLQ.CMAS.CICSTS.DLANNN.IDML
//INPUT DD *
<difs-hostname>
<username>
<password>
pwd
cd </u/userdirectory>
lcd //DD:IDMLFILE
/*
// DD DISP=SHR,DSN=HLQ.CMAS.CICSTS.DLANNN.IDML(@FTPRUN)
/*
```

CICS DLA のサンプル・モジュール EYUJXDDP

EYUJXDDP モジュールには、DLA を実行するためのプロシージャー JCL が含まれます。

```

//*****
//*
//*  MODULE NAME = EYUJXDDP
//*
//*  DESCRIPTIVE NAME = %PRODUCT CPSM Batch Utility Program
//*                      Sample JCL for invoking EYU9XDDA
//*
//*  @BANNER_START                                02
//*  Licensed Materials - Property of IBM
//*
//*  "Restricted Materials of IBM"
//*
//*  5655-M15
//*
//*  @BANNER_END
//*
//*  STATUS = %EUR
//*
//*  CHANGE ACTIVITY :
//*
//*      $MOD(EYUJXDDP),COMP(DAT),PROD(%PRODUCT):
//*
//*      PN= REASON REL YYMMDD HDXIII : REMARKS
//*      $L0= 906 %EU 080613 HDJSRW : Initial development
//*      $L1= 906 %EU 080723 HDJSRW: Walkthrough updates
//*      $P1= D22432 %EU 081009 HDJSRW: Sample JCL changes
//*      $P2= D22801 %EU 081128 HDGFAH: Correct DLA JCL
//*      $P3= D26122 %EU 090423 HDGPRK: JCL error in EYUJXDDP
//*      $P4= D26354 %EU 090505 HD4HAPF: JCL errors
//*
//*****
//*
//*  Member EYUJXDDP required variables are:
//*  -----
//*  @thlq@      - High level target library index
//*  @hlq@        - A user defined qualifier for the DLA
//*****
//EYUJXDDP PROC CPSMHLQ=@thlq@.CPSM,
//      CICSHLQ=@thlq@.CICS
//*
//EYU9XDDA EXEC PGM=EYU9XDDA
//*
//STEPLIB DD DISP=SHR,DSN=&CPSMHLQ..SEYULOAD
//      DD DISP=SHR,DSN=&CPSMHLQ..SEYUAUTH
//      DD DISP=SHR,DSN=&CICSHLQ..SDFHAUTH
//      DD DISP=SHR,DSN=&CICSHLQ..SDFHLOAD
//*
//SYSPRINT DD SYSOUT=*
//SYSDUMP DD SYSOUT=*
//IDMLFILE DD DSN=@hlq@.CMAS.CICSTS.DLANNN.IDML,
//      DISP=(NEW,CATLG,DELETE),
//      DCB=(DSORG=PS,RECFM=FB,LRECL=250,BLKSIZE=4000),
//      SPACE=(CYL,(25,10,25),RLSE)
//*
//SYSDUMP DD DISP=(,CATLG),DSN=@userid@.EYU9XDDA.SYSDUMP,
//*      UNIT=SYSDA,SPACE=(CYL,(50,25)),
//*      DCB=(DSORG=PS,RECFM=FBS,LRECL=4160,BLKSIZE=24960)
//*  Un-comment the SYSDUMP DD statement if you need to add a
//*  SYSDUMP DD.
//*  You may need to modify this statement to meet your
//*  installations requirements
//*
//EYUSYSIN DD DDNAME=SYSIN
//      PEND

```

DLA パラメーター

CICS DLA の出力は、EYUJXDD0 JCL ファイルの SYSIN DD カードに含めるパラメーターを使用して制御できます。DLA SET パラメーターは、組織名やデバッグ・オプションなどの一般的なオプションを指定します。DLA BOOK TYPE パラメーターは、どのディスクバリー・ライブラリー・ブックが書き込まれるかを制御します。

DLA パラメーターは以下のとおりです。

BOOK TYPE CICSplex.cplexname {YES | NO}

DLA が CICSplex ディスカバリー・ライブラリー・ブックを作成するかどうかを決定し、ディスカバリーにどの CICSplex を含めるかを制御します。以下のいずれかの値を指定します。

- YES は、選択した CICSplex をディスカバリーに含める場合に指定します。
- NO は、選択した CICSplex をディスカバリーから除外する場合に指定します。

デフォルトは YES です。

cplexname は、CICSplex の名前が含まれるオプションの文字ストリングです。部分的な名前を使用することや、ワイルドカード文字として末尾にアスタリスク (*) を使用することができます。 *cplexname* を YES または NO のいずれかのオプションと共に使用することにより、ディスカバリーの対象を特定の CICSplex に限定することができます。 *cplexname* を省略した場合は、CMAS に関連付けられたすべての CICSplex がディスカバリーに含められるか、あるいは除外されることになります。

複数の BOOK TYPE CICSplex パラメーターを使用することができます。

DLA は複数のパラメーターを、それらが入力ファイルに含まれている順序で処理します。

BOOK TYPE CICSREGION.cics_name{YES | NO}

DLA が CICSREGION ディスカバリー・ライブラリー・ブックを作成するかどうかを決定し、ディスカバリーにどの CICS 領域を含めるかを制御します。以下のいずれかの値を指定します。

- YES は、選択した CICS 領域をディスカバリーに含める場合に指定します。
- NO は、選択した CICS 領域をディスカバリーから除外する場合に指定します。

デフォルトは YES です。

cics_name は、CICS 領域の名前が含まれるオプションの文字ストリングです。部分的な名前を使用することや、ワイルドカード文字として末尾にアスタリスク (*) を使用することができます。 *cics_name* を YES または NO のいずれかのオプションと共に使用することにより、ディスカバリーの対象を特定の CICS 領域に限定します。 *cics_name* を省略すると、CMAS に関連付けられたすべての CICS 領域が、ディスカバリーに含められるか、またはディスカバリーから除外されます。

複数の BOOK TYPE CICSREGION パラメーターを使用することができます。

DLA は複数のパラメーターを、それらが入力ファイルに含まれている順序で処理します。

BOOK TYPE CTSPLEX {YES | NO}

ディスカバーされた CICSplex の要約が含まれる CTSPLEX ディスカバリー・ライブラリー・ブックを DLA が作成するかどうかを決定します。以下のいずれかの値を指定します。

- YES は、DLA によってディスカバーされたすべての CICSplex の要約が含まれる CTSPLEX ディスカバリー・ライブラリー・ブックを生成する場合に指定します。

- NO は、CTSPLEX の CICSplex 要約の出力ディスカバリー・ライブラリー・ブックを生成しない場合に指定します。

デフォルトは YES です。このパラメーターは 1 回しか含めることができません。

SET CMAS CMAS_name

CMAS の名前。CMAS は、CICS TS 4.1 のリリース・レベルで実行されている必要があります。DLA は、この CMAS に直接接続された CICSplex の情報およびこの CMAS に関連する他の CMAS に接続された CICSplex に関する情報をディスカバーします。

SET CONSOLE_MESSAGES {YES | NO}

このパラメーターは、IBM のサポート・スタッフの監督下でのみ使用します。

以下のいずれかの値を指定します。

- YES は、MVS コンソールにメッセージをコピーする場合に指定します。
- NO は、MVS コンソールにメッセージをコピーしない場合に指定します。

デフォルトは NO です。

コンソールのメッセージは常に英語で表示されます。これは、コンソールが他言語を表示するために必要となる 2 バイト文字セットをサポートしていないためです。

SET FEEDBACK {QUIET | VERBOSE}

FEEDBACK は、CICSplex SM API からエラーが返された場合に、DLA が例外条件の報告を処理する方法を示します。オプションは、以下のとおりです。

- QUIET: DLA は進行状況メッセージおよび例外条件のみを書き込みます。QUIET は、FEEDBACK のデフォルトのオプションです。
- VERBOSE: DLA は、応答コードと理由コードを報告する標準メッセージに加えて、関連する CICSplex SM のフィードバック・データを書き込みます。

すべてのフィードバック情報が SYSPRINT DD 宛先および @DIALOG ファイルに送信されます。

SET FTP {YES | NO}

以下のいずれかの値を指定します。

- YES. DLA 実行の一部として、ディスカバーされたデータをディスカバリー・ライブラリー・ファイル・ストア (DLFS) に転送します。
- NO. 転送を抑制します。

FTP 転送が行われるのは、DLA ディスカバリー操作が戻りコード・ゼロを戻して正常に完了した場合だけです。NO を指定する場合、または DLA 実行が正常に完了しない場合には、独立した操作として EYUJXDD1 モジュールを実行して、DLFS にデータを転送できます。

操作の際、DLA は以下の PDSE データ・セット・メンバーに FTP PUT および RENAME を生成します。

- @FTPALLP: すべてのディスカバリー・ライブラリー・ブックの PUT および RENAME を行うための FTP ステートメントが含まれます。

- @FTPCHGP: 変更されたすべてのディスカバリー・ライブラリー・ブックの PUT および RENAME を行うための FTP ステートメントが含まれます。

@FTPALLP または @FTPCHGP の内容が @FTPRUN データ・セット・メンバーにコピーされます。どちらの内容かは、SET IGNORE_CHECKSUMS パラメーターおよび SET REFRESH パラメーターの設定によって異なります。

SET HOSTNAME *host_name*

z/OS の IP ホスト名を指定します。

SET IGNORE_CHECKSUMS {YES | NO}

以下のいずれかの値を指定します。

- YES は、ディスカバリー・ライブラリー・ブックのチェックサム処理を行わない場合に指定します。
- NO は、ディスカバリー・ライブラリー・ブックのチェックサムを計算する場合に指定します。

デフォルトは NO です。

チェックサム処理によって、最後の DLA 実行以降に各ディスカバリー・ライブラリー・ブックに変更が加えられたかどうか判別されます。DLA は、作成するディスカバリー・ライブラリー・ブックごとにチェックサムを計算します。@FTPCHGP メンバーには、DLA が変更したディスカバリー・ライブラリー・ブックのリストが含まれています。その後、変更されたディスカバリー・ライブラリー・ブックのみを DLFS に転送できます。

チェックサム処理の利点は、DLFS に転送されるデータ量が少なくなることです。欠点は、DLA の実行時間が増えることです。チェックサム処理を行うと DLA の処理が増えるため、SET IGNORE_CHECKSUMS YES を設定することによって、この処理を行わないようにすることが望ましい場合があります。

SET LIMIT {1 - 9999999}

ディスカバーされるリソース数の制限を指定する 1 から 9999999 までの整数。デフォルトは 10000 です。

この制限を超えると、DLA が警告のメッセージを出します。処理は続行されますが、ゼロ以外の DLA 戻りコードが設定されるため、FTP を使用してディスカバリー・ライブラリー・ブックを DLFS に転送するためのステップは実行されません。

SET MESSAGE_LANGUAGE {CHN | ENU | JPN}

このパラメーターは、SYSPRINT ファイルの SYSOUT オプションで指定された宛先に書き込まれるメッセージの言語を決定します。中国語 (簡体字) の場合は CHN、英語の場合は ENU、日本語の漢字の場合は JPN を指定します。デフォルトの言語は英語です。中国語および日本語のオプションでは、2 バイト文字セットが使用されます。

SET ORGNAME *organization_name*

ユーザーの組織名を示す、ブランクを含まない単一の語。このパラメーターには、英数字と国別文字を含めることができ、それ以外の文字を表すためには XML エスケープ文字 (例えば、< には <、および > には >) が用いられます。

通常、z/OS の SMFID 名と SYSPLEX 名は、企業内で固有です。企業買収が行われた場合など、場合によっては重複が存在することもあります。例えば、2

つの独立した z/OS システムが MVS1 という SMFID を持っているといったことが生じ得ます。CMDB でインスタンスを別個に維持するためには、ORGRNAME を別々の値に設定します。

デフォルトは SET ORGRNAME <defaultOrg> です。このデフォルトは、CICS リソースが、CCMDB で定義されたデフォルト組織に関連していることを CCMDDB に対して示す特殊値です。サイトに重複した z/OS SMFID および SYSPLEX が存在し、それを同一の CCMDDB にロードする必要があるものでなければ、このデフォルトの設定を使用してください。

SET REFRESH {YES | NO}

以下のいずれかの値を指定します。

- YES は、リフレッシュ・タイプのディスカバリー・ライブラリー・ブックを生成する場合に指定します。
- NO は、作成タイプのディスカバリー・ライブラリー・ブックを生成する場合に指定します。

デフォルトは NO です。

SET REFRESH YES を指定すると、出力 XML ファイルはリフレッシュ・タイプのディスカバリー・ライブラリー・ブックとなります。この設定は、環境について分かっているすべての事柄がそのディスカバリー・ライブラリー・ブックに含まれることを示します。ディスカバリー・ライブラリー・ブックのリーダー (CCMDDB および TBSM など) は、CICS DLA によって提供される対応するディスカバリー・ライブラリー・ブックからロードされたデータを削除します。SET REFRESH YES は、主要な構成変更の後にのみ指定します。

SET REFRESH NO を指定すると、出力 XML ファイルは作成タイプのディスカバリー・ライブラリー・ブックとなります。この設定は、生成されるディスカバリー・ライブラリー・ブックに含まれるのが、最後の DLA の実行以後に変更されたリソースに関する情報のみであることを示します。

DLA の出力

CICS TS DLA を実行すると、その度に区分データ・セットが作成されるか、再利用されます。DLA は、このデータ・セット内にディスカバリー・ライブラリー・ブック、制御ファイル、およびデバッグ情報を書き込みます。適切な入力パラメーターを設定することにより、どのディスカバリー・ライブラリー・ブックを DLA が生成するかを制御できます。

区分 (PDS または PDSE) データ・セットのデフォルト名は、*hlq.cmas.CICSTS.DLA410.IDML* となります。ここで、*hlq* はユーザーが指定する上位修飾子であり、*cmas* は SET CMAS パラメーターで指定された CMAS の名前です。

DLA は、次のデータ・セット・メンバーを書き込むか書き換えます。

- CTSPLEX ディスカバリー・ライブラリー・ブック用の IdML メンバー。このメンバーには、DLA によってディスカバーされた CICSplex の要約が含まれます。
- ユーザーが要求する各 CICSplex ディスカバリー・ライブラリー・ブック用の IdML メンバー。メンバー名は、CICSplex 名です。

- ユーザーが要求する各 CICSREGION ディスカバリー・ライブラリー・ブック用の IdML メンバー。メンバー名は DLA によって割り当てられます。
@CICSNAM メンバーはこれらの名前を CICS 領域に関連付けられた CICS 領域名と CICSplex に変換します。
- データ・セットの各ディスカバリー・ライブラリー・ブック・メンバーのエントリーを含む @CHCKSUM。
- 最後の DLA の実行からの @DLALOG メッセージ・ログ
- 最後の DLA 実行からすべてのディスカバリー・ライブラリー・ブック・メンバー用の FTP PUT ステートメントおよび RENAME ステートメントを含む @FTPALLP。
- DLA 実行に応じて、一部もしくはすべてのディスカバリー・ライブラリー・ブック・メンバー用の FTP PUT ステートメントおよび RENAME ステートメントを含む @FTPCHGP。

IGNORE_CHECKSUMS パラメーターおよび **SET REFRESH** パラメーターを NO に設定した場合、このメンバーには、同じデータ・セットを使用した以前の DLA 実行から変更されたすべてのディスカバリー・ライブラリー・ブック・メンバー用の FTP PUT ステートメントおよび RENAME ステートメントが含まれます。変更がなければ、このメンバーは空になります。他のすべての場合に、このメンバーには、最後の DLA 実行からすべてのディスカバリー・ライブラリー・ブック・メンバー用の FTP ステートメントが含まれるので、内容は @FTPALLP と同じになります。

- 以下の条件に応じ、FTP ステートメントもしくは **QUIT** ステートメントを含む @FTPRUN。
 - **SET FTP** パラメーターを NO に設定した場合、このメンバーにはステートメント **QUIT** だけが含まれます。
 - **SET FTP** パラメーターを YES に設定し、**SET REFRESH** パラメーターを YES に設定すると、このメンバーには @FTPALLP からコピーした FTP ステートメントが含まれます。
 - **SET FTP** パラメーターを YES に設定し、**SET REFRESH** パラメーターを NO に設定すると、このメンバーには @FTPCHGP からコピーした FTP ステートメントが含まれます。

SET FTP パラメーターを YES に設定し、DLA がゼロの戻りコードで正常に実行された場合、DLA は @FTPRUN の内容を使用して FTP 転送を行います。

FTP のステップを独立して実行することも可能です。そのためには、EYUJXDD1 モジュールを使用して、@FTPRUN、@FTPALLP、@FTPCHGP のいずれかを指定します。

IdML ファイルの命名規則

ディスカバリー・ライブラリー・ブックは、プレーン・テキストの XML ファイルに格納されますが、そのファイル名は一貫性のあるファイル命名規則に従っていません。ファイル名に含まれる情報により、DLFS 内でディスカバリー・ライブラリー・ブックを一意的に識別できます。またこの情報は、開発者や管理者がディスカバリー・データのソースおよび作成日を迅速に特定する助けとなります。

CICS DLA が生成するディスカバリー・ライブラリー・ブックの名前は、以下のセグメントで構成されます。

- CICS アプリケーション・コード `CICST$nnnbooktype.application.`。各部の意味は次のとおりです。
 - `nnn` は CICS バージョン ID (例えば、「410」) です。
 - `booktype` はディスカバリー・ライブラリー・ブックのタイプ (例えば、「CTSPLEX」) です。
 - `application` は、データを得る元の CICSplex または CICS 領域の名前で、CTSPLEX 要約ディスカバリー・ライブラリー・ブックの CMAS 名です。
- ホスト名 (例えば、`@mvs2c.example.com.`)。
- コロン (:) がドット (.) に置き換えられた ISO 8601 タイム・スタンプ UTC (協定世界時) (例えば、`2008-03-08T12.05.31Z`)。
- ディスカバリー・ライブラリー・ブックにリフレッシュ操作が含まれる場合は、「.refresh」というテキスト・ストリング。
- `.xml` というファイル名拡張子。

DLFS に書き込まれている、またはコピーされている最中のディスカバリー・ライブラリー・ブックには、これとは若干異なる命名規則が適用されます。この場合、ディスカバリー・ライブラリー・ブックのファイル名には、必ず `.xml` の後ろに「.partial」という接尾部が付きます。この `.partial` という接尾部は、ファイルを DLFS に書き込む操作が正常に完了した時点でファイル名から除去されます。

サンプル・ファイル名

以下は、DLFS 内のディスカバリー・ライブラリー・ブックのファイル名の例です。

`CICSTS410CICSPLEX.plex1@mvs2c.example.com.2008-11-07T14.32.31Z.xml`

以下は、リフレッシュ操作が含まれる DLFS 内のディスカバリー・ライブラリー・ブックのファイル名の例です。

`CICSTS410CTSPLEX.cmasa@mvs2c.example.com.2008-11-07T14.32.31Z.refresh.xml`

以下は、DLFS にコピーされている最中のディスカバリー・ライブラリー・ブックのファイル名の例です。

`CICSTS410CICSREGION.plex1.cicsa@mvs2c.example.com.2008-11-08T14.32.31Z.xml.partial`

CICSPLEX ディスカバリー・ライブラリー・ブック内のクラスとその関係

CICSPLEX ディスカバリー・ライブラリー・ブックには、特定の CICSplex に関連した CICSplex SM リソースに関する情報が含まれます。これらのディスカバリー・ライブラリー・ブックには、`CICSTS410CICSPLEX.cicsplex_name` で始まる名前が付けられています。ここで、`cicsplex_name` は、CPLEXDEF 属性 `CPLEXDEF_CICSPLEX` で指定されている CICSplex の名前です。

DLA は、次のクラスに関してディスカバーされたすべての属性に対して、値を設定します。

ManagementSoftwareSystem

ディスカバリー・ライブラリー・ブック内のリソースをディスカバリーした製品。これには、次の属性が含まれます。

- ProductName: IBM CICS TS Discovery Library Adapter
- ProductVersion: 現行の CICS TS のバージョン (例、410)。

Organization

CCMDB 内での固有性を保つためのグローバル名。同じ ID を持つ複数の z/OS システム (例えば、実動 z/OS のコピーで、テストのために別のハードウェア上で実行されているものなど) が存在することもあるため、この名前が必要となります。グローバル名は、DLA の実行時に ORGNAME 入力パラメーターから設定するか、ディスカバリー・ライブラリー・ブックが CCMDB にロードされる際にデフォルト値から設定されます。

CICSplex

CICSplex に関する情報。

CICSRegionGroup

CICS 領域グループに関する情報。

CICSManagingAddressSpace

CICSplex SM CMAS に関する情報。

CICSWUIEndPoint

CICSplex SM Web ユーザー・インターフェース (WUI) サーバーに関する情報。このクラスには、属性として WUI URL が含まれます。WUI は、この URL を使用して起動できます。特定の CICSplex ディスカバリー・ライブラリー・ブック内の CICSWUIEndPoint インスタンスは、異なる CICSplex で実行されている WUI サーバー用のものである場合があります。各 CICSplex ディスカバリー・ライブラリー・ブックには必ず、CMAS に関連する各 WUI サーバーの CICSWUIEndPoint インスタンスが含まれ、その関係タイプは「Accesses (アクセス)」となります。

Application

BAS の論理スコープを使用して定義されたビジネス・アプリケーションのデータ。アプリケーション名は、論理スコープ名から (すなわち、BAS リソース記述 (RESDESC) リソース・テーブルで指定された RESDESC_LSCOPE 属性から) 取得されます。

以下のクラスは、ディスカバリー・ライブラリー・ブック内にスタブ・インスタンスとして含められます。生成されるのは、これらのクラスとの関係を定めるための命名規則に準拠するうえで必要となる属性だけです。

CICSRegion

CICS 領域リソース

CICSFile

ファイル・リソース

CICSLIBRARY

LIBRARY リソース

CICSDocumentTemplate

文書テンプレート・リソース

CICSLSRPool

VSAM LSR プール・リソース

CICSTDQueue

一時データ・キュー・リソース

CICSTransaction

トランザクション・リソース

CICSProgram

プログラム・リソース

CICSProfile

トランザクション・プロファイル・リソース

CICSDB2Entry

Db2 エントリー・リソース

CICSDB2EntryTransaction

Db2 エントリーに関連したトランザクション・リソース。

表 16 の関係は、CICSplex に該当します。CICSManagingAddressSpace (CMAS) と CICSplex との間に「Manages (管理)」の関係がある場合、それは、その CMAS が CICSplex の管理に関与することを示します。「Controls (制御)」の関係があるということは、それが保守ポイント CMAS であることを示します。保守ポイント CMAS は、CICSplex のトポロジーに変更があった場合に、その変更について他の CMAS に通知する役割を担います。各 CICSplex は保守ポイント CMAS を 1 つずつ持ちますが、1 つの CMAS が複数の CICSplex の保守ポイントとして機能することもできます。

表 16. CICSplex の関係

関係タイプ	ソース	ターゲット
Accesses (アクセス)	CICSWUIEndPoint	CICSplex
Controls (制御)	CICSManagingAddressSpace	CICSplex
Federates (統合)	CICSplex	Application
Federates (統合)	CICSplex	CICSRegionGroup
Federates (統合)	CICSplex	CICSRegion
Manages (管理)	CICSManagingAddressSpace	CICSplex
Owns (所有)	Organization	CICSplex

表 17 の関係は、CICS 領域グループに該当します。CICS 領域グループには、複数の CICS 領域と他の CICS 領域グループが含まれることもあります。

表 17. CICS 領域グループの関係

関係タイプ	ソース	ターゲット
Federates (統合)	CICSplex	CICSRegionGroup
Federates (統合)	CICSRegionGroup	CICSRegion
Federates (統合)	CICSRegionGroup	CICSRegionGroup
Owns (所有)	Organization	CICSRegionGroup

表 18 の関係は、CICSManagingAddressSpace、CICSWUIEndPoint クラス、および CICSRegion クラスに DLA データを提供するテクノロジーに該当します。

表 18. CICSManagingAddressSpace、CICSWUIEndPoint および CICSRegion クラスの関係

関係タイプ	ソース	ターゲット
Contains (含む)	MSSInstance	CICSManagingAddressSpace
Contains (含む)	MSSInstance	CICSWUIEndPoint
Relates (関連)	MSSObjectLink	CICSRegion

表 19 の関係は、アプリケーションと、CICSplex および CICS 領域にインストールされているリソース・インスタンスとの関係を表します。

表 19. アプリケーションと CICSplex およびインストールされているリソースとの関係

関係タイプ	ソース	ターゲット
Contains (含む)	CICSRegion	CICSFile
Contains (含む)	CICSRegion	CICSDb2Entry
Contains (含む)	CICSRegion	CICSDb2EntryTransaction
Contains (含む)	CICSRegion	CICSProfile
Contains (含む)	CICSRegion	CICSDocumentTemplate
Contains (含む)	CICSRegion	CICSLibrary
Contains (含む)	CICSRegion	CICSLSRPool
Contains (含む)	CICSRegion	CICSProgram
Contains (含む)	CICSRegion	CICSTDQueue
Contains (含む)	CICSRegion	CICSTransaction
Federates (統合)	CICSplex	Application
Uses (使用)	Application	CICSDb2Entry
Uses (使用)	Application	CICSDb2EntryTransaction
Uses (使用)	Application	CICSDocumentTemplate
Uses (使用)	Application	CICSFile
Uses (使用)	Application	CICSLibrary
Uses (使用)	Application	CICSLSRPool
Uses (使用)	Application	CICSProfile
Uses (使用)	Application	CICSProgram
Uses (使用)	Application	CICSTDQueue
Uses (使用)	Application	CICSTransaction

CICSREGION ディスカバリー・ライブラリー・ブック内のクラスとその関係

CICSREGION ディスカバリー・ライブラリー・ブックには、特定の CICS 領域に関連した CICS リソースに関する情報が含まれます。これらのディスカバリー・ライブラリー・ブックには、CICSTS410CICSREGION.cicsplex_name.cics_name で始まる名前が付けられています。ここで、cicsplex_name は CICS 領域に関連付けられている CICSplex の名前であり、cics_name は CICSplex SM に定義されている CICS 領域の名前 (CSYSDEF 属性 CSYSDEF_NAME で定義される) です。

DLA は、次のクラスに関してディスカバーされたすべての属性に対して、値を設定します。

ManagementSoftwareSystem

ディスカバー・ライブラリー・ブック内のリソースをディスカバーした製品。これには、次の 2 つの属性が含まれます。

- ProductName: IBM CICS TS Discovery Library Adapter
- ProductVersion: 現行の CICS TS のバージョン (例、410)。

CICSRegion

CICS 領域

CICSProgram

プログラム・リソース

CICSFile

ファイル・リソース

CICSTransaction

トランザクション・リソース

CICSLIBRARY

LIBRARY リソース

CICSDocumentTemplate

文書テンプレート・リソース

CICSLSRPool

VSAM LSR プール・リソース

CICSProfile

トランザクション・プロファイル・リソース

CICSPipeline

CICS パイプライン・リソース

CICSWebService

Web サービス・リソース

CICSURIMap

URI マップ・リソース

CICSTCPIPService

TCP/IP サービス

CICSIPIConnection

IPIC 接続リソース

CICSIHCMROConnection

ISC および MRO 接続リソース

CICSDb2Connection

Db2 接続リソース

CICSDb2Entry

Db2 エントリー・リソース

CICSDb2EntryTransaction

Db2 エントリーに関連したトランザクション・リソース。

CICSTDQueue

一時データ・キュー・リソース

表 20 の関係は、CICS 領域と、CICS 領域にインストールされている各種のリソースとの関係を表します。

表 20. CICS 領域の関係

関係タイプ	ソース	ターゲット
Contains (含む)	CICSRegion	CICSDb2Connection
Contains (含む)	CICSRegion	CICSDb2Entry
Contains (含む)	CICSRegion	CICSDb2EntryTransaction
Contains (含む)	CICSRegion	CICSDocumentTemplate
Contains (含む)	CICSRegion	CICSFile
Contains (含む)	CICSRegion	CICSIPIConnection
Contains (含む)	CICSRegion	CICSLibrary
Contains (含む)	CICSRegion	CICSLSRPool
Contains (含む)	CICSRegion	CICSISCMROConnection
Contains (含む)	CICSRegion	CICSPipeline
Contains (含む)	CICSRegion	CICSProfile
Contains (含む)	CICSRegion	CICSProgram
Contains (含む)	CICSRegion	CICSTCPIPService
Contains (含む)	CICSRegion	CICSTDQueue
Contains (含む)	CICSRegion	CICSTransaction
Contains (含む)	CICSRegion	CICSURIMap
Contains (含む)	CICSRegion	CICSWebService

以下の関係は、トランザクションとトランザクション・プロファイルおよびトランザクションとプログラムとの関係を表します。

表 21. トランザクションとトランザクション・プロファイルの関係

関係タイプ	ソース	ターゲット
Uses (使用)	CICSTransaction	CICSProfile
Uses (使用)	CICSTransaction	CICSProgram

以下の関係は、プログラムと、CICS がそれをロードしたロード元の LIBRARY との関係を表します。

表 22. プログラムと LIBRARY の関係

関係タイプ	ソース	ターゲット
Resolvesfrom (解決元)	CICSProgram	CICSLIBRARY

以下の関係は、DLA データを提供するテクノロジーと CICSRegion クラスとの関係を表します。

表 23. CICS 領域の関係

関係タイプ	ソース	ターゲット
Relates (関連)	MSSObjectLink	CICSRegion

CTSPLEX ディスカバリー・ライブラリー・ブック内のクラスとその関係

CTSPLEX ディスカバリー・ライブラリー・ブックには、DLA SET CMAS パラメーターで指定された CMAS によって管理されるすべての CICSplex の CICSplex クラス・インスタンスに関する要約情報が含まれます。DLA は、実行ごとに CTSPLEX ディスカバリー・ライブラリー・ブックを 1 つのみ作成することができます。

すべてのディスカバリー・ライブラリー・ブックの名前は CICSSTS410CTSPLEX.cmas_name で始まります。cmas_name は CMAS の名前です。

DLA は、次のクラスに関してディスカバーされた属性に対して、値を設定します。

CICSManagingAddressSpace

CICSplex の管理に関与する CMAS を示します。DLA は、1 つ以上の CICSplex の管理に割り当てられた各 CMAS に対して、このクラスのインスタンスを 1 つ作成します。これらのクラスとの関係を定めるための命名規則に準拠するうえで必要となる属性のみが、出力として生成されます。

CICSplex

CICSplex に関する情報。

表 24 の関係は、CMAS と CICSplex との関係を表します。

表 24. CICSManagingAddressSpace の関係

関係タイプ	ソース	ターゲット
Contains (含む)	MSSInstance	CICSManagingAddressSpace
Controls (制御)	CICSManagingAddressSpace	CICSplex
Manages (管理)	CICSManagingAddressSpace	CICSplex
Owns (所有)	Organization	CICSplex

「Controls (制御)」の関係があるということは、それが保守ポイント CMAS であることを示します。CICSManagingAddressSpace (CMAS) と CICSplex との間に「Manages (管理)」の関係がある場合、それは、その CMAS が CICSplex の管理に関与することを示します。

DLA のセキュリティー

DLA は CICSplex SM API プログラムとして実行されるため、CICS TS データへのアクセスに関連して CICSplex SM のセキュリティーの制約を受けます。

DLA を実行する際には、IdML 出力用に使用される PDSE データ・セットに対して更新アクセス権限が必要となります。PDSE データ・セットのメンバーを、FTP を使用してディスカバリー・ライブラリー・ファイル・ストアに転送する場合は、

PDS に対する読み取りアクセス権限に加えて、ディスカバリー・ライブラリー・ファイル・ストアに対する書き込みアクセス権限とリネーム権限が必要となります。

DLA の問題判別

CICS DLA は、EYUXD1000 から EYUXD1031 までの範囲の ID を持つメッセージを発行します。

CICSplex API 要求でエラー応答が返される場合は、行われた要求と受信された応答がメッセージで示されます。

エラーに関して戻される宛先および詳細度は、`CONSOLE_MESSAGES` および `FEEDBACK` 入力パラメーターを使用して制御します。

CICS DLA の実行が停止した場合は、ジョブを取り消す前に、次の手順を実行してください。

- SDUMP をとって、DLA アドレス・スペース、ユーティリティーが接続されている CMAS、さらに関連付けられた DMDS、DAT、TOP、COM、および QUE のデータ・スペースを含めます。
- DLA ジョブ・ログ、CMAS ジョブ・ログ、および出力された区分データ・セットを保管します。

第 2 章 BAS を使用したリソースの作成

CICS Explorerまたは Web ユーザー・インターフェースを使用して、必要な CICS リソースをモデル化してインストールするための BAS リソース・オブジェクトを作成することができます。

このタスクについて

リソース・オブジェクトを作成するプロセスは、3 段階からなります。

手順

1. 対象となるリソース定義ビューにアクセスします。
2. 定義を作成します。
3. 定義をインストールします。

次のタスク

リソース・オブジェクトをインストールしたら、CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、作成されたリソースについて調べることができます。

BAS ATOMSERVICE リソース定義の作業

ATOMSERVICE リソース定義は、CICS が Atom サービス、フィード、コレクション、またはカテゴリ文書を生成するために使用するリソースを指定します。

BAS ATOMSERVICE 定義の表示

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、既存の ATOMSERVICE リソース定義に関する情報を表示できます。

このタスクについて

ATOMSERVICE リソースを表す BAS リソース定義を ATOMDEF と呼びます。Web ユーザー・インターフェースの「**Atomservice** 定義」ビューに、ATOMDEF 定義の一覧が表示されます。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。
2. 「管理ビュー」メニューから、「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (**BAS**) 管理ビュー」をクリックします。
3. 「リソース定義」をクリックして、「**CICS** リソース定義」メニューを表示します。
4. 「**Atomservice** 定義」をクリックします。

タスクの結果

Web ユーザー・インターフェースは、現行コンテキストの ATOMDEF 定義の一覧を表示します。

次のタスク

このビューで、ATOMSERVICE リソース定義の作成、更新、除去、またはインストールができます。

BAS を使用して ATOMSERVICE リソースを定義する

BAS リソース・オブジェクト ATOMDEF を作成することにより、Atom サービス、フィールド、コレクション、またはカテゴリ文書のリソース定義を定義します。

このタスクについて

CICS Explorer または Webユーザー・インターフェースを使用して、リソース・オブジェクトを定義できます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック CICS リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「Atomservice 定義」をクリックして、ATOMDEF リソース定義のリストを表示します。
2. 「作成...」ボタンをクリックします。既存の定義を新規定義の基礎として使用するには、「作成...」ボタンをクリックする前に、チェック・ボックスをクリックします。「Atomservice 定義」ビューが表示されます。
3. 関連フィールドに情報を入力し、「はい」をクリックして定義を作成します。

タスクの結果

「Atomservice 定義」ビューが表示され、新しい定義が現れます。

次のタスク

リソース・グループに定義を追加するには、「リソース・グループへの追加...」ボタンをクリックします。

BAS ATOMSERVICE 定義のインストール

ATOMSERVICE リソースの BAS リソース・オブジェクトをインストールして CICS 領域でリソースを使用できるようにします。

始める前に

CICS 領域に ATOMSERVICE リソースをインストールするために、必要な ATOMDEF リソース・オブジェクトをデータ・リポジトリ内に作成しておく必要があります。

このタスクについて

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、BAS リソース・オブジェクトをインストールできます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「**Atomservice** 定義」をクリックして、ATOMDEF リソース定義のリストを表示します。
2. 「レコード」チェック・ボックスをクリックして ATOMDEF 定義を選択してから、「インストール...」ボタンをクリックします。あるいは、ATOMDEF 定義の名前をクリックし、「**ATOMDEF** 定義」詳細ビューで「インストール...」ボタンをクリックします。

タスクの結果

ATOMSERVICE リソースが指定の CICS 領域にインストールされます。

次のタスク

リソース定義が正常にインストールされたら、「**CICS** 操作ビュー」 > 「TCP/IP サービス操作ビュー」 > 「**Atomservice** 定義」をクリックすることにより、メインメニューからリソースについて調べることができます。

BAS BUNDLE リソース定義の作業

BUNDLE リソース定義により、アプリケーションのデプロイメントの単位であるバンドルを記述します。BUNDLE リソースにより、z/OS UNIX 上でバンドルをデプロイする場所、およびバンドルの状況を定義します。

BUNDLE 定義の表示

IBM CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、既存の BUNDLE 定義に関する情報を表示できます。

このタスクについて

BUNDLE を表す BAS リソース定義を BUNDDEF と呼びます。Web ユーザー・インターフェースの「バンドル定義」ビューに、BUNDDEF 定義の一覧が表示されます。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。
2. 「管理ビュー」メニューで、「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているリソース管理ビュー (**Fully functional resource administration views**)」のいずれかをクリックします。
3. 「リソース定義」 > 「バンドル定義」をクリックします。

タスクの結果

Web ユーザー・インターフェースは、現行コンテキストの BUNDDEF 定義の一覧を表示します。

次のタスク

このビューで、BUNDLE リソース定義の作成、除去、またはインストールができます。

BAS を使用してバンドルを定義する

BAS リソース・オブジェクト BUNDDEF を作成することにより、アプリケーション・バンドルのリソース定義を定義します。

このタスクについて

IBM CICS Explorer または Webユーザー・インターフェースを使用して、リソース・オブジェクトを定義できます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック CICS リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「バンドル定義」をクリックして、BUNDDEF リソース定義のリストを表示します。
2. 「作成...」ボタンをクリックします。既存の定義を新規定義の基礎として使用するには、「作成...」ボタンをクリックする前に、チェック・ボックスをクリックします。「バンドル定義」作成ビューが表示されます。
3. 関連フィールドに情報を入力し、「はい」をクリックして定義を作成します。

タスクの結果

「バンドル定義」ビューが表示され、新しい定義が現れます。

次のタスク

リソース・グループに定義を追加するには、「リソース・グループへの追加...」ボタンをクリックします。

BAS バンドル定義のインストール

バンドルの BAS リソース・オブジェクトをインストールして CICS 領域で使用できるようにします。

始める前に

CICS 領域にバンドルをインストールするために、必要な BUNDDEF リソース・オブジェクトをデータ・リポジトリ内に作成しておく必要があります。

このタスクについて

IBM CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、BAS リソース・オブジェクトをインストールできます。ここでは、Web ユーザー・イン

ターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「バンドル定義」をクリックして、BUNDDEF リソース定義のリストを表示します。
2. 「レコード」チェック・ボックスをクリックして定義を選択してから、「インストール...」ボタンをクリックします。あるいは、バンドル定義の名前をクリックし、「バンドル定義」詳細ビューで「インストール...」ボタンをクリックします。

タスクの結果

アプリケーション・バンドルが指定の CICS 領域にインストールされます。CICS は、バンドル・マニフェストに定義された追加リソースを動的に作成します。

次のタスク

リソース定義が正常にインストールされたら、「**CICS** 操作ビュー」 > 「アプリケーション」を選択することにより、WUI メインメニューから使用可能アプリケーション・バンドルについて調べることができます。IBM CICS Explorer を使用して、バンドルの一部としてインストールされているすべてのリソースの状況を表示することができます。

BAS Db2 接続リソース定義の作業

Db2 接続定義は、Db2 接続機能を使用する CICS 領域と Db2 サブシステムとの間の接続の全体的な特性を設定します。

BAS Db2 接続定義の表示

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、既存の Db2 接続定義についての情報を参照することができます。

このタスクについて

Db2 接続を表す BAS リソース定義は、DB2CDEF と呼ばれます。Web ユーザー・インターフェースの「**DB2** 接続定義」ビューに DB2CDEF 定義のリストが表示されます。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。
2. 「管理ビュー」メニューから、「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (**BAS**) 管理ビュー」をクリックします。
3. 「リソース定義」をクリックして、「**CICS** リソース定義」メニューを表示します。
4. 「**DB2** 接続定義」をクリックします。

タスクの結果

Web ユーザー・インターフェースに、現行コンテキストの Db2 接続定義のリストが表示されます。

次のタスク

このビューから、Db2 接続定義を作成、更新、削除、またはインストールすることもできます。

BAS を使用した Db2 接続の定義

BAS リソース・オブジェクト DB2CDEF を作成して、Db2 接続のリソース定義を定義します。

このタスクについて

CICS Explorer または Webユーザー・インターフェースを使用して、リソース・オブジェクトを定義できます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「**DB2** 接続定義」をクリックして、DB2CDEF リソース定義のリストを表示します。
2. 「作成...」ボタンをクリックします。既存の定義を新規定義の基礎として使用するには、「作成...」ボタンをクリックする前に、チェック・ボックスをクリックします。「**DB2** 接続定義」ビューが表示されます。
3. 関連フィールドに情報を入力し、「はい」をクリックして定義を作成します。

タスクの結果

「**DB2** 接続定義」ビューが表示され、新しい定義が現れます。

次のタスク

リソース・グループに定義を追加するには、「リソース・グループへの追加...」ボタンをクリックします。

BAS Db2 接続定義のインストール

Db2 接続の BAS リソース・オブジェクトをインストールして、その接続を CICS 領域で使えるようにします。

始める前に

CICS 領域に Db2 接続をインストールするために、必要な DB2CDEF リソース・オブジェクトをデータ・リポジトリ内に作成しておく必要があります。

このタスクについて

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、BAS リソース・オブジェクトをインストールできます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「**DB2** 接続定義」をクリックして、DB2CDEF リソース定義のリストを表示します。
2. 「レコード」チェック・ボックスをクリックして Db2 接続定義を選択し、「インストール...」ボタンをクリックします。あるいは、Db2 接続定義名をクリックして「**DB2** 接続定義」詳細ビューで「インストール...」ボタンをクリックします。

タスクの結果

Db2 接続が指定の CICS 領域にインストールされます。

次のタスク

リソース定義が正常にインストールされると、メインメニューから「**CICS** 操作」ビュー > 「**DB2**、**DBCTL** および **IBM MQ** 操作 (**DB2**, **DBCTL** and **IBM MQ operations**)」ビュー > 「接続」を選択してリソースを照会できます。

BAS Db2 エントリー・リソース定義の作業

Db2 エントリー定義は、Db2 接続機能を使用して Db2 サブシステムにアクセスする CICS トランザクションに必要なリソースを指定します。

Db2 エントリー定義の表示

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、既存の Db2 エントリー定義についての情報を参照することができます。

このタスクについて

Db2 エントリーを表す BAS リソース定義は、DB2EDEF と呼ばれます。Web ユーザー・インターフェースの「**DB2** エントリー定義」ビューに DB2EDEF 定義のリストが表示されます。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。
2. 「管理ビュー」メニューで、「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (**BAS**) 管理ビュー」のいずれかをクリックします。
3. 「リソース定義」をクリックして、「**CICS** リソース定義」メニューを表示します。
4. 「**DB2** エントリー定義」をクリックします。

タスクの結果

Web ユーザー・インターフェースに、現行コンテキストの Db2 エントリー定義のリストが表示されます。

次のタスク

このビューから、Db2 エントリー定義を作成、更新、削除、またはインストールすることもできます。

BAS を使用した Db2 エントリーの定義

BAS リソース・オブジェクト DB2EDEF を作成することにより、CICS 配置 JAR ファイルのリソース定義を定義します。

このタスクについて

CICS Explorer または Webユーザー・インターフェースを使用して、リソース・オブジェクトを定義できます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「**DB2** エントリー定義」をクリックします。
2. 「**DB2** エントリー定義」ビューで「作成...」ボタンをクリックします。既存の定義を新規定義の基礎として使用するには、「作成...」ボタンをクリックする前に、チェック・ボックスをクリックします。「**DB2** エントリー定義」作成ビューが表示されます。
3. 関連フィールドに情報を入力し、「はい」をクリックして定義を作成します。

タスクの結果

「**DB2** エントリー定義」ビューが表示され、新しい定義が現れます。

次のタスク

リソース・グループに定義を追加するには、「リソース・グループへの追加...」ボタンをクリックします。

BAS Db2 エントリー定義のインストール

Db2 エントリーの BAS リソース・オブジェクトをインストールして、その定義を CICS 領域で使用できるようにします。

始める前に

CICS 領域に Db2 エントリーをインストールするために、必要な DB2EDEF リソース・オブジェクトをデータ・リポジトリ内に作成しておく必要があります。

このタスクについて

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、BAS リソース・オブジェクトをインストールできます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「**DB2** エントリー定義」をクリックして、DB2EDEF リソース定義のリストを表示します。
2. 「レコード」チェック・ボックスをクリックして JAR ファイル定義を選択し、「インストール...」ボタンをクリックします。あるいは、Db2 エントリー定義名をクリックして「**DB2** エントリー定義」詳細ビューで「インストール...」ボタンをクリックします。

タスクの結果

Db2 エントリー・リソースが指定の CICS 領域にインストールされます。

次のタスク

リソース定義が正常にインストールされたら、「**CICS** 操作ビュー」 > 「**DB2**、**DBCTL** および **IBM MQ** 操作ビュー (**DB2**, **DBCTL** and **IBM MQ operations views**)」 > 「**DB2** 操作ビュー」 > 「エントリー」をクリックすることにより、メインメニューからリソースについて調べることができます。

BAS Db2 トランザクション・リソース定義の作業

Db2 トランザクション定義は、Db2 エントリー定義に指定されたリソースを使用するトランザクションを識別します。

Db2 トランザクション定義の表示

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、既存の Db2 トランザクション定義についての情報を参照することができます。

このタスクについて

Db2 トランザクションを表す BAS リソース定義は、DB2TDEF と呼ばれます。Web ユーザー・インターフェースの「**DB2** トランザクション定義」ビューに DB2TDEF 定義のリストが表示されます。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。
2. 「管理ビュー」メニューで、「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (**BAS**) 管理ビュー」のいずれかをクリックします。
3. 「**CICS** リソース定義」をクリックして、「**CICS** リソース定義」ビューを表示します。
4. 「**DB2** トランザクション定義」をクリックします。

タスクの結果

Web ユーザー・インターフェースに、現行コンテキストの Db2 トランザクション定義のリストが表示されます。

次のタスク

このビューから、Db2 トランザクション定義を作成、更新、削除、またはインストールすることもできます。

BAS を使用した Db2 トランザクションの定義

BAS リソース・オブジェクト DB2TDEF を作成して、Db2 トランザクションのリソース定義を定義します。

このタスクについて

CICS Explorer または Webユーザー・インターフェースを使用して、リソース・オブジェクトを定義できます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック CICS リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「DB2 トランザクション定義」をクリックします。
2. 「DB2 トランザクション定義」ビューで「作成...」ボタンをクリックします。既存の定義を新規定義の基礎として使用するには、「作成...」ボタンをクリックする前に、チェック・ボックスをクリックします。「DB2 トランザクション定義」作成ビューが表示されます。
3. 関連フィールドに情報を入力し、「はい」をクリックして定義を作成します。

タスクの結果

「DB2 トランザクション定義」ビューが表示され、新しい定義が現れます。

次のタスク

リソース・グループに定義を追加するには、「リソース・グループへの追加...」ボタンをクリックします。

BAS Db2 トランザクション定義のインストール

Db2 トランザクションの BAS リソース・オブジェクトをインストールして、定義を CICS 領域で使用できるようにします。

始める前に

CICS 領域に Db2 トランザクション定義をインストールするために、必要な DB2TDEF リソース・オブジェクトをデータ・リポジトリ内に作成しておく必要があります。

このタスクについて

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、BAS リソース・オブジェクトをインストールできます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「**DB2** トランザクション定義」をクリックして、DB2TDEF リソース定義のリストを表示します。
2. 「レコード」チェック・ボックスをクリックして Db2 トランザクション定義を選択し、「インストール...」ボタンをクリックします。あるいは、Db2 接続定義名をクリックして「**DB2** トランザクション定義」詳細ビューで「インストール...」ボタンをクリックします。

タスクの結果

Db2 トランザクションが指定の CICS 領域にインストールされます。

次のタスク

リソース定義が正常にインストールされたら、「**CICS** 操作ビュー」 > 「**DB2**、**DBCTL** および **IBM MQ** 操作ビュー (**DB2**, **DBCTL** and **IBM MQ operations views**)」 > 「**DB2** 操作ビュー」をクリックすることにより、リソースについて調べることができます。

BAS 文書テンプレート・リソース定義の作業

文書テンプレート定義は、管理対象 CICS 領域で使用するための文書テンプレートを定義します。

文書テンプレート定義の表示

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、既存の文書テンプレート定義に関する情報を表示できます。

このタスクについて

文書テンプレートを表す BAS リソース定義を DOCDEF と呼びます。Web ユーザー・インターフェースの「文書テンプレート定義」ビューに、DOCDEF 定義の一覧が表示されます。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。
2. 「管理ビュー」メニューで、「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (**BAS**) 管理ビュー」のいずれかをクリックします。
3. 「**CICS** リソース定義」をクリックして、「**CICS** リソース定義」ビューを表示します。
4. 「文書テンプレート定義」をクリックします。

タスクの結果

Web ユーザー・インターフェースは、現行コンテキストの文書テンプレート定義の一覧を表示します。

次のタスク

このビューで、文書テンプレート定義の作成、更新、除去、またはインストールもできます。

BAS を使用して文書テンプレートを定義する

BAS リソース・オブジェクト DOCDEF を作成することにより、文書テンプレートのリソース定義を定義します。

このタスクについて

CICS Explorer または Webユーザー・インターフェースを使用して、リソース・オブジェクトを定義できます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」「ベーシック CICS リソース管理ビュー」「リソース定義」「文書定義」をクリックします。
2. 「文書定義」ビューで「作成...」ボタンをクリックします。既存の定義を新規定義の基礎として使用するには、「作成...」ボタンをクリックする前に、チェック・ボックスをクリックします。「文書テンプレート定義」作成ビューが表示されます。
3. 関連する各フィールドに値を入力し、「はい」をクリックして定義を作成します。

タスクの結果

「文書定義」ビューが表示され、新しい定義が現れます。

次のタスク

リソース・グループに定義を追加するには、「リソース・グループへの追加...」ボタンをクリックします。

文書テンプレート定義のインストール

文書テンプレートの BAS リソース・オブジェクトをインストールして CICS 領域で定義を使用できるようにします。

始める前に

CICS 領域に文書テンプレートをインストールするために、必要な DOCDEF リソース・オブジェクトをデータ・リポジトリ内に作成しておく必要があります。

このタスクについて

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、BAS リソース・オブジェクトをインストールできます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「文書テンプレート定義」をクリックして、DOCDEF リソース定義のリストを表示します。
2. 「レコード」チェック・ボックスをクリックして文書テンプレート定義を選択してから、「インストール...」ボタンをクリックします。あるいは、文書テンプレート定義の名前をクリックし、「文書テンプレート定義」詳細ビューで「インストール...」ボタンをクリックします。

タスクの結果

文書テンプレート・リソースが指定の CICS 領域にインストールされます。

次のタスク

リソース定義が正常にインストールされたら、「**CICS** 操作ビュー」 > 「文書テンプレート操作ビュー」 > 「文書テンプレート」をクリックすることにより、リソースについて調べることができます。

FEPI ノード・リスト・リソース定義の作業

FEPI ノード・リスト定義は、FEPI ノードの物理特性および操作特性を記述します。

FEPI ノード・リスト定義の表示

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、既存の FEPI ノード・リスト定義に関する情報を表示できます。

このタスクについて

FEPI ノード・リストを表す BAS リソース定義を FENODDEF と呼びます。Web ユーザー・インターフェースの「FEPI ノード・リスト定義」ビューに、既存の FEPI ノード定義に関する情報が表示されます。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。
2. 「管理ビュー」メニューで、「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (**BAS**) 管理ビュー」のいずれかをクリックします。
3. 「**CICS** リソース定義」をクリックして、「**CICS** リソース定義」ビューを表示します。
4. 「**FEPI** ノード・リスト定義」をクリックします。

タスクの結果

Web ユーザー・インターフェースは、FEPI ノード定義の一覧を表示します。

次のタスク

このビューで、FEPI ノード・リスト定義の作成、更新、除去、またはインストールもできます。

BAS を使用して FEPI ノード・リストを定義する

BAS リソース・オブジェクト FENODDEF を作成することにより、FEPI ノード・リストのリソース定義を定義します。

このタスクについて

CICS Explorer または Webユーザー・インターフェースを使用して、リソース・オブジェクトを定義できます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」「ベーシック CICS リソース管理ビュー」「リソース定義」「FEPI ノード・リスト定義」をクリックします。
2. 「FEPI ノード・リスト定義」ビューで「作成...」ボタンをクリックします。既存の定義を新規定義の基礎として使用するには、「作成...」ボタンをクリックする前に、チェック・ボックスをクリックします。「FEPI ノード・リスト定義」作成ビューが表示されます。
3. 関連フィールドに情報を入力し、「はい」をクリックして定義を作成します。

タスクの結果

「FEPI ノード・リスト定義」ビューが表示され、新しい定義が現れます。

次のタスク

リソース・グループに定義を追加するには、「リソース・グループへの追加...」ボタンをクリックします。

BAS FEPI ノード・リスト定義のインストール

FEPI ノード・リストの BAS リソース・オブジェクトをインストールして CICS 領域で定義を使用できるようにします。

始める前に

CICS 領域に FEPI ノード・リストをインストールするために、必要な FENODDEF リソース・オブジェクトをデータ・リポジトリ内に作成しておく必要があります。

このタスクについて

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、BAS リソース・オブジェクトをインストールできます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「**FEPI** ノード・リスト定義」をクリックして、FENODDEF リソース定義のリストを表示します。
2. 「レコード」チェック・ボックスをクリックして FEPI ノード・リスト定義を選択してから、「インストール...」ボタンをクリックします。あるいは、FEPI ノード・リスト定義の名前をクリックし、「**FEPI** ノード・リスト定義」詳細ビューで「インストール...」ボタンをクリックします。

タスクの結果

FEPI ノード・リスト・リソースが指定の CICS 領域にインストールされます。

次のタスク

リソース定義が正常にインストールされたら、「**CICS** 操作ビュー」 > 「**FEPI** 操作ビュー」 > 「ノード」をクリックすることにより、リソースについて調べることができます。

FEPI プール・リソース定義の作業

FEPI プール定義は、FEPI プールの物理特性および操作特性を記述します。

FEPI プール定義の表示

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、既存の FEPI プール定義に関する情報を表示できます。

このタスクについて

FEPI プールを表す BAS リソース定義を FEPOODEF と呼びます。Web ユーザー・インターフェースの「FEPI プール定義」ビューに、既存の FEPI プール定義に関する情報が表示されます。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。
2. 「管理ビュー」メニューで、「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (**BAS**) 管理ビュー」のいずれかをクリックします。
3. 「**CICS** リソース定義」をクリックして、「**CICS** リソース定義」ビューを表示します。
4. 「**FEPI** プール定義」をクリックします。

タスクの結果

Web ユーザー・インターフェースは、FEPI プール定義の一覧を表示します。

次のタスク

このビューで、FEPI プール定義の作成、更新、除去、またはインストールもできます。

BAS を使用して FEPI プールを定義する

BAS リソース・オブジェクト FEPOODEF を作成することにより、FEPI プールのリソース定義を定義します。

このタスクについて

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、リソース・オブジェクトを定義できます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」「ベーシック CICS リソース管理ビュー」「リソース定義」「FEPI プール定義」をクリックします。
2. 「FEPI プール定義」ビューで「作成...」ボタンをクリックします。既存の定義を新規定義の基礎として使用するには、「作成...」ボタンをクリックする前に、チェック・ボックスをクリックします。「FEPI プール定義」作成ビューが表示されます。
3. 関連フィールドに情報を入力し、「はい」をクリックして定義を作成します。

タスクの結果

「FEPI プール定義」ビューが表示され、新しい定義が現れます。

次のタスク

リソース・グループに定義を追加するには、「リソース・グループへの追加...」ボタンをクリックします。

BAS FEPI プール定義のインストール

FEPI プールの BAS リソース・オブジェクトをインストールして CICS 領域で定義を使用できるようにします。

始める前に

CICS 領域に FEPI プールをインストールするために、必要な FEPOODEF リソース・オブジェクトをデータ・リポジトリ内に作成しておく必要があります。

このタスクについて

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、BAS リソース・オブジェクトをインストールできます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」「リソース定義」「**FEPI** プール定義」をクリックして、FEPOODEF リソース定義のリストを表示します。
2. 「レコード」チェック・ボックスをクリックして FEPI プール定義を選択してから、「インストール...」ボタンをクリックします。あるいは、FEPI プール定義の名前をクリックし、「**FEPI** プール定義」詳細ビューで「インストール...」ボタンをクリックします。

タスクの結果

FEPI プール・リソースが指定の CICS 領域にインストールされます。

次のタスク

リソース定義が正常にインストールされたら、「**CICS** 操作ビュー」>「**FEPI** 操作ビュー」>「プール」をクリックすることにより、リソースについて調べることができます。

FEPI プロパティ・セット・リソース定義の作業

FEPI プロパティ・セット定義は、FEPI プロパティ・セットの物理特性および操作特性を記述します。

FEPI プロパティ・セット定義の表示

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、既存の FEPI プロパティ・セット定義に関する情報を表示できます。

このタスクについて

FEPI プロパティ・セットを表す BAS リソース定義を FEPRODEF と呼びます。Web ユーザー・インターフェースの「**FEPI** プロパティ・セット定義」ビューに、既存の FEPI プロパティ・セット定義に関する情報が表示されます。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。
2. 「管理ビュー」メニューで、「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (**BAS**) 管理ビュー」のいずれかをクリックします。
3. 「**CICS** リソース定義」をクリックして、「**CICS** リソース定義」ビューを表示します。
4. 「**FEPI** プロパティ・セット定義」をクリックします。

タスクの結果

Web ユーザー・インターフェースは、FEPI プロパティ・セット定義の一覧を表示します。

次のタスク

このビューで、FEPI プロパティ・セット定義の作成、更新、除去、またはインストールもできます。

BAS を使用して FEPI プロパティ・セットを定義する

BAS リソース・オブジェクト FEPRODEF を作成することにより、FEPI プロパティ・セットのリソース定義を定義します。

このタスクについて

CICS Explorer または Webユーザー・インターフェースを使用して、リソース・オブジェクトを定義できます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」「ベーシック CICS リソース管理ビュー」「リソース定義」「FEPI プロパティ・セット定義」をクリックします。
2. 「FEPI プロパティ・セット定義」ビューで「作成...」ボタンをクリックします。既存の定義を新規定義の基礎として使用するには、「作成...」ボタンをクリックする前に、チェック・ボックスをクリックします。「FEPI プロパティ・セット定義」作成ビューが表示されます。
3. 関連する各フィールドに値を入力し、「はい」をクリックして定義を作成します。

タスクの結果

「DB2 エントリー定義」ビューが表示され、新しい定義が現れます。

次のタスク

リソース・グループに定義を追加するには、「リソース・グループへの追加...」ボタンをクリックします。

BAS FEPI プロパティ・セット定義のインストール

FEPI プロパティ・セットの BAS リソース・オブジェクトをインストールして CICS 領域で定義を使用できるようにします。

始める前に

CICS 領域に FEPI プロパティ・セットをインストールするために、必要な FEPRODEF リソース・オブジェクトをデータ・リポジトリ内に作成しておく必要があります。

このタスクについて

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、BAS リソース・オブジェクトをインストールできます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「**FEPI** プロパティ・セット定義」をクリックして、FEPRODEF リソース定義のリストを表示します。
2. 「レコード」チェック・ボックスをクリックして FEPI ノード・リスト定義を選択してから、「インストール...」ボタンをクリックします。あるいは、プロパティ・セット定義の名前をクリックし、「**FEPI** プロパティ・セット定義」詳細ビューで「インストール...」ボタンをクリックします。

タスクの結果

FEPI プロパティ・セット・リソースが指定の CICS 領域にインストールされます。

次のタスク

リソース定義が正常にインストールされたら、「**CICS** 操作ビュー」 > 「**FEPI** 操作ビュー」 > 「プロパティ・セット」をクリックすることにより、リソースについて調べることができます。

FEPI ターゲット・リスト・リソース定義の作業

FEPI ターゲット・リスト定義は、FEPI ターゲットの物理特性および操作特性を記述します。

FEPI ターゲット・リスト定義の表示

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、既存の FEPI プロパティ・セット定義に関する情報を表示できます。

このタスクについて

FEPI ターゲット・リストを表す BAS リソース定義を FETRGDEF と呼びます。Web ユーザー・インターフェースの「**FEPI** ターゲット・リスト定義」ビューに、既存の FEPI ターゲット・リスト定義に関する情報が表示されます。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。
2. 「管理ビュー」メニューで、「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (**BAS**) 管理ビュー」のいずれかをクリックします。
3. 「**CICS** リソース定義」をクリックして、「**CICS** リソース定義」ビューを表示します。
4. 「**FEPI** ターゲット・リスト定義」をクリックします。

タスクの結果

Web ユーザー・インターフェースは、FEPI ターゲット・リスト定義の一覧を表示します。

次のタスク

このビューで、FEPI ターゲット・リスト定義の作成、更新、除去、またはインストールもできます。

BAS を使用して FEPI ターゲット・リストを定義する

BAS リソース・オブジェクト FETRGDEF を作成することにより、FEPI ターゲット・リストのリソース定義を定義します。

このタスクについて

Web ユーザー・インターフェースを使用して、リソース・オブジェクトを定義できます。以下の説明は、この手順を示しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック CICS リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「FEPI ターゲット・リスト定義」をクリックします。
2. 「FEPI ターゲット・リスト定義」ビューで「作成...」ボタンをクリックします。既存の定義を新規定義の基礎として使用するには、「作成...」ボタンをクリックする前に、チェック・ボックスをクリックします。「FEPI ターゲット・リスト定義」作成ビューが表示されます。
3. 関連する各フィールドに値を入力し、「はい」をクリックして定義を作成します。

タスクの結果

「FEPI ターゲット・リスト定義」ビューが表示され、新しい定義が現れます。

次のタスク

リソース・グループに定義を追加するには、「リソース・グループへの追加...」ボタンをクリックします。

BAS FEPI ターゲット・リスト定義のインストール

FEPI ターゲット・リストの BAS リソース・オブジェクトをインストールして CICS 領域で定義を使用できるようにします。

始める前に

CICS 領域に FEPI ターゲット・リストをインストールするために、必要な FETRGDEF リソース・オブジェクトをデータ・リポジトリ内に作成しておく必要があります。

このタスクについて

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、BAS リソース・オブジェクトをインストールできます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「**FEPI** ターゲット・リスト定義」をクリックして、FETRGDEF リソース定義のリストを表示します。
2. 「レコード」チェック・ボックスをクリックして FEPI ターゲット・リスト定義を選択してから、「インストール...」ボタンをクリックします。あるいは、FEPI ターゲット・リスト定義の名前をクリックし、「**FEPI** ターゲット・リスト定義」詳細ビューで「インストール...」ボタンをクリックします。

タスクの結果

FEPI ターゲット・リスト・リソースが指定の CICS 領域にインストールされます。

次のタスク

FEPI ターゲット・リストのリソース定義がインストールされたら、「**CICS** 操作ビュー」 > 「**FEPI** 操作ビュー」 > 「ターゲット」を使用して、作成されたオブジェクトについて調べることができます。

BAS FILE リソース定義の作業

FILE リソース定義は、ファイルの物理特性および操作特性を記述します。

BAS ファイル定義の表示

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、既存の FILE 定義に関する情報を表示できます。

このタスクについて

FILE リソースを表す BAS リソース定義を FILEDEF と呼びます。Web ユーザー・インターフェースの「**File** 定義」ビューに、既存の FILE 定義に関する情報が表示されます。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。
2. 「管理ビュー」メニューで、「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (**BAS**) 管理ビュー」のいずれかをクリックします。
3. 「**CICS** リソース定義」をクリックして、「**CICS** リソース定義」ビューを表示します。
4. 「ファイル定義」をクリックします。

タスクの結果

Web ユーザー・インターフェースは、FILE 定義の一覧を表示します。

次のタスク

このビューで、FILE 定義の作成、更新、除去、またはインストールもできます。

BAS を使用してファイルを定義する

BAS リソース・オブジェクト FILEDEF を作成することにより、ファイルのリソース定義を定義します。

このタスクについて

CICS Explorer または Webユーザー・インターフェースを使用して、リソース・オブジェクトを定義できます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」「リソース定義」「ファイル定義」をクリックします。
2. 「ファイル定義」ビューで「作成...」ボタンをクリックします。既存の定義を新規定義の基礎として使用するには、「作成...」ボタンをクリックする前に、チェック・ボックスをクリックします。「ファイル定義」作成ビューが表示されます。
3. 関連フィールドに情報を入力し、「はい」をクリックして定義を作成します。

タスクの結果

「ファイル定義」ビューが表示され、新しい定義が現れます。

次のタスク

リソース・グループに定義を追加するには、「リソース・グループへの追加...」ボタンをクリックします。

BAS ファイル定義のインストール

FILE 定義の BAS リソース・オブジェクトをインストールして CICS 領域でファイルを使用できるようにします。

始める前に

CICS 領域に FILE リソースをインストールするために、必要な FILEDEF リソース・オブジェクトをデータ・リポジトリ内に作成しておく必要があります。

このタスクについて

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、BAS リソース・オブジェクトをインストールできます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」>「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」>「リソース定義」>「ファイル定義」をクリックします。
2. 「レコード」チェック・ボックスをクリックしてファイル定義を選択してから、「インストール...」ボタンをクリックします。あるいは、ファイル定義の名前をクリックし、「ファイル定義」詳細ビューで「インストール...」ボタンをクリックします。

タスクの結果

FILE リソースが指定の CICS 領域にインストールされます。

次のタスク

リソース定義が正常にインストールされたら、「**CICS** 操作ビュー」 > 「ファイル操作ビュー」をクリックすることにより、リソースについて調べることができます。対象とするファイル・タイプをメニューから選択します。

ファイル・キー・セグメントのリソース定義

ファイル・キー・セグメント定義は、レコード・キーとして使用される Windows ファイル・レコードの各部分を記述します。

キー・セグメントは、以下のファイルでのみ有効です。

- 入力シーケンス・ファイル (タイプ E)
- キー・シーケンス・ファイル (タイプ K)

以下のファイルでは、キー・セグメントは無効です。

- 代替索引ファイル (タイプ A)
- 相対レコード・ファイル (タイプ R)
- リモート・ファイル

ファイル・キー・セグメント定義をインストールすることはできません。

ファイル・セグメント定義の表示

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、既存のファイル・セグメント定義に関する情報を表示できます。

このタスクについて

ファイル・セグメント・リソースを表す BAS リソース定義を FSEGDEF と呼びます。Web ユーザー・インターフェースの「ファイル・セグメント定義」ビューに、既存のファイル・セグメント定義に関する情報が表示されます。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。
2. 「管理ビュー」メニューで、「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (**BAS**) 管理ビュー」のいずれかをクリックします。
3. 「**CICS** リソース定義」をクリックして、「**CICS** リソース定義」ビューを表示します。
4. 「ファイル・セグメント定義」をクリックします。

タスクの結果

Web ユーザー・インターフェースは、ファイル・セグメント定義の一覧を表示します。

次のタスク

このビューで、ファイル・セグメント定義の作成、更新、または除去もできます。

BAS を使用してファイル・キー・セグメントを定義する

BAS リソース・オブジェクト FSEGDEF を作成することにより、ファイル・キー・セグメントのリソース定義を定義します。

このタスクについて

CICS Explorer または Webユーザー・インターフェースを使用して、リソース・オブジェクトを定義できます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「ファイル・キー・セグメント定義」をクリックします。
2. 「ファイル・キー・セグメント定義」ビューで「作成...」ボタンをクリックします。既存の定義を新規定義の基礎として使用するには、「作成...」ボタンをクリックする前に、チェック・ボックスをクリックします。「ファイル・キー・セグメント定義」作成ビューが表示されます。
3. 関連する各フィールドに値を入力し、「はい」をクリックして定義を作成します。

タスクの結果

「ファイル・キー・セグメント定義」ビューが表示され、新しい定義が現れます。

次のタスク

リソース・グループに定義を追加するには、「リソース・グループへの追加...」ボタンをクリックします。

ファイル・キー・セグメント定義のインストール

このタスクについて

ファイル・キー・セグメント定義をインストールすることはできません。

BAS エンキュー・モデル定義の作業

エンキュー・モデル定義は、CICS 領域でエンキュー・モデルが実行される方法を記述します。

グローバル・エンキュー・モデル定義の表示

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、既存のグローバル・エンキュー・モデル定義に関する情報を表示できます。

このタスクについて

グローバル・エンキュー・モデル・リソースを表す BAS リソース定義を ENQMDEF と呼びます。 Web ユーザー・インターフェースの「グローバル・エンキュー・モデル定義」ビューに、既存のグローバル・エンキュー・モデル定義に関する情報が表示されます。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。
2. 「管理ビュー」メニューで、「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (**BAS**) 管理ビュー」のいずれかをクリックします。
3. 「**CICS** リソース定義」をクリックして、「**CICS** リソース定義」ビューを表示します。
4. 「グローバル・エンキュー・モデル定義」をクリックします。

タスクの結果

Web ユーザー・インターフェースに、グローバル・エンキュー・モデル定義の一覧が表示されます。

次のタスク

このビューで、グローバル・エンキュー・モデル定義の作成、更新、インストール、または除去も行えます。

BAS を使用してグローバル・エンキュー・モデルを定義する

BAS リソース・オブジェクト ENQMDEF を作成することにより、グローバル・エンキュー・モデルのリソース定義を定義します。

このタスクについて

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、リソース・オブジェクトを定義できます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「グローバル・エンキュー・モデル定義」をクリックします。
2. 「グローバル・エンキュー・モデル定義」ビューで「作成...」ボタンをクリックします。既存の定義を新規定義の基礎として使用するには、「作成...」ボタンをクリックする前に、チェック・ボックスをクリックします。「グローバル・エンキュー・モデル定義」作成ビューが表示されます。
3. 関連する各フィールドに値を入力し、「はい」をクリックして定義を作成します。

タスクの結果

「グローバル・エンキュー・モデル定義」ビューが表示され、新しい定義が現れます。

次のタスク

リソース・グループに定義を追加するには、「リソース・グループへの追加...」ボタンをクリックします。

BAS グローバル・エンキュー・モデル定義のインストール

グローバル・エンキュー・モデル定義の BAS リソース・オブジェクトをインストールして CICS 領域で使用できるようにします。

始める前に

CICS 領域にグローバル・エンキュー・モデル定義をインストールするためには、必要な ENQMDEF リソース・オブジェクトをデータ・リポジトリ内に作成しておく必要があります。

このタスクについて

ネストされた総称エンキュー名を形成するエンキュー・モデルは、使用不可の状態ではインストールするか、または最も特定されているもの（例えば、ABCD）から最も特定されていないもの（例えば、AB*）の順にインストールする必要があります。同じエンキュー名のエンキュー・モデルまたは特定性の低いエンキュー名がネストされた別のエンキュー・モデルが既にインストールされていて使用可能になっている場合、インストールは失敗します。使用不可のエンキュー・モデルは任意の順序でインストールできますが、それらを使用可能にする際は、最も特定されているものから最も特定されていないものの順に行う必要があります。

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、BAS リソース・オブジェクトをインストールできます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック CICS リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「グローバル・エンキュー・モデル定義」をクリックします。
2. 「レコード」チェック・ボックスをクリックしてエンキュー・モデル定義を選択してから、「インストール...」ボタンをクリックします。あるいは、エンキュー・モデル定義の名前をクリックし、「グローバル・エンキュー」詳細ビューで「インストール...」ボタンをクリックします。

タスクの結果

グローバル・エンキュー・モデル定義が指定の CICS 領域にインストールされます。

次のタスク

リソース定義が正常にインストールされたら、「**CICS** 操作ビュー」 > 「グローバル・エンキュー・モデル操作ビュー」 > 「グローバル・エンキュー・モデル」をクリックすることにより、リソースについて調べることができます。

BAS IPCONN リソース定義の作業

IPCONN リソース定義は、ローカル CICS 領域からリモート CICS 領域またはシステムへの IP 相互接続 (IPIC) 接続のアウトバウンド属性を定義します。

BAS IPIC 接続定義の表示

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、既存の IPIC 接続定義に関する情報を表示できます。

このタスクについて

IPCONN リソースを表す BAS リソース定義を IPCONDEF と呼びます。Web ユーザー・インターフェースの「**IPIC** 接続定義」ビューに、IPCONDEF 定義の一覧が表示されます。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。
2. 「管理ビュー」メニューで、「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (**BAS**) 管理ビュー」のいずれかをクリックします。
3. 「リソース定義」をクリックして、「**CICS** リソース定義」メニューを表示します。
4. 「**IPIC** 接続定義」をクリックして、定義されている IPIC 接続の一覧を表示します。

タスクの結果

Web ユーザー・インターフェースは、IPIC 接続定義の一覧を表示します。

次のタスク

このビューで、IPIC 接続定義の作成、更新、インストール、または除去もできます。

BAS を使用して IPIC 接続を定義する

BAS リソース・オブジェクト IPCONDEF を作成することにより、IPIC 接続を定義できます。

このタスクについて

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、リソース・オブジェクトを定義できます。このタスクの手順では、Web ユーザー・インターフェースを使用します。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「**IPIC** 接続定義」をクリックして、IPCONDEF リソース定義のリストを表示します。
2. 「作成...」をクリックします。既存の定義を新規定義の基礎として使用するには、「作成...」をクリックする前に、チェック・ボックスをクリックします。
「**IPIC** 接続定義」作成ビューが表示されます。
3. 関連する各フィールドに、以下のように入力します。
 - a. IPCONDEF の名前は、パートナー CICS 領域の SYSID と同じものでなければなりません。この情報は、「**CICS** システム定義」ビューに表示できます。
 - b. IPCONDEF の APPLID は、パートナー CICS 領域の APPLID でなければなりません。この情報は、「**CICS** システム定義」ビューに表示できます。
 - c. オプション: IPCONDEF のホスト、ネットワーク ID、およびポート番号は、パートナー CICS 領域から値が取り込まれます (システム定義で定義されている場合)。値が取り込まれない場合、パートナー CICS 領域が別のネットワーク内にあるときは、ホスト名とネットワーク ID を指定することができます。APPLID と ネットワーク ID を組み合わせることにより、リモート CICS 領域が固有の名前で参照されます。パートナー CICS 領域のポート番号を指定することもできます。パートナー領域内の定義と異なる値を指定した場合、指定した値は定義の作成時にオーバーライドされます。
 - d. IPIC 接続のインバウンド属性を定義する、ローカル CICS 領域上の TCPDEF リソース・オブジェクトの名前を指定します。
 - e. 「はい」をクリックして、定義を作成します。

タスクの結果

「**IPIC** 接続定義」ビューに新しい定義が表示されます。

次のタスク

リソース・グループに定義を追加するには、「リソース・グループへの追加...」をクリックします。パートナー CICS 領域の IPCONDEF リソース・オブジェクトも作成し、各領域に適した TCPDEF リソース・オブジェクトが確実に存在するようにしなければなりません。

BAS IPIC 接続定義のインストール

IPCONN リソース定義の BAS リソース・オブジェクトをインストールして CICS 領域でリソースを使用できるようにします。

始める前に

CICS 領域に IPCONN リソースをインストールするために、必要な IPCONDEF リソース・オブジェクトをデータ・リポジトリ内に作成しておく必要があります。

このタスクについて

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して IPIC 接続定義を手動で各 CICS 領域にインストールするか、SYSLINK リソース・オブジェクトを使用して必要な定義を自動的にターゲット CICS 領域にインストールすることができます。このタスクの手順では、Web ユーザー・インターフェースを使用します。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「**IPIC** 接続定義」をクリックして、IPCONDEF リソース定義のリストを表示します。
2. 「レコード」チェック・ボックスをクリックして CICS システムを選択してから、「インストール...」をクリックします。あるいは、CICS システム名をクリックし、「**IPIC** 接続定義」詳細ビューで「インストール...」をクリックします。
3. TCPDEF リソース・オブジェクトをインストールして、IPCONN リソースを参照する TCPIPService リソースを作成します。IPIC 接続を確立するためには、IPCONN リソースと TCPIPService リソースの両方が、ローカル CICS 領域とリモート CICS 領域にインストールされていなければなりません。

タスクの結果

IPIC 接続が指定の CICS 領域にインストールされます。

次のタスク

IPIC 接続定義が正常にインストールされたら、「**CICS** 操作ビュー」 > 「接続操作ビュー」をクリックすることにより、メインメニューから接続について調べることができます。

BAS ISC/MRO 接続リソース定義の作業

ISC/MRO 接続定義は、システム間連絡 (ISC) または複数領域操作 (MRO) を使用して CICS 領域が通信する相手のリモート領域またはリモート・システムを識別します。

BAS ISC および MRO 接続定義の表示

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、既存の ISC および MRO 接続定義に関する情報を表示できます。

このタスクについて

ISC または MRO CONNECTION リソースを表す BAS リソース定義を CONNDEF と呼びます。Web ユーザー・インターフェースの「**ISO/MRO** 接続定義」ビューに、CONNDEF 定義の一覧が表示されます。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。

2. 「管理ビュー」メニューで、「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (**BAS**) 管理ビュー」のいずれかをクリックします。
3. 「リソース定義」をクリックして、「**CICS** リソース定義」メニューを表示します。
4. 「**ISC/MRO** 接続定義」をクリックして、定義されている **ISC** および **MRO** 接続の一覧を表示します。

タスクの結果

Web ユーザー・インターフェースは、**ISC** および **MRO** 接続定義の一覧を表示します。

次のタスク

このビューで、**ISC** および **MRO** 接続定義の作成、更新、インストール、または除去もできます。

BAS を使用して **ISC** および **MRO** 接続を定義する

BAS リソース・オブジェクト **CONNDEF** を作成することにより、**ISC** 接続または **MRO** 接続のリソース定義を定義します。

このタスクについて

CICS Explorer または Webユーザー・インターフェースを使用して、リソース・オブジェクトを定義できます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「**ISC/MRO** 接続定義」をクリックします。
2. 「**ISC/MRO** 接続定義」ビューで、「作成...」ボタンをクリックします。既存の定義を新規定義の基礎として使用するには、「作成...」ボタンをクリックする前に、チェック・ボックスをクリックします。「**ISC/MRO** 接続定義」作成ビューが表示されます。
3. 関連する各フィールドに値を入力し、「はい」をクリックして定義を作成します。

タスクの結果

「**ISC/MRO** 接続定義」ビューが表示され、新しい定義が現れます。

次のタスク

リソース・グループに定義を追加するには、「リソース・グループへの追加...」ボタンをクリックします。

BAS ISC および MRO 接続定義のインストール

CONNECTION リソース定義の BAS リソース・オブジェクトをインストールして CICS 領域でリソースを使用できるようにします。

始める前に

CICS 領域に CONNECTION リソースをインストールするために、必要な CONNDEF リソース・オブジェクトをデータ・リポジトリ内に作成しておく必要があります。

このタスクについて

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して接続を手動で各 CICS 領域にインストールするか、SYSLINK リソース・オブジェクトを使用して必要な定義を自動的にターゲット CICS 領域にインストールすることができます。以下の指示では、Web ユーザー・インターフェースの手順について説明します。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「**ISC/MRO** 接続定義」をクリックします。
2. 「レコード」チェック・ボックスをクリックして CICS システムを選択してから、「インストール...」ボタンをクリックします。あるいは、CICS システム名をクリックし、「**ISO/MRO** 接続定義」詳細ビューで「インストール...」ボタンをクリックします。

タスクの結果

ISC または MRO 接続が指定の CICS 領域にインストールされます。

次のタスク

接続が正常にインストールされたら、「**CICS** 操作ビュー」 > 「接続操作ビュー」をクリックすることにより、メインメニューから接続について調べることができます。

BAS ジャーナル・モデル・リソース定義の作業

ジャーナル・モデル定義は、CICS ジャーナル名と、MVS システム・ログ・ストリームまたは SMF ログとの間の関連を記述します。

ジャーナル・モデル定義の表示

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、既存のジャーナル・モデル定義に関する情報を表示できます。

このタスクについて

ジャーナル・モデル・リソースを表す BAS リソース定義を JRNMDEF と呼びます。Web ユーザー・インターフェースの「ジャーナル・モデル定義」ビューに、JRNMDEF 定義の一覧が表示されます。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。
2. 「管理ビュー」メニューで、「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (**BAS**) 管理ビュー」のいずれかをクリックします。
3. 「リソース定義」をクリックして、「**CICS** リソース定義」メニューを表示します。
4. 「ジャーナル・モデル定義」をクリックします。

タスクの結果

Web ユーザー・インターフェースは、ジャーナル・モデル定義の一覧を表示します。

次のタスク

このビューで、ジャーナル・モデル定義の作成、更新、インストール、または除去もできます。

BAS を使用してジャーナル・モデルを定義する

BAS リソース・オブジェクト JRNMDEF を作成することにより、ジャーナル・モデルのリソース定義を定義します。

このタスクについて

CICS Explorer または Webユーザー・インターフェースを使用して、リソース・オブジェクトを定義できます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「ジャーナル・モデル定義」をクリックします。
2. 「ジャーナル・モデル定義」ビューで「作成...」ボタンをクリックします。既存の定義を新規定義の基礎として使用するには、「作成...」ボタンをクリックする前に、チェック・ボックスをクリックします。「ジャーナル・モデル定義」作成ビューが表示されます。
3. 関連フィールドに情報を入力し、「はい」をクリックして定義を作成します。

タスクの結果

「ジャーナル・モデル定義」ビューが表示され、新しい定義が現れます。

次のタスク

リソース・グループに定義を追加するには、「リソース・グループへの追加...」ボタンをクリックします。

BAS ジャーナル・モデル定義のインストール

ジャーナル・モデルの BAS リソース・オブジェクトをインストールして CICS 領域でリソースを使用できるようにします。

始める前に

CICS 領域にジャーナル・モデル・リソースをインストールするために、必要な JRNMDDEF リソース・オブジェクトをデータ・リポジトリ内に作成しておく必要があります。

このタスクについて

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、BAS リソース・オブジェクトをインストールできます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「ジャーナル・モデル定義」をクリックします。
2. 「レコード」チェック・ボックスをクリックしてジャーナル・モデル定義を選択してから、「インストール...」ボタンをクリックします。あるいは、ジャーナル・モデル定義の名前をクリックし、「ジャーナル・モデル定義」詳細ビューで「インストール...」ボタンをクリックします。

タスクの結果

ジャーナル・モデル定義が指定の CICS 領域にインストールされます。

次のタスク

ジャーナル・モデルが正常にインストールされたら、「**CICS** 操作ビュー」 > 「ジャーナル操作ビュー」 > 「モデル」をクリックすることにより、リソースについて調べることができます。

BAS JVMSERVER リソース定義の作業

JVMSERVER リソース定義は、JVM サーバーのランタイム環境を定義します。JVMSERVER リソースは、JVM プロファイルの場所、言語環境エンクレープ・オプション、および JVM の初期設定を制御するためのその他の構成情報を定義します。

JVMSERVER 定義の表示

IBM CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、既存の JVMSERVER 定義に関する情報を表示できます。

このタスクについて

JVMSERVER リソースを表す BAS リソース定義を JVMSVDEF と呼びます。Web ユーザー・インターフェースの「**JVMSERVER** 定義」ビューに、JVMSVDEF 定義の一覧が表示されます。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。
2. 「管理ビュー」メニューで、「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているリソース管理ビュー (**Fully functional resource administration views**)」のいずれかをクリックします。
3. 「リソース定義」 > 「**JVMSERVER** 定義」をクリックします。

タスクの結果

Web ユーザー・インターフェースは、現行コンテキストの JVM SVDEF 定義の一覧を表示します。

次のタスク

このビューで、JVM SERVER リソース定義の作成、除去、またはインストールができます。

BAS を使用して **JVMSERVER** リソースを定義する

BAS リソース・オブジェクト JVM SVDEF を作成することにより、JVM サーバーのリソース定義を定義します。

このタスクについて

IBM CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、リソース・オブジェクトを定義できます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「バンドル定義」をクリックして、JVM SVDEF リソース定義のリストを表示します。
2. 「作成...」ボタンをクリックします。既存の定義を新規定義の基礎として使用するには、「作成...」ボタンをクリックする前に、チェック・ボックスをクリックします。「バンドル定義」作成ビューが表示されます。
3. 関連フィールドに情報を入力し、「はい」をクリックして定義を作成します。

タスクの結果

「JVM サーバー定義」ビューが表示され、新しい定義が現れます。

次のタスク

リソース・グループに定義を追加するには、「リソース・グループへの追加...」ボタンをクリックします。

BAS **JVMSERVER** 定義のインストール

JVM サーバーの BAS リソース・オブジェクトをインストールして CICS 領域で使用するようにします。

始める前に

CICS 領域に JVM サーバーをインストールするために、必要な JVMSVDEF リソース・オブジェクトをデータ・リポジトリ内に作成しておく必要があります。

このタスクについて

IBM CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、BAS リソース・オブジェクトをインストールできます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「**JVM** サーバー定義」をクリックして、JVMSVDEF リソース定義のリストを表示します。
2. 「レコード」チェック・ボックスをクリックして定義を選択してから、「インストール...」ボタンをクリックします。あるいは、JVM サーバー定義の名前をクリックし、「JVM サーバー定義」詳細ビューで「インストール...」ボタンをクリックします。

タスクの結果

JVM サーバーが指定の CICS 領域にインストールされます。

次のタスク

リソース定義が正常にインストールされたら、「**CICS** 操作ビュー」 > 「**Enterprise Java** 操作ビュー (**Enterprise Java operations views**)」 > 「**JVM** サーバー」を選択することにより、WUI メインメニューから使用可能 JVM サーバーについて調べることができます。

BAS LIBRARY リソース定義の作業

LIBRARY 定義は、動的プログラム LIBRARY リソースの属性を記述します。

LIBRARY 定義の表示

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、既存の LIBRARY 定義に関する情報を表示できます。

このタスクについて

LIBRARY リソースを表す BAS リソース定義を LIBDEF と呼びます。Web ユーザー・インターフェースの「**LIBRARY** 定義」ビューに、既存の LIBRARY 定義に関する情報が表示されます。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。
2. 「管理ビュー」メニューで、「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (**BAS**) 管理ビュー」のいずれかをクリックします。

3. 「リソース定義」をクリックして、「**CICS** リソース定義」メニューを表示します。
4. 「**LIBRARY** 定義」をクリックします。

タスクの結果

Web ユーザー・インターフェースは、**LIBRARY** 定義の一覧を表示します。

次のタスク

このビューで、**LIBRARY** 定義の作成、更新、インストール、または除去もできます。

BAS を使用して **LIBRARY** リソースを定義する

BAS リソース・オブジェクト **LIBDEF** を作成することにより、**LIBRARY** リソース定義を定義します。

このタスクについて

CICS Explorer または Webユーザー・インターフェースを使用して、リソース・オブジェクトを定義できます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「**LIBRARY** 定義」をクリックします。
2. 「**LIBRARY** 定義」ビューで「作成...」ボタンをクリックします。既存の定義を新規定義の基礎として使用するには、「作成...」ボタンをクリックする前に、チェック・ボックスをクリックします。「**LIBRARY** 定義」作成ビューが表示されます。
3. 関連する各フィールドに値を入力し、「はい」をクリックして定義を作成します。

タスクの結果

「**LIBRARY** 定義」ビューが表示され、新しい定義が現れます。

次のタスク

リソース・グループに定義を追加するには、「リソース・グループへの追加...」ボタンをクリックします。

BAS **LIBRARY** 定義のインストール

LIBRARY リソースの BAS リソース・オブジェクトをインストールして CICS 領域で定義を使用できるようにします。

始める前に

CICS 領域に **LIBRARY** リソースをインストールするために、必要なリソース・オブジェクトをデータ・リポジトリ内に作成しておく必要があります。

このタスクについて

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、BAS リソース・オブジェクトをインストールできます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「**LIBRARY** 定義」をクリックします。
2. 「レコード」チェック・ボックスをクリックしてプログラム定義を選択してから、「インストール...」ボタンをクリックします。あるいは、**LIBRARY** 定義の名前をクリックし、「**LIBRARY** 定義」詳細ビューで「インストール...」ボタンをクリックします。

タスクの結果

LIBRARY リソースが **CICS** 領域にインストールされます。

次のタスク

LIBRARY リソースが正常にインストールされたら、「**CICS** 操作ビュー」 > 「プログラム操作ビュー」 > 「**LIBRARY**、**DFHRPL** を含む」をクリックすることにより、リソースについて調べることができます。

BAS LSR プール・リソース定義の作業

LSR プール定義は、VSAM が特定のファイルで使用するローカル共用リソース・プールのサイズおよび特性を記述します。

LSR プール定義の表示

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、既存の LSR プール定義に関する情報を表示できます。

このタスクについて

LSR プールを表す BAS リソース定義を **LSRDEF** と呼びます。Web ユーザー・インターフェースの「**LSR** プール定義」ビューに、既存の LSR プール定義に関する情報が表示されます。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。
2. 「管理ビュー」メニューで、「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (**BAS**) 管理ビュー」のいずれかをクリックします。
3. 「**CICS** リソース定義」をクリックして、「**CICS** リソース定義」ビューを表示します。
4. 「**LSR** プール定義」をクリックします。

タスクの結果

Web ユーザー・インターフェースは、LSR プール定義の一覧を表示します。

次のタスク

このビューで、LSR プール定義の作成、更新、インストール、または除去もできます。

BAS を使用して LSR プールを定義する

BAS リソース・オブジェクト LSRDEF を作成することにより、LSR プール・リソースを定義します。

このタスクについて

CICS Explorer または Webユーザー・インターフェースを使用して、リソース・オブジェクトを定義できます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「**LSR** プール定義」をクリックします。
2. 「**LSR** プール定義」ビューで「作成...」ボタンをクリックします。既存の定義を新規定義の基礎として使用するには、「作成...」ボタンをクリックする前に、チェック・ボックスをクリックします。「**LSR** プール定義」作成ビューが表示されます。
3. 関連フィールドに情報を入力し、「はい」をクリックして定義を作成します。

タスクの結果

「**LSR** プール定義」ビューが表示され、新しい定義が現れます。

次のタスク

リソース・グループに定義を追加するには、「リソース・グループへの追加...」ボタンをクリックします。

BAS LSR プール定義のインストール

LSR プール・リソースの BAS リソース・オブジェクトをインストールして CICS 領域で定義を使用できるようにします。

始める前に

CICS 領域に LSR プール・リソースをインストールするために、必要なリソース・オブジェクトをデータ・リポジトリ内に作成しておく必要があります。

このタスクについて

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、BAS リソース・オブジェクトをインストールできます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「**LSR** プール定義」をクリックします。
2. 「レコード」チェック・ボックスをクリックして **LSR** プール定義を選択してから、「インストール...」ボタンをクリックします。あるいは、**LSR** プール定義の名前をクリックし、「**LSR** プール定義」詳細ビューで「インストール...」ボタンをクリックします。

タスクの結果

LSR プール・リソースが **CICS** 領域にインストールされます。

次のタスク

LSR プール・リソース定義が正常にインストールされたら、「**CICS** 操作ビュー」 > 「ファイル操作ビュー」をクリックすることにより、リソースについて調べることができます。「ファイル操作ビュー」メニューの「**VSAM LSR** プール・バッファ」または「**VSAM LSR** プール」のいずれかを選択します。

BAS マップ・セット・リソース定義の作業

マップ・セット定義は、関連した画面レイアウトのグループ、またはマップの特性を記述します。

マップ・セット定義の表示

CICS Explorer または **Web ユーザー・インターフェース**を使用して、既存のマップ・セット定義に関する情報を表示できます。

このタスクについて

マップ・セットを表す **BAS** リソース定義を **MAPDEF** と呼びます。**Web ユーザー・インターフェース**の「マップ・セット定義」ビューに、既存のマップ・セット定義に関する情報が表示されます。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。
2. 「管理ビュー」メニューで、「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (**BAS**) 管理ビュー」のいずれかをクリックします。
3. 「**CICS** リソース定義」をクリックして、「**CICS** リソース定義」ビューを表示します。
4. 「マップ・セット定義」をクリックします。

タスクの結果

Web ユーザー・インターフェースは、マップ・セット定義の一覧を表示します。

次のタスク

このビューで、マップ・セット定義の作成、更新、インストール、または除去もできます。

BAS を使用してマップ・セットを定義する

BAS リソース・オブジェクト MAPDEF を作成することにより、マップ・セット・リソースを定義します。

このタスクについて

CICS Explorer または Webユーザー・インターフェースを使用して、リソース・オブジェクトを定義できます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック CICS リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「マップ・セット定義」をクリックします。
2. 「マップ・セット定義」ビューで「作成...」ボタンをクリックします。既存の定義を新規定義の基礎として使用するには、「作成...」ボタンをクリックする前に、チェック・ボックスをクリックします。「マップ・セット定義」作成ビューが表示されます。
3. 関連する各フィールドに値を入力し、「はい」をクリックして定義を作成します。

タスクの結果

「マップ・セット定義」ビューが表示され、新しい定義が現れます。

次のタスク

リソース・グループに定義を追加するには、「リソース・グループへの追加...」ボタンをクリックします。

BAS マップ・セット定義のインストール

マップ・セット・リソースの BAS リソース・オブジェクトをインストールして CICS 領域で定義を使用できるようにします。

始める前に

CICS 領域にマップ・セット・リソースをインストールするために、必要なリソース・オブジェクトをデータ・リポジトリ内に作成しておく必要があります。

このタスクについて

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、BAS リソース・オブジェクトをインストールできます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「マップ・セット定義」をクリックします。
2. 「レコード」チェック・ボックスをクリックしてマップ・セット定義を選択してから、「インストール...」ボタンをクリックします。あるいは、マップ・セット定義の名前をクリックし、「マップ・セット定義」詳細ビューで「インストール...」ボタンをクリックします。

タスクの結果

マップ・セット・リソースが指定の **CICS** 領域にインストールされます。

BAS MQCONN リソース定義の作業

CICS 領域の **MQCONN** リソース定義は、**CICS** と **IBM MQ** との間の接続の属性を定義します。

BAS MQCONN 定義の表示

CICS Explorer または **Web ユーザー・インターフェース**を使用して、既存の **MQCONN** リソース定義に関する情報を表示できます。

このタスクについて

MQCONN リソースを表す **BAS** リソース定義を **MQCONDEF** と呼びます。
Web ユーザー・インターフェースの「**IBM MQ** 接続定義」ビューに、**MQCONDEF** 定義の一覧が表示されます。1 つの **CICS** 領域に一度にインストールして使用できる **MQCONN** リソース定義は、1 つだけです。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。
2. 「管理ビュー」メニューから、「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (**BAS**) 管理ビュー」をクリックします。
3. 「リソース定義」をクリックして、「**CICS** リソース定義」メニューを表示します。
4. 「**IBM MQ** 接続定義」をクリックします。

タスクの結果

Web ユーザー・インターフェースは、現行コンテキストの **MQCONDEF** 定義の一覧を表示します。

次のタスク

このビューで、**MQCONN** リソース定義の作成、更新、除去、またはインストールができます。

BAS を使用して MQCONN リソースを定義する

BAS リソース・オブジェクト MQCONDEF を作成することにより、CICS と IBM MQ の間の接続のリソース定義を定義します。

このタスクについて

CICS Explorer または Webユーザー・インターフェースを使用して、リソース・オブジェクトを定義できます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「**IBM MQ** 接続定義」をクリックして、MQCONDEF リソース定義のリストを表示します。
2. 「作成...」ボタンをクリックします。既存の定義を新規定義の基礎として使用するには、「作成...」ボタンをクリックする前に、チェック・ボックスをクリックします。「**IBM MQ** 接続定義」ビューが表示されます。
3. 関連フィールドに情報を入力し、「はい」をクリックして定義を作成します。

タスクの結果

「**IBM MQ** 接続定義」ビューが表示され、新しい定義が現れます。

次のタスク

リソース・グループに定義を追加するには、「リソース・グループへの追加...」ボタンをクリックします。

BAS MQCONN 定義のインストール

MQCONN リソースの BAS リソース・オブジェクトをインストールして、CICS 領域用の既存の IBM MQ 接続定義を新しい定義に置き換えます。

始める前に

CICS 領域に MQCONN リソースをインストールするために、必要な MQCONDEF リソース・オブジェクトをデータ・リポジトリ内に作成しておく必要があります。

このタスクについて

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、BAS リソース・オブジェクトをインストールできます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。1 つの CICS 領域に一度にインストールできる MQCONN リソース定義は 1 つだけです。そのため、2 つ目の MQCONN リソース定義をインストールする場合は、同じ名前の MQCONN リソース定義の再インストールでない限り、CICS は既存の MQCONN 定義を暗黙的に破棄してからインストールを進めます。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「**IBM MQ** 接続定義」をクリックして、MQCONDEF リソース定義のリストを表示します。
2. 「レコード」チェック・ボックスをクリックして MQCONDEF 定義を選択してから、「インストール...」ボタンをクリックします。あるいは、MQCONDEF 定義の名前をクリックし、「**MQCONDEF** 定義」詳細ビューで「インストール...」ボタンをクリックします。

タスクの結果

MQCONN リソースが指定の CICS 領域にインストールされます。

次のタスク

リソース定義が正常にインストールされたら、メインメニューから「**CICS** 操作」ビュー > 「**DB2**、**DBCTL** および **IBM MQ** 操作 (**DB2**, **DBCTL** and **IBM MQ operations**)」ビュー > 「**IBM MQ** 接続定義」をクリックして、そのリソースを照会できます。

BAS MQMONITOR リソース定義の作業

MQMONITOR リソース定義は、トリガー・モニター・トランザクション CKTI など、WebSphere MQ メッセージ・コンシューマーの属性を定義します。

BAS MQMONITOR 定義の表示

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、既存の MQMONITOR リソース定義に関する情報を表示できます。

このタスクについて

MQMONITOR リソースを表す BAS リソース定義を MQMONDEF と呼びます。Web ユーザー・インターフェースの「**WebSphere MQ** モニター定義」ビューに、MQMONDEF 定義の一覧が表示されます。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。
2. 「管理ビュー」メニューから、「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (**BAS**) 管理ビュー」をクリックします。
3. 「リソース定義」をクリックして、「**CICS** リソース定義」メニューを表示します。
4. 「**WebSphere MQ** モニター定義」をクリックします。

タスクの結果

Web ユーザー・インターフェースは、現行コンテキストの MQMONDEF 定義の一覧を表示します。

次のタスク

このビューで、MQMONITOR リソース定義の作成、更新、除去、またはインストールができます。

BAS を使用して MQMONITOR リソースを定義する

BAS リソース・オブジェクト MQMONDEF を作成することにより、MQ モニター (トリガー・モニター、MQ ブリッジ・モニター、またはユーザー作成モニター) のリソース定義を定義します。

このタスクについて

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、リソース・オブジェクトを定義できます。以下の指示では、Web ユーザー・インターフェースの手順について説明します。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック CICS リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (BAS) 管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「WebSphere MQ モニター定義」とクリックし、MQMONDEF リソース定義の一覧を表示します。
2. 「作成 (Create)」ボタンをクリックします。既存の定義を新規定義の基礎として使用するには、「作成」ボタンをクリックする前に、チェック・ボックスをクリックします。「WebSphere MQ モニター定義」ビューが表示されます。
3. 関連フィールドに情報を入力し、「はい」をクリックして定義を作成します。

タスクの結果

「WebSphere MQ モニター定義」ビューが表示され、新しい定義が現れます。

次のタスク

リソース・グループに定義を追加するには、「リソース・グループへの追加」ボタンをクリックします。

BAS MQMONITOR 定義のインストール

MQMONITOR リソースの BAS リソース・オブジェクトをインストールして CICS 領域で定義を使用できるようにします。

始める前に

CICS 領域に MQMONITOR リソースをインストールするために、MQMONDEF リソース・オブジェクトをデータ・リポジトリ内に作成しておく必要があります。

このタスクについて

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、BAS リソース・オブジェクトをインストールできます。以下の指示では、Web ユーザー・インターフェースの手順について説明します。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「**WebSphere MQ** モニター定義」をクリックして、MQMONDEF リソース定義のリストを表示します。
2. 「レコード」チェック・ボックスをクリックして MQMONDEF 定義を選択してから、「インストール」ボタンをクリックします。あるいは、MQMONDEF 定義の名前をクリックし、「**WebSphere MQ** モニター定義」詳細ビューで「インストール」ボタンをクリックします。

タスクの結果

MQMONITOR リソースが CICS 領域にインストールされます。

次のタスク

リソース定義が正常にインストールされると、メインメニューから「**CICS** 操作」ビュー > 「**DB2**、**DBCTL** および **WebSphere MQ** 操作」ビュー > 「**WebSphere MQ** 操作」ビュー > 「**WebSphere MQ** モニター」を選択してリソースを照会できます。

BAS 区分セット・リソース定義の作業

区分セット定義は、表示区画構成の特性を記述します。

区画セット定義の表示

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、既存の区画セット定義に関する情報を表示できます。

このタスクについて

区画セットを表す BAS リソース定義を PRTNDEF と呼びます。Web ユーザー・インターフェースの「区画セット定義」ビューに、既存の区画セット定義に関する情報が表示されます。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。
2. 「管理ビュー」メニューで、「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (**BAS**) 管理ビュー」のいずれかをクリックします。
3. 「**CICS** リソース定義」をクリックして、「**CICS** リソース定義」ビューを表示します。
4. 「区画セット定義」をクリックします。

タスクの結果

Web ユーザー・インターフェースは、区画セット定義の一覧を表示します。

次のタスク

このビューで、区画セット定義の作成、更新、インストール、または除去もできます。

BAS を使用して区画セットを定義する

BAS リソース・オブジェクト PRTNDEF を作成することにより、区画セット・リソースを定義します。

このタスクについて

CICS Explorer または Webユーザー・インターフェースを使用して、リソース・オブジェクトを定義できます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック CICS リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「区画セット定義」をクリックします。
2. 「区画セット定義」ビューで「作成...」ボタンをクリックします。既存の定義を新規定義の基礎として使用するには、「作成...」ボタンをクリックする前に、チェック・ボックスをクリックします。「区画セット定義」作成ビューが表示されます。
3. 関連フィールドに情報を入力し、「はい」をクリックして定義を作成します。

タスクの結果

「区画セット定義」ビューが表示され、新しい定義が現れます。

次のタスク

リソース・グループに定義を追加するには、「リソース・グループへの追加...」ボタンをクリックします。

BAS 区画セット定義のインストール

区画セット・リソースの BAS リソース・オブジェクトをインストールして CICS 領域で定義を使用できるようにします。

始める前に

CICS 領域に区画セット・リソースをインストールするために、必要なリソース・オブジェクトをデータ・リポジトリ内に作成しておく必要があります。

このタスクについて

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、BAS リソース・オブジェクトをインストールできます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「区画セット定義」をクリックします。
2. 「レコード」チェック・ボックスをクリックして区画セット定義を選択してから、「インストール...」ボタンをクリックします。あるいは、区画セット定義の名前をクリックし、「区画セット定義」詳細ビューで「インストール...」ボタンをクリックします。

タスクの結果

区画セット・リソースが指定の **CICS** 領域にインストールされます。

BAS パートナー・リソース定義の作業

パートナー定義を使用すると、**CICS** アプリケーション・プログラムが **APPC** プロトコルを使用してリモート領域で実行されるパートナー・アプリケーション・プログラムと通信できるようになります。

パートナー定義の表示

CICS Explorer または **Web ユーザー・インターフェース**を使用して、既存のパートナー定義に関する情報を表示できます。

このタスクについて

パートナー定義を表す **BAS** リソース定義を **PARTDEF** と呼びます。 **Web ユーザー・インターフェース**の「パートナー定義」ビューに、既存のパートナー定義についての情報が表示されます。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。
2. 「管理ビュー」メニューで、「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (**BAS**) 管理ビュー」のいずれかをクリックします。
3. 「**CICS** リソース定義」をクリックして、「**CICS** リソース定義」ビューを表示します。
4. 「パートナー定義」をクリックします。

タスクの結果

Web ユーザー・インターフェースは、パートナー定義の一覧を表示します。

次のタスク

このビューで、パートナー定義の作成、更新、インストール、または除去もできます。

BAS を使用してパートナー定義を定義する

BAS リソース・オブジェクト **PARTDEF** を作成することにより、パートナー・リソースを定義します。

このタスクについて

CICS Explorer または Webユーザー・インターフェースを使用して、リソース・オブジェクトを定義できます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「パートナー定義」をクリックします。
2. 「パートナー定義」ビューで「作成...」ボタンをクリックします。既存の定義を新規定義の基礎として使用するには、「作成...」ボタンをクリックする前に、チェック・ボックスをクリックします。「パートナー定義」作成ビューが表示されます。
3. 関連する各フィールドに値を入力し、「はい」をクリックして定義を作成します。

タスクの結果

「パートナー定義」ビューが表示され、新しい定義が現れます。

次のタスク

リソース・グループに定義を追加するには、「リソース・グループへの追加...」ボタンをクリックします。

BAS パートナー定義のインストール

パートナー・リソースの BAS リソース・オブジェクトをインストールして CICS 領域で定義を使用できるようにします。

始める前に

CICS 領域にパートナー・リソースをインストールするために、必要なリソース・オブジェクトをデータ・リポジトリ内に作成しておく必要があります。

このタスクについて

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、BAS リソース・オブジェクトをインストールできます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「パートナー定義」をクリックします。
2. 「レコード」チェック・ボックスをクリックしてパートナー定義を選択してから、「インストール...」ボタンをクリックします。あるいは、パートナー定義の名前をクリックし、「パートナー定義」詳細ビューで「インストール...」ボタンをクリックします。

タスクの結果

パートナー定義が指定の CICS 領域にインストールされます。

BAS パイプライン・リソース定義の作業

CICS アプリケーションが Web サービスのプロバイダーまたはリクエスターとして動作している場合に、PIPELINE リソース定義が使用されます。これは、Web サービス要求および応答に対して作用するメッセージ・ハンドラー・プログラムに関する情報を提供します。

パイプライン定義の表示

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、既存のパイプライン定義に関する情報を表示できます。

このタスクについて

パイプライン定義を表す BAS リソース定義を PIPEDEF と呼びます。Web ユーザー・インターフェースの「パイプライン定義」ビューに、既存のパイプライン定義に関する情報が表示されます。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。
2. 「管理ビュー」メニューで、「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (**BAS**) 管理ビュー」のいずれかをクリックします。
3. 「**CICS** リソース定義」をクリックして、「**CICS** リソース定義」ビューを表示します。
4. 「パイプライン定義」をクリックします。

タスクの結果

Web ユーザー・インターフェースは、パイプライン定義の一覧を表示します。

次のタスク

このビューで、パイプライン定義の作成、更新、インストール、または除去もできます。

BAS を使用してパイプライン定義を定義する

BAS リソース・オブジェクト PIPEDEF を作成することにより、PIPELINE リソースを定義します。

このタスクについて

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、リソース・オブジェクトを定義できます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「パイプライン定義」をクリックします。
2. 「パイプライン定義」ビューで「作成...」ボタンをクリックします。 既存の定義を新規定義の基礎として使用するには、「作成...」ボタンをクリックする前に、チェック・ボックスをクリックします。「パイプライン定義」作成ビューが表示されます。
3. 関連フィールドに情報を入力し、「はい」をクリックして定義を作成します。

タスクの結果

「パイプライン定義」ビューが表示され、新しい定義が現れます。

次のタスク

リソース・グループに定義を追加するには、「リソース・グループへの追加...」ボタンをクリックします。

BAS パイプライン定義のインストール

パイプライン・リソースの BAS リソース・オブジェクトをインストールして CICS 領域で定義を使用できるようにします。

始める前に

CICS 領域に PIPELINE リソースをインストールするために、必要なリソース・オブジェクトをデータ・リポジトリ内に作成しておく必要があります。

このタスクについて

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、BAS リソース・オブジェクトをインストールできます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「パイプライン定義」をクリックします。
2. 「レコード」チェック・ボックスをクリックしてパイプライン定義を選択してから、「インストール...」ボタンをクリックします。あるいは、パイプライン定義の名前をクリックし、「パイプライン定義」詳細ビューで「インストール...」ボタンをクリックします。

タスクの結果

PIPELINE リソースが指定の CICS 領域にインストールされます。

BAS PROCESSTYPE 定義の作業

PROCESSTYPE リソース定義は、CICS ビジネス・トランザクション・サービス (BTS) プロセス・タイプの物理特性および操作特性を記述します。

プロセス・タイプ定義の表示

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、既存のプロセス・タイプ定義に関する情報を表示できます。

このタスクについて

パイプライン定義を表す BAS リソース定義を PROCDEF と呼びます。Web ユーザー・インターフェースの「プロセス・タイプ定義」ビューに、既存のプロセス・タイプ定義に関する情報が表示されます。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。
2. 「管理ビュー」メニューで、「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (**BAS**) 管理ビュー」のいずれかをクリックします。
3. 「**CICS** リソース定義」をクリックして、「**CICS** リソース定義」ビューを表示します。
4. 「プロセス・タイプ定義」をクリックします。

タスクの結果

Web ユーザー・インターフェースは、プロセス・タイプ定義の一覧を表示します。

次のタスク

このビューで、プロセス・タイプ定義の作成、更新、インストール、または除去もできます。

BAS を使用してプロセス・タイプを定義する

BAS リソース・オブジェクト PROCDEF を作成することにより、PROCESSTYPE リソースを定義します。

このタスクについて

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、リソース・オブジェクトを定義できます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「プロセス・タイプ定義」をクリックします。
2. 「プロセス・タイプ定義」ビューで「作成...」ボタンをクリックします。既存の定義を新規定義の基礎として使用するには、「作成...」ボタンをクリックする前に、チェック・ボックスをクリックします。「プロセス・タイプ定義」作成ビューが表示されます。
3. 関連する各フィールドに値を入力し、「はい」をクリックして定義を作成します。

タスクの結果

「プロセス・タイプ定義」ビューが表示され、新しい定義が現れます。

次のタスク

リソース・グループに定義を追加するには、「リソース・グループへの追加...」ボタンをクリックします。

BAS プロセス・タイプ定義のインストール

PROCESSTYPE リソースの BAS リソース・オブジェクトをインストールして CICS 領域で定義を使用できるようにします。

始める前に

CICS 領域に PROCESSTYPE リソースをインストールするために、必要なリソース・オブジェクトをデータ・リポジトリ内に作成しておく必要があります。

このタスクについて

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、BAS リソース・オブジェクトをインストールできます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック CICS リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「プロセス・タイプ定義」をクリックします。
2. 「レコード」チェック・ボックスをクリックしてプロセス・タイプ定義を選択してから、「インストール...」ボタンをクリックします。あるいは、プロセス・タイプ定義の名前をクリックし、「プロセス・タイプ定義」詳細ビューで「インストール...」ボタンをクリックします。

タスクの結果

PROCESSTYPE リソースが指定の CICS 領域に正常にインストールされます。

BAS プロファイル・リソース定義の作業

プロファイル定義は、トランザクションと、端末または論理装置の間の相互作用を制御します。

プロファイル・リソース定義の表示

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、既存のプロファイル定義に関する情報を表示できます。

このタスクについて

プロファイル定義を表す BAS リソース定義を PROFDEF と呼びます。Web ユーザー・インターフェースの「プロファイル定義」ビューに、既存のプロファイル定義に関する情報が表示されます。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。
2. 「管理ビュー」メニューで、「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (**BAS**) 管理ビュー」のいずれかをクリックします。
3. 「**CICS** リソース定義」をクリックして、「**CICS** リソース定義」ビューを表示します。
4. 「プロファイル定義」をクリックします。

タスクの結果

Web ユーザー・インターフェースは、プロファイル定義の一覧を表示します。

次のタスク

このビューで、プロファイル定義の作成、更新、インストール、または除去もできます。

BAS を使用してプロファイルを定義する

BAS リソース・オブジェクト PROFDEF を作成することにより、PROFILE リソースを定義します。

このタスクについて

CICS Explorer または Webユーザー・インターフェースを使用して、リソース・オブジェクトを定義できます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「プロファイル定義」をクリックします。
2. 「プロファイル定義」ビューで「作成...」ボタンをクリックします。既存の定義を新規定義の基礎として使用するには、「作成...」ボタンをクリックする前に、チェック・ボックスをクリックします。「プロファイル定義」作成ビューが表示されます。
3. 関連する各フィールドに値を入力し、「はい」をクリックして定義を作成します。

タスクの結果

「プロファイル定義」ビューが表示され、新しい定義が現れます。

次のタスク

リソース・グループに定義を追加するには、「リソース・グループへの追加...」ボタンをクリックします。

BAS プロファイル定義のインストール

PROFILE リソースの BAS リソース・オブジェクトをインストールして CICS 領域で定義を使用できるようにします。

始める前に

CICS 領域に PROFILE リソースをインストールするために、必要なリソース・オブジェクトをデータ・リポジトリ内に作成しておく必要があります。

このタスクについて

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、BAS リソース・オブジェクトをインストールできます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「プロファイル定義」をクリックします。
2. 「レコード」チェック・ボックスをクリックしてプロファイル定義を選択してから、「インストール...」ボタンをクリックします。あるいは、プロファイル定義の名前をクリックし、「プロファイル定義」詳細ビューで「インストール...」ボタンをクリックします。

タスクの結果

PROFILE リソースが指定の CICS 領域に正常にインストールされます。

BAS PROGRAM リソース定義の作業

PROGRAM リソース定義は、プログラム・ライブラリーに保管され、トランザクションの処理で使用されるプログラムの制御情報を記述します。

プログラム定義の表示

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、既存のプログラム定義を表示できます。

このタスクについて

プログラム定義を表す BAS リソース定義を PROGDEF と呼びます。Web ユーザー・インターフェースの「プログラム定義」ビューに、既存のプログラム定義に関する情報が表示されます。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。
2. 「管理ビュー」メニューで、「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (**BAS**) 管理ビュー」のいずれかをクリックします。
3. 「**CICS** リソース定義」をクリックして、「**CICS** リソース定義」ビューを表示します。

4. 「プログラム定義」をクリックします。

タスクの結果

Web ユーザー・インターフェースは、プログラム定義の一覧を表示します。

次のタスク

このビューで、プログラム定義の作成、更新、インストール、または除去もできます。

BAS を使用してプログラムを定義する

BAS リソース・オブジェクト PROGDEF を作成することにより、PROGRAM リソースを定義します。

このタスクについて

CICS Explorer または Webユーザー・インターフェースを使用して、リソース・オブジェクトを定義できます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック CICS リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「プログラム定義」をクリックします。
2. 「プログラム定義」ビューで「作成...」ボタンをクリックします。既存の定義を新規定義の基礎として使用するには、「作成...」ボタンをクリックする前に、チェック・ボックスをクリックします。「プログラム定義」作成ビューが表示されます。
3. 関連する各フィールドに値を入力し、「はい」をクリックして定義を作成します。

タスクの結果

「プログラム定義」ビューが表示され、新しい定義が現れます。

次のタスク

リソース・グループに定義を追加するには、「リソース・グループへの追加...」ボタンをクリックします。

BAS プログラム定義のインストール

PROGRAM リソースの BAS リソース・オブジェクトをインストールして CICS 領域で定義を使用できるようにします。

始める前に

CICS 領域に PROGRAM リソースをインストールするために、必要なリソース・オブジェクトをデータ・リポジトリ内に作成しておく必要があります。

このタスクについて

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、BAS リソース・オブジェクトをインストールできます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「プログラム定義」をクリックします。
2. 「レコード」チェック・ボックスをクリックしてプログラム定義を選択してから、「インストール...」ボタンをクリックします。あるいは、プログラム定義の名前をクリックし、「プログラム定義」詳細ビューで「インストール...」ボタンをクリックします。

タスクの結果

PROGRAM リソースが指定の CICS 領域に正常にインストールされます。

次のタスク

リソースがインストールされたら、「**CICS** 操作ビュー」 > 「プログラム操作ビュー」をクリックすることにより、リソースについて調べることができます。

BAS セッション・リソース定義の作業

セッション定義は、システム間連絡 (ISC) または複数領域操作 (MRO) を使用して通信する領域間またはシステム間の論理リンクの性質を記述します。

セッション定義の表示

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、既存のセッション定義を表示できます。

このタスクについて

セッション定義を表す BAS リソース・オブジェクトを **SESSDEF** と呼びます。Web ユーザー・インターフェースの「セッション定義」ビューに、既存のセッション定義に関する情報が表示されます。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。
2. 「管理ビュー」メニューで、「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (**BAS**) 管理ビュー」のいずれかをクリックします。
3. 「**CICS** リソース定義」をクリックして、「**CICS** リソース定義」ビューを表示します。
4. 「セッション定義」をクリックします。

タスクの結果

Web ユーザー・インターフェースは、セッション定義の一覧を表示します。

次のタスク

このビューで、セッション定義の作成、更新、または除去もできます。

BAS を使用してセッションを定義する

BAS リソース・オブジェクト SESSDEF を作成することにより、SESSION リソースを定義します。

このタスクについて

CICS Explorer または Webユーザー・インターフェースを使用して、リソース・オブジェクトを定義できます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「セッション定義」をクリックします。
2. 「セッション定義」ビューで「作成...」ボタンをクリックします。既存の定義を新規定義の基礎として使用するには、「作成...」ボタンをクリックする前に、チェック・ボックスをクリックします。「セッション定義」作成ビューが表示されます。
3. 関連する各フィールドに値を入力し、「はい」をクリックして定義を作成します。

タスクの結果

「セッション定義」ビューが表示され、新しい定義が現れます。

次のタスク

リソース・グループに定義を追加するには、「リソース・グループへの追加...」ボタンをクリックします。

BAS TCPIPSERVICE リソース定義の作業

TCPIPSERVICE リソース定義は、内部ソケット・サポートを使用する TCP/IP サービスを定義します。

TCP/IP サービス定義の表示

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、既存の TCPIPSERVICE リソース定義を表示できます。

このタスクについて

TCPIPSERVICE 定義を表す BAS リソース・オブジェクトを TCPDEF と呼びます。Web ユーザー・インターフェースの「**TCP/IP** サービス定義」ビューに、既存の TCPIPSERVICE 定義に関する情報が表示されます。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。

2. 「管理ビュー」メニューで、「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (**BAS**) 管理ビュー」のいずれかをクリックします。
3. 「**CICS** リソース定義」をクリックして、「**CICS** リソース定義」ビューを表示します。
4. 「**TCP/IP** サービス定義」をクリックします。

タスクの結果

Web ユーザー・インターフェースは、TCPIPSERVICE 定義の一覧を表示します。

次のタスク

このビューで、TCPIPSERVICE 定義の作成、更新、インストール、または除去もできます。

BAS を使用して **TCP/IP** サービスを定義する

BAS リソース・オブジェクト TCPDEF を作成することにより、TCPIPSERVICE リソースを定義します。

このタスクについて

CICS Explorer または Webユーザー・インターフェースを使用して、リソース・オブジェクトを定義できます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「**TCP/IP** サービス定義」をクリックします。
2. 「**TCP/IP** サービス定義」ビューで「作成...」ボタンをクリックします。既存の定義を新規定義の基礎として使用するには、「作成...」ボタンをクリックする前に、チェック・ボックスをクリックします。「**TCP/IP** サービス定義」作成ビューが表示されます。
3. 関連フィールドに情報を入力し、「はい」をクリックして定義を作成します。

タスクの結果

「**TCP/IP** サービス定義」ビューが表示され、新しい定義が現れます。

次のタスク

リソース・グループに定義を追加するには、「リソース・グループへの追加...」ボタンをクリックします。

TCP/IP サービス定義のインストール

TCPIPSERVICE リソースの BAS リソース・オブジェクトをインストールして CICS 領域で定義を使用できるようにします。

始める前に

CICS 領域に TCPIPService リソースをインストールするために、必要なリソース・オブジェクトをデータ・リポジトリ内に作成しておく必要があります。

このタスクについて

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、BAS リソース・オブジェクトをインストールできます。以下の手順では、Web ユーザー・インターフェースを使用しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「**TCP/IP** サービス定義」をクリックします。
2. 「レコード」チェック・ボックスをクリックして TCP/IP サービス定義を選択してから、「インストール...」ボタンをクリックします。あるいは、TCP/IP サービス定義の名前をクリックし、「**TCP/IP** サービス定義」詳細ビューで「インストール...」ボタンをクリックします。

タスクの結果

TCPIPService が指定の CICS 領域にインストールされます。

次のタスク

リソースが正常にインストールされたら、「**CICS** 操作ビュー」 > 「**TCP/IP** サービス操作ビュー」をクリックすることにより、リソースについて調べることができます。

BAS 一時データ・キュー・リソース定義の作業

一時データ・キュー定義は、区画内、区画外、間接、およびリモートの一時データ宛先を記述します。

一時データ・キュー定義の表示

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、既存の TDQUEUE リソース定義に関する情報を表示できます。

このタスクについて

TDQUEUE 定義を表す BAS リソース・オブジェクトを TDQDEF と呼びます。Web ユーザー・インターフェースの「一時データ・キュー定義」ビューに、既存の TDQUEUE 定義に関する情報が表示されます。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。
2. 「管理ビュー」メニューで、「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (**BAS**) 管理ビュー」のいずれかをクリックします。

3. 「CICS リソース定義」をクリックして、「CICS リソース定義」ビューを表示します。
4. 「一時データ・キュー定義」をクリックします。

タスクの結果

Web ユーザー・インターフェースは、TDQUEUE 定義の一覧を表示します。

次のタスク

このビューで、TDQUEUE 定義の作成、更新、インストール、または除去もできます。

BAS を使用して一時データ・キューを定義する

BAS リソース・オブジェクト TDQDEF を作成することにより、TDQUEUE リソースを定義します。

このタスクについて

CICS Explorer または Webユーザー・インターフェースを使用して、リソース・オブジェクトを定義できます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック CICS リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「一時データ・キュー定義」をクリックします。
2. 「一時データ・キュー定義」ビューで「作成...」ボタンをクリックします。既存の定義を新規定義の基礎として使用するには、「作成...」ボタンをクリックする前に、チェック・ボックスをクリックします。「一時データ・キュー定義」作成ビューが表示されます。
3. 関連フィールドに情報を入力し、「はい」をクリックして定義を作成します。

タスクの結果

「一時データ・キュー定義」ビューが表示され、新しい定義が現れます。

次のタスク

リソース・グループに定義を追加するには、「リソース・グループへの追加...」ボタンをクリックします。

BAS 一時データ・キュー定義のインストール

TDQUEUE リソースの BAS リソース・オブジェクトをインストールして CICS 領域で定義を使用できるようにします。

始める前に

CICS 領域に TDQUEUE リソースをインストールするために、必要なリソース・オブジェクトをデータ・リポジトリ内に作成しておく必要があります。

このタスクについて

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、BAS リソース・オブジェクトをインストールできます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「一時データ・キュー定義」をクリックします。
2. 「レコード」チェック・ボックスをクリックして一時データ・キュー定義を選択してから、「インストール...」ボタンをクリックします。あるいは、一時データ・キュー定義の名前をクリックし、「一時データ・キュー定義」詳細ビューで「インストール...」ボタンをクリックします。

タスクの結果

TDQUEUE リソースが指定の CICS 領域にインストールされます。

次のタスク

リソースが正常にインストールされたら、「**CICS** 操作ビュー」 > 「一時データ・キュー (**TDQ**) 操作ビュー」をクリックすることにより、リソースについて調べることができます。

BAS 端末リソース定義の作業

端末リソース定義は、CICS が通信する端末装置 (ディスプレイ装置、プリンター、およびオペレーティング・システムのコンソールを含む) の固有特性を記述します。

端末定義の表示

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、既存の TERMINAL リソース定義に関する情報を表示できます。

このタスクについて

TERMINAL 定義を表す BAS リソース・オブジェクトを TERMDEF と呼びます。Web ユーザー・インターフェースの「端末定義」ビューに、既存の TERMINAL 定義に関する情報が表示されます。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。
2. 「管理ビュー」メニューで、「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (**BAS**) 管理ビュー」のいずれかをクリックします。
3. 「**CICS** リソース定義」をクリックして、「**CICS** リソース定義」ビューを表示します。
4. 「端末定義」をクリックします。

タスクの結果

Web ユーザー・インターフェースは、TERMINAL 定義の一覧を表示します。

次のタスク

このビューで、TERMINAL 定義の作成、更新、インストール、または除去もできます。

BAS を使用して端末を定義する

BAS リソース・オブジェクト TERMDEF を作成することにより、TERMINAL リソースを定義します。

このタスクについて

CICS Explorer または Webユーザー・インターフェースを使用して、リソース・オブジェクトを定義できます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「端末定義」をクリックします。
2. 「端末定義」ビューで「作成...」ボタンをクリックします。既存の定義を新規定義の基礎として使用するには、「作成...」ボタンをクリックする前に、チェック・ボックスをクリックします。「端末定義」作成ビューが表示されます。
3. 関連する各フィールドに値を入力し、「はい」をクリックして定義を作成します。

タスクの結果

「端末定義」ビューが表示され、新しい定義が現れます。

次のタスク

リソース・グループに定義を追加するには、「リソース・グループへの追加...」ボタンをクリックします。

BAS 端末定義のインストール

TERMINAL リソースの BAS リソース・オブジェクトをインストールして CICS 領域で定義を使用できるようにします。

始める前に

CICS 領域に TERMINAL リソースをインストールするために、必要なリソース・オブジェクトをデータ・リポジトリ内に作成しておく必要があります。

このタスクについて

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、BAS リソース・オブジェクトをインストールできます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「端末定義」をクリックします。
2. 「レコード」チェック・ボックスをクリックして端末定義を選択してから、「インストール...」ボタンをクリックします。あるいは、端末定義の名前をクリックし、「端末定義」詳細ビューで「インストール...」ボタンをクリックします。

タスクの結果

TERMINAL リソースが指定の CICS 領域にインストールされます。

次のタスク

TERMINAL リソースが正常にインストールされたら、「**CICS** 操作ビュー」 > 「端末操作ビュー」をクリックすることにより、リソースについて調べることができます。

BAS トランザクション・リソース定義の作業

トランザクション定義は、CICS 領域でトランザクションが実行される方法を記述します。

トランザクション定義の表示

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、既存のトランザクション・リソース定義に関する情報を表示できます。

このタスクについて

トランザクション定義を表す BAS リソース・オブジェクトを **TRANDEF** と呼びます。Web ユーザー・インターフェースの「トランザクション定義」ビューに、既存のトランザクション定義に関する情報が表示されます。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。
2. 「管理ビュー」メニューで、「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (**BAS**) 管理ビュー」のいずれかをクリックします。
3. 「**CICS** リソース定義」をクリックして、「**CICS** リソース定義」ビューを表示します。
4. 「トランザクション定義」をクリックします。

タスクの結果

Web ユーザー・インターフェースは、トランザクション定義の一覧を表示します。

次のタスク

このビューで、トランザクション定義の作成、更新、インストール、または除去もできます。

BAS を使用してトランザクションを定義する

BAS リソース・オブジェクト TRANDEF を作成することにより、トランザクション・リソースを定義します。

このタスクについて

CICS Explorer または Webユーザー・インターフェースを使用して、リソース・オブジェクトを定義できます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「トランザクション定義」をクリックします。
2. 「トランザクション定義」ビューで「作成...」ボタンをクリックします。既存の定義を新規定義の基礎として使用するには、「作成...」ボタンをクリックする前に、チェック・ボックスをクリックします。「トランザクション定義」作成ビューが表示されます。
3. 関連する各フィールドに値を入力し、「はい」をクリックして定義を作成します。

タスクの結果

「トランザクション定義」ビューが表示され、新しい定義が現れます。

次のタスク

リソース・グループに定義を追加するには、「リソース・グループへの追加...」ボタンをクリックします。

BAS トランザクション定義のインストール

トランザクション・リソースの BAS リソース・オブジェクトをインストールして CICS 領域で定義を使用できるようにします。

始める前に

CICS 領域にトランザクション・リソースをインストールするために、必要なリソース・オブジェクトをデータ・リポジトリ内に作成しておく必要があります。

このタスクについて

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、BAS リソース・オブジェクトをインストールできます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「トランザクション定義」をクリックします。

2. 「レコード」チェック・ボックスをクリックしてトランザクション定義を選択してから、「インストール...」ボタンをクリックします。あるいは、トランザクション定義の名前をクリックし、「トランザクション定義」詳細ビューで「インストール...」ボタンをクリックします。

タスクの結果

TRANSACTION リソースが指定の CICS 領域にインストールされます。

次のタスク

リソースが正常にインストールされたら、「CICS 操作ビュー」 > 「トランザクション操作ビュー」をクリックすることにより、リソースについて調べることができます。

BAS トランザクション・クラス定義の作業

トランザクション・クラス定義は、クラスに属するトランザクションの操作特性を記述します。

トランザクション・クラス定義の表示

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、トランザクション・クラス定義に関する既存の情報を表示できます。

このタスクについて

トランザクション・クラス定義を表す BAS リソース・オブジェクトを TRNCLDEF と呼びます。Web ユーザー・インターフェースの「トランザクション定義」ビューに、既存のトランザクション・クラス定義に関する情報が表示されます。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。
2. 「管理ビュー」メニューで、「ベーシック CICS リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (BAS) 管理ビュー」のいずれかをクリックします。
3. 「CICS リソース定義」をクリックして、「CICS リソース定義」ビューを表示します。
4. 「トランザクション定義」をクリックします。

タスクの結果

Web ユーザー・インターフェースは、トランザクション・クラス定義の一覧を表示します。

次のタスク

このビューで、トランザクション・クラス定義の作成、更新、インストール、または除去もできます。

BAS を使用してトランザクション・クラスを定義する

BAS リソース・オブジェクト TRNCLDEF を作成することにより、トランザクション・クラス・リソースを定義します。

このタスクについて

CICS Explorer または Webユーザー・インターフェースを使用して、リソース・オブジェクトを定義できます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「トランザクション・クラス定義」をクリックします。
2. 「トランザクション・クラス定義」ビューで「作成...」ボタンをクリックします。既存の定義を新規定義の基礎として使用するには、「作成...」ボタンをクリックする前に、チェック・ボックスをクリックします。「トランザクション・クラス定義」作成ビューが表示されます。
3. 関連する各フィールドに値を入力し、「はい」をクリックして定義を作成します。

タスクの結果

「トランザクション・クラス定義」ビューが表示され、新しい定義が現れます。

次のタスク

リソース・グループに定義を追加するには、「リソース・グループへの追加...」ボタンをクリックします。

BAS トランザクション・クラス定義のインストール

トランザクション・クラス・リソースの BAS リソース・オブジェクトをインストールして CICS 領域で定義を使用できるようにします。

始める前に

CICS 領域にトランザクション・クラス・リソースをインストールするために、必要なリソース・オブジェクトをデータ・リポジトリ内に作成しておく必要があります。

このタスクについて

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、BAS リソース・オブジェクトをインストールできます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「トランザクション・クラス定義」をクリックします。

2. 「レコード」チェック・ボックスをクリックしてトランザクション・クラス定義を選択してから、「インストール...」ボタンをクリックします。あるいは、トランザクション・クラス定義の名前をクリックし、「トランザクション・クラス定義」詳細ビューで「インストール...」ボタンをクリックします。

タスクの結果

リソースが指定の CICS 領域にインストールされます。

BAS 一時記憶域モデル定義の作業

一時記憶域定義は、CICS 一時記憶域キューの特性を規定する属性を記述します。

一時記憶域モデル定義の表示

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、一時記憶域モデル定義に関する既存の情報を表示できます。

このタスクについて

トランザクション・クラス定義を表す BAS リソース・オブジェクトを TSMDEF と呼びます。Web ユーザー・インターフェースの「一時記憶域モデル定義」ビューに、既存のトランザクション・クラス定義に関する情報が表示されます。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。
2. 「管理ビュー」メニューで、「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (**BAS**) 管理ビュー」のいずれかをクリックします。
3. 「**CICS** リソース定義」をクリックして、「**CICS** リソース定義」ビューを表示します。
4. 「一時記憶域モデル定義」をクリックします。

タスクの結果

Web ユーザー・インターフェースは、一時記憶域モデル定義の一覧を表示します。

次のタスク

このビューで、一時記憶域モデル定義の作成、更新、インストール、または除去もできます。

BAS を使用して一時記憶域モデルを定義する

BAS リソース・オブジェクト TSMDEF を作成することにより、一時記憶域キューを定義します。

このタスクについて

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、リソース・オブジェクトを定義できます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「一時記憶域モデル定義」をクリックします。
2. 「一時記憶域モデル定義」ビューで「作成...」ボタンをクリックします。既存の定義を新規定義の基礎として使用するには、「作成...」ボタンをクリックする前に、チェック・ボックスをクリックします。「一時記憶域モデル定義」作成ビューが表示されます。
3. 関連する各フィールドに値を入力し、「はい」をクリックして定義を作成します。

タスクの結果

「一時記憶域モデル定義」ビューが表示され、新しい定義が現れます。

次のタスク

リソース・グループに定義を追加するには、「リソース・グループへの追加...」ボタンをクリックします。

BAS 一時記憶域モデル定義のインストール

TSMODEL リソースの BAS リソース・オブジェクトをインストールして CICS 領域で定義を使用できるようにします。

始める前に

CICS 領域に TSMODEL リソースをインストールするために、必要なリソース・オブジェクトをデータ・リポジトリ内に作成しておく必要があります。

このタスクについて

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、BAS リソース・オブジェクトをインストールできます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「一時記憶域モデル定義」をクリックします。
2. 「レコード」チェック・ボックスをクリックして一時記憶域モデル定義を選択してから、「インストール...」ボタンをクリックします。あるいは、一時記憶域モデル定義の名前をクリックし、「一時記憶域モデル定義」詳細ビューで「インストール...」ボタンをクリックします。

タスクの結果

一時記憶域モデル・リソースが指定の CICS 領域にインストールされます。

次のタスク

一時記憶域定義がインストールされたら、「**CICS** 操作ビュー」 > 「一時記憶域キュー (**TSQ**) 操作ビュー」をクリックすることにより、リソースについて調べることができます。

BAS Typeterm リソース定義の作業

Typeterm 定義は、端末のグループの共通属性のセットを記述する部分的な端末定義です。

入力条件定義の表示

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、入力条件定義に関する既存の情報を表示できます。

このタスクについて

入力条件定義を表す BAS リソース・オブジェクトを TYPTMDEF と呼びます。Web ユーザー・インターフェースの「入力条件定義」ビューに、既存の入力条件定義に関する情報が表示されます。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。
2. 「管理ビュー」メニューで、「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (**BAS**) 管理ビュー」のいずれかをクリックします。
3. 「**CICS** リソース定義」をクリックして、「**CICS** リソース定義」ビューを表示します。
4. 「入力条件定義」をクリックします。

タスクの結果

Web ユーザー・インターフェースは、入力条件定義の一覧を表示します。

次のタスク

このビューで、入力条件定義の作成、更新、インストール、または除去もできます。

BAS を使用して入力条件を定義する

BAS リソース・オブジェクト TYPTMDEF を作成することにより、入力条件リソースを定義します。

このタスクについて

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、リソース・オブジェクトを定義できます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「入力条件定義」をクリックします。
2. 「入力条件定義」ビューで「作成...」ボタンをクリックします。既存の定義を新規定義の基礎として使用するには、「作成...」ボタンをクリックする前に、チェック・ボックスをクリックします。「入力条件定義」作成ビューが表示されます。
3. 関連する各フィールドに値を入力し、「はい」をクリックして定義を作成します。

タスクの結果

「入力条件定義」ビューが表示され、新しい定義が現れます。

次のタスク

リソース・グループに定義を追加するには、「リソース・グループへの追加...」ボタンをクリックします。

BAS 入力条件定義のインストール

TYPETERM リソースの BAS リソース・オブジェクトをインストールして CICS 領域で定義を使用できるようにします。

始める前に

CICS 領域に TYPETERM リソースをインストールするために、必要なリソース・オブジェクトをデータ・リポジトリ内に作成しておく必要があります。

このタスクについて

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、BAS リソース・オブジェクトをインストールできます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「入力条件定義」をクリックします。
2. 「レコード」チェック・ボックスをクリックして入力条件定義を選択してから、「インストール...」ボタンをクリックします。あるいは、入力条件定義の名前をクリックし、「入力条件定義」詳細ビューで「インストール...」ボタンをクリックします。

タスクの結果

TYPETERM リソースが指定の CICS 領域にインストールされます。

次のタスク

リソースが正常にインストールされたら、「**CICS** 操作ビュー」 > 「端末操作ビュー」をクリックすることにより、リソースについて調べることができます。

BAS URIMAP リソース定義の作業

URIMAP リソース定義は、HTTP または Web サービス要求の URI を突き合わせます。

URI マッピング定義の表示

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、既存の URIMAP リソース定義に関する情報を表示できます。

このタスクについて

URIMAP リソース定義を表す BAS リソース・オブジェクトを URIMPDEF と呼びます。Web ユーザー・インターフェースの「**URI** マッピング定義」ビューに、既存の入力条件定義に関する情報が表示されます。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。
2. 「管理ビュー」メニューで、「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (**BAS**) 管理ビュー」のいずれかをクリックします。
3. 「**CICS** リソース定義」をクリックして、「**CICS** リソース定義」ビューを表示します。
4. 「**URI** マッピング定義」をクリックします。

タスクの結果

Web ユーザー・インターフェースは、URIMAP 定義の一覧を表示します。

次のタスク

このビューで、URIMAP 定義の作成、更新、インストール、または除去もできます。

BAS を使用して URIMAP 定義を定義する

BAS リソース・オブジェクト URIMPDEF を作成することにより、URIMAP リソースを定義します。

このタスクについて

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、リソース・オブジェクトを定義できます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「**URI** マッピング定義」をクリックします。

2. 「**URI** マッピング定義」ビューで「作成...」ボタンをクリックします。既存の定義を新規定義の基礎として使用するには、「作成...」ボタンをクリックする前に、チェック・ボックスをクリックします。「**URI** マッピング定義」作成ビューが表示されます。
3. 関連する各フィールドに値を入力し、「はい」をクリックして定義を作成します。

タスクの結果

「**URI** マッピング定義」ビューが表示され、新しい定義が現れます。

次のタスク

リソース・グループに定義を追加するには、「リソース・グループへの追加...」ボタンをクリックします。

BAS **URI** マッピング定義のインストール

URIMAP リソースの **BAS** リソース・オブジェクトをインストールして **CICS** 領域で定義を使用できるようにします。

始める前に

CICS 領域に **URIMAP** リソースをインストールするために、必要なリソース・オブジェクトをデータ・リポジトリ内に作成しておく必要があります。

このタスクについて

CICS Explorer または **Web** ユーザー・インターフェースを使用して、**BAS** リソース・オブジェクトをインストールできます。ここでは、**Web** ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「**URI** マッピング定義」をクリックします。
2. 「レコード」チェック・ボックスをクリックして **URI** マップ定義を選択してから、「インストール...」ボタンをクリックします。あるいは、**URI** マップ定義の名前をクリックし、「**URI** マッピング定義」詳細ビューで「インストール...」ボタンをクリックします。

タスクの結果

URIMAP リソースが指定の **CICS** 領域にインストールされます。

BAS Web サービス・リソース定義の作業

Web サービス・リソース定義は、**Web** サービスとして配置されている **CICS** アプリケーション・プログラムの実行時環境のさまざまな側面を定義します。**Web** サービスでは、**CICS Web** サービス・アシスタントを使用して、アプリケーション・データ構造と **SOAP** メッセージとの間のマッピングが生成されています。

Web サービス定義の表示

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、既存の WEBSERVICE リソース定義に関する情報を表示できます。

このタスクについて

WEBSERVICE リソース定義を表す BAS リソース・オブジェクトを WEBSVDEF と呼びます。Web ユーザー・インターフェースの「**WEB** サービス定義」ビューに、既存の Web サービス定義に関する情報が表示されます。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」をクリックします。
2. 「管理ビュー」メニューで、「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」または「完全に機能しているビジネス・アプリケーション・サービス (**BAS**) 管理ビュー」のいずれかをクリックします。
3. 「**CICS** リソース定義」をクリックして、「**CICS** リソース定義」ビューを表示します。
4. 「**Web** サービス定義」をクリックします。

タスクの結果

Web ユーザー・インターフェースは、WEBSERVICE 定義の一覧を表示します。

次のタスク

このビューで、WEBSERVICE 定義の作成、更新、インストール、または除去もできます。

BAS を使用して Web サービス定義を定義する

BAS リソース・オブジェクト WEBSVDEF を作成することにより、URIMAP リソースを定義します。

このタスクについて

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、リソース・オブジェクトを定義できます。この手順では、Web ユーザー・インターフェースを使用します。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「**Web** サービス定義」をクリックします。
2. 「**Web** サービス定義」ビューで「作成...」ボタンをクリックします。既存の定義を新規定義の基礎として使用するには、「作成...」ボタンをクリックする前に、チェック・ボックスをクリックします。「**Web** サービス定義」作成ビューが表示されます。
3. 関連フィールドに情報を入力し、「はい」をクリックして定義を作成します。

タスクの結果

「**Web** サービス定義」ビューが表示され、新しい定義が現れます。

次のタスク

リソース・グループに定義を追加するには、「リソース・グループへの追加...」ボタンをクリックします。

BAS Web サービス定義のインストール

WEBSERVICE リソースの BAS リソース・オブジェクトをインストールして CICS 領域で定義を使用できるようにします。

始める前に

CICS 領域に WEBSERVICE リソースをインストールするために、必要なリソース・オブジェクトをデータ・リポジトリ内に作成しておく必要があります。

このタスクについて

CICS Explorer または Web ユーザー・インターフェースを使用して、BAS リソース・オブジェクトをインストールできます。ここでは、Web ユーザー・インターフェース用の手順を説明しています。

手順

1. メインメニューで、「管理ビュー」 > 「ベーシック **CICS** リソース管理ビュー」 > 「リソース定義」 > 「**Web** サービス定義」をクリックします。
2. 「レコード」チェック・ボックスをクリックして Web サービス定義を選択してから、「インストール...」ボタンをクリックします。あるいは、Web サービス定義の名前をクリックし、「**WEB** サービス定義」詳細ビューで「インストール...」ボタンをクリックします。

タスクの結果

WEBSERVICE リソースが指定の CICS 領域にインストールされます。

特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。この資料の他の言語版を IBM から入手できる場合があります。ただし、これを入手するには、本製品または当該言語版製品を所有している必要がある場合があります。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。IBM 製品、プログラムまたはサービスに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない機能的に同等のプログラムまたは製品を使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒103-8510

東京都中央区日本橋箱崎町19番21号

日本アイ・ビー・エム株式会社

法務・知的財産

知的財産権ライセンス渉外

IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態で提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様自身の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

*IBM Director of Licensing
IBM Corporation
North Castle Drive, MD-NC119 Armonk,
NY 10504-1785
United States of America*

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確証できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者にお願いします。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名前はすべて架空のものであり、類似する個人や企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。これらのサンプル・プログラムは特定物として現存するままの状態を提供されるものであり、いかなる保証も提供されません。IBM は、お客様の当該サンプル・プログラムの使用から生ずるいかなる損害に対しても一切の責任を負いません。

プログラミング・インターフェース情報

CICS には、プログラミング・インターフェースと見なすことのできる資料と、プログラミング・インターフェースと見なすことのできない資料があります。

オンライン製品資料の以下のセクションには、CICS Transaction Server for z/OS, バージョン 5 リリース 5 のサービスを取得するプログラムをお客様が作成するためのプログラミング・インターフェースが含まれています。

- アプリケーションの開発
- システム・プログラムの開発
- 保護の概要
- 外部インターフェースに向けた開発
- リファレンス: アプリケーション開発
- リファレンス: システム・プログラミング
- リファレンス: 接続

オンライン製品資料の以下のセクションには、CICS Transaction Server for z/OS, バージョン 5 リリース 5 のプログラミング・インターフェースとして意図されていない (プログラミング・インターフェースと誤解される可能性のある) 情報が含まれています。

- トラブルシューティングおよびサポート
- リファレンス: 診断

PDF 形式のマニュアルで CICS 資料にアクセスする場合は、CICS Transaction Server for z/OS, バージョン 5 リリース 5 のサービスを取得するプログラムをお客様が作成するためのプログラミング・インターフェースが以下のマニュアルに含まれています。

- アプリケーション・プログラミング・ガイドおよびアプリケーション・プログラミング・リファレンス
- Business Transaction Services
- Customization Guide
- C++ OO Class Libraries
- Debugging Tools Interfaces Reference
- Distributed Transaction Programming Guide
- External Interfaces Guide
- Front End Programming Interface Guide
- IMS Database Control Guide
- インストール・ガイド
- セキュリティー・ガイド
- Supplied Transactions
- CICSplex SM Managing Workloads
- CICSplex SM Managing Resource Usage
- CICSplex SM アプリケーション・プログラミング・ガイドおよび CICSplex SM アプリケーション・プログラミング・リファレンス
- Java Applications in CICS

PDF 形式のマニュアルで CICS 資料にアクセスする場合は、CICS Transaction Server for z/OS, バージョン 5 リリース 5 のプログラミング・インターフェース

として意図されていない (プログラミング・インターフェースと誤解される可能性のある) 情報が以下のマニュアルに含まれています。

- Data Areas
- Diagnosis Reference
- Problem Determination Guide
- CICSplex SM Problem Determination Guide

商標

IBM、IBM ロゴおよび [ibm.com](http://www.ibm.com/legal/copytrade.shtml)[®] は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標または登録商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。現時点での IBM の商標リストについては、<http://www.ibm.com/legal/copytrade.shtml> をご覧ください。

Adobe、Adobe ロゴ、PostScript、PostScript ロゴは、Adobe Systems Incorporated の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

インテル、Intel、Intel ロゴ、Intel Inside、Intel Inside ロゴ、Intel Centrino、Intel Centrino ロゴ、Celeron、Intel Xeon、Intel SpeedStep、Itanium、および Pentium は、Intel Corporation または子会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは Oracle やその関連会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における登録商標です。

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

UNIX は The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

製品資料に関するご使用条件

これらの資料は、以下のご使用条件に同意していただける場合に限りご使用いただけます。

適用範囲

IBM Web サイトの「ご利用条件」に加えて、以下のご使用条件が適用されます。

個人使用

これらの資料は、すべての著作権表示その他の所有権表示をしていただくことを条件に、非商業的な個人による使用目的に限り複製することができます。ただし、IBM の明示的な承諾をえずに、これらの資料またはその一部について、二次的著作物を作成したり、配布 (頒布、送信を含む) または表示 (上映を含む) することはできません。

商用使用

これらの資料は、すべての著作権表示その他の所有権表示をしていただくことを条件に、お客様の企業内に限り、複製、配布、および表示することがで

きます。ただし、IBM の明示的な承諾をえずにこれらの資料の二次的著作物を作成したり、お客様の企業外で資料またはその一部を複製、配布、または表示することはできません。

権利 ここで明示的に許可されているもの以外に、資料や資料内に含まれる情報、データ、ソフトウェア、またはその他の知的所有権に対するいかなる許可、ライセンス、または権利を明示的にも黙示的にも付与するものではありません。

資料の使用が IBM の利益を損なうと判断された場合や、上記の条件が適切に守られていないと判断された場合、IBM はいつでも自らの判断により、ここで与えた許可を撤回できるものとさせていただきます。

お客様がこの情報をダウンロード、輸出、または再輸出する際には、米国のすべての輸出入関連法規を含む、すべての関連法規を遵守するものとします。

IBM これらの資料の内容についていかなる保証もしません。これらの資料は、特定物として現存するままの状態提供され、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任なしで提供されます。

IBM オンラインでのプライバシー・ステートメント

サービス・ソリューションとしてのソフトウェアも含めた IBM ソフトウェア製品（「ソフトウェア・オファリング」）では、製品の使用に関する情報の収集、エンド・ユーザーの使用感の向上、エンド・ユーザーとの対話またはその他の目的のために、Cookie はじめさまざまなテクノロジーを使用することがあります。多くの場合、ソフトウェア・オファリングにより個人情報が収集されることはありません。IBM の「ソフトウェア・オファリング」の一部には、個人情報を収集できる機能を持つものがあります。ご使用の「ソフトウェア・オファリング」が、これらの Cookie およびそれに類するテクノロジーを通じてお客様による個人情報の収集を可能にする場合、以下の具体的事項をご確認ください。

CICSplex SM Web ユーザー・インターフェース（メイン・インターフェース）の場合： このソフトウェア・オファリングは、展開される構成に応じて、セッション管理、認証、お客様の利便性の向上、または利用の追跡または機能上の目的のために、それぞれのお客様のユーザー名、およびその他の個人情報を、セッションごとの Cookie および持続的な Cookie を使用して収集する場合があります。これらの Cookie を無効にすることはできません。

CICSplex SM Web ユーザー・インターフェース（データ・インターフェース）の場合： このソフトウェア・オファリングは、展開される構成に応じて、セッション管理、認証、または利用の追跡または機能上の目的のために、それぞれのお客様のユーザー名またはその他の個人情報を、セッションごとの Cookie を使用して収集する場合があります。これらの Cookie を無効にすることはできません。

CICSplex SM Web ユーザー・インターフェース（「Hello World」ページ）の場合： このソフトウェア・オファリングは、展開される構成に応じて、個人情報を収集しないセッションごとの Cookie を使用する場合があります。これらの Cookie を無効にすることはできません。

CICS Explorer の場合:

このソフトウェア・オファリングは、展開される構成に応じて、セッション管理、お客様の利便性の向上、または利用の追跡または機能上の目的のために、それぞれのお客様のユーザー名、およびその他の個人情報、セッションごとの設定および持続的な設定を使用して収集する場合があります。これらの設定を無効にすることはできませんが、ユーザー・パスワードの暗号化形式でのディスクへの保管は、サインオン中にチェック・ボックスにチェック・マークを付けることによるユーザーの明示的な操作によってのみ有効化することができます。

この「ソフトウェア・オファリング」が Cookie およびさまざまなテクノロジーを使用してエンド・ユーザーから個人を特定できる情報を収集する機能を提供する場合、お客様は、このような情報を収集するにあたって適用される法律、ガイドライン等を遵守する必要があります。これには、エンドユーザーへの通知や同意の要求も含まれますがそれらには限られません。

このような目的での Cookie を含む様々なテクノロジーの使用の詳細については、『IBM オンラインでのプライバシー・ステートメント』(<http://www.ibm.com/privacy/details/jp/ja/>) の『クッキー、ウェブ・ビーコン、その他のテクノロジー』および『IBM Software Products and Software-as-a-Service Privacy Statement』(<http://www.ibm.com/software/info/product-privacy>) を参照してください。

索引

日本語, 数字, 英字, 特殊文字の順に配列されています。なお, 濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

[ア行]

アクション 2
アクション・コマンド 2
 リソース定義ビューの 77
アクション・ボタン 2
アクティブ・ワークロード 213
アクティブ・ワークロード定義 213
アクティブ・ワークロード定義の更新、タスク例 255
アクティブ・ワークロード内のターゲット領域 213
アクティブ・ワークロード内のターゲット領域の静止、タスク例 248
アクティブ・ワークロード内のルーティング領域 (Routing regions in an active workload) 213
アクティブ・ワークロードの動的トランザクション 212
アクティブ・ワークロードのトランザクション・グループ 212
アクティブ・ワークロードのトランザクション・グループの親和性 212
アクティブ・ワークロードへのルーティング領域の追加、タスク例 247
アドレス・スペース (CMAS)
 再始動 44
アフィニティ存続時間 187
アプリケーション・リソース
 制御 94
 定義の例 124
異常終了補正 200
 ワークロード管理に直接アクセスする場合 194
一時記憶域定義ビュー 383
一時記憶域モデル定義ビュー 284, 383
一時データ・キュー
 タイプ 110
一時データ・キュー定義ビュー 284, 375
インストール・エラー、リソース 113
インバウンド・クライアント DPL 要求の動的ルーティング、タスク例 265
上書き値 111
エクスポート 154

エラー
 不整合スコープ 92
 不整合のリソース・セット 91, 92
 リソース・インストール 113
エラー処理、EYU9XDBT ユーティリティ
 ー 16
エンキュー・モデル定義ビュー 340
エンタープライズ Bean
 ワークロード分離 204
 ワークロード・ルーティング 197
オブジェクト
 管理 72
 リソース定義 72
ATOMDEF 284
BUNDDEF 284
CONNDEF 284
DB2CDEF 284
DB2EDEF 284
DB2TDEF 284
DOCDEF 284
DTRINGRP 212
EJCODEF 284
EJDJDEF 284
ENQMDEF 284
FENODDEF 284
FEPODEF 284
FEPRODEF 284
FETRGDEF 284
FILEDEF 284
FSEGDEF 284
IPCONDEF 284
JRNLDDEF 284
JRNMDDEF 284
LIBDEF 284
LNKSWSCG 212
LNKSWSCS 212
LSRDEF 284
MAPDEF 284
MQCONDEF 284
PARTDEF 284
PIPELINE 284
PROCDEF 284
PROFDEF 284
PROGDEF 284
PRTNDEF 284
RASGNDEF 283
RASINDSC 283
RASPROC 283
RDSCPROC 283
RESDESC 283
RESGROUP 283, 288

オブジェクト (続き)
RESINDSC 283
RESINGRP 283
RQMDEF 284
SESSDEF 284
SYSLINK 283
SYSRES 283
TCPDEF 284
TDQDEF 284
TERMDEF 284
TRANDEF 284
TRANGRP 212
TRNCLDEF 284
TSMDEF 284
TYPTMDEF 284
WLMATAFF 212
WLMATGRP 212
WLMATRAN 212
WLMAWAOR 213
WLMAWDEF 213
WLMAWORK 213
WLMAWTOR 213
WLMDEF 213
WLMGROUP 213
WLMINGRP 213
WLMINSPC 213
WLMSPEC 213
オブジェクトのタイプ 72
オブジェクト名 164
オブジェクト・モデル、推奨される使用法
 ビジネス・アプリケーション・サービス 293
 ワークロード管理 211
親和性、トランザクション間 204
オンライン・リソース定義 (RDO)
 マイグレーション
 DFHCSDUP EXTRACT ルーチン 114

[カ行]

概要 69
カスタマイズ可能なビューおよびメニュー・ヘルプ
 ソース 160
カスタマイズされたビューおよびメニュー
 アクセス 160
可用性、CICS リリース 88
監査証跡 160
管理 1
管理オブジェクト 72

管理下アプリケーション・システム
(MAS)
更新 59
管理ビュー
記述内のリソース・グループ 139
記述内のリソース・グループ・ビュー
139
リソース記述 136
リソース記述でのリソースの選択 135
リソース記述内のリソース割り当て
134
リソース割り当て処理 135
リソース割り当て定義 133
リソース・グループ定義 138
リソース・グループ内のリソース定義
139
CICS システムに割り当てたリソース
144
管理メニュー
構成 40
関連スコープ
指定
リソースの 109
リソース・グループの 98
関連スコープ値 109
関連の更新
リソース記述とグループ 139
リソース記述と割り当て 134
キー・セグメント定義 339
疑似会話型トランザクションの受け入れ、
タスク例 253
記述内のリソース・グループ・ビュー 283
記述へのグループの追加
概要 92
直接 138
記述への割り当ての追加 134
キュー・アルゴリズム 200
強制インストール値 112
クエリー変数 161
区画セット定義ビュー 284, 361, 363
グリニッジ標準時
時間帯コード 54
時間帯の標準 54
夏時間調整 54
グループと記述との関連付け
概要 92
直接 138
グループへの定義の追加
一度に 1 つ 85
概要 85
定義を作成する時 80
グローバル・エンキュー・ビュー 284
グローバル・エンキュー・モデル定義ビュ
ー 341
検証、CICS リソース
個別リソース 90

検証、CICS リソース (続き)
リソース・セット 91, 92
CICS システム割り当て 92
ゴール・アルゴリズム 201
更新 1
構成とトポロジ
時間枠定義の作成 49
CMAS での NetView への総称アラ
ートの送信の有効化 59
構成ビュー
アクセス 40
コピーブック 169
コンテキスト 1

[サ行]

最適化されたワークロードの確立方法、タ
スク例 233
作成、EYU9WRAM のユーザー置換 189
参照リソース割り当て名 111
サンプル・プログラム 169
時間帯 51
時間帯属性
指定箇所 53
使用 53
定義 54
時間枠定義 49
作成 49, 50
資源定義オブジェクト 72
システム・グループ定義 49
システム・リンク
インストール 142
除去 144
Web ユーザー・インターフェースを
使用したインストール 142
システム・リンクの定義 140
システム・リンク・ビュー 283
指定変更式
指定
リソース・グループでの 103
説明 93
指定変更ストリング 113
自動インストール
リソースの 291
ワークロード定義の 210
ジャーナル定義ビュー 284
ジャーナル・モデル定義ビュー 284, 347
出力ログ 160
使用値 109
状態検査値 112
除去
仕様からのルーティング領域のスコ
ープ 169
トランザクション親和性 186
CICSplex 関連付けの CMAS 47
スコープ 1

スコープ (続き)
関連付け
ターゲット領域として、トランザク
ション・グループに 226
ルーティング領域として、ワークロ
ード仕様への 220
スコープの関連付け
ターゲット領域として、トランザクシ
ョン・グループに 226
ターゲット領域として、ワークロード
仕様への 220
ストレージの異常終了
異常終了コード 878 16
EYU9XDBT 定義ユーティリティの
使用 16
整合状態検査 112
セキュリティ 74
BAS 291
DLA 314
セキュリティの考慮事項 74
「セッション定義」ビュー 284, 372
セット不整合 288
選択リスト
構成 40

[タ行]

ターゲット領域
リリース要件 169
割り当て
トランザクション・グループ 226
ターゲット領域スコープからの領域の除
去、タスク例 246
ターゲット領域スコープへの領域の追加、
タスク例 245
ターゲット領域の選択
セットからの 182
通知 (ルート) 182
特定の 185
トランザクション異常終了 182
トランザクション開始 182
トランザクション終了 182
ルーティング試行完了 182
ルート選択 182
ルート選択エラー 182
ターゲット領域を選択するためのリアルタ
イム分析の使用、タスクの例 258
ターゲット・スコープ
指定
リソースの 109
リソース・グループの 98
ターゲット・スコープ値 109
タスク、例
アクティブ・ワークロード定義の更新
255

タスク、例 (続き)

- アクティブ・ワークロード内のターゲット領域の静止 248
- アクティブ・ワークロードへのルーティング領域の追加 247
- アプリケーション・リソースの定義 124
- インバウンド・クライアント DPL 要求の動的ルーティング 265
- 疑似会話型トランザクションの受け入れ 253
- 最適化されたワークロードの確立方法 233
- 識別する、トランザクションに関連するタスクを 62
- 使用可能な、CICS システムのファイル 64
- 状況の確認、端末の 63
- 状況の確認、通信リンクの 63
- 説明 61
- 相互に関連づける、ローカル・ファイル名とリモート・ファイル名を 64
- ターゲット領域スコープからの領域の除去 246
- ターゲット領域スコープへの領域の追加 245
- ターゲット領域を選択するためのリアルタイム分析の使用 258
- タスクの数、トランザクションに関連付けられている 61
- 単一の CICS システムでのトランザクションの使用不可化 66
- データ・セット、プログラムの発生元の 65
- 特定のターゲット領域への特定のトランザクションのルーティング 249
- トランザクションをグローバルに使用不可にする 67
- 非アクティブ化、ワークロード定義の 68
- ピアツーピア DPL 要求の動的ルーティングの使用 267
- ユーザー ID へのタスクの関連付け 63
- ユーザーから特定のターゲット領域へのトランザクションのルーティング 251
- リソースの動的インストール 131
- リソース・モニター
 - CICS システム内のモニター対象リソース 67
- ワークロードからアクティブなトランザクションの破棄 68
- ワークロードからのアクティブ・トランザクションの破棄 257
- ワークロード仕様の更新 257

タスク、例 (続き)

- ワークロード定義の非アクティブ化 255
- ワークロードの管理 230
- CICS BTS アクティビティの分離 270
- CICS BTS アクティビティのルーティング 268
- CICSplex の接続の確立 121
- EXEC CICS START TERMID を使用した動的ルーティング 262
- Link3270 ブリッジ・ワークロードの管理 272

タスクの例 230

- アクティブ・ワークロード定義の更新 255
- アクティブ・ワークロード内のターゲット領域の静止 248
- アクティブ・ワークロードへのルーティング領域の追加 247
- アプリケーション・リソースの定義 124
- インバウンド・クライアント DPL 要求の動的ルーティング 265
- 疑似会話型トランザクションの受け入れ 253
- 最適化されたワークロードの確立方法 233
- 説明 61
- ターゲット領域スコープからの領域の除去 246
- ターゲット領域スコープへの領域の追加 245
- ターゲット領域を選択するためのリアルタイム分析の使用 258
- 単一の CICS システムでのトランザクションの使用不可化 66
- 端末の状況の確認 63
- 通信リンクの状況の確認 63
- 特定のターゲット領域への特定のトランザクションのルーティング 249
- トランザクションに関連するタスクを識別する 62
- トランザクションに関連付けられているタスクの数 61
- トランザクションをグローバルに使用不可にする 67
- ピアツーピア DPL 要求の動的ルーティング 267
- プログラムの発生元のデータ・セット 65
- ユーザー ID へのタスクの関連付け 63
- ユーザーから特定のターゲット領域へのトランザクションのルーティング 251

タスクの例 (続き)

- リソースの動的インストール 131
- リソース・モニター
 - CICS システム内のモニター対象リソース 67
- ローカル・ファイル名とリモート・ファイル名を相互に関連づける 64
- ワークロードからのアクティブなトランザクションの破棄 68
- ワークロードからのアクティブ・トランザクションの破棄 257
- ワークロード仕様の更新 257
- ワークロード定義の非アクティブ化 68, 255
- ワークロードの管理 230
- CICS BTS アクティビティの分離 270
- CICS BTS アクティビティのルーティング 268
- CICS システムのファイル、使用可能な 64
- CICSplex の接続の確立 121
- EXEC CICS START TERMID を使用した動的ルーティング 262
- Link3270 ブリッジ・ワークロードの管理 272
- 端末定義ビュー 284, 377
- 通信
 - CMAS-CMAS
 - リンクの作成 44
- 通知値 111
- 突き合わせ基準、トランザクション 226
- データ・リポジトリ
 - 管理 3
 - 更新 17
 - それぞれの CMAS に 41
- 定義、マッピング
 - アクション・コマンド (action command) 3
 - バッチ処理されるリポジトリ更新機能 22
- 定義とグループとの関連付け
 - 一度に 1 つ 85
- 概要 85
 - 定義を作成する時 80
- 定義ユーティリティ、EYU9XDBT 4
- 提供されるビュー言語
 - EYUEVX01 158
 - EYUKVX01 158
 - EYUSVX01 158
- 命名規則 159
- ディスカバリー・ライブラリー・ブック
 - ファイル名 308
- CICSplex ディスカバリー・ライブラリー・ブック 308

ディスカバリー・ライブラリー・ブック
(続き)
CICSREGION ディスカバリー・ライ
ブラリー・ブック 312
CTSPLEX ディスカバリー・ライブラ
リー・ブック 314
DLA パラメーター 302
動的トランザクション・ルーティング 205
動的ルーティング 207
追加サポートの要求
異常終了の補正に関する考慮事項
194
概要 190
サンプルの呼び出しシーケンス 194
処理に関する考慮事項 192
トランザクション親和性に関する考
慮事項 193
ルート・エラーに関する考慮事項
193
CICSplex SM ワークロード管理の
呼び出し 191
EYURWTRA 通信域 191
CICSplex SM 処理のカスタマイズ
ユーザー置換プログラムのインスト
ール 189
CICSplex SM 処理のカスタマイズ
サンプル・プログラム 169
ターゲット領域の選択 182
トランザクション・ルーティングの
アクション 182, 185
非動的トランザクション 180
リリース要件 169
CICSplex SM 処理の概要 166
CICSplex SM データ域 189
DTR プログラムの変更 179
特定のターゲット領域への特定のトランザ
クションのルーティング、タスク例 249
トポロジー
MAS 定義 58
トポロジー定義 47
トポロジーと構成
時間枠定義の作成 49
CMAS での NetView への総称アラ
ートの送信の有効化 59
トポロジー・ビュー
定義との関係 48
トランザクション
突き合わせ基準 226
トランザクション異常終了 185
トランザクション親和性の作成 186
トランザクション開始 185
トランザクション間の類縁性
削除 186
作成 186
識別 207
定義 204

トランザクション終了 185
トランザクション定義 (TRANDEF) ビュ
ー 284
トランザクション定義ビュー 379
トランザクションの類縁性
削除 186
作成 186
トランザクション・クラス定義ビュー
284, 381
トランザクション・グループ
作成 222
ターゲット領域との関連付け 226
突き合わせ基準 226
トランザクション・グループ内のトランザ
クション・ビュー 212
トランザクション・グループ・ビュー 212
トレース・フラグ、CMAS および MAS
の設定 166

[ナ行]

夏時間
属性の定義 54
夏時間調整指標 51
入力条件定義
インストール 386
作成 385
入力条件定義ビュー 284, 385
入力条件のインストール 386
入力条件の作成 385

[ハ行]

パートナー定義ビュー 284, 363
配置済みエンタープライズ Java アーカイ
ブ定義ビュー 284
パイプライン定義ビュー 284, 365, 370
バッチ化リポジトリ更新機能 (batched
repository-update facility)
設定する、コマンドの処理オプション
24
バッチ処理されるリポジトリ更新機能
使用 17
入力の作成 18
入力の送信 17
BAS へのアクセス 70
EXTRACT ルーチン 293
OUTPUT コマンドの使用 25
RDO 定義のマイグレーションのため
の 114
バッチ・ユーティリティー
データ・リポジトリの更新のための
3
パラメーター、EYUJXBT1 10
パラメーター、EYUJXBT2 13

パラメーター、EYUJXBT3 14
パラメーター、EYUJXBT4 15
パラメーター、EYUJXBTP 10
ピアツーピア DPL 要求の動的ルーティン
グ、タスク例 267
ビジネス・アプリケーション・サービス
(BAS)
機能 278
説明 278
リソース定義の作成 287
リソース・インストール 278
リソース・バージョン 279
EXTRACT ルーチン 293
百分位数ゴール 201, 202
ビュー
その要約
定義を作成するための 216
定義のインポートおよびエクスポート
149
ビューの要約
定義を作成するための 216
ファイル定義ビュー 284, 337
ファイル・キー・セグメント定義ビュー
339
ファイル・セグメント定義ビュー 284,
339
フィルター式
指定
リソース・グループでの 101
説明 93
複数バージョンのリソース定義 87
不整合スコープ・エラー 92
不整合のリソース・セット 91, 92
不整合のリソース・セット・エラー 91,
92
プリインストール検査 111
プログラム定義ビュー 284, 370
プロセス・タイプ定義ビュー 284, 367
プロファイル定義ビュー 284, 368
分散プログラム・リンク (DPL) 190, 191
リリース要件 169
文書テンプレート定義ビュー 284, 327
ポート 147, 161
保守ポイント CMAS
作業 41
変更 41
ホスト名 147, 161

[マ行]

マッピング、CICSplex SM 定義
アクション・コマンド (action
command) 3
バッチ処理されるリポジトリ更新機
能 22

マップ
定義のインポートおよびエクスポート
149
命名規則 159
マップ機能 3
マップ・セット定義ビュー 284, 355
メニュー、管理
構成 40
モード値 110

[ヤ行]

ユーザーから特定のターゲット領域へのト
ランザクションのルーティング、タスク
例 251
ユーザー置換プログラムのインストール
189
ユーザー・セッションの強制ページ 149
ユーザー・セッションのページ 149
「要求モデル定義」ビュー 284
要求領域
リリース要件 169

[ラ行]

リスト構造、定義 234
リソース
自動インストール 291
動的インストール 291
リソース、インストール
エラーの処理 113
個別 108
サポート 96
自動的 105
動的 107, 113
場所の決定 104, 105
リソース記述から 103
リソース・グループから 97
例 131
CICS の初期化時 105
リソース記述
インストール 103
グループ・リソースの使用 86
結果の表示 135
作成 137
説明 92
置換 137
表示 136
Web ユーザー・インターフェースを
使用したインストール 103
リソース記述処理ビュー 283
「リソース記述内のリソース割り当て
(Resource assignments in resource
description)」ビュー 283
リソース記述の作成 137

リソース記述ビュー 136, 283
リソース検査 288
リソース検査、CICS
個別リソース 90
リソース・セット 91, 92
CICS システム割り当て 92
リソース検証、CICS
個別リソース 90
リソース・セット 91, 92
CICS システム割り当て 92
リソース定義
インストール 108
作成 81
説明 75
バージョン 87
バッチ・リポジトリ更新機能の使用
70
リソース・グループへの追加
一度に 1 つ 85
定義を作成する時 80
CICSplex SM API の使用 70
Web ユーザー・インターフェースの
使用 70, 77, 79, 80
リソース定義の作成 287
説明 75, 81
バージョン 87
リソース定義のマッピング 77
リソース定義ビュー
一時記憶域定義 383
一時記憶域モデル定義 383
一時データ・キュー定義 375
エンキュー・モデル定義 340
共通アクション 77
区画セット定義 361, 363
グローバル・エンキュー・モデル定義
341
ジャーナル・モデル定義 347
セッション定義 372
端末定義 377
トランザクション定義 379
トランザクション・クラス定義 381
入力条件定義 385
パートナー定義 363
パイプライン定義 365
ファイル定義 337
ファイル・キー・セグメント定義 339
ファイル・セグメント定義 339
プログラム定義 370
プロセス・タイプ定義 367
プロファイル定義 368
文書テンプレート定義 327
文書テンプレート・リソース定義 327
マップ・セット定義 355
Atomservice 定義 317
CICS-配置 JAR ファイル定義 323
DB2 エントリー定義 323

リソース定義ビュー (続き)
DB2 接続定義 321
DB2 トランザクション定義 325
DB2 トランザクション・リソース定義
325
FEPI ターゲット・リスト定義 335
FEPI ノード・リスト定義 329
FEPI プール定義 331
FEPI プロパティ・セット定義 333
FILE 定義 337
IPIC 接続定義ビュー 343
ISC/MRO 接続定義 345
LIBRARY 定義 351
LSR プール定義 353
TCP/IP サービス定義 373
URI マッピング定義 387
URIMAP 定義 387
Web サービス定義 389
WEBSERVICE 定義 389
WebSphere MQ 接続定義 357
リソースのインストール
エラーの処理 113
個別 108
サポート 96
自動 291
自動的 105
動的 107, 113, 291
場所の決定 104, 105
リソース記述から 103
リソース・グループから 97
例 131
CICS の初期化時 105
IPIC 接続 344
リソースのインストールの強制 112
リソースのグループ化
概要 84, 93
リソース記述内の 136
リソース・グループでの 138
リソースの自動インストール
概要 105
リソースの妥当性検査 288
リソースの定義
一時記憶域モデル 383
一時データ・キュー 376
区分セット 362
ジャーナル・モデル 348
セッション 373
接続 346
端末 378
トランザクション 380
トランザクション・クラス 382
パートナー 364
パイプライン 365
バッチ処理されるリポジトリ更新機
能の使用 70
ファイル 338

リソースの定義 (続き)

- ファイル・キー・セグメント 340
- プログラム 371
- プロセス・タイプ 367
- プロファイル 369
- 文書テンプレート 328
- マップ・セット 356
- 例 124
- CICSplex SM API の使用 70
- DB2 エントリー 323
- DB2 トランザクション 325
- ENQ モデル 341
- FEPI ターゲット 335
- FEPI ノード 329
- FEPI プール 331
- FEPI プロパティ・セット 333
- IPIC 接続 343
- LIBRARY 352
- LSR プール 354
- TCP/IP サービス 374
- URIMAPs 387
- Web サービス 389
- Web ユーザー・インターフェースの使用 70, 77, 79, 80

リソースの動的インストール 291

- 概要 107, 113
- 個別 108
- リソース記述から 103
- リソース・グループから 97
- 例 131

リソースのバージョン 87

リソースのモニター

- タスクの例
 - CICS システム内のモニター対象リソース 67

リソース割り当て

- グループ・リソースの使用 86
- 結果の表示 135
- 作成 133
- 使用するまでのマイグレーション 293
- 説明 93
- 表示 133
- リソース記述の関連の更新 134
- リソース記述への追加 134

リソース割り当て処理ビュー 135, 283

リソース割り当ての作成 133

リソース割り当てビュー 283

リソース・グループ

- インストール 97
- 作成 138
- 使用 84
- 表示 138
- リソース記述の関連の更新 139
- リソース記述への追加 138
- リソース定義の追加
 - 一度に 1 つ 85

リソース・グループ (続き)

リソース定義の追加 (続き)

- 定義を作成する時 80

「リソース・グループ (Resource group)」 (RESGROUP) ビュー 288

リソース・グループ定義ビュー 138

リソース・グループ内のリソース定義ビュー 283

リソース・グループの作成 138

リソース・グループ・ビュー 283

リソース・テーブル

- BATCHREP でサポートされる 30

リソース・バージョン 87, 279

リソース・モニター

- タスクの例

- CICS システム内のモニター対象リソース 67

リモート・リソース、識別 95

領域状況サーバー

- リスト構造、定義 234

領域の接続 280

リリース要件 169

リンク

- 外部 160

リンク、通信

- 作成

- CMAS-CMAS 44

リンクに依存しないキュー・アルゴリズム 200

リンクに依存しないゴール・アルゴリズム 202

ルーティング、ワークロード 197

ルーティング試行完了 185

ルーティング領域

- ワークロード仕様への関連付け 220

ルーティング・アルゴリズム 208

ルート選択 185

ルート選択エラー 185

ルート・フィールド 227

連絡域

- EYURWCOM 189

- EYURWTRA 191

論理的スコープ

- 説明 94

[ワ行]

ワークロードからのアクティブ・トランザクションの破棄、タスク例 257

ワークロード管理 (WLM)

- トランザクション間の類縁性 204

- ワークロード分離 204, 209

- ワークロード・バランシング

- 異常終了補正 200

- キュー・アルゴリズム 200

- ゴール・アルゴリズム 201

ワークロード管理 (WLM) (続き)

- ワークロード・ルーティング 197, 207

- 異常終了補正 200

- リンクに依存しないキュー・アルゴリズム 200

- リンクに依存しないゴール・アルゴリズム 202

「ワークロード管理」ビュー

- 定義との関係 213

ワークロード機能 205

ワークロード仕様 208

ワークロード仕様内のワークロード・グループ・ビュー 213

ワークロード仕様の更新、タスク例 257

ワークロード仕様ビュー 213

ワークロード定義

- 作成 224

ワークロード定義の非アクティブ化、タスクの例 68

ワークロード定義の非アクティブ化、タスク例 255

ワークロード定義ビュー 213

ワークロードの管理、タスク例 230

ワークロード・グループ内のワークロード定義ビュー 213

ワークロード・グループ・ビュー 213

ワークロード・ビュー 227

ワークロード・ルーティング

- 実装 208

割り当てと記述との関連付け 134

A

ADD TOGROUP コマンド 5

AEXY 異常終了 149

APPC 187

ATOMDEF オブジェクト 284, 317

ATOMSERVICE 定義ビュー 284

Atomservice 定義ビュー 317

- ATOMDEF 317

A_attrname 164

B

BATCHREP 3, 17

- サポートされるリソース・テーブル 30

BUNDDF オブジェクト 284

BUNDLE 定義ビュー 284

C

CICS BTS アクティビティの分離、タスク例 270

CICS BTS アクティビティの平衡化、タスク例 268

CICS システム
CICS システム・グループの一部 49
CICS システム、接続
説明 89
例 121
CICS システムの接続 140
説明 89
例 121
CICS システムへのリソースの割り当て
概要 93
リソース割り当て定義ビューの使用
133
CICS システム・グループ
表示
CICSplex に認識される 49
CICS システムおよび CICSplex への
関連性 48
CICS システム・ビューに割り当てたリソ
ース 144
CICS システム・リソース・ビュー 283
CICS システム・リンク
インストール 142
除去 144
CICS システム・リンクのインストール
142
CICS システム・リンクの除去 144
CICS ビジネス・トランザクション・サー
ビス (BTS)
リリース要件 169
CICS リリース可用性 88
CICSplex
関連付けられている CMAS
除去 47
表示
CICS システム・グループ、認識さ
れる 49
CICS システムおよび CICS システ
ム・グループへの関連性 48
CICSplex SM
使用 4
EYU9XDBT 定義ユーティリティ 4
CICSplex 定義からの CMAS の削除 47
CICSplex 定義からの CMAS の割り当て
解除 47
CICSplex 定義の更新
リンクの説明
CMAS から CMAS への 44
CICSplex の定義 (CICSplex definitions)
管理 47
ビューごとの要約
CPLXCMAS 47
CMAS の削除 47
CICSplex の表示
CICS システム・グループ
CICSplex に認識される 49

CICS-配置 JAR ファイル定義ビュー 284,
323
CMAS
夏時間調整 52
DAYLIGHT 52
NetView へのアラートの送信 59
CMAS (アドレス・スペース)
ウォーム・スタート 44
コールド・スタート 44
再始動 44
CMAS および MAS トレース・フラグの
設定 166
CMAS から CMAS へのリンク
更新 44
除去 44
CMAS コンテキスト 1
CMAS 詳細ビュー 60
CMAS トレース・フラグ設定 166
CMAS の再始動 44
CMAS リンク
作成
別の CMAS 44
CMAS リンクの作成
別の CMAS 44
CONNDEF オブジェクト 284, 345
CONTEXT コマンド 5
COVC 145, 149, 150, 154
インポート 150
エクスポート 154
開始 145
状況詳細 146
停止 145
トレース・フラグ 157
ユーザー・セッション 148
ユーザー・セッションの強制ページ
149
ユーザー・セッションのページ 149
COVE 149, 150, 154
COVI 149, 150, 154
CPLEXDEF 47
CSD ファイル要件
リンクを作成する場合
CMAS-CMAS 44
CSD レコード、抽出
互換性に関する考慮事項 121
サンプル JCL 116
出力処理 119
パスワードの考慮事項 121
レコードの識別 115
EXTRACT コマンドの指定 116
CSD レコードの抽出
互換性に関する考慮事項 121
サンプル JCL 116
出力処理 119
パスワードの考慮事項 121
レコードの識別 115

CSD レコードの抽出 (続き)
EXTRACT コマンドの指定 116

D

DB2 エントリー定義ビュー 284
DB2 接続定義ビュー 284, 321
DB2CDEF 321
DB2 トランザクション定義ビュー 284,
325
DB2CDEF オブジェクト 284, 321
DB2EDEF オブジェクト 284, 323
DB2TDEF オブジェクト 284, 325
DEFINE コマンド 5
DELETE コマンド 5
DFHCSDUP EXTRACT ルーチン
(EYU9BCSD)
サンプル JCL 116
出力の編集 120
ジョブの実行依頼 116
提供される出力 119
入力の実行 114
DFHRSTAT 234
Discovery Library Adapter
実行 296
セキュリティ 314
Discovery Library Adapter for CICS
概要 294
DLA
実行 296
セキュリティ 314
IdML ファイル名 308
DLA for CICS
概要 294
DLA のパッケージ 298
DLA パラメーター 302
DLFS ファイル名 308
DOCDEF オブジェクト 284, 327
DTRINGRP オブジェクト 212
DTRPROG API 179

E

EJCODEF オブジェクト 284
EJDJDEF オブジェクト 284
ENQMDEF オブジェクト 340, 341
ENQMODE オブジェクト 284
EXEC CICS START TERMLID を使用し
た動的ルーティング、タスク例 262
EXPORT コマンド 5
EXTRACT ルーチン 293
EYU9BCSD
サンプル JCL 116
出力の編集 120
ジョブの実行依頼 116

EYU9BCSD (続き)
提供される出力 119
入力の作成 114
EYU9WRAM ルーティング・アクション・モジュール 189
コピーブック 169
作成、ユーザー置換 189
EYU9XDBT 3
EYU9XDBT CICSplex SM 定義ユーティリティー
概要 4
EYU9XDBT 定義ユーティリティー
エラー 16
コマンド
ADD TOGROUP 5
CONTEXT 5
DEFINE 5
DELETE 5
EXPORT 5
IMPORT 5
OPTION 5
PRINT 5
REMOVE FROMGROUP 5
データ・セット 10
EYUJXBT1 パラメーター 10
EYUJXBT2 パラメーター 13
EYUJXBT3 パラメーター 14
EYUJXBT4 パラメーター 15
EYUJXBTP パラメーター 10
EYU9XLOP 動的ルーティング・プログラム 190
EYUEVX01 158
EYUJXDD0 サンプル・モジュール 298
EYUJXDD1 サンプル・モジュール 301
EYUJXDDP サンプル・モジュール 302
EYUKVX01 158
EYULOG 160
EYURWCOD コピーブック 169, 189
EYURWCOM 通信域 189
EYURWCOM 連絡域 169
EYURWSVD コピーブック 169, 189
EYURWSVE コピーブック 169, 189
EYURWTRA 通信域 191
EYUSTART 名 159
EYUSTARTCPLEXDEF ビュー 47
EYUSVX01 158
EYUWREP (Web ユーザー・インターフェース・サーバー・リポジトリ) 158

F

FENODDEF オブジェクト 284, 329
FEPI ターゲットの定義 335
FEPI ターゲット・リスト定義ビュー 284, 335
FEPI ノード・リスト定義ビュー 284, 329

FEPI プール定義ビュー 284, 331
FEPI プロパティ定義ビュー 284
FEPI プロパティ・セット定義ビュー 333
FEPOODEF オブジェクト 284, 331
FEPRODEF オブジェクト 284, 333
FETRGDEF オブジェクト 284, 335
FILEDEF オブジェクト 284, 337
FILTERC 164
FSEGDEF オブジェクト 284, 339

G

GMT オフセット 51

H

HTTP 160, 163
http 161
HTTPS 160
https 161

I

IMPORT コマンド 5
INACTIVETIMEOUT 148
IPCONDEF オブジェクト 284, 343
IPIC 接続 280
IPIC 接続定義ビュー 284, 343
ISC/MRO 接続定義ビュー 284, 345

J

JRNLDEF オブジェクト 284
JRNMDEF オブジェクト 284, 347

L

LIBDEF オブジェクト 351
「LIBRARY 定義」ビュー 351
LIBRARY 定義ビュー 284
Link3270 ブリッジ・ワークロードの管理、タスク例 272
LNGOAL ルーティング・アルゴリズム 202
LNKSWSCG オブジェクト 212
LNKSWSCS オブジェクト 212
LNQUEUE ルーティング・アルゴリズム 200
「LSR プール定義」ビュー 284, 353
LSRDEF オブジェクト 284, 353
LU 6.2 通信リンク
CMAS 間
作成 44

LU6.2 接続定義 345
LUTYPE6.2 187

M

MAPDEF オブジェクト 284, 355
MAS
夏時間調整 52
DAYLIGHTSV 52
MAS (管理下アプリケーション・システム)
更新 59
MAS 定義 58
MAS トレース・フラグ設定 166
MAXUSERS 148
MQCONDEF オブジェクト 284, 357
MRO 通信リンク
CMAS 間
作成 44
MRO/ISC 接続 280

N

NetView
CMAS での総称アラートの送信の有効化 59

O

OPTION コマンド 5, 24
OUTPUT コマンド 25
O_attrname 164
演算子の値 164

P

PARTDEF オブジェクト 284, 363
PERIODEF 49
作成 50
PIPEDEF オブジェクト 365
PIPELINE オブジェクト 284
PRINT コマンド 5
PROCDEF オブジェクト 284, 367
PROFDEF オブジェクト 284, 368
PROGDEF オブジェクト 284, 370
PRTNDEF オブジェクト 284, 361
P_parmname 164

R

RASGNDEF オブジェクト 133, 283
RASINDSC オブジェクト 134, 283
RASPROC オブジェクト 135, 283

RDO (オンライン・リソース定義)
 マイグレーション
 DFHCSDUP EXTRACT ルーチン 114
 RDO からのマイグレーション
 DFHCSDUP EXTRACT ルーチン 114
 RDSCPROC オブジェクト 135, 283
 REMOVE FROMGROUP コマンド 5
 RESDESC オブジェクト 136, 283
 RESGROUP オブジェクト 138, 283
 RESINDSC 283
 RESINDSC オブジェクト 139
 RESINGRP オブジェクト 139, 283
 REXX ランタイム・ライブラリー
 事前インストール 16
 代替 16
 RQMDEF オブジェクト 284

S

SESSDEF オブジェクト 284, 372
 SM_BALANCE 180, 182
 SM_CREAFF 186
 SM_DELAFF 186
 SM_ROUTE 180, 185
 SM_SCOPE 180, 182
 SNA 総称アラート 59
 START コマンド、動的ルーティング 181, 190, 191
 リリース要件 169
 SYSLINK オブジェクト 283
 SYSRES オブジェクト 144, 283

T

TCPDEF オブジェクト 373
 TCP/IP オブジェクト 284
 TCP/IP サービス定義ビュー 284
 TCP/IPHOSTNAME 147
 TCP/IPPORT 147
 TCP/IPSERVICE 147
 TCP/IPSSL 147
 TCP/IP サービス定義 373
 TCP/IP サービス定義ビュー 373
 TDQDEF オブジェクト 375
 TERMDEF オブジェクト 284, 377
 TRANDEF オブジェクト 284, 379
 TRANGRP オブジェクト 212
 TRNCLDEF オブジェクト 284, 381
 TSMDEF オブジェクト 284, 383
 TYPTMDEF オブジェクト 284, 385

U

URI マッピング定義ビュー 387
 URIMAP オブジェクト 387
 URIMAP 定義
 インストール 388
 URIMAP のインストール 388
 URIMPDEF オブジェクト 387
 URL 160
 接頭部 161
 選択基準 163
 パス 161
 URL の接頭部 161
 URL の選択基準の部分
 属性フィルター、A_attrname 164
 属性フィルター、O_attrname 164
 パラメーター・フィルター、
 P_parmname 164
 CMASCONTEXT 163
 CONTEXT 163
 SCOPE 163
 URL の選択基準部分 161
 FILTERC 164
 URL のパス 161

W

Web サービス定義ビュー 389
 Web サービスのインストール 390
 Web ユーザー・インターフェース
 アクション・コマンド 2
 アクション・ボタン 2
 アクセス 160
 外部サーバーへのアクセス 160
 システム・リンクのインストール 142
 トポロジー定義の管理 47
 リソース記述のインストール 103
 リソース定義 77, 79, 80
 リソース定義ビュー 70
 ワークロード仕様
 スコープ 220
 ワークロード定義 224
 BAS 管理ビュー 75
 BAS タスク例 121
 CICS システム定義 49
 CSYSDEF 49
 Web ユーザー・インターフェース・サー
 バーの初期設定パラメーター
 INACTIVETIMEOUT 148
 MAXUSERS 148
 TCP/IPHOSTNAME 147
 TCP/IPPORT 147
 TCP/IPSSL 147
 Web ユーザー・インターフェース・サー
 バー・リポジトリ (EYUWREP) 158
 WEBSERVICE 定義ビュー 389

WebSphere MQ 接続定義ビュー 284, 357
 MQCONDEF 357
 WEBSVDEF オブジェクト 389
 WEBサービス定義
 インストール 390
 WLM 仕様と CICS システムとの間のリ
 ンク (WLM specifications to CICS
 system links) 212
 WLM 仕様とシステム・グループとの間
 のリンク 212
 WLMATAFF オブジェクト 212
 WLMATGRP オブジェクト 212
 WLMATRAN オブジェクト 212
 WLMAWAOR オブジェクト 213
 WLMWDEF オブジェクト 213
 WLMAWORK オブジェクト 213
 WLMAWTOR オブジェクト 213
 WLMDEF オブジェクト 213
 WLMGROUP オブジェクト 213
 WLMINSPC オブジェクト 213
 WLMSPEC オブジェクト 213
 WUI
 管理 144
 定義のインポートおよびエクスポート
 149
 WUI サーバー
 開始および停止 145
 WUI サーバー初期設定パラメーター 164
 WUI サーバー・リポジトリ 158
 WUI データ・リポジトリ
 定義のインポート 150
 WUI 定義のインポート 149
 COVC の使用 150
 WUI 定義のエクスポート 149
 WUI の管理 144

